ユリヤナ・エバー

トの日記

1984年5月19日、メジュゴリエにて、スラヴコ・バルバリッチ神父がユリヤナ・エベルトに洗礼を授けた。

(J) シュヴァルツヴァルトの自宅前で撮影されたユリヤナ——2014年。

説明

教皇パウロ6世によって採択された信仰教理省令（1966年10月14日）に基づき、教会法第1399条および第2318条は廃止された。
信徒は、一般的なキリスト教の道徳を遵守する限り、教会からの明示的な出版許可がなくても、宗教書を読み、広めることができる。

解説：

聖なる主であり神である方は、聖体の中においても生ける神です。ごく微小な粒子の中にも、聖なる神は臨在しておられます（ロダルベンの聖なる印に見られる通り：血の印の左下に、小さな赤い点が見えます）。

したがって、聖体拝領の際にはパテナを使用しなければなりません。

全能の聖なる三位一体の神、
†父、子、聖霊の御心により、私はユリヤナ・エバートが
の日記を執筆しました。

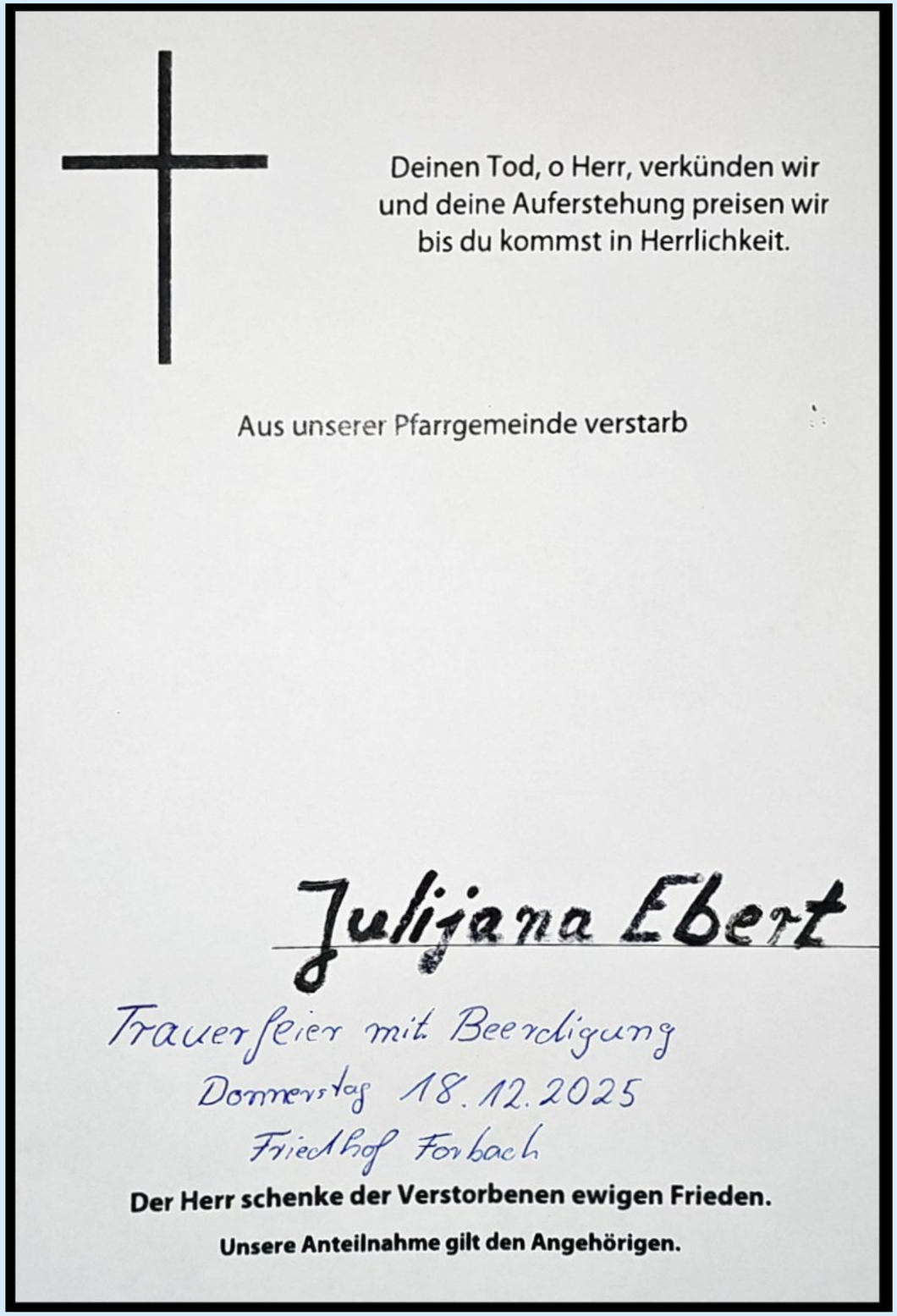
（無料）

こちらから、日記、すべての祈り、奇跡、CDを無料でダウンロードできます：

www.gnadenvolle-gebete.de
www.vater-unser.net
www.wertvolle-gebete-und-erlebte-wunder.de

ドイツ・フォルバッハ、エルバースブロン - ダイデスハイム - ニーダーキルヒェン - アメリカ

印刷用完成：2026**年3月著者：**全能の聖三位一体の神
、ユリヤナ・エバート 原著日記からの転記：ベルンハルト・コッペンハーゲン 誤字脱字
の校正：キリストの兄弟サミュエル



ユリヤナ・エバート コルピング通り19

68789 - ザンクト・レオン＝ロート *（当時の住所）*

1991年4月：

洗礼を受けた日以来、約7年間、私は自分の体験を書き留めることをためらっていました

洗礼を受けた日（1984年5月19日）以来、経験してきたことを書き留めるのをためらっていました。私は幻視を経験し、今では主イエス・キリストの声、あるいは天使たちの声、あるいは不浄な霊の声を聞き、悪魔の攻撃を感じています。

私が何度も躊躇していたのは、これを書き記すことが果たして有益なのか分からなかったからです。このテーマに関するカセットや本など、似たようなものは数多く存在します。また、以前は、すべてのカトリック信者がこの声を聞き、聖体拝領の際に主イエス・キリストと一つになることで感じるあの深い平安を

聖体拝領の際に、その深い平安を感じるものだと思っていました。これが特別なカリスマであり、神の恵みであるとは知らなかったのです。私が躊躇したもう一つの理由は、私のドイツ語力が不十分だったことです。そして最も重要なこととして、私はこう考えていました。「祈らず、断食せず、悔い改めず、十戒に従って生きていない人々は、神が信仰の恵みを授けてくださった人々を除いて、そもそも神を信じることはできない」と。 私もまた、自分が善人だったからではなく、罪人だったからこそ、この大きな恵みを受けたのです。慈悲深い神は、御自身の望む者に、御自身の望む時に、御自身の望む場所で、御自身の望むだけ恵みを与えてくださいます。なぜなら、神は、世界中のすべての枢機卿、司教、司祭たちよりも、私の魂をよくご存知だからです。

私は、三位一体の神が私の最愛の父であり、聖母マリアが

が私の最愛の母であることを悟りました。そして、最も重要なのは「真の愛」であり、それはあなた方以外には誰も与えることができないものです。なぜなら、美徳の仮面を被ってその邪悪さを隠している、偽りの愛も存在するからです。

私は生涯を通じて、私を愛してくれるだけでなく、私も愛せる人を探し求めてきました。長い探求の末、私はそれを見つけました。しかし、私が見つけたのは

「誰か」を見つけたのではなく、真の生ける神を見つけたのです。私は一日に何度もその神と霊的に一つになり、一日に一度、聖体拝領を通じてその神を受け入れています。

とりわけ、私は至聖なる秘跡、すなわち聖体を受ける際に、真の神であり、肉と血を持つ真の人間として臨在される神と一つになります。

メジュゴリエで「平和の女王」と名乗られる天の母マリアのおかげで、私は神へと向かう第一歩を踏み出すことができました。

洗礼を受ける前は、私は目も耳も不自由でした。当時はまだ真の平和を知りませんでした。絶えず内なる不安に苛まれ、数え切れないほどの夜、眠ることができませんでした。今、私は、三位一体の神だけが与えてくださる、この地上のいかなる人間も与えることのできない真の平和の証人となっています。

だからこそ、聖体拝領において主と一つになるたびに、私はいつもこう言いたいのです。「あなたは私の平和の王です。」平和を築くのは私たち人間ではなく、私たちは神に平和を願い求め、それを神からの賜物、神の恵みとして受け入れる必要があるのです。

1991年4月24日

私は12時05分から12時40分まで礼拝堂で祈りました。そのことについて、私はこの礼拝堂の外見が気に入らないということをお伝えしなければなりません。 礼拝堂の前には醜い像が置かれており、礼拝堂内の聖櫃はまるでオーブンのようです。つまり、内装は非常にモダンな造りなのです。当初、私は礼拝堂に入って祈るたびにしばしば涙を流していました。なぜなら、これを神への侮辱だと感じていたからです。それでも、生ける神がこの礼拝堂にも臨在されていると感づいたため、私は何度もそこへ祈りに引き寄せられました。

それにもかかわらず、医師や看護師、患者など、多くの人々が毎日この礼拝堂の前を通り過ぎながら、主を敬うこともなく過ごしています。

いつものように昼休みに、私は救い主との祈りに深く没頭していました。その時、初めて「私はあなたの魂の導き手だ」という声を耳にしました。

私は少し驚きましたが、実際には驚きというより、むしろ感嘆に近い気持ちでした。しばらくすると、その声が再び聞こえてきました。その後、私は救い主に、もし主が私の魂の導き手であるなら、まず何をするべきかと尋ねました。すると救い主は私にこう言われました。「まず、私に身を捧げなさい。」
私の最初の感想は、「また、私には理解しにくい言葉が出てきた」というものでした。
「奉献」という言葉は確かに聞いたことがありましたが、その内面的な意味はまだ理解していませんでした。私はイエス様に、「私はすでにすべて、心も、命も、魂も、体も、あなたに捧げてしまったではありませんか」と言いました。しかし、救い主は私にこう言われました。「私はあなたの未来が欲しいのだ。」
そこで私は、それも差し上げると答えました。
それから私は、このことを司祭たちに伝えるべきかどうかイエス様に尋ねました。そのとき、現在私の霊的指導者であるドハット神父、ヨハネス神父、フォクト神父、そしてゲブハルト・ハイダー神父のことを思い浮かべていました。救い主は「はい」とおっしゃいました。
その日一日、私は人生でかつてないほど幸せだった。救い主が私に授けてくださった恵みはあまりにも多く、言葉では到底言い表せず、いくら感謝しても足りなかった。この内なる喜びを感じることは、まさに言葉では言い表せないものだった。私はまるで別人のようだった。
夕方、私はミンゴルスハイムのロクス礼拝堂へ行きました。そこで告解をしました。
神父様は「罪ではない」とおっしゃいましたが、私は完全に清くなりたいと願っていました。聖体拝領の後、私はさらに多くの恵みを受けました。その恵みに、もうほとんど耐えられないほどでした。私の心は愛で燃え上がっていました。礼拝堂を出たとき、私は授かった恵みのあまり、涙を流しました。そこで、祈りのグループの友人であるヒルデとヘドヴィグに出会い、自分の体験を話しました。 彼女たちは私と一緒に喜んでくれました。家に帰る途中、女性に手を引かれて歩いている盲目の黒人男性に出会いました。私はその盲目の男性にロザリオを、その女性に聖別された聖母マリアの絵を贈り、私が授かった恵みをこの人々にも与えてくださるよう、救い主に祈りました。 その盲目の男性は大変喜んでくれ、私はその後、家路につきました。家に着くと、客が来ていたため、何も食べることができませんでした。私たちは一緒にロザリオを一連唱え、それを聖母マリアに捧げました。
夜、23時30分頃になると、すぐに誘惑が訪れました。私はベッドに横になっていましたが、突然、誰かが私の上に飛び乗って、体を揺さぶるのを感じました。私はただ「イエス」と口にしただけで、すべてが消え去りました。その後、私は眠りにつきました。

1991年4月25日 - 木曜日

夕方のロートで、聖体拝領前の教会で、私は悲しみのロザリオを唱えました。聖体拝領の後、私はイエスと一つになりました。イエスは私に「黙りなさい」とおっしゃいました。数分間の沈黙の後、私は救い主に、どうすればよいか尋ねました。何しろ、私はすでに自分の意志をイエスに委ねていたからです。すると、救い主から「あなたは常に私に忠実であり続けなさい」という答えが返ってきました。 その後、再び沈黙が続いたが、やがて「私なしでは立ち去ってはならない」という声が聞こえた。私は救い主が何を言おうとしているのか考え、立ち去る前に救い主と霊的に一つになるべきだと心の中で思った。しかし、そのことについては告解司祭に尋ねてみることにした。帰宅後、
ミサの後、ヨハネス・オルディンスキー神父から電話がありました。神父は電話越しに私に祝福を与えてくださいました。数分後、夫が再び受話器を私に手渡しました。今度はレーゲンスブルクのゲブハルト・ハイダー神父が電話口にいました。 私は、次の日曜日の午前11時に彼を訪ねることに決めました。彼もまた、電話越しに私に祝福を与えてくださいました。その祝福は、ヨハネス神父のそれとは違っていました。ゲブハルト・ハイダー神父の祝福からは、あまりにも多くの愛と力を感じたため、電話を切った直後に、彼のために「主の祈り」を三回唱えました。
洗礼を受けて以来、私は患者たちに話しかけています。全員ではなく、聖霊の導きによって私に託された人たちにだけですが。今日もそうでした。ある患者さんが、3日前から頬の痛みが治まらないと私に話してくれたのです。 私は思わずこう答えました。「信仰の薄い者は、より長く苦しむものです。」（これは聖霊が私に与えてくださった言葉です。）彼女は微笑んで、それは良いことだとおっしゃいました。

1991年4月26日 - 金曜日

職場で、ある患者さんがレントゲン撮影中に私に不満を漏らしました。14日前に手術を受けたものの効果がなく、今度はまた手術を受けなければならないとのことでした。 最初は「何も言わないでおこう」と思った。しかし、撮影が終わった後、ふと彼に尋ねた。「最近は、祈る回数は増えましたか、それとも減りましたか? 」彼は誇らしげに、自分は自由な人間であり、神を信じておらず、神など存在しないと答えた。

それに対し、私はこう言いました。「もし自分が脳を持っていると信じているなら、神の存在も信じていることになりますよ。」すると彼は嬉しそうに、「それは面白いですね、そんな話は聞いたことがありません」と言いました。その夜、ロートにある教会で聖体拝領の前に、私はそのシスター（修道女）を見かけました。

その修道女のもとへ聖体拝領に行くのは心から気が重く、私は尋ねました。

イエスに尋ねました。「私は自分の意志をあなたに委ねました。」するとイエスは、「司祭のところへ行きなさい」とおっしゃいました。そして、そのシスターは、私にキリストの御体を授けることもなく、私の横を通り過ぎていきました。

私は司祭から聖体を拝領した。

1991年4月27日 - 土曜日

その朝、起き上がるのがとても辛かった。しかし、私は聖ミサに参加したいという強い意志を持っていた。ヴァーハウゼルの巡礼教会では、ミサが7時15分に始まった。ヴァーハウゼルへ向かう道中、そして教会で聖ミサが始まる前から、私はこのミサを司式する司祭のために祈っていた。 年配のアラヌス神父がミサを司式していたが、私は、アラヌス神父がミサを執り行うのに苦労しているのを感じ、また目にも見た。神父の祈りの集中が妨げられていたのだ。変容の前に、私は幻視を見た。暗闇の中で、アラヌス神父が祭壇の前に立ち、ミサを執り行っている姿が見えた。 私はこれに非常に驚き、これが何を意味するのかと考えました。聖体拝領の際、彼が私にひざまずいて聖体を授けることに嫌悪感を抱いているのを感じました。教会には聖体拝領台がないため、私は床にひざまずかなければなりませんでした。私は三位一体の神に対して深い畏敬の念を抱いているため、ひざまずいてしか聖体を受け取ることができません。

彼は躊躇し、聖体を私の口から約10センチメートル離れたところに差し出しました。私が口を開けると、その距離から聖体が自力で私の口の中に飛び込んできました。このような体験は今回が初めてではなく、他の司祭たちからも、キリストの聖体が自力で私のところへやって来たことがありました。

10時30分頃、私はシュパイヤーのカルメル会修道院へ向かいました。そこで、ロダルベンの「尊い御血」の印が刻まれた蝋燭を受け取るつもりでした。

その後、シュパイヤーの老人ホーム「エンゲルガッセ4番地」にいるブルーノ・ティーベス司教を訪ねました。 ちょうど正午頃でしたが、彼を待たなければならなかったため、礼拝堂で彼のためにロザリオを唱えました。およそ1年前、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂でティベス司教様と知り合いました。当時、聖

アウグスティヌス修道会のツァイトラー神父と共に、当時ロダルベンについて、またロダルベンの「血の奇跡」についても話し合いました。当時、ティーベス司教はそれを信じておらず、明確に反対の立場を表明していました。

その一年間、私は彼のために祈り続け、ロダルベンの出来事について啓示を受けることなく、彼が亡くならないようイエスに願いました。私が訪問した際、ブルーノ・ティーベス司教はすぐに私を認識してくださいました。私は彼に赤いバラの花束と、

「ロダルベンの尊い御血」の印が入ったろうそく、そしてゲブハルト・ハイダー神父によるロダルベンの出来事に関する本を贈りました。彼はそれを大変喜んでくださり、ゲブハルト・ハイダー神父に挨拶を伝え、ロダルベンの出来事についてよく理解できたと伝えてほしいと私に依頼しました。また、1年前ほど強く反対する様子も見られなくなりました。 この訪問の前に、私はシュパイアーの市場に立ち寄っていましたが、司教様への花を何にすべきか迷っていました。私は救い主に尋ねると、主はこう答えてくださいました。「あなたが司祭に与えたものは、私に与えたのと同じだ。」そこで、私は赤いバラの花束を選ぶことにしました。

どの司祭の中にもイエス様を見出すことができるというのは、実に素晴らしいことです。

1991年4月28日 — 日曜日

今日はレーゲンスブルクのカルメル会修道院でミサに参列した。そこでゲブハルト・ハイダー神父と約4時間半を過ごした。このような神父方がいることを神に感謝する。会話の中で、私は20以上の質問を投げかけたが、神父は平安と静けさ、そして愛をもって答えてくださった。 まるでその時間をイエス様と過ごしたかのようでした。神父様は86歳ですが、その年齢にしては耳が非常に良く、答えも非常に的確です。ゲブハルト神父様が持つこの神への忠実さは、多くの司祭たちの模範となるはずです。対話の後、神父様は私のためにろうそく、絵、そして水を聖別してくださいました。 私は彼を通して多くの恵みを受け、別れを告げるのが辛かった。ロダルベンに関する新しい本が出版されるよう、私たちの祈りのグループで彼のために集めたお金を彼に渡した。ゲブハルト・ハイダー神父は、1952年にロダルベンで起きた「血の奇跡」の目撃者である。 大きな恵みを受けられるたびに、その後、悪魔の攻撃をこれまで以上に強く感じるのです。レーゲンスブルクからザンクト・レオン＝ロートへの帰路もそうでした。夫が車を運転している間、私は夫の様子が変わっていくのを感じ、彼は気分が悪くなりました。しかし、私の魂の中では、不浄な霊の接近を感じていました。夫の顔は真っ赤になり、吐き気を催していました。 私は彼に高速道路の路肩に停車するよう頼みましたが、彼は「それは許可されていない」と答えました。その時、私はそれが不浄な霊の言い訳だとすぐに気づき、直ちに夫に聖水を振りかけ、大声で言いました。「神の名において命じる。今すぐ路肩に寄り、停車しなさい。」すると彼はすぐにその通りにしました。 私たちは席を交代し、私は片手にロザリオ、もう片方の手でハンドルを握り、落ち着いて家路につきました。夫はすぐに眠りにつき、約100キロメートル走ったところで目を覚ましましたが、その時にはすべてが終わっていました。夫が眠っている間、私は心から彼のために祈っていました。このような悪魔からの攻撃を経験したのは、これが初めてではありませんでした。

1991年4月29日 - 月曜日

私たちの教区司祭が、聖体配給の助手として2人の新しい女性を見つけたという話は、すでに聞いていました。聖体拝領の後、私はイエス様に、本当に近い将来、2人の女性が赤い服を着て聖体を配ることになるのかと尋ねました。

イエスはこう言われました。「そうだ。さらに悪いことが起こるだろう。」

夕方20時頃、私たちの祈りの集いが再び始まった。ドチャット神父も来られており、礼拝の後、信者たちに配るための聖体を携えていた。 私たちは救い主を礼拝し、私は救い主から約1メートルの距離でひざまずいていました。ロザリオの祈りの最中、救い主がこうおっしゃるのを聞きました。「病に伏している者、そしてミサに出席する手段がなかった者だけが、聖体拝領を受けることを許されるのだ。」

祈りを終えた後、私はドチャット神父に告解をし、イエス様が私の霊的指導者であることを伝えました。 神父は、そのことは以前から知っていたとおっしゃいました。その日、私は心の中で攻撃を受けているのを感じました。ドチャット神父の御臨在によってもです。しかし、私はその様子を一切見せませんでした。彼への信頼を失いかけていました。そこから、私は彼のためにもっと祈らなければならないと悟りました。その夜、私の夫は再び不浄な霊に襲われました。

祈りの会の参加者の一人、マルガもそれに気づきました。夫は、できればすべてを打ち砕いてしまいたいほどでした。しかし、私たちの祈りの会での祈りの最中に、彼は眠り込んでしまいました。

祈りの集まりで聖体拝領が終わった後、ドチャット神父は、聖体を運ぶ際に保管していた小皿を取り出し、聖体の残りの小さな欠片やパン粉を聖水に流し込みました。それは私にとって衝撃のような出来事でした。私は、それは良くないことだと感じました。しかし、その後、私は眠りにつきました。

1991年4月30日 — 火曜日

早朝、目が覚めると、私はすぐに、ドチャット神父が聖体のパンのかけらを注ぎ込んだ聖水のもとへ駆け寄りました。私は聖水の器を手に取り、「イエス様、あなたと共にこの杯を飲み干します」と言いました。そして、イエス・キリストがそこに臨在していると信じて、聖水の器をすべて飲み干しました。

夕方、聖体拝領の後、私はイエス様に、ドチャット神父がしたことは正しかったのかと尋ねました。イエス様は、「それは正しくない」とおっしゃいました。私は救い主に、このことをドチャット神父に伝えるべきかどうか尋ねました。救い主は、「はい」とおっしゃいました。私は、神父が私に何と言うだろう、私を叱るだろうか、と考えました。 するとイエスは、「その司祭はそれを受け入れてくれるだろう」とおっしゃいました。
その間、教会では「まことの御体よ、あなたを称えましょう」という賛美歌が歌われていました。私は涙を流し、聖体の最も小さな一片にも救い主が臨在しておられることを信じないすべての司祭たちのために、救い主に赦しを請いました。
ここで、**1991年4月29日**（月）の出来事について改めて触れておかなければなりません。
昼休み、職場の礼拝堂で「主の天使」の祈りを終えた後、私は救い主と心を一つにし、前週の土曜日に暗闇の中で見たアラン神父について尋ねました。その意味が、いまだに分からなかったのです。イエスは私にこう言われました:
「それが、恵みのない司祭の姿だ。」救い主は、この件について話し合うために、ワグハウゼルにいるエミリアン神父のもとへ行くことを私に許してくださいました。そこで私は、1991年4月30日（火）に
91年4月30日（火）にエミリアン神父のもとを訪ねました。このことは、私がその話をしていた地元のヴォクト神父も知っていました。ヴァーガウゼルの修道院に到着すると、アロイス修道士がエミリアン神父に私の来訪を告げました。神父を待っている間、ブラジスス修道士が来て、エミリアン神父がお見えになるまで、彼と一緒にロザリオを二連祈りました。 エミリアン神父との会話中、私は一人ではないと感じました。というのも、間違ったことを言わないよう、イエス様に一緒にいてくださるよう事前に祈っていたからです。私は力強く、冷静かつ落ち着いており、口と膝での聖体拝領についても話し、アラーヌス神父のことや、土曜日の朝に体験したことについても彼と話し合いました。 会話の中で、私はアラン神父のために祈ってほしいとお願いし、自分もアラン神父とエミリアン神父のために祈ると約束しました。
エミリアン神父は私に祝福を与えてくださり、私は神の御心を果たせたことを喜びながら、家路についた。

1991年5月4日（土）
私は再びヴァーハウゼルへ行き、7時15分の聖ミサに参加した。今回もアランス神父がミサを司式しており、私は再びその薄暗がりの中で神父の姿を見た。

1991年5月6日 — 月曜日
夕方、ロートの教会へ行った。その後、祈りの集いがあった。そのあと、ドチャット神父と話し、聖体の残りの破片や屑をもう聖水に捨てないようお願いした。 私は、救い主が「それは正しくない」と私に告げられたことを伝え、また、イエス・キリストはごくわずかな断片にも確かに臨在しておられるため、前週には聖水をすべて飲み干してしまったこと、そしてそれが私の信仰であることを話しました。
神父は、今後は聖体のくずを自宅に持ち帰ることを約束してくれました。

1991年5月7日 — 火曜日
職場の礼拝堂で、私は救い主と一つになりました。私は救い主に、自分は無に等しい存在だと告げました。さらにこう言いました。「救い主よ、私はすでにすべてをあなたに捧げました。私の意志もあなたの手の中です。これ以上、何を捧げればよいのでしょうか? 」すると救い主は、「私はあなたの動きを望んでいる」と答えられました。私はその意味が理解できませんでした。
その後、レントゲン検査の際、ある自費診療の患者さんが、なぜX線を遮るための鉛エプロンを着せてもらえないのかと尋ねてきました。しかし、そのエプロンは彼女が座っている椅子の背もたれに掛かっており、十分な防護が確保されていたのです。私は思わずこう答えました。「すべてを見、すべてを聞くことができるよう、祈らなければなりませんよ」。彼女は笑って、それは良いことだと答え、その場を去りました。

1991年5月8日 — 水曜日
水曜日、私はキリストの昇天祭の前夜ミサのためにミンゴルスハイムへ行った。

1991年5月9日 — 木曜日 — キリストの昇天祭

祝日には、ロートにある教会でミサに参加し、その後、村で行われた行列にも加わった。とても素敵だった。

1991年5月10日 — 金曜日

夕方、ロットの教会で聖体拝領を通じて救い主と一つになったとき、イエス様は私に、ヨハネス神父に「彼の著書は正しくない」と伝えてもよい、そして土曜日に彼のところへ行ってそう告げるようにとおっしゃいました。

1991年5月11日 — 土曜日

朝のミサに寝坊してしまいましたが、すぐにその埋め合わせとして1時間祈りました。11時頃、ツォイテルンからデリスさんが私のところに来て、ローランドがヨハネス神父の著書を持って無事にロシアに到着したと伝えてくれました。それは私にとって大きな打撃でした。なぜなら、私はそれらの本が良くないことを知っていたからです。

15時30分頃、私はロートのヴォクト神父のもとへ行き、これからヨハネス神父のもとへ行きたいと伝え、救い主がヨハネス神父について私に語られたことを報告した。

最後にヴォクト神父に祝福を願い、それから家路につきました。家では、ヨハネス神父のもとへ向かう前に、彼のためにロザリオを唱えました。 心の奥底から捧げる個人的な祈りの中で、イエス様に、私と一緒にヨハネス神父のもとへ行ってくださるようお願いしました。ヨハネス神父のところに到着すると、神父は私に口づけをして迎えてくれました。一瞬、ユダの口づけを思い出し、その口づけに返すことができませんでした。家に入るやいなや、神父は「今日はいつもと全然違うね」と言いました。「あなたは普段とは違う」と。 彼は非常に落ち着きがなくなっていました。私は「ええ、私は一人ではありません」と言いました。彼は驚いて「ああ、そうだったのか」と答えました。そして、私は本当に一人ではありませんでした。心には特別な平安と力が満ちており、ヨハネス神父に何を話せばいいのかという心配は全くありませんでした。会話の中で、私はイエスが彼の著書について私に語ってくださったことを伝えました。

彼はすぐに苦しみ始めました。彼は不安を露わにし、私は彼が複数の不浄な霊に苦しめられているのを感じましたが、彼には私や私の同伴者（イエス）に対する畏敬の念があったため、それらの霊は私に手出しをすることができませんでした。私は愛と安らぎを放ち、謙虚な態度でいました。彼は私にいくつかの本を見せ、自分を正当化しようとしました。そして、「また病気になってしまった。もう死ぬしかない」と言いました。 彼は非常に衝動的だった。私は彼にこう答えた。「それは永遠に比べれば、ほんのひとしずきに過ぎない。」私は彼を励まし、さらに、彼を助けるためにここに来たのだと伝えた。彼はこれからどうすればよいかと尋ねたので、私は、その本の出版を止め、配布させないようにすべきだと答えた。 その後、ヨハネス神父は、**1991年5月**7日に彼の司教であるゴルニリアク・プラトン司教から電話があり、その司教が彼の著書は異端であるとの通告を受けたと私に話した。ヨハネス神父はこの司教をサイコパスと呼び、正気ではないと考えていた。彼はその司教の言うことを聞こうとはしなかった。 私はヨハネス神父への贈り物として、彼への愛情と助けたいという気持ちを表すため、赤いバラとフリージアの花束を持参していた。ヨハネス神父は、ゴルニリアク・プラトン司教と話すことを私に禁じ、機会があれば他の司教たちと彼の著書について話し合うために私を招待したいと述べた。 さらに彼は、私が彼をすっかり病気にさせてしまったこと、私の言うことを信じられないが、それでも私を信頼すると語った。それに対する私の答えは、「そのような心が散漫な状態では、信じることはできない」というものだった。

ヨハネス神父とのこの会話を交わすことができて嬉しかった。当初、私はイエスに、彼にこれを伝えてよいのかと尋ねた。というのも、彼が病弱な方であることを知っていたからだ。しかし、救い主はこう言われた。「真理は病よりも優先される。」

1991年5月12日 - 日曜日

今日は夫の50歳の誕生日でした。私たちは、世界中で飢えに苦しむ人々を思い、お祝いはしませんでした。

ロートでの聖ミサ：この日曜日の説教はヴェネブッシュ嬢が担当しました。ヴォクト神父も同席しており、この件についてロザリオを祈っておられたため、私はその説教が気に入りませんでした。

夕方、私は救い主に、ミュンヘンのゴルニリアック司教のもとへ行くべきかどうか尋ねた。イエスは「できるだけ早く」とおっしゃった。私は土曜日に出発できることを願った。
夕方の聖母への祈りの集いはとても素晴らしかった。フォクト神父がこの集いをうまく導いてくださった。

1991年5月13日 - 月曜日

午前10時頃、病院にて：私は救い主に、もし私が誤った教えに立ち向かうならば、その確かなしるしとして何を授けてくださるのかと尋ねました。救い主は私にこう言われました。「私はあなたに私の知恵を与える。」 私は「ああ、それは大きな贈り物ですね」と言いました。正午、病院内の礼拝堂にて：ミュンヘンの司教を訪ねることは緊急を要し、急がなければならないと直感しました。私は救い主に、いつ司教のもとへ向かうべきか尋ねると、彼は「金曜日だ」と答えました。さらに、なぜ私がゴルニリアック司教を訪ねる必要があるのかと尋ねました。 救い主は、「カトリック教会のために」とおっしゃいました。次に、司教が私と話をしてくれるのかと尋ねると、救い主は「はい」とお答えになりました。次に私が心配したのは、「イエス様、金曜日はペンテコステですから、交通が混雑するでしょう！」ということでしたが、イエス様は「午前中はそうではない」とお答えになりました。私は喜びと平安を胸に礼拝堂を後にしました。
16時30分から17時の間に、ミュンヘンのゴルニリアク・プラトン司教に電話をかけた。彼と話す前に、彼のためにロザリオを数回唱えた。それから司教に、私が彼を訪ねたい理由を伝えた。彼は金曜日の15時に面会の約束をしてくれた。
私は承諾した。
この会話の中で、私はプラトン・ゴルニリアク司教が、ヨハネス神父が描写していたようなサイコパスであるという印象は、実は全く受けませんでした。それどころか、彼は事実に基づいており、礼儀正しく、神の御心に献身していました。金曜日には彼をもっとよく知ることができるだろうと思い、すでに楽しみにしていました。
19時にロートでの聖母マリアの礼拝に参加し、20時には私たちの祈りの集いが始まった。その日、マンハイム出身のヌンシアという女性の話によれば、私は聖母マリアの御出現を経験することになっていた。しかし、救い主はすでに、この女性を信じてはならないと私に告げておられた。祈りの最中、悪魔の存在が感じられた。 私は突き飛ばされたり、ぶつかられたりして、祈りの集中をひどく妨げられた。そこで、私は自分の座っている場所に聖水を振りかけた。「今ならこいつを平手打ちできる」と心の中で思った。しかし、私の隣にひざまずいている人が平手打ちを受けるのは避けたかった。そう考えていると、突然笑いがこみ上げてきた。 祈りが終わる頃には、私はこれほど多くの恵みを受けていたため、そうした妨害など全く気にならなくなっていた。

1991年5月14日 - 火曜日

夫も私も、夜に邪悪な霊に邪魔されました。私はめったに夢を見ないか、あるいは夢の内容を覚えていないのですが、その朝だけは夢の内容が頭に残っていました。
その夢は興味深いものだったので、書き留めておきたいと思います。
私は、現実の地球には存在しない、数え切れないほどの鳥たちを見ました。それらはスズメのように見えたのですが、まるで風船のように膨らんでいて、ハトほどの大きさでした。すると突然、それらは人間へと姿を変え、その姿は汚れていて、みすぼらしく、見るに堪えないものでした。彼らは助けを求めて懇願し、見る者は誰もがすぐに同情せずにはいられませんでした。 私は彼らに祝福を与えた。その瞬間、向こう側から全く別の人々が「あの人たちから離れろ、彼らはエイズとハンセン病にかかっている」と叫ぶ声が聞こえた。私は恐れることなくひざまずき、全身の力を振り絞って叫んだ。「イエス様、この人々を助けてください。」 その汚れた人々もまたひざまずき、助けを求めていました。すると突然、その中の一人が私の右手を叩きました。その瞬間、私の手は火のように熱く燃え上がりました。その時、私はすぐに、彼らが悪魔だと悟りました。そして目が覚めました。数分間、手の灼熱感を感じ続けましたが、やがてすべてが消え去りました。
その日、私たちは寝坊してしまい、私は職場に遅刻してしまった。1984年に洗礼を受けた日以来、そんなことは一度もなかった。
昨日、悪魔は聖母マリアの姿を装おうとしていた。しかし、私たちの祈り、信仰、そしてイエスと聖母マリアへの愛によって、悪魔にはその許可が与えられなかった。

なぜなら、悪魔は、それが神の御心であり、神の許可がある場合にのみ、そのようなことを行うことができるからだ。
10時から10時30分の間、病院の休憩室で：
私はイエス様に、昨日の悪魔について尋ねました。イエス様は「そのような事例はさらに増えるだろう」とおっしゃいました。ここで「事例」とは、悪魔による攻撃のことを指していました。さらに私は尋ねました。「神様、たくさん祈れば、もっと攻撃されるようになるのでしょうか？」イエス様は答えられました。「そうだ、お前は彼らから多くの魂を奪っているのだ！」
次の質問は、「ヨハネス神父は、あの本が間違っていることをご存知ですか？」でした。イエスは「そうだ！」と答えられました。そこで私は、なぜその本が出版され続けるのか、つまり、その本が市場から消えるべきではないのかと考えました。イエスはこう答えられました：
「サタンは彼を支配しているのだ」。
14時30分頃、病院にいる私に夫から電話があり、朝には私が一人で行かなければならないと伝えていたにもかかわらず、私と一緒にミュンヘンのプラトン・ゴルニリアク司教のもとへ行くために、一日休暇を取るつもりだと告げました。 そして今朝、もし私が司教のもとへ行くことが神の御心であるならば、それがうまくいくようにと祈っていました。午後4時半頃、夫と私は職場から家へと車で帰りました。車中、夫は夜、悪魔に苦しめられた話を私に語りました。彼は地獄の幻視を見、悪魔が彼にこう言ったのです。 「ほら、聖母は君の妻には現れなかった。すべては嘘と欺瞞だった。メジュゴリエでも、彼女は聖母の御出現など受けていない。それは夜中の2時半頃のことでした。その後、彼は起き上がり、指を聖水に浸し、指を聖水から離すことなく30回の『アヴェ・マリア』を唱えました。すると静けさが訪れ、彼は再び眠りにつきました。
19時、私はヴォクト神父が司式する聖母への礼拝に参加した。とても素晴らしいものだった。神父は聖母の連祷を唱えた。これはめったに唱えられないものなので、私はとても嬉しかった。教会の前で、リトアニア出身の年配の女性に出会った。彼女は、一晩中悩まされて眠れなかったこと、そしてそのようなことが頻繁に起こると話してくれた。 彼女は私と一緒に家まで来て、私は彼女に聖水、聖別された塩、そして聖別されたろうそくを渡した。彼女が家に帰った後、ロート（Hedwig H.）からまた一人の女性が訪ねてきた。彼女は泣きながら、夫との問題を抱えていると助けを求めてきた。私たちは一緒に「悲しみのロザリオ」を祈った。

1991年5月15日（水）

早朝、夫は夢について話してくれた。その夢の中で、鳩ほどの大きさの黒い鳥がたくさん飛んでいるのを見たという。
10時頃、医師室で私はイエスに尋ねました。「イエス様、夫がこれほど悪魔に苦しめられているのに、どうやって彼と一緒にポーランドへ行けばいいのでしょうか?
イエスはこう答えられました。「私はあなたと共にいる！」
昼休み、私は礼拝堂へ行き、イエスと心を一つにして祈りました。それから、あの黒い鳥たちは何を意味するのかとイエスに尋ねました。すると、「それらは不浄の悪魔たちだ」という答えが返ってきました。そこで私は救い主にこう尋ねました。「親愛なるイエス様、私がカトリック教会の誤った教えに立ち向かうことは、あなたの御心でしょうか？」 イエスは私にこう答えられました。「はい、それが私の御心です。」私は救い主に、ヴォクト神父にすべてを話すべきかどうか尋ねると、救い主は「はい」と答えられました。その後、イエスは私に尋ねられました。「今、平安を感じているか？」私は「はい」と答え、イエスがこうおっしゃるのを聞きました。「不浄な霊は、真の平安を与えることはできない。」
午後2時15分、片腕しかない患者がレントゲン撮影（首の撮影）のためにやって来た。彼は、フランスでの戦争中にその腕を失ったと語った。私は彼と話をし、片腕で生きることは重い十字架の道だと伝えた。すると彼は、「何事にも慣れるものだ」と言った。
そこで私はすぐにこう答えました。
「もしすべての人々が神に慣れることができれば、それは素晴らしいことだろう」。
19時30分、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で聖ミサに参列した。司祭は聖ミサを非常に速いペースで執り行っていた。それは美しくなく、参列者たちの歌声も美しくはなかった。その後、私は司祭のところへ行き、約20分間

ほど懺悔の対話を交わした。司祭は内心かなり落ち着きがない様子だった。私の心には深い平安があり、私は一人ではない、イエスが私と共にいてくださることを感じていた。
司祭が話し終えたとき、私は彼にこう言いました。「それは世俗的な知恵でした」。私は赦しを受けたいと願いましたが、司祭は私に「あなたには罪はありません」と言いました。
それから私は神父に祝福を求め、その場を後にした。外では、マルヒェンベルクから来たユルチェンがすでに私を待っていた。彼女は、今日クロナウでルフェーブル司教に関する講演が行われると教えてくれた。私は嬉しくなり、すぐにユルチェンと一緒にそこへ向かった。 ミンゴルスハイムの司祭が講演を行いました。しかし、彼は真実を語っていませんでした。彼はルフェーブルをひどく貶めたので、私は「一体、カトリック教会の中で、彼はどんな大きな罪を隠そうとしているのだろう」と思いました。彼はルフェーブルの目にある「ちり」には気づいていましたが、自分の目にある「梁」には気づいていなかったのです。
講演の終わりに、私は彼に二つの質問をしました。**1**.「あなたはルフェーブルの不服従について語っていますが、それについて一言申し上げたいと思います。『私はルフェーブルをよく知りませんが、私の魂は何が善で何が悪かを感じ取っています。さて、この世には、聖体拝領台を教会から撤去したために不服従となっている司祭が、一体何人いるのでしょうか?
しかし、聖体拝領台がまだ教会内に残されている、良識ある教会も存在します。聖体を立ったまま受けるか、ひざまずいて受けるか、あるいは口で受けるか手で受けるかは、各人の自由意志に委ねられています。 しかし、ひざまずいて口で聖体拝領を受けたいと望む人々には、その機会が与えられなければならず、聖体拝領台を用意しなければならない。なぜなら、聖体の中には、真の神であり、肉と血を持つ真の人間が臨在しておられるからであり、だからこそ私は、生ける神を受け取る際にひざまずくのである」。
私の周囲の人々は、まるで不浄な霊に取り憑かれたかのようでした。彼らは私に怒鳴りつけ
、「ここから出て行け。そもそも誰があなたを招待したんだ? もし望むなら、家で一日中ひざまずいていればいい」と叫びました。
その瞬間、私は聖書を思い出し、イエス様も同様の扱いを受けたことを思い出した。そこで私は心の中で聖霊に、二番目の質問をすべきかどうか尋ねた。 「はい」という答えが返ってきました。私は心に満ちた深い平安に神に感謝し、二つ目の質問をしました。「牧師先生、ウタ・ランケ・ハイネマンとルフェーブルを比較することはできません! 」彼は少し答えをためらってから、こう言いました。「おそらく、不従順のせいでしょう。」
私はユルチェンと一緒に家へ帰り、多くの恵みを受けました。
22時30分頃、自宅で聖母マリアの像の前に進み、ルフェーブルのためにろうそくに火を灯し、彼があれほど侮辱されたことを思い、彼のために祈りました。それから、私は魂の底から聖母マリアに尋ねました。「なぜルフェーブルは破門されたのですか? 」すると、「イエスは彼と共にいた」という答えが返ってきました。その後、私は眠りにつきました。

1991年5月16日 木曜日

朝起きると、ほぼ毎回、その日に私が請うであろう免罪を誰かのために捧げています。今日は、すべての免罪をルフェーブルのために捧げました。12時ちょうどに、病院の礼拝堂へ行きました。まず、2人がとても大きな声で話し合っており、その後、誰かがオルガンを大音量で弾き始めました。 「主の天使の祈り」を唱えようと思った。12時だったから、きっとそれが神の御心だろうと思ったのだ。まず、その二人の男性のために、数回の「アヴェ・マリア」と「大天使ミカエルの祈り」を捧げた。すると、三番目の男性が加わって話に混ざってきたので、彼のためにも祈った。私の祈りは聞き届けられたようで、皆が外に出ていった。私は神に感謝し、静かに祈りを続けることができた。
15時30分頃、私はシュティフト・ノイブルクに到着しました。約30分間、ヨハネス修道士と話をしました。その後、聖櫃の前で約2時間祈りました。それからロートへ向かいました。そこではミサが行われていなかったため、マイシュへ行き、プラトン・ゴルニリアク司教のためにミサを捧げました。

1991年5月17日 — 金曜日

早朝、夫と私はゴルニリアク司教を訪ねるためミュンヘンへ向かった。それはまさにイエスが言われた通りのことだった。道路には車も走っておらず、渋滞もなく、すべてが順調に進んだ。

司教様は15時に私たちをお迎えくださいました。 ゴルニリアク司教が放つ愛と安らぎの深さに、私は驚かされました。司教は、ヨハネス神父が以前、イエスの教えについて多くの誤りを記したため、一度職務停止処分を受けたことがあると私に話してくださいました。さらに、ヨハネス神父の記事は正しくないとして、すでに多くの司祭たちに書面で注意を促してきたが、誰もその言葉に耳を傾けようとしなかったとも語られました。
ご覧の通り、ヨハネス神父は司教に背いたのです。私は司教と約1時間お話しすることができ、神に感謝しています。
帰宅途中、私たちはレーゲンスブルクにいるゲブハルト・ハイダー神父のもとへ立ち寄りました。レーゲンスブルク方面へ向かう高速道路に乗り換えたとき、素晴らしい歌声が聞こえてきました。約20分間、天使たちの合唱が聞こえてきましたが、それはこの世のものとは思えない歌声でした。 私たちは深い畏敬の念を抱き、心の中で一人ひとりが深く祈りを捧げました。数年前、私が一度この体験をさせていただいたことがありましたが、今回、夫もこれを聞くことができたことを神に感謝します。家に着くまでに、私たちはロザリオを7回とその他の祈りを捧げました。——ゲブハルト神父のもとでは約1時間過ごしました。——

1991年5月18日 — 土曜日

私はヴァーハウゼルで午前6時30分の早朝ミサに出席した。その聖ミサは、亡くなった私の両親と兄弟姉妹のために捧げられた。この日は、聖母マリアが私に現れてから7周年の記念日でもあった。
午後、私は救い主と心を一つにし、こう尋ねました。「イエス様、もしあなたがルフェーブル司教と共におられたのなら、なぜ彼が破門されることを許されたのですか？」イエス様はこう答えられました。「多くの魂が救われるためです」。この答えは私には少し分かりにくかったのですが、イエス様はさらにこう続けられました。「彼の苦しみによって、多くの魂が救われたのです」。

1991年5月19日 — 聖霊降臨の日曜日

10時 — 私はロートで聖ミサに参列した。
13時頃、マンハイムのブラン神父から電話があった。彼は、ヨハネス神父の容体は良好であり、フランスへ司教のもとへ向かわなければならないと私に話した。ブラン神父はヨハネス神父を称賛したが、私はそれについて何も言わなかった。彼が真実を語っていないことを知っていたからだ。 ヨハネス神父が良心の呵責を感じ、ブラーン神父に連絡を取ったために、ブラーン神父が電話をかけてきたのだという印象を受けた。
午後、私はロット出身のヘドヴィグと一緒にロザリオを唱えました。19時、私は教会でマリア
への祈りの集いに参加しました。
20時頃、ロット出身のツィータが訪ねてきて、私たちは一緒に
ロザリオを共に唱えました。ツィータは、ミンゴルスハイムの司祭がひどい説教をしたと私に話してくれました。彼は、人々は巡礼地へ巡礼すべきではないと語ったそうです。（この司祭は、ルフェーブルに対する講演も行いました。ここ数日、私はすでにこの司祭のためにたくさん祈っていました。
今日はとても素晴らしい一日でした。というのも、ちょうど7年前の今日、私は洗礼を受け、イエスとマリアへの忠誠を守り続けてきたからです。神が私に与えてくださったこの大きな恵みに感謝します。イエスとマリアと共にいることは、なんと素晴らしいことでしょう。もう、神なしで生きることは想像できません。それは恐ろしいことです。なぜなら、神から離れることほど大きな悪はないからです。

1991年5月20日 — 聖霊降臨祭の月曜日

午前7時、私はヴァーグハウゼルで、亡くなった両親と兄弟姉妹のために捧げられた聖ミサに出席しました。とても素晴らしい時間でした。私はイエス様とマリア様と心を一つにしました。イエス様は、「そのように祈り続けなさい、わが娘よ」とおっしゃいました。
その後、私たちはヴィーゼンタールのハンブシュ家を訪れ、そこで朝食をとりました。彼女は聖母マリアへの捧げ物として、美しい赤いバラの花束を私にくれました。それは、彼女が夫から結婚記念日に贈られた花束でした。
家に着くと、すぐにその家族のためにロザリオを唱えました。
午後、私は試練に直面しました。気分が悪くなり、吐いてしまいました。

少し横になっていたら、「教会に行かないで、あなたは病気だ、今日はもう一度教会に行ったじゃないか、など」という言葉に悩まされました。
イエスの絵を見つめていると、「祈りなさい！」という声が聞こえました。私はすぐに立ち上がり、悲しみのロザリオを唱え、その後、慈悲のロザリオを唱えました。
すると、その苦しみは突然消え去りました。
私は教会へ行き、聖母への祈りの集いに参加しました。若い司祭が司式をしていました。家に帰ってから5分も経たないうちに、部屋はすでに人でいっぱいになりました。その前までは、聖霊降臨祭の月曜日には誰も祈りの集いに来ないだろうと思っていたのですが。でも、私は私たちの祈りの集いのためにたくさん祈りました。その日、私たちは特に司祭たちのために祈りました。

1991年5月21日 - 火曜日

9時から10時まで、歯医者に通いました。私はその痛みを、神の栄光をさらに高めるために捧げました。治療の間中、心の中で祈り続けました。夕方にベネブッシュで
ベネブッシュさんが夕方に聖言の集いを行い、その後聖体拝領を授けることを知っていたので、イエス様に「私の立場ならどうなさいますか？」と尋ねました。救い主は「そこへは行かない」とおっしゃいました。私は自宅で約1時間祈り、霊的に聖体拝領を受けました。

1991年5月22日 - 水曜日

ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で聖ミサに参加した。私は、東ドイツ出身の若い女性のために、聖ミサと聖体拝領を捧げた。彼女に祈りのメモ、聖別されたメダル、そして聖別された聖母マリアの絵を贈った。彼女は共産主義の教育を受けていたが、聖別された品々をとても喜んでくれた。 今日で、夫と私が26年前にヴァーハウゼルでカトリックの結婚式を挙げた日だということは、あまり意識していなかった。当時はドイツ語をほんの少ししか話せなかったため、神父様の言葉を全く理解できなかった。今となっては、それを何度も悔い改めてきた罪だと感じている。

1991年5月23日 - 木曜日

病院の礼拝堂に行き、救い主に「ベンネブッシュ嬢の聖言葉の礼拝に行くべきでしょうか？」と尋ねました。救い主は「いいえ」とおっしゃいました。それから、クロナウのカルギエロとウェンディが司祭になるべきかどうか、救い主に尋ねました。救い主は二人について「はい」とおっしゃいました。
夕方、まずマルシュの教会へ行った。そこではミサが行われていなかったので、ミュールハウゼンへ行き、そこでマリアの礼拝に参加した。

1991年5月24日 - 金曜日

ロートではミサが行われていなかったため、マルシュへ向かいました。しかし、そこでもミサはありませんでした。そこで私は救い主にこう言いました。「もしあなたが私と一つになることを望まれるなら、7時2分前ですので、私が時間通りにミュールハウゼンに着けるよう助けてください。」神の助けにより、私は時間通りにミュールハウゼンに到着し、聖なるミサに参加することができました。 それはまるで奇跡のようでした。とても素晴らしい体験で、多くの恵みを受け、救い主と深く一つになることができました。主よ、私の神よ、感謝いたします。

1991年5月25日 — 土曜日

朝7時15分、ヴァーグハウゼルでの聖体ミサに出席しました。午後には、ヴィーゼンタールからベアテとマリオン・ハンブシュが訪れ、ケーキを持ってきてくれました。その後、ディーター・エルベン氏も来られました。彼と共に、彼の願いのために三連のロザリオを祈りました。

1991年5月26日 — 日曜日

10時00分、ロートの教会で高ミサに出席しました。この日は激しい頭痛に悩まされていたため、13時30分から15時00分まで横になって休みました。その後、ロートからヘドヴィヒさんが訪ねてきました。3人で「悲しみのロザリオ」を祈り、夫も一緒に祈ってくれました。15時00分からは頭痛が治まりました。

私は、罪人の回心のためにその苦しみを捧げました。夕方、ロートでマリアの礼拝に参加しました。

1991年5月27日 - 月曜日

大変な一日でした。何人かの患者から不浄な霊の気配を感じました。職場の礼拝堂で、祈りに感謝を伝えてくれたルーマニア人女性に出会いました。

夕方、ロートで聖体礼儀に出席した。20時、私たちの祈りの集いが始まった。非常に多くの人々が集まり、子供たちも大勢いた。私たちは救い主を礼拝し、ドチャート神父のもとで告解をする人も多かった。とても素晴らしい時間であり、私は多くの恵みを受けた。

1991年5月28日 — 火曜日

大漁でした!

30歳くらいのカトリック教徒の女性が患者として私のところに来ましたが、私ははっきりと「憑依」を感じ取りました。

悪魔は彼女の鼻と口を完全に変えてしまっていました。鼻はすっかり曲がっていました。彼女は神に対して憎しみに満ちており、非常に落ち着きがありませんでした。

その後、ルーマニアからの患者さんが来られました。彼女はまるで奴隷のように夫に支配されていました。夫は58歳、彼女は32歳でした。私は彼女に聖母マリアの絵、メダル、そして祈りを授けました。興味深いことに、彼女はドイツ語を話せなかったにもかかわらず、私が神について話したことは理解していたのです。

その後、ユダヤ人の男性が訪れ、彼にも聖母マリアの絵を贈りました。

次の患者はポーランド人女性で、彼女とも神について話しました。礼拝堂で、私は皆のために祈りました。15時から15時30分まで、同僚のヴェロニカさんと私で「悲しみのロザリオ」を唱えました。

礼拝堂で一人で祈っている時、私は救い主と心を一つにし、霊的に交わりながら、東ドイツやポーランドにも行くべきかどうか尋ねました。答えは「魂を救いなさい」というものでした。私は、イエスなしでは魂を救うことはできないと答えました。すると救い主は「私はいつもあなたと共にいる」とおっしゃいました。 私は救い主に、どうすれば患者たちを助けられるかと尋ねると、主は「彼らのために祈りなさい」と答えられました。さらに、彼らのために断食すべきかと尋ねると、イエスは「できるなら」と答えられました。それから、午前中にレントゲン撮影を行い、その際に聖水で祝福し、彼女のために祈ったルーマニア人の患者について尋ねました。 私は、彼女の夫が祈りの紙を取り上げられないようにと彼女のために祈りました。というのも、彼女の夫は邪悪で、彼女に何でも禁止していたからです。彼女は奴隷のように痩せ細り、病に蝕まれ、悪魔に苦しめられていました。私は聖母マリアに、彼女を保護してくださるようお願いしました。

私は再び、夫が祈りの紙を取り上げられないようにとイエスに願いかけました。するとイエスは私にこう言われました。「そんなに信頼が足りないのか? 」私はすぐに、もっと信頼を授けてくださるようイエスに祈りました。

礼拝堂での祈りの後、私はとても幸せでした。夜中の1時頃に寝たばかりだったにもかかわらず、疲れさえ感じませんでした。救い主は私に多くの恵みを与えてくださいました。

そして力。

ウェニグという医師がレントゲン室に入ってきました。私との会話の中で、彼は救い主を侮辱しました。私はヴェロニカに、彼の言葉がどういう意味なのか尋ねました。彼女は、彼が神を冒涜したのだと言いました。彼は笑いながらその場を去りました。その直後、私はある声を聞きました。「真珠を豚の前に投げてはならない」。

私は心の中で即座にこう返答した。「救い主よ、彼が豚だとは知らなかったのです」。 私は自分の考えに驚きました。30分後に医師が戻ってきたとき、私は救い主が私に言われたことと、突然頭に浮かんだことを彼に伝えました。彼は顔を真っ赤にして、それは冗談で言ったのだと言いました。私は、神を冗談の種にしてはならないこと、そして私たち二人は共に告解に行かなければならないと答えました。

16時15分頃、私は病院を出て、夫の職場へ迎えに行くことにした。駅を通り過ぎた。ローマークライス方面へ向かう最初の交差点を過ぎたところで、他の車に道を譲らなければならなかったため、私は停車した。停車している間に、黒い車が私の車に衝突してきた。私の車のバンパーはへこんでしまった。私はすぐに、その魂の中にサタンがいるのを感じた。

彼は警察を呼ぶのを拒んだ。私は彼に言った。「あなたは長い間、告解をしていませんね」。彼は「絶対に告解なんてしない」と言った。私は、損害額は少なくとも500ドイツマルクになると伝えた。彼は「200ドイツマルクを払う」と言った。
200を支払うと答えました。私は「それでいい」と言いました。
彼は財布を開けたが、持っていたのは130ドイツマルクだけだった。私はその130ドイツマルクを受け取り、彼にこう言った。「残りは、あなたの回心のために捧げます。」彼は反発し、神など必要ない、自分はうまくやっている、と言った。そしてこう言い返した。「あなた、怖がっているでしょう！」
そこで私は、永遠の世界では彼が恐怖を感じるだろうと告げた。
彼は、死んだらもう何も残らないと答えました。
私は「いいえ、ありますよ」と言い、まだ手に持っていたロザリオを見せながら、彼のために祈ると伝えました。彼は反発し、怒りを込めて「私のために祈る必要はない」と返しました。私は夫を呼びに行き、家に着くまで、その男性のために『悲しみのロザリオ』を祈り続けました。
18時20分、私はロートにある教会へ行き、そこでロザリオを唱え、今日レントゲン撮影をした患者たちのために聖体拝領を捧げました。
今日、漁の収穫が豊かだったのと同様に、悪魔も激しく抵抗してきました。この事故に遭ったその魂は、イエス様にとって重要なものだったのだと思います。ですから、私はこれからもこの男性のために祈り続けます。

1991年5月29日 — 水曜日

教会には行かず、聖体礼儀にも出席しませんでした。礼拝堂で祈りを捧げましたが、聖体礼儀に出席できなかったことを残念に思いました。

1991年5月30日 — 水曜日 — 聖体の祝日

私は赤の服を着て行列に参加した。それはとても素晴らしかった。行列の前に、私は悪の勢力に襲われた。行列の後、私は多くの恵みを受けた。天気は良く、空には雲ひとつなく、行列の間、心を込めて祈ることができた。フォクト神父は、とても素晴らしい式を執り行ってくださった。

1991年6月1日 — 土曜日

午前中、ヴァーグハウゼルの教会へ行った。ミサは、つい最近ヴァーグハウゼルに着任したばかりのラインホルト神父が司式した。変容の儀式の前、ラインホルト神父は私の目を深く見つめ、私も同様に神父を見つめ返した。私は一番前の席に座っていたが、多くの神父は聖体を信徒に最初の席まで運んでくるため、私がひざまずいて聖体拝領できるよう祈っていたのだ。 聖体を信徒のもとへ運んでくれる神父もおり、そうすることで信徒はひざまずいて救い主を受け取ることができるのだ。その数日前、朝のミサに参加していた人たちが教えてくれたところによると、彼は一番前の席まで来てはいなかったそうだ。私は席でひざまずいたまま待っていると、ラインホルト神父がやって来て、私や他の信徒たちに聖体をもたらしてくれた。他の人たちは驚いていた。

1991年6月2日（日）

私は赤のミサに出席し、午後に行われた、ロザリオの祈りが捧げられた後の礼拝にも参加した。
夕方、「主の天使」の祈りの後、私は霊的に聖体拝領を行いました。その後、私は救い主にこう言いました。「手による聖体拝領の問題について明確な答えが得られなければ、私は決して安らぎを得られないでしょう。」救い主と一つになったとき、私は深い平安を感じました。すると突然、声が聞こえてきました。「もし私が何かを言ったら、私を信じるか？」私は答えました。「救い主よ、あなたがそうおっしゃるなら、信じます。」すると主は言われました。「手を差し伸べる者たちからは、私は恵みを取り上げる。」その瞬間、私は息を飲みました。 私はすぐに、私たちの教区のロートで、聖体拝領は跪いて受けるものの、手での拝領をしている人々のことを思い浮かべました。救い主は私にこう言われました。「私はそれを彼らの罪として数える。」その後、私は栄光のロザリオと慈悲のロザリオを祈りました。

1991年6月3日 - 月曜日

職場の礼拝堂で、「主の天使」を唱えました。その後、救い主と心を一つにし、深い平安に包まれました。私は救い主に尋ねました。「ドッハート神父とヴォクト神父に、

ドッハート神父とフォクト神父に、手で聖体を拝領するとあなたが恵みを取り上げると伝えるべきでしょうか？」と尋ねました。すると、「そう、わが娘よ、彼らに伝えなさい。それは重要なことだ」という声が聞こえました。
私は救い主に、「もし彼らが『司教の言うことを聞く』と言ったら、どうすればよいのでしょうか」と尋ねました。すると救い主は、「それなら、彼らが司教の言うことすべてに耳を傾けているのか、と尋ねなさい」とお答えになりました。
午後3時30分、私は職場の同僚ヴェロニカと共に、司祭たちと罪人の回心のために「悲しみのロザリオ」を祈りました。
14時頃、私は救い主と一つになり、霊的に聖体拝領を行いました。私は救い主に、ドチャート神父とのある体験について尋ねました。神父が祝福を与えているとき、私は彼の後ろに、ドチャート神父と同じくらいの身長と体格で、神父と同じように祝福のために両手を伸ばし、明るい光の中に立っている人物を見ました。 最初はよく理解できなかったので、私は二度目の質問をしました。救い主は私にこうおっしゃいました。「それは不浄な霊だったのだ。」私はそれがイエス様だと思っていたのです。救い主は私にこう言われました。「私は司祭たちの心の内にいるのであって、外にはいないのだ。」
ドシャール神父はカリスマ的な人物であるため、私には理解しがたかった。しかし、私は心の中で、おそらく教会が定めている通り、彼が祝福を与えなければならないのだろうと思った。
その後、注射のせいで体調がひどく悪くなってしまった患者さんが来られました。
私は聖水を手に取り、彼女に振りかけ、すぐに彼女と一緒に『アヴェ・マリア』を唱えました。すると、彼女はすぐに気分が良くなりました。その同じ患者さんは、午前中にすでに当院のレントゲン室に来ていました。私は彼女に、神を冒涜していたので、告解に行かなければならないと伝えていました。
19時、私はロートでの聖体礼儀に参列しました。事故に遭い重篤な状態にあるヴェルムート氏のために、聖体拝領を捧げました。
20時、私たちの祈りの集いが始まりました。ドチャート神父も来られ、聖体、すなわち救い主をお持ちくださいました。私たちは聖体礼拝を行いました。膝が痛くて少し辛かったのですが、
膝が痛かったのです。約2時間、途切れることなくひざまずいていたからです。
その後、私は最後にドチャート神父に告解をしました。神父が私に何とおっしゃったのかははっきりとは分かりませんでしたが、その内容が正しいかどうか、救い主に尋ねてみようと心に決めました。

1991年6月4日 — 火曜日

午後、ルーマニアからの患者、モニカ・ゴルチェアさんが私のところへやってきました。彼女はすでに何度かレントゲン検査を受けていました。 私は彼女に一度、聖別された塩を渡した。本来は、彼女が祈る際にその塩を撒くようにと渡したのだが、というのも、彼女は祈っている時にある種の落ち着きのなさを感じる、と語っていたからだ。この塩はゲブハルト・ハイダー神父によって聖別されたもので、神父はその塩に対して癒しの祈りと悪魔祓いの祈りも捧げていた。 彼女は、この塩を頻繁に用いていたことを私に打ち明けてくれました。数日間、聖別された塩を数粒舌の上に載せていたところ、慢性疾患がすぐに治ったのです。EBOクリニックのマラン医師は、なぜ彼女がこれほど早く治ったのか不思議がっていました。
ゴルチェア夫人は、マラン医師がカトリック教徒ではなくイスラム教徒であるため、聖別された塩のことを彼に話す勇気がなかったと私に語りました。 私は彼女に祈りのメモをいくつか渡し、彼女は帰っていきました。モニカ・ゴルチェアさんは信心深い女性で、ルーマニアのクラウゼンブルク市にある大学でドイツ語と英語の講師として働いています。彼女は病気の治療のためにドイツに来ていました。私と別れる際、彼女は嬉しそうな様子でした。また、以前よりも祈るようになったとも話してくれ、私たちは彼女の治癒を神に感謝しました。
夕方、私はロートの聖体礼儀を参列した。

1991年6月5日 - 水曜日

職場の礼拝堂で祈りを捧げました。救い主は、手による聖体拝領について、さらに深い啓示を私に与えてくださいました。そこにはいくつかの要因が関わっています。 私たちは本当に口で聖体を受け、その際はひざまずくべきです。なぜそれが「祭壇の至聖なる秘跡」と呼ばれるのか、自問すべきでしょう。あるいは、司祭叙階はどのような目的で存在するのか、そして私たちのイエス様への愛はどれほど深いのか。神への畏敬の念、そして清らかさ、従順さがいかに重要であるか。
イエスは、聖体拝領の際に手を差し伸べる人々から恵みを取り去られますが、そうした人々に恵みを与えることができないため、イエスはその際に苦しまれています。

イエス様が、手での聖体拝領の際に苦しまれているとおっしゃったとき、私の心も重くなりました。これを司祭たちにどう伝えればよいのか、と自問しました。この件については、たくさん祈らなければならないと思います。
夕方、私はミンゴルスハイムのロクス礼拝堂に行きました。ケルン出身で、
パラグアイで宣教活動を行っている方が、聖体ミサを司式し、説教をされました。説教の際、彼はとても早口で話していました。私はすぐに救い主にこう祈りました。「親愛なるイエス様、彼に愛と平安をお与えください。私たちが知るべきことを説教する力を彼にお与えください。どうか、彼がとてもゆっくり説教できるようにしてください。」
するとすぐに、彼はより穏やかに、愛に満ちた口調で説教を始めました。彼はたちまち変容したのです。聖体拝領の後、私は救い主と深く一つになることができました。
今日、私は救い主に「私は聖人になれるでしょうか? 」と尋ねました。答えは「はい、わが娘よ、あなたは聖人となるでしょう」でした。私は「私はすべてをあなたに捧げました。どうかあなたの望むままに私を形作ってください。あるいは、私が何をすべきか教えてください」と言いました。救い主は「私の言葉を広めなさい」とおっしゃいました。 私は言いました。「はい、そうします。だって、あなたはいつも私と一緒にいてくださるからです。」そして、ロダルベンの本とロダルベンの聖別されたろうそくを、その宣教師に渡すべきかどうか、イエス様に尋ねました。救い主は「はい」とおっしゃいました。聖体拝領の後、私は聖具室にいるその宣教師のところへ行き、約20分間話をしました。彼はとても喜んでいました。
彼は、その日、ヨハネス神父を訪ねていたと語りました。彼から、ヨハネス神父が書籍の資金が必要であるため、多くの司教に手紙を送っていたことを知りました。私は、イエス様がヨハネス神父の書籍は正しくないとおっしゃったことを、その宣教師に伝えました。最後に、宣教師は私に祝福を与え、私の手に口づけをしてくださいました。また彼に会えることを願っています。

1991年6月6日 — 木曜日

私の願いは、パラグアイからの宣教師であるヨゼフ神父の説教をもう一度聞くことでした。そこで、今日もミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で行われる聖体ミサに行きました。素晴らしい説教でした。

1991年6月7日 — 聖心金曜日

ある人から、「重い罪を犯している人々が聖体拝領を受けると、救い主はその人々の心にとどまることができない」と聞いたので、私は救い主に、それについてもっと教えていただけないかと尋ねました。イエスはこう答えられました。「二つの主には仕えることはできない」。 夕方、私はロートで聖体ミサに参加した。その後、私たちはジンズハイム近郊のグロムバッハへ向かった。そこはドチャート神父の教区であり、同神父は聖心金曜日に教会で贖罪の夜を執り行っていた。
告解を待つ間、私は「喜びのロザリオ」を唱えました。祈りの最中、聖母マリアが私にバラの香りを授けてくださいました。数分後、私の祈りのグループに所属するリタ・クノックさんもその香りを感じ取りました。私たちから約2メートル離れた場所には、聖母マリア像が安置されたルルドの洞窟がありました。

1991年6月8日（土）

パラグアイ出身のヨゼフ神父が、私に会いたいと希望されていました。当時、彼はまだミンゴルスハイムで療養中でした。私たちは、土曜日の20時に彼が私を訪ねてくることで合意しました。私たちは約2時間ほど話をしました。私たち二人は、多くの恵みを受けたと実感しました。私たちが出会えたのは、神の導きによるものでした。私は、彼が欲しがっていたゲブハルト・ハイダー神父の聖書を彼に手渡しました。

1991年6月9日 - 日曜日

私はロートでの聖体礼儀に出席した。その後、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂へ向かい、そこで再びヨゼフ神父と会った。 聖体拝領の際、イエスは私に「彼のところへ行き、プラトン司教と話すようにと伝えてほしい」とおっしゃいました。ヨゼフ神父は、彼に電話をかけると約束してくれました。その後、ヨゼフ神父は、聖母マリアと幼子イエスを描いたイコンを私に贈ってくださいました。

1991年6月10日 — 月曜日

19時頃、夫と私は休暇に出発した。約20km走ったところで、夫の体調が急激に悪化し、キャンピングカーを運転できなくなってしまった。私はロザリオを手に取り、自分で運転を引き継いだ。すると夫は眠りについた。2回目のロザリオを唱え始めた頃には、夫の体調は回復していた。 私たちはキャンピングカーで寝ましたが、落ち着かない夜を過ごしました。夫は苦しんでいて、よく眠れず、寝言も言っていました。悪魔は、私たちがゲブハルト・ハイダー神父を訪ねるのを阻止しようとしていたのです。

1991年6月11日 — 火曜日

10時頃、事前の連絡なしにゲブハルト・ハイダー神父のもとを訪れました。私がそこに行くことは重要でした。神父は、配布してほしいと良い本をいくつかくれ、自分の願いのために祈ってほしいと頼まれました。神父はロダルベンに関する本を出版したかったのですが、アンネリーゼ・ヴァフツィクの修道女たちが反対したため、出版できませんでした。

午後には、悲しみの聖母が祀られている巡礼地、メッテンブッフを訪れました。そこはとても美しい場所でした。私はメッテンブッフを訪れるのはこれで3回目でしたが、そこで巡礼地を管理しているアンネマリーさんに会いました。17時30分頃には、私たちはすでにオーストリアに入っていました。 道中、たくさん祈ることができたので、神様に感謝します。メッテンブッフからは多くの恵みが注がれているのを感じました。

1991年6月12日 — 水曜日

チェコスロバキアの町、シンタワに到着しました。そこで、1985年にトゥルゾフカの巡礼地で知り合ったマルクスコヴァー家を訪ねました。トゥルゾフカでは1958年に聖母マリアが現れたのです。

1991年6月13日 — 木曜日

今日、私はメジュゴリエでのカトリック信仰への回心について、スロバキア語で講演を行いました。

1991年6月14日 — 金曜日

午前中、シンタヴァのダニエル神父を訪ねました。ゲブハルト・ハイダー神父の著書を神父に手渡しました。私たちは約1時間ほど話をしました。私は、カトリック信仰への回心や、現在どのように信仰に基づいて生活を送っているかについて話しました。

夕方、私たちはリトマノヴァに到着した。そこは現在、聖母が二人の子供たちに現れている場所だ。到着するとすぐに教会へ行き、その子供たちともすぐに面会した。聖体祭の後、私たちはヤン神父のところへ行き、夫と私はそこで一晩泊めていただいた。初日から、私はその御出現が本物であり、子供たちが嘘をついていないことを確信した。 子供たちも司祭も大きな愛を放っており、彼らが聖霊に導かれていることが感じられます。

夜、私は試練に遭いました。悪魔は、私がこれらの御出現を信じることを思いとどまらせようとしたのです。ある少女の御出現者を夢に見ました。彼女は大きな犬歯をむき出しにして私の前に立っており、私は彼女を恐れました。

しかし、私は悪魔の所業とその狡猾さを知っている。悪魔は、私が御出現者たちに嫌悪感を抱くように、私に何かを装って見せかけたのだ。だが、その企みは成功しなかった。

1991年6月15日 — 土曜日

ヤン神父のもとでは、まるで自分の家のようにくつろぐことができました。まるで100年も前から彼を知っているかのようでした。これほど愛に満ちた魂に出会うことはめったにありません。まさに神からの贈り物です。

朝、私たちは皆でラテン語でロザリオを唱えました。

11時に、司教から派遣された調査委員会が、一連の出来事を検証するために来る予定だった。ヤン神父の姉妹が昼食の準備をしている間、私はすでに隣の部屋にいた調査委員会のために、聖霊のロザリオを祈った。

さらに、聖母の悲しみのロザリオ、聖母の連祷、イエスの連祷、そして尊い御血に捧げる「主の祈り」を5回唱えました。
すでに13時になっていたが、子供たちはまだ調査委員会のところにいた。二人の司祭が、他の調査員たちよりずっと早くリトマノヴァに到着していた。私は彼らと、自分の回心と人生について1時間近く話した。また、メジュゴリエで体験させていただいた聖母の御出現についても話した。 二人の司祭のうちの一人は涙を流していました。委員会には精神科医も同席していました。午後、私はその方と話をしました。彼はとても親切で、聖書にも精通していました。その後、私は二人の御出現体験者であるカタリナとイヴェタに会い、彼らに「主の祈り」、「アヴェ・マリア」、そして「栄光あれ」を教えました。二人はどちらも、ラテン語の祈りをあっという間に覚えました。

1991年6月16日 - 日曜日

今日はヤン・ザヴァツキー神父のために料理を作りました。午前7時30分にミサに参加しました。ヤン神父の説教はとても素晴らしかったです。 午後、私たちは「マイダン」という名の御出現の場所へ行きました。そこには数千人の巡礼者が集まっており、御出現を体験した子供たちがロザリオの祈りを先導してくれました。夕方、ブラチスラヴァから来た女性が、リトマノヴァでの御出現に関する映画を上映してくれました。その後、約40km離れた場所に住むヤン神父のお母様を訪ねました。

1991年6月17日（月）

ヤン神父と共に、ホヘ・タトレ山脈へ小旅行に出かけました。
夕方の聖体祭の後、多くの人々がヤン神父の家に集まり、私は自分がどのようにして信仰に導かれたかを話しました。話している間、聖霊が私に啓示を与えてくださり、ヤン神父は翌日の説教でその内容を多く取り入れてくださいました。
神は私たちに、美しく楽しい夜を授けてくださいました。

1991年6月18日 - 火曜日

夕方7時、私たちはリトマノヴァでの聖体礼儀に出席しました。聖体拝領の後、私は救い主に、ヤン神父に何か伝えるべきかどうか尋ねました。
イエスはスロバキア語でこう答えられました。「Povedz mu, že ho ľúbim。」これはドイツ語で「彼に、私が彼を愛していると伝えてくれ」という意味です。 聖体拝領の後、私はそれをヤン神父に伝えました。ヤン神父は微笑みました。午後4時頃、私はクラクフにある、ファウスティナ修道女が暮らしていた修道院を訪れました。そこに掲げられている「イエス様、私はあなたを信頼します」という絵は、とても美しく生き生きとしていて、私はそこで30分ほど泣きながら、その前で祈りを捧げました。 16時45分頃、ドイツから来たマリア・ルース修道女と知り合いました。彼女は、メッテンブッフの礼拝堂に掲げられている絵を自分が描いたのだと教えてくれました。そして、私に慈悲のロザリオをプレゼントしてくれました。マリア・ルース修道女のことをもっとよく知るようになりましたが、彼女は偽りの謙遜さを備えています。私が心の中で祈っている最中に、何度も邪魔をしてきました。

1991年6月19日 — 水曜日

今日はアウシュヴィッツに行きました。同日、チェンストホヴァにある「ポーランドの女王」の聖堂にも足を運びました。

1991年6月20日 — 木曜日

午後、15時30分頃、トシェンストフの「黒い聖母」の絵の前にあるカーテンが開き、トロンボーン合唱団の演奏が響き渡った後、私たちは夕方にHl.ミサに参加しました。夜22時30分頃、散歩中にワルシャワから来た、宿泊先もお金もない老婦人に遭遇しました。 私たちは彼女のために巡礼者宿の宿泊費を支払い、その後、旅を続けました。

1991年6月21日 — 金曜日

夕方、チェコスロバキアのトゥルゾフカに到着した。私たちはすぐに教会へ向かった。聖ミサの後、予言者ラトゥス・マトゥス氏が、隣人の庭に一晩泊まる場所を用意してくれた。

1991年6月22日 — 土曜日

私たちは、トゥルゾフカの地区であるヴィシアで早朝のミサに参加した。そこから、御出現の場所へと続く道が上へと続いている。バラシュという名の若い司祭が聖なるミサを執り行った。彼の説教はとても素晴らしかった。 参列者が非常に多く、礼拝堂には収まりきらなかったため、ミサは野外で行われました。聖体拝領の後、私は救い主に、トゥルゾフカのどこに教会を建てるべきか尋ねました。リトマノヴァの子供たちが、聖母マリアがそれを望んでおられると伝えていたからです。救い主は私にこう答えられました。「トゥ」。
救い主は再びスロバキア語で話されました。「Tu」とは、ここでは「そこ」という意味です。
その直後、私はそのことを司祭のミハイル・バラシュ神父に伝えました。神父は、すでに二つの教会が建てられたが、残念ながら間違った場所に建てられてしまったと教えてくれました。
午後、私は御出現の現場で、大勢の人々の前で、自分の回心とリトマノヴァについて語りました。
約1時間半後、3台の観光バスから降りてきた人々の前で、私の回心とリトマノヴァについて話すよう求められました。そのうちの1人は、山の上で私が話しているのをすでに聞いていたのです。
その夜、私たちは再びリトマノヴァに戻り、ヤン神父のもとを訪れました。

1991年6月23日 — 日曜日

リトマノヴァで早朝のミサに出席しました。午後には御出現の山を訪れ、祈りを捧げました。

1991年6月24日 — 月曜日 — 聖ヨハネの日

午前中、私はミサに出席しました。午後には、出現の丘で数百人の人々の前で話しました。ヤン神父と夫、そして他の3人の女性たちと一緒に郊外へ出かけて、バーベキューを楽しみました。
その後、羊飼いの家を訪れ、羊のチーズを購入しました。夕方になると再び大勢の人が集まり、私は自分の回心と、現在の信仰生活について語りました。この日は、ユーゴスラビアのメジュゴリエで聖母マリアが現れてから、ちょうど10年目の記念日でもありました。

1991年6月25日 — 火曜日

シンタワに戻り、教会を訪れました。夕方、私が講演を行い、ここでも多くの人が集まりました。

1991年6月26日 — 水曜日

私たちはシンタワのダニエル神父のもとを訪れ、食料品と少額の金銭を差し上げました。早朝、教会が改修中だったため、教会の前でミサが執り行われました。ミサが終わるとすぐに、まもなく初ミサを控えているヨズコに招かれました。彼とは約2時間、語り合い、共に祈りました。
午後、彼は私たちに同行して礼拝堂を訪れました。そこで再び祈りを捧げました。夕方、また人々が集まり、私は再び自分の信仰について語りました。

1991年6月27日 — 木曜日

オーストリア

1991年6月28日 — 金曜日

夕方、私たちは再びロートの自宅に戻りました。

1991年6月30日 — 日曜日

私たちはロートで聖体祭に参加した。私はポーランド人の司祭、スタニスラフ神父を、私たちと一緒にロダルベンへ行くよう招待した。

1991年7月1日 — 月曜日

今日はロダルベンで、聖なる尊い御血の崇敬が行われた。

午前中、私はロートで聖体ミサに出席した。12時30分頃、ドチャート神父が昼食にやって来た。パラグアイ出身のヨゼフ神父も来て、一緒に食事をした。2人の神父と、さらに20人もの人々が私たちと一緒にロダルベンへ同行してくれたことは、私にとって大きな驚きだった。

1991年7月5日 — 聖心金曜日

私はグロムバッハでの贖罪の夜に参加し、そこで告解をしました。終わってからはとても悲しくなりました。4人の司祭が同席していたにもかかわらず、ドチャート神父は後方へ行き、

聖体拝領を立ちながら配りました。後ろには8人から10人ほどしかいなかったにもかかわらずです。それは私にとって、まるで頬を叩かれたような衝撃でした。聖体拝領の際、私は床にひざまずきました。しかし、支えや助けがなければ床にひざまずくことのできない人々のことを考えました。「聖体拝領用のベンチは一体何のためにあるのだろう」と自問しました。人々に非はありません。司祭に忍耐が欠けていただけで、ただすべてを早く済ませたかっただけなのです。聖体拝領の後、私はイエス様に、それが正しいことだったのかと尋ねました。

イエスはかなり厳しい口調で、**「それは正しくはなかった」**とお答えになりました。

1991年7月8日 - 月曜日

午後、私は救い主に、アンネリーゼ・ヴァフツィグの修道女たち（3人全員）が私に送ってきた手紙について尋ねました。その手紙の中で、3人の修道女たちは、ロダルベンに関する本が出版されないよう強く反対していました。その理由として、3人の修道女たちは、アンネリーゼ・ヴァフツィグが最終的にモルヒネ中毒になってしまったことを挙げていました。 イエスは、ゲブハルト神父が私に何を言うか、よく聞くようにと答えられた。だから、私は再びレーゲンスブルクへ行き、ゲブハルト神父に会わなければならない。

1991年7月9日 — 火曜日

職場の礼拝堂で祈りました。私はイエス様に、もし私の立場だったら祈りの部屋を建ててくれるかと尋ねました。イエス様は「はい」とおっしゃいました。

私はイエス様に、自分にはお金がないと伝えました。イエス様は私に、「その願いについて祈りなさい」とおっしゃいました。

私は多くの恵みを受け、イエス様に感謝しました。

午前中、同僚のヴェロニカが倒れてしまった。現在、彼女は神経内科の救急外来に入院している。

1991年7月10日 — 水曜日

礼拝堂で祈りましたが、今日のミサには出席しませんでした。

1991年7月11日 — 木曜日

私は赤い服を着て聖体礼儀に出席しました。16時30分には、シュティフト・ノイブルク修道院で告解を受けました。年配の神父が私の告解を聞いてくださいました。私は満足できませんでした。

その神父は、口での聖体拝領を行う人々について非常に否定的な発言をした。

彼はそれを「美観を損なう」と指摘し、さらに「口臭がする人もいる」と付け加えた。私は「イエスは弟子たちの足を洗われた」と彼に言ったが、彼は「弟子たちも互いに足を洗い合っていた」と返答した。その後、私は「イエスは弟子たちの足を洗うことに嫌悪感を抱かなかった」とも述べたが、この神父のもとにはもう行かないと決心した。

23時、ベルントが妻と共にラーデンブルクからやって来た。彼は私に、マリア・アグレダの著書5冊を持ってきてくれた。

1991年7月13日 — 土曜日

夫と私はレーゲンスブルクへ行き、ゲブハルト・ハイダー神父を訪ねた。

1991年7月14日 — 日曜日

10時、カルメル会修道院で聖ミサに参列した。11時30分から17時まで、ゲブハルト神父と昼を共にした。この神父は私にとって、生けるイエスそのものである。彼からは良いことしか学べない。 彼と共に過ごせたことを神に感謝します。最後に、彼は私たちに祝福を授け、私たちのキャンピングカーや、聖別のために持参した塩、水、ロザリオ、聖画などを祝福してくださいました。
神父様は、ラテン語で古来の祝福の祈りと悪魔祓いの儀式を用いて、それらの品々を素晴らしく聖別してくださいました。帰宅の道中、私たちはさらに多くの祈りを捧げました。

1991年7月15日（月）

私はフリドリンと一緒にマイシュの教会に行きました。聖体拝領の後、私はロダルベンと尊い御血に関する本について、救い主に尋ねました。イエスは私にこう答えられました。「そう、わが娘よ、その本は書かれるべきだ」。ゲブハルト神父もアンネリーゼ・ヴァフツィグの三人の姉妹から手紙を受け取っていたため、私はこの件について依然として深く心を悩ませていました。 私はすぐに、ロダルベン出身のフリドリンにもそのことをすべて話した。
夕方、救い主は再び私たちの祈りの集いに来てくださいました。多くの人が祈りに集まりました。ドチャート神父が告解を執り行いました。私たちは救い主を礼拝しました。
とても素晴らしい時間でした。この大きな恵みに神に感謝します。私は夜中の3時
に就寝しました。

1991年7月16日 - 火曜日

遅くまで起きていたにもかかわらず、元気で幸せな気分だったことから、多くの恵みを受けたのだと実感した。同僚のヴェロニカはまだ病気だったため、レントゲン撮影はすべて私一人でこなさなければならなかった。

1991年7月17日 - 水曜日

ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂でミサに参加した。そこで告解もした。

1991年7月18日 — 木曜日

フリドリンから電話があり、ユーゴスラビアで戦争が起きている今、メジュゴリエに行くべきかどうか、そしてルクセンブルクのクロードも同行するかどうかを、救い主に尋ねてほしいと頼まれました。午後、礼拝堂で私はイエス様にそのことを尋ねました。イエス様は私にこうおっしゃいました。「行けばよい。ルクセンブルクのクロードは同行しないだろう」。

19.07.91 - 金曜日

フリドリンから再び電話があり、救い主が何とおっしゃったのか知りたがっていました。私は彼にそのことを伝えました。

1991年7月20日 - 土曜日

ちょうどここに遊びに来ていた姪のために仕事を探すため、私たちはハイデルベルクへ向かいました。彼女はキッチンアシスタントの仕事に就くことができました。

1991年7月21日 - 日曜日

私はロートで開催されたHIのミサに参加し、13時に教会でのロザリオの祈りと礼拝に出席した。午後、夫と私は小旅行に出かけ、ネッカー川を船で巡り、散歩を楽しんだ。とても素敵だった。夫もとても気に入っていた。

1991年7月22日 - 月曜日

ロートの教会に行きました。フォクト神父がマグダラのマリアについて説教されました。マグダラのマリアが娼婦だったと語られたとき、私は大きな衝撃を受け、心に痛みを感じました。私はその痛みを、すぐに罪人の回心のために捧げました。その発言は私を深く傷つけました。なぜなら、それは真実ではないと感じたからです。

聖体拝領の後、私は救い主に尋ねました。「マリア・マグダレナは何者だったのですか？」イエスは答えました。「彼女は罪人だった」。さらに私は救い主に、なぜフォクト神父がそのようなことを言ったのかと尋ねました。
イエスはこう答えられました。「彼にはその方が気に入ったからだ」。
20時、再び祈りの集いがありました。私はヴォクト神父のためにたくさん祈りました。今日の祈りの集いは少し長めでしたが、とても素晴らしい時間でした。

1991年7月23日 - 火曜日

18時頃、フリドリンから電話があり、クロードはメジュゴリエへ同行しないとのことでした。フリドリンによると、クロードは戦争のせいでユーゴスラビアへ行くのを恐れているそうです。話をしているうちに、フリドリン自身も恐れていることに気づきました。彼はメジュゴリエへ行くことさえ躊躇していました。 私は彼にこう言いました。「信仰の薄い人たちよ、イエスが『行け』とおっしゃったのに、どうして恐れることができるのか？」
夕方、私はロートで聖体拝領のミサに出席した。聖体拝領の後、私は救い主に、ヴォクト神父と「手による聖体拝領」や「マグダラのマリア」について話すべきかどうか尋ねた。救い主は私にこう言われた。「はい、土曜日に」。

1991年7月24日 - 水曜日

その日、すでに数回のロザリオを祈った後、職場の礼拝堂で救い主と心を一つにしました。 もし土曜日にフォクト神父と手による聖体拝領について話せば、神父の考えは変わるだろうか、と私は尋ねました。イエスは、神父は変わらないだろうとおっしゃいました。それなら、神父と話す必要など全くない、と私はイエスに言いました。しかし、イエスはこう答えられました。「いいえ。神父が言う通りにしなさい。」
ヴォクト神父がイエスの言うことを行わないのに、その神父の言うことを行うのは簡単ではないだろうと思いました。
それでも私はイエスに、「そうします」と言いました。
その後、私は救い主に、息子は司祭になるべきか、それとも結婚すべきか尋ねました。イエスはこう答えられました。「そう、彼は司祭になるべきだ。」
それは私にとって簡単なことではありませんでした。なぜなら、息子が司祭になりたくないと思っていることを知っていたからです。
その後、私は救い主に、息子にそのことを伝えるべきかと尋ねました。するとイエスは、「いいえ、私が彼に啓示を与える。彼は自らそれを悟るだろう」とお答えになりました。
今、私は息子のためにたくさん祈らなければならないと分かっています。わが主、わが神よ、息子が司祭になるべきだと知ることができたことを感謝します。
主よ、御心が行われますように。
はい、主よ、彼は私の唯一の息子ですが、それでも私のものではありません。私たち二人はともにあなたのものであるからです。

1991年7月25日 — 木曜日

私はロートの教会で聖体拝領のミサに出席しました。聖体拝領の後、私はイエス様に、いつヴォクト神父のもとへ行くべきか尋ねました。イエス様は「土曜日」とおっしゃいました。

1991年7月26日 — 金曜日

ロートの聖体礼儀の後、私はフォクト神父に、土曜日に話をしてもよいか尋ねました。神父は承諾し、土曜日の16時に会う約束をしました。

1991年7月27日 — 土曜日

午前7時15分、私は姪を連れてヴァーグハウゼルで聖体礼儀に参列した。変容の瞬間、司祭と教会が薄暗がりに包まれているのを見たが、完全に暗いわけではなかった。聖体拝領の際、私はイエス様に「あなたは私と共におられる」と語った。
皆は聖体の拝領の際に立っていた。私は床にひざまずいた。神父は私に聖体を与えるのをためらっていた。まるでサタンが彼の手を引き戻しているかのように、神父は震えていた。ミサの後、私は聖櫃の前でひざまずき、この神父のために祈った。それから誰かに神父の名前を尋ねると、フロリン神父だとわかった。

そこには私の祈りのグループの女性たちもいて、彼女たちには私の願いのために祈ってほしいと頼み、今日ヴォクト神父と面談することになると伝えました。
さらに、ヴェッター夫人と姪にも、16時から
17時の間に私の願いのために祈ってくれるよう頼みました。
16時にフォクト神父のもとを訪れると、神父は親しげに迎えてくださり、私たちは約50分間話し合いました。口と手による聖体拝領や、マグダラのマリアについて話し合いました。私は、マグダラのマリアは娼婦ではなく、罪人だったのだと神父に伝えました。
17時45分から22時30分まで、スロバキア人のニコルとアドリアナという二人の女性が訪ねてきました。
私は神のことや、自分の回心について話しました。その後、リトマノヴァ（チェコスロバキア）での聖母マリアのメッセージを読み合わせました。私は彼女たちにロザリオの祈り方を教えました。
その後、ドイツ在住のユーゴスラビア出身の女性2人が訪ねてきました。

1991年7月28日 — 日曜日

ロートで聖体礼儀に参列しました。姪のジャクリーナと一緒にロザリオを1回唱えました。森を散歩している間にも、さらに2回ロザリオを唱えました。

1991年7月29日 — 月曜日

20時より祈りの集い。ドチャート神父も来られました。

1991年8月12日 — 月曜日

ここ数日、今晩の祈りの集いに聖母が多くの祈る人々を送ってくださるよう、ほぼ毎日祈っていました。 聖母は私を失望させませんでした。これまで一度もです。それどころか、マルシェンベルクの礼拝堂で、ドチャート神父が同じく夜8時にミサを捧げましたが、参列者はわずかでした。ドチャート神父は、そのために別の日時を選んだほうがよかったでしょう。
その日、私たちの祈りの会では、リトマノヴァで聖母マリアが与えられたメッセージを読み上げました。

1991年8月19日 — 月曜日

昨日、ドチャート神父から電話があり、今日来てもよいかと尋ねてきた。その2日前、私はマンハイムからブラーン神父の訪問を受けていた。彼はヨハネス神父からの挨拶を伝えてくれた。私はブラーン神父が正直ではないことに気づき、警戒心を抱いた。 彼には気に入らない点がいくつかあった。例えば、彼は手での聖体拝領を好んでおり、そうすると彼が司祭であることがわからない。十字架も身につけておらず、司祭服も着ておらず、他の目印も何もない。まるでヨハネス神父に探偵として送り込まれたかのようだった。また、彼が傲慢であることも感じ取った。彼はこう言った。「聖体変容の際、司祭ほど大きな力を持つ者はいない」。 私は彼にこう答えました。「ええ、その通りです。しかし、司祭ほど大きな責任を負っている者もいません」。私がそう言うと、彼はあまり快く思わなかったようでした。
その月曜日の夕方、ドシャール神父は祈りの集会で、手での聖体拝領も口での聖体拝領と同じくらい謙虚なものだと語った。それは私にとって、まるで頬を平手打ちされたかのようで、とても胸が痛んだ。

1991年8月20日 - 火曜日

イングリッド・バウアーさんは11日間、私たちの家に滞在していました。今日、夫が彼女をピルマンセンスまで車で送り届けました。彼女はここを無料で利用し、信仰を深めたいと願っていました。

1991年8月21日 — 水曜日

私は試練に襲われました。サタンは、私に語りかけているのはイエスではなく悪魔だと囁こうとしました。8月14日と19日に告解をしたにもかかわらず、誘惑は繰り返し訪れました。
初聖体式の後、私はイエス様にこうお願いしました。「どうか私を導いてください。サタンが私に語りかけてきたら、教えてください。もっと用心しますから。」

その言葉を口にした途端、イエス様が私にこうおっしゃいました。「私はあなたに話しかけていたのだ。」私がそう尋ねたのは、ヴォクト神父が、数週間前に私がイエス様の言葉を誤解していたと指摘されたからでもあります。イエス様が私に話しかけておられ、悪魔ではないというこの確信を得られたことを、神様に感謝します。

1991年8月23日 - 金曜日

ミサの後、夫と私は車を出発させました。ベルギーのシュヴルモンへ向かうつもりでした。

1991年8月24日 — 土曜日

私たちはバノーにある「貧しい人々の母」の聖堂を訪れました。

1991年8月25日 — 日曜日

シュヴルモンでは、毎年「小さな魂たちの国際集会」が開催されています。
聖ミサの直前に、私は告解に行きました。軽罪を清め、完全に清らかな心になりたいと思ったからです。ロザリオの祈りの最中、クロアチア語で、すべての巡礼者の前で先導して祈るよう促す声が聞こえました。 昨年ルルドでそうだったように、ロザリオを一連唱えることでした。もしそれが神の御心であり、聖母がそう望まれるのであれば、私も先導して祈ろうと思いました。午後3時頃、ついに私の番が回ってきました。私は聖母とイエス様に、私と共に祈ってくださるよう招き、救い主が私と共にいてくださるよう願いました。
私は心から、そしてはっきりと、非常に熱心に先導の祈りを捧げました。何千人もの人々の前で祈ることにも、全く恐れを感じませんでした。それどころか、かつてないほどの力を祈りの中に感じました。神様と聖母マリアに、私がお二人に抱いている信頼に感謝します。

1991年8月26日 — 月曜日

午前中、トーマス・ヘンツェという男性のレントゲン撮影を行いました。彼は誰かに殴られ、ホームレスで怪我をしていました。医師たちは彼を診察した後、病気であるとして帰しました。
私は彼に、健康を取り戻すまで私の家に住んでもいいと伝えました。この患者の中に、苦しみ、無力なイエスの姿を見出したのです。私は夫に電話し、ホームレスの人を家に連れて帰るつもりだと伝えました。夫はかなり腹を立てました。しかし、私はその件について事前に礼拝堂で祈っていたため、夫も神の御心に従わざるを得ませんでした。
私がこうするのは、イエスとマリアへの深い愛からです。心からイエスを愛するならば、他の人々も愛することになると信じているからです。
16時頃、トーマスという患者さんがやってきました。私は彼を家に連れて帰りました。車の中では、悲しみのロザリオを唱えました。トーマスから漂う臭いは耐え難いほどでした。ひどく悪臭を放っていました。家に着くと、彼のために清潔な服と靴を用意し、それから彼はシャワーを浴びました。夕食には、グーラッシュにライスとサラダを出しました。私たちのゲストは、とてもたくさん食べました。
食事の後、彼に庭の水やりを頼んで、私は教会へ向かいました。聖体拝領を彼のために捧げました。
トーマスは夕方、祈りの集まりにも参加し、一緒に祈りを捧げました。
ドチャート神父が今日、小さな聖体台を持ってきてくれました。次回は聖盤も持ってきてくれることを願っています。そうすれば、救い主が床に落ちることもなくなるでしょう。あの出来事は私にとってとても胸が痛むものでした。ドチャート神父は、次回は聖盤も持ってくることを約束してくれました。

1991年8月27日 — 火曜日

患者のトーマスを再び病院へ連れて行き、彼の鼻の整復手術が行われました。

1991年8月28日 — 水曜日

エマーツグルントのアドリアーネと一緒にミンゴルスハイムのロクス礼拝堂に行き、そこで告解をしました。

1991年8月29日 - 木曜日

甥のラトコと一緒に、ロートの教会へ行った。

1991年8月30日 — 金曜日

ラトコの就職活動を手伝い、彼と一緒にロートの教会へ再び行った。彼は私と一緒にロザリオを祈った。

1991年8月31日 - 土曜日

朝、ヤクリーナと一緒にヴァーグハウゼルの教会に行った。その後、グローブスで買い物をした。午後、エーリッヒが「十字架の道の第11の stations」を描いた絵を持ってきてくれた。

1991年9月1日 — 日曜日

ロートでミサに参加した。

1991年9月2日 - 月曜日

病院の礼拝堂で、昨日ヨハネス神父と交わした会話について、救い主に尋ねた。ヨハネス神父は、プラトン司教が何を言ったのか知りたがっていた。

しかし、私はプラトン・ゴルニリアク司教との会話については何も明かしませんでした。

ヨハネス・オルティンスキー神父は、おそらく自身の著書について良心の呵責を感じていたのだろう。救い主は礼拝堂で、私が正しく行動したと告げてくださった。

デオ・グラティアス。

夕方の祈りの集い：ドチャート神父が聖体拝領を執り行い、初めて聖体台と聖体皿が用いられた。私は、皆がとりわけ幸せそうで、恵みを受けていることに気づいた。

1991年9月6日 — 聖心金曜日

夕方、グロムバッハで行われた贖罪の夜会に参加した。聖体祭の後、

救い主を礼拝した。私は聖体顕示台を見つめ、激しく泣いた。『ビルドポスト』紙には、ラツィンガー司教が「メジュゴリエは超自然的ではない」と述べた、と書かれていたからだ。

私は約15分間泣き続けました。

すると、イエスが私に語りかけました。その内なる声は、かつてないほど明瞭で鮮明でした。

イエスはこう言われた。「私の十字架を見なさい。」その十字架は祭壇と聖体顕示台の真上に掲げられていた。私は十字架を見つめると、さらにこう聞こえてきた。「彼らは私を信じたか？」

その瞬間、私は泣き止みました。

イエス様が私の涙を拭ってくださったのだと思います。私にとって、これはメジュゴリエが本物であることの確証でした。ただ、教会だけがそれを信じようとしないのです。

9月の第1週、私はチェコスロバキアのリトマノヴァについて救い主に尋ね、こう答えられた。「チェコスロバキアでの御出現は超自然的なものである」。

そこで私は、「つまり、子供たちは嘘をついていないのですね」と答えました。それから、病院の礼拝堂へ行き、もう一度尋ねました。なぜなら、幻視者の一人であるイヴェトカの、虚ろな目が記憶に残っており、その目が私の心を重くしていたからです。私は救い主に、悪魔もまたそのような視線を引き起こすことができるのかと尋ねました。救い主は「はい」とおっしゃいました。

そして、主は繰り返されました。「その御出現は超自然的なものである。」

私はまだそのことをあまり理解できていませんでした。それについて言えるのは、聖パウロが言ったことだけです。「すべてを試み、良いものを保ちなさい。」

1991年9月12日 — 木曜日

私はノイブルク修道院で告解をしました。司祭は、贖罪として、救い主に私を見てもらうようにと命じました。これまでどの司祭も私にそ

う言ったことはなく、救い主が私を見てくださるということに、私は幸せを感じました。

1991年9月13日 - 金曜日

ロートでの前夜ミサ。「フーベルトゥスミサ」のために、教会はモミの木で飾られていた。私はそれが気に入らなかった。まるでクリスマスのようで、場違いに思えたからだ。

1991年9月14日 - 土曜日

マルシェンベルクでの聖体礼儀に出席した。普段、寝室の私のベッドの横に置かれている私の十字架が、教会に運ばれた。
ミサは若者たちによって執り行われた。しかし、敬虔さが欠けていた。伝統を守り、教会を劇場のようにしてはいけない。

1991年9月16日 - 月曜日

病院の礼拝堂に行きました。夕方、ロートでの聖体礼儀に出席しました。その後、祈りの集いがあり、ドチャート神父も来られていました。

1991年10月

長い間探していた日記をようやく見つけました。
元主任司祭のケステル神父の葬儀には、多くの人々、そして多くの司祭も参列していた。その場では、神よりもケステル神父の方がより称えられているような印象を受けた。 司祭たちは、聖体拝領台があったにもかかわらず、信者たちに立って聖体拝領を受けるよう強く促した。私が聖体を拝領したとき、私は床にひざまずいた。 多くの不浄な霊の存在を感じ、もし許されるなら、彼らは私を引き裂いてしまいたいと願っていることに気づきました。聖体拝領の後、イエスと一つになったとき、私は救い主にこう言いました。「今、これほど多くの司祭がいるにもかかわらず、彼らは人々に立ったまま聖体拝領をさせています。」すると、こう聞こえてきました。「そのままひざまずきなさい、わが娘よ。」そのとき、多くのことがはっきりと理解できました。
数日後、私はそのことをフォクト牧師に伝えました。フォクト牧師は、これは私だけに当てはまることであり、他の人には当てはまらないと述べました。

1991年11月23日

ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で聖体ミサに参加した。そこで、ある宣教師に告解をした。

1991年11月25日 - 月曜日 - 聖カタリナの日

私はロートで聖体拝領のミサに参加しました。聖体拝領後のイエスとの交わりの際、イエスは私にこう言われました。**「祈りなさい、たくさん祈りなさい、私の娘よ。ロシアから戦争がやってくる！」**
最初はとても驚きましたが、その後、涙がこぼれました。私は、ヴォクト神父のところへ行くべきかと尋ねました。イエスは「いいえ、彼はあなたを信じないだろう」とおっしゃいました。そこで私は、祈りの集まりでこのことを話すべきかとさらに尋ねました。イエスは「そうしなさい」とお答えになりました。
祈りの会には司祭も同席していたので、私は不思議に思いました。私は心の深い痛みを抱えて教会を後にし、激しく泣きました。
教会の外では、リタとピマセンス出身の他の二人の女性が、祈りの会に参加するために私を待っていました。
祈りの集会でそのことを話す前に、私はドチャート神父に祝福をお願いした。ドチャート神父は救い主像を持ってきてくださり、私たちはそれを拝んだ。しかし、私は救い主の言葉をどうしても頭から離れず、泣きじゃくってしまった。

1991年11月26日 - 火曜日

私はずっと戦争のことを考えていて、救い主にそれがいつになるのか尋ねた。救い主は**「もうすぐだ」**とおっしゃった。

1991年11月27日 - 水曜日

私は救い主に、この言葉は私だけにとって重要なものなのかと尋ねました。救い主は**「皆に伝えなさい！」**とおっしゃいました。

1991年11月29日 - 金曜日

職場の礼拝堂で。確かめたくて、もう一度戦争について尋ねた。再びこう聞こえた。**「ロシアに戦争がやってくる。」**

1991年12月2日 - 月曜日

11時15分、病院の礼拝堂にて。再び聖櫃の前にひざまずくことができて嬉しかった。心の中で交わり、救い主に、私と話すとき、どこにおられるのか尋ねた。イエスはこう答えられた。**「心の奥底に。」**

さらに、私が主の声を聞いていることを他の人にどう説明すればよいかと尋ねた。イエスは言われた

。「それは超自然的なことだ。そうでなければ、私からのものではないだろう。」私はさらに、自分

が催眠状態にある可能性はないかと尋ねた。

イエスはこう言われました。「私の心と一つになる者は、催眠状態になることはできない。」

私はユーゴスラビアでの戦争や、予言者イヴァンとヤコフが海外へ旅立ったことを思い浮かべました。これから起こるであろう戦争のために、私もドイツを離れるべきかと尋ねました。しかし、イエスはこう言われました。「私は臆病者は好きではない。」

すると、イギリス軍と戦い、フランスを解放した聖ジャンヌ・ダルクが頭に浮かびました。私はイエス様に、息子のことを話しました。息子は、ロシアから戦争がやってくるとは想像もできないと言っていました。イエス様は私にこう言われました。「彼は至急、告解に行くべきだ。」

夕方、祈りの集まりでロザリオの第3連を唱えた後、いつものように数分間の黙想の時間を持ち、皆が心から祈り、他者のために祈ることができるようしました。私は救い主に、祈りの集まりの皆に何か伝えるべきことがあるかと尋ねました。

イエスはこう言われました。「皆に、私が彼らを愛していると伝えてください。」

祈りの集会で救い主の声を聞いたのは、これが初めてのことでした。

1991年12月3日 - 火曜日

病院の礼拝堂で、私はイエスの声を聞きました。

「私の言葉に耳を傾けなさい、わが娘よ。祈りなさい、たくさん祈りなさい。」

夕方、ロートの教会で聖体拝領の最中にレコードの音楽が流れており、その音楽が邪魔で、私は救い主に向かって心を開くことができませんでした。

1991年12月4日 — 水曜日

病院の医師室で、10時45分頃のこと：私は救い主と一つになり、その声を聞いた。「あなたは私のしもべだ。私が言うことは何でも行いなさい。私を深く信頼しなさい。

揺るぎなくありなさい。君の残された人生は短い。私は君を私のもとへ迎え入れる。その証拠こそが、君の信仰である」。

それを書き留めた後、私は救い主に、正しく書き留められたかどうか尋ねた。イエスはこう答えた。「そうだ、わが娘よ」。

夕方：私は毎日、フォクト神父と彼の悟りのために祈りを重ね、イエス様にフォクト神父と話す許可をくださいと願いました。イエス様は「行きなさい」とおっしゃいました。

18時から18時45分まで、私はフォクト牧師と話をしました。その会話の後、フォクト牧師は私に、私を称賛していること、そしてこのまま続けていくべきだと伝えてくれました。

私が「イエスの『その証拠はあなたの信仰である』という言葉は、どういう意味なのか」と尋ねると、彼は「すべてを理解しなければならないのか？」と答えました。

1991年12月5日 — 木曜日

午前9時、私は救い主に、フォクト牧師が言ったように、本当にすべてを理解する必要はないのかと尋ねました。救い主はこう言われました。「そう、すべてを理解する必要はない。すべては時が来れば分かる。理解できないことは、私に委ねなさい」。

さらに私は、ロシアからの戦争に関する警告を『Bild am Sonntag』の編集長に送るべきかどうか、救い主に尋ねた。

救い主は、今日中にそれを済ませるべきだと答えられた。

1991年12月6日 - 金曜日

私は8時25分頃、病院の礼拝堂に行き、その手紙が掲載されるよう祈りました。祈りの最中、私は救い主に、その手紙が良かったかどうか尋ねました。答えは、「あなたの手紙は良いものだ」でした。私は恵みを受け、救い主を愛しているという喜びのあまり涙を流しました。救い主はそれについて、「私はあなたをとても愛している。平安のうちに去りなさい」とおっしゃいました。

夕方、ロートの教会で、私は救い主に、どうすれば戦争を回避できるかと尋ねました。救い主はこう答えられました。「断食と祈りによってのみだ」。

また、私は救い主に、なぜ私のような罪人にわざわざ語りかけてくださるのかと尋ねました。救い主はこう答えられました。「誰もが罪人なのだ」。

それでもなお、なぜ私に語りかけてくださるのかと自問していると、その声が聞こえました。「私は、自分の望むところに立ち寄るのだ」。

1991年12月7日 — 土曜日

早朝、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で聖体拝領のミサに出席した。聖体拝領の後、救い主は私にこう言われた。「宣教師と話せ」。

私は宣教師に、自分の回心と戦争について話した。私たちが話している間、彼は涙を流していた。午後、ランタースホーフェンの神学学生フリドリン・カイルハウアーと共に祈った。

1991年12月8日 — 日曜日

午前中、ロートで聖体礼儀に参列した。12時から13時まで、私は教会に留まり祈りを捧げた。この日は聖母マリアの無原罪の御受胎の祝日であり、一日のうちで最も恵みに満ちた時間である。その後、14時頃まで黙想の時間が続いた。

午後、フリドリンとの会話の中で、彼は私にこう尋ねた。

「君には、神から授かっていないものは何がある？」

私は少し考えた後、こう答えました。「私には何もありません。私が持っているものはすべて、神からいただいたものです。」

1991年12月9日 - 月曜日

数日前、救い主は私にこう言われました。「あなたの存在のすべてを私に捧げなさい」。

私はその意味がわからず、イエスが言われた通りに、それをイエスに返した。すると、救い主はさらにこう言われた。「すべてを尋ね求めなければならない」。

そこで今日、9時45分頃、私は彼に尋ねた。「救い主よ、あなたに何を差し上げればよいのですか？」イエスは答えた。「すべてを私に捧げなさい。」

その後、私たちの祈りのグループに何か伝えるべきかと尋ねました。主は、彼らが祈りを倍増させ、断食をするようにとおっしゃいました。

夕方、ドチャート神父のもとで告解をしました。

1991年12月10日 — 火曜日

10時10分、医師室：私は救い主と一つになった。すると、次のような声が聞こえた。「書き記せ。わたしは自分の羊を愛しており、迷い出た者たちをすべて取り戻したい。彼らを探し出せ。わたしを助けてくれ。見つけた羊一頭ごとに、天には大きな報いがある。お前の使命は、絶えず探し続けることだ。決してやめてはならない。悪者が待ち構えている。」

私は言った。「主よ、私はあまりにも弱いです」。

救い主はこう答えられた。「しかし、わたしと共にあれば、あなたには力がある」。

夕方、ロートの教会で：その日、どの福音書が読まれるのか、私は知りませんでした。

その日、どのような福音書が読まれるのか知りませんでした。マタイによる福音書の『迷い羊』の箇所が読まれたとき、私は驚きました。救い主が、その朝早くにすでにそのことについて私に語ってくださっていたことに、私は不思議に思いました。 今日はいつも以上にフォクト牧師のために祈った。聖体拝領を行い、救い主と一つになった途端、ゆっくりと明瞭な声が聞こえた。「私の声が聞こえるか？」

私は「はい」と答えた。深い静寂が訪れた。すると、「司祭のところへ行け」という声が聞こえた。

再び静寂が訪れた。「彼に伝えなさい」――静寂――「私がこの戦争を真剣に考えているということを。」それはまるで一撃を食らったかのようだった。私は心の中でその言葉を繰り返し、正しく理解できたかどうか、そしていつ司祭のところへ行けばよいかを尋ねた。主は「聖体拝領の後で」とおっしゃった。
救い主は、私が正しく聞いたことを改めて確認してくださった。すると、私は激しく泣き出した。ジータが私のところに来て、どうしたのかと尋ねた。その後、シュペッカート夫人も私のところに来て、事情を尋ねてきた。彼女たちはそのことを認め、「それは新しいことじゃないわ、贖罪の夜にはよくあることよ」と言った。（彼女たちは、ロシアからの戦争のことを指していたのです）それから私はすぐにフォクト神父のもとへ向かいました。フォクト神父は私の話を聞き、こう言いました。「祈ること以外には、できることはない」。救い主が私に命じられた通り、私が初めてロシアからの戦争について彼と話をしたのは、ちょうど一週間ほど前のことでした。
私は彼に祝福を求め、それから家路についた。

1991年12月11日 — 水曜日

10時過ぎ、医師室にて：私は救い主と一つになりました。すると、私の周りには心地よい安らぎと静寂が漂いました。温もりを感じましたが、何も聞こえませんでした。
12時30分、病院の礼拝堂にて：私は「主の天使」を祈り、救い主と一つになり、心地よい温もり、安らぎ、そして静寂を感じた。 しばらくは何も聞こえなかったが、突然、「私はあなたの心の中に安らぎを得ている」という声が聞こえた。それはとても美しく、言葉では言い表せないほど嬉しかった。残念ながら、同僚がまだ病気で、私がすべてを一人でこなさなければならなかったため、その安らぎの時間を長く続けることはできなかった。
救い主が自分の心の中に安らぎを置いていると知ると、それは実に特別な喜びであり、主だけが与えてくださる平安を感じることができます。
夕方、ロクス礼拝堂で：ヴュルツブルクのリータから頼まれていたため、聖体拝領の前にどれくらい食事を控えるべきか、救い主に尋ねました。
救い主はこうおっしゃいました。「聖体拝領の数時間前が適切だ」。私は、もしこれを神父様に話したら、神父様は何を言われるだろうかと尋ねました。救い主はこう答えられました。「私があなたのために話してあげる。平安のうちに帰りなさい」。

1991年12月12日 — 木曜日

10時15分、医師室にて：聖書で終末について読んだことがあったので、私は救い主に、自分が偽預言者ではないかと尋ねました。救い主は私にこう言われました。「あなたは偽預言者ではない。あなたは私のしもべだ。私が言うことはすべて行いなさい。戦争が起こるだろう。私はあなたの主であり、神である。あなたは何度も試練にさらされるだろう」。
私は救い主に、何かしらのしるしをもらえないかと尋ねた。救い主：「時が来れば、私はあなたにしるしを与える」。
私は、そのしるしが私のためなのかと尋ねました。救い主：「すべての人々のためだ」。
午後12時15分、病院の礼拝堂にて：私は『主の天使』を唱えました。
私は救い主に、そのしるしは空中に現れるのか、それとも私自身の身に現れるのかと尋ねた。すると救い主は
私にこう尋ねた。「あなたは承諾するか？」
私はためらうことなく「はい」と答えました。
しかし、その後、私はイエス様にこう続けました。「どうか、私を決してあなたから引き離さないでください。私はあなたをとても愛していますから。」私は救い主に、私たちが祈りの会で捧げている祈りは良いものなのか、それとも何か変えるべきなのかと尋ねました。
救い主はこう言われました。「たくさん祈りなさい。祈りの量を倍に増やしなさい。すべての祈りは良いものだ。」

1991年12月13日 金曜日

医師の診察室：私は祈り、それから救い主と一つになり、主がこうおっしゃるのを聞きました。「よく聞きなさい、わが娘よ。司祭たちのところへ行き、彼らに伝えなさい。
戦争のことについては、私は本気だ」
私は救い主に、それをどのように伝えるべきか尋ねました。救い主はこう答えられました。「私があ

なたのために語ってあげよう。」

私はさらに救い主に、彼らは私の言葉を信じないだろうと伝えましたが、救い主はこうお答えになりました。「そのことは私に任せておきなさい。」
救い主：「お前は超自然的なことを理解していない。私以外、誰も超自然的なことを理解することはできない。」
私は心の中に温かさと安らぎを感じ、イエスに言いました。「あなたが私と一緒にいてくださると信じています。」
イエス：「信じるのか！　それなら、他のことも信じなさい。」
夕方、ロートの教会で。私は救い主に、これまで書いたことが正しいかどうか尋ねました。
イエスは「はい」と肯定し、こう言われました。「平安のうちに帰りなさい、わが娘よ。」

1991年12月14日 - 土曜日

午前7時、私はミンゴルスハイムのロクス礼拝堂にいました。平和を祈り、涙を流していました。すると、「平安のうちに去りなさい、わが娘よ」という声が聞こえました。

1991年12月15日 — 日曜日

私たちはレーゲンスブルクへ向かい、10時00分にカルメル会修道院で聖なるミサに参列した。救い主との交わりの最中、イエスはこう言われた。
「私の声に耳を傾けるか？」
私は「はい」と答え、救い主は私にこう言われました。「それなら、それを信じなさい。」
私は言いました。「どうか、からしの種をください。そうでなければ、私は山を動かすことはできません。」すると
、静寂が訪れました。
すると、救い主はこう言われました。「私はあなたを愛している。」
聖体礼儀の後、私はゲブハルト・ハイダー神父とお話ししました。神父は、私が日記に書き留めていた内なる対話を確認してくださいました。神父はすでに86歳ですが、まだお元気でいらっしゃること、神に感謝します。神父の知恵は、世俗的な知恵ではなく、神聖な知恵です。
彼のような人物は、虫眼鏡で探さなければならないほど稀有な存在です。彼と話すために合計600km以上も車を走らせなければならないことなど、私には何とも思いません。彼は私に大変助けてくれました。 最後に、彼は、ロシアから戦争がやってくるというのは、彼にとって決して新しい話ではないと私に確認してくれました。彼は、テレゼ・ノイマン（ドイツの神秘家——聖痕者）について言及し、彼女がかつて「自分の死後30年経てば、ロシア人が自分の墓を踏みにじるだろう」と語ったことを挙げました。
彼女は1962年に亡くなりました。ゲブハルト神父はまた、ヘロルツバッハやメッテンブッフなど、この戦争について言及されている他の場所についても言及しました。
さらに、私たちが持参した水、ろうそく、絵などの品々を、ゲブハルト神父は特別に祝福してくださいました。すべての司祭がこのように祝福を行うべきです。
家に着くと、お腹を空かせた客が訪ねてきていたので、すぐに料理を作りました。私は何も食べずに、ヴァーハウゼルの教会へ向かいました。聖ミサは、貧しい魂たちのために捧げました。その日、私はとてもたくさん祈りました。しかし、ヴァーハウゼルの教会で、私は自分の周りに地獄が迫っているのを感じました。私は攻撃を受けたのです。 特にひどかったのは、ひざまずいて聖体拝領を受けた時でした。神父が、私にひざまずいて聖体を与えることを拒んでいるのを感じました。
聖体を授けるのを拒んでいるのを感じました。三度目の『アヴェ・マリア』を唱えて初めて、神父は私に聖体を授けてくれました。私の魂は激しい攻撃にさらされているのを感じました。このことは、そう簡単には忘れられないでしょう。しかし、救い主は常に勝利者であられます。イエスと一つになった後、私の心には、神だけが与えてくださる平安が満ちていました。
救い主：「私はあなたを愛している、わが娘よ。」その後、私はその司祭のために祈りました。

1991年12月16日 - 月曜日

クロアチアとスロベニアが独立国家として承認されることは良くないと感じたため、私は救い主に、それが正しいことなのか尋ねました。
救い主はこうおっしゃいました。「わたしには国境など必要ない。わたしはすべての人を愛している。」17時、
私たちのクリニックでクリスマスパーティーが開かれました。

当院の院長であるヴァイダウアー教授が挨拶をし、プレゼントを配りました。その後、私はすぐに教会へ向かいました。世界中の職場で催されるあらゆるクリスマスパーティーに出席するよりも、聖体拝領を受けることを選んだからです。 神よ、彼らがそれを「クリスマスパーティー」と呼んでいることをお赦しください。私にとっては、それらはパリサイ人のような「クリスマスパーティー」に過ぎません。そこで、私はロートの教会へ向かいました。ロートへ向かう道中、パーティーに残った同僚たちのために祈りました。
私は、死にかけている人々のため、そして煉獄にいる貧しい魂たちのために、聖体拝領を捧げました。聖体拝領の後、私は救い主に、今晩私がしたことは正しかったのかと尋ねました。
救い主：「ええ、その通りです。ありがとう。」 救い主がそう言
ったのは、これが初めてだった。
私は救い主に、そのことに対して感謝しなければならないと伝えた。
その朝、職場の礼拝堂で、私は救い主に、昨晩ヴァーハウゼルの教会での出来事について尋ねた。ヴェルナー・エゴン神父が当初、私がひざまずいて聖体拝領することを拒んだため、私は心の中でかつてないほどの激しい攻撃を感じていたのだ。それは、かつてないほどの激しい攻撃だった。私は救い主に、私の周りにどれほどの悪魔がいたのかと尋ねた。
救い主はこう言われました。「もし君がそれらを見ていたら、死んでいただろう。」
この神父は神の恵みの中に生きていません。私は救い主に、このことを彼に伝えるべきかと尋ねました。というのも、私はこの神父のために赦しを祈っていたからです。救い主はこう言われました。「彼らに伝えなさい。」
私は心の中で、エミリアン神父のところへ行き、この件について彼と話し合おうと考えました。

1991年12月18日 - 水曜日

姪と一緒に、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂に行きました。
聖体拝領が行われた時、私は聖体拝領台の前でひざまずいた。他の人たちは聖体を拝領する際に立っていたり、司祭の前の階段にひざまずいたりしていた。神が私に、一人で聖体拝領台の前でひざまずくほどの勇気を与えてくださったことに感謝する。
私は、司祭が私のところに来るまで待ちながら、司祭のために祈っていました。聖体の配給が終わると、司祭は振り返り、祭壇に向かって約二歩進みました。
ある力が彼を引き戻したのです。彼は私のところへ来て、聖体を授けてくださいました。私は救い主に、それが正しいことだったのかと尋ねました。
救い主：「そのままでいなさい、わが娘よ。その勇気をありがとう。」
私は救い主にこう言いました。「ありがとうございます。この勇気は私からではなく、あなたから与えられたものです。」午前中、病院の礼拝堂にて：私は救い主に、突然亡くなる人は悔い改める時間があるかどうか尋ねました。数日前にそのことについて議論があったため、尋ねたのです。ある司祭は、もはや時間はないとさえ言っていました。
救い主：「罪を悔い改めるための一定の時間はあります。その時間は神次第です。」
それから私は救い主に、一日に何回聖体拝領ができるのか尋ねました。救い主：「一日に一度だけですが、霊的には何度でも構いません。」
救い主はさらにこう言われました。「一日に何度も聖体拝領を行うなら、神への信頼が足りないということだ。なぜなら、不純な心で聖体拝領を行うなら、10回目であっても聖体拝領は十分とは言えないからだ。」

1991年12月19日 - 木曜日

昨日のアロイス兄弟からの電話が頭から離れなかった。彼は、ヴェルナー・エゴン神父が匿名の手紙を受け取り、私がその容疑者かもしれないと語った。私がアロイス兄弟に
アロイス兄弟に、もともとヴァーグハウゼルの司祭たちを訪ねるつもりだったと伝えると、彼は驚いて、そんなことはしてはいけない、さもないと彼を修道院から追い出されてしまうだろうと言った。
ここで言っておきたいのは、私は決して誰かに匿名の手紙を書くようなことはしない、ということだ。なぜなら、キリストの真の教えに反していると感じたときは、私は自ら司祭たちのところへ直接出向くからだ。

そこで私は、1991年12月15日にヴァーハウゼルで体験したことを受け、救い主に、ヴァーハウゼルの司祭たちのところへ行くべきかどうか尋ねました。救い主は、「司祭たちのところへ行って、そのことを伝えなさい」とおっしゃいました。もしそれが神の御心であるならば、私はそこへ行くつもりです。その後、救い主はさらに、「毎日たくさん祈りなさい」とおっしゃいました。

1991年12月20日 - 金曜日

病院の礼拝堂にて：救い主は私にこう言われました。「たくさん祈りなさい、わが娘よ。戦争が近づいている。」私は救い主に、インフレがいつ起こるのか尋ねました。
救い主：「戦争が始まる前だ。」
さらに私は、聖体拝領の前にどれくらい何も食べてはいけないのかと救い主に尋ねました。救い主：「聖体拝領の数時間前、何も食べず、何も飲まないことは、信仰を持たない者たちに対する贖罪なのだ！」
私は、「何か伝えるべきことはありますか？」と尋ねました。
救い主：「ヴォクト神父は、信者たちと共に、これまで以上に聖体の御前での祈りを深めるべきだ。」夕方、私はロートの教会にいました。

1991年12月21日 – 土曜日

7時15分、ヴァーグハウゼルでの聖体ミサ。
聖体祭の前に、ミサを司式する司祭のために祈りました。それはアランヌス神父でした。最初は教会が暗闇に包まれており、神父が聖体祭を執り行っているにもかかわらず、その姿は見えませんでした。 私は神父のために熱心に祈った。すると、神父の姿も見えたが、やはり暗闇の中にいた。変容の後、教会全体が少し明るくなった。それが何を意味するのかわからず、答えも得られなかった。聖体祭の後、私はハンブシュ家を訪れた。
夕方、ツァンク氏が私のところに来て、ヴァーグハウゼルのとある神父に手紙を送ったと教えてくれました。彼は、その神父の説教が馬鹿げていると感じたこと、そして手紙の中でメジュゴリエについても少し触れたと書いていたそうです。私はツァンク氏に、その神父から返事はあったかと尋ねました。彼は、返事は期待していないと言いました。 私は彼を批判し、なぜその神父のもとへ直接会いに行かなかったのかと尋ねた。この男からは、正直ではなく嘘をついているという印象を受けた。彼は臆病者のように見えた。そこで、あることに気づき、アロイス兄弟が話していたヴェルナー・エゴン神父宛ての匿名の手紙のことを思い出した。 しかし、私はワグハウゼルの神父たちに彼を密告するつもりはない。きっとワグハウゼルの神父たちは、これで二度目となるが、私を疑うだろう。私の境遇はイエス様と何ら変わらない。罪は罪のない者たちに押し付けられるのだ。

1991年12月22日 – 日曜日

赤の聖堂でミサに出席する前に：
日曜日の早朝、私は約1時間半、特にフォクト神父と
ヴァーグハウゼルの神父たちのために、特に1時間半ほど祈った。教会での拍手について、救い主に尋ねた。
救い主：「私の教会は劇場ではない。『神の御加護がありますように』という言葉にもっと信頼を置くべきだ。」私は、教会にいた司祭たちや人々のために熱心に祈った。そして、救い主に、いつ私を故郷（天国）へ迎えに来てくれるのかと尋ねた。
主は「もうすぐだ」とおっしゃいました。それから、救い主は私に「怖いのか」と尋ねられました。私は「いいえ、あなたが一緒にいてくださるなら」と答えました。
正午には、ロザリオの祈りと礼拝のために教会に行きました。
午後、私はエーリッヒと一緒にロザリオを二回唱えました。まるで誰かに「祈らなければならない」と言われたかのように、祈りたいという衝動に駆られました。夕方、ラジオで、私が祈っていたまさにその時間に、ハイデルベルク近郊で飛行機が墜落し、26人が死亡したというニュースを耳にしました。 20時頃、主との交わりの最中に、私の死が殉教となるかどうかを主にお尋ねしました。マンハイムに住むある女性が、私の死を幻視で見たと私に話してくれました。彼女は、激しい殉教、火による苦しみについて語りました。

悪魔が暗躍しているのを感じたため、それが本当かどうか、救い主ご自身に確かめたかったのです。
私の問いかけに対し、救い主はこうおっしゃいました。「はい、それは短い殉教となるでしょう。そして、私はあなたと共にいます。」

1991年12月23日 - 月曜日

まず自宅で詩篇全編とその他の祈りを捧げました。その後、霊的な交わりを行い、約20分間、救い主と一つになりました。そこには特別な静寂があり、私の心には深い平安が満ちていました。
私は、救い主が私に書かせた重要なことだけを書き留めています。たとえ書くのが辛くても、真実は明るみに
出さなければなりません。私は救い主に、この戦争で何人が命を落とすのかと尋ねました。
救い主はこう言われました。「ほぼ全員だ。生き残った者たちは、死んでいればよかったと願うだろう。罪は重いのだ。」
私は原子爆弾のことを考えました。
救い主：「原子力発電所もまた、地球を汚染するだろう。」私は救い主に、私のために何か言
葉をくださいとお願いしました。
救い主：「私はあなたをとても愛している。私に忠実であり続け、揺るぎなく、私を見捨てないでほしい。」
それから私は、祈りの集いのメンバーたちが信仰を強く持ち続けられるよう、救い主にしるしを与えてくださるようお願いしました。私はこう言いました。「私たちにはそのしるしを受けるに値しないことは分かっていますが、主なる神にお任せします。」
その後、私はかつてないほど深い安らぎと平安に包まれました。それは、救い主が私の中に、そして私が救い主の中にいたからに他なりません。
救い主と一つになることほど美しいものはありません。そうです、救い主だけで十分なのです。 正午過ぎ、11時を過ぎた頃、私は姪のジャケリーナと一緒に森へ出かけました。私たちは「無原罪の聖母」のロザリオを唱えました。その後、ラテン語で『サルヴェ・レジーナ』を歌いました。森の真ん中で歌っていると、突然たくさんの鳥たちが飛んできて、私たちと一緒に歌ったり、さえずったりしました。 それまで風は強く吹いていたのですが、突然風が静まり、もう吹かなくなりました。歌っている間、私たちは畏敬の念に打たれました。『サルヴェ・レジーナ』を歌い終えると、鳥たちは飛び去り、風が再び吹き始めました。鳥たちが集まってくる現象はこれで3回目、風が吹かなくなる現象は2回目でした。
夕方：祈りの会。ドチャート神父に告解をしました。今日は祈りの会で多くの人が告解をしました。私たちは救い主を礼拝し、いつものようにロザリオやその他の祈りを捧げました。

24. 1991年12月 — 火曜日 — クリスマスイブ

クリスマスのミサに出席し、たくさん泣きました。

25. 1991年12月 — クリスマス

聖ミサの前に詩編を唱え、その後、霊的に聖体拝領を行いました。約20分間、私は救い主と一つになりました。
救い主：「私はいつもあなたと共にいる。」
私は、ドチャート神父と話し合ったことについて、イエス様に尋ねました。救い主：「私があなたに告げることは、
あなたのためであり、司祭たちのためであり、そしてすべての人々のためである。」
イエスは、私が神父のもとへ行くべき時は、私が行きたい時ではなく、イエスがそう告げる時、つまり適切な時が来た時だと教えてくださった。

26. 1992年12月 - クリスマス翌日

音楽協会がミサの演奏を担当した。私はそれが気に入らなかった。音楽が流れている間、私は至聖体の連祷と聖心の連祷を唱えた。
私は救い主と深く一つになることができ、多くの恵みを受けました。

27. **1991年12月 - 金曜日**

夕方、ロートで聖ミサに参加した。

28. **12.91 — 土曜日**

詩篇全編を祈った。

29. **12.91 — 日曜日**

午前6時30分から8時30分まで、聖ミサの前に詩篇を唱えた。私は霊的に救い主と一つになり、初めて家族のことを尋ねた。「私の家族は今、どうなっているのでしょうか」と。救い主：「彼らは皆、広い道を進んでいる。望めば、まだ引き返すことができる。」夫とジャケリーナのことを尋ねたが、答えは得られなかった。

家族について尋ねたとき、私はフランス、ユーゴスラビア、そしてここドイツに暮らす、まだ生きている兄弟姉妹のことを思い浮かべました。それから、息子についても尋ねました。救い主：「彼もそうだ。」

30. **1991年12月 - 月曜日**

エルベン氏が、自分が今行っていることが正しいかどうか、救い主に尋ねてほしいと私に頼みました。救い主：「彼が歩み始めた道は良くない。」

私は救い主に、マリア・イッテン（ラーゼンクロイツ）からの回覧文が正しいかどうか尋ねた。

救い主：「その手紙は正しい。たくさんコピーしなさい。それを信じない者は、私に任せなさい。」私はドチャート神父に告解をした。

31. **1991年9月12日 — 火曜日**

病院にて：私は救い主に、夫に一体何が起きているのか尋ねました。救い主：「娘よ、彼のためにたくさん祈りなさい。それは不浄な霊たちとの戦いである。」しかし、私は救い主に、夫が昨日告解をしたことを伝えました。

救い主：「彼はまた罪を犯したのだ。」

私は、夫が「神父は自分を助けてくれなかった」と言っていたことを救い主に伝えました。救い主：「彼は自分の罪を深く悔い改めていないのだ」

ドチャート神父が、ツォイテルン在住のデリス氏の私邸でミサを執り行っているのは正しいことなのかと尋ねました。

救い主：「ドチャート神父のやり方は正しくありません。許可が必要だからです。

つまり、教会は不正なことをすることを拒んでいるのだ。私の教会では、いつでも祈ることができる。」

私は救い主に、昨日の祈りは良かったかと尋ねました。救い主：「良かったよ、

気に入った。」

正午、病院の礼拝堂にて：救い主とつながっていることは、とりわけ素晴らしいことでした。私は救い主にこう言いました。「ああ、救い主よ、もう疑いはありません。とても素晴らしく、すべてを信じます。」

救い主はこうおっしゃいました。「今、あなたの魂は清らかだ。」私は

さらに、今、救い主の声を以前よりよく聞き取れるようになったと伝えました。

救い主：「あなたが私に対して心を開くようになったからだ。」

私は救い主に、今年の終わりに私に何を伝えたいのか尋ねました。救い主：「続けていきなさい、わが娘よ。あなたがするすべてのこと、私は気に入っている。」私は、祈りの部屋を建てるべきかどうか尋ねました。

救い主：「建てなさい。」

それから、もし夫がそれに反対したらどうすればよいかと尋ねました。救い主は言われました。「彼は同意するだろう。」

大晦日の夜：

その夜、私は悲しみに暮れ、激しく泣きました。24時になるやいなや鳴り響く花火の音が、多くの人が飢えているという現実を思うと、どうしても気に入らなかったのです。その頃、私は祈りを捧げました。

1992年1月1日 - 水曜日

赤い祭服を着てミサを捧げた。教会を出た後、スペックアート夫人と、祈りの集会で読み上げられたアイゼンベルクの写しについて話した。私たちが路上に立っていると、悪魔が約5分間、地獄のような悪臭を放ってきたので、私は聖水を撒いた。すると、その悪臭はすぐに消えた。

16時から19時まで、神学部の学生であるアルトゥール・ヴァグナー氏と対談した。その際、ラテン語で祈りも捧げた。

ジーグラー氏が著書

『メジュゴリエ――神から世界への平和の申し出』という著書の中で、名前を改変していたからです。

救い主：「名前を偽るのは正しくありません。」

それから、幻視者イヴァンについても尋ねました。イヴァンはよくドイツの近隣の町にいます。私は救い主に、なぜ彼が私を訪ねてきてくれないのかと尋ねました。

私はメジュゴリエで彼とよく会っていたからです。

救い主はこれに対し、「そのことは私に任せておきなさい」とおっしゃいました。

12時10分：

私は、雑誌『メジュゴリエ—アクチュエル』12ページに掲載されたマックス・テュルカウフ教授へのインタビューの見出しについて、救い主に尋ねた。その見出しは、「私たちが信じていることを、人々が信じてくれるような生き方をしなければならない」というものだった。

救い主はこれについてこう言われました。「信仰は、祈り求めて得なければならない。」

その後、私はこの雑誌『メジュゴリエ—アクチュエル』を読む必要があるのかと尋ねました。

救い主：「その雑誌を読む必要はない。『小さな魂たち』の本は、そのような雑誌が何百万冊あってもそれよりも重要だ。」

その後、私は夫のことを尋ねました。彼はあまりにも頻繁に攻撃を受けているからです。私は悪魔のことを考えていました。

救い主：「そう、わが娘よ、多くの悪魔がいる。それが彼の十字架の道だ。それは悪魔に取り憑かれている状態だ。それによって、あなたは私が魂を救うのを助けているのだ。」

私は、夫が私の悪口を言っていることを、多くの人が信じていることをイエス様に話しました。救い主：「人々は、悪魔の言うことをはるかに信じている。真実はほとんど受け入れられない。そうでなければ、私は十字架にかけられることはなかっただろう。」

夕方、ロートの教会にて：

聖体拝領の後、私は救い主に、憑依の件について夫に

17時20分、憑依について話したことは正しかったのかと尋ねました。

救い主：「正しかった。恐れる必要はない。私はあなたと共にいる。」私は喜びに満ち、心に深い平安を感じた。

1992年1月3日 — 聖心金曜日

ロートの教会で聖体拝領のミサに参加した。

1992年1月4日 — 土曜日

ミンゴルスハイムで病気のミュラー神父を訪ねた。彼と約45分間話した。その後、救い主に、自分の話し方は適切だったかと尋ねた。

救い主：「話したのは君ではなく、私が君のために話したのだ。」この会話は神の御心によるものでした。

会話の後、私は神父様に告解をした。

1992年1月5日 — 日曜日

ミサの前に、悪魔がマリア・イッテン（アイゼンベルク）の回覧文書の写しを燃やしてしまった。寝室が燃えそうになった。

1992年1月6日 — 月曜日 三王の祝日

ロートで開催されたHl.ミサと礼拝に出席した。夕方：祈りの集いがあり、多くの
人が集まっていた。

1992年1月7日 - 火曜日

10時 医師室：前日、1日に2度聖体拝領をしたいという切なる願いを抱きながらも、実際にはそうしなかったため、1日に1度だけ聖体拝領を受けることが正しいかどうかを救い主に尋ねました。
救い主：「1日1回で正しい。」
それから私は、救い主に、このことを司祭たちに伝えるべきかどうか尋ねました。救い主：「
私があなたに告げていることは、あなたのためであり、司祭たちのためであり、他の人々のた
めでもある。」
そこで私は、1日に1回しか聖体拝領をしてはいけないということを祈りのグループに伝えたら、そのグループを失ってしまうかどうかを救い主に尋ねました。
救い主：「たとえ彼ら全員を失ったとしても、真理は変わらない。」そこで私は救い主に、例
外はあるのかと尋ねました。
救い主：「たった一度だけだ。」
私は救い主に、そのように書いて正しいかどうか尋ねました。
救い主：「正しく書き留めた。他人に影響されてはならない。」
大晦日の夜、ヴォクト神父が聖体拝領を配る信徒たちに感謝の言葉を述べていたことを思い出した。私は救い主に、ヴォクト神父がそうして感謝したのは正しいことだったのかと尋ねた。
救い主：「それによって、彼は私を傷つけた。」
それから私は、信徒たちがもう聖体拝領を配らなくなるという事態を、私が生きているうちに目にすることになるのかと、救い主に尋ねました。
救い主：「はい、君はその光景を目にするだろう。そのために祈りなさい。」
それから私は（病院で午後12時頃）、土曜日の夜のミサが日曜日のミサ扱いになるのか、と救い主に尋ねました。
救い主：「日曜日は聖なる日であり、その尊厳を損なってはならない。」
救い主：「日曜日は聖なる日であり、その尊厳を損なってはならない。」

1992年1月8日 - 水曜日

夕方、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂にて：
誰もひざまずいていなかったにもかかわらず、私は聖体拝領台の前でひざまずいた。あるプロテスタントの修道女がそう言っていたため、私は救い主に、晩餐と聖体拝領は同じものなのかと尋ねた。
救い主：「プロテスタントの牧師には、聖体の変容をもたらす力も権威もない。かつてペトロがそうであったように、今日もそれは変わらない。」

1992年1月9日 — 木曜日

10時15分、医師室にて：祈りの際、私は救い主に、信じることを約束し、また主が私に告げることを実行すると誓った。しかし同時に、何かを告げる前に、私の中にまだ残っている疑いを取り除いてくださり、私の人間性を神性で覆い、清らかさと平安を授けてくださるよう、主にお願いした。 それから、私はいつヴォクト神父のもとへ行くべきか、と尋ねました。
救い主：「できるだけ早く！ ロシアから戦争がやってくる。その司祭は、至聖所の前でより多く祈り、聖ミサの前に信者たちと共にロザリオを唱えるべきだ。」
私は救い主に、もし私がそのことを神父に伝えれば、神父も一緒に祈ってくれるかどうか尋ねました。救い主：「はい、神父も一緒に祈ってくれます。しばらく時間がかかるでしょう。」
さらに私は救い主に、ロザリオは聖体安置の前の救い主の前で祈るべきか、そうでないかを尋ねました。
救い主：「司祭の望む通りに。」

次の質問は、週に一度祈るべきか、それとも毎日祈るべきかということでした。救い主：「毎日。」
私が司祭のところへ行くとき、救い主は私と一緒にいてくださるのかと尋ねると、彼はこう答えました。「はい、私はあなたと一緒にいます。」
12時20分 病院内の礼拝堂：私は礼拝堂で祈りました。
救い主と一つになったとき、私はヴォクト神父にどう伝えるべきか尋ねました。つまり、その言い回しについ
て、あるいは正確な言葉遣いが分からず、
「〜すべき」か「〜しなければならない」か、という点を指していました。
救い主：「よく聞きなさい、わが娘よ。彼は毎日、信者たちと共にロザリオを祈るべきだ。」仕事の後、私は再び祈りました。祈りに夢中になりすぎて、バウハウスで夫を迎えに行くのを忘れてしまいました。30分遅れてしまいました。夫のもとへ向かう途中、車の中で2回目のロザリオを祈り、それから夫と一緒に3回目のロザリオを祈りました。 特にフォクト神父様のために祈りました。
家に着くと、聖母マリアの像の前に進み出て、神様が私に望んでおられることを実行できるよう、また、いつヴォクト神父のもとへ行くべきかについて、聖母が助けてくださるよう祈りました。
フォクト神父のもとへ行くべきかどうか、何かが私を突き動かして、気が休まりませんでした。
そこで私は十字架の前にひざまずき、イエスの五つの傷に祈りを捧げ、いつヴォクト神父のもとへ行くべきか尋ねました。救い主：「ミサが終わったら行きなさい。」
さらに、その神父が私のために時間を割いてくれるかどうか尋ねました。救
い主：「はい。」
私はこう答えました。「もしそれが神の御心であるなら、私は彼のもとへ行きます。」
聖体礼儀の後、まだ教会に残っていた祈りのグループの何人かに、私がヴォクト神父のもとへ行かなければならないので、私のために祈ってほしいと頼みました。私は司祭館の入り口で神父にお会いし、お話しできるかどうか尋ねました。
神父は「すぐです」とおっしゃいましたが、普段ほど親しみやすい様子ではなく、「ほんの数分だけですよ」
と付け加えました。
面会室に入ると、私は手短にすべてを話そうとしました。聖体拝領を配る信徒たちに感謝を述べたことで、救い主を傷つけてしまったと伝えると、神父は「そんなことは信じない」と言いました。 さらに私はヴォクト神父に、救い主がすでに、聖体の配給は司祭の務めであると私に告げてくださったと伝えました。その後、救い主が、ミサの前に信者たちと共にロザリオを唱えることを望んでおられるとも伝えました。
すると彼は落ち着きを失い、「それなら救い主が私に司祭を遣わすべきだ。私は侍者たちの世話で手一杯なのだから」と言いました。
さらにヴォクト神父は、聖体礼儀の前にすでにロザリオの祈りは捧げられていると続けました。そこで私は、もし神父様も一緒に祈ってくだされば、もっと多くの人が参加してくれるかもしれないと伝えました。
私は彼に祝福を求め、それから家路につきました。彼のもとには約30分間いました。
家に着くと、すぐに救い主に祈りを捧げ、聖体奉仕者たちに対する神父の苦悩について、私が神父に何か間違ったことを言ってしまったのではないかと尋ねました。
救い主：「あなたは正しく言ったのだ、わが娘よ。彼は私の痛みを知っている。」私は救い主に、その司祭は
私の言葉を信じてくれないだろうと伝えました。
救い主：「それは私に任せておきなさい。」
それから私は、その神父がミサの前にロザリオを祈りたがらないことについても、救い主に伝えました。救い主：「わが娘よ、彼が祈る時がまだ来るのだ。」

1992年1月10日 — 金曜日

10時15分、医師室にて：私は熱心に祈り、救い主に、フォクト神父が司祭を望んでいると伝えました。
救い主：「もし彼にもっと多くの司祭がいたとしたら、彼はそれでもなお、手での聖体拝領を続けるだろうか？」

私は、正しく書き留めたかどうかをもう一度確認した。救い主：「そう、わが娘よ、あなたは
正しく書き留めた。」
14時15分：私は救い主に、もし神の御心として、その司祭がこれらすべてを行うこと、すなわち聖体礼儀の前にロザリオを唱え、 、手による聖体拝領をやめ、ひざまずいて口による聖体拝領のみを行い、それによって多くの魂が回心するならば、私は救い主に忠実であり続け、決して彼から背を向けず、この苦しみを最後まで耐え抜くことができ、そしてそれが神の御心であるならば、そのための開いた聖痕の苦しみを喜んで受け入れる用意があると申し上げました。
救い主：「その申し出に感謝する。平安のうちに去りなさい。」私は再び、正しく書き記した
かどうかを確認した。
救い主：「はい、正しく書いています。」
追伸：開いた聖痕が凄まじい痛みを伴うことは承知しています。しかし、それが神の御心であり、それによって救い主と共に魂を救うことができるのであれば、私は救い主と共に苦しむ覚悟があります。主よ、御心が行われますように。

1992年1月11日 - 土曜日

私はヴァーグハウゼルでの早朝のミサに出席した。聖体変容の際、暗闇の中にベネディクト神父が立っているのを見
た。神父の周囲は薄暗かった。私は目を閉じたままそれを見て、救い主にそれが何を意味するのか尋ねた。
救い主：「あなたは苦しむイエス様を見ている。」その後、私はその神父の
ために熱心に祈りました。
11時、姪のジャケリーナと一緒に、ニューエイジ運動が広まらないよう、またそれが悪影響を及ぼさないよう祈りました。
17時、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で告解を受けました。 夕方20時頃、多くの人々が集まり、私たちは再び、ニューエイジ運動が悪影響を及ぼさないよう、そしてサタンのミサに反対して祈りました。祈りは23時頃まで続きました。私は救い主が私に語られたことを伝え、信者たちを励ましました。

1992年1月12日 — 日曜日

聖ミサの前に、私はすでにロザリオを2回唱え、イエスの連祷も捧げていました。およそ
11時40分頃、ヴォクト神父が義母の家に訪れ、義母の
80歳の誕生日を祝ってくれました。彼はすぐに立ち去り、彼が去った後、私は泣きました。というのも、私はすでに8年間も彼のために祈り続けていたのに、彼は1分間も2階に上がってこなかったからです。
それは私にとってとても辛いことでした。それから、寝室にある大きな十字架を抱きしめて泣きました。すると突然、まるで涙が奪
い取られたかのように泣き止み、そのとき、救い主の声が聞こえました。
「泣かないで。ヴォクト牧師は疑いと畏敬の念を抱いている。彼のために祈りなさい。彼は良くなるだろう。」
その後、私は喜びを感じ、13時に教会へ行き、フォクト神父のためにロザリオを祈り、その後も礼拝に参加しました。
17時に、マルガ・Fさんがご主人と一緒に私のところへ来てくれました。その後、エーリッヒさんも加わりました。
夫と一緒に、私たちは「悲しみのロザリオ」を祈りました。
19時、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂でミサに参加し、霊的に聖体拝領を行いました。私は救い主に、私たちの祈りの部屋のために寄付を期待してもよいか尋ねました。
救い主：「ミュラー氏が少し助けてくれるだろう。」
その後、救い主は私たちの心の中の対話の中でこう言われました。
「私はあなたをとても愛している。」
私は幸せな気持ちで帰宅しましたが、すぐに悪魔が夫に近づきました。
夫は再び悪霊に取り憑かれていました。私はすぐに「尊い御血の連祷」、「聖心の連祷」、「ラウレタンの連祷」、そしてその
他の祈りを捧げました。その後、再び平穏が戻りました。

1992年1月13日 - 月曜日

毎朝のように、夫と私はハイデルベルクへ向かう車中で、ロザリオの一連、主の天使の祈り、マグニフィカト、サルヴェ・レジーナ、聖霊への祈り2回、聖母への連祷、ファティマの祈り、 大天使ミカエルの祈り、守護天使の祈り、聖心の祈り、サンクトゥス、グロリア、そして「コル・イエズ・サクラティッシム」を唱えました。その後、夫をバウハウスで降ろし、私は祈りを続けました。 職場では、患者さんが来るまで祈り続けます。10時頃になると、診察室へ行き、患者さんの名前を帳簿に記入します。他の人がタバコ休憩を取っている間、私は診察室で祈りを続け、亡き人々のために聖水を振りかけ、患者さんや医師、看護師、その他のスタッフにベネディクトの十字架で祝福を与えます。

その後、私は救い主と霊的に交わります。

今日は10時10分頃に医師室にいました。ヴォクト神父がやはりもっと多くの司祭を望んでいたため、救い主が1992年1月10日に私に語られたことを、もう一度確認してもらえないかと尋ねました。私は救い主に、その内容を正しく書き留めたかどうか尋ねました。

救い主：「娘よ、聞こえるか？」 私：「はい、主
よ。」

救い主：「もし彼にもっと多くの司祭がいたとしたら、彼は引き続き手による聖体拝領を授け続けるだろうか？」

それは、3日前に聞いたのと同じ言葉だった。

救い主：「彼にそう伝えていい。恐れることはない、私があなたと共にいるから。」私は救い主に、もしそのせいで私が破門されたらどうなるのかと尋ねました。

救い主：「私を愛しているか？」 私
は「はい」と答えました。

救い主：「私に忠実であり続けなさい。」

私はさらに尋ねた。「つまり、彼らは私を破門するということですか？」救い主：「お前は破
門されるだろう。」

現代ではもう誰も破門されることはないだろうと思ったので、私はもう一度尋ねた。

救い主：「わが娘よ、お前は破門される。」私：「それは大きな苦痛に
なるでしょう。」

救い主：「しかし、あなたは私から破門されるわけではない。私はあなたと共にいる。」私は救い主に、破門の理由が信徒による聖体拝領と手での聖体拝領にあるのかと尋ねた。

救い主：「そう、信徒による聖体拝領と手での聖体拝領が理由だ。その通り、君の推測は正しかった。」

私は救い主に、書き留めた内容が正しいかどうか、そしてヴォクト神父のもとへ行くべきかどうか尋ねた。

救い主：「君は正しく書き留めた。私の言う通りにしなさい。彼のところへ行きなさい。」

今日、救い主と話す前に、私は彼に、彼が私に言うことはすべて信じると伝えました。そしてこう祈りました。「あなたの言うことを信じます。しかしその前に、私の疑いを取り除き、私の魂を清め、私の人間性を取り去り、あなたの神性を私に授けてください。」

救い主は私にこう言われました。「私はお前の所有物を欲している。」

しかし、私はその言葉を正確に理解できず、こう言いました。「私はすでにすべてをあなたに捧げました。私には何もありません。すべてはあなたのものです。私もまた、無に等しいのですから。」

私は救い主に、もし私が破門されたら、人々は祈りに私のところへ来てくれるだろうか、と尋ねました。

救い主：「はい、大勢来るでしょう。」

私は救い主にこう言いました。「主よ、おっしゃってくださったことに感謝します。そのようにして魂が救われるのであれば、そして私がいつもあなたと共にいられるのであれば、私も『はい』とお答えします。」

私は救い主に、私がそれを書き留めた内容が御心に適うかどうか尋ねました。救い主：「あなたは知っているでしょう、わが娘よ。」
その後、私はこれを祈りの集会で話してもよいか、またドチャート神父に破門について話してもよいか尋ねました。
救い主：「何でも話していい。私はあなたの主であり、神である。私があなたに授けることはすべて真実だ。平安のうちに去りなさい。」
私：「ありがとうございます、私の主であり神よ。」
12時10分 病院の礼拝堂にて：アンジェラス（祈りの時間）の際、救い主と一つになる中で、私は尋ねました。「主よ、あなたが私の所有物を望んでおられるということは、どのように理解すればよいのでしょうか？」
救い主は言われた。「私は新しい使命を与える前に、常に問わなければならない。所有物――すべてだ。お前の魂、お前の肉体。」
私は自分の魂がどのような状態にあるかを省み、まるで心に何の汚れもないかのように、特別な安らぎと愛、そして平安を心に感じた。今なら飛べるような気がしました。
夕方、教会で聖体拝領の最中、私は救い主に、今日彼が私に語ってくださったことを祈りの集会で話してもよいかと尋ねました。
救い主：「いいよ。今からそれを楽しみにしているよ。」
夕方の祈りの集い：まず私たちは祈り、歌を歌い、それから私は救い主が私に語ってくださったことを話しました。
午後遅くにヴュルツブルクのH・ミュラー氏と1時間ほど話していたにもかかわらず（H・ミュラー氏はすべてをテープに録音していた）、その夜、祈りの集まりでも、救い主との会話について話しました。

1992年1月14日 - 火曜日

10時10分、医師室にて：私は救い主に、教皇のもとへ行くべきかどうか尋ねました。というのも、これから私に降りかかる重要な事柄に関する話だったからです。また、教皇様に手紙を書くべきか、それとも直接お会いした方が良いのかとも尋ねました。
救い主はこう言われました。「私の娘よ、彼のところへ行きなさい。あなたが彼のところへ行けば、良いことになるでしょう。私があなたに同行します。」
私：「『付き添う』とはどういう意味か分かりません。」救い主：「私はあなたと共にいる。」
私はさらに言いました。「救い主様、彼と話すのは難しいでしょう。」 救い主：「わが娘よ、彼があなたに話しかけてくれるだろう。」
私は言いました。「ありがとうございます、主よ、私の神よ。たくさんの祈りを捧げながら、彼のもとへ行く準備をします。」
救い主：「ありがとう、わが娘よ。平安のうちにそこへ行きなさい。」
正午、アンジェラスの後の礼拝堂で：私は、自分の霊的指導者であるゲブハルト・ハイダー神父のもとへ行くべきかどうか尋ねました。
救い主：「今はまだだ。君がしていることはすべて正しい。その調子で続けてくれ。ヴォグト神父のところにも、まだ行かないでくれ。まずは彼のために祈ってほしい。」
夕方、ロートの教会で：聖体拝領の際、フォクト神父が聖体を私の唇と歯に、まるで折れてしまうかと思うほどの強い力で押し当てました。フォクト神父がそんなことをするのは、これまで一度もありませんでした。
痛くて泣いてしまった。その日、私は彼のためにたくさん祈っていたからだ。

1992年1月15日 - 水曜日

10時10分、診察室：昨日、ヴォクト神父が聖体を丁寧に授けてくれなかったことについて、再び救い主に尋ねました。
救い主：「不浄な霊が彼に時間を与えなかったのだ。その霊は、彼に聖体拝領を急いで行わせるように迫ったのだ。」私は聖体配給係のヴェネブッシュ夫人のためにも祈っていたので、救い主に、ヴェネブッシュ夫人は、その聖体拝領の配り方が正しくないことを感じ取っていないのかと尋ねました。

救い主：「わが娘よ、彼女たちは皆、それが正しくないことを知っているのだ。」
私：「でも主よ、聖体の授与が正しくないことを私が知っているなら、私はそれをしません。」
救い主：「わが娘よ、あなたはサタンを恐れているのだ。」
私はその意味がよく理解できず、救い主にもう少し明確に説明してほしいと願いました。
救い主：「もしあなたが神を畏敬の念を持っていましたら、聖体拝領を配ることはしなかったでしょ
う。」
私は救い主に、司祭が信者たちに手での聖体拝領を強要することの意味を尋ねました。
救い主：「彼は神の御業を行っていないのだ。」
それから、信者がすでにひざまずいているのに、司祭が立ち上がるよう強制する場合はどうなるのかと尋ねた。救い主：「彼は悪魔の命令に従い、立ち上がるよう強制しようとしているのだ。」
14時30分、レントゲン室：私は祈り、霊的に聖体拝領を行いました。そして、信徒から聖体拝領を受けることが何を意味するのかと尋ねました。
救い主：「それを受け取れば、あなたは悪魔に恩を売ることになる。」
もし、私が座ったまま、隣に座っている信徒が聖体を配っているからといって、聖体拝領を受けなかったらどうでしょうか?
救い主：「それなら、お前は臆病者であり、悪魔に恩を売ることになる。」
私はさらにこう言いました。「それなら、聖体拝領に行くことはできます。そして、信徒が私のところに来たら、救い主の前に頭を下げ、聖体拝領は受けずに、霊的に聖体拝領を行い、自分の席に戻ることができます。」
救い主：「そう、そうすればよい。」
それから私は、司教たちが信徒による聖体の配給を承認したと付け加えました。救い主：「彼らには最大の責任があるのだ。」
私は救い主に、信者たちにそう話したら、一人ぼっちになってしまうのではないかと尋ねました。救い主：「人々の前では一人かもしれないが、あなたは一人ではない。わが娘よ、私はあなたと共にいる。」午後、私は罪を犯してしまいました。心苦しく思いました。夕方、私はミンゴルスハイムのロクス礼拝堂へ行きました。聖体拝領のミサの前に、六つの十字架の道を祈りました。
わずか4日前に告解をしたばかりでしたが、また告解をしたくなりました。告解の後、神様に感謝し、私は幸せを感じ、「魂が清いことほど美しいものはない」と口にしました。その後、多くの苦しみを背負っている聖父のために、聖体拝領を捧げました。

1992年1月16日 - 木曜日

10時10分ー医師室：救い主が勧めてくださった通り、ここ数日間、ヴォクト神父様のために特に祈りを捧げていました。
祈りと救い主との交わりの最中、私はいつヴォクト神父のもとへ行くべきか尋ねました。
救い主：「よく聞きなさい、わが娘よ。今日中に彼のところへ行きなさい。彼はあなたを受け入れてくれるでしょう。」私は尋ねました。「主よ、でも、彼に何を話せばいいのでしょうか? 」
救い主：「お前はいつも、何を話すべきか心配しすぎだ。私が代わりに話してやる。」
私は、日記を持っていくべきかと尋ねました。救い主：「それを持って行ってもよい。」
その後、沈黙が訪れ、しばらくの間、救い主の声が聞こえませんでした。
すると、救い主はこう言われました。「常に静寂を保たなければならない。悪が潜んでいるからだ。彼もまた介入して、君に語りかけようとするからだ。」
私：「主よ、神よ、私に語ってくださったこの言葉に感謝します。私はこの言葉を、まるで美しい真珠のように大切に守り、失わないように大切に守るように。」
救い主：「よく言った。」

私は救い主に尋ねました。「主よ、不浄な霊が介入してきたとき、何か特別な兆候はあるのでしょうか。」
救い主：「その霊はすぐに疑いをもたらす。」
私：「愛するイエス様、今、私はとても素晴らしい安らぎと平安、そして温もりを感じています。私には
疑いはありません。」
救い主：「その状態にあるとき、私はいつもお前のそばにいるのだ、わが娘よ。」「私の魂は今、美しく清らかに
なっているに違いない。」
私はレントゲン室に呼ばれました。ミュラー社のエンジニアであるプフライデラー氏が、装置について私と話したいとのことでした。レントゲン装置についてはほとんど触れず、その代わりに神についてたくさん話しました。というのも、プフライデラー氏は大の懐疑論者で、教皇のことをひどく罵る人だからです。救い主が私に適切な言葉を授けてくださり、彼は満足して立ち去りました。
12時、アンジェラス後のこと：祈りが終わった後、私は救い主に、不浄な霊を見分けるためのさらなる特徴について尋ねた。また、ヴォクト神父のところに行くのが怖いとも伝えた。
救い主：「ほら、娘よ、その恐怖。でも、あなたは恐れてはいないね。」私は言いました。「実は、
そうなんです。」
救い主：「その通りだ。不浄な霊は恐怖を囁き込むのだ。」
私は繰り返しました。「では、疑いに続く第二の特徴は恐怖ということですか？」 救い主：「そう、それから不安だ
。」
救い主：「この状態にある人々は、時に自分を抑えきれなくなることがある。」私：「それなら、この状態
の人には話しかけられないですね。」救い主：「あまり話しかけないこと――すべてを謙虚さをもって。」
午後、私はフォクト牧師に電話をかけ、お時間をいただけないか、お話ししたいことがあると尋ねた。最初は断られた。しかし、救い主が牧師のために私に伝えてくださったことをお伝えしたいだけなので、ほんの少しお時間をいただきたいと伝えると、
すると、彼は17時30分に来ていいと答えました。
帰宅途中、ヴォクト神父のために「悲しみのロザリオ」を唱え、家に着いてからは、悪魔祓いの祈り、聖母への祈り、そして十字架の道の第7、8、9、10、11の stationsを捧げました。
心の中でヴォクト神父様のためにさらに祈りを捧げました。それから教会へ向かい、キリストの誕生の場面の前で、再びヴォクト神父様のために祈りました。
17時30分きっかりに、ヴォクト神父様の元へ着きました。
彼は私を温かく迎えてくれました。私の心には、ヴォクト神父への平安と愛が満ちていました。
私は一人ではないと知っていました。救い主が私と共にいてくださるとおっしゃっていたからです。そして、私はそれを信じています。
私が司祭にそのことを話すと、彼は「あなたはただ自分の気に入ったことしか言わない」と言いました。つまり、神は私を通して、私の気に入ったことを語っているというのです。
司祭：「そして私はあなたに言います。あなたは今、空想の世界に飛び込んでいます。あなたは心理学や神学の知識を持ち、自分の好みに合わせてそれを自分で考え出したのです。」
私は言いました。「私は神学なんて詳しくないんです。」 司祭：「いや、いや。」
私は、カトリックの教理を一度も学んだことがないことを思い出した。
私は神父様に尋ねました。「私がこれまで話してきたことのうち、何が間違っている、あるいは正しくないのでしょうか。」
彼は答えなかった。
私は、12月12日に義母が我が家を訪れた際、神父が私の住む2階に1分間も上がってこなかったため、私は激しく泣いたことを伝えました。 私は、心からイエスの十字架を抱きしめて泣きながら、救い主に「なぜ神父は私のところに来てくれなかったのか。私は彼のためにあれほど祈っていたのに」と尋ねたことを話しました。すると突然、私は泣き止み、救い主が私にこう言われました。「泣かないで、私の娘よ。彼には疑いと畏敬の念があるのだ。彼のために祈りなさい。」

この出来事についても、私が神父に話しましたが、彼は黙ったままでした。その後、彼はこう言いました。「すべてを、例えば戦争のようなことを、あなたが想像したわけにはいかないでしょう。」
私は彼に、イエスが私に求めている「十字架の道」を、彼は絶対に歩まないだろうこと、そして祈りの集まりですでにそのことをほのめかしていたと伝えた。
さらに、彼には私のために時間がないのだから、今はそのことについて話す必要はない、神の御心次第で、また別の機会に話せばよいだろう、と付け加えた。
さらに、祝福をお願いしました。私は床にひざまずきました。彼は私に祝福を与えてくれました。
彼と話すつもりは2分ほどだったのに、結局25分ほども一緒にいました。その後、私は教会へ向かいました。その神父様のために聖体拝領を捧げ、彼のために喜びのロザリオを祈りました。
ミサの冒頭で、ある声が聞こえました。「彼を信じますか？」私はその司祭のことを思い浮かべ、即座に「いいえ」と答えました。
救い主と一つになったとき、私は尋ねました。「救い主よ、その神父の言うことが正しいかどうか教えてください。もしかしたら私が間違っていたのかもしれません。」
救い主：「あなたはすでに、彼を信じていないと答えたではないか。」私：「でも、救い主よ、それだけでは私には足りません。」
救い主は、普段は穏やかに語られるのに、その時だけは少し力強くこう言われました。「あなたはすべて正しく言ったのだ、わが娘よ。」
「でも、牧師は、私がすべてを自分から言ったのだと言いました」と私は救い主に言いました。救い主：「誰も、自分自身の力だけで何かを行うことはできないのだ。」
私の心には平安があったが、同時に内なる痛みもあった。なぜなら、救い主がヴォクト牧師によって深く傷つけられたのを感じていたからだ。私は家に戻ってからも、ヴォクト牧師のために祈り続けた。私が最後にヴォクト牧師と話してから、ちょうど七日が経っていた。

1992年1月17日 - 金曜日

私の誕生日——しかし、私は仕事をしなければなりませんでした：
NATOの兵士である患者、マルティン・ヴォルフガング・Sp.さんがレントゲン検査にやって来た。私は彼に、ドイツとロシアの関係についてどう思うか尋ねた。彼は、「彼らには彼ら自身の問題がある」と答えた。それから、ロシアでの飢饉についてどう思うか尋ねた。
彼は非常に落ち着きがなく、私は彼の中に不浄な霊を感じ取ったが、その様子は表に出さなかった。それから、私は彼に自分の日記を見せた。そこにはこう書かれていた。「祈れ、祈れ、わが娘よ。ロシアから戦争がやってくる」
すると彼はさらに落ち着きを失い、まるで将軍のように威圧的な口調で、誰がそう言ったのかと尋ねてきた。私は「イエス」と答えた。彼は同じ口調でこう続けた。「イエスなんていない。私は無神論者だ」。それから彼は、神の存在を証明できるかと私に尋ねてきた。
私は「あなたは生きていますよね」と答えました。彼は「誰が私が生きていると断言できる？」と言いましたが、その鋭い口調は変わりませんでした。
私は彼にこう言いました。「ご存知ですか？私はあなたに話したのです。そうすれば、神の裁きの場で『何も知らなかった』とは言えなくなるでしょう。」
彼：「神の裁きなんてあると誰が言った？神なんていない！誰がそんなことを言ったんだ？」私は彼に尋ねた。「もし、次の1時間以内に神があなたを召したらどうする？」
それから私は彼との会話をやめ、外でレントゲン写真の結果を待つよう頼んだ。彼と話すことに意味がないと悟ったからだ。
心の中では、まるで悪魔の軍団が彼のそばにいるかのような感覚を覚えた。彼が去った後、私はその場一帯に聖水を振りかけた。
約1時間半後、10時10分頃、医師室にて：私は祈り、誕生日プレゼントとして、このNATO兵士である患者が改心することを願った。
この人に悪魔が取り憑いているのを感じたので、私は救い主に、それがどのような存在なのか尋ねた。
救い主：「わが娘よ、よく考えてみよ。神を否定する者、それがルシファーの悪魔だ。その魂は死んでいる。その願いは叶えてあげられない。」
そこで私は、もう一つ願いがあると伝えました。

「私がいつもあなたに忠実であり、揺るぎなくあり続け、ますますあなたを愛し、あなたの願いを叶え、最後の息を引き取るその瞬間まであなたに『はい』と言い続け、そしてあなたがいつも私と共にいてくださることを願います。」
救い主：「それを約束する。」
私はその意味が理解できなかったので、救い主はさらにこう言われました：
「私はその願いを叶えてあげよう。」
私は言いました。「ありがとうございます、主よ、私の神よ。これは私が今まで受けた中で最も素晴らしい贈り物でした。」
救い主：「私はあなたを愛している、わが娘よ。それを信じて。」私：
「この赤いバラの花束をありがとうございます。」
夕方、赤い服を着て教会へ：シスター、つまり修道女が聖体拝領を配っていました。その前に、私は聖体拝領を信徒から受け取らないよう祈っていました。私の番になった時、シスターは私の横を通り過ぎていきました。まるで魂が引き裂かれるような感覚を覚えました。私の心は大きな動揺に包まれた。その後、司祭がやって来て、私は彼から聖体
聖体拝領を受けました。
聖体拝領中、救い主と一つになったとき、あの強い動揺を感じたのは一体何だったのかと、私は救い主に尋ねました。
救い主：「それはサタンだった。彼はあなたの魂を破壊しようとしたが、私があなたと共にいるから、彼にはできな
かったのだ。」
家に帰ると、思いがけない来客があり、とても嬉しかった。さらに、大きな赤いバラの花束も贈られた。それは、救い主と、今朝の会話を思い出させてくれた。

1992年1月18日 - 土曜日

ヴァークハウゼルでの早朝ミサ：暗闇の中にエミリアン神父と、もう一人の司祭が立っているのが見えました。その司祭は聖体変容の際に混乱を起こしていました。 変容の後、再び明るくなり、司祭は一人しか見えなくなりました。それから目を開けると、エミリアン神父には髪がありませんでした。再び目を閉じると、エミリアン神父の代わりにイエス様が見えました。ある程度の暗さの中ではありましたが、それがイエス様であることは分かりました。イエス様は肩までの長さの髪をしていました。
家に帰って、その状況をもう一度振り返った後、私が見たものが本当だったのかと救い主に尋ねました。
救い主：「そうだ、君は苦しみを受けるイエスを見たのだ。」

1992年1月19日 – 日曜日

HI. 赤い祭服によるミサ
ロートでのロザリオと祈りの会。
夫は、私が破門されるという私の話を信じようとしませんでした。彼は、現代ではそんなことはもう起こらないと言いました。今は停職処分になるのだと彼は言いました。
そこで私は救い主に尋ねました：
救い主：「停止処分であれ破門であれ、その苦しみは同じだ。」私は司祭たちと修道士たちのためにロザリオを5
回唱えた。
私は試練に直面していたので、救い主に尋ねました。救い主：「そこには多
くの不浄な霊がいたのだ。」
私：「それなら、怖がらなければなりませんね。」
救い主：「私はその恐怖を取り除いてあげた。」

1992年1月20日 — 月曜日

病院—医師室：アロイス兄弟は、私が救い主と体験したことをあまり広めないようにと私に言っていた。そこで私は救い主に尋ねた。
救い主はこう言われました。「私があなたに啓示するすべてを語りなさい。——今こそ、そうす
べき時なのだ。」さらにこう続けられました。「恐れている人々の言葉に耳を傾けてはならない
。」

私はドチャート神父のことを尋ねた。
救い主：「彼にも伝えていい。ヴォクト神父の時と、同じようになるだけだ。」私は、神父たちに伝えたとしても、彼らが何か行動を起こしてくれるかどうか心配だった。
救い主：「あなたが司祭たちに話した後、彼らが何か行動を起こすかどうかは、私に任せておきなさい。さもないと、私があなたに啓示する内容の三分の之一も果たせないことになるだろう。」
私は言った。「ヴァーハウゼルに聖体拝領用のベンチを寄贈してください」
救い主：「もし私が彼らに聖体拝領用のベンチを贈れば、信者たちは再び手での聖体拝領をするようになるだろう。」
夕方の祈りの集い：多くの人が集まりました。告解が行われ、救い主が礼拝されました。祈りの集いの後、夫が私をひどく苛立たせました。彼は、救い主が私に語りかけているとは信じていないのです。その後、ドチャート神父が夫に対し、手での聖体拝領も正しいと確認しました。

1992年1月21日（火）

前日の夕方、私はロートの教会にいました。聖体拝領台の前でひざまずいていると、聖体奉仕者のアントンさんが私のところにやって来て、聖体を授けようとしてくれました。私は救い主に頭を下げましたが、聖体を受け取らず、自分の席に戻りました。心の中で聖体拝領を行い、救い主が私のところに来てくださり、その霊的な交わりの中で、私は非常に特別な恵みを受けました。
昼、病院の礼拝堂で、私は救い主に、前日の自分の行動が正しかったかどうか尋ねました。
救い主：「はい、その通りです。最高でした。」
夕方、ロートの教会にて：聖体祭の前に、またしても永遠の灯が灯っていませんでした。
それを見て、私はすぐに外へ駆け出し、祭壇奉仕者を見つけ、司祭に報告するよう伝えました。 しばらく経っても誰も来なかったので、ロザリオの代わりに『サンクトゥス』を絶えず唱え続けました。それから、守護天使、聖大天使ミカエル、ラファエル、ガブリエル、聖母マリア、そして聖ヨセフに呼びかけ、永遠の灯を灯す司祭を連れてきてくれるようお願いしました。
司祭がやって来て、モミの木の方まで行ったものの、永遠の灯を灯すことなくまた外に出て行ってしまいました。私は「サンクトゥス」を、ロザリオの一連の祈りを終えるまで、ずっと唱え続けました。そして、教会管理人の女性がやって来て、永遠の灯を灯してくれました。ちなみに、永遠の灯が灯っていないと、私は心の中に落ち着かない気持ちを抱いてしまうのです。

1992年1月22日 - 水曜日

早朝、夫から、私が夜中に苦しんでいて、大声でうめいていたと告げられた。
10時10分、医師室：私は救い主に、夜間に不浄な霊たちが私のそばにいたのかと尋ねた。救い主：「そう、わが娘よ、何人かいたのだ。彼らはあなたの魂を破壊しようとしているが、私にはできない。なぜなら、私があなたと共にいるからだ。」
私は、それを正しく書き留めたかどうか確認するために繰り返した。救い主：「そう
、わが娘よ、その通りだ。」
12時30分、礼拝堂にて：祈りの後、救い主は私にこう言われました。
「あなたが証しをするのは、神の御心である。」
以前、ドチャート神父から、救い主が私に語られることは私だけに宛てられたものだと聞いていたため、私は改めて尋ねました。
救い主：「それは、あなたのためであり、司祭たちのためであり、すべての人々のためだ。」
それから私は救い主に、不浄な霊が働いているときのその他の特徴は何かと尋ねました。
救い主：「混乱、信仰の欠如、そして神への愛の欠如だ」
数日前、救い主はすでに、不浄な霊が疑い、不安、そして恐怖をもたらすとおっしゃっていました。

16時30分から18時まで、私はノイブルク修道院にいました。スウィドベルト神父に日記を預けました。彼はとても親切な方です。私は彼に告解をし、彼は私のために悪魔祓いの祈りを捧げてくれました。修道院を出ると、すでに一人の男性が私を待っていて、私と一緒に街へ戻るつもりでした。 私は彼に、今日もう詩篇を唱えたかと尋ねた。彼は陽気に「はい」と答えた。それから、私は「聖霊よ、私の中に息吹を」という祈りもすでに唱えたかと尋ねた。彼は「はい」と言った。
私は彼を車に乗せました。彼が車に乗り込むと、すぐに不浄な霊が彼に憑いていることに気づきました。冗談めかして、私は彼に言いました。「あなた、不浄な霊が憑いているのをご存じですか？」
彼：「ええ、たくさんいますよ。――そのうちの1人は何ていう名前です
か？」私は、救い主に聞いてみると答えました。
その男性は、車中の間ずっと、奇妙な様子で鼻をすすっていました。夕方、私はミンゴルスハイムのロクス礼拝堂へ、聖体拝領のミサに出かけました。
聖体拝領の後、私の心には静けさと温もり、そして平安が満ちていました。私は、車に乗せてきたあの男性のことを救い主に尋ねました。しばらくは何も聞こえませんでした。すると、「私はあなたの魂を聖別する」という声が聞こえました。
すでに数日間、不浄な霊と戦っていた私は、救い主にこう言いました。「私の魂は、きっと羽をむしられた鶏のように見えるでしょう。」そう言いながら、私は笑ってしまいました。
家に帰ると、すでに一人の男性が待っていました。彼は私の家族の一員で、現在は離婚中ですが、これまでの人生で教会に行ったのはほんの数回だけでした。彼は絶えず爪を噛み続け、とても落ち着きがありませんでした。彼はどこにでも過ちを見出しますが、自分自身の過ちだけは認めようとしません。それを見た私は、別の部屋へ行き、彼と私の夫のために悪魔祓いの祈りを捧げました。

1992年1月23日 - 木曜日

車に乗せてあげたあの男性について、彼の中に悪魔の存在を感じたので、それがどのような悪魔なのかを救い主に改めて尋ねました。
救い主：「最上位の者はルシファーだ。複数いた。最上位の者が最も苦しんでいる。彼らがあなたの周りにいるときは、常に複数いるのだ。」
私は救い主に、すでにルシファーと戦っているのかと尋ねました。救い主：「そう、わが娘よ、君
はすでに何度も彼と戦ってきたのだ。」しかし、私は「私には彼と戦うことなど到底できない」と
言いました。
救い主：「だからこそ、私は常にあなたと共にいるのだと告げているのだ。」
ルシファーはどこにでもいることができます。彼は自由であり、誰にでも誘惑をかけることができるのです。
それから私は救い主に尋ねました。なぜヴォクト牧師は火曜日に、教会にいたにもかかわらず永遠の灯を灯さなかったのか、そして教会管理人の奥さんが後から来て、永遠の灯を灯したのかと。
救い主：「ほら、君は生きている。」
私はその意味を正しく理解できなかったので、尋ねた。救い主：「すでに多くの者が死んでいる。彼らはもはや生きておらず、見ることもできないのだ。」
その後、私はテレビについて尋ねました。
救い主：「それを見る者は皆、偶像崇拝者だ。」
私は、テレビを壊していいかと尋ねた。救い主はそれを許してくれた。
家に帰ると、まずテレビを階下に運び下ろし、誰ももう見られないように壊してしまった。まだ購入してから2年しか経っていなかったが、他の誰かがそれによって惑わされるのを避けたかったため、売る気にはなれなかった。
夕方：Hl。赤のミサ：
私は救い主に、テレビの件について尋ねました。
救い主：「君は正しく行動した。それは、私により近づくための進歩だ。」
その後、私は救い主に聖盤について尋ねました。もし彼が私の立場だったら、どうするかと尋ねたのです。
と尋ねました。聖体拝領をパテナを使って行うのと、使わないのと、どちらを好まれるか、と。

救い主：「娘よ、私にとっては無関心なことではない。私は常に司祭たちに、パテナを使うよう勧めるだろう。」私は、それをヴォクト神父に伝えてもよいかと尋ねました。
救い主：「ええ、愛をもってなら、何でも彼に伝えていいよ。」
昨日、私が悪魔祓いの祈りを捧げた男性が、今日病院を訪ねてきて、一晩中眠れず、汗だくになっていたと語りました。私は何度も彼に、祈り、告解に行くようにと伝えてきましたが、彼はそうしません。

1992年1月24日 - 金曜日

HI。赤いミサ。
同棲中の若いカップルが、何度か電話をかけてきて、スイス・ザンクト・ガレン近郊の御出現の地に関する映画を観に行かないかと誘ってきた。彼らは、私がそこへ行くようかなり強く勧めてきた。
救い主はすでに私にこうおっしゃっていました。「その映画を見る必要はない。」

1992年1月25日 - 土曜日

午前7時15分、ヴァーグハウゼルでのミサ：
聖体変容の前、暗闇の中に神父が立っているのを再び見ました。それはヴェルナー・エゴン神父でした。聖体変容の後、少し明るくなりました。私は彼のために祈りました。私は一番前の席に座っていました。しかし、ヴェルナー・エゴン神父は他の神父たちのように私の目を見ることができませんでした。彼が執り成しの祈りを唱えなかったことに、私は非常に驚きました。
12時15分、自宅にて「主の天使」の祈りの後、私は霊的に聖体拝領を行いました。私は救い主に、なぜヴェルナー・エゴン神父が執り成しの祈りを唱えなかったのかと尋ねました。
救い主：「彼はできなかったのだ。」
私は言いました。「それが理解できません。もっとはっきり教えていただけませんか。」救い主：「サタンが彼に話すことを許さなかったのだ。」
これで、私が闇の中で目撃した神父は4人目となります。
今日は、それを見ないようにと、ワグハウゼルへは行きたくなかったのですが。
本当はミンゴルスハイムのロクス礼拝堂に行きたかった。しかし、息子が車を駐車したせいで、車を出せなくなってしまった。そのせいで遅れてしまい、ミサが始まる7時にミンゴルスハイムに着くにはもう間に合わなくなってしまった。
やはり、私がヴァーハウゼルに行くのが神の御心なのだ。
17時15分：私は激しく泣きながら、この日記を誰のために書くべきなのか、そもそも誰かが読んでくれるのだろうか、と考えた。私は救い主に、これを書くべきかどうか尋ねた。
救い主：「書きなさい、わが娘よ。それは誰かの助けになるだろう。」
W.に住むマリオンについて、彼女がタイプライターでこの日記を書くのは正しいことなのかと尋ねた。救い主：「ええ、彼女にもそのための恵みを与えたのだ。」

1992年1月26日 – 日曜日

ヴォクト神父は日曜日、体調を崩し、ミサを執り行うことができませんでした。
朝5時に起きて、ロザリオやその他の祈りを捧げました。
私は、貧しい魂たちのために、また煉獄にいる司祭や修道者たちのためにろうそくを灯し、彼らのために聖水を注ぎました。祈りの後、私は救い主と心を一つにしました。私は、今日、聖書の朗読の礼拝を執り行うベネブッシュ嬢について、それが正しいことなのか、それとも間違っているのか、救い主に尋ねました。
救い主：「そう、わが娘よ、それは完全な異端だ。
私は救い主に、その司祭はそれを承認していたはずだと申し上げました。救い主：「彼はその責任を負わなければならない。」
私：「祈りの集会で、このことを話してもいいですか？」私は、司祭については何も言うべきではないと語っていたハンブシュ夫人のことを思い出しました。

救い主：「私があなたに教えていることと矛盾するならば、人々の言うことを聞いてはならない。
私は、なぜ信徒たちがそのようなことをするのかと尋ね、聖体拝領の配給のことを指していました。救い主：「彼らは私に対する畏敬の念がなく、私の声に耳を傾けていない。人々も共犯者なのだ。」
私：「なぜ人々なのですか？」
救い主：「彼らは（信徒たちのために）十分に祈っていないからだ。」
私：「でも、私の義母のように、それに満足している人もたくさんいますよね？」救い主：「彼らは盲目なのだ。」
（私は「盲目」とは書きたくなかったのですが、救い主が『書きなさい』とおっしゃいました。）それから救い主はさらにこう言われました。「心が硬くなった者たちを躾けるのは難しい。」私：「私の救い主よ、私は一体どうすればよいのでしょうか？」
救い主：「その願いについて祈りなさい。」
私：「救い主よ、そうすれば、あなたは冒涜され、辱めを受けることになります。」救い主：「そう、私はとっくにそうなっている。」
私：「なぜ、それを許しておられるのですか？」
救い主：「私はまだ人々を愛しているからだ。」私：「それについて、もう少し教えていただけませんか？」
救い主：「私は今もなお、苦しみを受けるイエスなのだ。」
夕方、ロクス礼拝堂で聖体礼儀に参列した。
今日から、日記をタイプライターで書き始めました。

1992年1月27日 - 月曜日

私は救い主に「言葉の礼拝」について尋ね、司教たちがそれに賛成していることを伝えた。
救い主：「賛成している司教たちのことなど、決して聞いてはならない。」救い主：「私の言うことを聞きなさい、わが娘よ。」
私：「あなたが私と共にいてくださることを、私はいつまでも信じ続けます。」救い主：「その通り、そう信じなさい、わが娘よ。」
私：「何かが私に降りかかってきたとき、私は何を知っておくべきでしょうか。」
救い主：「サタンはあなたを試すだろう。 あなたは司教とも話すことになるだろう。私があなたのために代弁する。私に忠実であり続け、揺るぎない姿勢を保ちなさい。サタンはあなたに多くの過ちを責め立てるだろう。それらはあなたの過ちではない。それらは教会が犯している過ちなのだ。あなたは多くの脅迫を受けるだろう。それらの脅迫を受け入れてはならない。真理に忠実であり続けなさい。なぜなら、最終的には真理が勝利するからだ。性急になってはならない。忍耐を尽くしなさい。」
私：「この優しいお言葉、ありがとうございます。
夕方、ロートの教会で追悼ミサがありました。フォクト神父は体調を崩されていました。ヴェッター神父が聖ミサを執り行いました。
その後、20時からは祈りの集いがありました。多くの人が集まっていました。ドチャート神父が告解を聞いていました。昼休みによく職場の礼拝堂で私と一緒に『主の天使』を唱えてくれたホルガーが、今日初めて私の祈りの集いに参加してくれました。彼はヒルシュホルンのクリストフと一緒に来ていました。
私はインフルエンザにかかっており、病欠中です。

1992年1月28日 — 火曜日

私はベッドに横たわり、祈りを捧げた。昨晩、フリドリンから電話があり、クロードが住んでいるルクセンブルクで、かつて聖母マリアの御出現があったかどうかを、救い主に尋ねてくれないかと頼まれた。 私はフリドリンに、救い主にそのようなことを尋ねるのは気が引けるし、果たしてそうするかどうか確信が持てないと伝えました。それは単なる好奇心のように思え、私はそういうことは好まないからです。しかし、今日の祈りの後、霊的聖体拝領を通じて救い主と一つになった時、やはり尋ねてみました。
救い主：「ええ、わが娘よ、その通りだ。そこでは聖母の御出現があったのだ。」私は、それが一度だけだったのかと尋ねました。
救い主：「いくつかあった。」

誰かが3回ドアベルを鳴らしましたが、私が開けようとした時には、もう誰もいませんでした。私は祈りを続け、再び救い主と一つになりました。ヴェッター神父、つまりフォクト神父の代理について尋ねました。彼は聖体をあまりにも素早く配ったので、私の口からまた落ちそうになりました。私は救い主に、それが私のせいなのかと尋ねました。

救い主：「その司祭は、畏敬の念なく聖体を授けている。」

9時25分、再び邪魔が入った。フリドリンからまた電話があり、ルクセンブルクでの御出現について尋ねてきた。私は救い主が言われたことを彼に伝えた。

その後、私は三度目に救い主と交わり、さらにこう尋ねました。

「救い主よ、なぜ司祭は聖体をそんなに急いで配ったのですか。彼には時間があったはずなのに。」さらに、それは人が多く、聖体配給の助手がいなかったからなのかと尋ねました。

救い主：「そう、それは人への恐れだ。不浄な霊はまず、司祭を人への恐れに陥らせようとするのだ。」

私は、エーリッヒがヴェッター神父のそのやり方を気に入っていたと伝えました。

救い主：「誰もが同じように見ているわけではない。君はいつも他の人たちよりも多くのものを見ているのだ。」

聖体を拝領した際、聖体が口から半分ほどはみ出していたので、私は指で聖体を口の中に押し込もうとした。 その時、ある声が聞こえました。「指で触れてはならない。」私はその通りにしませんでした。すると、その瞬間、聖体が私の口の中に入りました。今日、私は救い主に、昨日私にそう語りかけたのは誰だったのか尋ねました。というのも、その声を聞いた瞬間、私はまだ救い主と一つになっていなかったからです。

救い主：「それはあなたの守護天使だった。彼はよくあなたに語りかけている。」

私：「守護天使を崇め、彼に祈りを捧げていて本当によかった。」昨日の夜、祈りの集まりで：

他の人たちが聖体拝領をしている間、私は

救い主と霊的に一つになりました。というのも、私はすでにロートの教会で聖体拝領を済ませていたからです。私は落ち着きがなく、数分経ってようやく救い主と一つになることができました。私は救い主に、あれは何だったのかと尋ねました。

救い主：「不浄な霊が忍び込み、私の場所を奪おうとしているのだ。しかし、私がそこにいると、その霊は私の存在を感じ取り、退いていく。すべての魂は、自分の住まいに誰が居るかに注意しなければならない。その住まいが清く、何ものにも妨げられていないときだけ、私はそこに入るのだ。」

その後、私は救い主と深く一つになり、もう決して彼から離れたくなくなりましたが、人々は私が彼らと一緒に祈り続けるのを待っていました。たとえ私の隣にドチャート神父がいようとも。

私は救い主に、彼との交わりを中断したのは正しかったのかと尋ねた。救い主はこう言われた。「それは各人の自由であり、誰もが望むようにすればよい。あなたの意志以外、誰もあなたを私から引き離すことはできない。」

昨日、私が目を開けると、皆が私を見ていました。おそらく、私は他の人たちよりも長く救い主と一つになっていたからでしょう。ああ、他の人たちも、それがどれほど素晴らしいことかを知っていれば、彼らももっと長く救い主と一つになっていたことでしょう。その後、私は祈りのグループ全員と共に、「キリストの魂よ――私を聖別してください」という祈りを捧げました。

救い主は今日、私が不浄な霊にとって目の上のたんこぶであると仰いましたが、そのことについてはまだ十分に理解できていません。ただ、一つの言葉を心に留めています。ルカによる福音書21章36節「常に目を覚まし、祈り続けなさい。そうすれば、これから起こるすべての事から逃れ、人の子の御前に立つことができるでしょう。」

午後3時、自宅で聖母マリアに、私を救い主のもとへ導いてくださるよう祈りました。

私は、まだ直接会ったことはないものの、すでに彼のために何度も祈ってきたルクセンブルクのクロードのために、救い主に願いを捧げました。

救い主：「彼は選ばれた者だ。彼は司祭になるべきだ。彼のために多く祈らなければならない。」私は言った。「彼はひどく苦しめられているのです。」

救い主：「選ばれた者たちは皆、激しい誘惑にさらされているのだ。」私はその理由を尋ねました。

救い主：「わが娘よ、サタンは勝利者になろうとしているのだ。」

私：「クロードに希望はあるのでしょうか。」

救い主：「サタンはまもなく打ち負かされる。」

私：「それなら希望が持てます。」救い主：「そ
う、君たちは希望を持てる。」
私：「はい、救い主様、でも彼は今、働いています。」
救い主：「彼はその仕事に満足することはないだろう。」
それから私は、ランダースホーフェンの新入生、アンドレアスについて救い主に尋ねた。フリドリンが、彼のために
祈るよう私に勧めてくれたのだ。
救い主：「それは彼が経験しなければならない試練だ。」私：「それはあなたに
よるものですか、それとも不浄な霊によるものですか。」
救い主：「不浄な霊からだ。不浄な霊にとって、司祭たちに手による聖体拝領を強いることほど好ましいことはない
のだから。」
私はその理由を尋ねた。
救い主：「敬虔さが欠けているからだ。サタンは人間の弱点を知っている。」私：「それをフリドリンに伝え
てもいいですか。」
救い主：「そのために、あなたにそう言ったのだ。」
私：「ありがとうございます、主よ、神よ。彼にそう伝えます。」
私はすぐにフリドリンに電話をかけ、すべてを話した。彼はそれを書き留めた。それから彼は言った。「おかしいな。昨日、私は、クロードが選ばれた者かどうかを救い主に尋ねてくれるよう、君に頼む勇気がなかったんだ。
知りたかったのに、君が救い主に尋ねてくれた。私は彼に、それが自分にとって、それが正しかったという確認になった、と伝えた。

1992年1月29日 — 水曜日

ベッドの中で祈りました。長い祈りの後、私は救い主に、自分が大きな
罪人だと告げた。救い主に近づくほど、自分はより大きな罪人だと感じる。私は泣き、最初は救い主に何かを尋ねる勇気さえほとんどなかった。しかし、やがて息子のために、彼にまだ司祭になるチャンスがあるかどうか尋ねた。
救い主：「私に任せておきなさい。」
それから、聖体奉仕者を断り続けるべきかどうか、そもそも続けるべきかどうか尋ねました。救い主：「娘よ、今まで私があなたに言ったことを実行しなさい。」
私は、ファウスティナ修道女のように沈黙を守らなければならないのかと尋ねました。救い
主：「沈黙を守る必要はない。今こそその時なのだ。」私：「『今こそその時』だなんて、
私には理解できません。」
救い主：「わが娘よ、私たちに残された時間はごくわずかだ。
それはまた私にはよく分からなかったので、私が仕事に行くとき、遅刻しないように急いでいるのと同じようなものなのかと尋ねました。
救い主：「そして、私はあなたがたを、私が必要とする場所にいてほしいのだ。」私：「でも
、時間は永遠です。」
救い主：「私にとってはね。」
私：「それなら、私たちには限られた時間しかないということですね。」救
い主：「そう、わが娘よ。」
私：「それでは、誰が救われるのでしょうか？」救い主：「ごくわずか
だ。彼らは皆、自分が何をしているかを知っている。」
私：「でも、あなたは十字架の上で、『父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのか分かっていないのですから』とおっしゃいました。」救い主：「彼らには、自分が何をしているのか悟るための時間は十分にあったのだ。」
私：「これほど多くの残虐行為と不敬。私は、世界が大きな罪の中に沈んでいるのを見ます。」救い主：「そして、
私はもはやそれを救い上げることができない。」
私：「主よ、あなたは『罰を下すために永遠の時間がある』とおっしゃいました。」
救い主：「ああ、わが娘よ、その時間は残虐行為で溢れかえっているのだ。」
その重さに押しつぶされ、私はもはや救い主に質問したり、話をしたりすることができませんでした。まずはこのことを受け止めなければなりません。

私：「ああ、主よ、そもそも私は司祭のところへ行くべきでしょうか。」

救い主：「今、行けるか？」　私は「
いいえ」と答えました。
救い主：「私に任せておきなさい。」
私は約30分間、救い主と一つになっていました。しかし、本来ならもっと書き留めたかったのですが、あまり書くことができませんでした。これは簡単なことではありません。救い主の声を聞き続けるためには、常に集中力を保ち、心を静めていなければならないのです。
今朝は6時40分から9時50分まで祈りました。
11時、ロートの教会へ行きました。聖母マリアの祭壇のすぐ前で、ろうそくを2本灯しました。全世界のために慈悲のロザリオを唱えました。苦難のロザリオは、すでに自宅で唱えていました。
午後、森を散歩しながら、さまざまな願いを込めてロザリオを数回唱えました。天気も良く、太陽が輝いていました。すると、立ち止まってルルドの「アヴェ」を歌っていると、突然またたくさんの鳥たちが現れ、私と一緒にさえずり、歌ってくれました。
とても素敵なひとときでした。どうせ墓地の前を通る予定だったので、H. ケストル神父の墓を訪れ、そこで祈りを捧げました。
夕方、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で聖体礼儀に参列しました。聖体礼儀前のロザリオの祈りの間、聖体礼儀の間、そしてその後も、私は涙を流していました。まるで誰かが私と一緒に泣いてくれているかのように、涙を止めることができませんでした。

1992年1月30日 — 木曜日

ベッドの中で約1時間、祈りを捧げました。それから、救い主と心を一つにし、また涙を流しました。そこで、昨日ロクス礼拝堂であれほど泣いてしまったことについて、救い主に尋ねました。
救い主：「あなたのイエスは、この世の状況のために、あなたと共に泣いているのだ。」
静寂と深い安らぎが訪れた。私は救い主にこう言った。
「あなたは私にあまり話しかけてくれないね。」
救い主：「愛する神は、あまり語らないものだ。」 私：「
でも、あなたの声があまりよく聞こえないんです。」 救い
主：「だが、君は理解したのだ。」 私：「はい。」
昨日、私は聖体拝領台で一人ひざまずいていたので、立って聖体拝領を受ける人々のために祈りました。
救い主：「聖体拝領の際に立つか跪くかは、それぞれが私をどのように敬うかによるのだ。」私：「信者たちが立っているとき、彼らはあなたを敬っているのですか？」
救い主：「いいえ。それは傲慢です。」
私：「でも、司祭たちは、互いに聖体拝領を授け合うときは立っていますよね。」
救い主：「司祭は第二のキリストであり、彼には敬意を払わなければならない。神の恵みにある司祭は、聖体拝領の際に誰にも立ち上がるよう強要することはない。」
救い主：「不浄な霊は、人がその意志を委ねない限り、誰にも強制することはできない。」
救い主：「人々にこう告げなさい。『主よ、私たちを人への恐れから解放してください。なぜなら、ほとんどすべての人がその虜になっているからです。』」
私：「人への恐れについて、私が知っておくべき重要なことは何ですか。」救い主：「人への恐れは、常にサタンによって引き起こされる。」
私：「しかし、私たちは神の子であり、サタンの子ではないはずです。」
救い主：「だからこそ、サタンではなく、神を畏敬しなければならないのだ。」
救い主：「人々は、『主よ、御霊を見分ける賜物を私たちに与えてください』と、どれほど祈っていないことか。」
私：「それなら、あらゆることを祈り求めなければならないのですね。」
救い主：「そう、わが娘よ。人を恐れる心は、人々を襲う大きな悪である。」

私：「人を恐れる心が、人を地獄へと導くことがあるのですか？」救い主：「はい。」
私：「司祭たちはそれを信じるでしょうか？」救い主：「
ごくわずかでしょう。」
その間ずっと、私の心には温かさと安らぎ、そして特別な静けさが満ちていました。それはとても素晴らしい感覚で、まるでこの世のあらゆるものから切り離されているかのように感じられます。「主よ、ありがとうございます。このような瞬間、私はとりわけ深く信仰を抱きます。この合一の瞬間には、わずかな疑いも、自分に何か問題があるかもしれないという感覚も一切ありません。なぜ、いつもこのままでいられないのでしょうか。なぜ、絶えずこのような誘惑が私を襲うのでしょうか」と、私は救い主に言いました。
救い主：「そこから解放されるのは、天国に行ってからだよ。」私：
「つまり、楽園のことですね。」
救い主：「そう、そう、その通りだ。」
私：「主よ、私の神よ、私は心から、私の全存在を込めて、あなたを愛しています。」救い主：「私もあなたを愛しているよ、私の娘よ。平安のうちに去りなさい。」
9時から11時まで、私は多くの祈りと聖霊のロザリオを捧げました。その後、約30分間、救い主と一つになりました。また、今夜2時～3時の間に、悲しみのロザリオ、聖傷のロザリオ、そして聖なる尊い御血の連祷を捧げました。
午後、森の中でさらにラテン語でロザリオを2回、その他の祈りも捧げました。最初のロザリオを終えた後、鳥たちが再び私と一緒に美しく歌ってくれました。それはルルドの「アヴェ」でした。
数日前から、ロクス礼拝堂で知り合ったレッシュ神父のために祈り続けています。ある力が私を彼のもとへ引き寄せ、彼と話すように促しました。森から戻ると、聖母マリアの像のもとへ行きそこで祈り、それからイエスの十字架のもとへ行って少し祈りました。その後、私は救い主と一つになりました。 私は少し焦りを感じており、自分の魂に十分に注意を払っていなかった。
心の中に静けさを見出していたにもかかわらず、次のようなことが起こりました。
私は救い主に、レッシュ神父のもとへ行くべきかどうか、それが救い主の御心であるかどうか、そして神父が私と話をしてくれるかどうかを尋ねました。
すると、声が聞こえてきました。「その司祭のところへ行って、何をしたいのですか？」
私はためらいながら答えました。「告解をし、ここ数日あなたが私に語ってくださったことについてお話ししたいのです。」
その声は言いました。「彼のもとに行く必要はない。今日は家にいなさい。」
私は最初、驚きましたが、その言葉を反芻し、「…今日は家にいなさい」という言葉を心の中で繰り返しました。そして、「どういうことだろう？救い主は今日、私を教会に行かせたいはずなのに」と考えました。
疑念が湧き、私は十字を切った。そして再び救い主と心を一つにした。すると、こう聞こえてきた。
「今、私の声がわかったか？」
心の中で私はこう言いました。「はっきりとは分かりません。」
すると、こう聞こえてきた。「司祭のところへ行きなさい。彼があなたに話しかけてくれるでしょう。」
私は救い主に言いました。「不浄な霊が私に話しかけたのではないかと注意しなければなりません。そして、そのことを日記に書き留めました。
救い主：「これまでのことはすべて正しい。もしそうだったら、私はとっくに君に注意を促していたはずだ。」
その後、私は安心した気持ちでレッシュ神父のもとへ向かった。17時30分から18時30分頃まで、彼と話をした。彼は私に、知っておくべきことを教えてくれ、それは私にとって大きな助けとなった。レッシュ神父はザールラント州出身で、アフリカで宣教師を務めており、現在はミンゴルスハイムで療養中だ。 神父は私の話を注意深く聞いてくださり、救い主はいくつかのことを繰り返し伝えたいとお考えなので、引き続きその声に耳を傾け、すべてを必ず書き留めるようにとおっしゃいました。 最後に、私は彼に告解をしました。「たとえ軽微な罪であっても、それが私の心に重くのしかかっている。私は完全に清くなりたいのです」と伝えました。その後、礼拝堂へ行き、四つの十字架の道の stations を祈り、その後、信者たちと共にロザリオを唱えました。レッシュ神父が聖ミサを司式されました。とても素晴らしい時間でした。

1992年1月31日 — 金曜日

ベッドの中で1時間以上祈りました。悲しみのロザリオを祈り終えた後、霊的に聖体拝領を受けました。私は救い主に尋ねました。「昨日、最初に私に話しかけてきたのは悪魔だったのでしょうか」。

救い主：「はい。」

私：「それはどの悪魔でしたか？」

救い主：「ルシファーの悪魔だ。私は、お前が試練に遭うことを許したのだ。」救い主：「そうして、彼はほとんどすべての人間を欺いているのだ。」

私は昨日のこと、そして悪魔の声を改めて思い返した。その声には、救い主のような優しさはなく、命令口調の鋭い声だった。

そこで私は救い主にこう尋ねた。「私が話しかけたのはあなたなのに、なぜあいつが私に話しかけることができるのですか？」

救い主：「私が許したのだ。そうでなければ、彼にはそうすることは許されない。」

常に警戒を怠ってはならない。救い主が言われたように、悪魔はほぼすべての人々を惑わすからだ。

私：「昨日、レッシュ神父と約1時間ほど話をしました。それには意味があったのでしょうか？」救い主：「はい、意味があります。彼にとっては大きな意味があるのです。」

現在、私は右手と右足、つまり救い主が釘で貫かれた箇所に痛みを感じています。これは以前にも何度かあり、時には軽かったり、時にはひどかったりします。時には、痛みのあまり叫び出したいほどです。

私は救い主に、これが何を意味するのか尋ねました。

救い主：「それはサタンだ。だが、その激しい痛みは私が取り除いてあげよう。」

この痛みの中で、「多くの魂の救いのためにこの痛みを捧げます」とか、「多くの魂がこれによって回心しますように」と祈ると、痛みが消えることがよくあります。私の頭痛も同様で、祈りながら、罪人の回心のためにイエスの苦しみと自分の頭痛を結びつけると、頭痛が消えてしまいます。 8年前に洗礼を受けて以来、私はもう錠剤を一切必要としなくなりました。その代わりに、今ではしっかりと聖別された聖水や、料理に使う聖別された塩、聖別されたろうそくを多く使っています。「しっかりと聖別された」とは、古い典礼に従ってラテン語で、肉体と魂の救いのために聖別されたことを意味します。

古い典礼では、聖別された物に対して悪魔祓いの祈りも捧げられます。この祈りは、現代において特に重要です。また、聖水には聖別された塩も加えられますが、現代の司祭たちはもはやそれを行っていません。

ゲブハルト・ハイダー神父は、本来あるべき姿通りに聖別を行われます。聖別には必要な時間をしっかりと割いておられます。私がまだその様子を目にすることができたことを、神に感謝します。

1時間にわたる祈りの後、私は救い主と心を一つにし、どの魂たちが泥の中にいるのかと尋ねました。というのも、以前、救い主が私に、「泥の中にいる人々のために祈りなさい」と仰っていたことを思い出したからです。私はすでに5人の司祭に、それがどういう意味なのか尋ねてみましたが、皆、それぞれ違う答えを返してきました。

救い主：「書き留めなさい。聖体拝領に値しない魂たちは、泥の中にいるのだ。」（泥とは罪のことである。）

救い主：「その泥は私に嫌悪感を抱かせる。」

私：「どのような魂が、ふさわしくない状態で聖体拝領をしているのですか？」救い主：「神の栄光を軽んじる者たちだ！」

救い主：「年に1、2回しか懺悔の祈りに参加せず、耳元での懺悔も受けない者たちは、泥の中にいる。手による聖体拝領のみを行うすべての司祭は、泥の中にいる。信者たちは聖体を手に取るが、彼らは神への畏敬の念を持たないため、共犯者である。」

私：「それなら、ゲブハルト・ハイダー神父は正しかったのですね。彼は、不敬な形で聖体拝領を行う者たちは泥の中にいると私に言いましたが、他の司祭たちは違うことを言っていました。私の地元の司祭であるフォクト神父は、ゲブハルト・ハイダー神父の言葉を信じませんでした。」救い主：「彼らは私の言葉を信じましたか？」

書き留めておかなければならないのは、私が他に尋ねた4人の司祭たちは、口による聖体拝領に加え、手による聖体拝領も行っているという点だ。
ゲブハルト・ハイダー神父は、これまで一度も聖体を手に渡したことがなく、本来あるべき姿通り、口での聖体拝領のみを行ってきた。口での聖体拝領のみを行っている司祭を、他にも何人か知っている。手に聖体を渡さないこのような司祭たちが、まだ存在していることを神に感謝する。
救い主：「この泥が教会から取り除かれるよう祈りなさい。」私：「ああ、救い主よ、口での聖体
拝領を受ける者はなんと少ないことか。
救い主：「そして、わたしへと続く狭い道を進んでいる者は、なんと少ないことか。
広い道は人で溢れかえっている。今、教会の中には、外にいる者たちよりも多くの罪人がいる。」わが主、わが神よ
、もうこれ以上書くことができません。
重すぎて、まるでこの罪が私の上にのしかかっているかのようです。私は泣いています。あまりにも辛くてたまりません。
私：「誰が私を信じてくれるでしょうか？」
救い主：「誰があなたを信じるか、心配するな。それは私の問題だ。」
私：「主よ、私の神よ、ありがとうございます。私は、あなたが私に命じられたこと、そして私にできる限りのこと
を行います。」
その後、手で聖体を受けるすべての人々のために祈りました。神が彼らを赦し、深い悔い改めの心を授け、神への畏敬の念を彼らの心に呼び起こしてくださるようにと。また、すべての人々が光を受け、それが神への冒涜であることを悟れるよう祈りました。
その後、私は多くの恵みを受けました。心に温もりを感じ、深い平安に包まれ、先ほどまで背負っていた重荷は消え去っていました。
私：「主よ、私の神よ、感謝いたします。あなたは与え、また取り去られる方です。」それから、私はさらに心から少し祈りました。
すると、救い主は「平安のうちに去りなさい」とおっしゃいました。
私は大きな喜びを抱きながら、その後1時間ほど、良書に目を通しました。
11時50分：医者のところへ行った。待合室に座っていると、内なる声が「祈りなさい」と聞こえた。まず一人の女性から不浄な霊を感じ、次に二人の男性からも感じた。 私は内なる攻撃を受け、彼らのために祈りました。すると頭痛がして、それがどんどん強くなっていきました。受付の女性は私のことを忘れてしまい、他の患者を優先していました。私は、聖体拝領を迅速に行う司祭たちのために、この忍耐を捧げました。約45分が過ぎた頃、受付の女性がやって来て、私のことを忘れていたことを謝罪しました。
私は彼女にこう言いました。「いいえ、あなたは私を忘れていたわけではありません。それは神の御心でした。なぜなら、私は患者たちのために祈っていたからです。彼らの中には悪魔が宿っていたのですから。」

医師の診察室で座っていると、私たちは神について話し始めました。頭痛がますますひどくなり、もう頭が割れてしまいそうだと感じました。私は医師に、これは贖罪の苦しみであり、罪人の回心と魂の救いのためにこれを捧げていると伝えました。
医師は、自分はそんなことはしないと言いました。彼は私の血圧を測定し、「それは私には到底言えません」と言いました。
私は「何ですか？」と尋ねました。
私の血圧は180/90でした。
頭は真っ赤になり、ひどい頭痛に襲われていました。
医師は高血圧の薬を処方してくれました。私は家に帰り、ベッドに横になりました。
家に帰ると、痛みはさらに強くなりました。その頭痛を抱えながら、私は十字架の道を祈り、その後、イエスの最後の七つの言葉を祈りました。
15時になると、痛みは消えました。しかし、私は薬を一切飲んでいませんでした。その後、かなり力が入らなかったのですが、15時30分には、何事もなかったかのように再び起き上がりました。痛みはすっかり消えていました。

夕方、私はロートでの聖体拝領ミサに出席しました。聖体拝領の後、私は救い主にこう尋ねました。「どうか、救い
主よ、教えてください。今日の正午の12時から
15.00 Uhrの間、あなたが私に与えてくださった贖罪の苦しみだったのですか
？」と尋ねました。救い主：「はい。」
私は、これが初めてのことではないと尋ねました。救い主：「いいえ。」「またそれを望みま
すか？」
私：「はい、それで魂が救われるのなら。でも救い主、私がどれほど耐えられる
か、あなたはご存知でしょう。」

1992年2月1日 — 土曜日

7時15分、ヴァーハウゼルの聖ミサにて。
午後、私は救い主と心を一つにし、「永遠の灯」について尋ねました。教会（ロート）でその灯が消えていたからです。私はロートの教会にいて、永遠の灯が消えているのを耐えられませんでした。そのせいで心の苦しみを感じ、祈ることができませんでした。私は救い主に、誰かを呼んで灯を点けてもらうのが正しいかどうか尋ねました。
救い主：「あなたはそれをとてもよくやった。」
さらに私は救い主に、ヴォクト牧師のところへ行って、イエスの願いについて話し合うべきかどうか尋ねました。
救い主：「もう少し待ちなさい。」
私：「つまり、彼のことを祈るべきということですね。」
救い主：「その通りだ。」
17時10分：家に帰り、すぐにヴォクト牧師のために約30分間祈りました。その直後、私の魂は攻撃を受けました。その後、さらに1時間、途切れることなく祈り続けました。夫は私のそばにいましたが、心の中では不満を抱き、落ち着きがなく、怒りを感じていました。すべてが彼の邪魔になっていたのです。
不浄な霊たちが再び現れたことを悟り、さらに熱心に祈り続けた。
その後、客が訪ねてきました。その客は、自分が洗礼を受けているかどうかさえ知りませんでした。というのも、彼の父親はセルビアの共産主義軍の上級将校だったからです。
私にとっては非常に辛い状況でした。何度も自分を卑下し、彼の問題解決を手助けしようと努めました。心の中では、まるでセルビア軍全体が私に襲いかかってきたかのように感じていました。その間、夫とも話すことができなかったため、不浄な霊の軍勢が去り、雰囲気が良くなるまで、私は祈り続けました。

1992年2月2日 - 日曜日 — 聖母の献堂祭

私は約1時間、祈りを捧げました。私は救い主に、司祭たちのために祈ると、特に激しい攻撃を受けることに気づいたと伝えました。
救い主：「善良な司祭を擁することは、悪魔と戦うために多大な力を要する。あなたは司祭のために多くの祈りを捧げてきた。善良な司祭は第二のイエスであることを忘れてはならない。そして、第二のイエスのためには、多くの祈りが捧げられなければならないのだ。」
私：「不浄な霊たちが、私を誘惑するために夫にも取り憑いているのを感じます。
救い主：「彼はもっと祈らなければならない。」
私：「でも、昨日、夫とのこの戦いは、途切れることなく約3時間も続きました。」救い主：「サタンは、あなたが多くの魂を彼から奪っていることに怒っているのだ。」
私：「彼と戦うことを恐れてはいません。」救い主：「その恐れは、私が取
り除いてあげた。」
私：「あなたを愛しているから、戦うのをやめないわ。だって、すべての魂はあなたのものだから。」救い主：「その通りだ。
だが、サタンもそれらを手に入れようとしている。」
私：「それなら、戦いは永遠に続くのですか？」 救い主：「
そう、最後の罪が償われるまで。」 私：「それがどういうこ
とか、私にはわかりません。」
救い主：「最後の罪が償われるまでだ。」

私：「ああ、救い主よ、もう何も書く必要はないのですか？」
救い主：「いいえ、書き続けてください。人々は絶えず、休むことなく祈らなければなりません。罪は善を上回っています。人々は深い泥沼の中にいます。その泥沼は人類を窒息させようとしています。」
これ以上書くことはできません。これらすべてを書き留めるのは、私には重すぎるからです。
主よ、神よ、感謝いたします。私はあなたを愛しています。そして、あなたを愛さない人々のためにも、あなたを愛しています。あなたを礼拝せず、賛美しない人々のためにも、私は常にあなたを礼拝し、賛美し続けます。
主よ、私に降りかかるすべてのことを、マリアの無原罪の御心を通して、あなたの御手に委ねます。

1992年2月3日 - 月曜日

私は救い主に、自分の日記を正しく書いているかどうか尋ねました。
救い主：「あなたが書いたことは正しいと確信しなさい。不浄な霊は、常にあなたを真理から遠ざけようとするだろう。」
私：「他の人たちにも恵みをお与えください。」
救い主：「彼らがそれを受け入れるなら。」
（私は夫や、苦難に直面している人々のことを思い浮かべました）。私：「私たちの祈りの会について、何が気に入らないのですか？」
救い主：「謙虚さが欠けている。まだ誇りが多すぎる。」私：「それを彼らに伝えるべきですか？」
救い主：「あなたは彼らに伝えなければならない。彼らが心を閉ざしてはならない。そうしなければ、私は彼らに恵みを与えることができない。」
私：「それはなぜですか？」
救い主：「敬虔に祈らなければならない。祈りは口先だけでなく、心から湧き出るものでなければならない。」
私：「告解について、何かおっしゃることはありますか？」
救い主：「もっと悔い改めの心を持たなければならない。たいていの場合、改心する決意が欠けている。私への忠誠を貫きなさい。救い主：「これまで以上に祈りなさい。」
私：「救い主よ、私があなたに伝えたことを信じない者もきっといるでしょう。」救い主：「あなたが伝えた。それで十分だ。」
私：「『それで十分』とは、どういう意味でしょうか。」救い主：「耳のある者は、聞きなさい。」
私は、特に祈りのグループの回復を願って、心を込めて祈り続けました。合計で約1時間半ほど祈りました。
夕方、ロートでミサに参加しました。
その後、20時に私たちの祈りの集まりがあり、私は救い主が語られたことを伝えました。その夜は、いつもよりずっと美しく、敬虔な雰囲気の中で祈りが捧げられました。
祈りの集まりの後、私はドチャート神父にもそのことを伝えました。しかし、神父はそれについて何も言及しませんでした。

1992年2月4日 — 火曜日

早朝、約2時間、祈りに没頭しました。昨日の夜、祈りの集会で霊的な聖体拝領を受けましたが、その前にはロートでの聖ミサに参加し、秘跡による聖体拝領も受けていました。私は救い主に、昨日の夜、私が霊的な聖体拝領を受けたとき、私のそばにいてくださったのではないかと尋ねました。
救い主：「私はあなたと共にいた。」
私：「なぜ私の心臓はあれほど激しく鼓動していたのでしょう。主よ、あなたは私に話しかけてくださらないのです。」救い主：「あなたの主は、ご自身の望む時に語られるのだ。」
救い主は沈黙されました。
私は涙を流しながら言いました。「神なき無などあり得るのでしょうか？」
それでも、私は静けさと平安の中にいます。私は一人ではありません。主は私と共にいますが、沈黙しておられます。普段なら、神が眠っておられるなどとは想像もできません。

すると、私はとりわけ心地よい安らぎを感じた。すべてから解放されたような気分になり、主よ、あなたが私と共にいてくださると信じているからこそ、このままで何時間もいられるような気がした。
私が抱えていた疑念は、主によって取り除かれました。もう何も残っていませんでした。 主よ、私の神よ、感謝いたします。まるで昨日の痛みから私の魂が癒されたかのようでした。教会での泥の件で苦しんでいたからです。私は、父に腕に抱かれ、その胸に寄り添う小さな子供のようでした。その子は父に愛され、その愛だけで満足し、父の腕の中で安らぎ続けています。
悪はなんとすぐに現れることか。少し後、私はある声を聞
いた。
「今、あなたは一つになったのか？」
私は「はい」と答えましたが、それは主の声ではないと思います。主の声は違う響きをするからです。また、いつものように心の奥底からその声が聞こえてきたわけでもありませんでした。おそらく、私を混乱させようとするだけの、あのおしゃべりな不浄な霊がまた働いていたのでしょう。
そこで、私は再び祈りを捧げ、その者を追い払おうとした。そうしなければ、私はその者から逃れられないからだ。
というのも、あいつは私を不安や混乱、疑念に陥れようとするだけであり、それはただ不浄な霊に過ぎないからだ。夕方、ロートにある教会でロザリオを唱え、聖ミサに参加した。

1992年2月5日 — 水曜日

ある司祭が、私との告解の会話中に、その目をじっと見つめてきたので、私は腹を立てていた。彼の目を見るのは不快だった。ゲブハルト・ハイダー神父の時には、そんな経験は一度もなかった。そのことについて、私は救い主に尋ねた。
救い主：「それは、あなたの揺るぎない信仰を破壊しようとしている不浄な霊だったのだ。」私：「その司祭は、自分の目
が何をしているのか分かっているのですか？」
救い主：「ああ、彼は分かっている。それは、あなたの魂が感じ取り、抵抗している誘惑なのだ。」この目を見開いてじっと見つめるような視線は、すでに3回も経験した。
私：「なぜ彼はそんなことをするのですか？」
救い主：「彼には超自然的な信仰が欠けているからだ。超自然的な信仰を持っている司祭はごくわずかだ。」
この司祭は、破門の話など信じていません。夫も同様です。私：「彼らが信じないなら、私は何と言えばいいのですか？」
救い主：「黙っているのが一番だ。」
私：「黙っていても、何の意味があるの？」救い主：「謙虚さだ。」
私は救い主と、まだしばらくの間、心から語り合った。それから私は救い主に言った。「私は世俗的なものを嫌悪
しています。」
救い主：「それを書き留めなさい。」
私：「天の生活に備える時間は、なんと少ないことでしょう。テレビを家から追い出して本当に良かった。主よ、私の神よ、そのことへの感謝の気持ちは言葉では言い尽くせません。」

1992年2月7日 - 金曜日

この日は家にいました。7時から8時30分まで祈りを捧げました。私は救い主に、また贖罪の苦しみを味わうことになるのかと尋ねました。」
救い主：「あなたは再び贖いの苦しみを味わうことになる。」
私：「私は、救い主が望まれるように、司祭様が聖ミサの前に信者たちと共にロザリオを唱えることができるよう、また、司祭様が口による聖体拝領のみを授け、信徒が聖体を配ることをもう行わないように、そのためにこの苦しみを捧げます。
さらに、司祭が人の目を恐れることから解放されるよう、この苦しみを捧げます。そして、愛する救い主よ、彼に謙遜の心をお与えくださるようお願いします。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。あなたの町でわたしを侮辱し、敬虔さを欠いて聖体拝領を受ける者たちすべてのために、贖罪を捧げなさい。」

私：「主よ、私の神よ、お願いいたします。あなたが私に与えてくださる苦しみを受け入れることができるよう、多くの恵みをお与えください。主よ、私の神よ、あなたへの深い愛のため、そして広い道を進んでいる魂たちの救いのために、私はこの苦しみを受け入れます。
主よ、私の神よ、しかし、御心が行われますように。」救い主：「わが娘よ、あ
なたが書いたとおりにしなさい。」
私：「主よ、神よ、あなたが私に与えてくださる苦しみに対して、あらかじめ感謝いたします。あなたと共に苦しむこと、その覚悟はできています。私が何を耐えられるか、あなたの方がよくご存知ですから。
私は救い主に、これからも主の御心の中に留まりたいと伝え、数分間絶え間なくこう祈りました。「私の救い主よ、私と全世界のために、赦しと恵みと憐れみをお与えください。
自分だけでは何もできませんが、あなたと共になら、私はすべてを成し遂げることが
できます。10時40分まで、また良い本を読みました。

1992年2月8日 — 土曜日

ヴァーグハウゼルで聖ミサに出席した。ヴェルナー・エゴン神父のミサの司式ぶりは全く気に入らなかった。祈願さえ唱えなかったのだ。
16時20分から17時50分まで、私はひざまずいたまま、ヴォクト神父のためだけにロザリオを4回、そしてその他の祈りも絶え間なく捧げました。
この時間を彼のために喜んで捧げました。というのも、そのための恵みも授かっていたからです。私がヴォクト神父のためにどれほど祈っているかを、神様が見ていてくだされればそれで十分です。私は、キリストを愛するのと同じように彼を愛することはできないと分かっていますが、そうありたいと願っています。なぜなら、彼は第二のキリストであり、神様が彼のもとに導いてくださる魂たちに対して、彼が大きな責任を負っていることを私は自覚しているからです。 だからこそ、司祭たちのために祈ることはいくらあっても足りないのだと言います。なぜなら、神の恵みの中で生きる司祭は、多くの魂を地獄の深淵から警告し、彼らを楽園へと導くことができるからです。

1992年2月9日 - 日曜日

6時30分～8時00分：約1時間祈りを捧げ、約30分間、救い主と一つになりました。
救い主：「今、サタンが人々の心を支配している。」 私：「でも、あな
たはすべての心の王ではありませんか。」
救い主：「ほとんどすべての人が、私に対して心を閉ざしている。」私：
「私はそれを正しく書き留めましたか？」救い主：「あなたは私のために
それを書いたのだ。」
私：「救い主よ、彼らはなぜ心を閉ざしているのですか？」
救い主：「高慢、私への愛の欠如、憎しみ、そして広い道から立ち返りたくないからだ。」
私：「救い主よ、先ほど私が『アヴェルテレ、アヴェルテレ』と泣きながら言った時、あなたが
ドン・ボスコが言われた、つまり『人生を変える』という意味の言葉に、私の目からは真珠のように、次々と涙が溢れ出ました。それはまったく超自然的な体験で、私は畏敬の念を抱きました。」救い主：「そう、それは私の涙でもあったのだ。」
私：「私には良い霊的指導者が必要です。ええ、あなたがいらっしゃいますが、司祭も必要です。」
救い主：「ヴォクト神父のところには、まだ行けない。適切な時が来るのを待ちなさい。」
私：「救い主よ、昨日、彼（フォクト神父）のためにロザリオを四回唱えました。それは効果がありましたか？」
救い主：「ええ、彼には効果があったよ。」
私：「救い主よ、フォクト牧師は、私が自分のことを話していると思っているようです。」 救い
主：「皆そう思っているが、私なしでは、お前たちは何もできないのだ。」
救い主：「自分の罪を悟るには、あとどれほどの謙虚さが必要なのか。祈りなさい、わが娘よ、たくさん祈りなさい。」

私はロートでの聖体礼儀に参列した。
13時から、ヴォクト神父のためにロザリオを唱えました。神父が至聖体の前でひざまずき、聖心への祈りを捧げているのを見て、私は幸せを感じました。 彼が周辺の村々のすべての司祭たちの模範となるよう、私は祈りました。私は、彼らの中にイエス様しか見えないような司祭たちを望んでいます。そのような司祭たちは、祈り求めてこそ得られるものです。なぜなら、私たちがただそう願うだけで、私たちの神は豊かな恵みを注いでくださるからです。ヴォクト神父様が神の御心を全うされるなら、彼は人々に愛される司祭になるだろうと私は信じています。
いつか、彼が今よりも私をより深く理解してくれる日が来るでしょう。私は彼のために祈ることを決してやめないつもりです。
14時30分。スイスのパヴァール氏から電話がありました。彼は時々電話をくれます。私たちは互いに信仰を励まし合っています。彼とはエルサレムで知り合いました。彼は巡礼団の中で、私の話に耳を傾けてくれた唯一の人でした。他のクロアチア人たちや司祭たちは私を嘲笑し、あざ笑いました。私は孤独を感じ、まるで皆に見捨てられたかのようでした。
エルサレムでマサダへ歩いて向かっていた時、私はその巡礼グループと司祭たちのために、ロザリオを何度も唱えました。皆が頭痛に悩まされる中、私はとても心が軽くなり、もう一度その山を登り切れるような気分でした。そのおかげで、私は多くの恵みを受けました。スイスのパヴァールさんは、そのグループの中で、メジュゴリエでの私の回心を信じてくれた唯一の人でした。
17:00〜18:00　まず、ファウスティナ修道女の著書を読みました。1時間後、私は救い主と一つになりたいという切なる願いを抱きました。 私は主に向かって心から祈りました。しかし、誘惑も襲ってきました。私は激しく泣き、何か間違ったことをしてしまったのではないかと考えました。しかしその後、平安が訪れました。私は救い主に、口による聖体拝領についてもう一度教えてくださるよう願い、それを信じると約束しました。
救い主：「私は、ひざまずき、畏敬の念を持って、司祭の聖別された手を通して、口による聖体拝領を望む。」
それから私は、祭壇奉仕者たちについて尋ねました。彼らは奉仕をしているのだから、神の御前で特別な特権があるのではないかと思ったからです。救い主：「それは祭壇奉仕者たちにも当てはまる。」
私：「つまり、フォクト神父は正しく行っていないということですか？」 救い主：「そうだ。」
私：「救い主よ、それを彼に伝えるべきでしょうか？」
救い主：「私はずっとそれを待っていたのだ。」
私：「もし私が彼にそう伝えたら、彼は他の司祭たちの言動に耳を傾けるでしょうか？」救い主：「彼は他の司祭たちのように行動はしないだろうが、司教たちは彼にそれを求めている。」
救い主：「最高位の司教は教皇様だ。彼は教皇様の言葉に従わなければならない。」
私：「ああ、救い主よ、あなたが侮辱されたり、不名誉な目に遭ったりしないよう、私はあらゆることをいたします。私に恵みをお与えください。何かお言葉をください。私は耳を傾けます。」
救い主：「そのままでいなさい、わが娘よ。」
19時頃、アウクスブルクのマリアから電話がありました。私は彼女に、
夫のもとに戻り、神の御心に従うようにと伝えました。かつて雑誌『Frau im Spiegel』に私の記事が掲載されたことがありました。アウクスブルクのマリアはその記事を読み、私に手紙を書き、その後私を訪ねてきました。彼女は熱心なクリスチャンになりました。当時、聖体拝領の後、救い主は私に、彼女が夫のもとに戻るべきだと告げられました。今日に至るまで、彼女はまだそうしていません。
今日、聖体拝領の後、私は救い主に、平和主義が正しいかどうか尋ねました。フリドリンから電話があり、ヨーゼフが平和主義者だと聞いたのですが、それが正しいのかどうかよく分からなかったからです。救い主はこう言われました。「わが娘よ、平和主義は正しい。ただし、誰もが自分を守る権利もあるのだ。」
私はその言葉を正確には理解できませんでした。なぜなら、平和主義が何を意味するのか、私にははっきりとは分からないからです。

1992年2月10日 - 月曜日

10:00、医師室にて：
救い主：「自分に何が耐えられるか、私に尋ねなさい。」私：「私は本当に無力なんです。」

ハイランド：「私には君がいる。君はただ、私を他の人たちに贈ればいいのだ。私の言葉の一つひとつが私の人生であり、その言葉を贈られた人々の心の中で、それは生き続けるのだ。」
私：「ああ、神様、それならあなたについて語ることがいかに重要か。今、アンジェラスで祈るとき、『御言葉は肉となり、私たちの間に住まわれた』という言葉の意味が、より深く理解できるようになった。」
やはり、人間には理解しがたいことですね。
私：「『自分が受け止められることだけを尋ねなさい』とおっしゃる意味が、今ならわかります。
信仰について、そして告解に行くべきだと、二人の患者に話しかけました。それが正しかったのか、救い主に尋ねました。
救い主：「それは正しかった。その調子で続けて。」救い主：「私
を深く愛しなさい、わが娘よ。」
私：「でも、あなたの愛があってこそあなたを愛せるのです。これをどう理解すればよいのでしょうか？」救い主：
「私を愛するように、他の人々を愛しなさい。」
私：「つまり、あなたは他の魂たちからも愛されたいのですね。救い主よ、私があなたを愛するように他の人々を愛せるよう、その恵みをください。」
私は救い主に、他の人たちがあなたを拒絶すると心が痛むと伝えました。
救い主：「その痛みは、あなたが感じている私の痛みだ。患者たちにもっと愛を注いであげなさい。」
午後12時45分、病院の礼拝堂にて：救い主と交わっている最中、私はプロテスタントの人たちも告解に行かなければならないのかと尋ねた。
救い主：「はい。」
私：「でも、彼らは教皇様を愛していません。」救い主：
「それなら、彼らは私を愛していないのだ。」
私がそう尋ねたのは、懺悔に行くべきだと伝えた際、多くの人が『自分はプロテスタントだから懺悔に行く必要はない』と答えていたからです。
夕方、ロートでの聖ミサ。
20時――祈りの集い。参加者が非常に多かったため、何人かは帰ってしまった。私は30分間、救い主が私に語ってくださったことを話した。事前の準備はしていなかった。しかし、聖霊が言葉を授けてくださるなら、それを語らなければならない。祈りの集いの女性の一人が私に質問をしてきた。彼女は、教皇様が聖体拝領の際に聖体を手に渡されることもある、と言った。
私はこう答えました。「教皇様はそうせざるを得なかったのです。人々は自由意志を持っており、司教たちもそれを承認していた上、バチカンにはフリーメイソンも存在しているからです。」

2002年2月11日 — 火曜日

私は救い主に、昨日の手による聖体拝領と教皇について、あの女性に答えたことが正しかったかどうか尋ねました。
救い主：「君の答えは正しかった。」
12時20分、教会の礼拝堂にて。救い主：「ただ私の言うこ
とに耳を傾ければよいのだ。」
私：「夫が、昨日の祈りの集会で私が話しすぎだったと言っていました。」救い主：「私が話している時、誰かが私
を止められるだろうか？」
10時40分頃、私は救い主に、平和主義について私の理解が正しいかどうかを尋ねていた。
救い主：「書き留めておきなさい、娘よ。平和主義は正しい。誰もが自分を守る権利がある。」私：「それについて
、もう少し何か言っていただけますか？」
救い主：「あなたたちには聖書がある。」
私：「救い主様、もし私の立場だったら、あなたも質問しますか？」救い主：「私に尋ね
ていいのだ。その通りだ、わが娘よ。」

1992年2月12日 - 水曜日

私はロクス礼拝堂での聖体礼儀に出席した。いつものように、聖体礼儀の前にロザリオを唱えた。また、聖体礼儀を司式する司祭のために

も祈った。

その神父に会うのは二度目だった。初めて彼がミサを執り行った時は気に入らなかったが、今日、二度目のミサでは、聖体の変容をあまりにも素早く行い、ミサの終わりに祭壇の方へ身をかがめただけで、聖櫃の方には向かなかった。私は救い主に、「今、何が正しいのでしょうか？」と尋ねた。
救い主：「聖櫃の方へ。」
私：「救い主よ、彼にそう伝えるべきでしょうか？」 救
い主：「そうしたいなら。」
私はまずその神父のために祈り、それから彼のところへ向かいました。門で呼びかけて、彼と話せるかどうか尋ねました。会話の中で、何が間違っているかを伝えたところ、彼はすぐに弁明を始め、自分は教授だと主張しました。
私は彼に、それならすべて理解できたと伝えた。
まず、私は彼に、聖体変容の祈りをとても早く唱えたと指摘すると、彼は「他の人たちもそうしている」と答えました。そこで私は、人よりも救い主に従うべきだと反論しました。 私は彼を助けたいと伝え、聖体拝領後のミサで、なぜ別れの挨拶をする際に聖櫃の方ではなく、祭壇の方へお辞儀をしたのか、救い主に尋ねたことを話した。
すると、その神父は過去の自分の在り方を少し自省しました。彼はかなり落ち着きがなく、誇り高かったのです。私は、救い主は当時も今も変わらぬお方だと彼に伝えました。
神父様は、聖ミサの執り行いをもう少しゆっくり行うと約束してくださいました。それから私は祝福を請い、その場を後にしました。今回も、私は一人ではありませんでした。救い主が私と共にいてくださったことを知っています。
家に帰ると、すぐに電話の受話器を手に取りました。フリドリンからでした。彼は、若い学生のアンドレアスが、もう口での聖体拝領を受けなくなったと教えてくれました。
副学監が、「手での聖体拝領をした方が彼にとって印象が良いだろう」と言ったからだそうです。

1992年1月28日、救い主はすでにアンドレアスについて何かを語っておられました。
アンドレアスはフリドリンに嘘をついていた。彼は言い訳を探し、「唇が開いているため、口での聖体拝領ができない」と言った。
しかし、副学部長からそう言われたという真実を、彼は語らなかった。
13時30分頃、病院の礼拝堂で、私は救い主に祈りの部屋について尋ねた。救い主：「もう始めてもいい。時はすでに来ている。」
私：「でも、まだお金が足りません。」救い主：「それは私に任せ
て。」

1992年2月13日 — 木曜日
私は救い主に、聖体変容をあまりにも早く執り行ったその神父に対して、私たちの会話が何らかの効果をもたらすかどうか尋ねた。
救い主：「その言葉は、彼の心の中で生き続けている。」
それから、フリドリンの学友であるアンドレアスについて、なぜ救い主がアンドレアスが今、手での聖体拝領をすることを許されたのかと尋ねました。
救い主：「彼には自由意志があり、その意志は病んでいるのだ。」
私：「一部の教授がそのようなことをし、神学部の学生たちに手による聖体拝領を勧めるなどとは、私には想像
もできません。」
救い主：「彼らは、私を十字架につけた律法学者やパリサイ人たちだ。アンドレアスのために水曜日に断食しなければならない——それは裏切りだ。」
私：「意志が病んでいる場合、どうすればよいのですか？」救い主：「断食
し、詩篇を唱えるのだ。」

1992年2月14日 — 金曜日
10時30分、医師室にて：私は再び、このまま書き続けてよいのかと尋ねた。救い主：「ええ、娘よ、日記を書きなさ
い。それは大切なことだから。」
私：「昨日、私に話しかけてくださったのですか？」 救い主：「
そう、わが娘よ。」

私：「主よ、あなたの御心は何でしょうか。私が何をすべきか、今、悟らせてください。あなたは私の魂の導き手ですから。でも主よ、それがまだあなたの御心である場合に限ります。」
救い主：「たくさん祈りなさい、わが娘よ。祈りはとても必要なのです。」

1992年2月15日（土）

エミリアン神父が、HIミサを素晴らしく執り行いました。それは聖母マリアへの崇敬のミサでした。私は再び、神父が暗闇の中に立っているのを見ましたが、変容の後、神父の頭の周りに明るい光が見えました。それは初めて見た光景でしたが、すぐにまた消えてしまいました。
ヴォクト神父様のために、詩篇一冊分をすべて祈りました。
今日、一つ理解したことがあります。良い司祭を望むなら、神に懇願しなければならないということです。この司祭は、救い主が望まれることをすべて行っているわけではないと分かってはいますが、私は彼をとても大切に思っています。しかし、いつか彼が模範的な司祭になるだろうという希望を持っています。
私は幸せな気持ちで告解室を後にしました。私の祈りは聞き届けられたのです。
主よ、私の神よ、この司祭と私に与えてくださったこの恵みに感謝いたします。

1992年2月16日（日）

私は自宅で、聖体礼儀の前に2時間祈りました。日曜日には、特に聖体礼儀に向けて準備を整えたいと思っています。祈りを始める前に、テーブルの上に十字架と聖母マリアの像を置き、貧しい魂たちのために聖水を供えます。それから、「コンフィテオール」や悪魔祓いの祈り、そして連祷やロザリオなど、多くの祈りを捧げます。 最後に、霊的に聖体拝領を行います。これは、秘跡としての聖体拝領に向けた準備でもあります。そうすることで、聖ミサがより敬虔なものとなり、より多くの啓示を得ることができます。また、何が間違っているのかが分かり、不浄な霊もよりよく見分けられるようになります。なぜなら、そうした霊も教会の中にいるからです。
昨日、ヴォクト神父のもとで告解をしたため、私は救い主に尋ねました。「なぜ、手での聖体拝領について話さなかったのでしょうか？」
救い主：「その時はまだ来ていない。」
私：「今、その司祭は、私があなたの声を聞いていると信じているのでしょうか？」
救い主：「ええ、彼は信じているよ、わが娘よ。」
私：「彼はまだそれほど疑っているのでしょうか、それとも以前ほどではないのでしょうか？」救い主：「彼のために祈り続けなさい。」
私：「主よ、でも彼は昨日の教会報に、司祭が不在のときは、洗礼を受けた者なら誰でもミサを執り行い、その後聖体拝領を授けることができると書いていました。」
救い主：「もし彼が、聖体の中にいるのが私であることを知っていたなら、教区報にそんなことを書くことはなかっただろう。彼の心には、まだ多くの曖昧さが残っているのだ。」
私：「しかし主よ、彼は聖体変容を行っているではありませんか。聖体――聖体拝領――の中に、あなたが生ける神として、真に、本質的に、肉と血、肉体と魂、人間性と神性をもって臨在しておられることを、彼は知っているはずです！
救い主：「信仰は人それぞれ異なるものだ。」
私：「なぜ信仰は人によって異なるのですか？」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。それは第一の戒めと第二の戒め、すなわち、わたしと隣人に対する愛の欠如に起因するのだ。」
私：「つまり、信仰は愛に依存しているのですね。そして、愛は願い求め、実践しなければならないもの。それは神からの大きな恵みなのです。」
救い主：「愛は清らかな心に流れ込むのだ。」私：「主よ、『流れ込む』とはどういう意味でしょうか？」
救い主：「愛は泉のようなものです。その泉に近づき、そこから活力を得なさい。」私：「教授たちの信仰はどのようなものですか？」
救い主：「それは、わが娘よ、実を結ばない世俗的な信仰である。」私：「しかし、救い主よ、彼らは将来の司祭を育成しているではありませんか。」

救い主：「だからこそ、あなたがたは彼らのために祈らなければならないのだ。」

私：「救い主よ、すべては祈り求めて得なければならないのですか
？」 救い主：「そう、わが娘よ。」
主よ、私の神よ、私に与えてくださった愛と恵みに感謝いたします。私は急いで、いつもより早く教会へ向かいました。聖なるミサは10時00分に始まりました。
聖ミサの前に、私は教会にいたすべての人々のために、聖霊への連祷を捧げました。フォクト神父は聖ミサを立派に執り行いました。福音書は山上の説教（ルカによる福音書）についてでした。聖体拝領の際、私たちの神父様を、二人の信徒と一人の
神学部の学生であるアルトゥール・ヴァグナー氏が手伝ってくれました。
以前、私は彼から聖体拝領を受けたことがあります。しかし今、主が「教会は泥沼にある」と私に告げられたのだと思いました。それでは、司祭のようにまだ手を聖別されていないワグナー氏から、どうして聖体拝領を受けられるでしょうか。
私は救い主にこう祈りました。「主よ、もし私がワグナー助祭から聖体拝領を受けることが御心であるなら、そういたします。しかし、それが御心である場合に限ります。
そうでないなら、彼を私のところに来させないでください。私の信頼のすべてを、あなたの御手に委ねます。」ワグナー氏は私の隣で聖体拝領を配っていました。しかし、彼は私のところには来ず、彼が私に聖体拝領を与えないことが神の御心であると、私ははっきりと感じました。私は最後に、フォクト神父から聖体拝領を受けました。
聖体拝領の後、私は救い主にこう言いました。「もし救い主が望まれるなら、私はワーグナー氏と話します」と。しかし同時に、「救い主が彼に啓示を与え、聖体を配ってはならないことを彼に知らしめてくださるよう」とも申し上げました。
私は救い主に、これを書き留めてよいか尋ねました。救い主は「書き留めな
さい」とおっしゃいました。
その後、私はさらに15分ほど祈りを捧げました。
教会を出ると、外で一人の少年が私を待っていました。クリスティアン・フェルハウアーという、神に愛された愛らしい子でした。初聖体を受けた後、彼は私のところに来て、「自分も口で聖体を受けられるようになるには、どうすればいいですか？」と尋ねてきました。
私は彼に、その願いを込めて毎日、聖母マリアにロザリオを一連祈るようにと伝えました。その翌週の日曜日、彼は大喜びで私のところへやって来て、喜びに満ちた声でこう話してくれました。「ユリヤナ、口で聖体拝領ができました。」
それ以来、彼は今日のように、ミサの後によく私に挨拶に来てくれます。私はいつも持ち歩いている聖水で彼に祝福を与えたところ、彼は「この水はきちんと聖別されていますか？」と尋ねてきました。私は「はい」と答え、この水はレーゲンスブルクのゲブハルト・ハイダー神父が聖別したものであると伝えました。
主よ、私の神よ、もし何か間違っていることがあれば、私に教えてください。そうすれば、それを消します。私はすべてをあなたに捧げました。すべてはあなたからのものです。
救い主：「それなら、すべてが正しい。あなたが書いたことも含めて。」

1992年2月17日 - 月曜日

10:00 医師室：助祭たちについて、彼らが聖体拝領を授けてよいのか、救い主に尋ねました。
救い主：「わが娘よ、助祭は完全な叙階を受けていないため、聖体拝領を授けることは許されない。」
私：「でも、教会はそれを認めているではありませんか。」
救い主：「それは誤った教えだ。助祭は司祭ではない。聖体拝領を授けることができるのは司祭だけだ。」
私は以前、なぜH・ワーグナー氏が私に聖体拝領を与えてはならないのか、神が教えてくださるよう祈っていました。私は救い主に、主が私に告げられることは何でも信じると約束しました。その見返りとして、救い主が私に揺るぎない信仰を授け、私の人間性を神性で覆ってくださいますように。たとえ他の人々には、助祭がそれをしてはならないということが明らかでなかったとしても、私は救い主が言われたとおりに書き記しました。 アーメン。
12時15分、職場の礼拝堂にて：今日はいつもより長く礼拝堂で祈りました。カトリック教会にこれほど強く根付いている誤った教えについて、私は涙を流しました。

また、私たちの祈りのグループに所属するある女性のことも気にかかっていた。彼女は以前、内緒で私にこう話してくれたのだ。祈りのグループで告解を聞いていた神父に、ロザリオの祈りの最中に邪魔が入ると伝えたところ、神父は「それなら、なぜロザリオを祈るのか」と返答したという。
私は救い主に、そのようなことを言うのは一体どのような霊なのかと尋ねました。救い主は、「それは不浄な霊だった」とおっしゃいました。
その後、私はこう祈りました。「救い主よ、私の祈りのグループを誤った教えから守り、羊の皮を被った狼をその中に侵入させないでください。」
その後、職場で同僚のヴェロニカと私はロザリオを祈りました。患者さんがまだ来ていない時しか、そうすることはできません。
他の人はたいていタバコを吸いに行くので、この恵みに神に感謝します。
13時50分：とても太った患者さんのレントゲン撮影を行いました。私が胸元にチェーンで下げていた十字架と、それにぶら下がっている様々なメダルを彼が見ると、「それは何ですか？とても素敵ですね」と尋ねてきました。
私は説明し、見せてあげました。「これは『14の十字架の道』の十字架です。私たちは皆、これらすべてを経なければなりません。13個だけでは天国には行けません。14個すべてを経て初めて行けるのです。」
（十字架の裏面には、14の十字架の道の stations が描かれています。）患者さんは興味津々で、その十字架が金製なのかと尋ねました。
私はこう答えました。「私は金や銀は好きではありません。それらは天国に持っていますから。」
彼はこう答えました。「あなたが天国に行ったら、そこから何かを送ってくれよ。」
私はこう言いました。「もし神様と和解し、しっかりと懺悔をすれば、あなた自身もそれを手に入れることができますよ。」彼は笑って、その場を去りました。」

1992年2月18日 火曜日

10:00 医師の集い：いつものように祈りました。霊的な交わりの最中、私は救い主に、昨晩あれほど長く祈ったにもかかわらず、なぜ夜中の2時半頃まで苦しめられたのかと尋ねました。
救い主：「今夜、あなたを苦しめた者たちは、ルシファーの悪魔たちだった。あなたが彼から多くの魂を奪っていること、そして彼が今、再び戦わなければならないことを、あなたに知らせるために、私はそれを許したのだ。」
私：「でも、今夜は祈ることができませんでした。」
救い主：「彼はあなたを縛りつけようとしたが、私があなたと共にいたため、それはできなかった。彼らはすでに数え切れないほどやって来ている。私は、あなたが耐えられる範囲でのみ、それを許しているのだ。」
私：「不浄な霊が私に囁こうとして、ずっと『今日は日曜日だから、聖ミサの前に祈る必要はない。もう十分に祈ったのだから、寝て休むべきだ』と言い続けていました。もう少しで寝坊するところでした。」
普段は自分で目が覚めるのに、その日は夫に起こされた。夫が『今日は仕事に行かないのか』と尋ねてきたので、私は『今日は日曜日なんだから、寝かせて』と答えた。
すると彼が「昨日は月曜日じゃなかった？」と言ったので、すべてがはっきりとわかりました。
昨日、ダチャート神父に、救い主が助祭について「彼らは聖体拝領を授けてはならない」と私に語られたことを話したところ、ダチャート神父は「それはあなただけに当てはまることだ」とおっしゃいました。
私は救い主に、それが本当かどうか尋ねました。
救い主：「あなたがドチャート神父に話したことは正しい。」私：「なぜ彼は違うことを言ったのですか？」
救い主：「それは私に任せておきなさい。」
そこで私は救い主に、現在助祭になろうとして勉強中の宗教教師が、修業を終えた後、聖体拝領を授けてもよいのかと尋ねました。
救い主：「それは、聖職に叙階された司祭だけが許されることだ。」
私は頭痛がしていたので、救い主に、それが贖罪の苦しみなのかと尋ねました。救い主：「そう、それは贖罪の苦しみだ、わが娘よ。」

私は、もし突然死んでしまったらどうしようと、ふと不安になりました。救い主：「その時は
、私のところへ来るのだ。」
私がそう尋ねたのは、兄が高血圧で突然亡くなったことを思い出したからです。そこで後でシスターたちに血圧を測ってもらいましたが
、正常でした。
頭痛があまりにもひどかったので、私はそれを罪人の回心のために捧げました。午後には患者さんはほとんど来ませんでした。同僚の
ヴェロニカと私は聖書を読みました。ゲブハルト・ハイダー神父の聖書が私の一番のお気に入りです。その後、「ああ、イエスよ、あ
なたは私のすべてです」という賛美歌を暗唱しました。この賛美歌はとても気に入っています。 ラテン語の祈りのほとんどは、職場で
、あるいは車のハンドルを握りながら暗記しました。車の中や森の中、教会で、これまでにどれほどのロザリオを祈ってきたか、神の
みがご存知です。
仕事の後、泳ぎに行こうかと思いましたが、結局教会に行くことにしました。ロザリオの祈りの最中に、また妨害を感じました。司祭た
ちや神学部の学生たち、そして彼らを指導する教授たちのために祈るとき、特に攻撃を受けやすいことに、これまで何度も気づいていま
した。
そこで、私は特にフリドリン、アンドレアス、そしてランダースホーフェンの副学長ののために祈りました。
副学長は、アンドレアス神父の教会と同じように、神学部の学生たちに手での聖体拝領をするよう説得しました。
また、フォクト神父とドチャート神父のためにも祈りました。数日前から、フォクト神父が「霊の識別」をより的確に行い、私をよりよ
く理解できるよう、彼を祈りの対象に含めていました。
ロートの教会で、皆でロザリオを唱え始める前に、私は不浄な霊たちからの攻撃を感じました。また、それらがどこから来ているのかもす
ぐに気づきました。
私の斜め前に、中背であごひげを生やした男性が座っていました。彼は入ってきて席に着くと、両手を顔の前にかざし、聖櫃が見えない
ようにしていました。 突然、彼はまるで悪寒に襲われているかのように、激しく首を振り始めました。これは主に、ヴォクト神父が特
に神の栄光について語っている時、例えば朗読や福音書の朗読、つまり神の御言葉が宣べ伝えられている時に起こりました。
そのたびに、彼は実に醜い笑い声を上げた。祭壇奉仕者たちも笑い出し、そのうちの1人は外に出ざるを得なかった。
聖体の変容の際、彼は特に激怒した。その男は立ち上がり、司祭と祭壇に近づき、両手を上げ、拳を振りかざして司祭を威嚇し、罵声を
浴びせた。ミサの間、私はすでにこの男のために祈っていた。というのも、悪魔による内なる攻撃については、私はすでに知っていたか
らだ。
見知らぬ男の声が高まったとき、私は命令口調で「黙れ」と言った。
その瞬間、彼は振り返り、私の横を通り過ぎながら、ひどく憎しみに満ちた眼差しで私を睨みつけました。私はただ「私から離
れよ」と告げました。彼は罵声を浴びせ、教会から出て行きました。
聖体拝領の後、私は救い主に、あれがどのような悪魔だったのか尋ねました。救い主：「それはルシファーの悪魔で
あり、彼と共に多くの悪魔がいたのだ。」
私は救い主に、今夜その悪魔が私のところにいたことを伝えました。救い主：「あいつはどこ
にでもいるのだ。」
救い主よ、教会でこのような試練を与えてくださったことに感謝します。なぜなら、多くの人が悪魔の存在を信じていないからです。
いずれにせよ、聖なるミサの後、多くの信者たちは恐怖に襲われ、足が震えていました。
ヴォクト神父も、ついに「マリア、マントを広げてください」という賛美歌の第3節を歌ってください
ました。
教会でこのような不浄な霊による出来事は、これまでにも何度か経験してきました。
また、ルルド、エルサレム、メジュゴリエ、ヴァーハウゼルといった他の教会や、職場の病院、ロートの市役所（ロートから8人が出
席していました）、そしてローマでバチカンの司教を訪ねる途上、さらには私がこれまで行ってきた講演の場などでも同様でした。
私にとって、これもまた神の恵みであり、それによって信者たちはより敬虔になり、より多く祈り、ついに悪魔や地獄が存在すること
を信じるようになるのです。

礼拝の後、私も数人の信者に出会いましたが、彼らもこれが悪魔であることに気づいており、その男性のために祈っていました。ある女性はそれに気づかず、その男性は病気なのだと言いました。彼女はまた、自分のもとには哀れな魂たちがやってくると話していました。 私は心の中で、もし彼女に「霊を見分ける賜物」がないのなら、それが本当に哀れな魂たちなのかどうして分かるのだろうかと疑問に思いましたが、口には出しませんでした。
その女性は、その見知らぬ男性と同じ席に座っていた。

1992年2月19日 - 水曜日

10時 医師室：私は、昨日起きた誘惑について、救い主に尋ねました。
救い主：「わが娘よ、この誘惑は始まりに過ぎない。さらに多くの誘惑がやってくる。サタンは、失った魂たちを巡って戦っているのだ。」

私：「私たちの教会のために何かすべきでしょうか？」救い主：「祈りなさい、祈りなさい、たくさん祈りなさい。」
すると、私の心には温かさと平安が満ち、とても素晴らしい気持ちになりました。
夕方、私はロクス礼拝堂に行き、まずロザリオの祈りに参加し、その後、聖ミサに参列しました。

1992年2月20日 — 木曜日

10時10分 医師室：私は救い主に「良心」について尋ねました。
救い主：「良心において理解しがたいこととは、それが私そのものであるということだ。」私：「あなた、その『私』とは誰のことですか？」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。私はあなたの主であり、神である。」私：「なぜ、神こそが良心であると、最初から教えてくれないのですか？」救い主：「それは世俗的な考え方だ。不可解な部分は私から来ているのだ。」
私：「なぜ、一部の司祭たちは、私が聞く内なる声があなたから来ていることに気づかないのですか？」 救い主：「彼らは『霊の識別』を知らないからだ。彼らの信仰は弱く、聖書を説教はするが、それを実践していないのだ。」
夕方、私はロートで聖ミサに参列した。ロザリオを唱えた。聖体拝領の際、修道女が私の横を通り過ぎ、私に聖体を与えようともせず、私が彼女から聖体を受け取らないことを知っていたからだ。私はすぐに自分の席に戻り、霊的に聖体拝領を行った。多くの恵みを受けた後、ある声が聞こえた。
「その聖体を、そのシスターのために捧げませんか？」
私は即座に「はい」と答えました。しかし、こう付け加えました。「そのシスターが悟りを開き、聖体拝領を配ってはならないことを理解できるよう、彼女のためにこれを捧げます。」
ミサが終わっても、私はまだ深く祈りに没頭していたところ、そのシスターが私のところにやって来て、こう尋ねました。「私がしたことは、間違っていなかったでしょうか？」
彼女がそう尋ねたのは、私が待って、ヴォクト神父から聖体拝領を受けるものだと思っていたからです。
私は彼女にこう言いました。「いいえ、シスター、それは正しくありません。あなたは聖体拝領を配ってはなりません。以前にもその件について私に尋ねたことがあり、救い主は『彼女にこう伝えなさい。私たちには司祭がいるのだ』とおっしゃったからです。」
彼女は手足をばたつかせながら反論し、自分も叙階を受けており、司教たちもそれを承認していると主張しました。
私は、彼女には最高司教の指示に従わなければならないと伝えました。
彼女は動揺し、少し怒っており、不都合なタイミングで私を邪魔してきました。彼女は、私が「反対側」へ移動すべきだと言いました。（つまり、聖体拝領を配っている神父様のいる側へ行くこと）
私は「神が私を置かれた場所に、私は留まる」と答え、彼女のために祈りました。
その後、ヘドヴィヒとヒルデと一緒にロクス礼拝堂へ向かいました。すぐにまたミサが始まりました。そこで私は聖体として救い主を受け取ることができました。そして、
聖体拝領を捧げました。

1992年2月21日 - 金曜日

10時30分 医師室:

救い主:「修道女のことについては、君は正しく行動した――むしろ、最善を尽くした。」

私は、修道女が言ったように、教会で席を移動すべきかどうか尋ねた。救い主:「その必要はない。君は正しいのだから。」

昨日の夕方、私が帰宅すると、夫は修道女を擁護していた。彼は非常に興奮しており、私が席を移すべきだな

どと言っていた。

私は聖水を手に取り、不浄な霊を感じたので、夫とその周囲にそれを振りかけた。そのことを救い主に話した。

救い主:「あなたの夫にはユダの悪魔が取り憑いていたのだ。」

私は夫に、懺悔に行くべきだと伝えたと申し上げました。しかし、夫は「それは罪ではない」と言っていました。

救い主:「彼は心を閉ざしていたから、その罪に気づかなかったのだ。」私:「心を閉ざしていたとは、どう

いう意味ですか? 」

救い主:「そうすれば、私は中に入ることができないの

だ。」私:「つまり、あの悪霊が中に入っていたという

ことですね。」救い主:「今回はそうだった。」

午後、私はその修道女とフォクト神父のために熱心に祈りました。

祈っている間、いつも一人の人物が霊的に私の目の前に立っているのが見えました。私はその男性を知っていました。彼は以前にも何度か私の前に現れていたからです。彼が聖体拝領を執り行っていたこと、そして私が彼から救い主を受け取らなかったことは知っています。 夏に、聖体配給の補助者が高速道路での事故で突然亡くなっていたが、今、いつも私の前に霊的に立っているのがその男性なのかどうかは分からなかった。その人物はあまりにも執拗だったので、私はその人のために『主の祈り』、『アヴェ・マリア』、『栄光あれ』を一つずつ祈った。しかし、それだけではその男性には不十分だと感じていた。

私はロートに住むマルガ・フェルハウアーを訪ね、教会の聖歌隊のメンバーの写真があるかどうか尋ねました。というのも、私の目の前に絶えず霊的な姿で立っていたその男性も、教会の聖歌隊で歌っていたことを知っていたからです。彼女は写真を見せてくれ、私は彼だと気づきました。この男性が夏に致命的な事故に遭った時、私はちょうどスロバキアへの巡礼の旅に出ていました。

その夜、私は教会で、ヴェルナー・ハインツマンという名のその男性のためにロザリオを唱え、聖ミサを捧げました。 私は彼に、私も夜中に目が覚めて彼の魂のために祈り続けられるよう、私のためにも祈ってほしいと頼みました。彼の押し付けがましい態度に「もううんざりだ」と言ってしまったことを後悔していました。しかし、その時は彼が亡くなったことをまだ知らなかったのです。

夜、1時半頃、私は目を覚まし、彼のためにロザリオを唱え、尊い御血への連祷を捧げました。彼のために聖別されたろうそくに火を灯し、聖水を注ぎました。

それから、信徒たちが再び聖体拝領を授けてくれるためにやって来たとき、私はどうすべきか、救い主に尋ねました。

救い主:「また同じことをしなさい。」

1992年2月22日 — 土曜日

私はヴァーグハウゼルでミサに参加しました。ヴェルナー・エゴン神父が、見知らぬ神父と共にミサを司式しました。聖体拝領の際、私が神父の前でひざまずいていたため、ヴェルナー・エゴン神父は私にキリストの御体を授けるのをためらいました。また、いつものように「キリストの御体」と言うこともなく、黙ったままでした。 私の夫は私の直後に聖体拝領にやって来て、神父が首を横に振る様子を目撃した。

この神父はなんと狡猾なことでしょう。彼のおかげで、最前列の信徒はひざまずいて聖体拝領を受けられるという慣習が定着してしまいました。しかし、それは最前列の信徒に限られています。

ええ。では、他の人たちは? 彼らも私たちの救い主の前でひざまずくべきではないのでしょうか。そんなことは許されません。誰もが私たちの神の前でひざまずくべきなのです。ミサが終わると、アリスという女性が『マリアよ、祝福あれ』という歌を歌い始めました。それも神父様の気に入らなかったようで、彼は首を横に振りました。

神父が教会を去った後、私は信者たちと共にラウレタン聖母連祷を唱えました。

その後、私たちは『サルヴェ・レジーナ』も歌いました。これらの祈りを、私は神父様方のために捧げました。
それから私は聖櫃の前に進み出て、床にひざまずきました。そこで、教会にいた神父様方や信者の方々のために、心から祈りを捧げました。教会を出ようとしたとき、ある男性（ホッケンハイム出身のヴァルターさん）が私に声をかけてきて、「よくやりましたね」と言いました。
「どうか私の妻のために祈ってください。彼女はがんです。」
私は彼女のために祈ると約束しました。神は、教会にいた信者たちのために捧げた私の祈りを聞き届けてくださったのだと思います。そうでなければ、この見知らぬ男性が私のところにやってくることはなかったでしょう。

16時30分：教会で、ローター教会の信者たちと共にロザリオを唱えました。
その後、さらに三つのロザリオを祈り、そのすべてをヴォクト神父のために捧げました。ずっとひざまずいていたので、私にとっては犠牲を伴うことでした。

1992年2月23日 - 日曜日

7時30分、教会に行く約1時間前に祈りを始めました。私は救い主に、ヴェルナー・エゴン神父について不満を訴えました。
救い主：「彼の言うことを聞く必要はない。私の言うことを聞きなさい。」 私：「つまり、キリストの御体の前でひざまずき続けるべきということですか？」 救い主：「そうだ。」
私：「もし私がひざまずいている時に、神父が聖体拝領を躊躇したら、その場を離れてもよいのでしょうか？」 救い主：「離れてもよい。たとえあなたが聖体として私を受け入れなかったとしても、私はそれでもあなたのところへ訪ねていく。」
私：「救い主よ、夜中に目が覚めたときはどうなりますか。私が目を覚まして祈れるように、誰が私を起こしてくれるのですか。それはあなたですか、それとも哀れな魂たちですか？」
救い主：「私だ。私は、あなたが私と共に目を覚ましていることを望んでいる。」私：「はい、でもその時は、苦しむ魂たちのために祈ります。」救い主：「その時は、私はとりわけ喜ぶ。」
私：「主よ、でも、祈り始めるまでには葛藤があるんです。」
救い主：「自分だけでは何もできないことを悟らなければならない。そのためには私の恵みが必要だ。なぜなら、悪者はあなたが祈ることを嫌うからだ。」
私：「悪霊はそんなに私のそばにいるのですか？」救い主：「そうだ。私がいるところには、彼もいるのだ。」
私：「愛する救い主よ、私はすべてをあなたに捧げました。私は完全にあなたのものです。なぜ、その不浄な霊は私を放っておいてくれないのですか？」
救い主：「もしそうなら、彼は私の知性を持っていることになる。しかし、私の知性は彼の知性ではない。」私：「でも、彼は確かに賢いではありませんか。」
救い主：「知性とは、理性のことではない。」
私：「それなら、私にできることは、目を覚まし続けることだけなのでしょうか？ そう、今、聖書に書かれていることが思い浮かびました。『だから、祈りの中で常に目を覚ましていなさい。そうすれば、これから起こるすべての事柄から逃れ、人の子の御前に立つことができるようになるためです。』
私：「親愛なる救い主よ、私に何かおっしゃりたいことはありますか。今日で結婚27年目になります。」救い主：「そのままでいなさい。祈り続けなさい、わが娘よ。」
私：「はい、愛するイエス様。あなたと人々への愛のために、隣人の永遠の命のために、そして私自身の命を救うために、祈り続けます。」
その後、救い主が何かおっしゃるかどうか、しばらく待っていました。すると、救い主の声が聞こえました。「平安のうちに去りなさい。」
私：「あなたの大きな愛に感謝します。私はあなたを何よりも愛しています。
私はロートで聖ミサに参列し、そこで13:00〜14:00の間に祈りの集いとロザリオの祈りにも参加しました。
13:00〜14:00の間に、黙想会とロザリオの祈りにも参加しました。

1992年2月24日（月）

10:00、医師室にて：私は祈りを捧げ、救い主と心を一つにしました。

私：「なぜヴェルナー・エゴン神父は、私にひざまずいて聖体拝領を授けるのをためらったの

なぜ『キリストの御体』と言わなかったのか、そしてなぜ首を横に振ったのか？」

救い主：「あなたは私を受け入れたのだ、わが娘よ。あなたは私が聖体の中にいることを信じた。彼はそうではなかった。」
私：「でも、彼が信じていないなら、変容の祈りを唱えることはできないでしょう。」救い主：「い
や、私には彼に対する権威がある。」
夕方、私はまずロザリオの祈りに参加し、その後、ロートでの聖ミサに出席した。20時からは祈りの集まりがあった。ドチャート神父もそこにいた。
ドチャート神父との議論は、私には気に入らなかった。リオバは、悪魔がヴァーハウゼルにも現れ、神父たちが彼を教会から追い出したと話していた。
おそらく、それは数日前にロートの教会にいたのと同じ男だったのだろう。ドチャート神父は、信者たちに情報を伝え、警告するために、司祭たちが悪魔についてもっと語るべきだという考えには賛成していない。
彼はこう言った。「人々は一体何と言うだろう。」
私：「悪魔の存在については、あまりにも多くが黙殺されています。」
私は、司祭たちはこのことについてもっと説教すべきだと述べた。今日、福音ばかりが語られ、「
『神は慈愛であり、憐れみ深く、罰を与えない』
これらすべては確かに真実ですが、神には永遠に罰を下すお力があるのです。
その直後、ドチャート神父が立ち上がり、まるで私が彼を平手打ちしたかのように、鋭く睨みつけてきたのが気に入らなかった。あの鋭い眼差しを見るのは、これが初めてではなかった。

1992年2月25日 — 火曜日

早朝から、司祭たちのためにロザリオを唱えた。
10時30分、医師室：私は救い主にドチャート神父について尋ねた。悪魔が教会に侵入して人々に恐怖を植え付ける時、司祭たちは信者たちに警告すべきであり、それについて沈黙を保つのは司祭たちの過ちであると私が告げると、彼の目にあの凝視が見えた。それは嫌悪感を覚えるものだった。
救い主：「それは、あなたが真の教義について語ったときに現れた不浄な霊だ。」私：「その不浄な霊は、司
祭を通じて私に向かってくることはあるのですか？」
救い主：「ああ、君が真の教えを擁護するならば、そうなる。」
本来なら、私は祈りのためにブレッテンのドチャート牧師のところへ行くはずだった。私はいつも、どこへ行くべきかを救い主に尋ねるべきだったのだ。
木曜日のことについて救い主に尋ねた。自分だけに頼りたくなかったからだ（木曜日はブレッテンでの祈りの会があった）。
私：「救い主よ、私が何を尋ねようとしているか、私が尋ねる前から、あなたはご存知ですよね。」質問をきちんと
口にする前に、答えがすぐに返ってきました。
救い主：「行かないで、わが娘よ。」私：「ありがとうご
ざいます、主よ、神よ。」
今晩、聖体礼儀から家へ帰る途中、オエストリンガーという女性が私に声をかけてきました。彼女の声は震えていて、怯えたように聞こえました。
彼女は私にこう言いました。「人々の前で話してはいけません。他の人たちは皆、ひっそりと行っているのです。」私は彼女に、いつ、どこで話すべきかを救い主に尋ねたこと、そして私が語るべき言葉を主が与えてくださることを伝えました。」
その後、救い主はこう言われました。「話せ、わが娘よ。他の人たちの言うことに耳を傾けてはならない。私の言葉に耳を傾けなさい。もし他の人たちが、隠れて行動すべきだと忠告してくるなら、それは嫉妬だ。私はあなたに語る賜物を与えたのだ。」
私：「主よ、私がゼナッケルへ行くことにご同意いただけますか？」 救い主：「はい、そこ
へ行きなさい。」
私：「まだ何か書き留めておくべきでしょうか。そうしてほしいですか？」救い
主：「そのままでいなさい、わが娘よ。」
愛する神様、ありがとうございます。

午後1時、病院の礼拝堂にて：
私はまず祈りました。心が重く、思わず涙がこぼれました。そうです、それは神が人々によって侮辱されていることによる痛みなのです。患者たちはしばしば神を侮辱しますが、そのことに気づいていない人もいます。彼らはもはや罪を認識していないからです。ほとんどの人は、自分には罪がないと言います。
今日、ある患者さんが私のところに来て、「懺悔は年に一度で十分だ」と言いました。その一方で、彼女はとても落
ち着きがなく、独断的で、自分には罪がないと主張していました。
彼女は、とても邪悪な女性を知っているが、その人は毎日教会に通っていると私に話しました。彼女は、その女性に対して、教会にも告解にも近寄らないようにとすでに言ったことがあると言いました。
私はその患者に、はっきりとこう言いました。「あなたの中から悪魔が語っているのです。」彼女
はそれ以来、私の顔を見ることができなくなりました。
ああ、そういう人は何千人もいます。こうした患者たちを助けるのは非常に難しいのです。彼らの魂はたいてい錆びついてしまっているからです。私は患者たちを祈りに包み込みます。感謝して嬉しそうに去っていく人もいれば、涙を流しながら別れを告げ、「私のために祈ってください」と頼んでいく人もいます。
しかし、司祭たちが誤った教えを広めたり説教したりする姿を見る時、私はさらに深い痛みを感じます。まるで心臓に欠陥があるかのように、胸に突き刺さるような、燃えるような痛みを覚えます。
そう、司祭たちこそが、私に最も大きな心の痛みをもたらすのです。彼らは、自分たちが魂に対してこれほど大きな責任を負っていることを理解していないのでしょうか?
聖櫃の前で泣いていた時、私は救い主に、もし自分が私の立場だったら今何を尋ねるだろうか、と尋ねました。
救い主：「私は救い主にこう尋ねるだろう。『あなたは私を愛していますか?』」
その瞬間、私は「神は愛そのものだ」と思い、「もちろん、あなたを愛しています」と答えました。救い主：「ほらね、そして私はあなたを、それよりもずっと、ずっと、ずっと深く愛しているのだよ。」
その瞬間、私は救い主と共に微笑み、もう泣くことはなかった。まるで誰かが消し去ったかのように、苦しみ
が消え去ったのを感じた。
私の魂をたちまち癒やしてくださったこの大きな恵みに、親愛なる神様、感謝いたします。神経科医や精神科医に
、これができるでしょうか?
最高の魂の医師は、私たちの愛する救い主です。
もし患者たちがまず告解に行き、それから医師のところへ行けば、どれほど多くの患者のレントゲン撮影が省けることか。ほとんどすべての患者は告解に行かない。しかし、人々はまず煉獄へ行き、それから楽園へ行きたいと思っているようだ。彼らの多くは神を完全に拒絶している。彼らは悔い改めの態度を見せず、自ら主としてサタンを選んでいる。サタンは、永遠に昼も夜も彼らを苦しめ続けるのだ。
夕方、私は聖体礼儀とロートでのロザリオの祈りに参列した。

1992年2月26日 — 水曜日

10時30分 — 医師室：救い主と一つになったとき、私の心には深い静けさと平安、そして温もりが満ちてきました。その時、救い主が私のそばにいてくださることを私は知っています。主は私のそばで安らぎ、私も主のそばで安らぎます。
私：「愛する救い主よ、今、あなたは私の魂を聖別してくださっています。あなたは私に沈黙を望んでおられますね
。」救い主：「そう、わが娘よ。」
私：「魂にとって、救い主と共に数分間静寂を保つことが、どれほど必要なのか。私はそれを知らなかった。それは愛のアヘンのようだ。世俗的なことは遥か彼方にある。多くの人々は一体何を逃しているのだろう。ああ主よ、彼らを憐れんでください。このように救い主と一つになれば、すべてが得られる。それはとても美しい。まるで神の御国のようなものだ。『御国が来ますように』と祈るとき、その意味が今、ずっとよく理解できます。
ええ、霊的な聖体拝領は実に尊く、楽園にますます近づいていると感じます。今この瞬間、私にはもはや問題も、心配事も、疑問も何もないような気がします。すべてが取り除かれたのだと思います。わが主、わが神よ、この恵みに感謝いたします。

午後12時30分、病院の礼拝堂にて：
まず、悪魔が私に「まだツェナッケルに行きたいのだから、礼拝堂には行かないほうがいい」と囁きました。私はそれをほとんど信じてしまいそうになりました。しかし、同僚が私に「礼拝堂へ行きなさい」と言ってくれました!
そこで私はすぐにそこへ向かいました。
私は再び多くの恵みを受け、大学病院にいるすべての人々のために祈り、救い主に向かって、私を呼んでくださったように彼らもここにやって来られるよう、彼らを呼んでくださるよう願いました。
救い主：「彼らは耳を傾けていない。」
私は、救い主が「わたしの羊はわたしの声に耳を傾ける」とおっしゃった聖書の言葉を思い起こしました。
私はこの聖なる霊的聖体拝領を誰かのために捧げたいと思い、救い主に、誰のために捧げればよいかと尋ねました。
救い主：「今、私がとても愛している人のために捧げなさい。」
その後、私はさらに『主の祈り』、『アヴェ・マリア』、『栄光あれ』、『至聖なるキリストの御心』を祈りました。15時
、私はボックスベルクのツェナッケルにいました。そこで告解をしました。
聖体拝領は、ヴォクト神父様のために捧げました。神が彼に啓示を与え、神の御心を悟り、もはや手での聖体拝領を行わないようにしてくださいますように。

1992年2月27日 — 木曜日

12時30分、職場の礼拝堂にて：いつものように聖櫃の前にひざまずき、祈りました。患者たちが神をこれほどまでに侮辱していることに、胸が締め付けられ、また涙がこぼれました。私は、神の前で自分がいかにちっぽけな存在であるかを、より深く認識しました。
私は救い主にこう言いました。「私はあなたの声を聞くに値しません。あなたへの畏敬の念はますます深まっています。それでも、私は無に等しい存在です。」
すると、こう聞こえてきました。「そのまま、子供であり続けなさい。」
私は「賛美——神を賛美せよ」を唱え、さらに心の内なる祈りを捧げました。今日、木曜日、ブレッテンでドチャート神父による祈りの集いがまた開かれました。私は再び救い主に、そこへ行くべきかどうか尋ねました
。
救い主：「いいえ。行かないで。」
もしドチャート神父様にそのことを尋ねられたら、そう伝えてもいいかと尋ねました。救い主：「そう伝えてくれたら嬉しい。
」
その後、礼拝堂の裏にある湖のほとりを少し散歩した。まだ休憩時間だったので、持っていたパンを少し取り出し、アヒルやカモメ、そして一羽の白鳥に餌をあげた。白鳥が私のところにやって来て、パンを食べようとした。私はパンをもう少し先の方へ水の中に投げ入れた。その白鳥は一番賢かった。水から上がると、まっすぐ私のところへ来て、パンを丸ごと欲しがった。 私はまるで人間に話しかけるように、その白鳥に言った。「何が欲しいんだ？」
と。白鳥は誇らしげに首を伸ばし、ぶつぶつと呟き、怒り出した。その様子は、見ていると怖くなるほどだった。
それまで、私は白鳥のすぐそばで
白鳥のそばに立ったことは一度もなかった。私は白鳥に、水の中へ戻るように言った。白鳥は言うことを聞き、水の中へ戻っていった。私は残りのパンを、一羽ずつ少しずつ与え続けた。
動物でさえ、人間より言うことをよく聞くのだな、と思いました。
仕事の後、泳ぎに行った。その後、ロザリオを唱え、ミサに参加し、またヴォクト神父のためにそのミサを捧げた。

1992年2月28日 - 金曜日

また、以前より多く祈ることができた。10時に医務室へ行った。まず、その哀れな魂に聖水を授け、それから救い主と心を一つにして祈った。
私は救い主にこう言いました。「もし、誰にも私を惑わされないよう、あらかじめすべての恐れや疑いを取り除いてくださるなら、あなたが私に告げることは何でも信じます」と。そして、私の人間性を奪い、その神性で私を覆ってくださるよう祈りました。以前から、私は救い主に謙遜を願い、謙虚で柔和な者になれるよう祈り続けてきました。
この地域では、ユーゴスラビアでの戦争についてあまり話題に上りませんが、今夜もドゥブロヴニクが再び爆撃されました。

私は救い主に、ドイツに降りかかろうとしている戦争が、祈りによって和らげられたかどうか尋ねました。
救い主：「戦争がやってくる。」私：「ロシア
から？」
救い主：「そうだ。」
私：「彼らは信じません。」
救い主：「娘よ、彼らは手遅れになって初めて信じるのだ。」私：「祈りのグループに伝
えるべきでしょうか？」
救い主：「ええ、彼らに伝えて、もっと祈るように言いなさい。」
さらに私は、ドチャート牧師が救い主と共にいて、私たちが礼拝を行っている時でも、それを伝えてもよいかと尋ねました。
救い主：「もちろん。」
私がそう伝えたとき、どんな反応が返ってくるだろうかと考えました。救い主：「私に任せて
おきなさい。重要なのは、あなたが伝えたということだ。」私：「他にもどこかに伝えるべき
でしょうか？」
救い主：「あなたはすでに司祭に伝えたではないか。」
私：「この戦争に備えて、祈りやその他のことで準備をすべきでしょうか。」救い主：「常に準備をしておかなけれ
ばならない。」
仕事の後、森を散歩しながら、
ヴォクト神父のためにロザリオを4回唱えました。その後、教会へ行き、引き続き彼のために祈りました。聖体拝領を彼のために捧げました。私がこの神父のためにどれほど祈っているか、神のみがご存知です。その報いは天国でのみ期待しています。たとえヴォクト神父に侮辱されたとしても、私は彼をとても愛しており、常に彼の中にイエス様を見たいと思っています。
私の任務は容易ではありませんが、ヴォクト神父様の任務もまた同様です。ですから、私たち二人には「Per crucem ad lucem（十字架を通して光へ）」という言葉が当てはまります。

1992年2月29日（土）

私はヴァーハウゼルでの早朝のミサに出席しました。聖体の変容の際、不浄な霊が咆哮するのを耳にしました。この声は、以前スイスでルドルフ神父のもとでも聞いたことがあります。あの時は夜中の1時半頃で、悪魔にひどく恐怖を植え付けられていたため、私は祈っていました。
その声は、人間の声とは異なります。
ここヴァーグハウゼルでは、今日、エミリアン神父がミサを司式されました。ミサの前に、私は特に神父様方のために祈っていました。 今、私が大きな数珠で祈った内容も書き留めておきます。「永遠の父よ、私は、あなたが何よりも愛しておられる御子、私たちの主イエス・キリストの御体と御血、御魂、そして神性を、私たちの罪と、ヴァーガウゼルの神父様方および兄弟たちの罪の贖いのために、あなたに捧げます。」
小さな数珠の珠では、次のように祈りました。「主の痛ましい受難ゆえに、私たちと、ヴァーハウゼルの神父様方および兄弟たちに憐れみをお与えください。」
最後に、三度次のように祈りました。「聖なる神よ、聖なる力ある神よ、聖なる不死の神よ、私たちと、ヴァーハウゼルの神父たちおよび兄弟たちに憐れみをお与えください。」
その後、喜びのロザリオ、悪魔祓いの祈り、その他の祈りを捧げました。聖なるミサの後、アリゼが私に先導して祈るよう促しました。
私たちは聖母の連祷を唱えました。
その後、私は聖櫃の前で床にひざまずき、多くの願いを込めて祈りました。
教会を出た途端、ある女性が「聖母マリアの連祷は長すぎた」と不満を漏らしていたのを耳にしました。しかし、私はこの祈りが天の御心であったことを知っています。なぜなら、悪魔は聖母マリアの連祷を嫌うからです。それどころか、この祈りによって悪魔は激怒するのです。私はすでにそれを経験しています。
実際、私はこれを何度も経験してきました。メジュゴリエでの悪魔の激怒は、ある時特にひどく、ウィーンからの若い学生が、聖母マリアの連祷の最中に「やめて、火事だ！」と大声で叫んだことがありました。それでも私は祈り続けました。当時、私は祈っている間、悪魔が私の魂を引き裂こうとしているのだと思いました。

正午に買い物を済ませ、アパートの片付けを終えた後、16時15分に再び赤い服を着て教会へ行き、18時15分までいました。祈りを始めましたが、永遠の灯がまた消えていたため、中断せざるを得ませんでした。司祭館の女性がマッチをくれたので、私はその灯に火を灯しました。
ヴォクト神父のために、ロザリオを何連も唱えました。祈っている間、心がとても重く、泣き出したいほどでした。
ヴォクト神父と告解の面談をしたいのですが、神父もそれを望んで、自ら私に声をかけてくれることを願っています。神が神父にそのための恵みを与えてくださるよう祈りました。なぜなら、救い主がこれまで私に語ってくださったことを、神父にたくさん伝えなければならないからです。救い主は、私が神父のために祈るべきだともおっしゃいました。
家に帰ると、不浄な霊、あの「おしゃべり屋」が私を悩ませました。彼は私にこう言い聞かせようとしたのです。「ほら、無駄だ。意味がない。彼のために祈るのをやめなさい。」
しかし、私はその不浄な霊の言うことを聞き入れず、祈り続けました。

1992年3月1日 - 日曜日

約1時間祈った後、30分ほど救い主と一つになりました。私は、自分がまた無に等しい存在であり、必要なものはすべて救い主に求めなければならないと悟りました。私は激しく泣きながら、救い主に助けを求めました。救い主なしでは私は無に等しいのですが、救い主と共にあるとき、私は多くのことを成し遂げることができます。
現在、私にとって最も重くのしかかっているのは、手による聖体拝領です。なぜなら、それが廃止されるどころか、むしろ引き続き行われているからです。私は、救い主が信者たちが手で聖体拝領を受けることを望んでおられないことを知っているからです。 私は「神の慈悲への祈り」、慈悲のロザリオ、リジエーの聖テレーズやアッシジのフランチェスコの祈り、緊急の祈り、その他多くの祈りを捧げました。
かつて救い主が、「手で聖体を受けることは、恵みを奪うことになる」と私に言われた意味を、私はまだ理解できていませんでした。そのことをもっとよく理解したかったので、私は救い主に改めて尋ねなければなりませんでした。救い主：「それは私に対する侮辱であり、無関心である。」
私：「手による聖体拝領の際、あなたは彼らに恵みを与えますか？」救い主
：「いいえ。私は彼らから恵みを奪うのだ。」
私：「『取り上げる』とはどういうことですか？」
救い主：**「木は実を結ばなければならない。しかし、手による聖体拝領によって、彼らは実を結ぶことはない。」**
私：「手による聖体拝領の最も悪い点は何ですか？」救い主：「皆が泥の中にい
るということだ。」
私：「しかし、救い主よ、それは人間だけのせいではないのではないでしょうか。司祭たちも口による聖体拝領を行っているのですから。」
救い主：「一体誰が人々にそれを教えたのか。」私：「主よ、それはサ
タンの仕業なのでしょうか？」
救い主：「そう、わが娘よ、それは明らかにサタンの仕業だ。彼は良い実を望んでおらず、悪い実だけを望んでいる。悪い実はすべて彼のものである。」
私：「理解できません。なぜ司祭たちはそれを信じないのですか？」救い主：「彼らにはもは
や信仰がないからだ。」
私：「この泥を教会から取り除くにはどうすればよいのですか？」 救い主：「祈りと断食だ
。」
私：「断食は本当に大変です。」
救い主：「裕福な者が天国に入るのは、それと同じくらい難しいのだ。」私：「手による聖体拝領について、
もう少し教えていただけますか？」
救い主：「それが廃止されるよう、絶えず祈りなさい。」私：「はい、主よ、そ
ういたします。」
私：「これから、どれくらいの敵ができるのでしょうか？」

救い主：「あなたが想像する以上に多いでしょう。私はあなたと共にいます。恐れる必要はありません。」私：「救い主様
、私の理解は正しいでしょうか？」
救い主：「そう、わが娘よ、お前は正しく書き記した。」
今、私の心には安らぎと平和、そして明晰さがあり、疑いも恐れもありません。
それは素晴らしい感覚です。そう、救い主は私と共にいてくださいます。主よ、私の神よ、感謝いたします。私はさらに救い主
に尋ねました：
「主よ、昨日、教会で私はヴォクト神父のために2時間も祈ったのに、あなたは私に何もおっしゃいませんでした。私の祈りは十分ではなかったのでしょうか？」
救い主：「私はあなたと共に苦しんだ。その司祭は私の声に耳を傾けなかったからだ。」私：「主よ
、もし私が彼のために断食をすれば、何か変化はありますか？」救い主：「はい、私の娘よ。」
私：「主よ、私の神よ、私の良き霊的導き手よ、私は私の司祭であるフォクト神父のために断食いたします。」
私のイエス様、私はあなたを何よりも愛しています。このお話をくださり、ありがとうございます。
私は少し早めに聖体拝領のミサに行き、敵たちのために祈りました。
若い学生のワーグナーを見かけました。彼は助祭です。そこで私は救い主に
こう尋ねました。
「もしワグナー氏が私に聖体拝領を授けるのが適切でないのなら、どうか司祭に聖体拝領を授けてくださるようお願いします。」
私は司祭から聖体拝領を受けました。
家に着くと、ローストをオーブンに入れ、自分でシュペッツレを作り、サラダを切りました。
12時ちょうどに『主の天使』を唱えました。12時15分に食事をと
りました。
12時45分には再び教会に戻りました。聖体礼拝が行われており、聖体が安置されていました。14時45分まで教会にとどまり、祈りを捧げました。
15時30分、バーバラという女性がやって来ました。彼女は私の前で、息子さんのことについて胸の内を打ち明けてくれました。彼女が帰った後、マリオンが17時30分まで来ていました。
私たちは日記のメモを書きました。
18時15分、教会で至聖体の前で、ヴォクト神父のためにロザリオを2連唱しました。というのも、永遠の灯がまた点いていなかったからです。
残念ながら、神父様にはその様子は見えませんでした。精神的にはあまり調子が良くなかったです。ヴォクト神父様が、聖体顕示台の真前にスポットライトを設置されたことが、私の心を痛めました。私は、生ける神が聖体の中に臨在しておられると信じています。
通常、人の目の前に約半メートル離れた場所にスポットライトを設置することなどありません。ただ、聖体顕示台が明るく照らされ、遠くから見て美しく輝き、まぶしく映るだけなのです。「救い主はここでもなお苦しまなければならないのか」と私は問いかけ、その光が目に焼き付くのを感じました。時折、その光を見ることもできませんでした。
結局、私は教会を後にすることができず、聖具係の女性を見かけて、彼女に「永遠の灯が消えている」と告げるまでその場に留まっていた
。
彼女はぶつぶつと文句を言いながら、「また消えてしまったわ」と言った。
寝る前に、私は哀悼のロザリオを、哀れな魂たちのために捧げた。私の1日は、あっという間に、本当にあっという間に過ぎてしまった
。
テレビがないことを嬉しく思い、今日一日、与えられた力と愛に神に感謝した。

1992年3月2日 - 月曜日

10時 医師室：私はその部屋に聖水を振りかけ、ベネディクトの十字架で病院にいるすべての人々を祝福した。私は救い主と心を一つにし、こう言った。「私があなたに何を尋ねたいか、あなたはご存知です。あなたはすべてをご存知です。私は、あなたが私に告げることを書き留め、それを信じます。」と。私は、昨日点灯していた、そしておそらく今日も至聖所の前でまだ灯っているであろうスポットライトのことを思い浮かべました。

カーニバルの3日間は、私たちの病院ではいつも至聖体の前で礼拝が行われます。静寂の中、私はこう聞くことができました。
「書き留めなさい、わが娘よ。私の前にランプを灯し続けるのは正しくありません。彼に、ランプを自分の前に3分間だけ灯させてみるように言いなさい。」
私：「主よ、そのランプが今もあなたのすぐ前で灯り続けていると知ると、私は安らぎを得られません。私自身、その苦しみを肌で感じているからです。
救い主：「もし望むなら、彼に電話しなさい。」
私：「主よ、もしかして、私が想像してしまったのでしょうか？」 救い主：
「あなたは私と深く結ばれている。」
私：「私が書いたことを、ヴォクト牧師に読み上げていいでしょうか？」 救い主：「怖いの？」
私：「実は、そうでもないんです。」
救い主：「それなら、そうしなさい。
」
私：「はい、救い主よ。彼に電話します。なぜなら、生ける
神であるあなたが、肉と血、肉体と魂、人間性と神性を備えて、聖体の中に真実かつ本質的に存在していると信じているからです。」
12時30分。マルクスという15歳の少年のレントゲン撮影を行った。
彼と一緒に看護師がやって来た。彼女は、彼が体調を崩し、目が完全に虚ろになった時、病棟の全員が驚いたと私に話してくれた。
それがいつのことだったのか尋ねてみると、私が病院にいる全員のために、しかも何度も悪魔祓いの祈りを捧げていたまさにその時間帯だったことに気づきました。
その少年を見て、「聖水を少し飲みたいか」と尋ねると、彼は即座に「いいえ、家にあるから、それを動物たちにあげるんです」と答えました。
そこで私は聖水で彼の額に十字を切ると、すぐに彼の目はまた虚ろな状態に戻ってしまった。
看護師の前で、私は彼に「アヴェ・マリア」を唱えられるかと尋ねました。彼は「はい」と答え、祈り始めましたが、3語目
を言うところで言葉が出なくなってしまいました。そこで、私は一人で祈りを続けました。
私は彼に「尊き御血」の祈りの紙をもう一枚渡し、彼のために祈ると伝えました。
12時45分、礼拝堂にて：私はマルクスのために祈り、救い主に、彼の中に不浄な霊がいるかどうか尋ねました。
私はすでに知っていたが、救い主から確認を得たかったのだ。救い主：「そうだ、彼にはその
霊が宿っている。そして、その霊は彼の中に留まらなければならない。」
私は救い主に、患者のマルクスを再び私のところへ送ってくださるようお願いした。
14時10分、彼は実際にやってきました。今回は母親と一緒に来ていました。少年はベッドに横たわっていました。
どうやら起き上がれないようだった。彼が私を見ると、すぐに聖水を求めてきたので、私はそれを渡した。それから彼は母親に、聖母マリアの絵を見るように言った。母親がその絵を見ると、彼にこう言った。「また全部見なきゃいけないのね。」
彼女は誇らしげに、「早く家に帰れるといいね」と言いました。
母親が少し横に下がったとき、私はマルクスに「君はガラスで遊んでいたね」と言いました。彼はすぐに私の言わんとしていることを理解し、「ええ。ベルリンでもここでも、そんなの無害な遊びですよ」と言いました。私は彼を見て、「えっ？」と尋ねました。
すると彼は、「僕の母さんもそうだった」と答えた。
その瞬間、なぜその悪魔が体内に留まらなければならないのかが、私にははっきりとわかった。私は彼の手のひらに聖母マリアのメダルを押し当てると、彼はそれを受け取った。この少年にはエクソシズムの祈りを捧げる必要があり、神経内科に留めておくべきではない。ここでは何もできない。母親も医師も私の話を信じてくれないからだ。私は彼のために祈った。
夕方、ロート教会でマルクスのためにロザリオを唱え、その後、彼のために聖ミサを捧げた。

20時——祈りの集い：
今日は多くの男性が参加していました。デリス氏、アルトゥール・ワグナー氏、神学部の学生フリドリン、ドチャート神父などです。

素晴らしい時間でした。私たちは患者のマルクスのためにも祈りました。ドチャート神父とデリス氏は少し落ち着かない様子でした。私は多くの恵みを受けました。

1992年3月3日 - 火曜日

10時 医師室：私は救い主にデリス氏について尋ねました。
救い主：「デリスは助祭になるべきではない。彼はそのために選ばれていない。彼が助祭になりたいと思うのは、高慢のせいだ。ドチャート牧師には、また不浄な霊が取り憑いていた。」
私：「どの『懺悔の祈り』を唱えればよいのでしょうか。古いものですか、それとも新しいものですか？」 救い主：「古いものだよ、わが娘よ。」
私：「救い主よ、昨日はいつも以上に多くの恵みをくださいました。」 救い主：「あなたがたが捧げた祈りが、私の心にかなったのだ。」
私：「祈りのグループに何を伝えればよいでしょうか。私たちが知っておくべきこと、私たちにとって重要なことは何ですか？」
救い主：「心で祈りなさい。」私：「どうやって、救い主？」
救い主：「口ではなく、心で語れ。たくさんの愛を願い求めなさい。」私：「では、私たちはもっと聖霊に呼びかけなければならないのですか？」
救い主：「そう、わが娘よ。聖霊があなたの心を愛で燃え立たせるとき、あなたは心から祈ることができる。聖霊があなたの中にも宿れるよう、心を清めなさい。
もはや罪を抱え続けてはならない。罪は大きな傷となり、小さな傷よりも治るのに時間がかかる。大きな傷は大きな痛みをもたらし、そうなると、もはや喜んで祈ることはできなくなる。」
「書き留めておきなさい、娘よ。口だけで祈るのは、私たちが聖霊を心の中で働かせないからなのです。祈りの中で愛が生まれるように祈りなさい。」
私：「主よ、私の神よ、私たちが心から祈ることができるよう、恵みをお与えください。救い主よ、あなたは私の夫の中にまだ不浄な霊がいるとおっしゃいました。しかし、彼は昨日聖体拝領をしました。」
救い主：「あなたの夫は、告解に行くべきだ。」
私：「きっと、もう告解したと言うでしょう。」救い主：「娘よ、彼に、きちんと告解するように言いなさい。」

16時から17時まで、私は教会で至聖体の前で先導の祈りを捧げ、礼拝を行う当番でした。夫とフリドリン、そして私は一緒にその務めを果たし、先導の祈りを捧げました。私が夫のために祈っていたにもかかわらず、夫は少し落ち着きがありませんでした。
ヴォクト神父は、私がすでに伝えていたにもかかわらず、まだシェンヴェルファーを取り外していませんでした。
18時30分には聖ミサがあり、私はヴォクト神父のために聖体拝領を捧げました。

1992年3月4日 — 水曜日 — 灰の水曜日

私は水とパンだけで断食し、24時間ずっと頭痛に悩まされました。時には耐え難いほどでした。それは贖罪の苦しみであり、私はそれをヴォクト神父と罪人の回心のために捧げました。
私はヴォクト神父と、アンドレアス（神学部の学生）のために断食しました。
私は救い主に、なぜあの修道女が、そうしてはならないと分かっていながら、昨晩も聖体拝領を配り続けたのかと尋ねました。その後、私は彼女のために聖体拝領を捧げました。
救い主：「心が硬くなった者には、恵みを与えることはできない。彼女のために祈り、彼女のために断食しなさい。」
夕方、教会にて。灰の十字印を付ける作業には、3人の信徒とフォクト神父が手伝ってくれました。私は救い主に、聖別された手から灰の十字印を受けられるよう願いました。すると、普段は反対側にいたはずのフォクト神父が、私のところへ来てくださったのです。 聖体拝領の際、私は再び救い主に、聖別された手から聖体を受けられるよう願い、ヴォクト神父様から聖体を拝領しました。

私は、ヴォクト神父のために聖体拝領を捧げました。
信徒たちが灰の十字架を付けているのを見たので、私は尋ねました。その信徒の中には、神学部の学生（アコライト）もいました。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。灰は聖別された手によってのみ配られるべきである。司祭のみ、司祭のみだ。これもまた、教会における泥の一因である。」

1992年3月5日 — 木曜日

早朝、私は慈悲のロザリオと神の慈悲への連祷、その他の祈りを捧げました。
10時、医師室にて：
救い主：「娘よ、書き記せ。私はその恵みを与えることができなかった。なぜなら、信徒たちが灰の十字架を配っていたからだ。私は、司祭の聖別された手を通じて灰を配る際に、その恵みを与えるのだ。」
午後、患者がいなかったため1時間祈りを捧げ、その後ロザリオを唱えました。
夕方、ロートの教会で、信者たちと共にまずロザリオを唱え、その後、聖ミサに参加した。聖体拝領は、今回もヴォクト神父のために捧げた。教会には、ポーランド出身のスタニスラウ神父もいらっしゃった。

1992年3月6日 聖心金曜日

13時、私は礼拝堂へ向かいました。しかし、礼拝堂は閉まっていました。それは私にとって辛いことでしたが、鍵を探しに行きました。病院棟の門番を呼び、彼に礼拝堂を開けてもらいました。霊的聖体拝領の後、私は救い主に、ポーランド出身のスタニスラウ神父の行っていることが正しいのかと尋ねました。というのも、彼は聖体を手に授けているからです。
当初、私はこの司祭ととても気が合ったのだが、今ではまるで他人のようだった。さらに私は救い主に、以前も手での聖体拝領を行っていたのかと尋ねた。救い主：「いいえ、彼は金のためにそうしているのだ。それによって、彼は私を裏切ったのだ。」
私：「これを日記に書いてもいいですか？」
救い主：「ええ、書いていい。彼はそれによって多くの恵みを失ったのだ。」私：「誰が彼に影響を与えて、手での聖体拝領をさせるようになったのですか？」
救い主：「それはルシファーの仕業だ。手による聖体拝領を行う限り、彼らはサタンに仕えているのだ。」私：「主よ、スタニスラウ神父にそう伝えてもいいですか？」
救い主：「わが娘よ、彼はあなたのところには来ないだろう。」私：「彼はそれが間違っていることを知っているのでしょうか。それを感じているのでしょうか？」
救い主：「娘よ、罪を犯しているとき、その罪を自覚しているか？」　私：「でも主よ、彼はそれが正しいと思っているのかもしれません。」
救い主：「わが娘よ、罪を認識できないなら、その人は悲惨な境遇にあるのだ。」私：「『悲惨な境遇にある』とはどういう意味ですか？」
救い主：「神の恵みの中にいないということだ。」
私は少し驚いて、一瞬息が止まってしまった。そして、もしかしたら私が正しく理解できていなかったかもしれないと思い、救い主にもう一度言ってくれないかと尋ねた。
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。神の恵みの中にいないということだ。」

その日の午前中、私は救い主に、大学病院にいる魂たちについて何か教えてほしいとお願いしていた。
救い主：「私が言うことを、君は受け止められるか？」私：「救い主よ、あなたは私自身の私よりも、私のことをよくご存知です。」
夕方、ロートの教会で、スタニスラウ神父の姿は見当たらなかった。
ミサの終わりに、私は「永遠の灯」が点いていないことを指摘したところ、教会係の女性に怒鳴りつけられました。彼女は怒りに任せて教会中に響き渡るほど大声で叫びました。
「家に帰りなさい、あなたには関係ないことよ。」私はその女性のために祈った。ロート出身のエーリッヒという男性が、外で彼女とまだ話していた。
聖体拝領はマリオンに捧げた。20時、私はエクソシズムと聖霊のロザリオを祈った。その時間帯、聖体奉仕者たちは打ち合わせ中だったため、もはや信徒が聖体を配ることはなくなるようにと願ったのだ。

エーリッヒは私のそばにいて、一緒に祈ってくれた。私は夫も祈りに含めた。しかし、夫はひどく神経質になり、激昂していたため、エーリッヒは家に帰ってしまった。あの悪魔祓いは夫に効いたのだと思う。その夜、夫はあらゆることに苛立っていた。寝る前に、私はさらに二回のロザリオを唱えた。

1992年3月7日 - 聖母の贖罪の土曜日

早朝、私はコルドゥラ夫人と共にヴァーグハウゼルの教会に行きました。
16時15分から18時15分まで、ヴォクト神父様のために祈りました。私が教会に入ったとき、永遠の灯は点いていませんでした。誰かが来て灯を灯してくれるよう祈りました。それから、私は救い主にこう言いました。「17時00分までに誰も来ず、永遠の灯に火を灯す人がいない場合でも、10万の魂が救われるように、これをあなたに捧げます。」
17時になっても誰も来て『永遠の灯』に火を灯さない場合、10万の魂が救われるように、これをあなたに捧げます」と。
17時05分、教会係の女性がやって来て、急いで永遠の灯に火を灯しました。私はその2時間、ひざまずいてロザリオを4回唱え、他にも多くの祈りを捧げました。

1992年3月8日 - 日曜日

朝5時45分に起き、約1時間祈りました。最初は聖霊への祈り、次に古い『コンフィテオール』、悪魔祓いの祈り、聖大天使ミカエルと守護天使への祈り、聖母マリアへの奉献、聖心への祈り、そして喜びのロザリオを唱え、
その後、霊的に聖体拝領を行いました。
再び心から泣き出した。私を襲う試練があまりにも多かったからだ。中でも最も辛いのは、夫に降りかかっている試練である。すべてを投げ出して、これほど多くの祈りをやめてしまいたいとさえ思った。
私は救い主に助けを求め、彼に嘆きを訴えました。また、聖母マリアにも、私には耐えきれないと祈りました。私はこう言いました：「(」) 四方八方から試練に襲われている上に、司祭にも失望させられてしまいました。
すると突然、私は泣き止みました。その後、私の心には深い平安と静けさが訪れました。私は救い主に、その司祭や教会の皆が見ることができるようなしるしをくださいと願いました。
私は救い主に、自分は罪人であり、このしるしを受けるに値しない者だと告げ、こう付け加えました。「主よ、御心が行われますように。」
救い主：「はい、あなたには、皆が見ることができるしるしが与えられます。」
私：「そのしるしを、司祭も目にするのかどうか、知りたいのです。」救い主：「はい。」
私：「それは、人々が改心するような良いしるしになるのでしょうか、それとも、私たちを怖がらせるようなものになるのでしょうか?」
救い主：「神は誰にも恐怖を与えることはありません。」
私：「そのしるしはいつ現れるのですか。復活祭の前ですか、それとも後ですか。」救い主：
「復活祭の前だ。」
私：「そのしるしによって、神父は変わるのでしょうか? 」救い主：「いいえ、
彼はそれによって変わらない。」
私：「なぜですか、救い主様。もう本当に参ってしまいました。いつか彼は変わるだろうと思っていたのですが? 」 救い主：「
そう思っていたのですね。」
私：「でも、なぜですか、救い主様? 」 救い主
：「彼にはまだあまりにも多くの傲慢があるか
らだ。」
私：「主よ、お願いです。それなら、私の日記を託せる別の司祭をください。」
救い主：「それは私に任せてください。」
私：「主よ、私の神よ、私があなたをこのように呼びかけること――例えば、『主よ』『救い主よ』『愛するイエス様』『私の最愛の方』『聖なる、力強く、永遠の神よ』『万王の王よ』『平和の王よ』『全能で慈悲深い神よ』など――は、あなたにとってよろしいのでしょうか? 」救い主：「心から湧き出るままに、そう言いなさい。」」
私はこの対話を感謝し、毎日、煉獄の魂たちのために免罪の祈りを捧げているのと同じように、世界中のすべての人々と煉獄の魂たちのために聖体拝領を捧げました。

時刻は8時30分頃でした。夫は起き上がり、ヴァーハウゼルへ告解に行きました。私の祈りは聞き届けられました。というのも、ロザリオを唱えながら、神が夫に良い告解ができるよう恵みを与えてくださるよう祈っていたからです。
9時45分から11時10分まで、私はロートの教会にいました。ミサの前に、教会を訪れたすべての人々のために「神の慈悲の連祷」を唱えました。聖体拝領は、再び煉獄の魂たちのために捧げました。
家に帰ると、夫は別人のようでした。まるで生まれ変わったかのようで、私と一緒に祈りの集いに参加してくれました。その日は一日中平和な時間が続き、夫は優しく、親切でした。この恵みを神様に感謝します。
夜、午前2時30分に目が覚め、祈ることができるという恵みを受けました。
私は「七つの最後の言葉」に祈りを捧げ、それぞれに「主の祈り」と「アヴェ・マリア」を1回ずつ、「栄光は父に」を唱え、その後「慈悲のロザリオ」を唱えました。それから、煉獄の魂たちに聖水を注ぎ、その後、素晴らしい眠りにつきました。

1992年3月9日 – 月曜日

10時 医師室:
私は、この病院にいる人々、そこで働く人々について、救い主に尋ねました。
金曜日、救い主は私に、ご自身が告げることを耐えられるかと尋ねてきたので、私は今、もしそうおっしゃるのなら、せめて最も穏やかなことだけを告げてほしいと彼に言った。
救い主:「彼らは皆、立ち返らなければならない。ほとんど全員が広い道を進んでいる。」私:「救
い主よ、私は彼らのために何をすればよいのですか? 」
救い主:「彼らのために祈りなさい。」
私:「でも、私の祈りだけでは多くの人を救うことはできません。」救い主
:「いいえ、私と共にあるなら、あなたは多くの人を救うことができる。」
ある医師が私たちのレントゲン科を訪ねてきました。トルコからの来客で、イスラム教徒のその方は、レントゲンや撮影について情報を得たいと望んでいました。
私は、レントゲンについてよりも、カトリックの信仰について多くを彼に話しました。特に、聖霊がいかに重要であ
るかを伝えました。
その医師はイスラム教徒ですから、それが正しいことだったのかと、私は救い主に尋ねました。救い
主:「皆、同じ信仰を必要としているのだ。」
私:「私はどうあるべきか、教えていただけますか? 」救い主:「
そのままの自分でいてください。」
午後1時、病院の礼拝堂にて。
私は救い主に、日曜日は教会にたくさんの人が集まるのに、平日はほんの数人しかいないと伝えました。そして、「司祭だけで聖体拝領を執り行うことはできないのでしょうか。信徒の助けが必要なのでしょうか」と尋ねました。
他の人たちは辛抱強く待つべきだと思うし、もし待てないなら、若い司祭候補者のために祈って、もっと多くの司祭が育つようにすべきだ。」
救い主:「日曜日にしか聖体拝領しない人のほとんどは、ふさわしくない状態で拝領している。」私:「それは司祭
に伝えるべきです。司祭にはそれがわからないのですか? 」
救い主:「もし彼が手での聖体拝領を行わなければ、それに気づくでしょう。」私:「これを日記に書いてもいいで
すか? 」
救い主:「ええ、娘よ、書き留めておきなさい。」
私:「多くの人は、手よりも口でより多くの罪を犯していると言います。」
救い主:「その言葉は信じない。しかし、聖体の中に宿る三位一体の神と普通のパンとの区別をもはやつけられないという無関心こそが問題なのだ。司祭たちはその違いを説教しなければならないが、手による聖体拝領を実践している以上、もはやそのことについて説教することはできないのだ。」
私:「手でも敬虔に受けられる、と彼らは言います。」
救い主:「書き留めておきなさい、娘よ。手で聖体を拝領することは不敬な行為であり、不敬な者が聖体を拝領すれば、それは即座に不敬な行為となるのだ。」
私:「手による聖体拝領によって、多くの冒涜が行われているのですか? 」救い主:「あなたが想像
する以上に多い。」

夕方、ロートにある教会で、司祭が福音書を朗読している最中、ある女性が教会中を駆け抜け、聖なる司祭のすぐ前に立ち塞がった。
彼女の靴の音と力強い足取りはあまりにも大きかったため、信者全員が彼女に目を向けました。どうやら、教会内に誰かが車を停めていて、彼女の出口を塞いでいるらしいのです。しかし、彼女の慌てふためく様子は私には奇妙に思えました。
彼女は教会係の女性に手を振ると、その女性が彼女のところへやって来て、司祭の朗読を中断させ、事情をすべて伝えた。司祭が「その車は誰のものか」と尋ねたが、誰も名乗り出なかった。
聖体拝領の後、私は救い主にヨハネス神父について尋ねた。というのも、ローランドが電話で、イタリアのヨハネス神父がプラトン司教に改宗し、今ではその著書を認めていると教えてくれたからだ。
救い主：「ヨハネス神父の著書は正しくない。」
それから、1992年3月13日に開催される予定の、
ガラバンダルに関する講演について尋ねた。私は救い主にこう言った。「私はガラバンダルの御出現を信じていますが、あの映画の上映やその後の討論会、そしてそれに対する大々的な宣伝が気にかかります。そこには悪魔が働き、善を破壊しようとしているのではないですか？」
救い主：「その通りだ。」
夜8時、祈りの集い。多くの人が集まっていました。

1992年3月10日 — 火曜日

私は、昨日教会に来た女性について、救い主に尋ねました。
救い主：「あれは不浄な霊だった。私が許したのだ。これからさらに多くの者がやってくる。私は赤い服を着て教会に行き、ヴォクト神父のために聖体拝領を捧げた。」

1992年3月11日 — 水曜日

10時10分、医師の診察室：
私は再び、そのしるしについて救い主に尋ねた。救い主：「教会でしるしを受けることになる。」私：「それは何になるのですか？」
救い主：「それは私に任せておきなさい。」
私：「あなたから来るものと、私から来るものを区別できますか？」救い主：「はい、できる。」
救い主は私に多くの恵みを与えてくださいました。主よ、神よ、感謝いたします。私：「何か教えてください。私もあなたから何か聞きたいのです。」
救い主：「私はあなたを愛している、わが娘よ。」私：「それを聞くと、心が温まります。」

16時30分：私はボックスベルクのツェナッケルにいて、講演を聞いていました。遅れてしまったため、そこで聖ミサに参列することはできませんでした。
19時00分、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で聖ミサに参加しました。
私はまた一人で聖体拝領台の前でひざまずいた。新しく着任した神父が、ミサの終わりにようやく私に聖体を授けてくださった。待っている間、私はその神父のために何度も『アヴェ・マリア』を祈った。
聖体拝領は、マリオンに捧げました。
20時30分、マリオンがやってきて、私たちは日記のメモを書きました。

1992年3月12日 — 木曜日

クリニックで一人で働くのは、もう2日目だった。多くの患者さんが来院した。それでも、たくさん祈ることができた。
12時30分、病院の礼拝堂にて：
昨日、ロクス礼拝堂で聖体拝領台の前で一人でひざまずいていたことが正しかったのか知りたかった。私の知る多くの人々は、聖体拝領台があったにもかかわらず、聖体を受け取る際に立っていたり、神父様のすぐ前の階段にひざまずいたりしていた。
もしかすると、私は間違いを犯してしまったのかもしれない、と思いました。救い主：「今まで通り、ひざまずき続けなさい。」

私：「なぜ他の人たちは聖体拝領台でひざまずかないのですか？」救い主：「誤った謙遜、人への恐れ、司祭への恐怖だ。」
私は祈りのグループのメンバーたちのことを思い出し、救い主に「彼らにそう伝えるべきでしょうか？」と尋ねました。
救い主：「そう、だが愛を込めて。」
なんだか少し奇妙に感じます。救い主のために何か良いことをしようとしても、結局は自分一人になってしまうのです。結局のところ、私たち全員が神に栄光を帰す義務があるのですから。
帰宅途中、いつものようにロザリオを唱えました。
16時にミンゴルスハイムへ行き、塩水プールで約1時間半ほど泳ぎました。
夕方、ロートにある教会に行き、そこでロザリオの祈りにも加わった。聖体拝領の際、私の隣にいた修道女が通り過ぎていった。
私は立ち上がり、聖体拝領を受けずに自分の席に戻りました。
聖体拝領台から自分の席に戻る途中、悪魔たちが私を引き裂こうとしているのではないかと思いました。しかし、救い主が霊的に私のところに来てくださり、私は多くの恵み、特別な恵みを受けました。私は、自分が働いている病院の人々のために、聖体拝領を捧げました。
その直後、私はミンゴルスハイムにあるロクス礼拝堂へ向かいました。
そこでは19時30分からもう1つの聖ミサが行われており、そこで私は聖体拝領を受けました。その聖体を、煉獄にいる司祭や修道者たち、聖体を配っていた修道女、そして煉獄にいる他のすべての魂たちのために捧げました。

1992年3月13日 - 金曜日

今朝、私は約1時間ほど祈りを捧げ、病院全体、私の家族、ドチャート神父様、フォクト神父様のために、少なくとも10回は悪魔祓いの祈りを唱えました。
やるべきことは山ほどあったけれど、それでも救い主と過ごす時間は確保できました。レントゲン部門では2人のスタッフが不足しており、1人は病気で、もう1人は5月まで来られません。私は救い主に、3人分の仕事をこなせるよう恵みを与えてくださるよう祈りました。主はそれを与えてくださり、神の力によって私は順調に仕事をこなすことができました。
10時10分、私は医師室へ向かいました。そこで、今日だけで2回目となる霊的な交わりを持ちました。私は救い主に尋ねました。「昨日、修道女が救い主を伴って私のそばを通り過ぎた時、私は立ち上がって自分の席に戻りましたが、救い主を受け入れることなく、心の中で激しい攻撃を感じました。あれは何だったのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、それは非常に多くの不浄な霊たちだったのだ。」
私：「私が聖体としてあなたを受け入れなければ、あなたは私の内に入らないと、彼らは信じていたのですか？」救い主：「そう、彼らはいつもそう思っているのだ。」
私：「その瞬間、彼女たちが私を引き裂こうとしているような感覚がありました。もしかして、私の気のせいだったのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、もし彼らにその力があれば、お前をバラバラに切り刻んでいたであろう。
私：「主よ、あなたが霊的に私のところに来て、私があなたと一つになったとき、聖体拝領をしたときよりも多くの恵みを受けました。それにはどのような理由があるのですか？」救い主：「それは、私が司祭の聖別された手を通して信徒たちに授けられることを望んでいるからです。」
私：「では、私は司祭に対してどのように振る舞えばよいのでしょうか？」
救い主：「常に司祭の言うことを聞くべきだが、もし彼が私への敬意を傷つけるようなら、従う必要はない。」私は、聖体拝領を受けずにシスターの元から逃げ出したことが正しかったのか知りたかった。もしかすると、それは救い主の御心に適わなかったのではないかと思ったのだ。
救い主：「いいえ、わが娘よ、それどころか、あなたは良いことをしたのだ。」
私：「でも、主よ、神よ、もし司祭が『それはしてはいけない』とおっしゃったら？」救い主：「それなら、彼の言う通りにしなさい。その責任は彼にある。」
私：「ヴォクト神父様とは、いつお話しできますか。あなたから直接お聞きしたいのです。主よ、あなたの御心が行われますように。」
救い主：「そう、わが娘よ、彼と話してみなさい。」私：「いつですか？」
救い主：「できるだけ早く。

私：「私が教会を離れることで、あるいは残って信徒から聖体拝領を受ける人たちは、神の栄光を傷つけているのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、よく聞きなさい。手による聖体拝領を受ける者たち、そして聖体を配る信徒たち、そのすべてが神の栄光を傷つけているのだ。
私：「親愛なる救い主よ、もう一つお尋ねしたいのですが、ヴォクト神父様にすべてを読み上げるべきでしょうか、それとも特定の日の分だけでよいのでしょうか？」
救い主：「すべてだ、わが娘よ、すべてを。」
私：「主よ、私が彼のところへ行くとき、あなたは私と一緒にいてくださいます
か？」救い主：「はい、私はあなたと一緒にいるでしょう。」
私：「主よ、私の神よ、今、私の心にはこれほど多くの愛と温もり、そして恵みを感じています。これは、私がヴォクト神父のもとへ行くべきだという確証なのでしょうか？私が彼のもとへ行くことを、あなたは喜んでおられますか？」
救い主：「そのことを、私はとりわけ喜んでいる。」
私：「私はこれまで、彼のために何度も断食し、祈り、聖体拝領を捧げてきました。私が彼と話せば、彼は少しは変わってくれるでしょうか？」
救い主：「ええ、娘よ、彼はすでに変わりつつある。しかし、私が彼に何を求めているか、彼は知るだろう。」夕方、私はロートの教会に行き、聖体拝領を貧しい魂たちのために捧げました。

1992年3月14日 - 土曜日

早朝、ヴァーハウゼルでミサに参加した。アランス神父がミサを司式した。ミサの後、教会でラウレタン聖母連祷を唱えた。その後、マリオンと一緒に日記を書きに行った。
16時30分から、ヴォクト神父のために祈った。16時45分、神父のもとへ告解に行った。とてもがっかりして、泣いてしまったほどだった。その後も、ヴォクト神父のために祈り続けた。

1992年3月15日 - 日曜日

夜3時45分、私はすべての人々のために祈り始めました。ヴォクト神父様もその祈りに含めました。私は救い主にこう言いました。「すべての魂はあなたのものであり、すべての魂が救われるべきです。」
約1時間半ほど祈った後、私は神と一つになりました。私は泣きました。昨日のヴォクト神父との告解の後、私はとても辛い思いをしていました。
そこで、救い主が本当に私に語りかけているのか、再び疑念が湧いてきました。というのも、もしヴォクト神父が私に言われた通りにすれば、もう教会に行く必要が全くなくなってしまうからです。
私は救い主に答えを求めた。
私はこう言いました。「主よ、神よ、私のイエスよ、私の魂の導き手よ、三位一体の神よ、私に語りかけているのはあなたですか？」
救い主：「そう、わが娘よ、私はあなたの主であり神、あなたのイエス、あなたの魂の導き手である。」
私：「告解の後、どうやってヴォクト神父のもとへ行き、日記の箇所を読み聞かせればよいのでしょうか？」
救い主：「まだ待ちなさい。」
それから、私は再び「しるし」について尋ねました。
救い主：「教会でしるしが現れる。わたしを信頼しなさい。」私：「それによって、魂たちは回心
するのでしょうか？」
救い主：「はい。」
私：「いつですか？」
救い主：「復活祭の前になるだろう。」
私：「心に灼熱のような痛みを感じます。これは何ですか？」救い主：「それは私の傷だ。私はあなたの中で苦しんでいるのだ。」
私：「司祭を通して私に語りかけたのですか？」救い主：「いいえ、彼は私
を自分の心の中に入れようとしない。」
私は、ヴォクト神父の告解室で自分が正しく行動したかどうか尋ねた。
救い主：「懺悔室での君の行動は正しかった。わが娘よ、これからも私に忠実であり続けなさい。」私：「はい、主よ。あなたを愛しているから、そうします。」

6時頃、再びベッドに入り、あと2時間半ほど眠りました。10時15分から11時15分まで、ロートの教会のために、特にヴォクト神父様、祭壇奉仕者たち、信徒たち、教会聖歌隊、そして教会で不敬虔に聖体拝領しているすべての人々のために祈りました。
午後には黙想会に参加しました。

夕方、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で聖ミサに参加した。神父様の説教はとても素晴らしく、私は救い主との深い交わりを体験することができた。
インフルエンザにかかってからすでに3日目でしたが、教会に行くことができたことを神に感謝しました。

1992年3月16日 — 月曜日

ひどい風邪に悩まされていました。ほぼ一晩中眠れず、激しい頭痛と喉や胸の痛みがありました。
咳はなかなか収まらず、それもとても辛かった。胸椎もひどく痛んだ。
私は家に留まり、11時30分に医師の診察を受けることになった。
今朝起きたとき、1時間半ほど祈りました。それから、救い主と一つになりました。
救い主：「書きなさい、わが娘よ。あなたの人生は私の手の中にある。あなたは完全に私の中にあり、私と共にいるのだ。」
私：「でも、まだその意味がわかりません。天国がすごく恋しいのです。」救い主：「それは、あなたが完全に私のものであるからだ。」
私：「あなたは、私が地上で過ごす人生は短いとおっしゃいました。それはどういう意味ですか？」救い主：「私はすでにあなたを私のもとに迎え入れている。しかし、その時間は私のものだ。」
私：「私はもう、この地上で果たすべき使命を全うしたのでしょうか？」救い主：「ああ、わが娘よ、まだやるべきことは山ほどあるのだ。」
救い主：「悩みを自分で抱え込まないで。私の手に委ねなさい。あなたは完全に私のものだから。」私：「主よ、私はとても弱いです。私の弱さをあなたの手に委ねます。」
私：「イエス様、あなたと一緒にいるのは素敵です。あなたと離れたくありません。」救い主：「私の娘よ、もう誰も私たちを引き離すことはできない。」
私：「いつまでもこのままであってほしいと願っています。主よ、神よ、私は心を尽くし、力を尽くしてあなたを愛しています。私たちはすでにこの地上で神の御国を手にしています。
あなたさえいれば、すべてを持っていると信じます。完全な満足は、主であり神であるあなたと共にあってこそ得られるのです。」
前回の告解の後、とてもがっかりしていたので、ヴォグト神父について尋ねてみました。救い主はまず、ヴォグト神父は臆病者だとおっしゃいました。私はそれを書き留めようとは思いませんでした。しかし、救い主はそれを二度繰り返されました。
私：「『臆病者』以外のことを教えてください。」
救い主：「彼は、私が彼に命じたことを成し遂げる時間がほとんどないだろう。」私：「その意味が全く分かりません。」
救い主：「しかし、彼はそれを理解するだろう。」
私：「彼と話す機会は、まだあるでしょうか。」救い主：「ああ、あるだろう。」
私：「でも、彼は私の言うことを信じないでしょう。彼は中立的な立場ですから。」救い主：「中立など存在しない。信じるか、信じないかのどちらかだ。」私：「主よ、私の神よ、この問題をあなたの御手に委ねます。」

夕方、ロートの教会で、ヴォクト神父のためにロザリオを唱え、彼のために聖体拝領を捧げました。
20時 祈りの会：
とても素晴らしい時間でした。私たちは十字架の道を祈り、全員が霊的に交わりました。
私は祈りの集会で、近くに司祭がおらず、何かが起こった時には、霊的に交わり、救い主と霊的に一つになるべきだと話しました。そして、それは学び、実践しなければならないことであり、できれば一日に何度も行うのが最善です。
そうすることで、イエス様にますます近づき、イエス様をますます愛することを学び、霊的生活のための多くの力と恵みを受けることができます。私たちは皆、多くの恵みを受けました。
ドチャート神父は参加されませんでした。

1992年3月17日 - 火曜日

昨日は恵みを受けましたが、今朝は涙がこぼれました。誘惑が私を襲いました。不浄な霊が、「それは救い主の声ではない」「司祭が臆病者であるはずがない」と私に吹き込もうとしたのです。

その霊は言いました。「ほら、それはあなた自身だ。」私は泣き出し、すぐに祈りました。疑いはなんとすぐに湧いてくるものでしょうか。

私は救い主にこう言いました。「主よ、あなたが私に約束してくださったしるしを受けるまでは、あなたに尋ねません。司祭が見て、人々が回心し、私の司祭が啓示を受けるようなしるしです。私は司祭なしではいられません。 罪を抱えたまま死にたくありません。罪を赦せるのは、聖別された司祭だけです。あなたは彼にその権能をお与えになりました。主よ、私の神よ、私はあなたを愛していますが、あなたが私に語られるすべてを委ねられる司祭が必要です。

主よ、あなたが「臆病者」と呼ぶその司祭のためであっても、私は苦しむ覚悟があります。しかし主よ、あなたの御心が行われますように。

私がすべてを語り終えると、静寂と安らぎが訪れ、私はもはや救い主に何も尋ねようとは思いませんでした。すると、ある声が聞こえてきました。

イエスはこう言われました。「そう、わが娘よ、その通りになる。」

その声を聞いて、私は驚きました。それから、かつてないほど熱心に、約1時間ほど祈り続けました。椎間板のせいで、約40分間、体操に出かけていました。

現在痛みを感じているため、約40分間、体操に出かけていました。

戻ってみると、隣人の家に消防隊と警察が駆けつけていました。ガレージと車が燃えていたのです。ガレージには爆発物を詰めた瓶があり、周辺の家々が何軒も吹き飛ぶところでした。

今朝、悪霊は私を苦しめただけでなく、隣人にも被害をもたらしたのだと思いました。たくさん祈っておいてよかった。そうでなければ、もっと大変な事態になっていたかもしれません。

午後、森へ行き、さらに三つのロザリオを唱えました。ヴォクト神父様のために、さらに熱心に祈るよう努めました。教会でも再びロザリオを唱え、ヴォクト神父様のために聖体拝領を捧げました。

教会では、追悼ミサが行われ、多くの参列者がいたにもかかわらず、信徒が聖体を配らなかったのは今日で2日目であり、私は嬉しく思いました。

やはり、神父様ご自身が聖体を配ってくださると、すべてが順調に進みます。神父様のために、そして信徒の方々が聖体を配らないよう、彼らのためにもたくさん祈る必要があります。

1992年3月18日 - 水曜日

早朝、約1時間半ほど祈りました。合一の瞬間、声は聞こえませんでした。しかし、救い主は私のそばにいてくださいました。ただ、私に話しかけてはくださらなかっただけです。

私は平安と静けさを感じ、主が私に話しかけてくださらなかったことについて悲しむことはありませんでした。その理由を知っていたからです。

正午にはロザリオを唱え、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂でミサに参加した。今日はヴォクト神父のために断食し、神父のためにそのミサを捧げた。

19.03.92 — 木曜日

午前3時30分に起き、聖ヨセフに愛を込めて挨拶した。再び眠りにつくまで、1時間以上祈りを捧げた。2時間後、再び祈りに行った。私は

ヴォクト神父様のため、ただ彼のためだけに「喜びのロザリオ」を唱えました。その後、ロザリオの代わりに、大天使ミカエルへの祈りを50回唱え、その最後に

「聖マリア、教会の母よ、すべての天使と聖人たちよ、私たちのために祈ってください」という言葉を付け加え、その後、大きなビーズで『主の祈り』、そして『栄光の祈り』、『マグニフィカト』、3回の『サンクトゥス』、そして「反逆する天使たちに対する聖母マリアへの呼びかけ」の祈りを捧げた。 この「悪魔祓いのロザリオ」には、私のすべての敵、ヴォクト神父様、ヴァーグハウゼルとノイブルク修道院、シュパイアーとフライブルクの神父様方、そして周辺地域のすべての司祭たちを含めました。さらに、私の祈りのグループ、ドチャート神父様、そして聖

聖体拝領を配っている信徒たちも、その対象に含まれていました。

その後、私は霊的に聖体拝領を行いました。救い主と一つになったとき、「ありがとう、わが娘よ」という声が聞こえました。
神様が感謝してくださったことに、私は少し驚きました。なぜなら、私がどのように祈ったかは、神様だけがご存知だからです。それから、私も、祈るために神様が与えてくださったこの力に感謝しました。「主よ、神よ、あなたに仕えることができるという恵みに感謝いたします。」
夕方、ロートの教会で、聖体配給の助手である信徒が私のところにやって来ました。私は救い主の前に頭を下げ、聖体拝領をせずに自分の席に戻りました。私は霊的に聖体拝領を受け、救い主が私のところに来てくださいました。その霊的な聖体拝領を、聖ヨセフに捧げました。

1992年3月20日 - 金曜日

祈りの後、私は救い主と心を一つにしました。そして、その信徒から聖体を受け取らなかったことが正しかったのか、改めて尋ねました。
救い主：「そう、わが娘よ、それは正しかった。できる限り、そのように続けていきなさい。」私は、ドチャート神父について尋ねました。彼が別の場所で、手による聖体拝領を擁護していると聞いたからです。
救い主：「彼は自分のやりたいようにしているのだ。」
私：「そのような司祭、つまり手による聖体拝領について語り、それを正しいと考えている司祭に対して、私はどのように振る舞えばよいのでしょうか。
救い主：「私があなたに言ったことを彼に伝えなさい。正しい方法は口による聖体拝領だと。」私は、聖木曜日について救い主に尋ねました。アロイス兄弟がヘドヴィグに、その日に何かが起こると話していたのです。
救い主：「そんなことは信じる必要はない。」
私：「イエス様、私に何か伝えたいことはありますか？」救い主：「はい。常に私に忠実であり続けなさい。」
私：「最も愛に満ちた父よ、私は常にあなたに忠実でありたいと願っています。そのため、たとえあなたが私に与えてくださる十字架がより重くなっても、常にあなたに忠実であり続けられるよう、その恵みをお与えください。」
夕方、ロートの教会で、私はロザリオの祈りと聖体拝領を、ヴォクト神父様のために捧げました。

1992年3月21日 - 土曜日

ヴァーグハウゼルの早朝ミサに出席し、特にヴェルナー・エゴン神父のために祈りました。福音朗読の際、彼が私たちに座ったままでいるよう求めたことが気に入りませんでした。私はひざまずき、今、座っているすべての人々のためにひざまずいているのだと思いました。その瞬間、内なる攻撃が襲ってきた。 それから、心の底からヴェルナー・エゴン神父のために祈りました。今回は、私が床にひざまずいている間、神父はためらうことなく私に聖体授与をしてくださいました。私は、救い主の前にひざまずいている間、私と共にいてくれるよう招いていた、神、聖母マリア、大天使ミカエル、ガブリエル、ラファエル、そしてピオ神父のような聖痕を持つすべての人々に感謝しました。
午後4時15分から6時15分にかけて、私はヴォクト神父のためだけでなく、教会内の泥のため、聖体配給係がもう聖体を配らないように、信者たちが不敬な手での聖体拝領をもう行わないように、そして手での聖体拝領によって神がこれほどまでに侮辱されることがなくなるようにと祈りました。 私はヴォクト神父のもとへ告解に行きました。私には一つの罪があり、それが気にかかっていました。ヴォクト神父は私に赦しを与えてくださいましたが、まるで異国で告解しているかのように、一言も話しかけてくれませんでした。私は告解室を出て、さらにロザリオを一連祈り続けました。夕方、私はさらに一時間、聖書を読みました。

1992年3月22日 - 日曜日

午前7時に祈りを始めました。1時間ほど祈った後、私は救い主と一つになりました。ヴォクト牧師のことを思い、涙を流し、赦しをくださった神に感謝しました。それから、なぜその司祭が私に一言も話しかけてくれなかったのか、救い主に尋ねました。

救い主：「娘よ、彼のために祈りなさい。彼自身、今は問題を抱えているのだ。」私：「あなたが彼を通して語られるのだと思っていました？」
救い主：「彼を通して語りかけたかったが、まだその時期ではない。」私：「まるでその司祭に見捨てられたような気がするの。」
救い主：「私も同じ気持ちだ。」
私は、自分が本当に選ばれた者なのか、それとも単にそう思い込んでいるだけなのか、何度も考え込んでいました。私は救い主に言いました。「もしそうお望みなら、教えてください。」
救い主：「よく考えてごらん、わが娘よ。」
そこで私はまず、イエスの「私はあなたの魂の導き手である」という言葉を思い浮かべました。
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。あなたは選ばれ、あらかじめ定められているのだ。」私：「でも、私は長年にわたり罪を犯してきました。」
救い主：「しかし、あなたは私のところへ来たではないか。」
私：「私はこれほど長い間、道を踏み外していたのですか。」
救い主：「そう。今、何百万人もの人々がそうであるように。」私：「その何百万人もの人々を呼び戻すことはできるのでしょうか？」救い主：「彼らのために祈りなさい。」
私は救い主と聖母マリアに感謝を捧げました。
私は、聖なるミサが始まる少し前に教会へ向かった。そこで、ミサに来るすべての人々のために、聖霊への連祷を捧げた。誰一人として、ふさわしくない状態で聖体拝領を受けることがないようにと、熱心に祈った。
私の祈りは聞き届けられたのだと思う。聖体拝領に訪れる人は、かつてないほど少なかったからだ。もう救い主からのしるしは必要ないと思う。人々が告解に行くよう、祈らなければならない。
聖体拝領の際、私は席にひざまずき、救い主にこう言いました。
「主よ、御心が行われますように。今、私が聖体拝領を受ける相手が、司祭であれ信徒であれ。」
その信徒が私に近づき、私を見た瞬間、まるで驚いたかのように、あっという間に方向を変えて私の元を立ち去りました。こうして、ヴォクト神父様が来て、私に聖体をお与えくださいました。
正午には、教会でロザリオの祈りと礼拝に参加しました。午後にはマリオンが私のところに来て、一緒に日記を書きました。

1992年3月23日 - 月曜日

朝早くから祈りを始めました。約1時間半後、私は救い主と心を一つにし、心から祈りました。
それから、日曜日に聖体拝領した人がとても少なかったのは、私へのしるしだったのかと、救い主に尋ねました。
救い主：「復活祭の前に、もう一つのしるしが現れる。わが娘よ、私を信じなさい。疑ってはならない。」救い主：「書き記せ、わが娘よ。私は、あなたが常に私に忠実であることを望んでいる。」
私：「主よ、御心が行われますように。」
救い主：「私は、私へと続く道をあなたに導いてあげよう。」私：「道に迷ってしまうのではないかと怖いです。」
救い主：「いつも私の手をしっかりと握りなさい。」
私：「主よ、もし私がすでに選ばれているのなら、何をすべきでしょうか？」救い主：「誤った教えが排除されるよう祈りなさい。
書き記せ、わが娘よ、手での聖体拝領は廃されなければならない。」私：「それは大変な任務です。」
救い主：「そう、わが娘よ、あなたはそれをしなければならない。」救い主：「平安のうちに去りなさい。」
私：「主よ、神よ、このお言葉をありがとうございます。私は、自分の力の及ぶ限り、最善を尽くします。」
私の魂は深い平安と静けさに包まれていました。これからは、これまで以上にすべてを真剣に受け止めなければならないと信じています。
聖ミサの前に、私はロザリオを唱えました。すべての願いをこのロザリオの祈りに託しました。聖ミサは、貧しい魂たちのために捧げまし

た。

20時 祈りの会：多くの人が集まっていました。私たちは約2時間、特に司祭たちがもはや手による聖体拝領を行わないようにと祈りました。

1992年3月24日 - 火曜日

まず1時間祈り、その後、霊的に聖体拝領を行いました。
クロアチア人の教授であり司祭でもある方が、1992年3月21日にシュパイヤーで講演を行いました。その講演を収録したカセットテープを、私はすでに聴いていました。
私は、クロアチア出身のその司祭、つまり教授について、救い主に尋ねました。「それは『荒野の声』なのでしょうか」と。
救い主：「しかし、あなたはそこへは行かなかったではないか。」
私：「あなたも私を呼んでくれなかったではありませんか。」
救い主：「司祭には、必ず何か良くない点が見つかるものだ。彼の中に良い点も探してみなさい。」
私：「主よ、私は司祭たちを愛しています。なぜ彼らは私を愛してくれないのですか？」 救い主：「あなたが彼らの悪行を見抜いているからだ。」
私：「主よ、しかし、彼らの悪行はあなたの前では隠せないはずです。」救い主：「そう、あなたの前では隠せない。だが、人々の前では隠せるのだ。」私：「それはまるで、盲人が盲人を導いているかのようです。」
救い主：「そう、その通りだ。」
私：「主よ、私たちはそんな闇の中にいるのでしょうか？」救い主：「明るくなるよう祈りなさい。」
私：「主よ、あなたは光です。どうか、あなたの永遠の光でこの闇を照らしてください。」
救い主：「ほとんどすべての人がこの闇の中にいる。彼らは皆、二人の父を持ちたいと願っている。どちらを選ぶか決められないのだ。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。すべての人間は悔い改めなければならない。」
私：「それなら、あなたがドン・ボスコに言われたように、『Avertere, avertere!（立ち返れ、立ち返れ！）』と言えるのですね。ペトロの鍵についてお尋ねしましたが、すべての使徒が天国の門の鍵を持っていたのでしょうか。」
救い主：「わたしの家は地上の家ではない。ここには鍵は一つしかなく、それを握っているのはペトロだ。すべての人は彼に従わなければならない。」
私：「でも、彼にはたくさんの敵がいます。」
救い主：「しかし、それこそが、彼が私の御霊に導かれているというしるしなのだ。」
よく覚えておきなさい、わが娘よ。イエス・キリストの公認された教えに反する者は、聖霊に対して罪を犯すことになる。それは最も重大な罪である。
そのような者たちには、もはや救いの手は差し伸べられない。」
私：「主よ、もうこれ以上書くことができません。これを書き留めるのが辛いです。私に与えてくださったこの恵みに感謝します。」
13時から14時まで、私は水泳をしていました。どこにいてもそうであるように、水の中でも私は短い祈りを捧げました。心の中で、私は救い主にこう言いました。「親愛なる神様、私はあなたをとても愛しています。プールにある水滴の数ほど、あなたを愛しています。」
するとすぐに、救い主から答えが返ってきました。「そして、私もあなたを愛しています。この世にあるすべてのプールの水滴の数ほど、あなたを愛しています。」
私はその言葉に微笑みました。
夕方、ロートの教会へ。今日、脚の手術を受けて入院している夫のために、ロザリオと聖体拝領を捧げました。

1992年3月25日 — 水曜日

私は救い主を人生の最優先に置いているので、まず祈らなければなりません。約1時間祈った後、心から内面的に祈ることができました。
私は救い主にこう言いました。「今日は何もお尋ねしません。もしかすると、私に何かおっしゃりたいことや、何かをしてほしいと願っておられるのかもしれません。」
「主よ、神よ、お話しください。あなたのしもべは聞いております。しかし主よ、あなたの御心が行われますように。」

救い主：「書き記せ、わが娘よ。ヴォクト牧師は、あなたが書いたことを聞く必要がある。」

私：「いつ彼のところへ行けばいいのですか？」　救い主
：「彼のところへ行き、もう一度尋ねなさい。」　私：「
そのとき、あなたは私と一緒にいてくださるのですか？」
救い主：「そう。娘よ、私はあなたと共にいる。」私：「これから、彼
を通して語ってくださるのですか。」
救い主：「私に任せておきなさい。」
私：「いつ彼のところへ行けばいいの？復活祭の前？それとも後？」救い主：「今すぐ、この
数日中に。」
私：「彼は、私があなたからの言葉を彼に伝えても、それをやりたがらない
のです。」救い主：「彼がそれを聞いてくれれば、それで十分だ。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。私たちに残された時間はほんのわずかだ。」
救い主がそうおっしゃったので、私はそれを書き留めようとは思いませんでした。しかし、救い主はそれをさらに二度繰り返されました。
私：「ヴォクト牧師に何か伝えますか？」　救い主：「私が彼をとても愛し
ていると伝えてくれ。」
私：「主よ、神よ、おっしゃった通りにいたします。このお話をくださり、ありがとうご
ざいます。」
救い主と一つになったとき、私はとりわけ深い平安と静けさを感じました。私がどれほど自由であり、救い主の愛をどれほど強く感じたか、言葉では到底言い表せません。また、多くの恵みも授かりました。
いかに心を込めて、内面から祈るか、そして何を祈るかが、どれほど重要なのかと、私は思いました。以前はそれを
知りませんでした。神様、この恵みに感謝します。
15時45分、ヴォクト神父様のお宅を訪ねました。その後、教会へ行き、ヴォクト神父様のためにロザリオを2回唱えました。
16時30分：マルガ・Fさんから、今日が「主の受胎告知」という祝日であることを知りました。
マルガと私は二人とも鳥肌が立ちました。なぜなら、救い主がまさに今日、私にヴォクト神父のもとへ行くようにおっしゃり、またヴォクト神父には私が書いたものを聞いていただく必要があると告げられたからです。
私が書いたものを聞かなければならないと告げてくださったのです。
私は家に戻り、ヴォクト神父のためにさらに30分ほど祈りました。
18時00分、私は牧師館のドアベルを一度鳴らしましたが、誰も出てきてくれませんでした。それから教会へ行き、信者たちと一緒に祈りました。ロザリオの祈りが終わった後、ヴォクト牧師のところへ行きました。
そこでようやく迎え入れてもらえました。私は、救い主が今日、
92年3月25日に私に語ってくださった言葉を、ヴォクト神父様にお読みいただきました。
ヴォクト神父はこれについて何も言及されませんでした。私は祝福を願い、床にひざまずいてからその場を後にしました。
19時、私はすでにミンゴルスハイムの教会にいました。そこでミサに参加し、聖体を聖母マリアに捧げました。
とても素晴らしいミサで、ラテン語での祈りが多く捧げられました。私は大変驚き、この司祭はかつてルフェーブル司教を批判する講演を行っていたため、ルフェーブル司教がきっとこの司祭のために祈っているに違いないと思いました。最後に、私は司祭のもとへ行き、この素晴らしいミサを執り行ってくださったことに感謝を伝えました。私たちの周辺では、これほどラテン語に近いミサを聞いたことがありません。
神に感謝します。

1992年3月26日 — 木曜日

夜、午前4時から5時の間に、すべての魂のためにロザリオを2回唱え、他にも多くの祈りを捧げました。
9時30分、再び祈りを始めましたが、その前に私は泣いてしまいました。 あまりにも激しく泣いてしまい、嗚咽せざるを得ませんでした。ヴォクト神父のことを思い出し、彼が私に対してあんなに冷たく振る舞ったことを思い出しました。彼はいつものように、私に握手さえしてくれませんでした。彼はその仮面の下にあるものを隠すことはできません。私は彼に、彼が私を歓迎してくれないことを知っているから、彼のもとへ行くのが嫌だとさえ話しました。
それでも、救い主がそう望んでおられるから、私はここに来ているのだと彼に伝えました。
泣き声がさらに大きくなったとき、救い主からこう聞こえてきた。「私から愛されることの方が、すべての人々から愛されることよりも価値があるのではないのか？」

その言葉を聞いた瞬間、私は泣き止んだ。

私はイエス様にこう言いました。「はい、その通りです。あなたの愛は、すべての人々の愛を合わせたものよりも強いからです。」
私：「主よ、あなたは私の涙を取り除いてくださいました。あなたの痛みは、私の痛みよりもはるかに大きかったのです。」救い主：「そう、その通りだ、わが娘よ。」
私：「あの司祭の前で、何か間違ったことをしてしまったのかと思いました。彼のもとを離れたとき、心が空っぽだったからです。」
救い主：「司祭との件については、あなたは正しく行動した。他のことはまだこれからだ。私に任せてくれ。私を信頼しなさい。」
私：「それから、昨日マルガが言ってくれたことですが、私の悪口が言われているそうです。」救い主：「人の噂を真に受けてはいけません。」
私：「今夜、午前4時から5時まで祈っていた時、眠りにつくことができませんでした。私を苦しめたあの不安は何だったのでしょうか。」
救い主：「わが娘よ、あなたは悪魔から多くの魂を奪い取った。夜に祈ることがどれほど重要かを知ってもらうために、私はあの小さな誘惑を許したのだ。」この救い主との交わりは、実に美しいものでした。私の内には深い平安と静けさ、そして温もりが満ちていました。まるで私がイエス様だけに属しているかのように思えるかもしれませんが、そうではありません。
イエスはすべての魂を愛しておられます。そうでなければ、愛の神とは呼べません。私の傷ついた魂は、ほんの数分間、癒やされました。これはまさに超自然的なことです。地上の医師にはできないことであり、天の医師、すなわち私たちの救い主だけが成し遂げられることです。
たとえ皆が私を見捨て、去っていったとしても、救い主の愛は、すべての司祭や人間たちの愛を合わせたものよりも強いのだと、私はこれからもそう信じ続けます。主よ、神よ、あなたのしもべを見捨てずにいてくださることに感謝します。
私は救い主に、これを正しく書き記したかどうか尋ねました。
救い主：「もしそれがあなたに示されていなかったら、あなたはそうは書かなかっただろう。」
私：「主よ、どうか私の衝動的な気性を取り除いてください。そうすれば、私はもっと穏やかになり、これからもあなたのしもべであり続けられますように。」
救い主：「今、そのあなたの姿が、私の目に心地よい、わが娘よ。」
私：「主よ、あなたにはすべてを捧げることができます。それは素晴らしいことです。私は完全にあなたのものですから、あなたが望むように私を形作ってください。あなたとずっと語り合っていたいのですが、今は行かなければなりません。」
救い主：「平安のうちに去りなさい。」
時計を見ると、すでに10時40分でした。10時30分から体操の予約が入っていました。私は急いでそこへ走りました。道中、まだ受け入れてもらえるよう祈りました。
インストラクターは私が遅刻したと指摘しましたが、その日ちょうど空いていた11時30分の新しい予約を入れてくれました。祈りが聞き届けられて嬉しかったです。偶然などないのですから。救い主よ、この脊椎体操の予約は数週間先まで埋まっているのに、まだ予約が取れたことを感謝します。
夕方、ロートにある教会でロザリオの祈りに参加しました。その後の聖ミサは、貧しい魂たちのために捧げました。
ヘドヴィヒとヒルデが少しだけ私のところに来てくれました。その後、マリオンが来て、私たちは日記を書きました。

1992年3月27日 - 金曜日。

約1秒間の祈りの後、霊的に交感しました。その後、昨日救い主がおっしゃったことがまだはっきり理解できていなかったため、救い主に尋ねました。「今、あなたにはこれが気に入っている……」
「私はこの衝動的な気性を改めるべきでしょうか？」と尋ねると、救い主は「そのままのあなたでいてください、わが娘よ」とおっしゃいました。
また、H.ヴォクト神父について尋ねました。彼は今回も、
「今、辛いのか？」
私：「いいえ。」
救い主：「すべては時が来れば起こる。」
私：「主よ、私に注意を払い、用心しなければならないようなことが起こるかどうか、どうか教えてください。」
救い主：「そう、君には多くの誘惑が降りかかるだろう。祈りによって、それらを退けることができる。」私：「そして、あなたはそれを私に降りかからせるのですか？」
救い主：「誰もそこから免れることはできない。」

私：「誘惑に対する最も強力な武器は何ですか？」救い主：「娘よ、君も知っているだろう。
愛だ。」
私：「それなら、どうか、この愛から決して私を引き離さないでください。」
救い主：「愛のない人間はもはや人間ではなく、サタンの奴隷である。彼らからは地獄のような実しか収穫できない。彼らが排除されるよう祈りなさい。」
主よ、神よ、ありがとうございます。今日の教訓で十分です。救い主：「平安のうちに去りな
さい、わが娘よ。」

午後、美容院へ。そこでたくさん祈りました。しかし結局、悪魔に負けてしまいました。ある美容師が信者について悪口を言い、私はそれに同調してしまったのです。人を裁く権利など私にはないのだから、それが罪だとすぐに気づきました。後でその人を擁護しようとしましたが、起こってしまったことはもう変えられないと思います。
夕方、私はその罪を深く悔い改め、ロザリオの祈りを捧げました。聖体拝領を受けましたが、いつもとは違いました。

1992年3月28日 — 土曜日

午前1時45分から2時50分まで、すべての魂のために心を込めて祈りました。
その時、救い主から「ありがとう、わが娘よ」という声を聞きましたが、それ以外は何もありませんでした。
午前中、再び約1時間祈り、神と心を一つにしましたが、声は聞こえませんでした。
15時45分～17時15分：ロザリオを2回唱えましたが、気が散っていました。その後、再び告解に行きました。噂話という罪を清めたいと思ったのです。
告解の際、ヴォクト神父様は赦しの言葉以外、一言も発しませんでした。私は、司祭を通して私の罪を取り除いてくださった救い主に感謝しました。それから、ヴォクト神父様のために、もう一連のロザリオを祈りました。
19時00分には、私はすでにバート・シェーンボルンの教会にいました。ここでも、信者たちが習慣から、あるいは重大な罪を抱えたまま、不敬な態度で聖体拝領を受けないよう、心から祈りました。救い主はすでに十分に侮辱されてきたからです。
二人の信徒と司祭が聖体拝領を配っていました。私は教会の後方に座っていました。信徒が聖体拝領を配るために後方へやって来ると、教会の前方にある司祭のところよりも、その信徒のところへ聖体を受けに行く人のほうが多いようでした。司祭はすでに配り終えており、その信徒が私の行く手を塞いでいました。 それでも私はその信徒の横をすり抜けて祭壇まで進んだ。司祭はすでに祭壇の上に戻っていたが、私は階段にひざまずき、司祭が来て聖体拝領を授けてくれるのを待った。皆が私を見つめているのを感じた。私にとって重要なのは、人々の目ではなく、神が私に何を求めておられるかということだった。ミサが終わると、教会はあっという間に空っぽになった。 誰も、あの尊い聖体拝領の後、もう少しだけ祈ろうとはしなかった。まるで、彼らが受け取ったのが普通のパンであって、パンの姿をとった三位一体の神ではないかのように思えた。

1992年3月29日 — 日曜日

45分間祈った後、私は救い主と一つになった。司祭は依然として私に何も話しかけてこなかったので、私は再び彼について尋ねた。
救い主：「まだこのまま続けなければならない。」
それから私は、バート・シェーンボルンで、たとえ勇気を振り絞る必要があったとしても、信徒ではなく司祭のもとへ行ったことが正しかったのかと尋ねた。
救い主：「わが娘よ、あなたは私の御心を果たした。」
私：「その前までは、心の中にとても落ち着かない気持ちがありました。心が引き裂かれるようでした。」救い主：「不浄な霊たちは、あなたがそのようなことをしないようにと戦っているのだ。」
私：「あなたが私の内に入ってきて初めて、深い平安を感じ、心の内の不安や攻撃が、まるで戦争が終わったかのように、突然消え去ったのを感じました。」
救い主：「わが娘よ、そうあってほしい。そのままでいなさい。」
私：「最も慈愛に満ちた父よ、人々が私を何か悪いことをしているかのように見ても構いません。しかし、内なる葛藤の方がはるかに辛いのです。もしあなたが私の内にお降りにならなかったら、私は耐えられなかったでしょう。 しかし、あなたが来てくださることを知っているからこそ——聖体拝領の時だけでなく、霊的聖体拝領の時にも——私はあなたに大きな信頼を寄せています。これからも、あなたが私に望まれる通りに続けていきます。

私：「誰が信徒を導いて、聖体を配るために後ろへ行くようにさせているのですか。それは司祭の意志なのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、それはサタンの仕業だ。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。その信徒から聖体拝領を受けた者たちは皆、不適格な状態で聖体拝領をしたのである。」
私：「主よ、教会の会報で、ヴェネブッシュ嬢が病人の元へ聖体を持って行っているという記事を読みました。それはキリストの真の教えに合致しているのでしょうか？」救い主：「それは異端である。」
私はもう一度、自分の耳を疑って尋ねた。」救い主：「それは異端に数えられる。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。人々は泥沼に深くはまり込んでおり、何が正しいのかさえ分からなくなっているのだ。」
私：「主よ、神よ、この件について祈ります。」私はしばらくの間、さらに熱心に祈りました。
すると、救い主はこう言われました。「平安のうちに去りなさい。」
私はロートでミサに参列した。聖体拝領の際、その信徒が私のすぐ隣に立っていた。彼は私に聖体を与えることをためらっていた。私は再び攻撃を感じた。
それは恐ろしい体験でした。司祭が来て、私に聖体を与えてくださいました。
聖体と一つになったとき、初めて深い平安を感じました。私はその聖体を、耳鼻咽喉科クリニックのスタッフのために捧げました。
13時、ロザリオの祈りに参加し、その後教会での黙想会に出席した。14時30分、病院で夫を見舞った。

1992年3月30日 - 月曜日

職場には私一人でした。同僚は依然として病気で休んでいました。患者さんが来るまで、
たくさん祈ることができました。
その後、副院長が来て、私が一人で勤務しており、2人のスタッフが欠員になっていると伝えると、私のことを気遣ってくれました。
彼は、1時間半ほど手伝いを送ると言ってくれました。救急外来から社会奉仕活動中の青年が来てくれたおかげで、一人で仕事をしていたにもかかわらず、患者さんたちの対応もこなすことができました。
10時30分頃、私は医師室へ向かった。後ろで患者が私を待っているかどうか、守護天使に尋ねてみた。
「行ってみなさい」という声が聞こえましたが、すぐに少し疑念が湧きました。レントゲン室のある奥へ行ってみると、患者さんはいませんでした。
13時頃、私は礼拝堂にいました。少し奇妙に感じたので、救い主に「あれは守護天使だったのでしょうか」と尋ねました。
救い主：「わが娘よ、不浄な霊が干渉している。その声をよく見極めなさい。あなたは早とちりした。柔和な声を見分ける必要があるのだ。」
私：「何があなたからのものか分かるように、何か言ってください。」救い主：
「私はあなたを愛している、わが娘よ。」
私：「あなたの声がほとんど聞こえません。」救い主：「しかし、あなたは確かに聞いたのだ。」
私：「それは心の奥底から湧き上がってくるものです。」
救い主：「私と話すときは、静けさと平安を保ちなさい。」私：「守護天使も私に話しかけてくれるとおっしゃいましたね。」救い主：「そうだが、あなたが望む時ではない。」
夕方、私はロートの教会に行きました。ロザリオと聖なるミサを、貧しい魂たちのために捧げました。
20時、祈りの集い。
ドチャート神父も来られ、私たちは救い主を礼拝しました。人々は告解もしました。
私は、救い主から授かった恵みについて語ることで、信者たちを励まそうと努めました。2時間祈りを捧げた後、以前のように司祭と少し話し合いました。
神父の言ったことすべてに納得できたわけではありませんでした。今日もまた、ドチャート神父に告解をしました。

1992年3月31日 - 火曜日

11時30分、医師室にて：
昨晩、ドシャール神父が教皇について語った内容が気に入らなかったため、今日、救い主に尋ねてみた。
救い主：「聖父は誤りがない。聖父こそが、私の御霊に導かれる真のキリストの教会である。そして、すべての者はこの教会に従わなければならない。」
私は、祈りの集会で自分が話したことは正しかったのかと尋ねました。救い主：「あなたが話したことは、私があなたに示したものです。」
救い主は私の霊的指導者であるから、ブレッテンに行くべきかどうか尋ねました。救い主：「わが娘よ、そこへ行く必要はない。」

1992年4月1日 — 水曜日 — 尊い御血の崇敬 — ロダルベン。

患者たちが来るまで、私は約1時間半ほど祈りを捧げた。夕方、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂へ行った。
そこでロザリオを唱え、ミサに参列しました。

1992年4月2日 - 木曜日

ロートの教会に行き、ロザリオを唱え、聖ミサに参加しました。

1992年4月3日 - 聖心金曜日

11時 医師室：
祈りの後、救い主との交わりの最中に：
救い主：「司祭のところへ行き、あなたが書いたことを伝えなさい。司祭として、彼はあなたの話を聞く義務がある。」
私：「主よ、もし彼が私を追い出したら？」 救い主：「それなら、彼は私に対しても同じことをするのだ。」
私：「いつ行けばいいのですか？」 救い主：「今日行け。彼に尋ねなさい。」
私：「はい、主よ、神よ。私は行って、あなたの望まれることを行います。愛に満ちた父よ、私が司祭のところへ行くべき主な理由は何でしょうか？」
救い主：「彼が信者たちと共に熱心に祈り、彼らが誤った教えから離れるようにするためだ。」私：「そして、それを彼に伝えるべきですか？」
救い主：「そう彼に伝えなさい。」
私：「もし彼が『誤った教えとは何ですか？』と尋ねたら？」救い主：「あなたは知っているでしょう、わが娘よ。」
私：「そういたします、主よ、神よ。」
夕方、私はヴォクト神父のためにロザリオの祈りと聖体拝領を捧げました。
ヴォクト神父様のために捧げました。救い主との交わりの後、いつヴォクト神父様のところへ行くべきか確かめたかったので、救い主に尋ねました。
救い主：「今日、すぐに行きなさい。」
私は泣き出してしまいました。ヴォクト神父のもとへ行くには、多大な勇気が必要でした。あの屈辱。泣きじゃくって、教会から出ることもできませんでした。
私は救い主に、力を与えてくださるよう懇願しました。
牧師館のドアの前に立ったとき、泣きじゃくってインターホンのボタンを押すことができませんでした。すると、侍者がやってきて、司祭を呼びました。
神父さんが来て、私が泣いているのを見て、「さあ、中へお入りください」と言いました。
私は彼に言いました。「神父であるあなたは、私の話に耳を傾け、救い主が何を望んでおられるかを聞く義務があります。」
神父はあれこれと話をしましたが、肝心なことは何も言いませんでした。
彼は、私が別の町の別の神父に相談すべきだと言いました。というのも、もし彼がこの件を報告すれば、悪循環に陥ってしまうからだそう

です。

その言葉は私の心を深く傷つけ、私は彼にこう言った。

「救い主は悪循環には陥りません。あなたの言っていることは良くない。そんなことは口にしてはいけません。」

それから、教会の会報に掲載された愚かな冗談の件で、彼のために祈っているとも付け加えた。さらに、夕方のミサで聖体拝領の後、すぐに教会を出なければならないこと――照明がすぐに消されてしまうからだ――についても言わなければならなかった。
（ある時は、教会に閉じ込められてしまったことさえありました）。
すると彼は、教会の管理人の奥さんはすぐに家に帰らなければならない、と言いました。
私は、教会の鍵を他の人に預けることもできるはずだと彼に言いました。しかし、それが無駄だと悟り、重い心で家路につきました。
家に着くと、今までになく激しく泣きました。
それからハンブシュ夫人のところへ行き、日記を書こうとしたが、うまくいかなかった。家に帰ると、1時間ほど祈った。

1993年4月4日 - 土曜日

早朝、ヴァークハウゼルの教会に行きました。聖体拝領の後、聖櫃の前の床にひざまずいて、心を込めて祈りました。
もしかすると、ヴォクト神父様に何か間違ったことを言ってしまったのではないかと思いました。救い主：「あなたは彼に正しく話したのだ。」
私：「それなら、日記は書き続けるべきですか、それともやめるべきですか？」 救い主：「書き続けなさい、わが娘よ。」
その後、ハンブシュ家を訪ねました。そこで朝食をとり、その後、マリオンと一緒に日記を書きました。
16時15分から18時15分まで、ロートの教会でひざまずいて、ヴォクト神父様のため、救い主の御心のため、そしてすべての魂のために祈りました。

1992年4月5日（日）

聖ミサの前に、約1時間半ほど祈りました。私は救い主と心を一つにし、心から祈りました。金曜日にヴォクト神父が「もしそうすれば、悪循環に陥ってしまうだろう」と述べたことに、私は失望しました。その言葉が頭から離れず、心が安らぎませんでした。
実のところ、この言葉は、私自身が「悪循環」の中にいることを意味しているのです。
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。私が彼らに求めることを変えなければ、すべての者は悪循環の中にいるのだ。」
私：「あなたは彼らに何を求めているのですか？」
救い主：「三位一体の神に対する深い畏敬の念だ。手による聖体拝領は、一刻も早く廃止されなければならない。聖別された手以外、誰も聖体を授けてはならない。これは過去の教皇たちによってすでに確認されており、今日においても変わらず守られなければならない。」
私：「ヴォクト神父様は、この町出身ではない別の司祭のところへ行くようにとおっしゃいました。その方が私にとってより良いとのことでした。」
それから30秒ほど、深い静寂が訪れた。救い主：「娘よ、
まだ来るのだ。」私：「何が？　何がまだ来るのですか？
」救い主：「ふさわしい司祭だ。」
私：「その新しい司祭は、私の日記を読むのでしょうか？」 救い主：「彼は、私が命じることを行うだろう。」
私：「それなら、もう新しい神父さんのために祈ってもいいですか？」 救い主：
「ええ、そうしなさい。」
心の中ではそれが辛かった。なぜなら、ヴォクト神父とはすでに7年間のお付き合いがあり、彼のために祈り始めてから8年が経っていたからだ。彼はまだ司祭服を着ていなかったし、以前の神父であるケステル神父はすでに引退しており、しかも病気だったため、私は新しい神父のために祈っていたのだ。
私：「主よ、神よ、ありがとうございます。あなたが私に命じることは何でもします。」主よ、御心が行われますように。
今日、救い主は少し厳しかった。主は言われた。「今日
はこれで十分だ。」
私は、目の前のテーブルに置かれていた十字架を手に取り、それを胸に押し当てて、救い主を慰めました。それから、いつものように十字架に口づけをしました。私は、無関心から救い主を手に受けてしまう人々のために、救い主に許しを請いました。

私は救い主にこう言いました。「あなたの御顔を私の心に刻みつけてください。そうすれば、人々はあなたが私に与えてくださったものを見ることができるでしょう。私はあなたのしもべであり、あなたが望まれる限り、そのままでいます。私の主、私の神、私の魂の導き手よ。」
私：「愛するイエス様、私を御心のままに扱ってください。私は完全にあなたに属しています。主であり神であるあなたの愛の中に、すべてがあります。あなたの愛がなければ、私は何者でもなかったし、今も何者でもありません。そして、私が持っているものはすべてあなたからいただいたものであり、それを、慈悲の源であるあなたの傷ついた御心に捧げます。」
その時、私の魂は、とても特別な安らぎと温もりに包まれていました。救い主の愛が、いつも以上に強く感じられました。そして、主はなおも、より生き生きとして、畏れ多く、正義に満ち、慈悲深い父なのです。
10時：私は赤の聖堂でミサに参列しました。
18時からは悔い改めの祈りの会がありましたが、私は心の中で落ち着きませんでした。告解に行く人がこれほど少ないのも、不思議ではありません。
20時、マリオンが来て、私たちは約1時間半ほど日記を書きました。その後、私はロザリオを1回唱えました。
今日の午後、13時30分頃、試練に直面したことも書き留めておかなければならない。
私は祈りの部屋のソファに横になっていた。最初はマルガレーテの本を読んでいた。すると、突然、強い眠気が襲ってきた。日記にまだ何か書きたかったので立ち上がろうとしたが、できなかった。まるで誰かに麻酔をかけられたかのようだった。そこで私はイエスに懇願した。「助けてください。立ち上がりたいのですが、力が入らないのです。」
しばらくそうしていた後、私はこう言いました。「私の肉体は弱いが、私の霊は意欲に満ちている。」すると突然、「立ち上がって、書きなさい」という声が聞こえました。
すると、突然、疲れがすっかり消え去った。私はとても元気になり、日記を書き続けた。

1992年4月6日 — 月曜日

祈りを終えた後、新しい司祭のことについて、自分の聞き間違いではなかったか、もう一度確かめてみたかった。
救い主：「新しい司祭が来る。」私：「それは神の御心ですか、それともあなたの御心ですか？」救い主：「それは私の御心だ。」
私：「昨日の懺悔の祈りの集いでは、なんだか落ち着かなかったんです。何かが欠けていたような気がしました。」 救い主：「その懺悔の祈りの集いは、悪魔には好ましかったが、私には好ましくなかった。」
私：「それなら、多くの不適格な人々が聖体拝領を受けることになるでしょう。」救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。」
救い主：「この件のために祈りなさい。書き留めておきなさい、わが娘よ。耳元での告解は、今も有効だ。懺悔の集いには、まだ多くの高慢があり、信者たちには悔い改めの心が欠けている。」
まるで全てが本当に私自身の考えであるかのように、いくつかの考えが頭に浮かびました。救い主：「わが娘よ、それは私があなたに示したのだ。あなた自身では何もできない。」救い主：「平安のうちに去りなさい。」
12時、職場の礼拝堂にて：まず、私は救い主に、ヴォクト神父ともう一度話せるよう、もう一つの機会を与えてくださるよう願った。しばらく祈っていると、こう聞こえてきた。
「謙虚であれ。」
その後、再び静寂が訪れたが、やがてこう聞こえてきた。
「牧師がもう一度、君に話しかけてくれるだろう。」私は、自分から話しかけてよいのかと尋ねた。
救い主：「彼があなたに話しかけてくるだろう。」
そこで私は救い主に尋ねました。「救い主よ、『謙虚であれ』という言葉は、どういう意味ですか。」救い主：「小さくなれ。」
夕方、教会でヴォクト神父のためにロザリオを祈り、その後、聖ミサに参列した。
20:00 祈りの会：
私たちは約2時間半、祈りを捧げました。ここでも私はヴォクト神父様のために祈りました。私は神父様を慕っており、神父様を失いたく

ありませんし、神父様に去ってほしくもないからです。

1992年4月7日 — 火曜日

私は救い主に、祈りの集会は長く続いたのかと尋ねました。
救い主：「いいえ、娘よ、長くはなかった。君たちはもっと祈らなければならない。」
私は救い主に、祈りの集会で私が話したことは、お気に召したかどうか尋ねました。
救い主：「あなたが語ることはすべて真実だ。」
私たちが祈りの集会で唱えた、世界の救いの綱である「贖罪のロザリオ」は、非常に過酷なものでした。多くの人が疲れ果て、消耗していました。
救い主：「それは贖罪のロザリオなのだ。」
私：「キリストの真の教えが問われる時、私はどう振る舞えばよいのでしょうか。その際、自分を守らなければならないのでしょうか。」
救い主：「君が彼らに伝えるだけで十分だ。あとは私がやる。」

午後1時、病院の礼拝堂にて：
祈りの後、私は救い主と心を一つにしました：
救い主：「私を失望させないで、私に忠実であり続けなさい。」
私：「愛する救い主よ、一体何であなたを失望させるというのですか？」救い主
：「あなたが書いたことだよ。」
私：「もし司祭が、自分の望む通りにしなければならないと言ったら？」救い主：「それなら、彼の責任において
、彼の望む通りにしなさい。」
レントゲン検査の際、私は多くの患者を告解にも送り出しています。今日も、ある若い女性、学生を告解に送りました。私は彼女に、めまいがしないかと尋ねました。
彼女は「はい」と答えました。
さらに、冷や汗が出たり、吐き気はしないかと尋ねました。彼女はまた「はい」と答えました。
私：「長い間、告解をしていませんか？」　彼女：「はい。」
すると、彼女は泣き出した。私は彼女を抱きしめ、レントゲン室に掛けられていたイエスの十字架と聖母マリアの絵を静かに見つめながら、心の中でこう祈った。
「愛する救い主よ、愛する聖母マリアよ、この魂をあなた方に捧げます。」
私はその若い女性に、祈るための祈りの紙も手渡した。彼女は喜び、幸せそうな表情で立ち去っていった。 このような症状と診断を受けた患者は、私がこれまでレントゲン撮影を行ってきただけでも数千人にのぼります。しかし、レントゲン写真には何も写っていません。これは、その苦しみは器質的なものではないという証拠です。（レントゲン写真は証拠としてすべて保管され、10年後に破棄されます。）
患者さんたちは診察の前に告解に行くほうがよいでしょう。そうすれば、X線は体に有害であるため、多くのレントゲン撮影を省くことができます。
これらの症状は器質的なものではなく、つまり精神的なものであり、告解の秘跡による祝福は、魂の健康状態を大いに改善するでしょう。
夕方、ロートの教会にて：
私は、あらかじめ心に決めていた通り、ヴォクト神父のためにロザリオと聖ミサを捧げました。
司祭が聖体配給係に聖体の入った皿を手渡したとき、私はその聖体配給係が私のところに来て、聖体を授けてくれるだろうと直感しました。
そして、その通りになった。しかし、私は聖体拝領を受けず、救い主に頭を下げ、秘跡による聖体拝領をせずに自分の席に戻った。
救い主は霊的に私のところへ来られました。しかし、救い主が来られる前に、私は不浄な霊と闘わなければなりませんでした。それでもその後、私は大きな恵みを受けました。なぜなら、私は聖体拝領を、聖別されていない信徒の手を通じて受けようとはせず、救い主を侮辱したくなかったからです。

1992年4月8日 - 水曜日

10時、医師室にて：
私は、聖体拝領を拒んだことについて尋ねた。
救い主：「わが娘よ、書き留めておきなさい。あなたがしたことは正しかったのだ。」
私は言いました。「聖体拝領を拒んだことで、不浄な霊による大きな動揺がありました。

でも、あなたが霊的に私のところに来てくださったとき、完全な平安が訪れました。あなたは彼ら（不浄な霊）には見えないはずなのに、どうしてそんなことが起こり得るのでしょうか?
不浄な霊たちは、救い主が聖体として私のところに来られないことは見ているものの、あなたが霊的に私の内に入られることまでは認識できないのだと思っていました。」
救い主：「私は彼らからは引き続き隠されたままであるが、私がいる場所からは、彼らは退かなければならない。」私：
「私が信徒から聖体拝領を受けるべきだったというのは、ヴォクト神父様の御心だったのでしょうか?
救い主：「はい、それが彼の意志でした。」
私：「私が信徒から聖体拝領を受けないことを知っているのに、なぜ彼はそのようなことをするのですか? 」
救い主：「彼には、あなたのような信仰がないからだ。」
私：「でも、私は彼のために祈っています。（主よ、彼に生きた信仰、山をも動かすことのできるからし種の信仰をお与えください）
救い主：「その信仰も、受け入れる必要があるのだ。」
私：「聖体奉仕者たちが私のところに来たら、これからもこのように彼らに聖体を受けさせていいのでしょうか? 」救い主：「
そう、そうしなさい。」
私：「はい、主よ、神よ、そういたします。そのための恵みと力と愛をください。そして、私の恐れと人への恐れを取り除いてください。ありがとうございます、最も愛に満ちた父よ。」

私はハイデルベルク近郊のボックスベルクにあるツェナッケルで、聖ミサと礼拝に参加し、さらに講演も聴講しました。
その後、ブルッフザールの病院で病人の見舞いに行きました。21時、マリオンと一緒に日記を書きました。
22時、フランクフルトのH・ツィーグラー氏から電話があり、メジュゴリエの「御出現の山」が爆撃されたと伝えられました。
22時45分、私たちはヘルムート・コール連邦首相宛てに電報を送りました。内容は電話で伝えた以下の通りです：

連邦首相府宛　5300 ボン

連邦首相閣下、ユーゴスラビア（ボスニア・ヘルツェゴビナ）にあるマリアの巡礼地メジュゴリエに対する軍事攻撃に対し、国際的に抗議してくださるよう、心よりお願い申し上げます。

ジュリアナ・エバート祈りの
会
6837 ザンクト・レオン＝ロット - （電報番号 H 261）

1992年4月9日 — 木曜日

午前10時30分、医師室にて：
私は祈りを捧げ、救い主と心を一つにしました。
救い主：「これまで書いてきたことをそのまま続けておきなさい。」私は再び、
しるしについて尋ねました。
救い主：「しるしは来る。」
私：「『私を失望させないで』という言葉の意味が分かりませんでした。」救い主：「あなたが私に
約束したことを守り続けるということだ。」
私：「マイヤー神父は、私が破門されることを話した後、ツェナッケルで、『教皇から離れているなら、天国でも離れていることになる』とおっしゃいました。」
救い主：「あなたは私と共にいる、わが娘よ。そして、あなたは私のもとにとどまるのだ
。」私はユーゴスラビアでの戦争について尋ねた。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。戦争は続く。祈れ、わが娘よ。」
16時45分、私はロートの教会にいました。至聖体の前での礼拝で、私が先導して祈りを捧げました。その後、15分間の黙想の時間がありました。礼拝。
18時00分、ロザリオの祈りが捧げられました。

18時30分には聖ミサが行われました。聖体拝領の後、私はメジュゴリエのことを思って泣きました。すると、ヴォクト神父が変容の後に語られた言葉が再び思い浮かびました。それは、およそ次のようなものでした。「彼女たちを誤った安心感から守ってください」。私は、もしかすると自分が誤った安心感を抱いているのかもしれないと思いました。

そこで私は救い主にこう尋ねました。「もし私が誤った安心感を抱いているのなら、そう教えてください。そうすれば、すぐに日記を書くのをやめます。」

救い主。「お前には誤った安心感などない。私はお前を愛している、わが娘よ。」

その声は、いつもよりずっとはっきりと明瞭でした。私はすぐに泣き止みました。それは、神だけが与えてくださる感覚でした。私は救い主に微笑みかけ、教会を出て家路につきました。

1992年4月10日 — 金曜日

午前9時、レントゲン室にて：

私は約1時間祈り、救い主と心を一つにした。

救い主：「娘よ、司祭のところへ行き、彼が考え直して、あなたと話したいと思っているかどうか尋ねなさい。」

私：「あなたは、彼が私に話しかけてくるとおっしゃいました。それは矛盾しています。」救い主：「時間を短縮しなければならない。大きな危険があなたたちの前に迫っている。」

私：「ヴォクト神父のもとへはいつ行けばいいのですか？」救い主：「行け、わが娘よ。今日中に行け。」約30分後：

私：「電話したほうがいいですか、それとも直接会いに行ったほうがいいですか？」

救い主：「電話をしなさい。そして、彼のところに行ったら、何を言うべきかは私が教えてあげる。」

20分後：

私は、救い主が「時間」について何を意味しているのか尋ねました。「時間は永遠なのですから」と私は言いました。

救い主：「書き留めなさい、娘よ。時間は私だけのものだ。」

私：「よく分かりません。あなたがそうおっしゃるなら、そうだと書き留めます。」他に何か書き留めるべきことがあるかと尋ねました。

救い主：「彼のところへ行きなさい、（司祭の）ところへ行きなさい。」

私：「（）」はい、主よ、神よ、そういたします。主よ、御心が行われますように。」

12時15分 病院内の礼拝堂：

祈りの後：

私は再び尋ねた。「その司祭は私と話してくれるのでしょうか？」救い主：「娘よ、何を望むのか？」

私：「あなたが望まれる通りです。」救い主：「それなら、彼と話しなさい。」

15時40分頃：

私はヴォクト神父に電話をかけ、今日救い主が言われたことを伝えました。

神父はこう言いました。「もう、別の神父のところに行くようにと伝えたはずだ。その本は置いておきなさい。さもないと、我々は厄介なことになる。」

フォクト神父は電話口で不愛想でした。

私は祈りました。「主よ、私の神よ、私の心には大きな傷があります。とても痛いです。できればもう何もしたくありません。しかし、救い主よ、あなたのために、あなたが私に望まれることを続けていきます。」

その神父のために祈れば祈るほど、彼は私に対してますます厳しい態度で接してくる。

今日はロートで聖体拝領のミサはなかった。フリドリンと私は、ロートの教会でロザリオの祈りに加わった後、バート・シェーンボルンへ向かった。

バート・シェーンボルン＝ミンゴルスハイムの教会では、ザイール出身の神父様がミサを執り行われました。その説教はとても素晴らしく、聖霊に導かれていることが感じられました。

残念ながら、このような説教を聞く機会はめったにありません。この説教をくださった神様に感謝し

ます。聖体拝領は、ヴォクト神父様のために捧げました。

1992年4月11日 - 土曜日

午前7時15分：ヴァーグハウゼルの教会で聖ミサに参加しました。聖体拝領の後、心から祈りを捧げました。聖ミサの後、ラウレタン聖母連祷を先導して唱えました。その後、私たちは『サルヴェ・レジーナ』を歌い、「聖母マリアよ、私の母よ！」という祈りを捧げました。

それから、信者たちの前で声に出してこう言いました。「メジュゴリエのために、もう一回の『主の祈り』を捧げましょう。何百万人もの人々が訪れてきたその御出現の地に、爆弾が投下されたからです。」その後、私は聖櫃の前に進み出て、床にひざまずいて祈りました。

私は救い主に尋ねました。「もしこの本が困難をもたらすなら、やめるべきでしょうか？」
救い主：「それは改善をもたらすが、困難をもたらすことはない。」
私はその意味を正確に理解できていなかったため、救い主に再度尋ねました。救い主はもう一度それを繰り返してくださり、私はそれを書き留めました。

金曜日にバート・シェーンボルンの教会で、ヴォクト牧師が「その本は私たちに困難をもたらすだろう」と語ったことが、すでに私の心を大いに悩ませていました。

昨日、救い主もこうおっしゃいました。「それは教会にとって改善をもたらすだろう、わが娘よ。」
昨日、私が「あなたは私のそばにいてくださるのですか」と尋ねた後、救い主はこうも言われました。「私はいつもあなたのそばにいる。」

教会の後、私はマリオンのもとへ行き、私たちは日記を書きました。

16時20分から18時20分まで、ロートの教会でひざまずき、ヴォクト神父様とすべての魂、そして救い主の御心のために、赤いロザリオを数回唱えました。

自宅では、20時30分から21時30分まで、ヴォクト神父様のために、数回にわたり悪魔祓いの祈り、聖傷のロザリオ、聖霊のロザリオ、その他の祈りを捧げました。

1992年4月12日 — 聖枝の日

約30分間祈った後、霊的に聖体拝領を行いました。救い主：「司祭がやってくる。」
私：「それなら、それは私の本当の司祭ではないですね。」救い主：「そうではない。」
私：「それなら、なぜ私を彼のところへ送ったのですか。理解できません。」救い主：「私は、一人ひとりの人間に対して、その人が何ができるかを試しているのだ。」
私：「でも、あなたは彼が何ができるか、あらかじめ知っていたはずでしょう。」救い主：「それによって、あなたも試しているのだ。」
私：「それなら、私はこの試練に失敗したということですね。」
救い主：「娘よ、君はこれまで見事にやってきてくれた。」
私は、復活祭前のしるしについて尋ねた。「約束を変えられますか？」 救い主：「いいえ、約束は変えない。」
その後、短い沈黙が流れた。そして、
救い主の声が聞こえてきた：
「書きなさい、わが娘よ。私は――」と、短い沈黙が続いた。これから何と言われるのだろうかと私が考えていると――「H. ヴォクト牧師から、誰にも相談することなく、彼自身から直接、返事が欲しいのだ。」救い主はさらにこう続けた。
「もし彼が困っていたとしたら、まず他の人たちに尋ねるだろうか、それとも私に尋ねるだろうか？」
救い主はさらにこう言われた。
「返事を待つ必要はない。これは私のためなのだ。彼に手紙を書くのも、会いに行くのも、お前の好きなようにすればよい。」
私：「主よ、私の神よ、私は彼に手紙を書くことを選びました。」救い主：「そうしなさい。」
私：「主よ、生ける神の子よ、最後に何を書けばよいでしょうか？」 救い主：「私はあなたたちを愛している、私の子供たちよ。」
私は赤い服を着てミサに出席した。そのミサをマリオンに捧げた。主が私に望まれることを、彼女が書き続けられるよう、神が彼女に恵みを与えてくださいますように。
13時から14時の間、教会でロザリオを唱え、そこで黙想にふけりました。15時過ぎ、ヴォクト神父様宛ての手紙を書きました。

夜20時15分、私はマリオンと一緒にその手紙を司祭館の郵便受けに投函しました。

その手紙には、聖枝の主日の早朝に救い主が私に語ってくださったことを記しました。

1992年4月13日 — 月曜日

朝8時頃、職場で同僚のヴェロニカと私は「悲しみのロザリオ」を唱えました。
10時、医師室で祈りを捧げました。
私は祈りを捧げ、救い主と一つになりました。
1984年、聖母マリアの御出現から数週間後、早朝に約20分間、地震の幻視を見ました。私の周りの大地全体が激しく揺さぶられました。辺りはまるで春のように、すべてが緑一色でした。その時、私は夫に「見て、私が眠っていないことを確かめて」と言いました。というのも、私は目を覚ましている状態でそれを見ていたからです。
しかし、夫は眠っていて、どうやっても目を覚ますことができませんでした。
今夜、あれが地震だったのだと思いました。（その夜、実際に地震があり、後でラジオで報じられました。）
救い主：「いいえ、娘よ、それはまだこれからだ。」
おそらく、1984年のこの幻視で私が見たような激しい地震は、救い主が言われた通り、まだ起こるでしょう。
その後、私はH.ヴォクト牧師について尋ねました。
救い主：「ヴォクト牧師は、あなた方の町には長くは留まらないだろう。」私：「では、別の司祭が来るのですか？」
救い主：「その通りだ。やってくるその人が、お前の霊的指導者となる。」私：「では、その人は、あなたが私に告げていることを信じてくれるのでしょうか？」
救い主：「最初はそうではないだろう。」
私：「ヴォクト神父様が去られることは気にかかりますが、あなたがそうおっしゃるなら、そうなるのでしょう。それなら、新しい神父様のために、また一から祈り始めなければなりません。それは簡単なことではありません。また多くの犠牲を払わなければならないでしょう。」
私：「ヴォクト神父様は、おおよそいつお去りになるのでしょうか？教えていただけますか？」救い主：「もうすぐかもしれない。」
救い主：「書き記しなさい、わが娘よ。あなたは嘲笑され、否定され、侮辱されるだろう。すべてを自ら引き受けなさい。」
私：「主よ、でも『嘲笑される』という意味がわかりません。辞書で調べてみます。」
救い主：「お前の敵は、教会の外よりも教会の中に多くいる。」私：「でも、彼らは信者ではありませんか。」
救い主：「信者の中には、多くの偽善者がいるのだ。」
私：「『偽善者』の代わりに別の言葉を教えてください。その言葉の意味がよく分かりません。」救い主：「『見せかけの信者』だ。」
私：「他に言い方はありますか？」
救い主：「それは、手での聖体拝領を擁護する、無関心な信者たちのことだ。」私：「そう書き留めていいですか？」
救い主：「ええ、その通りです。」
私：「救い主よ、もし私が『手で聖体を受ける人たちは偽善者だ』と言ったら、彼らを侮辱することになります。」
救い主：「そうやって、彼らはいつも私を侮辱しているのだ。」
昨日の夕方、20時15分頃、牧師館にその手紙を投函したとき、聖体拝領の際に信徒の前に立つときに攻撃されているのと同じように、私の心の中で鈍い刺すような痛みが何度も走った。
救い主：「そこにも不浄な霊たちがいる。彼らは守護者のように司祭館の前に立っている。」
12時25分、病院の礼拝堂にて：ホルガーもそこにいた。その後、ホルガーがレントゲン室に来て、ヴォクト神父宛ての手紙について話し合った。ホルガーは興味深いことを話してくれた。様子を見守るしかない。
夕方、ロートの教会にて。ロザリオと聖体祭を、今まさに戦死した人々の魂のために捧げた。
20時00分、祈りの集い：

非常に多くの人が集まっていた。どうしても祈りの部屋を建てなければならない。
ドチャート神父の祈りの始め方が気に入らなかった。今日は冒頭に十字を切る動作をせず、ページ番号を告げもせずにいきなり聖歌を唱え始めた。
そのため、一緒に唱えたり祈ったりできない人もいました。
終わってから、私たちは台所に集まって話をしました。私たちと一緒にいたのは
ドチャート神父を含めて7人でした。ドチャート神父が、「教会としては、私的啓示を信じる必要はない」とおっしゃったとき、私は心に大きな痛みを感じました。私はファティマやルルドについて話し、巡礼地がなければ信者たちは信仰心が薄れてしまうだろうと述べました。
ドシャール神父は、それを信じる必要はないと改めて繰り返しました。そこで私は、木は実によって知られるのだと
彼に言いました。
もし皆がメジュゴリエでの御出現を信じていたなら、戦争は勃発しなかっただろう、と私は言いました。
聖母は御出現の初めに、「ロザリオを祈りなさい。そうすれば、戦争を食い止めることができる」とおっしゃいました。

1992年4月14日 - 火曜日

自宅にて 8時30分～10時30分：
祈りの後、私は救い主と心を一つにしました。昨日、ドチャート神父が「私的な啓示を信じる必要はない」と述べたことを嘆きました。
救い主：「その司祭は間違っている。」私：「なぜ私にこ
の痛みがあったのですか？」
救い主：「私が侮辱されたとき、あなたは私の痛みを味わうことを許されているからだ。」私：「その侮辱は罪だっ
たのですか？」
救い主：「それを書き留めなさい。そう、わが娘よ。」
私：「もし私がこれらの個人的な啓示を受けていなかったら、ドチャート神父様は私のところに来てくださったでしょうか？」
救い主：「いいえ、わが娘よ。彼は来なかっただろう。」
私：「彼が（祈りの集いに）これほど長い間来てくださっている理由は何ですか？」
救い主：「サタンは、教会の改善のために私があなたに授けたものを、彼を通じて破壊しようとしているのだ。」
私：「では、私は今、どうすればいいのですか？」救い
主：「あなたは私と共に彼を打ち負かすことになる。」
私：「ブラーン神父は、悪魔は司祭には憑かないとおっしゃっていました。」救い主：「書き留めなさい、娘よ。
ほとんどすべての人が、悪魔が彼らに言うことを聞いているのだ。」
私がマリア・イッテンについて尋ねたのは、ヴァグナー神父が、祈りのグループの信者たちが私に話してくれたほど、彼女について良いことを言ってくれなかったからです。私は、彼女の手紙が本物かどうか、改めて尋ねました。
救い主：「マリア・イッテンが書いたその紙は本物であり、正しい。サタンは強い。私が語ったことに、揺るぎなく立ち続けなければならない。わが娘よ、彼女も君と同じ問題を抱えている。」私：「それはどんな問題ですか？」
救い主：「私に忠実であり続けなさい。」
私：「主よ、マリア・イッテンを訪ねてみたいのですが。」救い主：「そう
しなさい。」
私は、H. ヴォグト牧師に送った手紙について、何か問題になるかどうか尋ねました。
救い主：「少しばかり不都合なことが起こるだろう。」私：「どうすればいいの
ですか？」
救い主：「返答する必要はない。返事を期待する必要はないと、すでに言っただろう。謙虚であり続けなさい、わが娘よ。」
私は心から祈り続けました。私の心には、これほど深い平安と愛が満ちており、絶えず「主よ、神よ、私は心を尽くし、力を尽くしてあなたを愛しています」と言い続けられるほどでした。
それはもはや私ではなく、私の中にいる主そのものでした。

すると、さらにこう聞こえました。「平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」
私：「主よ、神よ、あなただけが与えてくださるこの恵みに感謝します。」

13時から15時まで、私は森にいて、ロザリオを三回唱えました。
17:00には、甥のラトコのもとを訪ねました。彼は、夜中に首を絞められ、誰かの手を感じ、ほとんど息ができなくなったと私に話してくれました。「イエス」と口にした瞬間、その感覚は消え去りました。彼はまだ洗礼を受けていません。祈りはしていますが、まだ十分ではありません。
洗礼を受けたいとは思っているものの、いつにするかはまだ決めていません。

18時、ロートの教会にて：永遠の灯はまた消えていたが、今回は聖具係の女性がすぐにやって来て火を灯し、いつもほど長く待たずに済んだ。

20時30分、マリオンが来て、私たちは日記を書いた。

1992年4月15日 — 水曜日

ある年配の女性のレントゲン撮影をした。彼女は入ってきた時、レントゲンを撮るために中に入るのをためらっていた。私は不浄な霊を感じ、彼女に祝福を与え、聖水を渡した。
彼女は独り言のようにぶつぶつと文句を言っていた。それから私が『アヴェ・マリア』を唱えると、彼女は冒涜的な言葉を口にし、理解できないほど早口で「べべべべべ」と呟いた。
それを見た同僚が、その患者さんに「それは良くないわ、そんなことしてはいけないわ」と言いました。
すると、その患者は彼女に向かって、「お前、殴ってやるわよ」と言いました。
午前10時30分、医師室にて：
私はこの患者さんのために救い主に尋ねました。
救い主：「不浄な霊が複数いる。彼らはその体の中に留まっている。彼女自身がそう望んだのだ。」私：「『
アヴェ・マリア』の祈りの最中に嘲笑していたのは、どの不浄な霊ですか？」
救い主：「皆が嘲笑している。」
私：「そのしるしが現れる時、私は準備をしておくべきでしょうか？」
救い主：「いいえ、わが娘よ、準備をする必要はない。一つのしるしが訪れるだろう。」
私：「そのしるしがいつ現れるのか、教えていただけますか？どんなしるしになるのか、私にはわからないのですから。」
救い主：「ええ、そうするつもりだ。」
私：「救い主よ、私は何かをしなければなりませんか。もし何かをしなければならないのなら、私の恐れや疑い、そしてあなたが私に告げることを信じ、あなたの望むことを行うのを妨げるあらゆるものを、私から取り除いてください。私は完全にあなたに属しているのですから。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。近いうちに教皇のもとへ行き、あなたが書いたことを彼に伝えなければならない。」
私：「まず司祭に相談すべきではありませんか？」 救い主：「そうしてもよいが
、あなたは教皇のもとへ行くのだ。」 救い主：「あなたが訪れることを、教皇に
直接手紙で伝えなさい。」
私：「もし司祭たちが、私が教皇のもとへ行くことを禁じたら、どうすればいいのですか？」 救い主：「わが娘よ、
私が言う通りにしなさい。」
私：「主よ、神よ、そういたします。主よ、御心が行われますように。」救い主：「教皇は、あなた
の来訪に備えているだろう。」
私：「主よ、私には理解できませんが、あなたがそうおっしゃるなら、そうであるに違いありませんし、そうなることを信じます。」
救い主：「書き記せ。あなたは私と共にいるだろう。」私
：「主よ、もう質問はありません。」
救い主：「平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」
私：「ありがとう、愛するイエス様、私の魂の導き手よ。迷わないよう、あなたの手をしっかりと握りしめます。主よ、私をお守りください。あなたが望むところへ私を導いてください。私はただあなたのしもべに過ぎませんから。」
今日はミサには行かなかった。ここロートではミサがなく、ロクス礼拝堂でもなかったが、ザイール出身のヨゼフ神父とお話しした。

家では、マリオンが日記を書くのを待っていました。

今夜、私は約45分間祈りました。午前3時を過ぎた頃で、眠ることができませんでした。イースター前の試練でした。

昼、職場の礼拝堂で『主の天使』の祈りを捧げた後、私は救い主に、教皇様にどのように思いを伝えるべきか尋ねました。
救い主は私に、「聖父には電報ではなく、書留で手紙を送るべきだ」とおっしゃいました。」

1992年4月16日 — 木曜日

10時10分、医師室にて：
マリオンが、これまで私たちが書いてきた内容が正しいかどうか尋ねてほしいと頼んできた。救い主：「書きなさい、わが娘よ。マリオンがこれまで書いてきたことは、良かったのだ。」
私：「救い主よ、もしかすると私に伝えたいことがあるのかもしれません。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。お前のあり方、その在り方が、私は気に入っている。」私：「私はあなたに私の『動き』を捧げました。」
救い主：「あなたは自分の『動き』を捧げた。それが私に気に入っている。」私：「『動き』とはどういう意味ですか？」
救い主：「常に私の意志を果たすこと。」
私：「昨日、私がザイールのヨゼフ神父と30分強ほど話し、その際に異端について語ったことも、あなたの御心だったのですか？」
救い主：「そう、それは私の意志だったのだ、わが娘よ。」
私：「主よ、私は彼に、多くの司祭たちと話さなければならないとも伝えました。彼はそれについて何も言いませんでした。」
救い主：「しかし、彼はその理由を理解していたのだ。」
私：「その神父は、皆を手による聖体拝領から離して、口による聖体拝領を受けさせることは不可能だと言っていました。私は、神のもとではすべてが可能だと思いました。救い主よ、これについてどうお考えですか？」
救い主：「最後の審判の後、すべての人が口による聖体拝領を受けるようになる。」私：「最後の審判とは、何のことですか？」
救い主：「それは魂の浄化のことだ。」私：「それについてはあまりよく分かりません。」
救い主：「今日については、これで十分だ。平安のうちに帰りなさい、わが娘よ。」
私は救い主に、彼が私に語ることをすべて信じ、書き留めることを約束しました。
18:00〜19:15 聖体祭と ロザリオ（赤の礼拝）。
深夜3時〜4時の間、教会で聖体礼拝を行いました。通常はこの時間帯の礼拝は夫の担当でしたが、足の怪我のため参加できませんでした。私は聖母マリアに、私と一緒に祈ってくださるようお願いしました。
そう、そして私は一人きりで祈っていたのではないと感じました。いつもより上手に歌え、はっきりと、心から祈ることができました。でも、そこで感じたことを誰かに説明したり、言葉で表したりすることはできません。それは、1984年5月18日に聖母マリアが私に現れて、私と一緒に祈ってくださった時の感覚、まさにそんな感じでした。
ロスヴィータと彼女の母親と一緒に家へ帰る途中、ロスヴィータの母親が、私が祈りの導きを美しく行い、歌も素敵だったと言ってくれました。私は歌が上手ではないので、その言葉に驚きました。
私は一晩中祈り続けていました。家では午前3時まで、それから教会でさらに3時間、朝6時頃まで過ごしました。

1992年4月17日 — 聖金曜日

3時間半ほど眠った後、起きなければなりませんでした。14時30分、私は再び教会へ向かいました。
聖体拝領の際、聖体奉仕者のアントンが教会の中央に立っていた。私は彼の横を通り過ぎたが、救い主の前ではお辞儀をした。私たちは赤い服を着て
聖体拝領台があるのを見て、私もそこで、ふさわしいようにひざまずいて救い主をお迎えしたいと願いました。ヴォクト神父様から聖体拝領を許されるよう、心の底から祈りました。

ヴェネブッシュ夫人は、私のところに来て聖体拝領を授けてくれる機会がありました。彼女もそうしようと試みました。彼女は私に向かって一歩近づきましたが、すぐに一歩後退し、私を見つめてからまた一歩近づき、そしてまた後退しました。 主はそれを許されなかったのです。ヴェネブッシュ夫人が私に聖体拝領を与えようとしていたことは、明らかでした。多くの人がその様子を見ていたのですから、これはまさに一つのしるしだと私は思いました。
その後、ヴォクト神父様から聖体拝領を授かりました。
私が救い主と深く一つになったとき、何も尋ねていないのに、救い主はこうおっしゃいました。「これこそが、この世にある最大のしるしだ。」
そこで私は、先ほど心の中で口づけをした、祭壇の前にある十字架を見つめました。メジュゴリエでは、聖金曜日
にすべての信者が十字架に口づけをします。
ここでは、司祭と侍者たちだけが十字架にかけられたイエスに頭を下げます。信者たちは席に座ったままでした。私は夫に、救い主が私に言われたことを書き留めるために、ボールペンを持っていないかと尋ねました。彼にはありませんでした。
私は救い主に、もう一度繰り返してくださるようお願いしました。
救い主：「今、書き留めてもいいが、これを永遠に心に留めておきなさい。
「これこそが、この世にある最大のしるしなのだ。」
私は、聖体祭壇の前に十字架礼拝のために立てられていたイエスの十字架を見つめました。すると、「平安のうちに
去りなさい」という声が聞こえました。
私は、聖体拝領を、貧しい魂たちのために捧げました。

1992年4月18日 - 聖土曜日

早朝、私は一時間以上祈りを捧げた。私は救い主と心を一つにし、心から祈った。しばらく待ったが、声は聞こえなかった。何か間違ったことをしてしまったのではないか、あるいはもう声は聞こえなくなってしまったのではないか、という思いが頭をよぎった。
今日は特に、偽善者たち、司祭たち、聖体奉仕者たちのために祈り、特に私の敵たちのために、何度も悪魔祓いの祈りを捧げました。
午後4時30分から6時45分まで、教会でひざまずいて、私たちの主任司祭と、これから着任する新しい司祭のために祈りました。ブランク氏がオルガンの練習をしていたため、祈るのは大変でした。救い主が教会で練習をなさる時、どのようなお気持ちなのだろうかと考えました。
もし彼が、生ける神がここにおられると信じていたなら、教会であれほど大きな音でオルガンを弾くことはなかったでしょう。
20:00 復活の祝典
「三日目に死者の中から復活された」と信条で祈ったのですが、今日はまだ二日目だったので、私にはとても腑に落ちませんでした。何かが欠けていて、メジュゴリエでの時のような幸せを感じられませんでした。あそこでは真夜中から復活の祝典が執り行われていました。あそこでは、復活の祝典の際、私の心は歓喜に満ちていました。教会では、救い主の声も聞こえませんでした。
実のところ、ここでは侍者たちによる儀式が過剰に感じられました。その合間に胸が締め付けられるような痛みを感じ、気分が優れませんでした。
家に帰ると、私は泣いてしまった。まるで、救い主と共に復活しなかったかのように、混乱した気分だった。

1992年4月19日 - 復活祭の日曜日

私は午前6時から8時10分まで祈りました。主よ、神よ、この復活の祝典の後、私は気分が優れません。全体として、何かが違っていたような気がしました。昨日は4時間以上と、決して少なくない時間を祈りに費やしたにもかかわらず、傷ついた心を感じずにはいられませんでした。その理由は何でしょうか。私が理解できていなかったことは何でしょうか。
主よ、私の恐れ、混乱、疑いを取り除き、あなただけが与えてくださる平安をどうか授けてください。聖霊の光で私を照らしてください。
主よ、お語りください。あなたのしもべは耳を傾けています。あなたが私に書き記すよう導かれることを、私は信じます。しかし主よ、あなたの御心が行われますように。私は無に等しい存在ですが、あなたは無から私をしもべとして造ってくださいました。私の主であり神であるあなたが、私の魂の導き手であられるゆえに、私はあなたに心を開きます。
御心のままに私を形作り、御心のままに私をお使いください。

あなただけが私の主であり神、私の慈愛に満ちた父、私の愛するイエス、そして救い主です。
まず、私は、聖金曜日の聖体拝領の後、祭壇の前に置かれ、礼拝のために床に横たわっていた十字架を見つめていた時、その声を聞いたのか、そしてそれを正しく理解していたのかと尋ねました。私は心の中で何度もその十字架に口づけをしてきました。
救い主：「そう、わが娘よ、あなたは正しく聞いたのだ。すべての時代を通じて最大のしるしとは、あなたたち罪人のために私が十字架にかけられたことなのだ。」
それから、私は復活の祝典について尋ねました。あまりにも悲しみに打ちひしがれ、思わず涙を流してしまったからです。
救い主：「わが娘よ、復活は三日目に訪れる。」
私：「もし二日目に祝われるとしたら、それは人を混乱させ、戸惑わせてしまうのではないでしょうか。」
救い主：「そう、その通りだ。私に忠実であり続けなさい。」
私はさらに、教会で行われる数々の儀式について考えを巡らせました。
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。サタンは、人々を真理からそらすために、至る所で儀式を仕組んでいるのだ。」
私：「祭壇奉仕者たちが深くお辞儀ができるのを見ましたが、聖体拝領の時にはそれができません。」
救い主：「彼らは畏敬の念を知らず、私に対してそれを抱いていないのだ。」
私：「主よ、神よ、復活の後、私が何を書くべきか、そして今何が重要なのか、教えていただけますか？」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。人々は早急に悔い改めなければならない。」
私：「イエス様、生ける神よ、『至急』とはどういう意味ですか？書くのが難しいのです。主よ、あなたは真理そのものであり、あなたがそうおっしゃるなら、それは正しいに違いありません。『至急』とはどういうことですか？」
私：「主よ、でも、私がそれを耐えられるとお考えなら、教えてください。主よ、御心が行われますように。」
救い主：「あなたたちには多くの災難が待ち受けている。書き記せ、わが娘よ。近い将来、非常に多くの祈りが必要となる。」
私：「主よ、私の神よ、あなたを愛しています。これまで以上に祈ります。」私は、主が私に求めておられる願いについて、心から祈りを捧げました。
私：「私が書いたことは、これで正しいのでしょうか？」　救い主：「それで十分だ、わが娘よ。」
救い主：「平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」 私：「でも、『愛する娘』なんて、今まで一度も言われたことないわ。」 救い主：「そう書いていいよ。」
私：「主よ、私はあなたにとって愛しい娘なのでしょうか？」　救い主：「そう、あなたは私にとって愛しい存在だ。」
私：「ありがとうございます、主よ、神よ。ありがとうございます。」
10時、赤のミサ。説教は気に入らなかった。聖体拝領の後、私は幸せを感じ、多くの恵みを受けた。
12時30分：神学部の学生、フリドリンが来た。
13時30分：フリドリンと一緒にロザリオの祈りと黙想に参加した。
15:00〜18:30　私はフリドリンに、救い主が私に語ってくださったことを読み聞かせた。私たちは互いに信仰を強め合った。

1992年4月20日 復活祭の月曜日

夜中の3時頃、聖霊の声が私を起こしました。私は安らぎと平安を感じていました。それは、不安で目が覚めてしまったある夜とは正反対の状態でした。
聞こえてきた言葉は、今までになく明瞭で、はっきりと理解できた。
私はこう聞きました。「娘よ、たくさん祈りなさい。やがて、御言葉が勝利するから。」その後、しばらく静寂が続いた後、私はこう聞きました。
「『その言葉』は生きている。」
30分ほど経った後、それが繰り返されました。とても心地よい声だったので、何度でも聞いていたいくらいでした。

それは夢ではなく、私は目を覚ましていた。私は起き上がり、十字架の前でひざまずき、こう言った。「はい、主よ、私は祈ります。どうか、私が祈れるように、聖霊の力を与えてください。
祈れるようにしてください。」
こうして、午前3時30分頃、私は祈りを始めました。その後、敵のための祈り、悪魔祓いの祈り、聖傷のロザリオ、慈悲のロザリオ、その他多くの祈りを捧げ、精神的な聖体拝領を行い、その精神的な聖体拝領を全世界のために捧げました。
今日、「わたしの羊はわたしの声に耳を傾ける」という言葉の意味が、以前よりよく理解できるようになった。
午前4時30分まで祈り、それから寝た。
起きるとラジオをつけた。時刻は8時で、ニュースで昨夜モスタル市が爆撃されたと報じられていた。
モスタル市はメジュゴリエの近くにあり、そこにはメジュゴリエを否定しているジャニッチ司教が住んでいます。彼は、子供たちが嘘をついていると言っていました。
1985年の聖木曜日に私が彼を訪ね、自分の体験や聖母の御出現について話したとき、彼の目には涙が浮かんでいました。
彼は私にこう言いました。「私の置かれている状況は、あなたもご存知でしょう。」
私は「はい」と答え、彼が共産主義者、より正確に言えばサタンを恐れていることを理解していました。ジャニッチ司教には信仰はありましたが、その信仰を公に告白する勇気が欠けていたのです。
しかし、メジュゴリエにこれほど多く訪れていた他の司教たちは、今どこにいるのだろうか?
私は、ザニッチ司教との会話に関する報告書をすでにクラウス・ツィーグラーに渡しており、彼がピーター・ツィマーマンというペンネームで出版した本に掲載してもらうためでした。
彼は私について書いてはくれたが、司教との会話に関する記録は公表しなかった。それは残念だ。
イエスは多くの人々のために死なれましたが、ザニッチ司教はイエスのために自分の命を捧げようとはしませんでした。人間の自由意志こそが、その人を天国へ、煉獄へ、あるいは地獄へと導くのです。
私はこう言います。もし神がマリアを通して御自分の民を呼びかけられるなら、それはすべての人を救いたいのであり、悪魔に明け渡すためではないのです。残念ながら、世俗的な司祭たちはもはや主の声を聞いていません。彼らは目も耳も塞がれています。今日、教会では「個人的な啓示を信じる必要はない」と教えられています。
おそらく、手遅れになって初めて、彼らは信じるようになるでしょう。
ニュースが終わるとすぐに、私は祈りを続けました。8時45分頃、私は精神的に神と交わり、聖体拝領を行いました。そして、今夜、私に祈るように呼びかけたのは主ご自身だったのかと、救い主に尋ねました。
救い主:「そう、ずいぶん時間がかかったな。」
私:「主よ、すぐに起き上がって祈らなかったことをお許しください。
深く悔い改めています。主よ、多くの災害が訪れることを、司祭にさえ伝えることができません。
新しい司祭が来るまで、私はどうすればよいのでしょうか。」 救い主:「祈
りなさい、わが娘よ、たくさん祈りなさい。」
私:「でも、彼らが私的啓示を信じないのは悲しいことです。」救い主:「そのことについては、彼ら自身が責任を
負わなければならない。」
救い主:「平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」私:「ありがとう
ございます、私の愛する救い主よ。」

10時 赤のミサ。
12時30分 — 昼食後、バルコニーで少し祈りました。救い主は再びこうおっしゃいました。「御言葉は勝利する。御言葉は生きている。」
バルコニーには紙がなかった。後で確認してみると、それは今夜、救い主が私に語ってくださったのと同じ言葉だったことに気づいた。
今夜の出来事を改めて読み返してみると、自分がエマオの弟子たちと同じような体験をしていたことに気づいた。私は、精神的に救い主であることを後になって初めて認識したのだ。(今日は、エマオの弟子たちに関する福音書が読まれた。)

1992年4月21日 - 火曜日

午前10時10分、医師室にて:
祈りの後、救い主との交わりの最中に、彼はこう言いました。「書き留めなさい、わが娘よ。
ロシアとの戦争が近づいている。」
私:「それはどういう意味でしょうか。ロシアだけが影響を受けるのですか? 」

救い主：「すべての人々が影響を受ける。」
私：「セルビア人とクロアチア人の時のようなことになるのでしょうか？」救い主：「
この戦争は、あの戦争とは比べものにならない。」
私：「そんなことが起きるなら、どうやって礼拝堂を建てればいいのですか？」救い主：「できるだ
け早く礼拝堂を建てなさい。」
私：「あなたのことについて、すべてを話せる司祭がいません。」救い主：「娘よ、司祭はまもなく
やってくる。」
私：「その神父さんは私の町に留まってくれるの？」 救い主
：「ええ、あなたの町に留まるでしょう。」 私：「神父さん
が二人になるの？」
救い主：「いいえ、ヴォクト神父は別の場所へ行くことになるでしょう。救い主：「辛抱しなさい、
わが娘よ。すべては適切な時に訪れるのです。」私：「まだ何か書き留めておくべきでしょうか？」
救い主：「たくさん祈りなさい、娘よ。私はあなたを愛している、愛しい娘よ。」私：「これでは
書き留められません。」
救い主：「その通りに書きなさい。」
私：「最愛の救い主よ、あなたの言葉は私の心の中で火のように燃え上がっています。それは単に耳で聞くだけのことではなく、あなたがそう言ってくださると心が癒やされ、すぐに効果があります。それは、あなたがすでに私に告げてくださった『御言葉は生きている』という言葉を裏付けており、それは真実です。
私の言葉では、あなたへの感謝の気持ちを十分に伝えきれません。私の主、私の神よ、私はあなたを何よりも愛しています。」
救い主：「平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」夕方、ロザリオと
赤のミサ。

1992年4月22日 — 水曜日

いつものように祈りましたが、声は聞こえませんでした。礼拝堂でも、夕方の聖体拝領の後でも聞こえませんでした。しかし、救い主と一つになる時、私はその御存在を感じました。救い主は私を見捨ててはいませんでした。私のそばに安らぎ、おられました。
夕方、マリオンが来て、私たちは日記を書いた。
今日の職場では、信仰を納得させるのが難しい患者たちがいました。例えば、ある男性に「イースターの懺悔はしなかったのですか」と尋ねたところ、彼は「自分には罪なんてない」と言いました。そこで、最近どれくらい教会に行っていないのかと尋ねました。
彼：「ええ。その通りです。」
次の患者は、もう10年も病気だと不満を漏らしていた。私は彼の中に悪魔の存在を感じ、聖水を振りかけた。彼は身をかわして一歩後退し、「その化学薬品はどっかへ持って行け」と言った。聖水に対する嫌悪感がはっきりと感じられた。
最近、レントゲン検査のために何人かのジプシーが訪れました。私のところへレントゲン検査に来た人たちは皆、同じカルト集団に属しています。彼らが話した内容を聞いて、私は彼らが完全に誤った教えに陥っていると言わざるを得ません。
全員、6〜7人ほどが私に向かって押し寄せ、声はますます大きくなっていった。私は聖水を手に取り、彼ら全員に振りかけた。それから、ベネディクトの十字架で全員に祝福を与えた。すると、たちまち彼らは全員いなくなってしまった
。
夕方にはロザリオの祈りと、赤の祭服を着てミサを捧げた。

1992年4月23日 — 木曜日

10時10分、医師室にて：
祈りの後、私は右手に、イエスが聖痕を残している箇所で、何度か激しい刺すような痛みを感じた。その痛みは、まるで誰かに刺されたかのような激しいものだったが、目に見える傷はなかった。
そこで私は救い主に尋ねた。
救い主：「そう、それは不浄な霊だ。もし彼らにその力があれば、とっくにあなたを十字架につけていたはずだ。あなたが祈っていることは、彼らには気に入らないのだ。」
私：「他の人たちも祈っていますよ。」

救い主：「お前は彼らから多くの魂を奪っているのだ。」私：「誰
にでも守護天使がいるのです。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。あなたには一人の守護天使以上の存在がいるのだ。」
私：「手に刺すような痛みを感じる時、守護天使たちはそこにいないのですか？」
救い主：「いや、いる。だが、私はそれを許しているのだ。そうでなければ、お前の周りに不浄な霊たちがいることを、どうやって信じられるだろうか。」
私：「もし私が祈るのをやめてしまったら、大変なことになるでしょう。」救い主：「娘よ、
今まで通り続けていなさい。」
私：「これからしばらくの間、私に何を勧めてくださいますか？」救い主：「断
食しなさい。」
私：「はい。主よ、そういたします。」
私：「主よ、これは私だけのためですか、それとも祈りの集まりでもそう言ってもいいですか？」救い主：「それは皆に当てはまる。」
救い主：「平安のうちに帰りなさい、愛する娘よ。」
夕方、ロートにある教会でロザリオを唱えました。ロートではミサが行われていなかったため、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂へ行き、そこでミサに参加しました。

1992年4月24日 — 金曜日 — 救い主は1年前から私に語りかけておられます。

午前10時10分、医師室にて：
私は祈っていました。
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。今年、そしてこれからの年々はすべて、私のものである。」私：「はい。主よ、私
は取るに足らない者ですから。」
救い主：「そう、その通りだ。わが娘よ、これまでのあなたの働きは、私に喜ばれた。」私：「私は、まったく進歩していない
ような気がするのです。」
救い主：「本当に進歩がなかったのか？」
私：「私は最近、一時間ごとに祈りを捧げていますが、そうしていると、自分が何をしたのかよく分からなくなってしまいます。あなたと共に過ごした今年は、これまでのどの年よりもあっという間に過ぎてしまいました。
これから私はどうすればいいのでしょうか。あなたはこれからも私の霊的指導者であり続けて
くださるのですか？」 救い主：「ええ、わが娘よ、私はこれからもあなたの霊的指導者であ
り続ける。」
私：「選ばれた人たちは皆、何でも話せる司祭がいるのに、私にはいないから、悲しいです。」
救い主：「そうならざるを得ないのだ、わが娘よ。だが、もう長くは続かない。」私は、近づ
きつつある戦争について救い主に尋ねた。
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。ロシアから始まるこの戦争は、大戦争となるだろう。この戦争を止めることのできる者は、誰一人としていない。」
私：「主よ、でもあなたなら止められるはずです。」
救い主：「わが娘よ、罪はあまりにも重いのだ。」
私：「今日で、あなたの声を聞いてから一年になります。何か教えていただけますか？」救い主：「書き記せ、わが娘よ。絶え
ず祈りなさい。」
私：「はい、主よ、そうします。あなたと共に、私にできることを。」救い主：「私はあなた
をとても愛している、わが娘よ。平安のうちに去りなさい。」夕方、ロザリオと赤のミサ。

1992年4月25日 — 土曜日

午前中、ヴァーハウゼルで聖ミサに参加した。聖体拝領の後、聖櫃の前にひざまずいた。私は救い主に、聖なる父に手紙を書くべきか、それともまだ時間があるか尋ねた。
救い主：「今がちょうど良い時だ。」

私：「救い主よ、それはどういうことでしょうか。他の人たちは、あなたが私に対して神学的な言葉では話さないと言っています。あなたは私と同じように、私のスタイルで話してくださるのです。」
救い主：「もし私が他の皆が好むような話し方をしていたら、君は私を理解できなかっただろう。」
その後、私はマリオンのもとへ行き、私たちは聖なる父へ手紙を書きました。

16時30分から18時30分まで、ロートの教会でひざまずいて祈りました。

1992年4月26日 - 日曜日

朝6時に起き、今日、聖体拝領を受けるにふさわしくない人々、とりわけヴォクト神父のために特に祈った。

救い主と一つになった後、教皇に宛てて書いた手紙に何か変更を加えるべきかどうか尋ねました。

救い主：「わが娘よ、その手紙は良いものだ。送ってよい。」

私：「主よ、神よ、昨日、初聖体を受けたジンが私に話してくれたことを聞いて、私の心はとても重くなりました。ヴォクト神父が禁じたため、彼女たちは、私たちが祭壇の前で歌ったり祈ったりするとき、救い主や聖櫃の前に頭を下げることが許されていないのです。 私が彼女に尋ねたとき、彼女は継父と私の夫の面前でそう話してくれました。救い主：「書きなさい、わが娘よ。その司祭は神の恵みの中に生きてはいない。」

最初は、救い主が私に言われたことを信じようとは思いませんでしたが、その後、救い主はそれを
三度も繰り返された。

私：「では、彼による聖体の変容についてはどうなのですか？」

救い主：「彼は聖体変容を行う権限を持っている。それを彼から取り上げることはできない。」

私：「主よ、それは恐ろしいことです。もうすぐ耐えられなくなってしまいます。主よ、誰も私を信じてくれないでしょう。」

救い主：「世には大きな盲目さが蔓延しているのだ。」

私：「主よ、私がヴォクト神父のためにどれほど祈っているか、あなたはご存知でしょう。一体どうすればいいのでしょうか？」救い主：「その司祭は私に任せておきなさい。」

ああ、私にとってどれほど辛いことだったか。これを書くことさえほとんどできず、まるで一撃を食らったかのようだった。私：「はい、主よ、神よ。今、私がなぜ教皇様のもとへ行くべきなのかがわかりました。

主よ、司祭たちは危険にさらされているのですか？」

救い主：「そう、わが娘よ。彼らはほぼ全員が危険にさらされている。彼らは私の御心に従っていないのだ。」私：「彼らは従おうとしないのですか、それともあなたの御心に従うことができないのですか？」

救い主：「書き記せ、わが娘よ。彼らは私の御前に立つとき、無関心なのだ。彼らは立ち返らなければならない。」

私：「でも、彼らには信仰があるのでは？」

救い主：「彼らはその信仰のために、ほとんど祈っていないのだ。」

私：「信仰とは神からの賜物だと思っていたのですが？」救い主：「そう、
しかし私は、私が望む者にそれを与えることができるのだ。」救い主：「愛
する娘よ、平安のうちに去りなさい。」

私：「主よ、神よ、あなたの教え、あなたの慈しみ、私に対する忍耐、そしてあなたの優しさに感謝します。私は司祭たちのためにもあなたを愛しています。彼らに憐れみをお与えください。私は彼らのために祈ります。」

実のところ、私はすでに数年間、祈りのグループで彼らのために祈り続けています。

10時、聖体祭（赤のミサ）。

私はほとんど耐えきれず、自分の前に聖水を撒かざるを得ませんでした。まるで地獄が私の上に降りかかってきたかのような感覚に襲われました。私は絶え間なく信者たちと司祭のために祈り、ヴォクト神父のために聖体拝領を捧げました。

その式典は気に入らなかった。ヴォクト神父がヴェネブッシュ嬢に説教をさせたのは良くなかった。ヴォクト神父が初聖体を受ける子供たちに、常に聖体を手に渡していたことについては、彼は本当に一度説明責任を果たさなければならない。

昼食には、「白い日曜日の子供」であるユングさんに、シューツェンハウスへ招待されました。

昼食の直後、カールスルーエから来た修道女が私と一緒に家まで車で送ってくれ、私たちは一緒に祈りを捧げた。

その後、マリオンが来て、私たちは日記を書きました。

その後、兄のウラジミールと甥のラトコがまた訪ねてきた。

ロート出身のヘドヴィグも訪ねてきた。その後、日記のメモを清書した。

1992年4月27日 - 月曜日

職場へ向かう車中で渋滞に巻き込まれました。おかげで、いつもより長く祈ることができました。職場:
私はすぐに、安らかに眠る魂たちのためにろうそくを灯し、聖水を注いだ。患者さんが来るまで、同僚のヴェロニカと私は一緒に「喜びのロザリオ」と聖霊への祈りを捧げた。その後、数人の患者さんのレントゲン撮影を行い、歯科医院へ行って歯の詰め物をしてもらった。歯科の椅子に約2時間横になっていた。 歯科医から麻酔を打つかどうか尋ねられたが、私は断り、その痛みを罪人の回心と魂の救いのために捧げた。それから、検査の間中、絶え間なく、教皇様、教皇様の敵、司教や司祭たち、そして医師や看護師、その他の魂たちのために祈り続けた。 治療は約2時間続きました。歯科医はひどく汗をかいていました。最後に、私は彼に「あなたは告解をしていないでしょう」と言いました。しかし、彼はその汗を、とても暖かく明るいランプのせいにしました。
再び、数人の患者のレントゲン撮影を行いました。

12時、病院の礼拝堂にて:
まず「主の天使」を唱え、その後も深く心を込めて祈りを続けた。私は救い主に、自分は無に等しい存在であるため何も尋ねない、もし何か伝えたいことがあれば、そうしていただきたいと申し上げた。
深く神と一つになったとき、霊的に交わりを持ちました。
救い主は私にこう言われました。「書きなさい、わが娘よ。あなたはフォクト神父と話さなければならない。」私:「教皇への手紙を送る前ですか、それとも手紙を送った後ですか? 」救い主:「教皇への手紙を送った後だ。」
私:「はい、主よ。彼に何を話せばよいのでしょうか? 」
救い主:「書き記せ、わが娘よ。『彼は考えを変えるだろうか、それとも変えないだろうか? 』」私:「ああ、主よ、今はそれが全く理解できません。」
私:「偉大なる神よ、力強い神よ、不死の神よ、いつ、どのように彼に伝えればよいのでしょうか? 」 救い主:「今日、彼のところへ行きなさい。」
私:「主よ、でも彼の考えが分かりません。」救い主:「彼は知っている。」
私:「彼のもとへ行っても、何ができるというのですか? 」 救い主:「彼の救いだ。」
私:「主よ、神様、でもそれは今までで一番難しいことなんです。」救い主:「やりなさい、わが娘よ。それは重要なことなのだ。」
私:「主よ、もうこれ以上書くことはできません。彼のところへ行ったら、心臓発作を起こしてしまいそうです。」
救い主:「恐れているのか? 」
私:「怖くはないですが、これまでのことを考えると、彼はもう変わらないと思います。でも、もしあなたが彼に再び大きな恵みを与えてくださるなら、すべてがまたうまくいくかもしれません。」
救い主:「そう、わが娘よ、その通りだ。」私:「まだ何か書くべきでしょうか? 」
救い主:「書きなさい、わが娘よ。私がまだ彼を深く愛している、と。」私:「主よ、昨日のことも彼に読み聞かせましょうか? 」救い主:「今日のことだ。」
私:「はい、主よ、神様、そういたします。主よ、御心が行われますように。」
それから私は救い主に、私と一緒に司祭のところへ行ってくれるのか、それとも私一人で行くことになるのか、と尋ねました。」

救い主：「どこへ行こうとも、私はいつもあなたと共にいる。」

私は救い主に感謝を述べ、礼拝堂を出て職場へ向かい、仕事に取り掛かりました。礼拝堂にいたのは約40分間でした。普段、私は礼拝堂に平均して15分ほどしか留まりません。

仕事の後、私はその手紙を聖父宛てに書留で郵便局へ持ち込みました。

時刻は16時15分頃だった。帰宅途中、ヴォクト神父のためにロザリオを唱えた。16時45分頃、教会で少し祈りを捧げ、16時50分にはヴォクト神父のもとへ到着した。神父は私の話を聞いてくださった。

神父は親切に、「今後の展開を見守っていくしかないですね」とおっしゃいました。

私は、聖なる父に送った手紙の写しを、神父様に読んでいただくために手渡しました。

神父様が手紙を読んでいる間、私は心の中で救い主に「今、何を言えばよいのか」と尋ねると、「今は黙っていなさい」という声が聞こえました。

それは短い会話でした。かつてないほど短いものでした。私はヴォクト神父様に祝福を求めました。神父様は私に祝福を与えてくださり、私はその場を後にしました。

夕方、ロートでの聖体礼儀はなかった。20時、祈りの集い：

私たちは救い主を礼拝しました。いつものように、私は救い主のすぐ前にひざまずきました。

私たちは三つの連祷――『マグニフィカト』、三位一体の連祷、聖母の御心の連祷、そして諸聖人の連祷――を唱えました。私は救い主から発せられる強い温もりと喜びを感じました。私たちは2時間半、祈りを捧げました。

多くの人がまた告解を済ませ、最後には私も告解をしました。皆、幸せな気持ちで帰っていきました。救い主は私たちに多くの恵みを与えてくださいました。

1992年4月28日 - 火曜日

9時45分～10時45分、医師室にて：

今日は普段ほど祈ることができませんでした。ヴォクト神父様の今後がどうなるのか、心配でたまりませんでした。

救い主：「書きなさい、わが娘よ。神父様はそれについてすでに考えを巡らせているだろう。」私：「これから、教会の当局の他の人たちと話すことになるのでしょうか？」救い主：「あなたは数人と話すことになるだろう。」

私：「ヴォクト牧師は、フライブルクに私のことを報告してくれるのでしょうか？」

救い主：「ええ、オスカー大司教には、私からあなたの声についてすでに伝えられている。」私：「ええ、それなのに、今まで私と話すことに興味を示さなかったのですか？」

救い主：「まだ先のことだ。彼はきっと君と話すことになる。」

救い主：「たとえ他の人々があなたを嘲笑し、否定し、侮辱したとしても、あなたはすべてを受け入れなければならない。私と共に、あなたは最後まで耐え抜くのだ。」

私は、聖体配給係のフランツィスカについても尋ねました。救い主：「彼女はまだ君と話すことになるだろう。」

私：「聖体拝領の奉仕について、彼女に何か話すべきでしょうか？」救い主：「私が君に言ったことを、彼女に伝えてくれ。」

昨日の夜、祈りの集まりの後、救い主との会話について少し話したところ、二人の女性が、もし司祭のもとに行かなければならないとしても、救い主が自分たちと共におられるかどうかを尋ねたりはしない、と私に言いました。なぜなら、救い主が自分たちと共におられることは当然のことだからです。

救い主：「気をつけなさい。そのような発言には答えないで。彼女たちが何をしたかについては、私が一番よく知っている。」

私：「救い主よ、何かおっしゃりたいことがあれば、教えてください。」

救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。今、私があなたに言おうとしていることが想像できるか？」私：「いいえ、主よ。とても気になります。」

救い主：「あなたは聖父から手紙を受け取るだろう。あなたは聖父のもとへ行くことを許される。」

最初は信じられなかったが、その後、何か間違って書いてしまったのではないかと思い、救い主にそれを繰り返してくださるようお願いした。
私は言いました。「どうかもう一度繰り返してください、愛するイエス様、私の魂の導き手よ。」すると、二
度目にその言葉を聞きました。
救い主：「お前は手紙を受け取り、聖父のもとへ行くことを許される。」
私：「主よ、神よ、いつそこへ行けばよいのでしょうか。それはあなたの御手に委ねます。なぜなら、私がここでどのような仕事をしているか、あなたはご存知だからです。もし今行かなければならないのなら、飛行機で
飛行機でそこへ向かいます。」
私：「主よ、神よ、聖なる父とお話しできることを、今から楽しみにしています。偉大なる神よ、あなたはすべてをご存知で、すべてをご覧になり、お望みの通りにすべてをなされ、あなたがなされることはすべて正しいのです。私の最愛なる方。あなたから離れてはなりません。
もし誰かが、あなたなしでもやっていける、生きていけると思い込むことこそ、最大の悪であると思います。
主よ、私の神よ、あなたの愛と優しさに、心から感謝いたします。」 救い主：「平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」
私の魂は愛と平安で満たされ、私はとても幸せでした。私は救い主と30分以上も語り合いました。
12時、病院の礼拝堂にて。その後、外を少し散歩し、聖母マリアのために小さな花束を摘みました。
15時00分から15時45分まで、日記を書きました。まず日記をめくって、ここ数日間の救い主との出来事を読み返しました。
赤い服を着てミサに参加し、聖体拝領を聖なる父とマリオンに捧げました。
教会から戻るとマリオンが来て、私たちは日記を書きました。

1992年4月29日 - 水曜日

今朝も、いつもより長く祈りました。
10時、医師室で救い主と心を一つにしました。 救い主：「書き記せ、わが娘よ。あなたはエンツ教区長の
もとへ行かなければならない。」私：「主よ、私の神よ、私のイエスよ、私の霊的指導者よ。なぜですか
？」救い主：「私があなたに授けた最も重要なことを、彼に伝えなければならない。」私：「その『最も
重要なこと』とは、一体何ですか？」
救い主：「戦争について彼に伝えなさい。教会は早急に改善しなければならないからだ。」私：「その改善とは、どのようなものですか？」
救い主：「書き留めなさい、最愛の娘よ。手による聖体拝領は早急に廃止されなければならない。そして、聖体拝領は、司祭の
聖別された手を通じてのみ
によってのみ授けられなければならない。
私：「私が神父様に手紙を書いたことを、彼に伝えてもいいですか？」 救い主：「彼に見せていい。」
私はさらに、信者たちが聖体拝領を受ける際、立つべきか、それともひざまずくべきか、救い主がどのように望まれるかを尋ねました。
救い主：「わが娘よ、これを永遠に心に留めておきなさい。私は主であり神である。私の前では、誰もが最も深い敬意を示さなければならない。」
私：「主よ、しかし、最も深い敬意とは、あなたの前に身をかがめてひざまずき、清らかな心であなたを受け入れることではありませんか。」
救い主：「そう、娘よ、君は知っているだろう。」
私：「主よ、すぐに学部長のもとへ行くべきでしょうか。それとも、私の地元の司祭であるフォクト神父にこの件を
伝え、彼に面会の日程を手配してもらうべきでしょうか。」救い主：「フォクト神父のところへ行き、彼に
エンツ学部長との面会を手配するよう伝えておけ。」
私：「もしヴォクト神父が、自分で手配しろと言ったらどうしますか？」 救い主：「それなら、彼の責任でやればいい。」
私：「いつやればいいのですか？」

救い主：「娘よ、できるだけ早くそうしなさい。」私：「主よ、今日は少しお厳
しいですね。」
救い主：「娘よ、聖杯はとっくに溢れ出ているのだ。」
私：「親愛なる救い主よ、よく理解できません。お許しください。『聖杯が溢れ出ている』とはどういう意味ですか？」
救い主：「わが娘よ、罪はあまりにも重く、もはや私がそれを支えきれないのだ。」
私：「主よ、神よ、私たちに憐れみをお与えください。私たちを救ってください。私たちはあなたの子供なのですから。生ける神の御子イエス様、まだ何か書き留めるべきことはありますか？」
救い主：「愛する娘よ、それで十分だ。平安のうちに去りなさい。」
私：「主よ、神よ、そういたします。主よ、御心が行われますように。あなたの御言葉に心から感謝いたします。」
私は約30分間、救い主と一つになっていました。

正午、礼拝堂にて：私は心を込めて祈り、それから救い主と一つになりました。私：「主よ、神よ、私は言葉を書き留めましたが、もしあなたが私の立場だったら、何を書かれるでしょうか？」
救い主：「よく覚えておきなさい、わが娘よ。これは司祭たちへのメッセージなのだ。」
私は、今すぐ、あるいは今週中にゲブハルト・ハイダー神父のもとへ行くべきかと尋ねました。救い主：「来週末だ。」
それから、ヴォクト神父のもとへ行くべきか、それとも電話をすべきか尋ねました。電話なら、仕事が終わった後に教区長のもとへ向かうことができるからです。
救い主：「彼に電話しなさい。（ヴォクト神父）」私：「
こう書いていいのでしょうか？」
救い主：「書きなさい、娘よ。あなたは正しく書いた。」
私：「主よ、もし彼らが『どうやってあなたの声を聞いているのか』と尋ねてきたら、私にはうまく説明できません。」救い主：「彼らにこう言いなさい。『心の奥底であなたの声を聞いている。そして、私はそこに、あなたと共にいるのだ』と。」
私：「でも、私は耳鼻咽喉科で働いていて、外耳道に関わる仕事が多いのですが、耳を通してあなたの声を聞いているわけではありません。」
救い主：「それは超自然的なことなのだ。」
私：「でも、彼らは『超自然的なことは悪魔から来ることもある』と言うでしょう。」救い主：「彼らは『霊を見分ける力』を祈り求めなさい。そうすれば、その超自然的なことが善の霊から来るのか、悪の霊から来るのかを見分けられるようになる。」
13時15分頃、私はヴォクト神父に電話をかけた。私は、救い主からエンツ教区長のもとへ行くよう言われたこと、そして神父に教区長との面会日程を調整してほしいと伝えた。神父は驚き、もう一度確認を求めてきた。
私はそれを二度目も繰り返した。
フォクト神父は、私が自分で面会の日程を調整すべきだと言いました。私はお礼を述べました。フォクト神父は少々不愛想でした。
14時、職場の礼拝堂にて：
私は激しく泣き、それから少し祈りを捧げ、救い主と心を一つにしました。
救い主：「仕事の終わりに、直接彼（エンツ教区長）のところへ行きなさい。仕事の終わりに。その前に電話をしてはいけない。」
私：「私が会いに行ったとき、彼は家にいますか？」　救い主：「はい。」
私：「彼の住所すら知りません。もし彼が私の話を聞いてくれなかったら？」救い主：「彼はあなたの話を聞いてくれる。」
私：「主よ、神よ、私はすべての信頼をあなたの御手に委ねます。
主よ、御心が行われますように。ありがとうございます。おっしゃった通りにいたします。」私は病院の礼拝堂に約15分間いました。
私は恵みを受け、魂はたちまち癒され、幸せを感じ、再び仕事に戻ることができました。

ヴィースロッホのエンツ教区長のもとへ向かう道中、私はエルツ神父のためにロザリオやその他の祈りを捧げました。17時を少し過ぎた頃には、私はすでにヴィースロッホの聖ローレンティウス教会に到着していました。
そこで少し祈りを捧げ、救い主にこう言いました。「今、私はここに来ましたが、エンツ神学部長がどこにお住まいなのかさえ分かりません。」
私は救い主に、力と平安を与えてくださるよう、そしてエンツ教区長のもとへ行った際に何を話すべきかを示してくださるよう祈りました。そして、救い主が私と共にいてくださると信じました。教会を出て、ある年配の女性にエンツ教区長がどこにお住まいなのか尋ねました。彼女は教えてくれ、あっという間に私は司祭館の前に立っていました。
美しい女性がドアを開けてくれたので、私は「救い主が私をここに遣わされたので、エンツ教区長とお話ししたいのです」と伝えた。
すると彼女はすぐに、エンツ教区長様はご不在だと答えました。
「救い主が私を遣わされたのですから、本当にいないのですか？」と私は尋ねました。
すると彼女は、エンツ氏はアデナウ広場にある教区事務所で、初聖体を受ける子供たちの対応に追われていると答えました。
私は、いつ戻られるのかと尋ねました。彼女は、19時頃にまた来てみてはどうかと言いましたので、私は彼を探しに行くつもりだと伝えました。
まず、アデナウ広場にある教区事務所へ向かった。そこで一人の男性が、エンツ教区長はずいぶん前に出かけてしまったと教えてくれた。それから再び教会に戻り、救い主にこう言った。「親愛なる救い主よ、私が教区長のもとへ行けば、彼は家にいるとおっしゃいましたね。」
救い主：「彼は家にいる。」
私：「それなら、あの女性は嘘をついたのですね
。」救い主：「家に入りなさい。」
そこで私は教会を出て、司祭館のドアの前に立ちました。中に入る気にはなれず、祈り始めました。心の中では、
エンツ教区長が家の中にいることを内面でも感じていたからだ。私はロザリオを手に持ち、ラテン語で『アヴェ・マリア』を数回、大天使ミカエルの祈りを、そしてラテン語で『サンクトゥス』を数回唱えた。すると、一人の若い男性がやって来て、中に入っていった。彼は私がロザリオを唱えているのを見た。その後、年配の女性、つまり牧師館の家政婦の母親がやって来た。 その後、教区長邸や教会で以前見かけたことのある職人がやって来ました。4人目に現れた男は、私の真正面に立ち、大声で「誰か助けてくれ」と叫びました。その声には絶望が滲んでいました。
私はすぐに自分の内側に悪魔の存在を感じ取り、彼には一切答えませんでした。しかし、私は敬虔に、小声で『アヴェ・マリア』を次々と祈り続けました。
しかし、悪魔は私の祈りを聞き取っていた。彼は怒り出し、何度もドアのベルを鳴らし、落ち着きを失って、祈るのをやめろと脅してきた。
彼はロザリオを嘲笑し、私に向かって手を振り上げ、「殴ってやる」と言いました。私はその場から動こうともせず、祈り続けました。
すると彼は再びドアベルを鳴らし、インターホンからは家政婦の声が聞こえてきて、「ここには誰もいません」と言った。その男は怒りと憤りを抱えて立ち去った。私は祈り続け、しばらくして聖母マリアと天使たちに呼びかけ、助けを求めた。「聖母マリアよ、この家の上にあなたのマントを広げてください」と私は懇願した。
すると突然、ドアが開き、その女性が私に「中に入っていいですよ。その間に神父様がお越しになりました」と言いました。彼女は不安そうな様子で、私は彼女が正直ではないと感じました。
私は彼女に言いました。「私がいるところには、必ず悪魔もすぐ後ろについてくるのです。」
私はまだロザリオを手に持ったまま、教区長のもとへ行き、救い主が「司祭が家の中にいる」と告げてくださったので、ドアの前で祈っていたこと、そしてそのためベルを鳴らしたくなかったことを伝えました。彼は驚いた様子で私を見つめました。
私は、救い主が私に告げたこと、つまりディカン氏に知っておくべきだと主がおっしゃったことを彼に伝えました。

私たちはおよそ25分間話し合い、私は日記の最後の3ページを彼に読み聞かせ、また、私が聖なる父に送った手紙も彼に読んでもらいました。
彼は、ヴォグト牧師と話し合うと私に言いました。
私は彼に祝福を求め、彼の前にひざまずきました。彼はとても素晴らしい祝福を与えてくださり、私はその場を後にしました。
私の車が停めてあった駐車場で、教区の家政婦に出くわし、彼女に「懺悔に行かなければならない」と告げました。彼女は、それは「やむを得ない嘘」だと答えました。私はさらに、「神様はそれを見ておられる」と伝えました。すると彼女は笑って、その場を立ち去りました。
18時25分には、私はすでにロートの教会にいました。私は、エンツ教区長とフォクト神父のために、聖体拝領を捧げました。
聖体拝領の後、救い主と一つになった私は、ディカン氏のことについて「すべて正しかったのか」と尋ねました。
救い主：「すべて正しかった。」
救い主：「ありがとう……」。しばらくして、救い主はさらにこう語りかけました。救い主：「私はあなたを愛している、私の愛する娘よ。平安のうちに去りなさい。」
教会を出た後、私はある修道女（シュタインハウザー）と話をしました。私は彼女を誤った教えから守り、20分以上も彼女と語り合いました。家に帰って何か食べようとしたところ、また客が訪ねてきました。その客は自分が洗礼を受けているかどうか分からなかったので、私は再び神について話しました。
夫の中には悪魔が猛威を振るっていました。怒りと憎しみが彼の中に現れ、病気の足まで捻挫してしまいました。その後、ルチアもやって来ました。
彼女は私のために祈ると約束し、月曜日の祈りの集まりをすでに楽しみにしていると伝えてくれました。彼女はここに来て祈ることを喜んでいます。
22時45分、私は寝床につきました。

これほどほとんど眠れなかった夜は、これまで何度もあった。それを知っているのは、愛する神様だけだ。それでも、救い主は働き続ける力を与えてくださる。
この一日は、私にとって大きな教訓となったと信じています。なぜなら、救い主は私がその御声を聞いていることを確認してくださったと同時に、サタンがどれほど私に怒りを燃やしているかを示してくださったからです。救い主がいなければ、私は決してサタンに打ち勝つことはできなかったでしょう。
主よ、私の神よ、今日私に与えてくださったこの大きな恵みに感謝いたします。
私にとっては、「求める者は見出す」という言葉が当てはまり、ディカン先生にとっては、「目を覚ましていなさい。彼がいつ来るか分からないのだから」という言葉が当てはまります。

1992年4月30日 — 木曜日

今朝はたくさん祈りました。その後、同僚と一緒にロザリオを唱えました。
10時頃、医師室で仕事を始めました。仕事中も、しっかりと祈ることができました。その後、レントゲン検査に来た患者たち——罪を犯していないと思い込み、告解をしない「迷える羊」たち——を回心させました。
ある患者はハンガリー出身、別の患者はイタリア出身、3人目はルーマニアから来ており、さらにマウアー出身のドイツ人もいました。それは豊かな漁でした。こうして、私は12時30分になってようやく、病院の礼拝堂で救い主からのメッセージを受け取りました。
私：「昨日、学部長の家の玄関先で祈っていた時、汚れた霊に憑かれた男が私の前に立っていたが、その時、あなたは私と共にいてくださった。」
救い主：「そう、私はあなたと共にいた。」
私：「だから、彼は私を攻撃できなかったのですね。」
私：「あの男に宿っていた不浄な霊とは、一体どのようなものだったのですか？ あなたが私の霊的指導者ですからお尋ねします。もし私がそれを知る必要があるのなら、
もしあなたがそう望まれるなら。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。それはルシファーだった。」私：「ルシファーの配下の悪魔ですか、それともルシファーその人ですか

? 」

救い主：「ルシファーその人だ。」
私：「彼は一人だったのか、それとも他にも誰かがいたのか？」救い主：「大勢
が一緒だった。」
私：「主よ、神よ、彼の目的は何だったのでしょうか。私が学部長の部屋のドアの前で祈っていたからでしょうか。私が学部長と
重要なことを話し合うまさにその時に、彼は現れたのです。主よ、もしそれが司祭たちにとって重要なことなら、教えてください
。」
（サタンは、私が教区長と「手による聖体拝領」の廃止と「口による聖体拝領」の導入について話し合っていたことに激怒していました。というのも、「手による聖体拝領」はサタンの仕業だからです。）
救い主：「書き記せ、わが娘よ。司祭たちは私の御心に従わなければならない。」私。「しかし、ルシファーの目
的は何なのでしょうか？」
救い主：「彼は彼ら全員を手に入れようとしているのだ。」
私：「主よ、私は正しく書き記しましたか？」 救い主：「はい、その通りで
す。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。司祭たちは今、混乱に陥ろうとしている。」私：「なぜですか？」
救い主：「彼らは泥沼の中にいるからだ。わが娘よ、私に忠実であり続け、揺るぎない姿勢を保ちなさい。」
私：「救い主よ、何かが私に迫ってきています。教えてください。私はあなたと共にいますし、それを信じますから。」
救い主：「あなたはふるいにかけられる。」
私：「神様、『ふるいにかけられる』とはどういう意味ですか？」
救い主：「あなたは多くの人々から問い詰められることになる。私の声によく耳を傾けなさい。」私：「主よ
、神様、それは簡単なことではありません。」
救い主：「すでに言った通り、最終的には私と共に勝利するのだ。」私：「ありがとうございます、
主よ、神よ。あなたの言われた通りになります。」

私は赤い服を着て教会に行きました。聖体拝領はマリオンに捧げました。特に彼女のために祈りました。
建築家のヴォルフガングが来て、私たちが祈りの部屋を建設しようとしている場所を見に来た。ロズヴィータも一緒だった。
夕方、マリオンと彼女の母親、そしてエーリッヒがやってきました。私がマリオンと一緒に日記を書いている間、夫とイルマ、そしてエーリッヒはロザリオを唱えていました。
この恵みを神様に感謝します。

1992年5月1日 - 金曜日

自宅、午前7時頃：
45分間の祈りの後、私は救い主と一つになりました。
私：「主よ、神よ、慈愛に満ちた父よ、救い主よ。私に書き留めるべきことを、何とおっしゃりたいのですか。主よ、御心が行われ
ますように。主よ、私は取るに足らない者です。今日、あなたに何かを尋ねることさえ、勇気が出ません。主よ、それはおそらく、
私が司祭たちに深く失望しているからでしょう。 彼らのせいで、私の心は痛みます。はい、主よ、私は司祭たちのために泣いてい
ます。彼らを泥沼から救おうとしても、彼らは耳を貸そうとしません。」
救い主：「書き記しなさい、わが娘よ。あなたは近い将来、私のために語らなければならない。あなたは大司教様のもとへ招かれることになる。」
私：「どなたに？ サイアー大司教様ですか？」 救
い主：「そう、わが娘よ。」
私：「彼に何を話せばいいのですか？」 救い主：「私があな
たに示したことを。」
私：「いつ彼とお話しすればいいのですか？ 聖なる父のもとへ行く前ですか、それとも聖なる父とお話しした後ですか？」
救い主：「聖なる父とお話しする前だ。」
私：「私の力強く、不死で、聖なる神よ、そのために準備をしなければなりませんか？」

救い主：「祈り、断食しなさい。」
私：「はい、主よ、そういたします。そして、あなたは私と共にいてくださるでしょう。」救
い主：「そう、私はあなたと共にいる。」
私：「他に何か書き留めるべきことはありますか？」
救い主：「はい。娘よ、もう一つ書き留めておきなさい。私がこれまであなたに授けてきたすべてのことを、しっかりと守り続けなさい。
」
しばらくして、救い主はこう言われました。
「平安のうちに去りなさい。」
私は約30分間、救い主と深く結ばれていました。その後も祈り続けましたが、すべてを書き留めることはしませんでした
。手短にしなければ、マリオンが書き取りに追いつけなくなってしまいますから。
夕方、ロザリオの祈りのために教会に行きました。その日は、マリアの5月の祈りの開幕式でした。もっと多くの人が祈りに参加して
くれれば、もっと素晴らしいものになるでしょう。
午後、マリオンが来て、私たちは日記を書いた。
ヒルデとヘドヴィグが教会から遊びに来て、私は彼女たちの信仰を励ましました。ウェネブッシュ嬢がもう聖体拝領
を執り行わないよう、私は彼女のために祈りました。
救い主は私にこうおっしゃいました。「この願いのために祈らなければならない。」

1992年5月2日 — 土曜日

午前7時15分、私はヴァーハウゼルでの聖体祭に導かれ、聖櫃の前の最前列の席に着きました。聖体祭に参列していた他の信者た
ちは、教会の奥にある、祭壇の後ろの小さな部分に座っていました。そこからは、聖櫃や、慈愛に満ちた心を持つ母であるヴァ
ーハウゼルの聖母像は見えません。
聖櫃の前にあるその場所で、私がいかにして即座に恵みを受けたか、言葉では到底言い表せません。
聖ミサは3人の神父様によって執り行われました。私は霊的に聖体拝領を行い、救い主が私のところに来てくださったのを感
じました。
その後、私はマリオンのもとへ行き、私たちは日記を書きました。
12時、私たちは「主の天使」を唱えました。祈りの最中、義母が今月中に召されるという声を耳にしました。私にはその意味が完全には
理解できず、マリオンにそのことを話しました。家に帰ると、庭の最後の部分を刈り込み、それから野菜の種を蒔きました。
16時25分、私は赤い服を着て教会へ行き、そこで20時頃まで過ごしました。
まず、数人の女性たちと一緒にロザリオを唱えました。その後、17時25分頃まで一人で祈りを続けました。そして、救い主と心
を一つにしました。
私：「救い主よ、今朝ヴァーハウゼルで、聖櫃の前で聖ミサに参列したのは、正しいことだったのでしょうか？」
救い主：「そのままでいなさい、わが娘よ。」
私：「ベルトルト神父は私に聖体拝領を授けようとしてくださいました。しかし、私は教会の反対側、つまり他の信者たちとは離れて、
聖櫃の前でひざまずいていたため、救い主と霊的に深く結ばれており、主が私のそばにいてくださるのを感じました。
そのため、ベルトルト神父が聖体拝領の合図をくださったにもかかわらず、私は秘跡としての聖体拝領は行いませんでした。救い主よ、そ
れは正しいことだったのでしょうか？」
救い主：「もし彼があなたに聖体拝領を与えようとしているのなら、彼のところへ行きなさい。」
私：「でも、私があなたと霊的に一つになった時、あなたは確かに私のそばにいらっしゃいましたよね。」救い主：
「そう、私はあなたのそばにいた。」
それ以上、何も尋ねようとはしませんでした。す
ると、静寂が訪れました。
すると、「書きなさい、わが娘よ」という声が聞こえまし
た。そして再び静寂が訪れました。
これから何が起こるのだろう、と思いました。
すると、さらにこう聞こえてきた。「今月、お前の義母を私の元へ迎え入れる。彼女のために祈りなさい。」

私：「はい、主よ、彼女のために祈ります。」
私：「主よ、これ以上お尋ねすることはありません。あなたは慈愛に満ち、憐れみ深いお方です。私は何よりもあなたを愛しています。」
再び静寂が訪れた。
突然、私の右目から大きな涙が一筋こぼれ落ちた。これはどういう意味なのか、これから何が起こるのだろうと思った。
すると、こう聞こえてきた。
「書き記せ、わが娘よ。『セルビアでも戦争が起こるだろう』と。」私：「それは悲しいことですね、主よ。」
私は尋ねました。「私の故郷は破壊されてしまうのでしょうか？」
そのとき、私はベオグラードとパンチェヴォという二つの大都市のことを思い浮かべた。救い主：「そのようになるだろう。」
私：「主よ、神様、私はどうすればよいのでしょうか？」救い主：
「たくさん祈りなさい。」
私：「主よ、もう何のために祈ればいいのか分かりません。あまりにも多くのことが私の上に降りかかってきます。」私：「それはいつのことになるのでしょうか、主よ、神よ？」
救い主：「書き記しなさい、わが娘よ。それは近い将来のことだ。」救い主：「わが娘よ、強くありなさい。」
私：「はい、主よ。あなたがそう望まれるのですから、私は強くあります。」私：「ありがとうございます、主よ、神よ。」

教会で二時間半ほどひざまずいて祈った後、私は聖体拝領のミサにも残りました。聖体拝領は、義母のために捧げました。
家に帰ると、夫は私がこんなに長く留守にしていたことに腹を立てていました。私は、彼の母親について聞いたことを彼に話すことはできませんでした。彼は私の話を信じない上、たいてい私に反発してくるので、私は黙っていました。

1992年5月3日 — 日曜日

午前7時30分、自宅にて：
私は祈りを始め、その後、救い主と心を一つにしました。
私は救い主にこう言いました。「どうすればいいのでしょうか？ 故郷でこれから起こることを話せば、みんなは私を信じてくれるでしょう。」
救い主：「書き記しなさい、わが娘よ。彼らはあなたを信じないだろう。」
救い主：「神と和解していない人々は、早急に悔い改めなければならない。そうして初めて、彼らは救われるのだ。」
私：「主よ、神よ、もしベオグラードとパンチェヴォが破壊されたら、それは懲罰の裁きに数えられるのでしょうか？」
救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。」
私：「主よ、この街ではほとんどの赤ちゃんが中絶されてしまいました。」救い主：「その通りだ。」
私：「主よ、私はこの人々のために何かできるでしょうか？」救い主：「ここでは、断食と祈りだけが助けとなる。」
しばらくして、救い主がこうおっしゃるのを聞きました：
「わが娘よ、私はあなたを愛している。私に忠実であり続けなさい。平安のうちに去りなさい。」
私：「愛に満ちた父よ、まだあなたと和解していないすべての人々に、恵みと憐れみと赦しをお与えください。私の主、私の神よ、彼らが失われないよう、彼らを救ってください。私の愛するイエス様、私の魂の導き手よ、あなたの生きた御言葉と、私に与えてくださった多くの恵みに感謝します。」

午前10時、私はロートでの聖体礼儀に参列しました。
聖体礼儀の間、私は苦しみを感じました。子供たちも司祭も、神に対する畏敬の念を全く示していませんでした。午後、私はレツェン

ベルクへの巡礼に行きました。

私はまたしても失望して家路につきました。大聖堂参事会員が説教をしましたが、それは今日の人々が聞くべき内容ではありませんでした。彼はいつも本題を避け、遠回しな話ばかりしていました。

レッツェンベルクの「悲しみの聖母」礼拝堂での祈りを終え、ブドウ畑を降りてきたとき、特に意識もせずに教区司祭館の前で、大聖堂参事会員に出くわした。
私は彼に、「次は私がメジュゴリエについて説教する」と告げた。彼は驚いた様子で私を見た。私は、「もうすぐオスカー大司教のもとへ行くつもりだ」と付け加えた。
彼は私に握手をし、私はその場を後にした。おそらく、彼にはそう伝える必要があったのだろう。家に帰って、私はロザリオを唱えた。その後、マリオンが来て、私たちは日記を書いた。
私たちが日記を書いている間、夫とイルマ、そしてヘドヴィグ・ヘーガーが一緒にロザリオを唱えていました。
今日もまた、悪魔は私の右手首の付け根を激しく刺すような痛みで苦しめました。その場所に聖水を振りかけ、魂の救いのためにその痛みを捧げるたびに、痛みは消えていきます。

1992年5月4日（月）

10時から11時の間、私はクリニックの歯科用椅子に座って心を込めて祈りました。
12:00、クリニックの礼拝堂にて：
祈りの後、ファティマの祈りやその他の祈りを心から捧げました。
昨日、教会で子供たちが祭壇の周りで踊っていた時にひどく苦しんだので、私は救い主に尋ねました。
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。祭壇の周りでそのようなことをするのはふさわしくない。そこは犠牲の祭壇なのだ。そうすることで、司祭は子供たちから畏敬の念を奪ってしまうだろう。」
私：「昨日の午後、レツェンベルクでの説教も気に入りませんでした。」救い主：「その説教は今の時代にふさわしくない。」
私：「私が聞いただけで十分です。」すると、深い静寂が訪れた。
すると、救い主がこうおっしゃるのを聞いた。
「書き記せ、わが娘よ――」沈黙――「お前は行かなければならない」――沈黙――「これから何が起こるのか、お前は知らないだろう?」
私：「主よ、神よ」――沈黙――「偉大なる神、聖なる神よ、私はどこへ行けばよいのでしょうか。しかし、お教えになる前に、私の恐怖と人への恐れを取り除き、あなたの御心に従い、それを成し遂げられるよう、恵みをお与えください。」
救い主：「あなたはコール連邦首相のもとへ行かなければならない。彼は国民に祈りを呼びかけなければならない。」私：「もし彼が『なぜ? 』と尋ねたら、私は何と言えばいいのですか? 」
救い主：「戦争がやってくると伝えなさい。」
私：「ベオグラードとパンチェヴォが破壊されることも伝えるべきでしょうか? 」 救い主：「そう、そう書きなさい。彼にそう伝えなければならない。」
私：「主よ、それはとても重大なことです。」救い主：「そうしなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、そういたします。主よ、御心が行われますように。」私：「いつ出発すればよいのですか? 」
救い主：「できる限り早く行きなさい。」
私：「主よ、私が彼のところへ行ったら、彼は私の話に耳を傾けてくれるでしょうか? 」 救い主：「ええ、彼はあなたの話に耳を傾けてくれるでしょう。」
私：「そうします。どうか、それを実行するために必要な恵みと、あらゆるものを与えてください。」
すると、救い主の声が聞こえました。「私はあなたを愛している。ありがとう、私の娘よ。平安のうちに去りなさい。」

ホルガーは礼拝堂で私の隣にいて、私が書き留める様子を見守っていました。
私は救い主から託されたことを彼に話すと、彼は私が連邦首相に会うための方法を思いつかせてくれました。

ルートヴィヒスハーフェンにはマリア修道院があり、彼の息子たちもそこに通っている。私はすぐにステファン神父のことも思い出したが、彼は今ケルン近郊にいる。フリドリンが彼の電話番号を持っていることだけは知っている。
その後、私は救い主に、この道が正しいかどうか尋ねた。救い主：「ええ、娘よ
、その方法でもよいのだ。」
私：「まだ何か書き留めておくべきでしょうか、それとも、あなたが望まれる通りでよろしいですか？」救い主：「
娘よ、その通りだ。」

休憩時間は終わりました。外の新鮮な空気を吸うこともできず、すぐに仕事を再開しました。
18時15分、ランダースホーフェンにいたフリドリンから、ケルンのステファン神父の電話番号を教えてもらった：0221—214535 - 聖コロンバ教会。
その番号に3回かけてみたが、誰も電話に出なかった。
18時40分、ピルマゼンスとその周辺から6人が私のところへやって来た。私たちは一緒にミンゴルスハイムのロクス礼拝堂へ向かい、そこで聖ミサに参列した。ロートではミサが行われていなかったからだ。私は彼らに、私たち全員がコール連邦首相とその家族のために聖ミサを捧げなければならないと伝えた。そうしたのは私たち7人だった。
帰宅後、約15分後に祈りの集いに参加しました。今日ほど多くの人が祈りに集まったことはかつてありませんでした。当時ロクス礼拝堂に滞在していたゼルナー神父も来ていました。
私たちは熱心に祈りました。最後に、信者たちは満足した様子で帰っていきました。神父様は最初、祝福を与えることを拒まれました。
その後、私にいくつかの質問をされ、その後にようやく私たち全員に素晴らしい祝福を与えてくださいました。
祈りの集いにほぼ毎回参加している信者のトニは、私たちが祝福を請うた際、神父様が最初はそれを拒まれたことに腹を立て、少し気分を害していました。
彼は、「聖母マリアがすでに私たちに祝福を与えてくださった」と言いました。私は「ええ、そう
信じますし、その通りです」と答えました。
それでも、私がもう一度お願いしたにもかかわらず、神父は私たちに祝福を与えてくれませんでした。
するとトニは、「それじゃ、あの人も本物の司祭じゃないね」と言いました。
神父は、上の方から誰が話しているのか、聖人なのかと尋ねました。というのも、席がなくなっていたため、トニは上の階へ続く階段に座っていたからです。トニは「ええ、アントニウスだよ」と答えました。

1992年5月5日 - 火曜日

10時、医師室にて：
祈りの後、私は救い主と心を一つにした。昨晩、祈りの集いに訪ねてきた神父のことについて尋ねた。
救い主：「それは誘惑だった。」
私：「試練とはどういう意味ですか？ あなたは『手による聖体拝領は廃止されるべきだ』とおっしゃいますが、その神父は『司教たちの言うことを聞かなければならない』と言っているのですから。」
救い主：「私があなたに授けたことに、しっかりと固執しなさい。」私：「主よ、それはあまりにも曖昧です。」
救い主：「私があなたに授けた私の言葉は、生きた言葉なのだ。」私：「それはどういう意味ですか？」
救い主：「その言葉は残り、誰もそれを消してはならない。」私：「司教たちはきっ
とそれを消してしまうでしょう。」
救い主：「しかし、神の恵みの中に生きる司教たちはそうはしない。」私：「トニは正しく行
動したのでしょうか？」
救い主：「私はそれを許したのだ。」
私：「それはどういう意味でしょうか、私の霊的指導者よ？」
救い主：「司祭は、求められれば常に祝福を与えなければならない。」

私は、ステファン神父に電話で連絡がつかなかったことを話した。救い主：「手紙を書け、わ
が娘よ。修道院へ行きなさい。」
私：「それはどこにあるのですか? ルートヴィヒスハーフェンですか、それとも
オッガースハイムですか? 」救い主：「オッガースハイムだ。」
救い主：「そこで、君をコール連邦首相と最も早く結びつけてくれる神父に出会うだろう。」
私：「首相の息子たちを経由する必要はないのですか? 」救い主：「その神父の
言うことをよく聞きなさい。」
私：「その神父様は、私が行くことをご存知ですか? 」救い主：「ええ、ご存知
です。」
私：「いつそこへ行けばいいのですか? 」 救い主
：「今日中に行け。」
私：「なぜ私がコール連邦首相に会わなければならないのか、その神父に伝えるべきでしょうか、それとも黙っておくべきでしょうか? 」
救い主：「なぜ彼と話さなければならないのか、その理由を告げなさい。」
私：「主よ、神よ。おっしゃった通りにいたします。主よ、御心が行われますように。しかし、慈悲深い神よ、私が道に迷わない
よう、どうか私を導いてください。そして、御心を果たせるよう、恵みをお与えください。」
それから私はこう付け加えました。「これからどうなるかは、すべて神の御手に委ねます。そのことについては、心
配しません。」
救い主：「いいえ。わが娘よ、そのことについては心配する必要はない。」
私は夫のことを尋ねました。昨日、また不浄な霊が彼にまとわりついているのを感じたからです。私が勘違いしていたのか、
それとも、単に思い込みだったのかと尋ねました。
救い主：「不浄な霊たちは、あなたが思っている以上にあなたの周りにいるのだ。」私：「私は常に
誘惑にさらされているのです。」
救い主：「そう、あなたは常に警戒していなければならない。」
私：「主よ、あなたなしでは私は失われてしまいます。」
救い主：「その通りだ。しかし、私と共にある限り、あなたは決して迷うことはない。」
私：「これほどたくさんお尋ねしてしまった後ですが、まだ何か書き留めるべきことはありますか? 」
救い主：「娘よ、私に尋ねてくれてありがとう。平安のうちに去りなさい、愛しい娘よ。」

12時15分、礼拝堂にて：
礼拝堂に入る前、私は迷いを感じていた。修道院がルートヴィヒスハーフェンにあると、何か間違って書き留めてしまったのではない
かと思っていたのだ。救い主がオッガースハイムにあるとおっしゃっていたので、少し混乱していた。
私が礼拝堂に入ると、ちょうどその頃、ホルガーも祈りにやって来た。
私は、まだよく分からないことがあるので、もう一度救い主に尋ねなければならないと彼に伝えました。それから、修道院が正
確にどこにあるのか、彼が知っているかどうか尋ねました。
彼は「オッガースハイムだ」と言いました。
そこで私は、それならもう救い主に尋ねる必要はない、と伝えました。つまり、この混乱は、救い主が私に告げる事柄とは常に正反対
のことを囁こうとする、不浄な霊によるものだったのです。
私は少しの間祈り、救い主と心を一つにしました。
私は救い主に尋ねました。というのも、右手の甲に、まるで鋭いナイフで刺されたような鋭い痛みを頻繁に感じるからです。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。不浄な霊は、もしあなたが許せば、あなたに聖痕を刻み込もうとしている。しかし、それは私の御心で
はない。」
私：「なぜ、彼はそんなことをするのですか? 」
救い主：「私があなたに授けるものに対して、あなたがより早く屈服するようにするためだ。」私
：「でも、それは不快な痛みです。どうすればいいのですか? 」救い主：「娘よ、あなたはこれま
で正しく行動してきた。たくさん祈りなさい。」

私：「主よ、私がたくさん祈れば、彼はさらに激しく私を攻撃してくるでしょう。」救い主：「しかし、彼は弱まっていくのだ。」
私：「ありがとうございます、神様。もう仕事に行かなくてはなりません。」救い主：「愛しているよ、わが娘よ。平安のうちに去りなさい。」

16時：仕事が終わるとすぐに、私はルートヴィヒスハーフェンへ向かった。車中で、これから会う神父様のために、すでにロザリオを唱えていた。 道は全く知らなかったが、オッガースハイムの教会へと導かれた。教会の中には、聖櫃の前で祈っている男性が一人いただけだった。私が少し祈った後、救い主に「これからどうすればよいのか」と尋ねた。
救い主：「行きなさい。私があなたに示してあげる。」
私は教会を出ると、さっきまで聖櫃の前でひざまずいていたその男性が、すでに私の後ろにいました。私は彼に、ここに修道院はあるかと尋ねました。
その男性は「ここだ」と言い、私の目の前の建物を指さしました。そこで、私はそれが女子修道院なのか男子修道院なのか尋ねました。男性はただ「男子だ」とだけ答えました。
私は修道院の中に入り、玄関ホールで聖フランシスコの絵を見かけました。そこで私はすぐに聖フランシスコに向かって『主の祈り』、『アヴェ・マリア』、『栄光あれ』を唱え、適切な神父を呼んでくれるようお願いしました。
一人の神父がやって来たので、私は声をかけた。私たちは面談室へと向かった。
最初は二人とも黙ったままで、私はしばらく祈りにふけり、この神父が正しい人物かどうか確かめました。すると、救い主の声が聞こえました。「彼と話せ。」
その神父も謙虚な方だったので、私は気兼ねなく話すことができ、彼が持つ平安を感じました。私はそこで聖体祭に参列しました。聖体拝領の後、救い主の声が聞こえました。「その判断は正しかった、わが娘よ。」
私は、その神父様、コール首相、そして義母のために、聖体拝領を捧げました。
帰宅途中、車の中で再び、その神父様の願いのためにロザリオを唱えました。
その神父に、連邦首相との面会の機会を設けてくれるようお願いしたほか、ロシアから迫り来る戦争や、廃止されようとしている手での聖体拝領についても祈りました。

1992年5月6日 —水曜日

8時30分から11時30分まで、私はクリニックの歯科用椅子にずっと横たわっていました。
歯に詰め物をしてもらった。心の中で絶え間なく祈り、心から祈りを捧げた。麻酔注射は打たずに、多くの願い、とりわけこの耳鼻咽喉科クリニックで働いていたが、この数日前に自動車事故で亡くなったH. エベルト博士のために、その痛みを捧げた。
私を治療してくれた二人の歯科医も、徐々に回心していきました。そのうちのひとりに、以前、告解に行くよう勧めたことがありました。
歯科治療を終えた後、私は職場に戻り、2時間にわたって患者のレントゲン撮影を行いました。
13時30分、私は礼拝堂へ向かいました。もはや救い主に質問をするつもりはありませんでしたが、救い主と一つになりたいという切なる願いを抱いていました。
私は心から祈ると、救い主の声が聞こえました。「書き記せ、わが娘よ。」私は答えました。「はい、主よ、神よ、愛するイエス様、私の霊的導き手よ、書き記します。しかし、どうか私に恵みと守りを与えてください。そうして、あなたが私に望まれることを成し遂げられるよう、恵みと守りを与えてください。」
救い主：「あなたは行かなければならない」——沈黙——「わが娘よ」——沈黙——」
私：「偉大なる神よ、聖なる神よ、どこへ？」（心の中では、これから何が起こるのかと、とてもワクワクしていました。）
救い主：「連邦首相、H・コールのもとへ、できるだけ早く。」

私：「主よ、神よ、私はすでにヨアキム神父に、H・コール氏と話さなければならないと申し上げました。」
救い主：「彼が君に電話をかけてくるだろう。」
私：「では、彼が電話をかけてくるまで待たなければならないので
すか？」 救い主：「そう、待て。」
私：「他に何か言うべきことはありますか？」救い主：「私
が君に言ったことだけだ。」私：「戦争が来るということで
すね。」
救い主：「そう、戦争が間もなく起こるということだ。」
私：「そして、あなたは、彼が民に祈りを呼びかけるとおっしゃいましたね。」救い主：「そ
う、彼はそうしなければならない。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。あなたたちは非常に大きな危険にさらされている。その危険はロシアの方からやってくる。」
私：「『あなたたち』とは誰のことですか？」
救い主：「ヨーロッパの人々だ。」
私：「あなたから、この戦争によって危険にさらされるのはドイツだけだと伺いました。」救い主：「皆が危険にさ
らされているのだ。」
私：「ああ、主よ、私はこれを書き留めることができません。私にはあまりにも複雑すぎます。主よ、私の神よ、ヨアヒム神父
から、連邦首相のH・コール氏と面会できる日程をいただけますか？」
救い主：「書きなさい、娘よ。神父から面会の約束が得られるでしょう。そうすれば、連邦首相のH・コール氏に会いに行くことができます。」
私：「はい、主よ、わかりました。主よ、御心が行われますように。」
私：「主よ、神よ、私はあなたをとても愛しています。あなたが私に命じることは何でもする覚悟があります
。」
救い主：「わが娘よ、今日はこれで十分だ。平安のうちに帰りなさい。」

午後3時頃、私は初めて、1992年4月25日のメジュゴリエからの「平和の女王」によるメッセージを読みました。私は驚きました
。その内容に深く感銘を受けたため、ここでその最後の部分を書き留めておかなければなりません。
「メジュゴリエは、あなた方すべてに対するしるしであり、祈り、神が与えてくださる恵みの日々を生きるよう呼びかけるものです
。ですから、愛する子供たちよ、この祈りの呼びかけを真剣に受け止めてください。」
夕方、私はミンゴルスハイムのロクス礼拝堂へ行きました。そこで告解をしました。聖体拝領は、いくつかの願いの
ために捧げました。

1992年5月7日 - 木曜日

ミンゴルスハイムの神父によるミサは気に入らなかった。いくつかの点が真の信仰に反している。そこで私は救い主に尋ねた：
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。そのような司祭たちには気をつけなさい。」私：「親愛なる
父よ、『そのような司祭たち』とはどういう意味ですか？」救い主：「聖父の教えを歪曲する者たちのこと
だ。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。司祭は聖なる父に従順でなければならない。」私：「私はまた、ロクスクリニッ
クでゼルナー神父と話すことになるのでしょうか？」救い主：「そう、あなたは彼ともう一度話すことになるだろう。」
救い主：「わが娘よ、私に忠実であり続けなさい。私があなたに授けたことに従いなさい。」
私が救い主に祈り、願い求めていることすべてを書き留めることはできません。しかし、私は救い主が、例えば、ペトロが水の上を
歩き、救い主が向かい合って水の上に立っていたような、そのような信仰を私に与えてくださるよう、たくさん祈っていることも分
かっています。
私は救い主にこう言いました。「迷いが生じたとき、水の中に沈んでしまいたくないのです。水の上を歩いてあなたのところへ
たどり着けるような信仰を持ちたいのです。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。私はあなたに生きた信仰を授ける。」私：「それを書き留めればいい
のですか？」

救い主：「そう。」
救い主はさらにこうおっしゃいました。「この信仰は、私があなたに贈る贈り物だ。」
私：「主よ、それは私が望むことのできる最も素晴らしい贈り物です。
これほどのことには、いくら感謝しても足りません。でも主よ、こんなものをくださるということは、きっと私に多くのことを求めておられるのでしょう？」
救い主：「そう、わが娘よ、私はこれからあなたにそれを求めるつもりだ。」
私：「主よ、神よ、私はあなたが私に求めることなら何でもする覚悟があります。主よ、あなたの御心が行われますように
。」
私は救い主に、これから仕事に行かなければならないと伝えました。救い主：「後で
私のところに来て、私に尋ねなさい。」

12時15分～13時00分、病院の礼拝堂にて：
私は祈り、それから救い主と心を一つにしました。私：「生きた信仰とは何
ですか？」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。あなたには私がおり、私があなたの信仰そのものである。」私：
「それはなんて素晴らしいことでしょう。心から感謝いたします。」
私：「すべての王の王よ、愛に満ちた父よ、私に何を求めておられるのですか？
不可能なことを求めておられるわけではないと分かっています。もしお望みなら、喜んで書き留めます。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私はお前から、お前の命を求めよう。」私：「わが主、わが神、
わがイエスよ、私はそれをあなたに捧げます。」
私：「なぜ私の命を求められますのですか？私はすでにあなたに捧げました。」救い主：「あなたは私に捧げた
が、私はまだあなたにそれを求めてはいなかった。」
私：「主よ、神よ、もうこれ以上お尋ねすることはいたしません。これは理解しがたいことです。もしこれについて知るべきこ
とがあれば、あなたが教えてください。」
救い主：「私はあなたの命そのものである。書き記せ、わが娘よ。」私：「
主よ、神よ、何を書き記せばよいのですか？」救い主：「私があなたの命を
定める。」
私：「はい、主よ。あなたの御心通りにしましょう。私はあなたの前では無に等しく、聖母マリアを通してのみ、あなたは私を
お受け取りになることができます。」
救い主：「そう、わが娘よ、それは私の心にかなう。」 救い主：「愛す
る娘よ、平安のうちに去りなさい。」

夕方、私はミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で聖なるミサに参加しました。聖体拝領は、貧しい魂
たちのために捧げました。

1992年5月8日 - 金曜日

10時、医師室にて：
祈りの後、私は救い主と心を一つにし、こう尋ねました。
「昨日、あなたは『私があなたの人生を決定する』とおっしゃいましたが、もしよろしければ、それについてもう少し教えてい
ただけますか？」
救い主：「あなたがするすべてのことは、私の業である。」
13時00分、病院の礼拝堂にて：
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、書き留めます。主よ、御心が行われますように。」救い主：「あなたはオッガー
スハイムにいる神父のもとへ行かなければならない。」
私：「もしかして、別の神父さんのところへ？」救い主：「オッガ
ースハイムへ、その神父さんのところへ。」

私：「最初はレーゲンスブルクのゲブハルト神父のところへ行きたかったのですが。」救い主
：「まずはオッガースハイムの神父のところへ行きなさい。」
私：「その神父様が私に電話をくれるとおっしゃいましたよね。」
救い主：「ええ、そうするでしょう。」
私：「あとは、いつになるかという問題だけですね？」救い主：「
今週末だ。」

私：「主よ、神よ、行きます。主よ、御心が行われますように。」私：「何か書き留めておくべきことはありますか？」

救い主：「娘よ、それは後でまた私に尋ねなさい。」

それから、礼拝堂の外のホールに掛けられていた時計を見ると、昼休みの時間をすでに30分も過ぎていたことに気づいた。救い主と一つになっていると、時間はあっという間に過ぎてしまうものだ。

15時30分：

私：「主よ、神よ、私が神父たちのところへ行ったら、彼らは私を信じてくれるでしょうか？」 救い主：「いいえ、わが娘よ、彼らは疑っている。」

私：「彼らが疑っているのなら、なぜ私が彼らのところへ行かなければならないのですか。私には理解できません。」救い主：「わが娘よ、彼らには、私を聞くための、あなたのような開かれた心がないのだ。わが娘よ、私の声によく耳を傾けなさい。」

私：「主よ、神よ、私が神父たちに話すことは、すべてあなたの御手に委ねます。」

救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。」

私：「神父たちと話しても、何ができるのでしょうか？」

救い主：「できるだけ早く、ヘルムート・コール連邦首相と話すことになるのだ。」私：「親愛なる救い主よ、まだ何か書き留めるべきでしょうか、それともこれで十分でしょうか？」

救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。神父たちに、私がこの戦争を真剣に考えていることを伝えてください。わが娘よ、私に忠実であり続けなさい。平安のうちに去りなさい。」

1992年5月9日 — 土曜日

7時15分、ヴァーハウゼルでの聖体祭。

その後、13:00までマリオンと一緒に過ごし、私たちは日記を書いた。16:15から17:30まで、ロートの教会で祈った。

夕方、悪魔が私に対して、具体的には夫を通じて猛烈に攻撃してきた。またたくさん祈らなければならなかった。その後、静けさが戻った。

1992年5月10日 — 日曜日

聖体ミサの前に祈りを捧げました。

10時、ロートで聖ミサがあり、私はそれに出席した。

14時30分頃、試練に襲われました。30分ほど祈ろうとしたのですが、できませんでした。私はソファに横たわっていました。そこで、救い主に助けを懇願しました。すると、「行け、わが娘よ、私の言うことを行いなさい。悲しみのロザリオを祈りなさい」という声が聞こえました。

突然力が湧いてきて、すぐにロザリオを2回と連祷を1回唱えました。16時50分頃、私は救い主と一つになりました。

私：「『彼女たちから電話がかかってくる』とおっしゃいましたね。」救い主：「そう言った。」

私：「あなたは誰ですか、私？」

救い主：「お前のイエスだ、わが娘よ。サタンは修道院を支配している。今後の展開について私が告げるまで待て。ヨアキム神父が連絡してくるだろう。彼女たちのために祈り続けなさい、わが娘よ。」

夕方、マリアへの祈りの会。

1992年5月11日 - 月曜日

正午、礼拝堂にて 12:00：

セルビアでの戦争について、私が何か聞き間違いをしたのか知りたかった。救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。セルビアでの戦争は起こり、ベオグラードとその周辺は破壊されるだろう。」

それから、義母のことに関して、悪の勢力が介入していたのかどうか知りたかった。もう一度確かめたかったので、救い主に尋ねた。救い主：「わが娘よ、お前の義母は今月、天に召されるだろう。」

救い主：「ヨアキム神父が君に電話をかけてくるだろう。準備をしておきなさい。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私はこの地上に懲らしめをもたらさなければならない。」私は尋ねました。「『私
』とは、一体誰のことですか？」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私は三位一体の神、父なる神、子なる神、聖霊なる神である。」
私：「主よ、神よ、それ（懲らしめ）によって、あなたは何を成し遂げようとしているのですか？」
救い主：「わたしに忠実な魂たちだ。」
私：「他に何か書き留めるべきことはありますか？」
救い主：「娘よ、もう十分だ。平安のうちに去りなさい。」

祈りの会には非常に多くの人々が集まりました。ヴァーグハウゼルから来られたベルトルト神父が、一人ひとりに初ミサの祝福を授けてくださいました。祝福を含め、私たちの祈りは3時間強に及びました。この予期せぬ祝福を、神に感謝します。

1992年5月12日 - 火曜日

医師の診察室：
私は救い主に、懲らしめについてもう一度尋ねました。
救い主：「懲らしめは、人々が自分たちがどの父に属しているかを認識するために必要なのだ。なぜなら、彼らは父を選ぶ必要があるからだ。」

仕事が忙しく、礼拝堂に着いたのは15時になってからでした。
突然体調を崩してしまったミンゴルスハイムのゼルナー神父のもとへ行くべきかどうか、救い主に尋ねた。
救い主：「行け、わが娘よ、彼のところへ行きなさい。」私：「何
と言えばいいのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。彼には、私がエンツ学部長にも求めているのと同じことをする
ように伝えなさい。そうすれば、彼は私に大きな喜びを与えてくれるだろう、と伝えてくれ。」私：「はい、
主よ、神様、彼にそうお伝えします。」
救い主：「私はあなたを愛している、わが娘よ。平安のうちにそこへ行きなさい。」

今日は夫の誕生日でした。
私はロートの教会で聖体礼儀に参列しました。
息子は今日、シュトゥットガルトで手術を受けました。緊急の手術でした。私たち7人
で集まり、彼のために祈りました。

1992年5月13日 - 水曜日

12時、礼拝堂にて：
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、書き留めます。」救い主：「あなたの息子は無
事になるでしょう。」しばらくして：
救い主：「書き記せ、わが娘よ。スロバキアは危機に瀕している。その危機はすぐそこまで迫っている。ロシアによる戦争
がスロバキアに及ぶだろう。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。」 私：「はい、
主よ、神よ。」 救い主：「行きなさい。」
- 静寂と安らぎが訪れた。私：「誰のところへ行けばいいのですか？」 救い主：「
ヨアキム神父のところへ。」
私：「彼は私を呼びませんでした。なぜ彼は私を呼び出さなかったのですか？主よ、神よ、愛するイエス様、そして私の霊的指
導者よ、あなたはご存知ですよね？」
私：「でも、もしあなたが愛する神様なら、『ビバ・イエスとマリア』と言ってください。」救い主：「『ビバ・イ
エスとマリア』と書きなさい。」

私：「なぜヨアキム神父は呼びかけてくれなかったのですか？」　救い主：「彼には生きた信仰が欠けているからだ。」

救い主：「わが娘よ、あなたは明日自分がどうなっているか分からないのだ。」私：「わかりました
。いつ神父様のところへ行けばいいのですか？」
救い主：「今日、行け。」
私：「私が行ったら、ヨアキム神父はそこにいますか？」　救い主：「ええ、娘
よ、彼はそこにいるだろう。」
私：「主よ、神様、彼はまだ私と話してくれるでしょうか？」救い主：「ええ、
彼はあなたと話してくれるでしょう。」
私：「彼に何と言えばいいのですか？」
救い主：「私がこの戦争を真剣に考えていること、そして、あなたがコール連邦首相と連絡を取れるよう、神父が至急手配しなければならないことを伝えてください。そうすれば、あなたも彼と
話せるように、彼と連絡を取らなければならないと伝えなさい。」
私：「なぜ『至急』なのですか？」
救い主：「罪の重みが勝っているからだ。」私：「もし彼が『それ
はできない』と言ったら？」
救い主：「それなら、娘よ、お前の役目は果たされたのだ。」
私：「主よ、私の神よ、私の魂の導き手よ、でも、彼がそうするかどうかは、あなたはあらかじめご存知ですよね。」
私：「それに、あなたは『戦争はもう止められない』とおっしゃいました。そして戦争はやってきます。それなら、なぜ私が彼のところへ行かなければならないのですか？」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。わたしに属する魂たちは救われなければならない。」私：「親愛なる救い主よ、あなたからのものであり、あなたが私を遣わしたことを示すしるしを、私に与えていただけませんか？」
救い主：「はい、わが娘よ、与えよう。」私：「それは何ですか？
」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。ヨアキム神父が、君を驚かせるようなものを君に与えるだろう。」
私：「良いことでしょうか、それとも悪いことでしょうか？」 救
い主：「良いことだ。」
私：「主よ、神よ、私はヨアキム神父のもとへ行きます。主よ、御心が行われますように。」

私はヴェレーナと一緒にオッガースハイムにいました。それは、ヴィースロッホのエンツ教区長を訪ねた時と同じような状況でした。修道院の前で待っていると、不浄な霊に取り憑かれた男が私の前に立ちはだかりました。彼は私を引き裂きたいとばかりに迫ってきました。
ロザリオの第三の神秘を唱え終えてようやく、扉が開いた。
私は、ヨアキム神父とお話ししたいと伝えた。最初に別の神父が出てきて、私はその神父にも、救い主が望んでおられることを話した。
その後、ヨアヒム神父がやって来て、私たちは話を交わしました。最後に、ヨアヒム神父は、警察の協力を得て、私がコール氏のもとへ行けるよう手配しようと述べました。
私は18時40分に修道院を出た。
19時25分には、すでにミンゴルスハイムのロクス礼拝堂にいました。オッガースハイムではもうミサが終わっていたため、そこで聖なるミサに参列しました。
夜21時30分、エーリッヒが私のところに来て、宣教師のゼルナー神父が
私のところの祈りの集いに参加していた際、2度も「自分は一体どこに迷い込んでしまったのか」と尋ねていたと教えてくれた。
祈りの集まりでは、祈りの最中に眠ってしまっていたそうです。この夜、私たちは聖母マリア
の連祷も捧げました。

1992年5月14日 - 木曜日

私は、昨日修道院から現れた男について尋ねました。救い主：「そう、わが娘よ、それは不浄
な霊だったのだ。」

救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。神父たちは、私がヨアキム神父にあなたについて勧めたことを実行するだろう。」

私：「それでは、私はコール連邦首相とお話しすることになるのでしょうか？」

救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。今後数日のうちに、いくつかの大災害が起こるだろう。」
私：「それについて何か教えてください。」救い
主：「祈りなさい、わが娘よ。」
私：「祈ります。ありがとうございます、主よ、神よ。」
私はミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で聖体礼儀に参列した

2022年5月15日（金）

午前10時30分、医師室にて：
救い主：「書き記せ、わが娘よ。戦争はすぐそこまで迫っている。司祭、ヴォクト神父のもとへ行きなさい。もう一度、彼のところへ行きなさい。今日中に行きなさい。司祭たちは信者たちと共にロザリオを唱えるべきだ。」

11時20分頃、私はもう一度尋ねました。救い主：「書き記
せ、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、神よ、お聞きします。」
救い主：「司祭、ヴォクト神父のところへ行きなさい。彼は聖ミサの前にロザリオを唱えるべきだ。」
私：「神様、私はもう彼にそう伝えました。」
救い主：「知っている、わが娘よ。もう一度、彼のところへ行かなければならない。」私：「もし彼
が『なぜ？』と尋ねたら？」
救い主：「戦争がすぐそこまで来ていると伝えなさい。」私：「主よ、
神様、彼は私の言うことを信じてくれません。」救い主：「それでも、
あなたは彼のところへ行かなければならない。」
私：「ロザリオのこと以外に、彼に何か言うべきでしょうか？」救い主：「書きなさい、わが娘よ。
そうすれば、彼は苦しみから免れるのだ。」
私：「でも、それは言いづらいです。別のことを言ってもいいでしょうか。でも、あなたがそう望まれるなら、彼にそう伝えます。」
救い主：「彼にそう伝えてほしい。」私：「はい、主よ。
それはどういうことですか？」
救い主：「私に対する不従順は、司祭に降りかかることのできる最大の悪である。」

午後12時30分、礼拝堂にて：

私は救い主にこう言いました。「神様、それはさらに辛いことです。それに、その司祭が私のことを信じてくれないと分かっているので、彼のもとへ行くのは辛いのです。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。私がその罪を隠しておくことがこれほど辛いのは、私があなた方全員を愛して
いるからだ。」
救い主：「そうしなさい、わが娘よ、行ってきなさい。」
私：「はい、主よ。それがあなたの御心ですから、そうします。でも、私にはとても辛いことです。」救い主：「ありがとう、わが娘よ。私はあなたを愛している。平安のうちにそこへ行きなさい。」

14時30分：私は、彼がどのようにロザリオを祈ればよいのか分からなかった。

救い主：「書き記せ、わが娘よ。司祭は信者たちと共にロザリオを祈り、先導して祈るべきだ。」
私：「あなたは私と一緒に来てくださいますか？」
救い主：「ええ、私はあなたと一緒に歩む。」
私は少し驚いて、主がどうやって私の隣を歩いてくださるのか尋ねました。主が見えないのに、どうやって私の隣を歩こうとされるのかと思い、驚いたのです。」
救い主：「私はあなたと共に歩き、あなたと共にいる。」私：「それが
理解できません。」
私：「主よ、私がその司祭のところへ行くべきだなんて、私には理解できません。だって、あなたは、彼が神の恵みの中にいないとおっしゃいましたから。」
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。私はどの司祭に対しても、その救いを求めているのだ。」私：「親愛なる神様、

もう何もお尋ねしません。私は彼のところへ行きます。」

赤の教会で聖体拝領を受けた後：
救い主：「行きなさい、わが娘よ、彼のところへ行きなさい。」
19時45分頃、私はフォクト神父のもとを訪れました。私は、救い主が私に言われたことを神父に伝えました。フォクト神父は、それを書き留める必要があるのかと尋ねました。
私：「あなたはミサを捧げなければなりませんか？」
フォクト神父：「それが私の仕事だからです。」私
：「私にとっては、それが神の御心なのです。」
フォクト神父は、救い主が私にそれを書き留めるよう言われたのかと尋ねました。
私は彼にこう答えました。「はい、すべて日記に書いてありますが、主は私がそれを読み上げることを望んでおられません。」ヴォクト神父は、「主が私に何かささやいてくださることもあるでしょう」と言いました。
それから、彼は私に「教区長のもとへ行ったか」と尋ねました。私は
「はい、また嘘をつきました」と答えました。
フォクト牧師は笑いました。
それから私は、エンツ学部長のもとを訪れた際に何が起きたかを彼に話した。ヴォクト牧師はそれを聞いていた。
またしても、ヴォクト牧師のところを訪ねたのは無駄だったような気がした。あの笑い声の背後には、何か深刻なことが隠されているような気がする。私にできることはすべてやった。あとはすべて神の御手に委ねる。
部屋を出て牧師館の廊下に立つと、装飾として魔女がまだ天井からぶら下がっているのが見えた。
2年前にコールグルブで療養していた時、ある女性医師の診療室にも魔女が吊るされていたことを思い出した。私はその医師に、それは良くないことだと説明したところ、彼女は魔女を取り外してくれた。彼女は私を自宅に招待してくれ、私は自分の回心について話した。
もし私がヴォクト牧師にそう言ったら、彼もあの魔女を取り外してくれるだろうか、と私は思った。

1992年5月16日 — 土曜日

夜、1時30分から2時30分まで祈りを捧げました。
7時15分、ヴァーハウゼルの教会でミサ。
16時00分：シュトゥットガルトにいる息子を訪ねた。
18時30分、ロートの教会で聖体ミサに参加した。
18時40分頃、聖母マリアの願いのために、私自身と家族をイエスとマリアの聖心に奉献した。

1992年5月17日 — 日曜日

7時15分から8時50分まで祈り、救い主と心を一つにした。救い主：「書き記せ、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、神よ。偉大なる神、聖なる神よ、書き留めます。戦争で亡くなった多くの人々や負傷者、そして司祭たちのことを思うと、涙が止まりません。」
今ほど司祭たちに失望したことはかつてありませんでした。救い主：「書き記せ、わ
が娘よ。」
私：「はい、主よ。何を書き留めればよいのでしょうか？」しばら
くして：
私：「まだ、何を書けばいいのか分かりません。」救い主：「あなたにしるしを与えよう。」
私：「いつ、どこで？」　救い主：「
教会で。」
私：「正しく聞き取れましたか？」　救い主：「
そう、教会でだ。」
私：「それによって、教会にいる信者たちは回心するのでしょうか？」 救い主：「はい、彼らは回心するでしょう。」
私：「でも、教会にいる人たちは、すでに回心しているはずですよね。」

救い主：「いいえ、彼らは皆、立ち返らなければならない。」救い
主：「書き留めなさい、わが娘よ。」
私：「はい、最愛のイエス様。」
救い主：「司祭たちは今、盲目状態に陥っている。わが娘よ、司祭たちのために多く祈らなければならない。」
私：「でも主よ、私がすでに彼らのためにたくさん祈っていることはご存知でしょう。」
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。それは重要なことだ。戦争はすでに始まっている。」私：「主
よ、今はそれが理解できません。ボスニアでの戦争のことですか？」救い主：「すべての人の心の中での戦争
だ。」
私：「私にはそれが全く理解できません。もっと分かりやすく教えていただけませんか？」救い主：「平和を祈りな
さい。」
私：「お願いです、戦争のことについて、もっと分かりやすく教えてください。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。愛のないところには、憎しみしか残らない。わが子よ、戦争はまず心の中で始まるのだ。心が満たされているもので、口は語る。あなたがたの心が清くなるよう、祈りなさい。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。司祭たちは、大いなる殉教へと陥ってしまったのだ。」私：「私はそれを正しく書き記
したでしょうか？」
救い主：「そうだ」
主はすぐにそれをもう一度繰り返された。
私：「主よ、私はこれを書く勇気など全くありません。」救い主：「しかし、あなた
はそれを書いたのだ。」
私：「彼らの殉教の主な理由は何ですか？」救い主：「彼らの不従順だ。」
私：「神様、もう書けません。私には重すぎるのです。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。人々は大きな危険にさらされている。彼らの不従順は度を越している。私はも
はや、この大きな泥沼を黙って見ていることはできない。」
私：「親愛なる神様、どうか私たちを救ってください。」
救い主：「わが娘よ、信じなさい。疑ってはならない。私に忠実であり続けなさい。平安のうちに去りなさい。」私：「主
よ、神様、ありがとうございます。私はあなたに忠実であり続けます。」

追伸：この日の出来事を日記に書き写していたとき（私はまずすべてを原稿に書き留めるようにしている）、30分間、深い眠気に襲われた。心の中で絶えず救い主に祈り続けると、ようやく元に戻った。悪の勢力は、私がこれを書き留めることを望んでいないのだ。
10時に、赤の聖体礼儀に出席した。
15時頃、マリオンが来て、その後アドリアーネもやって来た。私たちは一緒にロザリオを祈った。その後、ルクセンブルクからフリドリンとクロードがやって来た。
私はクロードに自分の回心について話しました。
その後、私たちは教会でマリアの礼拝に参加した。クロードはフリドリンと同じ神学校に通っていたが、司祭たちに失望したため、今は神学校を辞めてしまった。
教会を出た後、私はまた自分の体験について話した。クロードから不浄な霊を感じたが、私の話によって彼が力づけられていることも感じた。
クロードは、以前はよく祈っていたが、司祭たちから「祈りすぎだ」と言われたと私に話してくれた。それ以来、彼は祈るのをやめてしまったが、それ以来、霊的な乾きを感じており、今では神学校を退学してしまった。彼とフリドリンは私たちの家で泊まり、月曜日の午前中に帰っていった。クロードは私の夫に、また来てもいいかと尋ねた。
彼は幸せな気持ちで去っていき、ここで多くの恵みを受けました。

1992年5月18日 - 月曜日

ちょうど8年前の今日、メジュゴリエで聖母が私に現れました。

午前8時45分、職場にて：
救い主が司祭たちについて私に語られたことを理解できていなかったため、私は再び彼に尋ねました。司祭たちが殉教の状態にあるとはど

ういう意味なのかと尋ねました。

救い主：「彼らは私の声に耳を傾けるのではなく、不浄な霊の声に耳を傾けているのだ。」私：「彼らの殉教の理由は何ですか？」
救い主：「彼らの不従順だ！」 私はレ
ントゲン撮影を続けた。
再び一人になったとき、私はレントゲン室で救い主と一つになろうと試みました。救い主：「書き記せ、わが娘よ、あなたは行かなければならない。」
私：「どこへ行くのですか、主よ、神よ。どこへ行くのか分かりません。」
私の心には温もりと平安が満ちていた。その瞬間はとても美しかった。自分は一人ではないと信じられる。愛がそこにある
のだ。
私：「まだ、どこへ行けばいいのか分かりません。」
救い主はそれを告げるのをためらわれました。私は、一体どこへ行くのかと胸を躍らせていました。
私：「『行かなければならない』と聞いたのは、私の気のせいだったのでしょうか。私の心は愛で燃え上がっています。そして、私は忍耐強く待っています。悪もそこにいます。彼は忍耐強くなく、その存在を主張してきます。」
そして、救い主は沈黙している。
救い主は、悪者がどのように待ち伏せているかを私に気づかせてくださる。30分後、10時15
分頃：
救い主：「書き記せ、わが娘よ、お前は行かなければならない。」
— 再び返答なし —
夕方、私はロートにある教会で聖ミサに参加した。

1992年5月19日 — 火曜日

今日で、私が洗礼を受けてから8年が経ちました。

今日、祈りの最中も、教会の中でも、声は聞こえなかった。

1992年5月20日 — 水曜日

救い主：「書き記せ、わが娘よ。」
私：「イエス様、慈悲深い愛よ、何を書き留めればよいのでしょうか。あなたに尋ねたくはありません。あなたはすべてをご存知ですから。ただ、もしそれがあなたの御心であるならば、私は書き留めます。私は罪人であり、あなたの前では塵に過ぎず、他に何者でもないのですから、あなたに尋ねる権利などないと感じています。」
私：「主よ、神よ、あなたが『書き記せ、わが娘よ』とおっしゃったので、書き記す用意はできています。しかし、聖母マリアを通して、そして聖母マリア、神の母の御加護のもとで。」
救い主：「その通りだ、わが娘よ。」
救い主：「わが娘よ、昨日は大きな攻撃があった。」私：「でも、主よ、神よ、それ
は承知しております。」
救い主：「私がそれを許したのだ。サタンはすべてを破壊しようとしている。パトリスさえも、彼の手中にあ
る。」
私は救い主に尋ねようとはしませんでした。救い主：「
もう少し待て、わが娘よ！」 私：「でも、あなたはす
べてをあらかじめご存知ではありませんか。」
救い主：「そう、私はすべてを知っている。だが、お前は『愛の学校』にいるのだ。」
私：「主よ、私の夫にどの不浄な霊が取り憑いていたのか教えてください。そんなことはあり得ないはずでした。だって、夫がいた場所に、ヘイダー神父からいただいた聖別された塩をまいていたのですから。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、神よ、私のイエス様、私の魂の導き手よ。」救い主：「またしても、ルシ
ファーとその一味だったのだ。」
私：「私は絶えず祈っていました。祈りすぎて、息が詰まりそうでした。」救い主：「わが娘よ、諦めてはならない。まだ先が

あるのだ。」

私：「主よ、私が連邦首相のもとへ行かなければならないことが、ルシファーを苛立たせているのでしょうか？」救い主：「わが娘よ、そんなことをまだ尋ねるのか？」

私：「はい、主よ。私は取るに足らない存在だからです。私はあなたにすべてを捧げましたが、私には何も残っていません。」救い主：「書き記しなさい、わが娘よ。私は、ありのままのあなたを愛している。」

私：「ルシファーの攻撃のせいで、私はすべてを間違えているのだと思っていました。」

救い主：「わが娘よ、私に忠実であり続けなさい。誘惑はあなたに降りかかるものなのだ。」
私：「主よ、神様、司祭がほしいのです。今、黙想会に行っていたヴォクト神父はどうなってしまったのですか？」
救い主：「わが娘よ、その黙想会は、私が望むようなものではない。」
私：「主よ、神よ、私はすべてをあなたの御手に委ねます。私を守り、導き、決して一人にしないでください。私は全幅の信頼をあなたの御手に託し、あなたに忠実であり続けます。たとえあなたがそのような誘惑を私に許されたとしても、私はあなたを愛しているからです。」
救い主：「わが娘よ、これからどうなるかについては、後で教えてあげる。今はまだだ。」私：「主よ、感謝します。あなたを愛しています。どうか私をお赦しください。」
救い主：「平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」
私はロクス礼拝堂でミサに参列した。聖体拝領はしなかった。
神父は席に着き、信徒たちに聖体拝領を配らせました。神父はそう望まれたのです。

1992年5月21日 — 木曜日

9時20分、医師室にて：
私は救い主に、今月中に義母を御許へお迎えになるという約束は変わらないのかと尋ねた。（これは試練であった。これについては後で触れる。）
救い主：「はい、わが娘よ、私は今月、義母を天国へお迎えする。」
私：「ノイブルク修道院の神父様は、使徒たちへの私的啓示はすでに完結したとおっしゃっていました。」
救い主：「私的啓示を締めくくることができるのは、世俗の司祭たちだけだ。」私は、ゼールナー神父について尋ねた。彼は聖体拝領を自ら授けず、二人の聖体奉仕者に任せていたからだ。
救い主：「ミンゴルスハイムの神父は、信徒に聖体拝領を配らせてはならなかった。」
私：「どうすればよかったというのですか？　神父様は体調が悪かったのです。」
救い主：「待つべきだった。彼が体調を崩したのは、私によるものではない。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ、よく聞きなさい。あなたは教会で御出現を経験することになる。」私は、自分の耳を疑い、聞き間違いではなかったかと尋ねた。
救い主はもう一度それを繰り返された。
私：「親愛なる救い主様、それはロート、つまり聖レオン・ロートのことですか？」救い主：「そう、ロート、聖レオン・ロートだ。」
私：「お願いです、いつなのか教えてください。それを知ってもいいのでしょうか？」 救い主：「もうすぐだ。」
私：「それが聖母マリアなのか、それとも悪魔なのか、どうやって見分ければいいのですか？」　救い主：「君なら見分けがつく。」
私：「教会にいる他の人たちも彼女を見ることができるのですか？」　救い主：「ええ。」
私：「全員ですか？」　救い主：「ごく一部です。」
私：「ありがとうございます、主よ、神よ。主よ、御心が行われますように。」
その後、私は患者たちのレントゲン撮影を行った。それが終わると、私は救い主と一つになった。この時間、他の人たちはタバコを吸いに行くが、私は神の御傍を求める。
私が神と一つになったとき、救い主の声が聞こえました。
「書き留めなさい、わが娘よ、この御出現を」と。私はすぐに尋ねました。「どの御出現ですか？」
救い主：「天の母の御出現は、彼女が常にそこにいて、あなたがたと共にいるというしるしとなるでしょう。」
私：「慈悲深い神様、このことに対して、いくら感謝しても足りません。今からすでに嬉しく思っていますが、それはつまり、これからさらに祈りと断食をしなければならないということですね。主よ、神様、ローター教会での聖母マリアの御出現について、他に知っておくべきことはありますか？」

救い主：「はい、わが娘よ、知っておくべきことがまだ一つあります。」私：「それは何でしょうか？」

救い主：「（聖母マリアに）常に忠実であり続けなさい。」
私：「はい、救い主よ、私たちが聖母を愛していることはご存知でしょう。約束します、私は天の母に忠実であり続けます。」
私：「でも、あなたは『天の母の御出現』とおっしゃいましたね。悪魔は『マリア』という名前を口にできないので、もう一度お尋ねします。もう一度、そのことを
もう一度言ってくれませんか？」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。あなたは天の母マリアの御出現を受けること
になる。」
私：「お許しください、主よ、神よ。私はその声を注意深く確かめました。」救い主：「その通りだ
、わが娘よ。」
救い主：「平安のうちに去りなさい、わが愛する娘よ。」
夕方、私はミンゴルスヘルムのロクス礼拝堂で聖ミサに参列した。

1992年5月22日 - 金曜日

12時10分から13時00分まで、病院の礼拝堂にて。
私：「昨日、聖ロクス礼拝堂での聖体拝領の際、ゼルナー神父は躊躇し、最後まで私を待たせました。私は聖体拝領台の前でひざまずいていました。神父は私に聖体を与えるのにも苦労していました。まるで誰かが
手を引っ込めさせられているかのようでした。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。あれは神父の中にいた不浄な霊の仕業だった。不浄な霊は、あなたがひざまずいて口で聖体拝領を受けることを望んでいないのだ。」
私：「あなたは、彼が私に話しかけてくれるとおっしゃいました。」
救い主：「もしサタンが彼に権力を及ぼしていなければ、彼はとっくにあなたに話しかけていたはずだ。」私：「私が彼を助けることはできないのですか？」
救い主：「私に任せておきなさい、わが娘よ。」 救い主：「戦い
は続いている。」
私：「どんな戦争ですか？」
救い主：「ユーゴスラビアでの戦争だ。マケドニアやセルビアでも戦争が起こるだろう。」私：「もう終わると思っていたのに
。」
救い主：「戦争はさらに拡大していく。」
私：「まだ何か書き留めるべきことがあるのか、お聞きしたいのですが？」救い主：「
娘よ、書き留めてほしいのだ。」私：「はい、主よ、神よ、私のイエス様、それは何で
しょうか？」
救い主：「昨日の聖母マリアの御出現について、司祭に報告しなければならない。」
私：「いつですか？」
救い主：「数日中に。」
私：「神様、彼は私を信じてくれないでしょう。」救い主：「そう
しなさい、わが娘よ。」
私：「それを神父様にだけ伝えるべきですか、それとも私の知り合いの他の人たちにも話してもいいですか？」（私は御出現のことを指していました）。
救い主：「話していいよ、娘よ。彼らに話して。」
それから、オッガースハイムの神父について、なぜ私に電話をしてくれなかったのかと尋ねました。救い主：「もし彼が私
の前で心を閉ざしていなければ、電話をしてきただろう。」救い主：「わが娘よ、司祭たちは大きな混乱の中にいる。」
私：「主よ、神よ、私はその司祭に話します。主よ、御心が行われますように。」私：「まず誰にこのことを話せばいいの
でしょうか？」（私は御出現のことを指していました。）
救い主：「わが娘よ、まず司祭に話してもいいし、人々に話してもいい。お前の望むままに。そうなるだろう。平安のうちに去りなさい、わが娘よ。私はお前を愛している。」

私：「愛する神様、愛するイエス様、ありがとうございます。」

私は教会でロザリオの祈りと「赤いミサ」に出席しました。

1992年5月23日 - 土曜日

7時15分 — ヴァーハウゼルでの聖ミサ。

聖体拝領の後、私は聖櫃の前に留まり、祈りを捧げました。

まずラテン語で聖母への連祷を捧げ、次にロザリオと心からの祈りを捧げました。救い主と少しの間心を一つにしていたとき、私はこう聞きました。

「わが娘よ、書き留めなさい」

私：「はい、主よ、神よ。でもその前に、あなたの御言葉に従うことを妨げる疑いやあらゆるものを、私から取り除いてください。」

救い主：「聖母マリアの御出現が起こる。」

私はすぐに尋ねました。「いつですか、主よ、神よ、私の霊的指導者よ、愛するイエス様。赤い教会でのことですか？」

救い主：「そう、わが娘よ。」

私：「いつなのか分かりません、主よ、神よ。」救い主：「この数日中のことです。」

私：「救い主よ、もう一度教えてください。あなたは『マリア』とは言われませんでした。」救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。天の母マリアの御出現は、この数日中に赤い教会で起こるでしょう。」

私：「私はすべての信頼をあなたの御手に委ねます。主よ、あなたの御心が行われますように。」救い主：「平安のうちに去りなさい。」

それから、私はこう聞くことができました。「わが娘よ、私はあなたを深く愛している。」

私：「はい、主よ。おっしゃったとおりにいたします。主よ、神よ、ありがとうございます。」

その直後、試練が訪れました。私は買い物にグローブスへ出かけました。普段は車の中で必ず祈るのですが、今回は祈っていませんでした。するとすぐに、車でショッピングカートに衝突してしまいました。

家に帰ると、神と聖母マリアをより深く称えるために、ろうそくに火を灯そうとしました。火をつけた瞬間、ろうそくから大きな炎が私の頭に向かって燃え上がり、髪が焦げてしまいました。悪は聖母マリアの御出現を妨げようとしているのです。

午後、私は教会に行き、16時30分から18時15分までそこで祈りました。

その間に告解をし、司祭に「この教会、イン・ロットで聖母マリアが現れるなんて想像できますか」と尋ねました。司祭は「いいえ」と答え、私は「私もできません」と言いました。

私は、聖母様にお目にかかるには自分にはふさわしくないこと、またメジュゴリエでも聖母様にお目にかかりたいとは願わなかったと述べました。

神は私たち二人を試されたのです。

その司祭は、救い主が私に「ミサの前にロザリオを唱えなさい」と告げたとは信じられない、と私に言いました。

家に帰って、私は泣きました。一晩中、ほとんど眠れませんでした。夫に何度も起こされました。彼は不浄な霊に悩まされており、それは耐え難いものでした。

1992年5月24日 - 日曜日

自宅で、聖ミサの前に。

私は、救い主と一つになる前に祈りました。

救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。聖母マリアの御出現は、ザンクト・レオン＝ロートの『ロート教会』で起こるだろう。」

私：「ロートですか、それとも聖レオンですか？ そこには二つの教会があります。」救い主：「ロートだ。君がいつも通っているあの場所だ。」

救い主：「この御出現は、あなたがすぐに分かるだろう。恐れる必要はない。この御出現の後、多くのことが変わっていく。」

私：「主よ、神よ、あなたは『この数日中に起こる』とおっしゃいました。」救い主：「その時期は私が決めるのだ。」

私：「ヴォクト神父様は、聖体祭の前にロザリオを一緒に祈る必要はないとお考えです。別の時間に祈ってもよいとおっしゃっています。」

救い主：「わが娘よ、書き留めておきなさい。その司祭、フォクト神父は、不従順な司祭である。彼は立ち返り、聖なる父の教えを認めなければならない。」
私：「ヴォグト神父は、私が彼にあなたについて話したことは、私の意志であると仰っています。」救い主：「書き記せ、わが娘よ。あなたの意志は、私の意志である。」
私：「それから、フォクト牧師は、シュティフト・ノイブルクの神父が『私的啓示は使徒たちの時代で終わった』と述べたことが正しいと、さらに確認してくれました。」
救い主：「それは至聖なる父の教えに反する。」
私：「聖母マリアは、聖体拝領の前か後か、いつ現れるのですか？」 救い主：「聖母マリアは、聖体拝領の後に現れる。」
私：「祝福の前か後か、その時には皆、外に出ているでしょう。」救い主：「まだ中にいる人々もいるでしょう。」
私：「他に知っておくべきことはありますか？」 救い主：「私に忠実であり続けなさい、わが娘よ。」
私：「主よ、神よ、愛するイエス様、私はあなたに忠実であり続けます。」
救い主：「たくさん祈りなさい、わが娘よ。平安のうちに去りなさい、わが娘、愛しい子よ。」私：「ありがとうございます、主よ、神よ。」
私は赤い服を着て聖体礼儀に出席した。夕方には聖母への祈りの会があった。その前に、信者たちと一緒にロザリオを唱えた。

1992年5月25日 - 月曜日

今日は休みでした。
7時00分から9時30分まで、私は祈りを捧げ、救い主と心を一つにしました。救い主：「書き留めなさい、わが娘よ、書き留めなさい。」
私：「愛するイエス様、私はそれを書き留めます。それは私の意志ではなく、あなたの意志だからです。私は自分が無に等しい存在であることを悟りました。そして、この無は、あなたが望まれるときのみ、何かを成し遂げることができるのです。」救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。今晩、ロートの教会で聖母マリアの御出現が起こるだろう。」
私は尋ねた。「主よ、私が書き留める前に、私に語りかけているあなたは、いったいどなたなのですか？これを確かめなければなりません。」
救い主：「私はあなたの主であり、神であり、あなたのイエスであり、あなたの救い主であり、あなたの魂の導き手である。」私：「はい、主よ。あなたがそうおっしゃるなら、その通りになります。」
私：「先ほどおっしゃったことを、もう一度繰り返してください。」
救い主：「わが娘よ、聖母マリアの御出現は、今晩、ロートの教会で起こる。」
私：「今日は何日ですか？」
救い主：「今日は5月25日、私が喜ぶ日だ。」
私：「でも、他の人たちは、聖母様の頭に冠と星が輝いているのを見たそうです。」私がそう尋ねたのは、私自身は聖母様を聖なる光に包まれた姿でしか見ていなかったからです。救い主：「あなたは、私の御心通りに聖母様を見るようになるでしょう。」
私：「でも、私は聖母様を見るに値しません。」救い主：「これまで、聖母様を見るに値する者は誰もいなかった。」
私：「御母様の言葉を書き留めるべきでしょうか、それとも心に留めておくべきでしょうか。」救い主：「御母様の言葉を心に留めておきなさい。」
その後、私の目から、私のものではない涙がこぼれ落ちた。私は尋ねた。「イエス様、泣いておられるのですか？」
救い主：「そう、わが娘よ。今、私はただ苦しむイエスに過ぎない。残虐行為は度を越している。書き留めなさい、わが娘よ。これまでにないほど多くの祈りが必要なのだ。わが娘よ、私に忠実であり続け、揺るぎないままでいてくれ。私はこの時間を短縮しなければならない。」私：「それはどういう意味ですか？」

救い主：「私の計画にあったすべてのことを、前倒ししなければならないのだ。」

私：「イエス様、あなたは救い主です。あなたは勝利者です。すべての魂はあなたの手の中にあります。」 救い主：

「書き留めなさい、わが娘よ、書き留めなさい。これらはほんの一部に過ぎない。」

私：「でも、司祭たちは、まるで誰もが天国に行けるかのように、あなたは慈悲深いとお説教しています。」救い主：「司祭たちは私の御心に従って説教していない。わが娘よ、今日はこれで終わりだ。私はあなたを深く愛している。平安のうちに去りなさい。」
私：「主よ、神よ、感謝いたします。主よ、御心が行われますように。」

その交わりの時、私は安らぎと平安を感じました。
今晩のことについては誰にも話したくありませんでしたし、それも神の御心ではないと感じていました。疑念が私を苛みました。
ミサの前にロザリオを唱え、ひざまずいた場所に聖水を振りかけました。 聖母マリアが現れたとき、救い主が私のそばにいてくださるよう願いました。今日の聖体拝領は他者のためではなく、私自身のために捧げました。たとえそれが悪魔であっても、私がより強くなり、悪魔に何もさせないように力を得られるようにと。最後に、ヴォクト神父様と聖父様のために祈り、 父よ、それぞれ『主の祈り』、『アヴェ・マリア』、『栄光あれ』、大天使ミカエルの祈りを捧げ、さらに聖母マリアに『アヴェ・マリア』を三回捧げました。その後、『至聖なるキリストの御心』を祈りました。
私の隣にはロズヴィータが座っていたので、私は彼女に「最後まで残ってほしい」と伝えました。ミサの最中だったので、それ以上は何も言いませんでした。彼女は残っていましたが、その理由はわかっていませんでした。
聖母は現れませんでした。
そこで私は教会を出ました。悲しくはありませんでした。それは間違いなく誘惑だったのです。夕方8時、祈りの集いにて：
私たちは救い主を礼拝しました。
ドチャート神父が告解を聞いていました。私は神父のもとへ行き、その誘惑について話しました。神父の前で泣き、すべてを諦めようと思いました。それは聖母マリアにお目にかかれないからではなく、悪魔が介入していたのに、私がそれに気づかなかったからです。
というのも、1984年5月18日に一度だけ聖母マリアにお目にかかれたことで、私には十分だったからです。悪魔が私をそのように誘惑したことに、私は怒りを感じていました。
今では、そのことがよりよく理解できます。ドチャート神父は親切でした。神父は私を落ち着かせ、聖テレジア・デ・アビラも同様の誘惑に遭ったと教えてくれました。神父は私を励ましてくれ、私は再び元気を取り戻し、祈りの集まりで祈りを捧げるようになりました。

1992年5月26日 - 火曜日

午前中、1時間祈りました。しかし、救い主と一つになることはできませんでした。
16時30分頃、オッガースハイムからヨアヒム神父から電話がありました。彼は電話で私と約25分間話しました。彼は、私がコール首相に手紙を書き、聖なる父の場合と同じように面会を依頼すべきだと言いました。
私：「私は、救い主が私に告げられることを行います。」
18時30分：ロザリオと聖体祭（赤のミサ）。
今回も修道女が聖体拝領を配りました。私は彼女から聖体を受け取らず、自分の席に戻り、心の中で聖体拝領を行いました。

1992年5月27日 - 水曜日

約2時間祈り、救い主と一つになりました。救い主：「書きなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、神よ、私のイエス様、マリアの御子よ。」
救い主：「私は、不浄な霊にあなたに語らせた。それは、声に耳を傾けないことがどれほど危険であるかを、あなたに知ってもらうためだ。聖母マリアの御出現はまだこれからだ。
私：「いつですか？」
救い主：「それは私が決めることだ。」
救い主：「わが娘よ、書き記せ。不浄な霊はあらゆるものを模倣することができるのだ。」私：「あなたは、私が聖なる父から手紙を受け取るだろうとおっしゃいました。そして、今月、私の義母が天に召されるだろうとも。」
救い主：「すべてはまだこれから起こる。」
私：「それから、ヨアキム神父が、コール首相との面会日程を手配してくれるとも。」

救い主：「その面会の件については、もう少し待ちなさい。そのうち自然と決まる。わざわざ面会の約束を取ってもらう必要はない。別の道があるのだ。」
私：「主よ、オッガースハイムの神父たちにはがっかりしました。どの司祭も何もしてくれません。皆、恐れているのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、彼らは見ているようで見ておらず、聞いているようで聞いていないのだ。」私：「主よ、土曜日、日曜日、月曜日のこの三日間、私は大きな衝撃を受けました。まるでサタンが私にすべて嘘をついていたかのようでした。心の中で、不浄な霊が私に語りかけていたようで、あなたではないように感じられました。」
救い主：「これらの誘惑を、あなたは乗り越えなければならない。私へと至る道は茨の道であり、ほとんどすべての人が歩む安楽な道とは異なるのだ。」
私：「そして昨日の夜、あの修道女がまた聖体拝領を配っていました。私は彼女からは受け取りませんでした。」
救い主：「君は正しく行動した。」
私：「でも、彼女はやってはいけないと分かっているのに、聖体授与を続けているんです。」救い主：「彼女はいつも不浄な霊の言うことを聞いているのです。」
私：「でも、聖体拝領の後、車の中で彼女を見かけました。まるでこの世で一番幸せな人であるかのように、私に手を振っていました。」
救い主：「不浄な霊は、彼女に一見した喜びを与え、自分が正しいことをしていると思わせることもできる。その一見した喜びには、何の果実もないのだ。」
私：「主よ、もう何もお尋ねしません。もしお望みなら、お教えください。」救い主：「わが娘よ、私を信頼しなさい。」
私：「今、私はとても気分が悪く、無力に感じています。できれば隠れて、ただ静かに祈っていたい。祈りの集まりさえも、もう持ちたくないのです。」
救い主：「わが娘よ、諦めるのは簡単だが、忍耐を鍛えることは難しい。何事においても忍耐強くなれるよう祈りなさい。農夫は、収穫の時が来るまで待つのだ。」
救い主：「わが娘よ、たくさん祈りなさい。他人に影響されてはならない。」平安のうちに去りなさい。私はあなたを愛している。」
私はさらに心を込めて祈りました。
主よ、神よ、私にとってこれほど必要だったこの教えをくださり、感謝いたします。疑いはありませんが、私の心はより真剣なものとなりました。
ロクス礼拝堂で聖体礼儀に参列した。その前に45分間祈ったが、声は聞こえなかった。

1992年5月28日 — 木曜日 - キリストの昇天

聖体祭と赤色の行列。
夕方 — マリアへの祈り。その前にロザリオを唱えました。

1992年5月29日 — 金曜日

私は自宅にいました。休暇は92年6月10日（水）まで続きます。
早朝、まず1時間祈りを捧げた後、霊的に聖体拝領を行った。救い主：「書き記せ、わが娘よ。世界は滅びつつある。
世界は失われつつある。」
私：「そんなことは書けません。教えてください。『イエス・キリストとマリアに栄光あれ』。」すると、こう聞こえました。「イエス・キリストとマリアに栄光あれ。」
私：「でも、あなたは強大で不死の神です。世界が滅びることを許すはずがありません。」
救い主：「泥があまりにも深すぎるのだ。」
私：「神様、もし司祭が私から『世界が滅びる』と聞いたら、私を狂人だと断じるでしょう。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。この世は悔い改めようとはしない。彼らは偽りの父に忠実なのだ。わたしに属する者たちは皆、すでに狂人だと宣告されている。」
私：「では、偽りの父に属する他の人たちは、狂っていないのですか？」

救い主：「広い道が終わりを迎えるまでは、そうである。」

私が聖母マリアの御出現について尋ねたのは、1992年5月25日に悪が介入したからである。

救い主：「あなたは聖母マリアの御出現を経験するだろうが、いつかは尋ねてはならない。」

私：「では、ヴォクト神父には何と言えばいいのでしょうか？（私はその際、聖母マリアの御出現のことを考えていました）。救い主：「彼は信者たちと一緒に祈る時間があまりにも少なすぎる。」

私：「主よ、今、不浄な霊が私のそばにいるのでしょうか。その存在を感じているのです。」

救い主：「そう、彼は常にあなたの周りにいる。絶えず祈りなさい。恐れることはない、私はあなたと共にいる。」

私：「主よ、神よ、この世の状況はひどく、まるでソドムとゴモラのようなものです。」

救い主：「それは比べものにならない。ソドムとゴモラは、世界への警告だった。しかし、世界はそれを聞こうとしなかった。」

私：「他に何か書き留めておくべきことはありますか？」救い

主：「魂の救いのために祈りなさい。」

私：「主よ、神よ、ありがとうございます。祈るための力と愛、忍耐、そして、不浄な霊を決して恐れず、常にあなたに忠実であり続けるための恵みをお与えください。主よ、御心が行われますように。」

昼には、森の中を約2時間半ほど散歩した。祈るための強い力が湧き上がり、森の中で詩編を唱えた。

夕方、ロートにある教会でロザリオの祈りと聖体礼儀に参加しました。

1992年5月30日 - 土曜日

早朝、約1時間半ほど祈りました。

ヴァーグハウゼルには行きませんでした。一晩中、ほとんど眠れませんでした。マリオンと一緒にいて、日記を書きました。

16時20分から20時まで、ロートの教会で祈りを捧げた。

詩編、十字架の道行き、そして十字架上のイエスの七つの言葉を祈り、その後も聖ミサに残って共に参加した。

1992年5月31日 — 日曜日

ミサの前に祈りを捧げた。ミサにはロートの教会で参列した。

心の奥底から語りかけるように、私は救い主に尋ねました。「今月中に私の義母を天に召すとおっしゃったのは、あなたでしたか？」

救い主：「いいえ、私ではありませんでした。娘よ、私があなたに示したことを書き留めなさい。何が私からのものか、あなたは分かるでしょう。警戒し、祈りなさい。悪が待ち構えています。あなたは完全に私のものです。私はあなたを愛しています。書きなさい、娘よ。あなたは私の子供です。」

私は、「イエス・キリストとマリアに栄光あれ」と言ってくださるようお願いしました。その言葉を

三度聞きました。

それから、「平安のうちに去りなさい、わが娘よ」という声が聞こえました。それは午前8時30分頃のことでした。

午後7時に礼拝があり、その前にロザリオが唱えられました。今日は5月の礼拝が行われる最後の日だったため、礼拝はとても厳粛なものでした。大勢の人が集まっていました。午後9時頃、私はもう一度ロザリオを唱えました。

1992年6月1日（月）

私はまだ休暇中で家にいました。祈りの部屋の資金を貯めるために、　　祈りの部屋の費用を節約するため、

夜中の3時から4時の間にロザリオと聖心への連祷を捧げました。また、9時から10時の間にも祈りました。

昼には森を散歩し、その間にロザリオを2回唱えました。夕方、ロートにある教会でロザリオと聖体ミサに参加しました　　でロザリオと

聖体ミサに参加しました。20.00には祈りの集まりがありました。

今日は、敬虔さについて、そして聖体拝領を正しく受ける方法について少し話しました。今日、救い主が誘惑を許してくださることは、なんと素晴らしいことかと思いました。もしそうでなければ、義母はあの誘惑のせいで、とっくに亡くなっていたでしょう。
そうなっていたら、悪魔が勝利していたでしょう。義母は良い人ですが、頑固なところがあります。日曜日の代わりに、いつも土曜日の夜に聖体拝領のミサに行きます。
聖体の祭日にも、彼女は行列に参加しようとしませんでした。彼女は手での聖体拝領を好み、実際にそうしています。聖体を信徒から受け取るか司祭から受け取るか、彼女には違いが感じられないようです。彼女はヒトラーの信奉者です。
今でも彼女はヒトラーに夢中だ。私の祈りの会には参加したがらない。そして、教会から家に帰る時も、私と一緒に歩きたがらない。
私の義母は、私の改宗や信念について自ら確かめるために私に会いに来るよりも、他人が私のことをどう言っているかに影響されがちです。それでも、彼女は私の義母ですから、私は彼女を大切に思っています。彼女が私たちと一緒にいてくれることに感謝しています。例えば、アイロンがけを代わりにやってくれるからです。
日曜日、家族全員が揃うときは、義母もいつも通り、私たちの食卓で一緒に食事をします。
もし義母が本当に5月に亡くなっていたら、悪魔は私のすべてを台無しにしてしまったでしょう。そうなれば、私は「手での聖体拝領」も正しいのだと信じていたかもしれません。
しかし、人がいつ死ぬかは神様が決めることです。
それでも私は救い主に忠実であり続けます。なぜなら、この誘惑は初めてのことではなく、最後のことでもないからです。

1992年6月2日 — 火曜日

私はミンゴルスハイムで午前6時30分の早朝ミサに出席した。
ミサの後、かつてアフリカに滞在し、現在はボン近郊の聖アウグスティンに住んでいるシュタイラー宣教会のゼルナー神父と話をした。その会話の間、私は一人ではなかった。救い主が私と共にいてくださったのだ。私が救い主から言われたことを神父に伝えると、神父は喜びを隠せなかった。

1992年6月3日 - 水曜日

午前8時から9時45分まで、私は祈りを捧げ、救い主と心を一つにしました。誘惑が私を襲ってきたため、私は大いに泣きました。
私は、その声を確かめなければならないと述べ、救い主に「イエス・キリストとマリアに栄光あれ」と私を迎えてくださるよう求めました。
救い主：「イエス・キリストとマリアに栄光あれ。」 救い主：「書きなさい、わが娘よ。」
私：「はい、天の父よ、三位一体の神よ、あなたがそう望まれるので、私は書きます。」救い主：「聖母マリアが、あなたの教会に現れるでしょう。」
私：「聖母マリアとは誰のことですか？」
救い主：「彼女は私の花嫁であり、私の娘であり、私の母であり、そしてあなた方の母である。」 救い主：「わが娘よ、疑ってはならない。」
私：「親愛なる神様、この御出現について何か教えてください。私は不適格な者ですので、お尋ねする勇気はありません。私は罪人なのです、主よ。」
救い主：「今、私がそれだと信じているか？」私：「信じてはいますが、簡単には信じられません。『あなたはどなたですか？』」
救い主：「私はあなたのイエスだ。」
私：「なぜ、司教や教皇、そしてコール首相に関することは実現しなかったのですか。」
救い主：「まだこれからだ。」
私はマリアの御出現についてもう少し知りたかったので、救い主に、まだ何も教えてくれていないことを思い出させました。」
救い主：「彼女は現れる。ただ、その時はまだ来ていない。」

私：「あなたは、教会の中でしるしを与えると仰いましたね。」
救い主：「そのしるしは、聖母マリアの御出現の前に現れる。このしるしは司祭たちのためでもある。書き留めておきなさい、わが娘よ。あなたは教会当局から手紙を受け取るだろう。注意を払い、私と聖なる父に忠実であり続けなさい。聖なる父の教えに反するものは、聞く必要も従う必要もない。」
救い主：「わが娘よ、多くの犠牲を捧げなさい。」
私：「親愛なる神様、努力はしますが、約束はできません。」
私：「愛する救い主よ、昨日、ゼルナー神父とお話しした時、あれは私ではありませんでした。」救い主：「私があなたのために話したのだ。」
私：「それははっきりと感じました。それが私を力づけてくれました。そして、神父様はまるで何かが起きたかのように、まったく別人のようでした。あれは何だったのでしょうか？」
救い主：「ほら、娘よ、私の働きは人を変えるのだ。そして、私はあなたたちを通してしか働くことができないのだ。」

私はしばらくの間、心から恵みを祈り続けました。

すると、「平安のうちに去りなさい、愛する娘よ」という声が聞こえました。その後、感謝の祈りを捧げました。
聖霊に幾度か祈りを捧げていると、心の中に特別な温もりと深い愛を感じました。私は安らぎと平安を感じ、何の疑いも抱きませんでした。
夕方、ロクス礼拝堂で聖体礼儀に参列した。

1992年6月4日 — 木曜日

夜、午前4時から5時まで、そして再び午前8時10分から10時まで祈りました。1時間の祈りの後、私は救い主と一つになりました。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。」
私：「はい、愛するイエス様、生ける御言葉よ。」
救い主：「あなたはこれから、トランク神父と話すことになるだろう。」
救い主：「彼がその兄弟に聖体を手に渡したことは、私の意にかなわない。」私：「はい、主よ、私もそれを見ました。その兄弟は、司祭が『主よ、私はふさわしくありません……』と言う前に、聖体を食べてしまいました。」
私：「主よ、お許しください。あの瞬間、確かに悲しいことなのに、心の中で笑ってしまいました。その兄弟が聖体を貪るように受け取った様子が、私にはそう見えたのです。」
救い主：「それによって、あなたたち二人は私を侮辱したのです。」
私：「しかし主よ、もし司祭がその兄弟に聖体を手に渡さなかったなら、私たちはあなたを侮辱することはなかったでしょう。」
救い主：「その通りだ。司祭が聖体を聖別されていない手に渡さないよう、この願いのために祈りなさい。」
私：「親愛なる神様、私はあなたを侮辱してしまったので、告解に行きます。」救い主：「書きなさい、わが娘よ。」
私：「はい、天の父よ、書き留めます。あなたが私を導いてくださったからです。あなたは私の中ですべてです。書くための私の手さえも、あなたが用いてくださっているのです。」
救い主：「それは私を喜ばせる、わが娘よ。」
私：「神様、何を書けばいいのでしょうか。正しいことだけを書き記せるよう、恵みと憐れみをお与えください。確固たる信仰をください。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。あなたは招かれている。」私：「誰に？」
何も聞こえなかったので、もう一度尋ねました。私：「主よ、神様、誰のところへですか？」救い主：「ある委員会へ。」
私：「私が想像しただけでしょうか？」
救い主：「あなたは委員会に招かれているのだ。」私：「いつ、どこで、なぜですか？」

救い主：「まだ先のことだ。辛抱強く待て。」

私：「その委員会で、あなたは私と一緒にいてくださるのですか？」救い主
：「はい、私はあなたと一緒にいる。」
私：「主よ、それなら、これからどうなるか心配する必要はありません。すべてをあなたの御手に委ねます。」
救い主：「その通りになる。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

私がまだ祈りを終えきらないうちに、外ではすでに二人の女性が私を待っていました。一人はロズヴィータの義姉で、もう一人はシュヴァルツヴァルトに住むフェルディナント・トーメ神父の妹でした。
時刻は10時で、私は彼女たちと約45分間、自分の回心について話しました。
10時50分：私は、もう一度救い主と一つにならなければならないと感じた。
この「しなければならない」という感覚は、少し不思議なものでした。しかし、誘惑が訪れた時には、そこから学ぶことも必要なのです。
1984年の幻視は、霊の識別という点でより単純だったと思います。聖母マリアの姿は目に見えますが、声については聞くだけであり、その声を吟味するにはより長い時間が必要です。
その声を吟味し続ける忍耐力を保つために、救い主は私に愛と恵みを感じさせてくださり、また、静寂を見分けることができるかどうかを試すために、誘惑も許してくださるのです。
さて、今朝は女性たちに邪魔をされたため、私は10時50分に再び救い主と交わりました。
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。聖母マリアの御出現は、およそ4週間後に起こるだろう。」
私：「親愛なる神様、親愛なるイエス様、天の父よ、どうかもう一度繰り返してください。」救い主はすぐにそれを繰り返してくださいました。
私：「どこで？」
救い主：「ロートの教会で。」私：「他に知っておくべきことはありますか？」
救い主：「ええ、わが娘よ、恐れる必要はない。私はあなたと共にいる。わが娘よ、私を失望させないでほしい。」
私：「親愛なる神様、私はいつもあなたと一つでありたいです。そうすれば、あなたを失望させることはありません。」救い主：「たくさん祈りなさい、わが娘よ。そして断食をしなさい。」
私：「親愛なる神様、努力します。」
ルクセンブルクのクロードのことを考えていたが、尋ねようとはしなかった。すると、こう聞こえてきた。
「クロードのために手紙を書いていい。彼は今のところ司祭にはなれない。あなたたちは彼のために祈り続けてほしい。」私：「ありがとうございます、主よ、神よ。ありがとうございます、愛するイエス様。ありがとうございます、愛する聖霊様。私が再びあなたと一つになったとき、あなたの御心は果たせたでしょうか？」
救い主：「はい、あなたは私の御心を果たしました。平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」その夜、私は教会でロザリオを唱え、赤のミサに参加しました。

1992年6月5日 - 金曜日 - 聖心金曜日

私はまだ休暇中だったので、自宅で9時から11時まで、聖心連祷、聖母連祷、聖霊への祈りなどを捧げました。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。教会で起こるこのしるしは、あなたに起こるのだ。」私：「主よ、私はすべてをあなたに捧げました。しかし、あなたがそうおっしゃるなら、その通りになるでしょう。それがあなたからのものであることを、どうすれば分かるのでしょうか？」
救い主：「私はあなたと共にいる。これから現れるこのしるしを、あなたの中で働かせなさい。」私：「あなたが私と共にいることを、どうすれば知ることができますか？」
救い主：「私の恵みはあなたに欠けることはない。強く、勇気を持って、他人に影響されないようにしなさい。」
私：「しかし主よ、私がこれほど弱い者であることは、あなたもご存知でしょう。」救い主：「私と共にあるなら、あなたは強いのだ。」

私：「それはいつ訪れるのですか？」救い主：「
時は私のものなのだ。」
私：「愛する救い主よ、私はあなたを深く愛しています。どうか、決してあなたから離れることがありませんように。」
救い主と一つになることは、言葉では言い表せないほど美しいことです。その恩恵に言葉で感謝することはできません。昼も夜も、絶えず主を賛美し、称え続けなければなりません。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。人々は迷いの道に迷い込んでいる。彼らは立ち返ろうとはしない。私がまだここにいることを悟った者はわずかである。わが娘よ、私に忠実であり続けよ。私はあなたの道である。この道では、あなたは迷うことはない。わが娘よ、私はあなたに、私に忠実であり続ける恵みを与える。」
私：「はい、主よ、神よ。あなたに忠実であり続ける恵みを受け入れます。あなただけが私にとって十分であり、あなたはすべてをなされるからです。私は地上で、あなたが至福そのものであることを悟りました。そして今、永遠に続く至福を待ち望んでいます。」
救い主：「わが娘よ、あなたが書いた言葉で、私は喜びを得た。」私：「はい、愛する神様、それは私の口ではなく、私の
心が語った言葉です。」
救い主：「わが娘よ、あなたはまだ、これから咲き誇るべき、香りのよい花のつぼみである。」
その後、私は救い主の声を聞きました。「平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」ロザリオの祈り
と聖なるミサのために、私は赤い服を着て教会に行きました。

1992年6月6日（土曜日）

私は午前7時に、ミンゴルスハイムの聖ロクス礼拝堂で聖体礼儀に参加しました。
ミサの後、ブラジルで宣教師として活動しているドイツ人の神父と話をしました。
彼は、かつて中国で捕虜だったと私に話してくれました。私は彼と、口による聖体拝領について約20分間話し合いました。彼は松葉杖を二本使いながら歩いていました。最後に、彼から祝福を受けました。
16時30分～18時15分：教会でロートで祈りを捧げた。今日はヴォクト神父に告解もした。

1992年6月7日 - 聖霊降臨祭の月曜日

私は7時45分から9時05分まで祈りました。
私：「主よ、神よ、もしお望みなら、私に語りかけてください。あなたのしもべは耳を傾けています。」救い主：「
そう、わが娘よ、私はあなたに語りかけている。あなたはせっかちだ。」
私：「これを書き留めていいですか？」
救い主：「そう、書き留めなさい。私を信頼しなさい。」
私の魂が知りたがっていたことを、神以外には誰も知る由もなかった。しかし、私は答えを得た。
救い主：「聖母マリアの御出現は、近い将来に起こるだろう。」私：「でも、あなたは『4週間後』とおっしゃいました。」
救い主：「わが娘よ、彼女は現れることを、あなたは知っているだろう。」
私：「なぜ聖母を『赤い教会』に現れさせるのですか？」救い主：「そうすることで、あなたの教会
で多くの祈りが捧げられるようにするためだ。」
私：「でも、私たちの教会は、周辺の他の教会よりも多く祈られていますよ。」救い主：「私は、この教会から多くの勇敢な信仰の証人を生み出したいのだ。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。私があなたに与えるしるしは、私のしるしである。わが娘よ、このしるしは、聖母マリアが現れる前に現れるだろう。」
私：「そのしるしが現れた時、私はどう振る舞えばよいのでしょうか？黙っていなければならないのでしょうか。それは私だけのためなのでしょうか、それとも他の人々のためでもあるのでしょうか？」
救い主：「あなたには恵みが欠けることはない。すべては、私の望む通りになる。」私：「親愛なる神様、それでは、あなたの御心が行われますように。」
救い主：「聖霊があなたに啓示を与えてくださる。あらかじめ心配する必要はない。私の母に祈りなさい。彼女はあなたを愛している。彼女はあなたを守り、導いてくださる。

あなたは彼女の愛しい子なのです。」

私：「主よ、そんなことは書けません。」

救い主：「書きなさい。あなたの母は、これまで一度もあなたを見捨てたことはない。母を失望させてはならない。わが娘よ、私たちに忠実であり続けなさい。」
私：「あなたと聖母様に忠実であり続けます。だって、あなたたちをとても愛しているからです。」救い主：「わが娘よ、今、あなたを祝福する。」
私は床にひざまずいた。
「父と子と聖霊の祝福が、あなたの上に降り注ぎますように」という声が聞こえました。私は十字を切って、畏敬の念を込めて言いました。「イエス・キリストとマリアに栄光あれ。」
救い主が私に祝福を与えてくださったのは、これが初めてのことでした。
その後、救い主はこう言われました。「平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」私は赤のミサに参列しました。

1992年6月8日 - 聖霊降臨祭の月曜日

夜、2時20分から3時20分まで、平和と貧しい魂たちのために祈りました。8時10分から9時10分まで、私は祈りを続けました。
私：「主よ、神よ、私の最愛の父よ、私を叱り、試練を許してくださることに感謝します。それによって、私はあなたへの愛が薄れるどころか、かえって深まります。今、私には疑いも恐れもありません。あなたがいつも私と共にいてくださることを知っています。そして、あなたが許されることは、あなたの御心であるからこそ、そうあるべきことなのです。
私があなたを侮辱し、せっかちだったことをお許しください。改めることをお約束します。万物にはその時期があり、その時期を決めるのはあなたであり、それが正しいことだと悟りました。 私は愛する聖母マリアと、愛するイエス様と心を一つにし、全能で慈悲深い父なる神に感謝します。アダムとエバの後にも、今なお天の母と救い主イエス・キリストがおられることを。」
私はさらに心を込めて祈り、救い主にこう言いました。「あなたに何も尋ねる必要はありません。あなたはすべてをご存知ですから。」（私の心はそのしるしに釘付けでした）
救い主：「そう、私はすべてを知っている。あなたが受け取るこのしるしは、私から、すべての人々へのものだ。あなたはそのしるしを受け入れるべきだ。」
私：「はい、主よ。よく理解できました。それが来たら、受け入れます。」
救い主：「世界は大きな危機に瀕している。私の子供たちは皆、危険にさらされている。来るべきその時がいつ来ても、いつでも準備を整えておきなさい。」
私：「どのような時ですか？」
救い主：「裁きだ。誰もが自分自身に責任を負うのだ。」
私：「神様、もう今から、裁きをそれほど恐れる必要があるのでしょうか？」救い主：「愛よ！　今からだ。愛こそが、あなたがた全員が裁かれる基準である。絶えず愛を求めなさい。私は愛そのものである、わが子よ。そして、誰もが望むだけ、それを汲み取ることができる。」
私：「もし他の人たちが、この愛を汲み取ろうとしない場合はどうなりますか？」救い主：「彼らはすでに自分の父を選んでいるのだ。」
私：「神様、私はこれまで以上にこの愛を汲み取ります。そして今すぐお願いいたします。私が他の人々にも愛を分け与えられるよう、たくさんの愛を授けてください。」
救い主：「わが娘よ、信頼しなさい。私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」
夕方、HIでのミサで『In Rot』を歌った。20時からは祈りの集いがあった。

1992年6月9日 - 火曜日

今日は休暇の最終日だった。
夜、午前4時から5時30分まで、私は平和と司祭たち、そしてバチカンのために祈りました。
救い主：「昨日は祈りの集会で、あなたは正しく語った。恐れる必要はない、これからもそのように語り続けなさい。私はあなたと共にいる。あなた方の祈り（聖霊降臨祭の月曜日）は私の心に響いた。」私：「ロズヴィータは昨夜、苦しみに見舞われました。眠ることができませんでした。」（私は彼女に日記の写しを保管のために渡していました）

救い主：「不浄な霊たちは、彼女があなたが書いたことを知ることを望んでいない。彼女は恐れる必要はない。彼女は私の保護下にある。」

私：「夫が、昨日私が話しすぎだったと言っていました。」救い主：「彼は以前にもそう言ったことがある
。彼の言うことを聞くな。敵はあなたの家の中にも潜んでいるのだ。」
私：「私のイエス様、今、私の心の中はとても美しいです。心の中に、こんなにも静けさと平
安があります。」
救い主：「私たちは今、一つになった。」
私：「ああ、愛しい方、ありがとうございます。今、私に何か言いたいことはありますか？」救い主：「わが娘よ、
休みなさい。平安のうちに去りなさい、わが愛する娘よ。」私：「偉大で慈悲深い神様、ありがとうございます。私
はまた眠りにつきます。」

10時40分、私は再び祈りました。10日間の休暇の最終日でした。私はたくさん祈りましたが、救い主にとっ
てはまだ十分ではありませんでした。
救い主：「愛する娘よ。」私：「書き留め
ましょうか？」
救い主：「書きなさい。口にする言葉の一つひとつに気をつけなさい。
不浄な霊があなたを真似ようとする。彼は　　今、あなたが成し遂げたすべてを破壊しようとしている。あなた
が書いたものを、彼は滅ぼそうとしているのだ」
私：「親愛なる神様、そんなことを許されるのですか？」
救い主：「私はあなたを守ってあげよう。わが娘よ、あなたは不浄な霊を見抜いたし、これからも常に彼を見抜くことができるだろう
。あなたには恵みが欠けることはない。愛する娘よ、平安のうちに去りなさい。」
私：「愛する神様、この多くの恵みに心から感謝いたします。」

夕方、私はロートにある教会でロザリオの祈りと聖体礼儀に参加しました。聖体拝領は、ゲブハルト
・ハイダー神父様のために捧げました。

1992年6月10日 — 水曜日

10時、医師室にて：
救い主：「人々は大きな危険にさらされている。」私：「でも、私には
何もできません。」
救い主：「いいえ、あなたにはできることがある。司祭のところへ行き、彼に伝えなさい。戦争が近づいている。」私：「神様、私は
もう彼に伝えました。」
救い主：「彼は信者たちと共に、もっと祈るべきだ。」 救い主：「書き留め
なさい、わが娘よ。あなたたちに残された時間は少ない。」 私：「どの司祭
のところへ行けばいいのですか？」
救い主：「ヴォクト神父のところへ行きなさい。」
私：「でも、あなたは彼が不従順だと言われましたよね。」
救い主：「彼はよく考え直すべきだ。わが娘よ、彼のところへ行きなさい。」私：「この戦争はド
イツに関わるものですか？」
救い主：「すべてだ。」
私：「彼に、それがあなたからのものだと分かるように、何か伝えることはできますか？」救い主：
「彼にそう伝えなさい。わたしの羊はわたしの声に耳を傾ける。」
私：「親愛なる神様、そうお伝えします。主よ、御心が行われますように。愛するイエス様、私の主であり神よ、感謝いたします。」
救い主：「愛する娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちにそこへ行きなさい。」

12時、職場の礼拝堂で『主の天使』を祈りました。ホルガーが私に読むための本を持ってきてくれました。
16時：帰宅途中、ヴォクト神父様のために「悲しみのロザリオ」を唱えました。
17時50分頃、ロートの教会に立ち寄り、少し祈りました。
18時00分から18時30分まで、フォクト神父のもとを訪れました。 私は彼に、1992年5月24日、5月29日、6月3日、6月5日、6月7日、6月
8日、そして

今日、1992年6月10日の分を読み上げました。その間、彼は笑っていました。

最後に、彼は「もっと祈らなければならない」と言いました。
私は彼に祝福を求め、それからその場を離れた。彼のもとを去る際、私は「もううんざりだ」と彼に言った。
すると、フォクト神父は「そのことを救い主に伝えてください」と言いました。私は「救い主
はすでにそれを聞いておられます」と答えました。

私がそう言ったのは、救い主が私に告げていることを、彼が信じてくれないからだ。
19時、私はロクス礼拝堂でロザリオを祈り、そこでミサに参加した。その後、トランク神父と話をした。
私は救い主に、今、トランク神父と話をすべきかどうか尋ねました。救い主は「はい」と答えまし
た。
私：「彼は私と話してくれるでしょうか？」　救い主：
「はい、彼はあなたと話してくれるでしょう。」

私たちの会話は約30分間続きました。私はトランク神父に、救い主が私に語られたことを伝えました。

1992年6月11日 — 木曜日

11時30分、医師室にて：
私は救い主に、昨日ヴォグト牧師が「これらはすべて脅しのメッセージだ」と言っていたことを伝えました。
救い主：「私に任せておきなさい。すべては時が来れば起こる。」それから、私
はトランク牧師について尋ねた。
救い主：「君が彼を訪ねたのは正しかった。」
私：「でも、彼は、オスカー・ザイアー司教から『手による聖体拝領を行わなければならない』と言われたと言っていました。」
救い主：「彼は自分の意志でそうしているのではない。」
私：「神様、あなたは『聖なる父の教えを歪める者の言葉には耳を傾けず、従う必要もない』とおっしゃいました。」
救い主：「その通りだ。」
私：「では、司教が『手による聖体拝領を行わなければならない』と言った場合、司祭は司教の言うことを聞かなければならないのでしょうか。」
救い主：「いいえ。」
私：「『いいえ』以外の答えを教えてください。」
救い主：「その司祭は、私の目には不従順に見える。」
私：「彼は、教皇も手による聖体拝領を行っていると述べていました。」
救い主：「教皇は強制されているのだ。すべての司教が教皇の言うことを聞いているわけではない。」私：「彼は『エンゲ
ルスヴェルク』に行きたいと言っていたが、司教が許可を出さないそうだ。それについて何か教えてくれるか、それとも私
には関係ないことなのか？」
救い主：「いや、それは君に関係ある。H. トランク神父は『エンゲルス・ヴェルク』に行くべきだ。彼に、私をもっと信頼する
ように伝えてくれ。」
私：「彼は、司教に従わなければならないと言っていました。」救い主：「しか
し、彼は私に対して不従順なのだ。」
私：「神様、彼が『エンゲルスヴェルク』に行くべきというのは、彼の意志ですか、それともあなたの意志ですか？」救い主：
「わが娘よ、それは私の意志だ。すでに長い間そうである。」
私：「私が書いたことを、彼が大司教に伝えるべきでしょうか？」
救い主：「彼はそうはしないだろう。司教は私的啓示を信じていないからだ。」
私：「それが理解できません。もし教皇様が、手での聖体拝領を強要されるのであれば、司祭もまた、自分が強要されていると言うことができるのではないでしょうか。」
救い主：「わが娘よ、教皇は私に服従している。彼は私の御霊に導かれているのだ。」私：「神様、もう二度とあなたに尋ねたりはしません。」
救い主：「わが娘よ、あなたがそう尋ねてくれたことが、私には喜ばしい。平安のうちに去りなさい、わが愛する娘
よ。」

12時05分～13時00分、礼拝堂にて：
救い主：「わが娘よ、よく聞きなさい。私は愛であり、謙遜であり、柔和であり、平和であり、静けさであり、忍耐であり、喜びであり、真理であり、光であり、道である。私はあなたの命そのものである。
これと矛盾するものはすべて、不浄な霊である。覚えておきなさい。私との対話の後は、静けさと愛を保ちなさい。不浄な霊は良い実を結ばない。」
私：「親愛なる神様、不純な霊がまたやってきました。」救い主：「わが娘
よ、私もここにいる。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。今日あなたが書くことは、静かに心に留めておきなさい。」
私：「そして、マリオンは書くべきで、ロズヴィータはそれを保管すべき、そうですよね？」救い主：「しかし、それ以外の誰もいない。」
私：「でも、私には司祭が必要です。」
救い主：「司祭をあなたに与えよう。もう少し待て。」
私：「あなたに話しかけてくれたのがあなただと、どうやって見分ければいいのですか。それについて、もう一言教えてください。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。私があなたに語ったことは、あなたの心を満たすだろう。」
私：「何で？」救い主：「愛
で。」
私：「それでは、その通りになりますように。私の心が、今だけでなく、いつまでも愛で満たされますように。」

ロザリオと、赤い祭服を着てのミサ。

1992年6月12日 — 金曜日

午前10時、医師室にて：
救い主：「書きなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、神よ、天の父よ、イエス様、慈悲深い神よ、何を書けばよいのでしょうか？」
私はその声を待ったが、何も聞こえてこなかった。自分だけでは何も言えないのだ、と
自分に言い聞かせた。
私：「親愛なる神様、悪者が介入することを許さないでください。」救い主：「ほら、私が許
さない限り、彼にはできないのだ。」
私：「私の内には強い温もりがあり、安らぎと平安があります。私の心は愛で燃えています。これは言葉では言い表せない、素晴らしい感覚です。」
救い主：「わが娘よ、あなたは多くの試練に直面するだろう。」
私：「でも、あなたなしでは、その試練を乗り越えることはできません。」
救い主：「そう、だからこそ、あなたは私を必要としているのだ。その試練は権力者たちから来る。」
私：「私、試験が本当に苦手なんです。（学校の試験のことを考えていました）」救い主：「私はあなたと共にいる。」
私は、義母が5月に亡くならなかったことについて尋ねました。救い主：「それは私が許したのだ。不浄な霊は、それによって、
手による聖体拝領が正しいこと、そして信徒が聖体を配ることさえも正当であると確認したのだ。もし彼女が亡くなっていたら
、君は手による聖体拝領が正しいと信じていたであろう。」
私：「でも、不浄な霊が介入していると、それを見分けるのは難しいです。」救い主：「一言一句に注意を払いなさ
い。私は柔和そのものである。」
私：「では、ベオグラードの件はどうですか。そこでも不浄な霊は干渉したのですか？」救い主：「
いいえ、それはまだこれからだ。」
私：「これまで、不浄な霊が干渉していたことに気づいたのは、義母の死の際が2回、そして1992年3月25日に聖母マリアの御出現が予告された時、さらに『4週間後』と告げられた時の予告の時です。」
救い主：「それは、彼が干渉した場面に過ぎない。この経験を自ら味わわなければならないのだ。」
私：「試練とは何ですか？」

救い主：「私の教えを守り、私に忠実であり続けなさい。先走って心配してはならない。私があなたのために語ってやる。」

私：「ありがとうございます、主よ、神よ。今、よく理解できました。」

私：「今朝、車で路面電車にぶつかりそうになりました。あと少しで事故を起こすところでした。運転中に聖母の連祷を唱えていました。『Virgo Prudentissima - ora pro nobis』と祈っているまさにその瞬間、目が眩んで路面電車が見えなくなったのです。 目で見えるようになる前に、すでにブレーキを踏んでいました。あれは守護天使だったのだと思います。」

救い主：「絶えず祈りなさい。不浄な霊はあなたを滅ぼそうとしているが、それはできない。私はあなたと共にいる。」

救い主：「書き記せ、わが娘よ。スロバキアで戦争が起こるだろう。」私：「では、モンテネグロはどうなるのですか？」

救い主：「モンテネグロはまもなく滅ぼされる」

私：「神様、もう何も知りたくありません。本当に恐ろしいことです。主よ、神様、お許しください。もっと祈ります。たくさん祈れるよう、どうか恵みをお与えください。」

HI。ロートの教会でミサとロザリオの祈りに参列した。

1992年6月13日 — 土曜日

早朝のミサには、ミンゴルシェルムのロクス礼拝堂（7時）に行きました。

その後、まだ洗礼を受けていない家族全員のために、ロザリオを2回唱えました。14時00分、同じくロートに住む兄の家に招待されました。

兄のパウルさんの誕生日パーティーでした。

末っ子の弟ウラジミールもそこにいて、姉のソーニャや、その他多くの甥や姪たちなど、大勢の人が集まっていました。

誰も私を嘲笑したりせず、皆とても親切にしてくれました。

16時30分から18時30分まで、私は教会へ行き、祈りを捧げました。救い主のもとでは、バーベキューパーティーよりも素晴らしいひとときを過ごせます。

私はヴォクト神父に告解をしました。告解の最中、私は神父に、教会での彼の行動のうち、正しくない点についても指摘しました。例えば、使徒信条を唱える際、聖櫃の方を向くのではなく、会衆の方を向いていることなどです。なぜなら、聖櫃に宿る三位一体の神への信仰において、神父は模範となるべき存在だからです。

1992年6月14日 — 日曜日

私は午前7時10分から8時25分まで自宅で祈りました。交わりの際、

救い主：「わが娘よ、あなたは告解室で立派に語った。私はあなたのために語った。司祭は、あなたが話したことのほとんどすべてにおいて間違っている。」

私：「親愛なる神様、彼をお赦しください。教会が空っぽでも不思議ではありません。」私：「親愛なる救い主よ、私は何を知っておくべきでしょうか？」

救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。戦争はさらに拡大している。ボスニアでの戦争はさらに激化するだろう。平和のために祈りなさい。」

私：「親愛なる神様、私にとってとても重要なことを、お尋ねするのを忘れていました。」

私：「**あなたは聖体の小さな断片の中にも臨在しておられますか？**」救い主：**「はい、私はその小さな断片の中にも臨在している。」**

救い主：「書き記せ、わが娘よ。あそこで戦争が終われば、別の場所で始まるのだ。わが娘よ、人々は不満を抱いているが、それは私によるものではない。」

しばらくして、私はこう聞きました：

「わが娘よ、私はあなたを愛している。」

私は、それを書き留めてよいか尋ねました。救い主：「は

い、書き留めなさい。」

私：「深い平安と温もりを感じます。主よ、神よ、今、私に与えてくださったこの恵みに感謝いたします。

もっと美しく表現できないのが残念です。私には、そのようなことを書く能力がないと感じています。
私は詩人でもないのです。」
救い主：「わが娘よ、私に忠実であり続けなさい。平安のうちに去りなさい。」

10時00分 - 赤のミサ。
13時00分　ロザリオと祈りの時間。
午後、マリオンが来て、私たちは日記を書きました。その後、私はロザリオを唱えました。

1992年6月15日 — 月曜日

医師室にて：
私は心から祈り、嘆きを捧げました。救い主：「私はあな
たを愛している、わが娘よ。」私：「その言葉、よく聞こ
えました。」
救い主：「君はこれまで正しく行ってきた。これから起こることを心配する必要はない。」
私：「主よ、彼らが依然として手での聖体拝領を続けていることが、私の心を痛めます。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。手による聖体拝領は冒涜である。わが娘よ、近い将来、すべてが変わるだろう。あなたの使命は、司祭たちに、信徒には口による聖体拝領のみを与えるべきだと注意を促すことである。」
私：「でも、みんな『司教に従わなければならない』と言っています。」救い主：「彼らに、
私がそれを許さないのだと伝えなさい。」
私：「それなら、私的啓示を信じる必要はないと伝えてください。」
救い主：「公認された私的啓示を信じない司祭たちは、神の恵みの中に生きてはいない。」
私：「主よ、私はこれを正しく書き記しましたか？」
救い主：「わが娘よ、その通りだ。平安のうちに去りなさい。」

18時30分 ロザリオと聖体祭（赤の礼拝）。
20時00分 祈りの会：ドチャート神父とヴァーハウゼル出身のベルトルト神父が参加された。非常に多くの人々が集まり、席が満席となった。

1992年6月16日 - 火曜日

10時00分、医師室にて：
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。サタンはますます強くなっている。あなたたちはさらに祈らなければならない。戦争はさらに激化するだろう。」
私：「どういう意味ですか、親愛なる神様、さらにひどくなるというのは？」 救い主：「戦争はすべての人の心の中にあるのだ。」
私：「まだそんなに憎しみが残っているのですか？」救い主：「ほとんど憎しみだけだ。」
私：「まだ何か書き留めるべきことがありますか？」
救い主：「書き留めるがよい。礼拝堂が許可される。寄付が寄せられる。」
私：「親愛なる救い主よ、ありがとうございます。それは私にとって大きな喜びです。なぜなら、私たちにはもう場所がなく、これほど多くの人々が祈りにやって来ていることを、あなたが見てくださったからです。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」
その交わりの時、私は深い温もりと深い平安を感じました。
私：「愛する救い主よ、あなたは私の心と、あなたへの愛をご存知です。それをあなたに言う必要はありません。私はあなたに忠実であり続けます。」

18時30分、私はロートでロザリオの祈りと聖体祭に参加しました。
聖体拝領は、亡くなった両親と兄弟姉妹のために捧げました。
聖体拝領の後、私は救い主に、それが正しいことだったのか、あるいは今朝礼拝堂で体験したことを正しく理解していたのか尋ねました。

救い主：「信じていい。その通りだ。」

1992年6月17日 — 水曜日

10時、医師室にて：

書くことをためらいました。救い主が、私が書くことを望んでいないかもしれないと思ったからです。すると、次のような声が聞こえました。救い主：「わが娘よ、私はあなたに書いてほしいのだ。」

私：「主よ、神よ、私はあなたの御心に完全に身を委ねます。」

救い主：「世界は大きな危機に瀕している。偽預言者たちが動き出している。」私：「親愛なる神様、預言者たちについてもっと詳しく教えてください。」

救い主：「彼らは人々にとって寄生虫のような存在だ。」私：「では、その解決策は？」

救い主：「キリストの真の教えに忠実であり続けることだ。」

私：「偽預言者だと、どうやって見分ければよいのですか？」 救い主：「彼らは私の御霊に導かれてはいない。」

私：「彼らが不浄な霊に導かれていることを、どうすれば気づくことができますか？」 救い主：「偽預言者には多くの信者や支持者がいる。」 私：「では、あなたの御霊に導かれている他の人たちは？」 救い主：「ごくわずかだ。」（信者たち）

私：「神様、それだけでは不十分です。偽預言者について、他に何を知っておくべきでしょうか？」

救い主：「わが娘よ、彼らには愛が欠けている。偽預言者は、キリストの真の教えについて決して語らない。彼らを信じてはならない。あなたは私と共に勝利するだろう。」

私：「主よ、彼らを見分けることができるのは、あなたと共にあるときだけです。」救い主：「わが娘よ、私と共にあるときだけだ。」

私：「近いうちに、そんな預言者と話すことになるのでしょうか？」

救い主：「そう、何人かと話すことになるだろう。わが娘よ、忍耐強くあれ。私に忠実であり続けなさい。平安のうちに去りなさい。」

そして、さらにこう聞こえました。「私を愛しなさい。」

私はミンゴルスハイムの聖ロクス礼拝堂でミサに参加した。

1992年6月18日 — 聖体の祝日 — 木曜日

私は7時45分から8時45分まで祈り、救い主と心を一つにした。

救い主：「書き記せ、わが娘よ、　　今、人々は深淵へと向かっている。」 私：「深淵とは何ですか？私にはよく分かりません。」

救い主：「地獄へ、わが娘よ。彼らは皆、自らの自由意志でそこへ向かっているのだ。」

私：「他の人たちは、親愛なる神様、あなたは慈愛に満ちておられ、そんなことはあり得ないと言うでしょう。」

救い主：「その魂たちはもはや生きてはいない。彼らは自分たちの父を選んだのだ。」私：「親愛なる神様、あなたはその父を何と呼びますか？」

救い主：「この世の君主だ。」私：「なぜ彼を『君主』と呼ぶのですか？」

救い主：「その高慢さによって、その子らが誰であるかが分かるのだ。」

私：「親愛なる神様、今日は祝日、聖体の祝日です。今朝は行列がありました。それについて何か教えていただけますか？」

救い主：「この祝日には、私はほとんど崇められていない。わが娘よ、人々の心は冷たくなってしまった。魂の浄化は間もなく訪れるだろう。懲らしめは必要だ。そうでなければ、さらに多くの魂が地獄へ落ちていくことになる。」

私：「まだ何か書き留めるべきことはありますか？」救い主：「わが娘よ、私はあなたに求める……」

私：「でも、神様、まず教えてください。イエス・キリストとマリアに栄光あれ。ヴィヴァ・イエス・エ・マリア。」

それを聞いて、私は尋ねました。「私に何を求めておられるのですか？」 救い主：「私への完全な献身だ。」

私：「三位一体の神よ、すべての王の王よ、私の救い主よ。私はあなたに全身全霊を捧げます。親愛なる神様、これをドイツ語でそのまま書き留めることはできませんが、私の真意はあなたがご存じです。」

私：「わが主、わが神よ、私はあなたのものであります。わが救い主よ、私はあなたを何よりも愛しています。私を
、お望みのままに扱ってください。私があなたのものであることを、常に自覚させてください。
愛する神様、なぜまたすべてを取り戻そうとされるのですか。私はすでにすべてをあなたに捧げました。」
救い主：「あなたは知っているでしょう、わが娘よ。あなたにはまた新たな使命が与えられます。ただ、今はまだではありません、わが娘よ。私に忠実であり続け、揺るぎない信仰を保ちなさい。」

時刻は8時45分だった。私は時間を忘れていた。夫が私を呼び、教会に行くにはもう遅すぎると言った。今日のミサは9時開始だったのだ。 私は立ち上がり、あっという間に身支度を整え、9時ちょうど3分前に教会に到着した。教会では、信者たちが不敬な態度で聖体拝領を受けないよう、心を込めて祈った。結局、聖体拝領を受けた人は少なかった。教会には、悪霊に取り憑かれた人も一人いた。変容の儀式が始まる前に、その人は教会を去っていった。私は聖体拝領を、息子のために捧げた。
行列には大勢の人が参加していました。
13時、ロザリオの祈りのために教会へ行き、その後、黙想の時間に留まりました。

19.06.92 — 金曜日

声が出なかった。ロートにある教会で、聖体祭とロザリオの祈りに参列した。

1992年6月20日 — 土曜日

自宅で午前7時から8時45分まで、約45分間祈りました。
合一の際、私は救い主にこう言いました。「もしお望みなら、主よ、神よ、私は書きます。」
救い主：「はい、そうしたいのです、わが娘よ、書きなさい。」
テレビで放送されたカトリック大会の様子に、私は失望しました。義母の家でそれを見ていたのです。女性たちは、独身制の廃止を求めており、さらに悪いことに、聖なるミサを司式しようとしているのです。
救い主：「彼女たちはカトリックを名乗っているが、カトリックではない。私の心に似た者はごくわずかだ。女性が聖なるミサを司式することは、私の御心ではない。
書き記せ、わが娘よ、それはルシファーの仕業である。」私：「で
は、独身制については？」
救い主：「司祭は、私の模範に従って司祭であり、伝統に忠実でなければならない。カトリックであるということは、教皇に忠実であるということでもあるのだ。」
私：「なぜ、ヴォクト神父は、聖体顕示の際、信条を唱える時に聖櫃や救い主の方を向かないのですか。なぜ信徒の方を向いているのですか？」
救い主：「そこには、まだ多くの高慢が残っているからだ。」
私：「主よ、あなたはいつも人間に関する危険について語られます。でも、私にこのことを話せる司祭が一人もいないのです。」
救い主：「わが娘よ、司祭が来る。もうそう長くはかからない。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。私はあなたを愛している。しかし、あなたが私の言葉を信じないから、あなたは私を失望させている。」
私：「不浄な霊が介入してしまったからです。」救い主：「それも必要なこ
となのだ。」
私：「神様、信じたいのですが、ドチャート神父様、フォクト神父様、そして私の夫が、私を混乱させてしまうのです。」
救い主：「それは分かっている。あなたが彼らに、私がその方であることを証明しなければな
らない。」私：「どうやって？」
救い主：「あなたには私がいる。」
私：「はい、主よ、神よ。そうします。主よ、御心が行われますように。」救い主：「愛する娘よ、平安のう
ちに去りなさい。」

9時頃、私はヴィーゼンタールにいるマリオンのもとへ行った。彼女のところには若者たちがいた。私は自分の体験と回心について話した。話している最中、不浄な霊による激しい攻撃を感じた。その不浄な霊はかなり強く、何度も私の話を遮った。

私の隣に座っていた少年に向かって、私は言いました。「あなたは告解をしていないね。」そして、彼に聖水を振りかけました。その日の午後、私が参加していたカールスルーエの『カトリックの日』の集会で、その少年は告解をしました。彼が最後に告解をしたのは5年前でしたが、午後に再び彼に会ったとき、彼は生き生きとしていて、とても幸せそうに見えました。
このカトリックの日では、多くの興味深い会話を交わすことができました。私は、教皇や口による聖体拝領を、何度も熱心に擁護しなければなりませんでした。その後、3台のテレビカメラの前で話しました。
また、フライブルクの補佐司教であるヴォルフガング・キルヒゲスナー司教にも話しかけました。私は彼に、メジュゴリエの恵みについてどう思うか、そしてなぜまだそこを訪れていないのかと尋ねました。彼は「ええ、神は至る所におられます」と答えました。
私は「ええ、ここにもいますね」と答えました。
彼は私と話すことにあまり乗り気ではありませんでした。それでも私は彼に祝福を求めました。マリオンも一緒にいました。
疲れ果てたカトリックの日を終えた後、私は最後に告解もしなければなりませんでした。そこで、謙虚な司祭、エンゲルベルト・レックテンヴァルト神父と知り合いました。いつかまた彼に会えることを願っています。彼は素晴らしい告解司祭です。
私がテレビカメラの前で話した際、ベアテ・ハンブシュが3回も同席してくれました。ベアテは、カールスルーエでのこのカトリックの日を通じて、救い主のために働くという使命に真に目覚めたのだと思います。彼女は、魂の救いのために働くとき、救い主から多くの恵みを受けるということを体験したのです。 マリオンも熱心に活動していました。このイベントには多くの「迷える息子たち」が参加していたため、彼女はカトリックの信仰について多くを語りました。私たちが神の御言葉を伝えることができたというこの恵みに、神に感謝します。

1992年6月21日 — 日曜日

私は7時45分から9時まで祈り、カトリックの日のことを思って泣きました。
私は失望し、昨日一日中、人々と語り合い、さらに3台のカメラの前で話したことは、果たして正しかったのだろうかと思いました。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。昨日、あなたがしたことは良かった。私はあなたを通して語ったのだ。」
私：「マリオンとベアテは？」
救い主：「彼女たちは私の道具だ、わが娘よ。これからも私に忠実であり続けなさい。」
私：「主よ、神よ、あなたの言うとおりです。カトリック大会で起こったことすべてを目の当たりにすれば、すぐに諦めてしまいそうです。カトリック教徒たちは
もはやカトリック信者ではない、と言うこともできるでしょう。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。愛は祈り求めてこそ得られるのだ。わが娘よ、私はいつもお前のそばにいる。」
私：「でも、今、不浄な霊もここにいるのを感じます。その存在が感じられ、手にピクピクとした感覚があります。」
救い主：「彼も、私を見つけられないことに怒っているのだ。」
救い主：「私と共にある限り、あなたは常に彼に打ち勝つことができる。私がいるところには、彼もいるのだ。」
私：「でも、心の中には安らぎと静けさ、そして平和があります。言葉では言い表せないほど美しいと感じます。」救い主：「そこには不浄な霊は入り込めない。なぜなら、あなたは私を選んだからだ。」
私：「教えてください、あなたは誰ですか？」
救い主：「わが娘よ、私はあなたの主であり神、あなたの魂の導き手だ。」私：「親愛なる神様、ま
たお尋ねして申し訳ありません。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」
13時00分 — ロートの教会でロザリオの祈り。

1992年6月22日 — 月曜日

医師室にて：
その瞬間、私は救い主を深く愛し、涙がこぼれ落ちた。私は心から祈った。救い主と一つになったとき、そこには計り知れないほどの愛があった。
救い主：「わが娘よ、書き留めなさい。あなたが書くことはすべて、一冊の本に印刷される。

印刷される前に、司祭によって校閲される。」
私：「主よ、そうなさりたいのですか? それとも、ひっそりと、人知れず続けるべきでしょうか? 」救い主：「その本を人々に広めてほしいのだ。」
私：「やりすぎな部分はいくつか削除しなければならないでしょう。」救い主：「それは司祭がやってくれる。」
私：「神様、私には司祭がいません。」救い主：「私があなたに司
祭を与えてあげよう。」
私：「主よ、神様、もしこの本が出版されたら、私は教会から追放されてしまうでしょう。」
救い主：「わが娘よ、あなたは真実を記した。私はあなたと共にいる。」 救い主：「書き続けなさい、わが娘よ
。その本はすぐに印刷されなければならない。() 」
私：「親愛なる神様、私たちがもっと早く書き進められるよう、どうか恵みをお与えください。」救い主：「はい、
君ならできる。」
私：「主よ、この本に関しては、あなたの御心が行われますように。」
私：「1992年6月11日の分を、トランク神父様に読み上げなければなりませんか? 」 救い主
：「はい、そうしなさい。」
私：「他に何か書き留めるべきことはありますか? 」
救い主：「わが娘よ、私の御心に従ってくれてありがとう。」私：「私は、何よりもあなたを愛し
ているから、そうするのです、親愛なる神様。」
救い主：「平安のうちに去りなさい、愛する娘よ。」
18時30分 ロザリオの祈り、赤の聖ミサ
20時00分　祈りの会

1992年6月23日 — 火曜日

10時00分 医師室にて：
今朝、私は約1時間祈りました。
救い主と交わっている最中、何度か医師たちに邪魔されました。救い主：「書きなさい、わが娘よ。」
私：「はい、愛するイエス様、何を書けばよろしいでしょうか? 」
救い主：「わが娘よ、ヨーロッパで新たな戦争が起こるだろう。ロシアとの戦争はさらに拡大していく。」
10時55分頃、私は12歳の少年のレントゲン撮影を行いました。彼は鼻血が出ており、鼻を骨折していました。私は彼に、「朝起きたら祈ることも必要だ」と伝えました。彼は、そのようなことは教わらなかったと言い、旧東ドイツ出身だと話しました。 私は彼に祈りのメモを渡すと、彼は喜んでくれた。それから、私が大人になって受けた洗礼について、少し話してあげた。
しばらくして（レントゲン撮影が終わった後）、私は再びイエス様に心を向けました。それはまるで導き
のように、私が救い主と再び一つになるべきだという感覚でした。救い主：「書き留めなさい、わが娘よ
。それは重要なことだから。」
私：「主よ、神よ、それはどういうことですか? 」
また、「書き留めるべきことを、私が耐えられるかどうか」とも尋ねました。救い主：「彼ら全員を祈りに招きなさ
い。」
私：「私の聞き間違いでしょうか? 」
救い主：「わが娘よ、その通りだ。」救い主：「皆を祈りに招きなさい。」
私：「どうすればいいのでしょうか。司祭たちは耳を貸してくれません。コール氏のもとへ行くこともできません。私が声をかけると、多くの人が教皇を罵ります。多くの人が教会を離脱していたり、信仰を罵ったりしています。今の世の人々の状況は、本当にひどいのです。」

私：「神様、どうか助言をお与えください。どうすれば人々を祈りに招くことができるのでしょうか？」救い主：「そう、娘よ、あなた自身がコール首相のもとへ行きなさい。」

私：「いつ、彼のもとへ行けばよろしいでしょうか？」 救い主：「できるだけ早く。」

私：「主よ、神様、そういたします。主よ、御心が行われますように。どうか私を導き、導き、私と共にいてください。」

救い主：「わが娘よ、その通りになるだろう。」

私：「愛する神様、私はあなたを何よりも愛しています。ありがとうございます。」救い主：「愛する娘よ、すぐにそうしなさい。」

私：「はい、主よ、私は連邦首相のもとへ行きます。」

救い主：「この戦争は、さらなる死者や被害をもたらすことになる。」

私：「私の周りでは、聖別された塩をまいたにもかかわらず、ハゲタカ（悪魔）たちがまた戻ってきたのを感じます。」

救い主：「わが娘よ、彼らにとっては苦痛だが、あなたが書いていることゆえに、彼らはあなたのそばにいなければならないのだ。最高司令官が彼らを強制しているのだ。」

私：「つまり、あれがルシファーということですね。」

救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。」

私：「親愛なる救い主様、祈りの集まりの後、眠ることができませんでした。夜中の1時でした。落ち着かない気分で、まるで体の至る所の皮膚の下に虫が這い回っているかのような、不快な感覚に襲われました。 すぐに悪魔のことを思い浮かべ、ベッドから飛び起きました。自分とベッドに聖水を振りかけ、短い悪魔祓いの祈りを唱えると、すべてが消え去りました。聖水をたくさん振りかけたので、眠りについた時のベッドはびしょ濡れになっていました。」

救い主：「そう、それは大勢いた。もし君がそれを見ていたら、死んでいただろう。」私：「神様、誰かが私の話を信じてくれるでしょうか？」

救い主：「手遅れになって初めて、彼らは信じるだろう。」

私：「私は、このことをそう簡単には忘れられないと思います。これほど嫌悪感を覚えるのですから、地獄では一体どんなことなのでしょうか。神様、どうか人々を救ってください。」

救い主：「わが娘よ、安らかに去りなさい。」ロザリオと、赤のミサ。

1992年6月24日 - 水曜日

午前10時、医師室にて：

私は心を込めて祈り、その後こう言いました。「主よ、もし私がこれを書き留めることをお望みなら、主よ、あなたの御心が行われますように。」

救い主：「そう、わが娘よ、書き記しなさい。」

私：「救い主からの温もりや愛、そして深い平安を感じられるのは、なんて素晴らしいことでしょう。何時間でもこうして過ごせそうです。」

救い主：「私は、私の民の時間を短縮したい。」

私：「親愛なる神様、もう一言教えてください。よく分かりません。」救い主：「人々は（神の計画よりも）早く死ななければならない。」

また邪魔が入った。ヴェロニカが私を呼んだ。客が来たのだ。10年前に私のところで社会奉仕活動として働いていた若い男性で、もうすぐ医学部の卒業を控えていた。当時、彼はプロテスタントの牧師になりたいと言っていた。信仰があったからではなく、そこなら良い収入が得られると思っていたからだ。 私はそのことを彼に思い出させ、それから今の私の信仰について話した。アンドレアスは今30歳だった。彼はまた、学業が終わったらスイスに行くつもりだと言った。そこの方が収入が良いから、給料ももっと高いからだ。

12時、礼拝堂。私はいつも礼拝堂にいる。ただ、日記に書きすぎてしまうのを避けるため、それについてはもう触れないことにしている。

19時30分、ロクス礼拝堂 — HI。ミサ。

1992年6月25日 — 木曜日

声が出ない——ロートの教会でロザリオと聖体礼儀に参加した。

1992年6月26日 — 聖心祭

祈りの集い：

救い主：「人々は悔い改めなければならない。彼らには大きな危険が待ち受けているからだ。あなたたちに残された時間は、もうほんのわずかしかない。」

私：「親愛なる神様、あなたに尋ねる勇気がありません。どうか助けてください。あなたはすべてをご存知です。私に何を望んでおられますか？」

救い主：「私に忠実であり続けること。平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」ロート教会でのロザリオと聖体ミサ。

1992年6月27日 - 土曜日

午前7時15分、私はヴァーハウゼルの教会で聖体礼儀に参加しました。その後、マリオンと一緒に日記を書き、ヘルムート・コール連邦首相宛ての手紙を書きました。

16時30分から18時15分の間、私はロートの教会にいて、そこで祈りを捧げ、告解をしました。夕方、ランタースホーフェンから神学部の学生二人、マティアスとフリドリンがやって来ました。夜遅くまで、私は彼らに日記を読み聞かせました。

1992年6月28日 - 日曜日

自宅で約1時間、祈りを捧げました。フリドリンは浴室で歌っていました。夫も邪魔をしてきました。救い主と心を一つにするのは困難でした。

フリドリン、マティアス、そして私はヴァーグハウゼルの教会へ行った。聖体拝領の後、救い主がそのメッセージを私に確認してくださった。私は泣いた。朝に書き留めた紙は、信じたくなくて破り捨ててしまっていた。それなのに、今、救い主がそれを繰り返してくださったのだ。私は涙が止まらなかったが、それでも私たちはエミリアン神父のもとへ向かった。

エミリアン神父とは約20分間話しました。

フリドリンとマティアスはその会話を聞いていた。私は一人ではないと感じた。救い主が私と共にいてくださったのだ。私は、口による聖体拝領こそが正しい道だと述べた。エミリアン神父は、救い主は聖体の小さな断片から現れるのだと語った。話し合いの後、私は神父に祝福を求めた。

それから昼食まであと1時間15分しかありませんでした。フリドリンは祈りを捧げ、マティアスは私の料理の手伝いをしてくれました。

その後、13時30分に教会へ行き、祈りを捧げました。

家に戻ると、平和を願ってラテン語で「悲しみのロザリオ」を祈りました。

1992年6月29日 - 月曜日

10:00 医師室：

昨日、エミリアン神父との会話の後、私は不満を感じていました。そこで、救い主に、聖体の小さな粒の中に御自身が宿っておられるかどうか尋ねました。

救い主：「書き記せ、わが娘よ。その小さな聖体の断片の中にも、私は宿っている。よく聞きなさい、わが娘よ。その神父は至聖なる父の教えを歪めている。彼のために祈りなさい。」

救い主はさらにこうおっしゃいました。「書き記せ、わが娘よ。戦争は急速に広がっている。すべての者が戦いに加わることになる。」

私：「『すべての人』とは誰のことですか？」

救い主：「心に憎しみを抱いている者たちすべてだ。」私：「では
、愛を抱いている者たちは？」
救い主：「彼らは戦う必要はない。」

私：「でも、憎しみを持つ者たちが優勢で、愛を持つ者たちよりも数が多いのです。」救い主：「その少数の人々のそばには私がいます。彼らは勝利するでしょう。」
私：「まるでダビデとゴリアテの物語のようです。」救い主：「そ
の通りだ、わが娘よ。」
救い主：「あなたは、愛を持つ数少ない者の一人だ。」私：「では、他の人
たちは恐れる必要があるのでしょうか？」
救い主：「もし彼らがわたしを愛しているなら、恐れることはない。」私は口には出さなかったが、彼が私の花婿でもあるのかと心の中で思った。救い主：「そう、わたしはあなたの花婿だ。」
私：「でも、まだ完全には理解できていません。」 救い主：「わ
が娘よ、あなたは私の花嫁だ。」
私：「親愛なる主イエス・キリスト様、もっと分かりやすく教えてください。花嫁とは何ですか？」 救い主：「花嫁
とは、すでに私にすべてを捧げてくれた者のことだ。」
私：「親愛なる神様、でも私は罪人だと思います。自分があなたの花嫁だなんて、理解できません。」
救い主：「これまで、それを理解できた者は誰もいなかったのだ。」
救い主：「愛する娘よ、私に忠実であり続けなさい。他の人たちに影響されてはならない。平安のうちに去りなさい。」
私：「親愛なる神様、私はあなたを愛し、感謝しています。あなたに忠実であること以外に、他に望むものはありません。」
HI. ミサとロザリオ（赤）。
インドからの神父が代理として来られ、フォクト神父は療養中でした。
20:00 祈りの会：ドチャート神父が告解を執り行った。

1992年6月30日 — 火曜日

10:00 医師室にて：
私は心から祈り、多くの人々を救い主に委ね、最後にすべての魂を委ねました。救い主：「わが娘よ、あなたの言ったことは私の心にかなう。書き留めなさい、わが娘よ。あなたは疲れている、休みなさい。」
私：「でも、明日はピルマゼンス近くのロダルベンへ行きたいのです。そこには、世界に向けた大きなしるしがあります。」
救い主：「そう、そこへ行きなさい、わが娘よ。そのしるしは、わたしのしるしである。」私：「このしるし
は、きっと教会で崇敬されるはずです。
なぜ彼らはそうしないのですか？」
救い主：「司祭たちが神の恵みの中に生きていないからだ。」
私：「でも、もう40年も経ちました。何かが起こらなければならないはずです。」救い主：「何かは起こるでしょう。ただ、今はまだです。」
救い主：「それを書き留めなさい。私はあなたを愛している、わが娘よ。」
しばらくして：
救い主：「そのしるしは現れるだろう。」（救い主がすでに私に約束してくださったしるしです。）
私：「そのために準備をしておかなければなりませんか？
」救い主：「常に私の中に留まりなさい。」
私：「はい、主よ。私の唯一の願いは、いつもあなたと共にいることです。それ以上に美しいものなどありませんから。」
救い主：「そのしるしは教会で起こる。」救い主：「そのしるしがあなたに起こ
ることを望むか？」
私：「はい、主よ、神よ、私の花婿よ。そして、あなたから離れることなく、聖人たちと共に永遠にあなたを賛美し、称え続けたいのです。あなたの愛の中にいることほど美しいものはないからです。」
救い主：「そうなるだろう、わが娘よ。」
救い主：「私はあなたに、他の魂たちを救う手助けをするという使命を与える。」私：「他の魂たちとは、誰のことですか？」

救い主：「疑っている魂たちだ。」
私：「ああ、主よ、それはとても多くの魂ですね。でも、私はあなたを何よりも愛していますから、あなたの望む通りにそういたします。」
救い主：「わが花嫁よ、平安のうちに去りなさい。」
私：「親愛なる神様、私の聞き間違いではありませんか？もう一度おっしゃってください。」救い主：「そう、わが娘よ、あなたは私の花嫁だ。」
私：「主よ、神よ、私の花婿よ、すべてに感謝いたします。」ロザリオと、赤の祭服による聖体祭。

1992年7月1日 - 水曜日

10時、医師室にて：
約10分間の心からの祈りの後、15分ほど沈黙が続いた。すると、救い主の声が聞こえた。「わが娘よ、大いなる戦争はすでに始まっている。地上のすべての人間は責任を負っている。私は、多くの人々が祈ることを願っている。悔い改め、断食しなさい。私はあなたを愛している、わが娘よ、平安のうちに去りなさい。」
私：「主よ、神よ、ありがとうございます。愛する主イエス様、ありがとうございます。すべての人々に憐れみをお与えください。主よ、私たちを救ってください。私たちを滅びさせないでください。私たちはあなたの子供たちです。」

午後、私はヴァフツィヒ家の自宅で祈りを捧げました。数人の信者が集まり、両方の部屋が満員でした。その後、私たちは聖ミサに向かいました。
ウェーバー神父様がミサを司式されました。これが、私が神父様のもとで参列した最後のミサだったと思います。ウェーバー神父様はまもなく定年退職されます。
その後、私たちはブリギッテとフランツの家へ向かいました。フリドリンもそこにいて、ヨゼフ、マルクス、マティアスという3人の学生も一緒でした。
ブリギッテとフランツの家には他にも大勢の人が集まっており、私は自分の体験や経験、そして信仰について話しました。

1992年7月2日 - 木曜日

10:00 職場・医務室：
救い主：「書きなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ。何を書けばよろしいでしょうか？」救い主：「あなたの未来を私に捧げなさい。」
私：「主よ、神よ、私のイエス様、私はそれをあなたに捧げます。なぜなら、私は自分の人生と未来をあなたの御手に委ねており、それはあなたのものだからです。」
救い主：「わが娘よ、その言葉、私は気に入った。」
私：「はい、主よ、イエス様。あなたはそれほど慈愛に満ちておられ、あなたのもとには良いことしかないことを知っているからです。いつもあなたと共にいること以外、私には何も想像できません。私はぶどうの木に結ばれた枝です。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。未来を決めるのは私だ。」私：「あなたが決めるのなら、どうすればそれを知ることができるのでしょうか？」救い主：「私があなたに求めること、それを実行すればよいのだ。」私：「それがあなたからのものだと、どうすれば分かるのでしょうか？」
救い主：「私があなたにそれを悟らせてあげる。」
私：「親愛なる神様、私は今すぐ何かをしなければならないのですか？」 救い主：「そう、わが娘よ。」
私：「何をするのですか、主よ、神よ、私の花婿よ？」 救い主：「私があなたに告げることを、固く信じなさい。」
私：「主よ、私の愛する、慈悲深い神様。私はそれを固く信じます。なぜなら、あなたはすでに私に生きた信仰を与えてくださったからです。」

救い主：「書き記しなさい、わが娘よ。未来は、私の望む通りになる。」私：「私の未来のことですか？」

救い主：「そう、お前の未来だ。それは私のものだ。」

私：「主よ、神よ、あなたの御心どおりになりますように。主よ、神よ、私はあなたを深く愛しています。」救い主：「わが娘よ、その言葉、私は喜んでいる。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私はあなたを愛している、わが花嫁よ。平安のうちに去りなさい。」私：「わが主、わが神よ、感謝いたします。」

救い主が、私を抱きかかえてくれるとおっしゃっていたことを思い出した。
救い主：「私が望む場所へ、あなたを運んであげよう。そうすれば、あなたは同時に二つの場所に存在することになる。」
私：「でも主よ、私は一人しかいません。」 救い主：「私はあなたを増やすことができる。」
私：「親愛なる神様、私には理解できませんが、あなたならそれができると信じています。」私：「主よ、なぜ私を二つの場所に必要とされるのですか？」
救い主：「不信仰者たちを納得させるためだ。愛する娘よ、そう尋ねてくれて嬉しい。娘よ、私に忠実であり続けなさい。」
私：「はい、主よ、神様。私はあなたに忠実であり続けます。愛に満ちた父よ、ありがとうございます。」

1992年7月2日 - 木曜日

ロートでのロザリオとHIミサ。

1992年7月3日 — 金曜日

午前10時、医師室にて：
私は心から祈り、神の御心である場合にのみ書き留めたいと願った。救い主：「書きなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ。あなたが望まれるのですから、書き留めます。」救い主：「愛する娘よ、私はこの時代を変えたいのだ。」私：「どうやって時代を変えることができるのですか？」
救い主：「私は時間を短縮するのだ。」
私：「神様、私は愚かすぎて理解できません。もっと分かりやすく教えてください。」救い主：「災いがあなた方の上に降りかかる。」
私：「主よ、神様、また脅しのメッセージですね。」救い主：「人々は悔い改めようとしない。」
私：「親愛なる神様、あなたが『災い』と呼ぶものが何なのか、教えていただけますか？」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。大干ばつの災害が訪れる。」
私：「親愛なる救い主よ、また不浄な霊を感じます。右手を引っ張られています。本当に誰かがいるのでしょうか、それとも私の気のせいでしょうか？」
救い主：「そう、何体もいる。」
私：「今朝はすでにたくさん祈りました。」救い主：「祈り続けなさい。」
私：「親愛なる神様、私が恐れていないことを感謝します。」救い主：「私と一緒にいれば、恐れる必要はない。」
私：「あなたがいつも私と一緒にいてくださるかどうか、どうやって分かるのでしょうか？」救い主：「私はいつもあなたと共にいる。」
私：「実は、まるで一人ぼっちになったことがないような気がするんです。まだ何か書き留めておいたほうがいいですか？」救い主：「書き留めなさい。あなたは私の愛する娘だ。」
私：「主よ、神様、あなたを何よりも愛しています。この愛が決して途絶えることのないように願っています。」
救い主：「平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」
16時から17時の間に、庭に水をまきました。10缶分の水をまいた後、気分が悪くなり、吐き気とめまいがして、胸に激しい痛みが走りました。

息をするのもやっとでした。ゆっくりとベッドへ横になりました。すぐにゲブハルト・ハイダー神父が聖別した聖水を飲み、ニトロリンガル・スプレー04を口の中に噴霧しました。
息子が医者を呼ぼうとした。その直後、上腹部にも痛みが走った。

心臓の痛みは約15分間続きました。私は救い主に、「まだ日記を書き終えていないから、死んではいけない」と祈りました。もう一度、聖水を飲みました。すると、気分が良くなりました。
それから教会へ向かった。聖体拝領の後、さらに気分が良くなった。私の救い主は最高の医者だ。
その後、ランタースホーフェンのフリドリンとロートのエーリッヒがやってきました。私たちはバーバラ・ヴァイガンドの著書を読みました。誰もが読むべき一冊です。

1992年7月4日 - 土曜日

一時間の祈りの後、私は聖体拝領の際に救い主に、今日私が書くことを望まれるかどうか尋ねました。
救い主：「はい、わが娘よ、私はあなたに書いてほしい。」
私：「夫や義母に邪魔されてしまって、残念ながら書き留めることができません。」
救い主と一つになっているとき、悪魔は、人が何も書き留められないように邪魔をすることほど喜ぶことはありません。
義母は現在病気です。ここ数日、教会にも行っておらず、歩くのもやっとという状態です。しかし、私が家でメッセージを書いている今、彼女はまるで最も健康な人のかのように、重い掃除機で階段の踊り場を掃除しています。
私は神を第一に置いています。まず祈りを捧げれば、その後、愛を持って掃除や仕事をより良く行えるようになり、より多く、より良い成果を上げることができます。
ようやく集中し直したかと思えば、夫に邪魔されてしまいました。
救い主が私と話していることなど、誰も気にかけてくれません。職場の方が、家よりもまだましなほどです。今、隣人の犬が吠え始め、通りを走る車が
が通り過ぎていく。
「親愛なる救い主よ、あなたとお話ししようとしているのです。」
約15分後、夫は出かけてしまい、私は一人になりました。電話が鳴らないように、受話器を横に置いておきました。
誘惑が私を襲った。しばらく泣いた。
私に話しかけているのが本当に救い主なのか、と疑った。心が重かった。もし私に話しかけているのが悪魔であって、救い主ではないのなら、今すぐ死んだほうがましだと、救い主に言った。だって、私はすべてを救い主に捧げたのであって、悪魔には捧げていないのだから。
すると、こう聞こえてきた。
「書きなさい、わが娘よ。わたしのもとへの道は険しく、狭い。その道を歩む者はごくわずかだ。そう、わが娘よ、あなたもまたその道の上にいる。道が険しければ険しいほど、あなたにはより多くの誘惑が襲いかかるのだ。」
私：「親愛なる救い主よ、これを書くのは私にとって辛いことです。なぜなら、あなたが私に語ってくださることを聞いてくれる司祭がいないからです。 私はとても未熟で、文章を書くことにも不器用で、大の泣き虫です。あなたの声を聞くに値しません。しかし、一つだけ私を惑わすことのないものがあります。それは、あなたへの私の愛です。救い主よ、もうこれ以上、書くことはできません。」
救い主：「平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」
私：「親愛なる神様、どうかお許しください。私にとってとても辛いこれらの試練についても、感謝いたします。私はやはり弱い人間、一粒の塵に過ぎません。」
16時30分～19時45分：この時間、私はロートの教会にいました。私はすべて、聖体拝領も含めて、聖母マリアに捧げました。その後、ヴォクト神父の代理であるポール・アダムブラム神父に告解をしました。

1992年7月5日 — 日曜日

7時30分～9時15分：自宅で聖体礼儀の前に祈りを捧げ、心を一つにしました。
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。私は、あなたが果たさなければならない使命のために、あなたに時間を与える。」私：「主よ、私はどのような使命を果たさなければならないのですか。それは教会と関係があるのですか？」
救い主：「そう、この任務は教会のためだ。」

私：「この任務を福音書に例えることはできますか？」救い主：「はい、できます。」
私：「推測したくありません。どうか教えてください。」救い主：「書き記
しなさい、わが娘よ。」
私はしばらく待ってから言いました。「わかりません、主よ。よくわからず、どんな課題になるのかも想像がつきません。」
救い主：「それはまだ先のことだ。私があなたに与えるこの使命を、あなたは果たさなければならな
い。」私：「でも、何をするのか分からなければ、何もできません。」
救い主：「聖なる父への手紙を、ここで代理を務めている神父に渡してください。そして、その神父が聖なる父に直接手渡さなければなりません。」
私：「その神父が私たちの教会に来ることを、あなたは望まれたのですか？」救い主：「そう
、それは私の意志だった。」
私：「彼もそうするつもりですか？」 救い主：
「はい、彼はそうするでしょう。」
私：「聖なる父様への手紙の写しを持っていてよかった。はい、主よ、そういたします。あなたの御心が行われますように。」
救い主：「愛する娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

私はさらに感謝の祈りを捧げました。
13時30分にはロザリオの祈りがあり、黙想の時間はなかった。しかし、ヘドヴィグ・H.さんはロザリオの後に、聖なる尊い御血の連祷を先導して祈ってくれた。
教会の前には、寝るための毛布を探しているホームレスの人たちが二人立っていました。私は彼らを自宅に招待しました。ヘドヴィグも一緒に来てくれました。
二人に食事を振る舞った後、ヘドヴィグ・Hさんと一緒にロザリオを唱えました。ホームレスのうち一人はすぐに眠りにつき
、もう一人は一緒に祈ってくれました。私たちは二人に寝具を二枚差し上げ、彼らは立ち去りました。
18時30分：ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂でロザリオと聖体礼儀に参加した。ヘドヴィグも一緒だった。

1992年7月6日 - 月曜日

10時00分 医師室：
患者さんがそれほど多くなかったことを神様に感謝します。夏は他の季節に比べて患者さんが少ないのです。その分、もっと祈りに時間を割くことができます。私は無駄な会話は好きではないからです。永遠の命は死後に始まるのではなく、今、この地上で始まるのです。
だからこそ、第一の戒めと第二の戒めはそれほど重要なのです。神への敬意がないところには、愛もありません。
祈りの後、私は救い主と一つになりました。
救い主：「今こそ、あなたがた全員が試される時が来た。気をつけなさい、サタンは強い。多くの者がこの試練に耐えられない。彼らには愛が欠けているのだ。絶えず祈りなさい。霊は意欲的だが、肉体は弱い。神の御霊があなたがたの中に宿っている。あなたがたは御霊に栄光を帰さなければならない。」 救い主：「わが娘よ、疑ってはならない。平安のうちに去りなさい。」
私：「今、私の内には多くの温もりと愛を感じています。しかし、その声を単に『声』と呼ぶのは申し訳ない気持ちです。なぜなら、それは内なる対話だからです。
『声』とは、通常、それがはっきりと聞こえるときや、人が話すときに使う言葉です。私は、計り知れない深みからそれを聞いています。ですから、主よ、神よ、どうかお許しください。
私はあなたの愛や御臨在を疑っているわけではありません。ただ、他の人々がこのような声を聞かないことに驚いているのです。最初は、私と同じように誰もがこれを聞いているのだと思っていました。しかし、そうではないと知ると、これが私自身のものではなく、あなたからの大きな恵みであることを理解するには、確かに時間がかかるものです。 主よ、愛するイエス様、この大きな恵みに感謝いたします。
ロザリオと聖体礼儀（赤）。
20:00 祈りの会：2時間祈りました。

1992年7月7日 - 火曜日

10:00 医師室:

私は祈り、主と心を一つにしました。

救い主:「書き記せ、わが娘よ、私には必要なものが……」

私:「主よ、『書き記せ、わが娘よ』とおっしゃるあなたは、いったいどなたなのですか? 」

救い主:「イエスと書き記せばよい。」

救い主:「近い将来、私は力強い信仰の証し人を必要としている。娘よ、お前はまだそれほど強くはない。」

私:「親愛なる神様、親愛なるイエス様、私が強くなるためには、何をすればよいのでしょうか? 」救い主:

「私を完全に信頼しなさい。」

私:「主よ、神様、あなたに完全な信頼を寄せられるよう、どうかその恵みを授けてください。」救い主:「わが娘よ、与えよう。」

私:「主よ、神よ、あなたは私の慈愛に満ちた父です。あなたはすでに私に生きた信仰を与え、次にあなたへの忠誠心を、そして今、あなたへの信頼を与えてくださいました。

これらは美徳なのでしょうか? 」

救い主:「そう、それらは今、あなたが持っている美徳だ。」

私:「ベッカー夫人が私にメモをくれました。そこには、R・デニンガーという若い男性がクローン病を患っている、と書かれていました。」

救い主:「その方は、この十字架を愛をもって背負うべきです。」私:「『十字架』という綴りは合っていますか? 」

救い主:「ええ、私が彼に与えたその『十字架』のことです。」その後:

救い主:「娘よ、バーバラ・ヴァイガンドの本が君を喜ばせ、助けになっていることを嬉しく思う。」

私:「はい、愛するイエス様、それは最高の本の一つです。みんなが読むべきですね。」

私は、すべてを救い主に委ねていたので、休暇について救い主に尋ねました。私:「もしあなたが私の立場だったら、どうしますか? 」

救い主:「家にいなさい、わが娘よ。」

私:「はい、主よ、神様。そうします。良いアドバイスをありがとうございます。」私:「まだ何か書き留めておくべきことはありますか? 」

救い主:「私はあなたを愛している、わが娘よ。平安のうちに去りなさい。」

18時30分 ロザリオと聖体祭(赤のミサ)。

1992年7月8日 - 水曜日

10時00分、医師室にて:

ヴェロニカと私は一緒に「悲しみのロザリオ」を祈り、その後「尊い御血の連祷」やその他の祈りを捧げました。

私:「親愛なる神様、すべてをあなたに委ねると、悩みや苛立ち、疑いや恐れから解放されて、とても素晴らしいことです。あなたが仰る通りになるでしょう。すべてが、あなたの御心通りに起こりますように。」救い主:「近い将来、大災害が起こる。」

私:「どこで? 」

救い主:「皆が私の子供たちです。祈らなければなりません。」

救い主:「ある原子力発電所が、多くの人々を滅ぼすことになる。書き留めておきなさい、わが娘よ。すべては金のためだ。ドイツはセルビアに対するこの戦争に加担するだろう。」私:「では、やはりセルビアで戦争が起こるのですか? 」

救い主:「ええ、もうすぐです。」

私:「親愛なる救い主よ、あなたの御霊は私の霊と一つになっているからこそ、私にそう語りかけてくださるのですね。」救い主:「そう、その通りだ。」

救い主:「気をつけなさい、誘惑はますます強まっている。わが娘よ、私の手をしっかりと握りしめていなさい。」

私:「愛しき、慈悲深い神様、そういたします。私の守護天使がそれを思い出させて守ってくれますように。そして、聖母マリア様が、すべての御子たちと私の上に御守りのマントを広げてくださいますように。」

救い主：「わが娘よ、平安のうちに去りなさい。」

午後3時45分、オッガースハイムからヨアヒム神父から電話がありました。私は彼と約10分間話しました。彼は、私がH・コール連邦首相と話をしたかどうか知りたがっていました。私は
「ミュンヘンでバレエを観賞されていた際、首相とその奥様にお会いしました」と答えました。（私は義母の家で見ていたニュース番組で、お二人をテレビで目撃したのです。）
おそらく、手紙を読んで神の御心に従うことよりも、そちらの方が重要なのかもしれない。休暇期間中、私たちの教会では水曜日にも聖体礼儀が行われていたので、ロクス礼拝堂に行く必要はなかった。
18時30分、ロザリオと聖体ミサ（赤のミサ）。

1992年7月9日 - 木曜日

今朝、1時間以上祈りました。「結合」の祈りの最中に、
救い主：「書き記せ、わが娘よ。あなたは教皇に招かれる。」
私：「ヴェロニカの休暇の前ですか、それとも後ですか。そして、私は至聖なる父に謁見を許されるのでしょうか？」
救い主：「はい、あなたは彼と話すことになる。」
私：「主よ、おっしゃったとおりに信じます。今、その通りになると信じています。」
救い主：「わが娘よ、近い将来、あなたに何が起こるかを知る必要はない。あなたの未来は私のものである。」
私：「はい、主よ、その通りになりますように。」
私：「つまり、これからどうなるか心配する必要はないということですね。その心配は、あなたが私から取り除いてくださるのですね。」
救い主：「その通り書いたね、気に入ったよ。その通りになるだろう。」救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

18時30分、ロザリオと赤の聖体祭。
聖体拝領の後、しばらくして、私はアダムブクラム神父が私に話しかけてくれるよう祈りました。そうすれば、救い主の御心を神父にお伝えできるからです。
教会を出ると、神父様が私に声をかけてきて、明日ハイデルベルクへ行くかどうか尋ねてきました。私は、救い主からのメッセージを神父様にお伝えしたいと伝えることができました。
神父は、「もし明日6時45分に教会の前に立っていなければ、ハイデルベルクへは同行しない」と私に言いました。そして、親しげに私に別れを告げました。
聖体奉仕者のアントンは、私が神父様と話しているのを見ていました。

1992年7月10日 - 金曜日

10時00分、医師室にて：
私は救い主に、今朝6時50分頃にロート教会の前にいたが、ポール神父はそこにいなかったことを話した。
その後、夫と私はハイデルベルクへ向かう車中で一緒に祈りました。病院では、ヴェロニカと一緒に祈りました。
救い主は、私にこれを書くようにと望まれた。
救い主：「人々は飛行機から身を守るべきだ。」私：「それはドイツ連邦共和国にも当てはまりますか？」
救い主：「そうだ、わが娘よ。」
私：「ドイツ連邦共和国は飛行機による脅威にさらされているのですか？」
救い主：「そう、もうすぐだ。飛行機は東からやってくる。」
私：「主よ、私が書かなければならないことは、とても辛いことです。」救い主：「わが娘よ、皆に祈らせなさい。」
救い主：「娘よ、人々は大きな危険に陥っている。彼らを祈りに招きなさい。私は再び時間を短縮しなければならない。誰にも残された時間はもうほとんどないのだ。」
私：「神様、まだ何か書き留めるべきことがありますか？」

救い主：「ええ、あなたが書くことはすべて、すぐに印刷されなければならない。」
私：「親愛なる神様、マリオンと私がもっと早く書けるよう、お慈悲をお与えください。書く際に多くの妨げがあり、なかなか進まないのです。」救い主：「わが娘よ、二人は努力しなければならない。」
私：「はい、主よ、神様。書くよう努めます。」救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

その交わりの時、私は温かさと深い愛を感じ、多くの恵み、とりわけ安らぎと平安を授かりました。そう、救い主が私の内に臨在しておられるのを感じました。
主は、すべての子供たちを救おうとする救い主のように語られました。

15時：ミリアム出版から届いた小包を開けました。同封のニュースレターで、
H. ヨーゼフ・クンツリ氏が亡くなったと書かれていました。私は彼のために長い間祈っていました。彼はその本を印刷するはずだったのですが、今や亡くなってしまったのです。
私は泣き出し、彼のためにろうそくを灯し、聖水を振りかけ、すぐに彼のために祈り始めました。
18時30分：ロザリオと、赤の祭服を着ての聖体祭。
聖ミサの後、私は聖父、ポール・アダムブクラム神父宛ての手紙を彼に渡し、それを直接聖父に手渡すよう頼みました。それから、月曜日の
19時45分に、私の日記から救い主が彼のために語られた箇所を読み聞かせるよう招待した。また、私たちが何を、どのように祈っているかを見ていただくために、20時からの祈りの会にも招待した。彼は私の家に来ると言った。
その後、マリオンが来て、私たちは日記を書きました。

1992年7月11日 - 土曜日

私はワグハウゼルの教会に、7時15分ではなく8時15分に着いてしまい、全く気づいていませんでした。イルマが私に話しかけてきて、今何時か知っているかと尋ねました。
私が「7時15分」と答えると、彼女は笑いながら、もう8時15分だと教えてくれた。こんなことは今まで一度もなかった。
その後、マリオンのもとへ行き、一緒に日記を書きました。
午後、16時30分から19時45分まで教会に行きました。さまざまな願いを込めて祈りました。

1992年7月12日 - 日曜日

7時50分〜9時00分：祈りの後、私は主と一つになりました。
救い主：「世界は極めて大きな危機に瀕している。ヨーロッパには、過ちを正す時間がほとんど残されていない。ほとんどすべての人々が失われてしまうだろう。彼らは永遠の命に向けて準備ができていないのだ。
人々は自分の意志をサタンに委ねてしまった。」 私：「でも、教会に通っている人はたくさんいますよ。」 救い主：「その中から、まだ多くの者が背き去るだろう。」
私：「それが『ふるいにかける』ということですか？」　救い主：「そう、サタンはすでにふるいにかけている。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。世界は今ほど罪にまみれたことはかつてなかった。
戦争は、これまでのあらゆる戦争と同様に、急速に拡大するだろう。わが娘よ、祈りなさい、たくさん祈りなさい。祈りによって、多くのことを償うことができるのだ。」
私：「まだ何か書き留めるべきでしょうか？」
救い主：「私は、非常に多くの祈りのグループを必要としている。」
私：「私たちの周りにはたくさんの祈りのグループがあります。」救い主：「多くの人々を救うには、まだ十分ではありません。」
救い主：「わが娘よ、毎日、多くの魂が失われている。あなたが率いる祈りの集いは多くの実を結んでいるが、それらはまだ熟す必要がある。」

私：「それらが実を結ぶためには、何をする必要があるのですか？」救い主
：「愛さなければならない。」
私：「お聞きする勇気がありません。どれも脅しのメッセージのように聞こえるからです。」

救い主：「黙示録のほとんどすべてが、脅しのメッセージなのだ。わが子たちよ、私はあなた方を慰めることはできない。あなた方は多く祈り、断食しなければならない。私を愛する者たちは救われるだろう。そして、私を愛さない者たちは、すでに彼らの父、すなわちこの世の支配者を選んでいるのだ。」私：「親愛なるイエス様、あなたは世界の勝利者であり救い主です。あなたなら、すべての人を救うことができます。」 」 救い主：「わが娘よ、人々の自由意志が彼らを奈落の底へと追いやっているのだ。わが娘よ、私はあなたを愛しているし、今もなおすべての人々を愛している。平安のうちに去りなさい。」
私：「愛する神様、私たち全員をお赦しください。あなたを愛さない人々のためにも、私はあなたを愛しています。
私たちを憐れみ、滅びることのないよう、どうか救ってください。世界への警告となるこの痛ましいお言葉を、感謝いたします。」
10時：私はHIのミサ（赤）に出席した。
13時30分、ロートの教会で、説教なしのロザリオの祈り。ポール神父は説教をしませんでした。

1992年7月13日 - 月曜日

10時00分 医師室：
私は心から祈り、その後、救い主と一つになった。
救い主：「わが娘よ、よく聞きなさい。印刷されたすべての用紙は、ある司祭が持ち帰り、確認し、印刷を依頼する。どの出版社が印刷するかは、その司祭が決める。それはあなたの心配事ではない。」
それから、救い主はこう言われた。
「サタンは強大だから、日記は人知れず保管しておきなさい。サタンは、私が書いたものをすべて破壊しようとしている。その本が完成して初めて、それを読むことが許されるのだ。」
私：「まだ何か書き留めるべきですか？ 」
救い主：「ええ、書き留めるべきです。私の霊はあなたの霊と結びついているのです。そうすれば、あなたは私の声をより鮮明に聞くことができるでしょう。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。この数日のうちに、戦争はさらに激化するだろう。」私：「どの戦争のことですか？ ボスニアですか、それともロシアですか？ 」
救い主：「双方だ。そう書き記しなさい、わが娘よ。死にかけている人々のために祈りなさい。」私：「他に知っておくべきことはありますか？ 」
救い主：「そう、わが娘よ、私を伴わずに、一人で行ってはいけない。」
私：「親愛なる神様、私はいつもあなたのそばに、あなたと共にいたいと願っています。」救い主：
「その通りだ、わが娘よ。平安のうちにそこへ行きなさい。」
私：「主よ、神様、あなたを愛しています。ありがとうございます。」

1992年7月14日 — 火曜日

10時、医師室にて：
交わりの最中：
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。」私：「また戦
争の件ですか？ 」救い主：「そう、セルビアのために祈
りなさい。」
私：「H・パニッチ氏がすべてうまくやってくれると思っていたのですが?
」 救い主：「それはサタンの罠だ。」
私：「では、彼はセルビアにとってふさわしい人物ではないのですか？ 」 救
い主：「いいえ、彼は羊の皮を被った狼だ。」
私：「『セルビアのために祈れ』とおっしゃるなら、この戦争は防げるのですか？ 」救い主：「多くの魂が救われるだろう。セルビアでの戦争では、ボスニアとクロアチアを合わせたよりも多くの魂が失われることになる。」
しばらくして、私はこう聞こえました：
「娘よ、書き留めなさい——聖母マリアの御出現がまもなく訪れる。」私：「どこで？ 」
救い主：「赤い教会で。祈り、断食しなさい。そのしるしはまもなく、近い将来に現れるだろう。」
私：「なぜ『近いうちに』と言うの？ 」

救い主：「時を決めるのは私だからだ。この教会では祈らなければならない。」救い主：「わが娘よ、よく聞きなさい。私を失望させないでくれ。」
私：「いいえ、主よ、神よ、私はあなたを失望させません。どうか、私が勇気を持って立ち向かえるよう、その恵みをお与えください。」
救い主：「愛する娘よ、平安のうちに去りなさい。」
18時30分、ロザリオと赤のミサ。
21時頃、ポール・アダムブクラム神父が私を訪ねてきた。神父は、月曜日に再び祈りの集いに来ることを約束してくれた。

1992年7月15日 — 水曜日

10時00分、医師室にて：
私は祈り、救い主と心を一つにした。
救い主：「人々はサタンの罠にかかっている。」私：「親愛なる神様、あなたが『人々』とおっしゃるなら、私はすべての人を思い浮かべます。」救い主：「罠にかかっていないのは、ほんの一握りの人々だけだ。」
私：「それはドン・ボスコの幻視のようですね。」
救い主：「わが娘よ、あなたの言うことは間違っていない。彼らは皆、悔い改めなければならない。多くの人々にとっては、すでに手遅れなのだ。」
私：「まだ何か書き留めるべきでしょうか？」 救い主：「はい、書き留めなさい。それは実に重要なことなのです。」 私：「はい、主よ、神様。それは何でしょうか？」
救い主：「今年、セルビアで戦争が勃発する。書き留めなさい、わが娘よ。教会に蔓延する大きな泥も一因である。司教たちは教会の真の教えに立ち返らなければならない。」
私：「今、教会で最も深刻な問題は何ですか？なぜ教会に泥が溜まっているのですか？」 救い主：「私の御体の冒涜です。手による聖体拝領は早急に廃止されなければなりません。」
私：「私は本当に無力です。」
救い主：「その通りだ。しかし、私と共にある限り、あなたは無力ではない。」
私：「一体どうすればいいのでしょうか？」
救い主：「そのことについて、繰り返し語り続けなさい。それが導入されたのと同じ速さで、廃止されなければならない。書き記しなさい、わが娘よ。もし彼らがそうしなければ、彼らには罰が下るだろう。私に対する不従順は、すべての人間に降りかかることのできる最大の悪である。」
救い主：「そのことを語り続けなさい。あなたがそれについて語る時、私はあなたと共にいる。わが娘よ、私に忠実であり続けなさい。私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

1992年7月16日 — 木曜日

10時、医師室にて：
祈りの後、私は救い主と一つになった。救い主：「書き記せ、わが娘よ。」
私：「はい、主よ。私に語りかけてくださることに感謝します。私は何よりもあなたを愛しています。なぜなら、私にとって重要なのは、あなたが私に何を語られるかという好奇心ではなく、魂の救い、そしてあなたが私をあなたのしもべだと言われる以上、あなたの御心を行うことだからです。 私の霊をあなたの聖霊と一つにする以上、他の者が介入することを恐れる必要はありません。あなたが許される時だけ、それが可能となるのです。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。すべての者は広い道から立ち返らなければならない。彼らにはあまり時間が残されていないからだ。私が時間を短縮しなければならない以上、回心は速やかに行われなければならない。死者は非常に多く、彼らを葬る司祭は一人もいない。彼らのために祈りなさい。」
私：「私が書いた内容で十分でしょうか、それともまだ何か書き加えるべきでしょうか？」 救い主：「できるだけ早く礼拝堂を建てなければならない。」
私：「神様、建築家のヴォルフガングに、設計図を早く仕上げてくれるよう恵みをお与えください。まだ資金も十分ではありま

せん。」

救い主：「すべては適切な時に整うでしょう。」
私：「神様、礼拝堂を建てるのを手伝ってくれる作業員も送ってください。」救い主：「娘よ、私たちには時間があまりない。
」
私：「なぜ『私たち』とおっしゃるのですか?
」救い主：「私はあなたたちと共にいるのだ。
」
私：「主よ、御心が行われますように。私は御心を果たすよう努めます。そのための恵みをお与えください。」
18時30分 ロザリオと聖体礼儀（赤のミサ）。

1992年7月17日 - 金曜日

10時00分、医師室にて：
私は祈り、救い主と心を一つにしました。
救い主：「わが娘よ、私は多くの祈りを必要としている。戦争が始まったのだ。」私：「あなたは、戦争が
1992年7月1日に始まったとおっしゃいましたね。」
救い主：「ロシアの戦争のことだ。」
私：「神様、なぜこの戦争を『ロシアの戦争』とおっしゃるのですか? 」
救い主：「彼らはセルビア人の後ろ盾だからだ。この戦争は止められないだろう。」私：「まだ何か書き留めておくべきでしょ
うか? 」
救い主：「ええ。近い将来、多くの死者が出るでしょう。」救い主：「わが
娘よ、私は力強い祈り手が必要です。」私：「救い主様、あなたが言う『力
強い祈り手』とはどのような人たちですか? 」
救い主：「心から祈る者たちのことだ。書き留めておきなさい、わが娘よ。まもなく聖母マリアの御出現があるだろう
。」
私：「でも、それはもうおっしゃいましたよね。」救い主：「その
時は近づいている。」
私：「『近づいている』とはどういう意味ですか
? 」救い主：「彼女を愛しなさい。」
私：「私は彼女を十分に愛していないのですか?
」救い主：「あなたは彼女とあまり話をしていな
い。」
私：「親愛なるイエス様、これからは聖母様ともっと話し、もっと愛することをお約束します。」
救い主：「わが娘よ、あなたが書いたことは私の心に響く。わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

午後、連邦首相府から郵便物（AZ: 012—K—0007772/92/0()01）が届いているのを見ました。— 写し参照、155ページ -
18時30分、私はこの願いを込めて教会でロザリオを祈り、聖体拝領のミサにも参列しました。
聖体拝領の後、私は救い主に、どうすべきか尋ねました。時刻は19時40分頃でした。
救い主：「彼と話すことになると思うか? 」 私：「はい、そう思います。」
救い主：「彼のために祈りなさい。連邦首相からまた手紙が届くでしょう。」私：「はい、主よ。彼とこの件
のために祈ります。」

1992年7月18日 — 土曜日

7時15分、私はヴァーグハウゼルの教会にいました。その後、ほぼ毎週土曜日の聖体拝領後のミサの後と同じように、マリオンのもとへ行き、そこで日記を書きました。今日、私はモニカ・ハンブシュにバーバラ・ヴァイガンドの本をプレゼントし、それを読めば私のことをもっと理解してくれるだろうと伝えました。
16時30分～18時30分、ロートの教会にて：祈りを捧げた後、ポール・アダンブクラム神父のもとで告解を受けました。
家に帰った途端、また攻撃を受けた。今回は、悪魔がヘドヴィグ・H.と私の夫を乗っ取った。ヘドヴィグは、どこかの「恵まれた人」がそう言ったからという理由で、私が教会で頭巾を被ることをどうしても望んでいる。

私は彼女にこう言いました。「確かに、私たちはスカーフを身につけるべきだとは思います。でも、自分自身が身につけていないのに、他人をからかう必要はないでしょう。 救い主にとって、今日、1000人の女性がスカーフを身につけていても心が清くないよりも、清い心を持つことの方が重要だと私は信じています。もし救い主が、この猛暑の中、教会で私がスカーフを身につけることを望まれるなら、私は明日すぐにでもスカーフを身につける用意があります。」
私はすぐにロザリオを手に取り、祈りました。その後、静けさが訪れました。不思議なことに、こうした誘惑は告解の直後にやってくるのです。

1992年7月19日 — 日曜日

私は夜4時20分から5時20分まで、そして朝8時から9時15分まで祈りました。
昨晩、昨夜、そして今朝、不浄な霊に悩まされていたので、祈りの後、交わりの時において救い主に尋ねました。
私：「書くことを望んでおられますか、それとも書かないことを望んでおられますか？」救い主：「いや、書き続けてほしい。」
私：「あなたが私に語りかけておられると信じています。そして、その不浄な霊が、私が書くことを望んでいないことも悟りました。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。人々は綱の上におり、よろめいている。」
私：「神様、別の言葉で教えてください。それが私にはよく分かりません。」救い主：「人々はもはや信じる能力を失ってしまったのだ。」
私：「なぜ、彼らはそれほど信じることができないのですか？」救い主：
「彼らを救ってくださった方を愛していないからだ。」私は何と言えばいいのか分からなかった。
救い主：「私に尋ねなさい、わが娘よ。」
私：「まだ、私が書いたものを校正してくれる司祭がいないので、とても難しいんです。」
救い主：「もうすぐ司祭が来る。彼がそれを読み、できるだけ早く印刷に出してくれるだろう。」
その後：
救い主：「近いうちに、戦争はさらに激化するだろう。」私：「政治家たちは和平を結んだと思っていたのですが？」
救い主：「書き記せ、娘よ。彼らは私と平和を結びはしなかったのだ。私はこの平和の王である。私以外に平和を与える者はいない。この世の平和は、見せかけの平和に過ぎない。それは長くは続かない。私は私の計画の中で、それを予言していたのだ。」
私：「あなたの計画とは、一体何のことですか？」
救い主：「私は、反キリストの時代が来ることを予言した。そして、その時はすでに到来している。」私：「主よ、神よ、それは実に恐ろしいことです。」
救い主：「強き者たちはふるいにかけられる。」
私：「どうか、救い主よ、私たちはとても弱いのですから、助けてください。」
救い主：「人間の傲慢は根絶されなければならない。人々は、救い主を認識できるよう、再び愛し合わなければならない。わが娘よ、私を愛しなさい。平安のうちに去りなさい。」

10時、私はロートの教会で聖ミサに参加し、13時30分にはロザリオの祈りに加わりました。今日は黙想会はありませんでした。

1992年7月20日 - 月曜日

10時 医師室にて：
毎朝のように、今日も祈りを捧げた後、主と心を一つにした。救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。それは重要なことだから。」
その瞬間から、アルント医師に4回も邪魔された。医師はかなり落ち着きがなかった。慌ただしく何度も部屋に出入りしていた。救い主が私に語りかけているとき、こういうことはよく起こる。 医師たちはこの部屋に長くは留まりません。通常、彼らはこの部屋で患者の診断結果を書き留めたり、仕事や私用の電話をかけたりしています。その頻度は決して少なくありません。彼らが無駄な会話をしているときは、私は彼らのために祈ります。なぜなら、この部屋では祈りながら仕事ができるからです。私はたいていここで30分ほど過ごします。それ以外の時間は、自然光の入らないレントゲン室で、患者のレントゲン撮影を行っています。

部屋が空になったとき、私は救い主に、私に伝えたい重要なこととは何なのかと尋ねました。救い主：「わが娘よ、疑ってはならない。」
私：「主よ、私は疑いません。あなたが私に告げることを固く信じ、それを書き留めます。」
救い主：「大きな地震が起こる。誰もがそれを感じるだろう。それは非常に激しいものになる。」
私：「それは罰の一環なのでしょうか？」
救い主：「はい、人々の不従順に対する罰です。私に対する不従順です。」私：「私に何ができるでしょうか？」
救い主：「君にできることがある。祈りなさい。」
私：「誰も私の言うことを聞いてくれないような気がするんです。」救い主
：「その通りだ、わが娘よ。」
救い主は、私が書き留めたくないことを私に告げました。救い主：「私に忠実であり続けなさ
い。平安のうちに去りなさい。」
そこで私は、やはり救い主が私に言われたことを書き留めることにした。「司祭たちと政治家たちは結託している
。」
そうして書き留めた途端、私はこう聞こえました：
「ありがとう、わが娘よ。」
18時30分 ロザリオと聖体祭（赤のミサ）。
20時00分 祈りの会：ポール・アダムブクラム神父も一緒に祈り、その後、告解を執り行いました。フリドリンも来ていましたし、長い間来ていなかった多くの人々もいました。

1992年7月21日 — 火曜日

10時00分、医師室にて：
私は心を込めて祈り、救い主と一つになった。
救い主：「私もあなたを愛している。あなたは完全に私のものだ。あなたの人生は私そのものだ。あなたは私にすべてを捧げてくれたのだから、私があなたを養う。」
救い主：「わが娘よ、解決しなければならない問題が数多くある。」私：「それはどのようなものですか？」
救い主：「その一つは、司祭たちは私に属していなければならないということだ。彼らは世俗的なものを嫌悪しなければならない。彼らは教皇様と伝統に忠実でなければならない。教皇様から逸脱した道は、私からの逸脱を意味する。司祭たちは教会の真の教えに立ち返らなければならない。そうでなければ、その司祭は『第二のイエス』とは言えない。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。あなたを嘲笑する者は皆、私を嘲笑しているのだ。その者たちを私に委ねなさい。」
私：「はい、主よ、神よ、そういたします。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私のしるしがあなたに及ぼす働きが、近づいている。私に忠実であり続け、揺るぎなくあり続けなさい。」
私：「親愛なる神様、もう一度お尋ねしたいのですが、ホルガーとフリドリンに日記のことを少し話してしまいました。それは正しかったのでしょうか？」
救い主：「そのままでいいのだ、わが娘よ。」
救い主：「わが娘よ、あなたが質問してくれることは、私にとって喜ばしいことだ。」
私：「なぜいつも、あなたに忠実であり続けなさいとおっしゃるのですか。私はあなたに忠実ではないのですか？」
救い主：「いや、そうではない。しかし、あなたは明日自分に何が起こるのか知らないのだ。」
私：「主よ、それはどういう意味ですか？」
救い主：「君には自由意志があるからだ。それを私が奪うことはできない。」私：「でも、私はいつも自分の
意志をあなたの意志と一致させているわ。」
救い主：「それでも、翌日には別の決断をするかもしれない。」
私：「神様、それなら、別の決断をするくらいなら、今すぐ死にたいです。ああ、神様、あなたはすべてをあらかじめご存知だと分かっています。どうか、私があなたから離れることなど決して許さないでください。私はあなたの子供です。これからもずっと、あなたの子供であり続けたいのです。」
救い主：「あなたが書いたことは、私にとって大切なことだった。愛しているよ、私の娘よ。安らかに去りなさい。」
18時30分 ロザリオと聖体礼儀（赤のミサ）。

1992年7月22日 — 水曜日

午前8時15分、医師室にて：

救い主：「わが娘よ、私はあなたに書いてほしい。」

私：「愛するイエス様、私にはとても難しいです。私が書くことを誰も真剣に受け止めてくれません。」救い主：「彼らがあなたの書くことをもっと真剣に受け止める時が来る。」救い主：「書きなさい、わが娘よ。アドリア海に停泊する軍艦は、モンテネグロとの戦争を始める準備ができている。」

私：「モンテ・ネグロとセルビアは、今は平和な関係です。」救い主：「しかし、彼らの心の中には平和はないのだ。」

私：「他に知っておくべきことはありますか？」

救い主：「はい、赤い服を着た新しい司祭がまもなくやってきます。」私：「それはフライブルクの意志ですか、それともあなたの意志ですか？」

救い主：「それは私の意志だ。新しい司祭は、聖なるミサの前に聖ロザリオを唱えるだろう。赤い服を着た人々は、自分たちが大きな罪の中にいることに気づくだろう。私はあなた方全員を救いたいのだ。」

私は、ゲブハルト・ハイダー神父のもとへ行くべきかどうか尋ねた。救い主：「彼のもとへ行きなさい、行きなさい。彼と話をしてください。」

救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。たくさん祈りなさい。平安のうちに帰りなさい。」

午後、私はグローブスで買い物をしました。買い物を終えて車の前に立ったとき、ショッピングカートのトイレットペーパーの下にシャンプーと櫛が残っているのに気づきました。どちらもレジで精算されていませんでした。私はすぐに戻って、それらを支払いました。レジ係の女性は、最近ではめったにないことだと私に言いました。 これは私にとっての試練だと分かっていました。以前なら、絶対にそんなことはしなかったでしょうが、洗礼を受けた今、良心がそう求めているからこそ、私は良きクリスチャンでありたいと思っています。

もし5マルク多く請求されていたなら、私も戻って抗議していたでしょう。だからこそ、私に有利なことなら、私は戻って抗議するのです。神はすべてを見通しておられ、悪魔は自ら私に掘った穴に落ちていくからです。

18時30分 HI。ミサとロザリオ（赤）。

1992年7月23日 — 木曜日

9時30分から10時30分まで、私は医師室にいました。救い主：「私の娘よ、私の声が聞こえるか？」

私：「はい、お聞きしています、主よ。」

救い主：「書き記せ、わが娘よ。世界は大きな危険にさらされている。サタンは最大の力を発揮している。世界は彼に惑わされている。彼は今回、大きな獲物を手にするだろう。ほとんどすべての者が彼に従っている。」

私：「何か知っておくべきことや、すべきことはありますか？」

救い主：「そう、私のために何かをしてほしい。それを書き留めてほしい、わが娘よ。あなたが書いたものはすべて、印刷させなければならない。」

私：「それは司祭がやってくれるとおっしゃいましたよね。」

救い主：「そう、司祭もやってくる。彼がそれを行うだろう。」

私：「主よ、私は、彼が『手による聖体拝領の廃止』や、『信徒が聖体を配ってはならない』という部分を削除してしまうのではないかと心配です。彼がそれを印刷させてくれないのではないかと恐れています。」

救い主：「わが娘よ、彼はそんなことはしない。」（彼は何も削除しない。）

私：「それなら、その司祭は生きた信仰を持ち、神の恵みの中にいるのですね。」救い主：「そう、わが娘よ。」

私：「主よ、神よ、この司祭のために、あらかじめ感謝いたします。彼のためにたくさん祈り、断食いたします。」

救い主：「娘よ、そうしなさい。」

私：「主よ、ヨゼフとギゼラが住んでいるその場所へ行って、そこで講演をすべきかどうかお尋ねしたいのです。それもあなたの御心でしょうか？」

救い主：「わが娘よ、あなたがそこへ行って講演をしてくれるなら、私は大変喜ぶだろう。」私：「主よ、あなたは私と共におられますか？」

救い主：「はい、私はいつもあなたと共にいます。」

私：「親愛なる神様、心から感謝いたします。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。これから何が起こると思うか？」私：「とても楽しみです。」
私は、救い主がこれから何をおっしゃるのか、驚きながら待っていました。救い
主：「しるしが現れるでしょう。」
私：「主よ、神よ、今は『いつ』とは尋ねません。しかし主よ、御心が行われますように。なぜなら、私は決してあなたから離れたくはないからです。私はあなたをとても愛しています。生き生きとして慈愛に満ちた三位一体の神であるあなたを、私の人生の最優先の場所に置いています。」

その後、アルント医師に邪魔された。彼は電話で、プライベートな休暇の航空券を予約していた。彼が電話をしている間、私は彼のために祈り、レントゲン写真の袋に番号を貼り付けていた。こうして、救い主との会話は中断されてしまった。
正午、病院内の礼拝堂にて。
祈りの後、私は救い主と心を一つにしました：
私：「今朝、あなたは『しるし』について何かおっしゃいましたね。それについて、さらに知っておくべきことはありますか？」
救い主：「そう、わが娘よ、それはあなたに起こるのだ。」
私：「主よ、私はそれについて心配していません。私は完全にあなたに属しています。」救い主：「わが娘よ、それは私の喜ばしいことだ。」
救い主：「わが娘よ、私に忠実であり続けなさい。平安のうちに去りなさい。」
私：「はい、主よ、神よ。あなたを愛しています。あなたに忠実であり続けます。また私にお話しくださり、ありがとうございます。」

レントゲン検査の際：ある若い女性が転倒し、顔から地面に打ち付けていました。私は彼女にレントゲン撮影をしなければなりませんでした。私は彼女に、朝は祈らなければならないと伝えました。
彼女：「私は朝も夜も祈っています。」私：「でも、告解に行かなければなりませんよ。」彼女：「でも、私はプロテスタントなんです。」
私は彼女を見つめると、彼女は泣き出した。私は彼女に祈りのメモを渡すと、彼女は嬉しそうに立ち去った。
次の患者は若い男性だった。誰かが彼の結婚式前のパーティーで、彼の顔全体をボロボロに殴りつけていたのだ。私は、不浄な霊が人々を通してどのように働くかを彼に話した。さらに、その相手を許し、その人のために祈り、この試練に対して神に感謝しなければならないとも伝えた。
私は彼に祈りのメモを渡して、告解に行くように促した。彼は喜んで、さらなる検査のために再び医師のところへ向かった。
18時30分、ロザリオの祈りと、赤の祭服による聖体祭。

1992年7月24日 - 金曜日

9時00分、医師室にて：
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。私は、私の信仰を守る多くの告白者を必要としている。」
私：「でも、神様、人々は人への恐れを抱いており、さらに不安も抱いています。」
救い主：「ほら、わが娘よ、人を恐れている者など、誰も私のところへは来ないのだ。わが娘よ、人を恐れる心から解放されるよう祈りなさい。不浄な霊が人を恐れる心を引き起こしているのだ。二つの主には仕えられない。わが娘よ、書き記しなさい。
今まで、あなたはすべて正しく書き記してきた。」私：「でも、私にはたくさんの間違いがあります。」
救い主：「間違いがいくつあるかではなく、私があなたに語っていることが重要なのだ。」
私：「あなたは私の霊的指導者です。レーゲンスブルクのゲブハルト神父に、私の日記を読み聞かせていいでしょうか？」
救い主：「いいよ。」
私：「他に何かすべきことはありますか？」
救い主：「ええ、何かできることがあるよ。」私：「何ですか？」

最初は何も聞こえませんでした。

しばらくして：
救い主：「ほら、君は自分自身について語ることができないんだ。」
私：「ええ、それは何度も気づいています。でも、他の人たちは気づいていません。私が独り言を言っていると思っているんです。」
救い主：「他の人たちよりも、神様の声に耳を傾けるべきなのだ。」
私は救い主に、間違いがあるので、ベアテに日記の校正をさせていいかと尋ねた。救い主：「そうしてもいい。わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」
18時30分、ロザリオと聖体礼儀（赤のミサ）。

1992年7月25日 —土曜日

私はヴァーグハウゼルでの早朝ミサに出席した。ベアテが告解室に入ったとき、彼女は約1時間そこにいたため、私は彼女とヴェルナー・エゴン神父のために祈った。夕方、レーゲンスブルクへ出かける予定だったが、キャンピングカーが動かなかった。そこで、翌日、車で出かけることに決めた。

1992年7月26日 — 日曜日

9時45分頃、夫と私はレーゲンスブルクのカルメル会修道院の教会にいました。その後、10時45分から15時45分まで、ゲブハルト・ハイダー神父と過ごしました。素晴らしい先生です。神父は日記の数日分を確認してくださいました。
彼は、救い主が私に啓示してくださったことを確認し、それが聖書と一致していると述べました。ゲブハルト神父は聖書に精通しています。というのも、彼は聖書学者でもあり、自ら聖書を翻訳し、解説もしているからです。
私は日記の多くの部分を彼に読み聞かせましたが、ある日の記述については、彼が即座にそれに対応する聖書の箇所を指摘してくれました。
例えば、1992年7月3日の日記は、ヨハネによる福音書第14章23節と一致しています。
私が「人々は私を頭がおかしいと言うだろう」とゲブハルト神父に話すと、神父は再び福音書の一節を引用してこう言いました……
そして、そのようにして、彼との対話は数時間にわたって続きました。
この司祭と話すという光栄に恵まれたことを、神に感謝します。最後に、彼は私のために水、ろうそく、塩、そして聖画を聖別してくれました。
その後、私は彼に告解をしました。
特に私が感銘を受けたのは、救い主がすでに事前に私に語ってくださった、この世界について、そしてこの世界に何が起こるかということについて、ゲブハルト神父がすでに知っていたという点でした。
そのため、これらのメッセージは彼にとって、そして同時に私にとっても、確信を与えるものとなりました。ゲブハルト神父は、話す際に非常に的確で、極めて正確です。
レーゲンスブルクから家へ帰る途中、夫は再び不浄な霊に襲われました。そのため、私は約200kmを一人で運転しなければならず、夫は車の隣で眠っていました。
その間、私はロザリオやその他の祈りを、ずっと唱え続けていました。夫はレーゲンスブルクでも告解を済ませていましたが、それでも苦しめられていました。今では、その理由に不思議に思うことはありません。私はすべてを救い主に捧げます。
家に着くと、私は書き物をし、救い主と一つになりたかったのです。
しかし、残念ながらそれは不可能でした。何人かの女性たちが訪ねてきて、無益な会話をしていたのです。そのため、私は邪魔されてしまいました。私は、その不浄な霊がこれらの女性たちを通して働いているのを感じました。その不浄な霊を見抜くのは難しくはありませんでした。
救い主からの御言葉を聞くこともなく、私は真夜中頃に就寝した。

1992年7月27日 - 月曜日

10時30分、医師室にて：
祈りの後、私は救い主と一つになりました。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。近いうちに戦争はさらに激化するだろう。たくさん祈りなさい。イラクで戦争が起こる。この戦争は広範囲に拡大するだろう。わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

18時30分 ロザリオと聖体礼儀（赤のミサ）。
20時00分 祈りの会。ドチャート神父が告解を執り行った。

1992年7月28日 — 火曜日

10:00 自宅にて：
私は祈り、救い主と心を一つにしました。救い主：「書き記せ、わが娘よ。
私：「はい、主よ、神よ。」
救い主：「今、何を書き留めるべきか、お前にも分からないだろう。」それから、しばらく何も聞こえなかった。
私：「はい、主よ、何を書けばいいのか分かりません。私はあなたの言葉を信じます。もう疑いません。」
救い主：「恐れているのか？」
私：「怖くはありません。でも、あなたとの会話の後で恐怖が訪れたとしたら、それはあなたによるものではありません。あなたは人々に恐怖を与えるような方ではないからです。」
救い主：「そう、わが娘よ、こう書き記せ。人々は……」
その瞬間、私は聞いたことを書き続けることに抵抗を感じました。これから何が語られるのかと考え、もう書き続けたくなかったのです。
救い主：「一語一語書き留めなさい。」私：「はい、そういたします、主よ。」
救い主：「人々は多くの災難に脅かされている。そのうちのひとつは、すぐそばにある。」心の中で、私は「どこに？」と自問した。
救い主：「どこかと尋ねているのか？　私の子供たちは至る所にいる。皆のために祈らなければならない。」私：「主よ、私は皆のために祈ります。」
私はその時、ヴォルフラムのことを思い浮かべ、彼の願いのために祈りました。
救い主：「うまくいくでしょう。」
私：「それについて何か教えていただけますか？」 救い主：「彼がしていることは、私の御心なのだ。」
救い主：「まだ何か書き留めてもいい。だが、君に書き留めるように言われていることは良くない。」私：「でも主よ、あなたから来るものはすべて良いものです。」
救い主：「その通りだ、わが娘よ。」私：「それなら、それを消すべきでしょうか？」救い主：「いいえ。」
私：「私に何か求めておられますか？」 救い主：「はい。」
私：「何なのか、教えていただけますか？」救い主：「お前の健康だ。」
私：「えっ、よくわかりません。もう一度言ってください。もしかして、私の気のせいだったのかもしれません。」
救い主：「娘よ、私はお前の健康が欲しいのだ。」
私：「主よ、神様、私には理解できませんが、私の健康をあなたに差し上げます。あなたの愛は私の健康よりも強いからです。どうか、私があなたから決して離れることがないようにしてください。」
救い主：「わが娘よ、あなたが書いたことは私の心にかなう。私はあなたを愛している、わが娘よ。平安のうちに去りなさい。」
私：「愛するイエス様、私の魂の導き手よ、私に語りかけてくださり、罪人である私を愛してくださることに感謝します。」

18時30分、ロザリオと赤の聖体礼儀。
聖体拝領の後、私は救い主に尋ねました。「愛する救い主よ、今朝、あなたは私に健康を求めておられたのですか？ 私の理解は正しいでしょうか。もう一度お尋ねして申し訳ありません。」
救い主：「そう、わが娘よ、私はあなたに健康を求めた。そして、あなたはそれを私に与えてくれたのだ。」
私：「ありがとうございます、主よ、神よ。」

1992年7月29日 - 水曜日

10時05分～11時45分 自宅にて：

私は心を込めて祈り、主と一つになりました。

救い主：「書き記せ、わが娘よ。私があなたの健康を望んでいることが、どういう意味か、あなたは理解していない。私はあなたの健康を、私の望むままに扱うのだ。」

私：「はい、主よ、お望みのままになさってください。」

私の目から、私の意志とは無関係に、まったく超自然的な方法で涙が溢れ出ました。私は尋ねました。「主よ、泣いておられますか？」

救い主：「そう、わが娘よ。私の涙は苦しみそのものだ。お前の目から流れ出る涙は、私の涙なのだ。」

私：「まるであなたと一つになったような気がします。つまり、私は一人じゃないんです。心の中に、とても特別な平安もあります。本当に素敵です。まるですべての問題や心配事が消え去ったかのように、心は自由です。恐れも、疑いも、重荷も、私の心にはありません。」

私：「私があなたに授けた健康について、もう一つお聞きしたいことがあります。私の理解が正しいかどうか知りたいのです。私の考えが正しいのかどうか、分かりません。」

救い主：「あなたの考えを話してください。」

私：「つまり、あなたが私に病気や苦しみを与えるとき、いつになるかは言わずに、あなたが望む時に与えるということですね。」

救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。それらは贖いの苦しみである。」私：「この贖いの苦しみによって、私は何を得られるのでしょうか？」

救い主：「まず、あなたは私と共に苦しむのです。あなたは私が十字架を背負うのを助けてくれるのです。それによって、多くの魂が救われるのです。」

私：「ああ、主よ、この十字架を背負うことができるでしょうか。あなたはあらかじめご存知ですから。私はとても弱い人間ですから、あなたから背を向けてしまわないか、とあらかじめ心配しています。」

救い主：「私がいなければ、あなたは間違いなく背を向けてしまうだろう。しかし、私と共にある限り、そうはならない。」私：「いつもあなたと共にいるためには、どうすればよいのですか？」

救い主：「私に忠実でありなさい。」

私：「主よ、今はあなたに忠実ですが、明日がどうなるかは分かりません。」救い主：「明日のことは考えないで、この『今』を私に捧げなさい。」

私：「はい、主よ、そういたします。」

救い主：「あなたに私のしるしを与える。私の傷跡だ。」私：「どこに、家ですか？」

救い主：「教会で。」

私：「体のどの部分に？」

救い主：「五か所すべてだ。心臓、手、そして足に。」救い主：「そう、わが娘よ、目に見える傷跡、膿まない傷跡だ。」私：「つまり、あなたは再び、私の中で十字架にかけられるということですね。」

救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。」

私：「神様、その傷跡をつけたまま、病院で働かなければならないのでしょうか？」救い主：「未来は私のものだ、わが娘よ。」

私：「はい、主よ。私はすでに自分の未来をあなたに捧げました。神様、でも、その傷跡こそが最大の痛みなのです。」

救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。しかし、この痛みによって多くの魂を救うことができるのだ。」

私：「主よ、御心が行われますように。私は完全にあなたに属しています。」救い主：「わが娘よ、私と共に背負う十字架は甘美なものである。」

私：「『甘美』とはどういう意味ですか？」

救い主：「あなたは私と共に、最後までそれを背負うことになるのだ。」

私：「主よ、それは聖フランシスコやピオ神父のような聖痕のことですか？」救い主：「そう、聖フランシスコや福者ピオ神父と同じものだ。」私：「それなら、ピオ神父も聖人であるに違いありません。」

救い主：「そうだ。彼はまもなく聖人となるだろう。」

私：「もし私がその聖痕を抱えたまま死んでしまったら？」救い主：「わが娘よ、私は不死身だ。」

私：「主よ、神よ、私はあなたを限りなく愛しています。」救い主：「愛には境
界も尺度もない。」
私：「それを聞いて嬉しいです。ありがとうございます。あなたとこんなに長くお話しできました。あなたとの会話には終わりがありませんね。」
救い主：「私は初めであり、終わりである。」
私：「主よ、神よ、愛するイエス様、私の花婿、私の魂の導き手よ、私はあなたと共に十字架を背負う覚悟があります。しかし、それはどの魂のためなのでしょうか。」
救い主：「闇の中に生き、いつ地獄へ落ちてもおかしくない罪人たちのためだ。」私：「司祭も地獄に行くことがあるのですか？」
救い主：「はい、彼らも行く可能性があります。」
救い主：「わが娘よ、あなたはすべての魂のために苦しむことになる。」私：「
でも、それはとても多いですね。」
救い主：「わが娘よ、私は彼ら全員を愛している。」
私：「それは素晴らしいことです。私たち人間も、すべての人を愛さなければなりませんね。」
救い主：「わたしと共にあれば、あなたたちはそれができる。わたしなしでは、愛することはできない。わが娘よ、わたしはあなたを愛している。そして感謝している。平安のうちに去りなさい。」

夕方、私はロクス礼拝堂で聖体拝領のミサに出席した。そのミサは
ザイール出身の司祭が司式していました。彼はミサの朗読を少し早口で行っていました。聖体の配給の際、私は聖体拝領台にひざまずいていたため、彼は私を見落としていました。
あるシスターが、私が救い主を受けたいと彼に合図しなければなりませんでした。彼は私から約1メートル離れた場所に
立っていたのに、それでも私を見逃してしまったのです。
聖ロクス礼拝堂は、療養クリニックの建物内にある礼拝堂です。およそ4週間ごとに司祭が交代します。たいていの場合、司祭たちはそこで療養をしており、その期間中は牧会活動を行っています。司祭の多くはシュタイラー宣教会の所属であるため、さまざまな国から多くの司祭が訪れます。

1992年7月30日 — 木曜日

9:00〜10:45 自宅にて：
まず祈りを捧げ、それから神と心を一つにしました。そして、もし私が聖なる五つの傷を授かったら、それを最後まで耐え抜けるだろうかという恐怖に襲われ、激しく泣いてしまいました。最後まで耐えきれず、ひょっとしたら救い主から背を向けてしまうのではないかと恐れていたのです。
そこで、救い主にそのための恵みを与えてくださるよう願い、そうすれば、私は罪人の救いのために苦しみを受ける覚悟ができたのです。私は救い主をあまりにも深く愛しているため、救い主を失うことなど想像すらできません。それは私にとって、この上なく最悪の事態です。
私は、誰もが神や隣人に対する親しみや愛がどのような状態にあるのか、よく考えてほしいと願っています。私は今、神はまさに愛そのものであり、その愛がなければ
、私はもう生きていくことはできません。
私は、その愛を失わず、救い主とつながり続け、罪人を救うために、主と共に五つの開かれた聖痕を背負う覚悟があります。私一人では何もできません。
今のところ、私はもう恐れておらず、泣くこともありません。その感情は私から取り除かれました。
救い主：「書き記せ、わが娘よ、私はあなたを深く愛している。あなたが負うことになる傷は、私の傷である。」
救い主：「それは、あなたが私と共にあり、私があなたを見捨てないことを意味する。私たちは一つとなるのだ。」私：「主よ、神よ、私には理解できませんが、信じます。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。」
私：「はい、愛しき、慈悲深い神様。」
救い主：「あなたが受ける贖いの苦しみは、間もなく訪れるだろう。」私：「何かすべきこと、あるいは準備すべき
ことはありますか？」
救い主：「今のままのあなたで十分だ。あなたが言った言葉を守り続けなさい。」
私：「はい、主よ、神よ。約束します。どうか、私がその約束を守り、自分に矛盾しないよう、御恵みをお与えください。」

救い主：「そのための恵みは与えられる。わが娘よ、私に忠実であり続け、これからも私を愛し続けてくれ。平安のうちに去りなさい。」

ここ数週間、左肩と上腕が痛んでいます。骨の炎症です。私はその痛みを、魂の救いのために捧げました。

18時30分、ロザリオと聖体祭（赤の祭服）。

ヴォクト神父が療養から戻ってこられました。

聖体拝領の後、私は救い主にこう言いました。「私があなたに何を伝えたいか、あなたはご存知でしょう。私は疑っていませんし、信じていますが、確信を持ちたいのです。」

救い主は私が何を尋ねたいのかをご存知で、こうおっしゃいました。

救い主：「あなたは聖なる五つの傷を受けることになる。そう遠くない。信じてほしい。あなたは間違っていなかった。」

私：「主よ、神よ、聖体拝領の後にこれを確認してくださり、ありがとうございます。」その日一日中、私は計り知れないほどの喜びと愛を感じました。これは言葉では言い表せません。

1992年7月31日 — 金曜日

9:00〜11:00 自宅にて：

私は祈り、救い主と心を一つにしました。

私：「私の限りない愛、愛するイエス様、もしお望みなら、私は書く準備ができています。」

救い主：「そう、わが娘よ、書きなさい。私には、私に忠実であり、私の怒りを和らげてくれる多くの魂が必要なのだ。」

私：「あなたは神ですか？　怒りさえも持つ神ですか？」

救い主：「わが娘よ、人々は不従順なのだ。」私：「司祭たちは、神の怒りについて語っていません。」

救い主：「わたしの恵みにある司祭たちは、すでにわたしが彼らに授けることを説教している。わが娘よ、しかし、その数はごくわずかだ。もっと多くの善良な司祭が現れるよう祈りなさい。今日の司祭たちはもはや説教をしていない。彼らはわたしに対して心を閉ざしているのだ。」

私：「私があなたから五つの聖痕を授かることについて、話してもいいですか？」救い主：「わが娘よ、それはまだ黙っておきなさい。」

私：「なぜまだそれを言ってはいけないのですか。その理由を教えていただけますか？」

救い主：「あなたが受ける五つの聖痕は、私の傷跡であり、彼らの中にはまだそれを理解できる者は誰もいないのだ。」

私：「あなたの傷跡を背負った他の人々、例えば例えば聖フランシスコや、その他の人々の場合はどうだったのですか？」

救い主：「ええ、教会は理解していたが、彼ら（司祭たち）は絶えずそれを嘲笑している。」私：「『嘲笑する』の代わりに使える別の言葉を教えていただけますか。」

救い主：「彼らは聖体変容の儀式に対して無関心になってしまったのだ。」

私：「親愛なる神様、私も聖なる傷については理解できません。」救い主：「その時は、あなたはあなた自身ではなく、私があなたの中にいるのだ。」

私：「はい、主よ、神様、今、よく理解できました。私はあなたに比べれば、ほんの一粒の塵に過ぎません。」

救い主：「書き記せ、わが娘よ。この世界は危機に瀕している。もはやそこから抜け出すことはできない。」

私：「神様、あなたが言う『危機』とは、どういうことですか？」

救い主：「この危機とは、彼女たちが神から完全に背を向けたことなのです。」私：「それがこの怒りの主な原因なのでしょうか？」

救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。」

私：「でも神様、まだあなたに忠実な人たちがたくさんいますよ。」救い主：「わが娘よ、彼らはサタンの罠にかかっているのだ。」

私：「神様、では私は、誰のためにあなたと共に贖いの苦しみを負うことになるのですか？」

救い主：「サタンの罠にかかっている人々のためだ。」

私：「神様、それには偉大な戦士でなければなりませんね。」

救い主：「わが娘よ、私と共にあれば、あなたはすでに偉大な存在なのだ。私は人々に自由意志を与えた。そして人々は、自ら選んだ場所

、そして属したいと願う場所に属することになるのだ。」

私は、そのように書いて正しいかどうか尋ねました。救い主：「それで十分
だ。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。私に忠実であり続けなさい。平安のうちに去りなさい。」

書き終えると、私はバルコニーへと続く大きな金属製の引き戸を閉めた。すると、指がドアの隙間に挟まってしまった。激しい痛み
が走り、血が流れた。
病院で破傷風の予防接種を受けた。その痛みを、神の栄光をさらに高めるために捧げた。
18時30分 ロザリオと聖体ミサ（赤のミサ）。

1992年8月1日 - 土曜日

7時15分、ヴァーハウゼルの教会にいました。13時20分～14時10分、自
宅にて：
救い主：「わが娘よ、私はあなたと共にいる。あなたを愛している。」私：
「これを書き留めておいたほうがいいですか？」
救い主：「書き留めてもいいよ。」
私：「ここ数時間、これほど強く感じさせてくださったあなたの愛に感謝します。」

救い主とこれほど切実に一つになりたいと願うのは、ただ私の意志によるものだと考えていたため、待ちきれないほどだった。

救い主：「わが娘よ、それは私とあなたとが一つになるという、私の意志だったのだ。」
私：「親愛なる神様、あなたが私と一つになりたかったがゆえに、私に何かが起こるのでしょうか？」救い主：「そ
う、あなたに何かが起こる。」
私：「主よ、神様、それを教えていただけますか。私に降りかかるすべてのことを乗り越えられるよう、恵みをお与えください。主よ、
神様、何が降りかかるのかは分かりませんが、それを受け入れます。主よ、私の意志ではなく、あなたの御心が成されますように。」
救い主：「わが娘よ、あなたは選ばれた者だ。疑いがあるのか、わが娘よ？」私：「いいえ、主よ。」
その後、長い間何もなく、私はこれから自分に何が降りかかるのかを考えていました。救い主：「それはあなた自身
から来るものとは言えない。」
私：「いいえ。何が起こるのか分かりません。これから起こることに、泣かなければならないのでしょうか？」救い主：「喜んでもよいの
だ。」
私：「何が私を喜ばせるのでしょうか。今、何に喜びを感じればいいのか、想像もつきません。」
救い主：「お前は、聖母マリアと永遠に結ばれているのだ。」私：「私は彼女と結ばれていなかった
のですか？」
救い主：「君も彼女に話しかけることができる。」私：「もう
彼女には話しかけたことがある。」救い主：「彼女も君に話し
かけてくれる。」
私：「つまり、あなたと同じように、彼女の声も聞こえるということですか？」
救い主：「そう、わが娘よ、あなたは私と同じように彼女の声を聞くことになる。」
私：「彼女が話しているとき、どうやって見分ければいいのですか？」
救い主：「彼女はあなたに自己紹介をするでしょう。あなたは彼女の声を聞き分けることができる
でしょう。」私：「はい、主よ、今からもう楽しみです。それはいつになるのでしょうか？」救い
主：「しるしが現れ次第です。」
私：「でも、彼女はザンクト・レオン＝ロットの教会に現れるとおっしゃいましたよね。」救い主：「ええ、そう
なるでしょう。」
私：「一度だけですか？」 救
い主：「何度も。」
救い主：「すべてを静かに秘めておきなさい。」
私：「主よ、どうか私がこれらすべてを沈黙のうちに守れるよう、恵みをお与えください。心で満たされていることが口から出る、とおっ
しゃいましたね。どうか、私の舌がそれについて沈黙を保てるよう、恵みをお与えください。」
救い主：「そう、わが娘よ、その恵みは与えられるだろう。」
救い主：「わが娘よ、聖母マリアと私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

私：「主よ、神よ、これほど多くの恵みをくださり、ありがとうございます。愛する聖母マリア様、罪人である私にも話しかけてくださることに感謝いたします。ああ、慈悲の母よ、罪人の避難所よ、私を導き、守ってください。」

15時30分～18時15分：教会で赤い服を着て祈りを捧げ、ヴォクト神父様に告解をしました。

1992年8月2日 — 日曜日

8:00～9:20：

救い主：「書き記せ、わが娘よ。あなたは私の愛をもって私を愛している。この愛は、私へのあなたの『はい』に対する、私からの贈り物である。そして、この愛こそが、私があなたに与えた最大の贈り物なのだ。」私：「私は、常にあなたと結ばれていなければならないと感じています。私は絶えずあなたへと引き寄せられています。あなたと一つになることを、切に待ち望んでいます。」

救い主：「それは、あなたが完全に私のものであるからだ。」

救い主：「書き記せ、わが娘よ。私は、あなたからその『自覚』を望んでいる。」私：「どうか、その代わりに別の言葉を教えてください。」

救い主：「あなた自身では何もできない。私があなたのために行動するのだ。」

私：「親愛なる神様、それはどのように機能し、どのように起こるのでしょうか。私には理解できません。主よ、私がこれをよりよく理解できるよう、助けてください。」

救い主：「あなたがするすべてのことは、私がしているのだ。」

私：「つまり、私ではなく、あなたがそれをなさっているのですね。」私：「あなたがそれをなさっていることを、どうすれば分かるのでしょうか？」

救い主：「何かをする前に、『主よ、あなたの望むように、あなたがなさってください』と言いなさい。」私：「それなら、私はあなたが用いる道具ということですね。」

救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。」

私：「主よ、神よ、私はあなたの望む通りにします。どうか、私がそれができるように恵みをお与えください。それは決して容易なことではないでしょうから。」

そのとき、私は謙遜について考えていました。

救い主：「その通りだ、わが娘よ。それには謙遜が必要なのだ。」

私：「主よ、私は毎日謙虚さを求めています。**それは最も難しい美徳ですから。」**

救い主：「それは、あなたが私と共にいるときにのみ得られるものだ。そして、あなたが『自分は無であり、あなたの中にあるすべては私である』と悟り、また『自分だけでは何もできない』と悟ったとき、あなたは私がこれほど喜ぶ謙遜に到達したことになる。」

私は、聖体礼儀に間に合うよう、急いで教会へ向かおうとした。救い主：「そう、わが娘よ、私もそこで君を必要としている。愛しているよ、わが娘よ。平安のうちに去りなさい。」

10時 聖体ミサ（赤のミサ）。

13時30分 ロザリオ — その後、聖なる傷に祈りを捧げた。19時00分、自宅で悲しみのロザリオを唱えた。

1992年8月3日 - 月曜日

8:00～10:00 医師室にて：

救い主に心から祈りを捧げた後。

救い主：「わが娘よ、私はあなたの祈りをしっかりと聞いた。あなたに何が起こるか、そしてこれから何が起こるかは、私の心配事だ。わが娘よ、あなたの使命は、私の望む通りに私に仕えることだ。」

私：「主よ、どうか、あなたが何を望んでおられるのか、私に悟らせてください。私に何をしてほしいのか、教えてください。」救い主：「あなたは、私を完全に信頼しなければならない。」

私：「はい、主よ、そういたします。」

私：「神様、私はあなたの聖霊と一つになりました。どうか、私が書くときに私の心が邪魔をしないようにしてください。そうしないと、自信がなくなってしまうからです。」

救い主：「書きなさい、わが娘よ。私はあなたのために計画を立てた。この計画は必ず成就されなければならない。」

私：「親愛なる神様、もしそれが成就されなかったら、私は怖くなってしまいます。」救い主：「あなたがいつも私と共にいるなら、それは必ず成就される。」

私：「親愛なる神様、私はいつもあなたと共にいたいのです。どうか、決してあなたから離れないようにしてください。親愛なる神様、今、あなたにさらに何かを尋ねることに畏敬の念を抱いています。もし他に書き留めるべきことがあれば、あなたが教えてください。私をあなたの御心のままに扱ってください。私は完全にあなたに属しています。」
救い主：「わが娘よ、書き留めなさい。心配する必要はない。この業を成し遂げる者が、私にはいるのだから。」
私：「主よ、なぜこれが『業』と呼ばれるのか、私にはわかりません。」
救い主：「わが娘よ、この『業』は私からのものであり、魂の救いに関するものである。それは魂を救うための『業』なのだ。私たちに残された時間は、ごくわずかだ、わが娘よ。」
私：「主よ、私にそのようなことをおっしゃるということは、私に何かを求めておられるのですね。」救い主：「そう、わが娘よ、贖いの苦しみだ。」
私：「主よ、神よ、三位一体の神よ、慈悲深いイエス様、私はあなたと人々への愛から、魂の救いのためにあなたと共に苦しむ覚悟があります。愛する神よ、私は考えを変えてはいません。なぜなら、今やあなたの考えこそが私の考えだからです。あなたが正しいとお考えになることが正しいのであり、私が考えることではないのです。」
救い主：「娘よ、あなたが書いたその言葉は、私の心に響く。」私：「もう、願い事はありません。」
救い主：「本当に願い事はないのか？」
私：「私はあまりにも不適格な者ですので、何かを願う勇気はありません。」救い主：「願いなさい、わが娘よ。私がそう望んでいるのだから。」

私：「はい、主よ、神よ。それでは、あなたが私に与えてくださる十字架を、愛と忠誠をもって、あなたと共に最後まで担い続けることができるよう、そして、聖レオン＝ロットの教会が、教皇様の御心にかなう模範的な教会となり、他の教会がその手本とすることができるように、と願います。

また、ひざまずくことができない人々を除き、聖体拝領はひざまずいた姿勢で行われ、パテーンを用いた口への拝領となることを願います。

毎日、告解と告解の対話を執り行うことができる司祭を私たちに与えてくださるよう願います。また、聖体拝領が、敬虔な心をもって、司祭の聖別された手によってのみ授けられることを願います。

そして、教会において聖母マリア、聖ヨセフ、聖なる天使たち、そして聖人たちが、再びより深く崇敬されるようになりますように。

また、司祭が信者たちと共にミサの前にロザリオを唱え、説教の時間を除き、ミサ中に司祭が侍者たちと共に聖櫃の方を向くことを願います。

- 自宅に建設される礼拝堂では、魂の救いのために常に祈りが捧げられるように。
  とりわけ、あなたの聖なる傷跡が崇敬されるように。
- この礼拝堂において、聖母マリアと聖ヨセフの取り次ぎによって、人々が肉体的にも精神的にも癒やされますように。
- この礼拝堂で祈る者が、誰一人として失われないように。
- 私の家族、すなわち現在の家族と、その前の三世代が救われますように。
- この礼拝堂が特別な守りを受け、私の死後もそこで祈りが続けられますように。
- この礼拝堂において、神よ、これまでのどの礼拝堂よりも多くの栄光と賛美と感謝があなたに捧げられますように。

「主よ、私が挙げた願いは多くあります。しかし主よ、もし御心ならば、それは叶うでしょう。それは私が何かであるからではなく、あなたが私のすべてであられるからです。」
救い主：「わが娘よ、その通りになる。」私：「主よ、私は正しく聞いたのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。あなたが書いたとおりに起こるでしょう。」私：「ありがとうございます、主よ、神よ、ありがとうございます。」

今、外では激しい雷鳴と雨が降り注いでおり、まるで嵐のようです。私の魂は安らぎと平和に包まれ、愛する神と聖母マリアへの深い愛に満たされています。
ロートでは聖母マリアのミサはなかったので、私は19時30分にロクス礼拝堂へ行きました。

20時15分、祈りの集い。この祈りの集いは5年前から続いています。

1992年8月4日 - 火曜日

自宅で10時55分から11時55分まで。まず祈り、それから神
と一つになりました。
救い主：「私に気に入らないことがたくさんある。」私：「主よ、神よ
、何が気に入らないのですか？」
救い主：「マティアスがアンドレアス（ベルギーのアンドレ）と共に断食をしたことだ。」私：「でも、昔、使徒
たちもそうしていましたよ。」
救い主：「わが娘よ、それは私の御心ではない。」私：「マティアスに
ついて、他に知っておくべきことはありますか？」救い主：「彼のため
に祈りなさい。」
私：「では、ベアテについてはどうですか？」
救い主：「彼女はもう、君の日記を読んではいけない。」私：「でも、
あなたは彼女が訂正してもいいとおっしゃいましたよね。」救い主：「
だが、書き換えてはいけない。」
私：「フリドリンについてはどうですか？私が受けることになる聖痕について、ステファン神父に話してもいいですか？」
救い主：「彼はそれを黙って秘めておくべきだ。」
私：「近いうちに黙想会に参加したほうがいいですか？」救い主：「まだだ。」
救い主：「私はお前の魂の導き手だ。お前は完全に私のものだ。」私は、蛇口の話の

あったあの女性について救い主に尋ねた。

救い主：「フリドリンに、その女性には気をつけろと伝えてくれ。フリドリンのために祈ってくれ。」
私：「はい、主よ、神よ。これらの願いすべてのために祈ります。そして、フリドリンのためには、さらに祈ります。」
救い主：「フリドリンが月曜日の祈りの集いに参加したいと願っていることを、私は嬉しく思う。」私：「それなら、マリオンが日記を書き続けなくなるのではないかと心配です。」
救い主：「彼女は書き続けるだろう。」
私：「もしあなたが私の立場だったら、マティアスの母親のために何をしてくださいますか？」 救い
主：「娘よ、それは私に任せておきなさい。」
私：「まだ何か書き留めてほしいですか？」救い主：「ええ、まだ何か書き留め
てほしい。」私：「はい、主よ、神よ。」

私は市長のことを考えた。

救い主：「彼と話せ。彼に何を言うべきか、私があなたに示そう。」
私：「神様、もう一つ質問があります。8月にスキオに行くべきでしょうか？」救い主：「そこへ行ってはならない。私に従順で
あり続けなさい。」
救い主：「わが娘よ、これから言うことを書き留めておきなさい。君に与えられる聖痕は、今年中に現れるだろう。」
私：「今年とは、いつのことですか？」 救い主：
「1992年だ。」
私：「はい、主よ、慈愛に満ちたイエス様、おっしゃった通りに起こりますように。」救い主：「わが娘よ、私を失
望させないでくれ。」
私：「主よ、私が決してあなたを失望させないよう、恵みをお与えください。」
救い主：「ただ私の言葉に耳を傾けなさい。他の人たちに影響されてはならない。あなたが私から受けるこのしるしは、すべての盲人が再び見えるようになり、すべての耳の聞こえない人が再び聞こえるようになるための証しとなるのだ。書き留めなさい、わが娘よ。このしるし、すなわちあなたの中に刻まれる私の傷跡は、世の中で大きな騒ぎを巻き起こすだろう。」
私：「主よ、それはまだ完全には理解できません。別のことを教えていただけませんか。」
救い主：「それはパン種となるだろう。お前の本を通じて、それは急速に広まっていく。お前が受ける傷跡に対しては、彼らは太刀打ちできない。なぜなら、それらは私から来るものだからだ。わが娘よ、私はお前を愛している。平安のうちに去りなさい。」
夕方、私はマルシュの教会に行きました。最初はミンゴルスハイムへ行きましたが、ミサは行われていませんでした。そこで、聖なるミサを逃さないよう、マルシュへ向かいました。

1992年8月5日 - 水曜日

10時45分～12時45分の間、自宅にいました。

私は祈り、そして救い主と一つになりました。自分のすべての罪に対して深い悔い改めの念に駆られ、涙を流しました。自分は罪人であると感じ、主なる神が私を御自身の道具として選んでくださったのだと悟りました。ああ、神の前で私はなんと不適格な存在だと感じるでしょう。罪を自覚するには、どれほどの謙虚さが必要なのでしょうか。私はほぼ毎週告解に行き、毎日罪を悔い改め、それでもなお、いつも罪を犯してしまいます。私が悔い改めている罪は、ある人にとっては罪ではないかもしれませんが、私にとっては、どんなに小さな罪でも最大の罪なのです。これを理解してくれる人は、きっとごくわずかでしょう。ヴォクト神父でさえも、理解できないでしょう。

救い主：「書き記せ、わが娘よ。私が言うことを信じるか？」

私：「親愛なる救い主よ、あなたはすでに私に信仰を与えてくださったのですから、信じることができます。」 救い主：「しかし、あなたはまだ疑っている。」

私：「どうか、その疑いを私から取り除いていただけませんか？」救い主：「しかし、疑いは何度も戻ってくるのだ。」

私：「どうか、またその疑いを取り除いてください。」

救い主：「わが娘よ、その疑いは私から来るものではない。常に『私たちを疑いから守ってください』と祈らなければならないのだ。」

私：「はい、主よ、どうか私を疑いから守ってください。そうすれば、私の信仰は揺るぎないものになります。」救い主：「書き記しなさい、わが娘よ。忍耐を鍛えなさい。」

私：「忍耐は偉大な美徳です。それはあなたから授かるものだと思っていました。」救い主：「あなたはそれを授かるでしょう。しかし、今はまだです。」

私：「はい、主よ、私は忍耐を養います。私のせっかちさをどうかお赦しください。私の魂を清めてください。私が完全に清く、聖なる者となれるように。そうして、天国のすべての聖人たちと共に、常にあなたを賛美し、称えられますように。」

私：「主よ、私がそれを信じるかどうか、それがあなたが私に伝えたかったことですか？」救い主：「まったく別のことが起こる。それを、一言一句書き留めなさい。」

救い主：「私は、あなたの全存在を望んでいる。」

私：「主よ、神よ、慈愛に満ちたイエス様、私はあなたに、私の全存在を捧げます。」私：「それについて、何か教えていただけますか？」

救い主：「わが娘よ、あなたが受ける贖いの苦しみは、私の苦しみそのものである。」私：「でも、それはもうおっしゃいましたよね。」

救い主：「そうすれば、あなたは私の中にいることになるのだ。」

私：「では、私の体はどうなるのですか？」

救い主：「あなたの肉体は、人々にとって目に見えるしるしなのだ。」私：「私は愚かすぎて、それを理解することができません。」

救い主：「もしあなたがそれを理解できたなら、それは私からのものではないだろう。神学者たちでさえ、理解できないからこそ、それは難しいのだ。」

私：「主よ、もし私が人々のためのしるしであるなら、人々は私を通して何を得るのでしょうか？」

救い主：「闇の中から現れる光だ。」私：「それは、盲人が再び見えるようになるということですか？」

救い主：「そうだ、わが娘よ。お前の露わになった傷跡は、すべての人々のために輝くだろう。盲人でさえも再び目が見えるようになる。お前が受けることになるこれらの傷跡のせいで、お前は多くの嘲笑や侮辱にさらされるだろう。それをすべて受け入れなさい。そうすれば、多くの魂が

。」

私：「主よ、私はこれを正しく書き記しましたか？ 間違っている箇所を消すべきでしょうか？」

救い主：「いいえ、書いたのは私であり、あなたではない。あなたの手は私の道具なのだ。わが娘よ、私はあなたを深く愛している。私に忠実であり続けなさい。平安のうちに去りなさい。」

ロザリオと赤のミサ。

1992年8月6日 — 木曜日

私は、救い主と一つになる前に、一時間、心を込めて祈りました。私はすべてをイエスに捧げました

。

救い主：「そう、わが娘よ、その通りだった。」

救い主：「書き記せ、わが娘よ。人々は早急に悔い改めなければならない。彼らに残された時間は短い。サタンは強い。祈りによって彼を打ち負かさなければならない。人々は神にほとんど祈っていない。市長に伝えなさい。彼は、
コール連邦首相とつなぐよう努めるべきだ。彼はそれをためらってはならない。」私：「コール連
邦首相からの手紙を彼に見せればよいでしょうか？」
救い主：「ええ、そうしてもいい。もし彼が望むなら、連邦首相に『あなたと話さなければならない』と手紙を書くように伝えなさい。市長にも、人々が平和に暮らせるようにする責任があるのだと伝えておきなさい。」
私：「それを彼に読み上げていいですか？」
救い主：「ええ、そうしてもいい。だが、それ以外は何もしてはいけない。」
私：「何を書けばいいか聞いているんじゃないの。教えてください。それで十分かもしれないし。」
救い主：「それだけでは足りない、わが娘よ。書きなさい。世界は今ほど混乱したことはかつてなかった。誰もが大きな危険に直面している。私は彼らをほとんど吐き出したいほどだが、それでもまだ彼らを愛している。彼らは皆、私の子供たちだ。しかし、救われるのはほんの一握りだけだ！」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。私は、あなたがまだ書き続けてほしいのだ。わが娘よ、私の願いを叶えてくれ。
」
私：「どんな願いですか？私はあなたにすべてを捧げました。私には何もできません。」救い主：「
いいえ、私と共にあるなら、あなたには何でもできる。」
私：「主よ、あなたの願いは何ですか。もし私があなたと共にいるなら、どんな願いでも叶えて差し上げます
。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私の願いは、あなたを私のそばに抱きしめることだ。」
私：「それをどう理解すればいいのでしょうか？でも、それがあなたの願いなら、その願いを叶えて差し上げます。そうすれば、あなたが望む場所へ私を連れて行ってくださいますね。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。お前は、私が望む場所と、その場所の両方に同時に存在することができるのだ。」
私：「主よ、私はあなたの望むことを行います。あなたがなさることはすべて良いことだと知っているからです。
そのことを、私は何よりもあなたを愛し、すべてに感謝しています。」

すると、夫に邪魔されました。私は反応しませんでした。その時は、救い主の方が私にとってより重要だったからです。

救い主：「わが娘よ、お前の心は貫かれるだろう。」
私：「主よ、神よ、あなたの御心どおりになりますように。」
救い主：「そうすれば、お前の心は私の心となる。お前の心から流れ出る血は、私の血である。この血は、魂を救うために流される。一滴一滴の血が
は尊い。」
私：「ああ、主よ、私にはその意味がよくわかりません。もっと分かりやすく教えてください。」救い主：「私の
血こそが、あなた方の救いである。」
私：「ああ、主よ、聖体の一部が床に落ちたとき、それを手で受け取るのは、どれほど恐ろしいことでしょうか。
聖体の断片が床に落ちてしまうなんて。ああ、司祭たちはなんと盲目なのでしょう。主よ、どうか彼らをお赦しください。彼らは聖体を手に渡すとき、自分が何をしているのか分かっていないのです。
救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。」
私：「主よ、私は書くのがとても辛いです。三位一体の神であるあなたに対する、こうした冒涜、不敬、そして無関心のために、血の涙を流さなければならないほどです。あなたの聖なる光を輝かせてください。そうすれば、彼らが闇から抜け出し、あなたの尊い血によって救われるでしょう。」
救い主：「わが娘よ、その通りになるだろう。愛する娘よ、あなたが書き続けてくれたことを嬉しく思う。私を愛しなさい。平安のうちに去りなさい。」

16時15分頃、私はマルティン市長のもとを訪れました。私は彼とコール連邦首相について話しました。彼は、コール連邦首相と私をつなぐよう努めると言ってくれました。最後に、私は彼に、教会をサボってはいけないと伝えました。
18時30分、ロートでロザリオと聖体礼儀。

1992年8月7日 - 金曜日 - 聖心金曜日

10時00分～11時30分 自宅にて：

私は心を込めて祈り、救い主にこう言いました。「私はあなたが望むことは何でもします。ただ一つだけ恐れているのは、苦しみの最中にあなたから引き離されてしまうことです。」

救い主：「あなたが苦しむとき、私はあなたと共にいます。私もあなたと共に苦しみます。」しばらくの間、沈黙が続いた。

私は泣きました。

救い主：「書き記せ、わが娘よ。**御言葉は肉となった。**お前の心は私のものとなる。お前の心から湧き出る言葉は、私の言葉となるのだ。」

私：「それは聖霊が私を通して語られるということですか？」

救い主：「そう、わが娘よ、聖霊があなたを通して語られるのだ。」私：「親愛なる救い主よ、他の人たちはそれに気づくのでしょうか。」

救い主：「全員ではない。神の恵みの中にいる者たちだけだ。」私：「では、それに気づかない他の人たちはどうなるのですか？」

救い主：「彼らはあなたを嘲り、笑い、狂人だと言うだろう。」私：「それなら、私はどうすればいいのですか？」

救い主：「あなたが何かをするのではなく、私が何かをするのだ。わが娘よ、その時、あなたは私の道具となるのだ。」

私：「それがあなただと、私は気づくことができますか？」救い主：「ええ、あなたはこれまでにも何度か気づいてきた。」

私：「主よ、神よ、私に何かが起こるのでしょうか？ あなたが私と一緒にいてくださる時、私は食事をとれるのでしょうか？ つまり、あなたの傷跡を授かる時、ということです。でも、あらかじめ申し上げます、主よ、あなたの御心通りに、そうなるように。」

救い主：「わが娘よ、未来は私のものだ。」

私：「はい、主よ、また忘れてしまいました。どうかお許しください。」私：「まだ何か書き留めておくべきでしょうか？」

救い主：「そう、わが娘よ、君にもう一つ必要なことがある。」私：「親愛なる神様、お望みならお与えします。」

救い主：「書きなさい。私は、あなたからの完全な献身を必要としている。」

私：「主よ、私はすでにすべてをあなたに捧げました。再びすべてをあなたに捧げます。私を、お望みのままに扱ってください。私は完全にあなたのものです。」

救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。私に忠実であり続けなさい。私は私の望むことを行う。平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」

18時30分 ロザリオと聖体祭（赤）。

1992年8月8日 - 土曜日

11:00～12:45：祈りの後、私は救い主と一つになりました。

私は救い主に、私が五つの聖痕を受け、心が貫かれることをヴォクト神父に伝えるべきかどうか尋ねました。

救い主：「そう、あなたの司祭であるヴォクト神父に、あなたが私から五つの聖痕を受け、あなたの心が貫かれることを伝えなさい。」

私：「でも主よ、彼はきっとまた信じないでしょう。どうすればいいのですか？」 救い主：「わが娘よ、手遅れになってから、彼はそれを信じるだろう。」

私：「神様、それなら、彼に伝える意味はありません。」救い主：「いいえ、意味はあるのだ、わが娘よ。」

私：「どんな意味があるのですか？」

救い主：「彼はもう、『何も知らなかった』とは言えなくなるからだ。」

私はしばらく救い主と話を続けましたが、何も書き留めませんでした。救い主：「さあ、書き留めなさい、わが娘よ。よく耳を傾けて。」

私：「はい、救い主様、よく聞いています。私の理性では理解できないことは分かっていますが、私の

心はそれを悟り、感じ取るでしょう。私の心は、あなたが私に何を求めているかを知っていますが、人々はそれを知らないからです。だからこそ、私はいつもまずあなたの言葉に耳を傾けます。あなたの愛は、まだ私を裏切ったことがないからです。」

救い主：「書き留めたものはすべて、しっかりと保管しなさい。」私：「で
も、それは以前にもおっしゃいましたよね。」
救い主：「サタンは、あなたが書いたものを善良な人々を通じて破壊することほど喜ぶことはない。」私：「親愛なるイエス様
、もっと大切に保管します。」
しばらくの間、静寂と沈黙が続いた後、私は自分が書いたもので十分かどうか尋ねました。救い主：「いいえ、わが娘よ、あなたが書いたものはすべて、後の時代にとっても重要なのだ。」 救い主：「私の業は完成する。偉大な者たちは、まだ驚嘆することになるだろう。」
私：「『偉大な者たち』とは誰のことですか？」
救い主：「司教たちだ。彼らはこの業によってその実を認めるだろう。この業のぶどうの木は、私である。私はすべての者のために私の血を流す。つまり、最も大きな罪人であっても、望めば悔い改めることができるのだ。私は罪人のためにこの世に来たのだ。 すべての罪人は、義人と同じように、わたしにとって愛しい存在だ。わが娘よ、この業、すなわち魂の救いを、あなたはわたしと共に成し遂げるのだ。わたしが始めたことは、必ず成し遂げる。わたしは、まだ救われるべき子どもたちを救う。わが娘よ、あなたの道は、わたしの道である。」
私：「それなら、私はこの道で迷うことはないでしょう。」
救い主：「あなたはこの道で迷うことはない。あなたは私と共にいる。愛する娘よ、私のところに来てくれてありがとう。平安のうちに去りなさい。」

16時30分、ロート教会の礼拝堂にて：ロザリオを唱えました。今日はロートで告解が行われていなかったため、17時45分頃、ロクス礼拝堂で告解を受けました。
19時00分、ミンゴルスハイムの教会で聖ミサに参列した。

1992年8月9日 — 日曜日

8時15分～9時45分：祈りの後、私は救い主と一つになった。
私が救い主と一つになるときは、いつも霊的聖体拝領を行い、心から祈ります。救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、書き留めます。」
救い主：「私はあなたを愛している、わが娘よ。私は子供たちを最後まで試さなければならない。なぜなら、私が彼らに与えた使命は果たされなければならないからだ。あなたが書き記したことはすべて、私がすでにその成就を保証している。」

私は、救い主がそれをあらかじめ整えておられたのかと考えました。

救い主：「そう、あらかじめだ。だから、いつ何が起こるかについて心配する必要はない。あなたの使命は、私と人々を愛し、私の御心を行うことである。あなたが私からまだ受け取る愛は、あらゆる方向から輝きを放つ貴重な宝石のようなものだ。そして、その光が差し込むところには、愛が流れ込むだろう。」
私：「主よ、私はさらに多くの愛を受け取ることができるのでしょうか？」
救い主：「そう、もしあなたが私と共に苦しむなら、あなたはより多くの愛を受け取り、与えるようになるだろう。あなたは多くの愛を注ぐことができるようになる。わが娘よ、これを書き留めておきなさい。あなたが受ける聖痕は、多くの魂が救われるように、長い間残るだろう。昨日、（ロクス礼拝堂の）司祭が、聖痕は恵みの賜物であるとあなたに言った。 書き留めておきなさい。それは極めて稀な大きな恵みの賜物だ。私は、私が望む者にそれを与える。書き留めておきなさい。あなたは聖痕をもって働くことができるようになり、そして長い間それを背負わなければならない。私が望む限り、ずっと。」私：「はい、私の主であり神、愛に満ちた父よ。私が授かることになるこの極めて稀な大きな恵みの賜物に、今から感謝いたします。 私は準備ができています。主が望まれる限り、主と共に聖痕を背負い、耐え忍ぶことができるよう願っています。」
救い主：「わが娘よ、あなたは傷跡のことを心配しているね。その心配を私の手に委ねなさい。それはもはやあなたの心配ではなく、私の心配となるのだ。」
私：「ああ、主よ、今、私はあなたの愛をこれほどまでに渇望しています。どうか、たくさんの愛を私に与えてください。」
救い主：「私はあなたにたくさんの愛を授けるつもりだが、今はまだだ。今のあなたに、それを受け止める準備ができているだろうか？」
私：「もう、何も書き留める必要はないのですか？」
救い主：「いや、まだ書き留めるべきことがある。」私：「はい、主よ、そ
れは何ですか？」
救い主：「君が心の中で感じているその痛みは、私の痛みなのだ。」

私：「もしかして、暑さのせいかなと思っていました。灼熱のような痛みです。」救い主：「私が愛を感じられるように、少しその痛みを許しているのだ。」

私：「あなたの苦しみは愛なのですか？」
救い主：「そう、あなたたち、私の子供たちへの真の愛だ。」
私：「主よ、私に与えてくださるすべての苦しみに感謝します。私はいつまでもあなたを愛し続けたいと願っています。どんなに重い苦しみに遭っても、決してあなたから離れないようにしてください、お願いします。」
救い主：「わが娘よ、あなたが書いた言葉は私の心に響きました。感謝します。あなたと共に、あなたのそばにいることが私の願いです。愛する娘よ、平安のうちに去りなさい。」

13時30分、教会で「赤いロザリオ」の祈り。今日は黙想の時間はなく、私は教会に残り、ある子供の洗礼式に立ち会いました。
19時00分、ロクス礼拝堂での聖体礼儀に出席した。

1992年8月10日 - 月曜日

祈りの後：
私は救い主に何も尋ねようとは思いませんでした。私はその資格がないからです。

私：「親愛なる救い主様、私が何か書き留めてもよろしいでしょうか？」　救い主：「ええ、
書き留めてほしい、わが娘よ。」　その後、沈黙が訪れた。
救い主：「わが娘よ、一語一語書き記しなさい。」私：「はい、主よ。
」
救い主：「あなたが耐えているすべての苦しみを、重罪を犯した者たちのために私に捧げなさい。あなたの恐れは、
私が取り除いてあげた。」
私：「ありがとうございます、主よ、神よ。」
私：「親愛なる神様、先ほど泣いていて、聖痕に耐えられないのではないかと恐れていた時、それを感じました。そして突然、涙が止まり、もう怖くなくなりました。」救い主：「わが娘よ、書き留めなさい。ボスニア・ヘルツェゴビナでの戦争はさらに激化するだろう。近隣諸国が危険にさらされている。」
私：「主よ、お聞きしたいことがありました。もしあなたがそう望まれるなら、H. コール連邦首相にファックスを送るべきでしょうか。」
救い主：「ええ、そうしなさい。」私
：「あなたは私と一緒にいてください
ますか？」
救い主：「わが娘よ、私は完全な秘密厳守を望む。誰にも話してはならない。」私：「では、ドチャート牧師には
？」
救い主：「彼には話してもいいが、それ以上は誰にも話すな。君に聖痕が現れれば、皆がそれを見るだろう。わが娘よ、今まで通り私を愛し続けてほしい。私たちが常に一つであることは、私の意志であり、君の意志でもある。この意志を誰にも奪うことはできない。それは君が私に与えてくれたものだからだ。」
私：「ああ、主よ、神よ、今おっしゃってくださったことは、私の心を癒してくれます。ありがとうございます、私の最愛の方。愛するイエス様、私はまだ贖いの苦しみに備える必要があるのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、目を覚まし続け、決して私に対して心を閉ざしてはならない。」
私：「主よ、『私に対して心を閉ざさないで』とおっしゃいますが、その意味がよく分かりません。どうか、どういう意味なのか、別の言葉で教えてください。」
救い主：「私は、あなたが望む時ではなく、私が望む時に、あなたの心の中に入りたいのだ。」
私：「でも主よ、あなたはいつでもそうすることができます。私は、あなたがいつも私のそばにいて、決して私を
見捨てないでいてくださることを願っています。」
救い主：「私はいつもあなたと共にいる。信じてほしい。」私：「でも、
見捨てられたと言う人もいるのですが。」救い主：「神は決してその子供
たちを見捨てたりはしない。」
救い主：「娘よ、もう一つ書きなさい。」
私：「でも主よ、もし私が心を閉ざしてしまったら、そのことを教えてほしいのです。」救い主：「君はよくそうしている。」
私：「でも、私にはわかりません。あなたが私の心の扉の前に立っていることを、どうやって見分ければいいのですか？」
救い主：「まず、この世のことに先立って、私を優先しなさい。」
私：「でも、あなたがいつ私の心の扉の前に立っているのか、私にはまだ分かりません。」救

い主：「あなたの宝があるところに、あなたの心も置け。」

私：「それも、まだ完全には理解できません。」

救い主：「わが娘よ、ありのままの自分で私を愛しなさい。」
私：「主よ、お許しください。まだ私に何かおっしゃりたいことがあったはずで
す。」救い主：「私の願いを叶えてくれ。」
私：「はい、ああ、私の主、私の神よ。私に何が待ち受けているのか事前に知らなくても、あなたが私に望まれることを果たせるよう、恵みをお与えください。あなたの御加護により、その願いが叶いますように。」
救い主：「私があなたに与える聖痕を、手袋をせずに身につけてほしい。」
私：「親愛なる神よ、私のイエスよ、私の魂の導き手よ、どういうことでしょうか? もしかすると私が聞き間違えたか、あるいは私の心が邪魔をしたのかもしれません。どうかもう一度おっしゃってください。」
救い主はもう一度繰り返されました。手袋をはめてはいけない、と。私：「もし医師たちが、手袋をはめ
るべきだと言った場合はどうしますか? 」
救い主：「それなら、私が言ったことを伝えなさい。」
私：「もし他の人たちが、私が自慢したいだけだと言ったら? 」救い主：「他の人た
ちの言うことなど聞くな。」
私はエイズや感染症のことを考えていました。救い主：「
その傷は化膿しない。」
私：「完全に露出させていいの?　完全に? 」
救い主：「そう、わが娘よ。」
私：「はい、主よ、神よ。あなたの望む通りにいたします。」
私：「主よ、神よ、傷跡ができたとき、私は気を失ってしまうのでしょうか? 」 救い主：「意識のある状態でそれを受けるのだ。」
私：「はい、主よ、神よ、わかりました。」
私：「それらは一度にすべて与えられるのでしょうか、それともまず手からでしょうか? 」 救い主：「私に任せてお
きなさい。」
私：「はい、主よ、あなたの望む通りにいたします。」救い主：「わが娘よ、私は
あなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」
救い主と過ごしたこの1時間半は、私にはたったの5分のように感じられました。
教会でロザリオと、赤のミサ。
20:00 - 祈りの会

1992年8月11日 - 火曜日

9時〜10時まで、フリドリンと一緒に祈りました。
11時00分から13時00分まで、私は一人で祈り、主と一つになりました。救い主：「愛する者
よ、それを書き留めなさい。」
今日は「わが娘」とはおっしゃらないのだな、と思いました。救い
主：「愛する者よ、そう書き記しなさい。」私：「ありがとうござ
います、主よ、神よ。」
救い主：「あなたが書くことはすべて、私の望む通りに、できるだけ早く印刷される。私があなたに与える司祭に任せておきなさい。彼は私の望む通りにそれを行うだろう。書きなさい、わが娘よ、自分の間違いを気にするな。それらは最も重要なことを見落としているのだ。」
私：「主よ、なぜこの文章を急がせるのですか。これが一冊の本になるのですか。」
救い主：「私は再び時間を短縮しなければならない。人々は、彼らを愛する父のもとへ立ち返ろうとはしないからだ。」
私：「その本は、人々が立ち返る助けになるのでしょうか? 」
救い主：「彼らはそれを知るだろう。残りのことはまだこれからだ。この本が多くの人の助けになることを確信しなさい。」
私：「主よ、そのことについてはコメントしたくありません。あなたの望む通りにしてください。」その後、私はフ
リドリンのことを考えた。
救い主：「あなたがたが一緒に祈ったことを、私は喜んだ。私はいつもあなたがたと共にいる。」私は、フリドリ
ンにも少しばかり好奇心があるのではないかと思った。

救い主：「わが娘よ、彼は司祭になる。彼と一緒に祈り続けなさい。」私：「ありがとうございます、主よ。これからもそうします。」

その後、ドチャート神父のことを思い出し、それが救い主の御心に沿った正しいことだったのかどうか考え込んだ。
救い主：「あなたが彼にそのことを話してくれたことを、私は喜んだ。」
それから、私はフリドリンのことを思い出した。彼に、私が聖痕を受けることになる、と伝えていたからだ。彼にそう話したことが本当に正しかったのか、不安になった。
救い主：「彼にはそう言ってもいいのだ。それは知っているだろう、わが娘よ。」
私：「はい、主よ。以前にもそうおっしゃっていましたが、確信が持てませんでした。」私はさらに救い主に尋ねました。
「私が聖痕を受ける時、なぜ手袋をはめないでいてほしいのですか？」救い主：「私は寛大な信仰告白者を必要としている。そして、闇の中にいる者たちに光が輝くようにするためだ。」

時刻は12時になり、私は『主の天使』の祈りを捧げるために会話を中断した。祈りの後、私は救い主にこう言った。
「私が聖母マリアに祈ると、あなたは喜ばれるのですね。」救い主：「私も一緒に祈っている。」
私：「はい、主よ、その通りです。主よ、私の心にはとても素晴らしい感覚が満ちていて、とても自由な気持ちです。言葉では言い表せません。」
救い主：「わが娘よ、あなたは私にすべてを捧げてくれた。今日という日も、これから訪れる明日という日も。そうあるべきなのだ。」
私：「はい、主よ、お望みのままになさってください。」
救い主：「娘よ、もう一つ書き留めておきなさい。私があなたに求めたことについて、考える時間をもう少し与えてあげよう。その時間は限られている。」
私：「主よ、神よ、私は今、すでに『はい』とお答えします。私はあなたのぶどうの木です。ぶどうの木に留まってこそ、実を結ぶことができます。私が良い実を結べるよう、お望みのままに私をお使いください。主よ、それはあなたと共にあるときだけできることです。」
救い主：「わが娘よ、それならば、あなたが良き実を結べるように、あなたは剪定されることになる。」私：「私は何をすればよいのですか？」
救い主：「虚栄心を捨てなさい。もっと質素な服を着なさい。その服を貧しい人々に与えなさい。あなたは少ないものでもやっていける。靴も貧しい人々に与えなさい。」
私は、その中からどれくらい残しておけばいいのか、たぶん二足くらいかな、と考えた。
（靴の件は書きたくなかった。しかし後で、書かなければならないと感じたので、結局書いた。）
私：「今まで一度も尋ねたことのないことをお聞きしたいのですが。私が頭にスカーフやショールを巻くことを望まれるのですか？私があなたの花嫁である以上、それは重要なことなのでしょうか？」
救い主：「ええ、私にとってはとても重要なことなのです。」 救い主：「私の娘よ、その頭巾を身につけてください。」 私：「病院で？それとも教会で？」
救い主：「どこでも。」
私：「でも、頭にかぶりを着けるのは私には難しいわ。私：「どうして？」
救い主：「あなたが虚栄心に駆られないようにするためだ。それに、私の選ばれた者たちは、昔から常に頭巾を身につけてきたのだ。」
私：「それは伝統のためですか、それともあなたがそう望んでいるからですか？」救い主：「私がそう望んでいるからだ。」
私：「でも、ヴォクト牧師はそれを理解してくれないでしょう。」救い主：「あなたは私の花嫁か？」
私：「他の人たちはどうなんですか。彼らも頭巾を被るべきですか？」 救い主：「そうだが、全員にそれを求めるわけではない。」
私：「私がそうしたら、他の人たちは私が頭がおかしいと言うでしょう。」救い主：「そうしなさい、わが娘よ。」
私：「はい、主よ。あなたがそう望まれるから、そしてあなたへの愛ゆえに、私は頭巾を被ります。」
救い主：「わが娘よ、私があなたに望むことをしなさい。」
私：「親愛なる神様、あなたが私に何を望んでおられるかを、常に悟ることができますよう、恵みをお与えください。」

救い主：「わが娘よ、あなたは私が大切に守らなければならない私の真珠です。私に忠実であり続けなさい。平安のうちに去りなさい。」

午後6時30分、私はフリドリンと一緒にロートの教会へ行き、ロザリオの祈りと聖なるミサに参加しました。聖体拝領の前後、私は救い主に、主が私に求めておられることをよく考え抜いたと伝え、それに「はい」と答えました。 そして、救い主に、聖母マリアが私が十字架を背負うのを助けてくださり、苦しみの中で私の慰め手となってくださるよう祈りました。
私は、決して主から離れたくないと伝えました。
私は、イエス様と人々への愛から、魂の救いと罪人の回心のために、この贖いの苦しみをイエス様と共に背負う用意があることを繰り返しました。聖体拝領の後、聖なる結び合いの際、救い主は私にこうおっしゃいました。
救い主：「ありがとう、わが娘よ。私はあなたを愛している。私に忠実であり続けなさい。私はそれを受け入れる。」

1992年8月12日 - 水曜日

私は夜2時30分から3時30分まで、そして朝9時30分から11時30分まで祈りました。朝、私は祈りながら主と一つになりました：
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。」
私：「はい、愛する慈悲深い父よ、愛するイエス様、愛する聖霊様。」
救い主：「あなたが私から受ける聖痕は、あなたの手と足、そして心に刻み込まれる。善意ある魂たちのために、多くの血が流されるだろう。娘よ、それは魂を救うための私の血となる。私の血は深く崇められなければならない。 私がこの血を流すとき、私の御心を行うことが、あなたの使命である。それは大きな苦痛となるだろう。あなたに許されるのは、あなたが耐えられる範囲だけだ。私はあなたが耐えられる限度を知っている。私を信頼しなさい。私はあなたの花婿である。常にあなたと一つになることも、私の御心である。私と共にあれば、あなたに何一つ欠けることはない。」
私：「主よ、どういう意味ですか。私に何一つ欠けることはない、とは? 」救い主：「私は、あなたに必要なものをすべて持っている。」
私：「はい、主よ、信じます。愛する神様、今、私はあなたをとても愛しているので、あなたが望むことは何でもしたいと申し上げたいのです。」
救い主：「わが娘よ、傷跡から血が流れるだろう。まずは金曜日に。その日は働く必要はない。彼らはあなたを仕事から免除してくれるだろう。」
私：「それなら、私は祈ることができますか? 」
救い主：「他の人たちはたくさん祈らなければならないだろう。わが娘よ、確信しなさい。彼らはそうするだろう。」
救い主：「私はすべての人を愛している。」私は茨の冠のことを思い出した。
救い主：「それはまだ先のことだ。いばらの冠もその一部だ。まずあなたは鞭打ちを受け、その後、いばらの冠を戴くことになる。それは、私がカルヴァリアで受けた苦しみと同じようになる。それは、あなたの中での私の磔刑なのだ。あなたの痛みは私のものとなる。この贖いの苦しみは、私の贖いの苦しみである。私はあなたの中にあり、あなたは私の中にある。そうして私たちは一つとなるのだ。」
私：「どうか、主よ、神よ、私の恐怖を取り除いてください。悪魔を恐れないように、そして悪魔が私に何もできないようにしてください。もし悪魔が私に何かをしたとしても、それによって数えきれないほどの魂が永遠の罰から救われるようにしてください。」
救い主：「わが娘よ、そのことは私が責任を持って成し遂げる。」
救い主：「あなたは他の魂たちよりも多くの試練にさらされる。だからこそ、あなたのために多くの祈りが捧げられるだろう。多くの祈りが捧げられること、それが私の御心である。」
救い主：「お前の使命は、常に私に忠実であり続けることだ。」
私：「あなたに忠実であるために、あなたはすでに私にその恵みを与えてくださいました。」救い主：「そう、私はすでにそうした。」
私：「でも、私には司祭が必要です。」
救い主：「誰かが来るだろう。司祭に困ることはない。」救い主：「愛する娘よ、今日はこれで十分だ。平安のうちに去りなさい。」

19:00 ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂にて、ロザリオと聖体祭。

1992年8月13日 — 木曜日

9時50分〜11時00分 自宅にて：

私は心を込めて祈り、主と一つになった。

救い主：「おお、わが娘よ、それを書き記せ。あなたが書くことはすべて、わが意志である。あなたは無に等しく、わたしなしには何もできない。それゆえ、あなたはあらゆることにわたしを必要としている。わたしはすべての人々の主であり、神である。すべてはわたしに従って整えられなければならない。罪深い人々よ、目を覚ませ。あなたがたがわたしにもたらしたもので、あなたがたが裁かれる時が来た。

誰もが私の前で説明責任を果たさなければならない。私の前では何も隠すことはできない。私はあなたがたに、見るための目と、聞くための耳を与えた。それなのに、あなたがたは見ることも聞くこともしていない。すべてはただ狂気である。 私の怒りはすべての人々に降りかかるだろう。私の不従順な子供たちよ、目を覚ませ！私は闇の神ではなく、光の神である。私の光の中に留まりなさい。あなたたちを照らす光を求めなさい。なぜなら、闇が訪れれば、もはや祈ることはできなくなるからだ。そしてその時、あなたたちは闇の神のものとなる。そうすれば

彼らの苦しみは永遠に続く。わが娘よ、皆を祈りに招きなさい。わが母であり、あなたがたの母である方は、あなたがた全員を愛し、大切に思っている。皆、彼女の元へ戻りなさい。彼女は両腕を広げてあなたがたを待っている。彼女を愛しなさい。彼女はあなたがたの祈り（執り成し）を私に届けてくれる。

私は彼女からの執り成しを拒むことはない。わが娘よ、あなたに降りかかるすべてのことを、マリアの汚れなき御心に委ねなさい。彼女の御心は、私の御心でもあるからだ。そうすれば、敵は退かなければならない。愛する娘よ、書き続けなさい。」

私：「はい、主よ、神よ、愛に満ちた父よ。」

救い主：「あなたの贖いの苦しみについて、それほど心配する必要はない。それは私の問題であり、あなたの問題ではない。あなたの『はい』に感謝する。私はそれを受け入れた。あなたには何も欠けることはない。信頼しなさい。私はあなたの命である、わが娘よ。私はあなたの弱さを知っている。

必要なものはすべて、適切な時に与えてあげる。先走って心配する必要はない。あなたが受ける贖罪の苦しみは、もうすぐそこにある。その時が来れば、私が扉を叩く。私のもとでは、すべてが適切な時に起こるのだ。

わが娘よ、私はあなたを深く愛しており、今、あなたを祝福します。」私は祝福を受けるために床にひざまずいた。

救い主：「わが娘よ、父と子と聖霊の御名によって、あなたを祝福します。平安のうちに去りなさい。」

私は「アーメン」と答えました。

その後、「主なる神に感謝します」

私がそれを正しく言ったのかどうか、自分でもわからなかった。救い主：「わが娘よ、それは私の心にかなう。」

昼食の直前に、私は息子に、神のことをもっと真剣に受け止めるようにと告げた。さらに、告解に行くべきだとも伝えた。

彼は言った。「どうせ、お母さんの言うことなんて信じられないよ。」

そこで私は彼に、トマスと同じように、傷跡をこの目で見るまで信じないだろう、と告げました。私は以前から、彼が祈りの集まりに参加できる時もあるのに、それを避けていることに気づいていました。

現在、私の家族全員が、不浄な霊が吹き込む言葉に耳を傾けています。たとえ私一人になっても、私は主であり神である方に忠実であり続けます。

18時30分、ロザリオと聖体礼儀（赤のミサ）。

今日、福音書で、他の弟子たちがイエスの復活を告げたにもかかわらず、それを信じなかったトマスについて語られるとは、全く予想していませんでした。

聖体拝領の後、私は救い主に、ヴォクト神父のもとへ行き、救い主から聖痕を授かったことを伝えるべきかどうか尋ねました。

救い主：「彼のところへ行き、話してみなさい。」

そこで、私は教会を出てヴォクト神父のもとへ行き、そのことを伝えました。神父は少し微笑んで、「あなたはそれを信じているのですね」と言いました。

私：「はい、信じています。」

それから、救い主が「手遅れになって初めて、彼はそれを信じるだろう」とおっしゃっていたことも、彼に伝えました。さらに彼から祝福をいただき、嬉々として家路につきました。

1992年8月14日 - 金曜日

10:00〜11:45 自宅にて：

祈り・交わり

救い主：「書きなさい、わが娘よ。私はあなたに書いてほしいのだ。」私：「はい、愛するイエス様、私の魂の導き手よ。」

救い主：「わが娘よ、戦争は激化している。世界は混沌としている。敵はすでに大きな戦利品を奪い去った。人々は、神と和解するまであまりにも長く待っている。戦争はすでに十分な被害をもたらしたが、さらに多くの被害をもたらすだろう。政治家たちに悔い改めを呼びかけなさい。彼らはサタンのベールに目がくらんでいる。彼らは私の前で大きな責任を問われることになるだろう。 その責任から免れる政治家は一人もいない。私は多くの人々を吐き出さなければならない。」

救い主：「わが娘よ、あなたがすべてを書き留めていることを、私は喜んでいる。この働きには、特に報いを与えるつもりだ。」

私：「主よ、聖痕についてもう一つお尋ねしたいことがあります。あなたは『扉の前に立っている』とおっしゃいましたが、ヴォクト神父は良いことをおっしゃっていませんでした。あなたが私の心の扉をノックされる前に、私が知っておくべきことや気づくべきことはありますか? 不浄な霊が介入しないよう、注意しなければならないからです。」

救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。あなたが受ける傷跡は、私のものであり、容易に見分けがつく。」

私：「それはどういうことですか、愛する三位一体の神よ? 」

救い主：「その傷から流れ出る血は、私の血だ。人間には、そこから流れ出るほどの血などないのだ。」

私：「でも、科学者たちはそれだけでは納得しないでしょう。」

救い主：「これらの傷は治ることもなければ、膿むこともない。これらの傷は、盲人の目を開かせる光を放つだろう。わたしがあなたを通して流すこの血こそが、彼らの救いとなるのだ。わが娘よ、その時点でまだ信じない者がいるなら、その者は後になっても信じることはできないだろう。

書き記せ、わが娘よ。ある者たちにとっては、私は無駄に十字架にかけられ、またある者たちにとっては、これから無駄に十字架にかけられるのだ。それらの魂たちは、すでに自分たちの父を選んでいるのだ。」

私はしばらくの間、救い主と語り合った。そして：

救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。教会で聖痕が刻まれる時、あなたは大きな叫び声を上げるだろう。その苦痛の叫びは避けられないのだ。」

私：「主よ、そんなに痛いのですか? 」

救い主：「そう、わが娘よ、それはこの上ない痛みだ。」私：「それなら、多くの人が怖がるでしょうか? 」

救い主：「わが娘よ、あなたが感じる痛みに比べれば、驚いてしまうことなど大したことではない。この地獄のような痛みは、地獄に比べればほんのわずかなものに過ぎない。」

私：「はい、主よ、わかりました。お望みの通りに、そうなるでしょう。」私は、これから何かが起こるのか、救い主がまだ何かおっしゃるのかと考えた。

救い主：「そう、まだある。傷跡を、できるだけ早く、お前に刻み込むつもりだ。」

私：「主よ、神よ、私はあなたの御心に身を委ねます。今、そして永遠に、ただあなたを愛し、あなたと共にいさせてください。」

救い主：「わが娘よ、私はあなたを選んだ。あなたは今、そして永遠に、私の最も愛する者である。」

私：「親愛なる神様、『最も愛しい者』という部分を消すべきでしょうか? 」救い主：「私が誰をそう呼ぶかは、私が決めることではないか? 」

私：「ありがとうございます、主よ、神よ。」

私：「『最も愛しい者』という言葉には、私にはあまりにもふさわしくない気がします。」

救い主：「愛する娘よ、今、あなたを祝福する。」
- 私はひざまずいた -
救い主：「父と子と聖霊の御名によって、あなたを祝福します。平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」
私：「主なる神に感謝します。イエス・キリストを賛美します。今、そして永遠に。アーメン。」

いつものように、私は感謝の祈りを捧げ、すべての人々と煉獄にいるすべての貧しい魂たちのために、霊的聖体拝領を捧げました。

18時30分、ロザリオと赤のミサ。

聖体拝領の後、私は救い主に、H・コール連邦首相にファックスを送るべきかどうか尋ねました。
救い主：「そうしなさい、わが娘よ。それが私の望みだ。」
夜遅く、私はロズヴィータのところへ行った。彼女の息子が、連邦首相宛ての手紙をファックスで送るのを手伝ってくれた。
23時30分頃、私はもう一度ロザリオを唱えました。

1992年8月15日 — 土曜日 — 聖母被昇天祭 午前4時15分、私は
祈りを始めました。私は救い主と心を一つにしました。
救い主：「その手紙は正しかった。手紙のことは心配するな。」私の目から、自分の意志とは無関係
に、涙が自然と溢れ出た。
救い主：「書きなさい、わが娘よ。戦争は激化している。ドイツ人はこの戦争に介入してはならない。」
私：「それを言わなければならないのですか？」
救い主：「尋ねられたら、そう言いなさい。民は祈りに招かれなければならない。祈りによって、私は多くのことを変えることができる。わが娘よ、たくさん祈りなさい。サタンは強い。多くの善良なクリスチャンが、その餌食となるだろう。
今書き留めていることはすべて、大切に保管しなさい。私はあなたに特別な守りを与える。わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

10時30分から12時30分まで、私はマリオンと一緒にいて、二人で書き物をしました。
16時30分から19時45分まで、ロートの教会にいました。そこで告解をし、19時からの聖体礼儀にも参列しました。

1992年8月16日 - 日曜日
8時30分から10時まで、祈りを捧げました。
私は、マリアの無原罪の御心を通して、多くの魂たち、そして貧しい魂たちをも、救い主に委ねました。
私は心の底から涙を流し、救い主にこう言いました。
「愛するイエス様、私はすべての魂のために贖罪の苦しみを負う覚悟があります。」
すると突然、大きくて重い涙が私の目から溢れ出ました。そう、それは私の涙ではありませんでした。私が流したのは、救い主
の涙だったのです。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。あなたはすべての魂のために苦しむことになる。私は彼らすべてを愛している。彼らは皆、私の子供たちだ。しかし、すべての者が私の御心に従おうとするわけではない。あなたの贖いの苦しみは
は、もうすぐそこにある。」
救い主：「娘よ、私はあなたをとても愛している。それを書き留めなさい。私があなたに与えている愛、そしてこれから与えていく愛は、私の愛であり、あなたへの贈り物なのだ。」
私：「主よ、しかし、それは最大の美徳ではありませんか。」
救い主：「そう、それを書き留めなさい。この美徳を授かる者はごくわずかだ。私は、私が望む者にのみそれを与えることができる。この愛をもって、あなたはすべてに打ち勝つのだ。」
私：「主よ、神よ、この偉大な贈り物に、どうすればお礼を申し上げればよいのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、あなたはすでに、私にすべてを捧げたことで感謝を示してくれた。もし望むなら、この私の愛を他の人々に伝えることができる。あなたには愛が尽きることはない。あなたを通して、多くの魂が愛を汲み取ることができる。わが娘よ
、
あなたは私の聖櫃である」
私：「ああ、主よ、私にはそのすべてを理解することはできません。」

救い主：「もしあなたがそれを理解できたなら、それは私からのものではなくなってしまうだろう。
書き記せ、わが娘よ。わたしもまた、理解しがたい愛そのものである。あなたは司祭に、あなたの心ならそれを理解できると言った。理性が理解できないことも、心は理解できるのだ。わたしはあなたの心の中にいる、わが娘よ。わたしなしには、あなたたちは何もできない。
愛だけがすべてを成し遂げることができる。愛なしには、あなたたちは生きられない。愛を成し遂げられるのは、わたしだけだ。わが娘よ、あなたが待ち望んでいる司祭は、まだ来る。そのことについて心配する必要はない。先走って心配してはならない。」
私：「救い主よ、どうかこの激しい苦痛の中、あなたから引き離されないようにしてください。」 救い主：「誰もあなたを私から引き離すことはできない。あなたは完全に私のものだからだ。」
私は、自分の意志であなたから離れられるかどうか考えました。救い主：「あなた自身では、何もできないのだ。」
私：「ああ、主よ、これで私は安心し、ほっとしました。」救い主：「その通りだ、わが娘よ。」
私：「それでは、主が望まれる限り、魂の救いのために、主と共に贖いの苦しみを味わわせてください。」救い主：「わが娘よ、あなたが書いたその言葉は、私に特に喜ばしい。」
「それが私の望みだ。私と共にあれば、あなたに欠けるものは何もない。あなたが語るすべては、私そのものだ。そう、わが娘よ、私はあなたの主であり、神である。あなたの体は私の体であり、あなたの意志は私の意志であり、あなたの祝福は私の祝福である。」
私：「主よ、私にも祝福を授けていただけますか？」
救い主：「わが娘よ、あなたは多くを祝福すべきだ。」私は、祝福とは非常に偉大なことだと申し上げました。救い主：「わたしもまた偉大である。」
私：「どうやって祝福すればいいのですか？」
救い主：「私があなたの手を導いてあげる。」
私：「ああ、主よ、これで準備は整いました。まだ何か書き留めるべきことはありますか？そうしていただきたいですか？」救い主：「愛する娘よ、あなたの隣人の中で、私をもっと愛しなさい。」
私：「はい、主よ、そういたします。」
救い主：「わが娘よ、今、あなたを祝福します。父と子と聖霊の御名によって。」
私：「アーメン。主なる神に感謝します。イエス・キリストとマリアに、今、そして永遠に栄光がありますように。アーメン。」
私：「神様、マリア様にもそう言ったのは、正しかったのでしょうか？」救い主：「それを聞いて嬉しい。」

13:00 ロートでのロザリオと祈りの集い。
19:00 ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂にて聖体ミサ。

1992年8月17日 - 月曜日

10:00 医師室にて：
救い主：「わが娘よ、私はあなたを何よりも愛している。」私：「主よ、そんなことは書けません。」
救い主：「書きなさい。わが娘よ、お前の振る舞いは私の心にかなう。そのままで続けなさい。愛が足りないことを恐れるな。私は愛の神である。私から受けた愛を、絶えず他者に分け与えなさい。愛に欠けることはない。謙虚で柔和でありなさい。私はあなたと共にいる。」
私：「主よ、私は傷跡を授かって初めて、あなたと共にいるのだと思っていました。」救い主：「わが娘よ、あなたはすでに私と共にいる。私はあなたの中にすべてある。」
私：「主よ、私の心の中に燃えるような熱を感じます。」
救い主：「私は愛の炎だ。この炎を消せる者は誰もいない。それは私が望む場所で燃え続けるのだ。」
私：「主よ、今、涙が出そうです。私がどれほどあなたを愛しているか、それを知っているのはあなただけです。愛する救い主よ、他に知っておくべきことはありますか？」

救い主：「物事が自然に訪れるままにしておきなさい。先走って心配する必要はない。」
私：「主よ、あなたと愛の中で共にいることほど美しいものはないと信じています。
ああ、愛するイエス様、あなたは大学病院のこの医師室にやって来て、こんな取るに足らないレントゲン技師の私のもとへ降りてきてくださるのです。

以前なら、こんなことがあり得るとは想像もできませんでした。主よ、言葉では感謝しきれません。あなたへの愛と、隣人への愛をもって、感謝いたします。」
私：「ああ、主よ、あなたは愛の源です。今、その愛をとても強く感じています。」救い主：「わが娘よ、私があなたに求めることに備えなさい。」
私：「主よ、神様、もし私があなたにふさわしい存在であるなら、準備はできています。」救い主：「わが娘よ、ありのままのあなたで十分だ。」
私：「愛するイエス様、それなら、長く躊躇しないでください。私も渇いています。」救い主：「あなたからそう聞けて、私は嬉しかった。」
救い主：「愛する娘よ、平安のうちに去りなさい。」私：「主なる神に感謝します。」

ロザリオと、赤のミサ。
20時 祈りの会。

1992年8月18日 — 火曜日

10時、医師室にて：
深く心からの祈りを捧げた後、再び涙がこぼれた。
救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。それを書き記しなさい。私が私の業を成し遂げる時が来た。あなたは完全に私のものだ。」
私の目から、私自身のものとは異なる涙がこぼれ落ちた。私は尋ねた。「それはあなたの涙ですか？」
救い主：「そう、それは私の涙だ。それはあなたのために私が負う苦しみである。わが娘よ、私の業をあなたの中で働かせなさい。」
私：「主よ、あなたが『私の業』とおっしゃるのは、何のことですか？」
救い主：「わが娘よ、それはあなたの中での私の磔刑である。」私：「それは何時間ほど続くのですか？」
救い主：「カルヴァリアでの時と同じだ。」
私：「聖母マリアもそこにいらっしゃるのですか？」
救い主：「あなたの天の母は、あらゆる磔刑の場に立ち会っておられる。彼女はあなたに慰めを与えてくださるだろう。私を愛するように、彼女を愛しなさい。」
私：「その磔刑の際、私はたくさんの血を流すことになるのでしょうか？」救い主：「ほとんどすべてを。」
私：「それでもまだ生きられるのですか？」
救い主：「わが娘よ、それこそが、あなたたちにとって理解しがたいことなのだ。」
救い主：「私は、欠けているものをすべて補うことができる。あなたに不足するものは何もない。私があなたの命なのだ。」
私：「それなら、この流された血によって魂が救われるのですね。」
救い主：「そう、わが娘よ、それによって非常に多くの人々が回心するだろう。癒やしも起こるだろう。」
私：「では、誰が癒やされるのですか？」救い主：「誰でも。」
私：「主よ、でも、誰もが病気というわけではありませんよね。」
救い主：「いや、そうだ。最大の病とは、彼らのほとんど全員がもはや私を愛していないということだ。」私：「親愛なる神様、私はあなたを愛しています。」
救い主：「それは知っている、わが娘よ。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。あなたが受ける聖痕は、この数日中に現れるでしょう。準備をしておきなさい、わが娘よ。」
私：「愛するイエス様、私がすべてを耐え抜き、揺るぎなく忠実であり続け、それが終わった後、あなたをこれまで以上に愛することができるよう、恵みをお与えください。」
救い主：「娘よ、確信しなさい。そうすれば、あなたは私をもっと愛するようになるだろう。」私：「それは

教会で起こるのですか？」

救い主：「ええ、それは教会で起こるのです。」

救い主：「わが娘よ、すべてを私に委ねなさい。あなたは私の道具なのだ。」

私：「主よ、神よ、愛に満ちた父よ、あなたの御心どおりに成りますように。」救い主：「わが娘よ、私はあなたに豊かな恵みを授ける。愛する娘よ、平安のうちに去りなさい。」

私：「主なる神に感謝します。」

18時30分 ロザリオと聖体祭（赤）。

19年8月9日 — 水曜日

10時00分 - 診察室：

救い主：「書き留めなさい、わが娘よ、一言一句を。私があなたに与える聖痕は、主要な祝日を除き、毎週金曜日に血を流すだろう。流れ出るその血は、聖なる血である。」

私：「主よ、でも私は聖人ではありません。」

救い主：「それなら、それはあなたではない。私なのだ。あなたが受ける聖痕は、深いものとなるだろう。」

私：「主よ、神よ、『深い』という言葉の意味がわかりません。どういう意味ですか？」

救い主：「それは表面的な傷跡ではないのだ。書き留めなさい、わが娘よ。それゆえ、多くの血が流れることになる。流されるこの大量の血を恐れる必要はない。

流されるこの大量の血を恐れる必要はない。」

救い主：「わが娘よ、私はあなたが傷跡を受ける日を定めた。それは、私と、私とあなたたちの母が喜ばれる日である。」

私：「主よ、その日がいつなのかは知りたくありません。それとも、知るべきなのでしょうか。すべてあなたにお任せします。その日が来たとき、私が勇気を持って恐れず、疑わず、不浄な霊が私のそばにいないよう、どうか多くの恵みをお与えください。」

救い主：「わが娘よ、そのようになるだろう。」

私：「最愛のイエス様、これ以上何か書き留めるべきか分かりません。」救い主：「書きなさい、わが娘よ。私は、あなたがすべてを静寂のうちに守り続けてほしいのです。」私：「その理由を教えていただけますか？」

救い主：「紙面が足りないからだ。それに、好奇心旺盛な者たちが先にやってくるからだ。」

私：「はい、主よ。私はあなたの御心に従います。」

私：「主よ、もうこれ以上知る必要はないのでしょうか？」

救い主：「いいえ、わが娘よ、あなたはすべてを忍耐強く、愛をもって耐え忍ばなければならない。」

私：「親愛なる神様、その点については心配ありません。あなたは私に忍耐という美徳を与えてくださいましたし、愛もまだ与えてくださるでしょう。私はそう信じ、そうできることを願っています。」

救い主：「わが娘よ、私は今、そしてこれからも、常にあなたと共にいる。」

私：「主よ、それが（聖痕が）現れる時、その前に何か感じるでしょうか？」救い主：「あなたは私の愛を感じるでしょう。私は愛そのものなのです、わが娘よ。」

私：「はい、主よ、わかりました。主よ、神よ、感謝いたします。」救い主：「愛する娘よ、私はあなたを私のそばに抱きしめている。」

私：「はい、主よ。どこへでも、お望みの場所へ私を連れて行ってください。」

私：「ああ、主よ、愛するイエス様、あなたをとても愛しています。あなたといると、いつもとても幸せです。」

救い主：「愛する娘よ、平安のうちに去りなさい。」私：「主なる神に感謝します。」

ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂でのロザリオと聖ミサ。

1992年8月20日 - 木曜日

午前10時、医師室にて：

救い主：「書き記せ、わが娘よ。私はお前の動きを望んでいる。」

私：「親愛なる神様、あなたは最初から私にそうお尋ねになりましたが、私はまだそれを完全には理解できていません。それでも、私の思いをお捧げします。」

救い主：「私が、あなたがどこへ行くべきかを決める。」

私：「主よ、私はあなたが望むところへ参ります。私がそうしていることを、どうか私に気づかせてください。」

救い主：「わが娘よ、書き記せ。私は、動くすべてのものの主であり、神である。私に属する者は、私に順応しなければならない。」書き記せ、わが娘よ。私は、あなたが私に厳格に従うことを望む。」

私：「愛する神様、そうします。どうかお助けください。私はとても弱いです。沈黙すべき時には、私の舌を黙らせてください。」
救い主：「わが娘よ、私が望む時に、あなたは話すのだ。そのことについては心配する必要はない。」私：「しかし主よ、『厳格に』という意味がわかりません。それについて教えてください。」
救い主：「私が始めたことは、必ず成し遂げる。」
私：「今、何か間違ったことをしてしまうのではないかと怖いです。」救い主：「わが娘よ、
私と共にある限り、そんなことは起こらない。」
私：「『厳しく整える』ということについて、もう少し教えていただけますか。」救い主：「
お前の『はい』は『はい』であり、お前の『いいえ』は『いいえ』なのだ。」
私：「親愛なる神様、今日はいつもより、あなたが厳しい父でもあるような気がしています。私の気のせいでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、この世には恐ろしい悪行がはびこっている。私は時を短縮した。敵は至る所にいる。人々は自分が何をしているのか分かっていない。私は、敵が望む多くのことを許すつもりだ。人々は悔い改めなければならない。」
私：「親愛なる神様、どうかすべての人に恵みと憐れみをお与えください。私はあなたと共に魂を救う覚悟ができています。私はあなたのものであります。私に対して、あなたが望むことを、望む時にしてください。私はあなたを深く愛しています、私の良き、憐れみ深い三位一体の神様。」
救い主：「わが娘よ、その時が来るまで、もう少し辛抱しなさい。私はあなたと共にいる。心配する必要はない。私の手をしっかりと握りしめていなさい。」
私：「イエス様、すべての王の王よ、そういたします。」救い主：「わが娘よ、私は
あなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」私：「主なる神に感謝します。」

正午、病院の礼拝堂にて。

救い主：「あなたに何か書き留めてほしい。私の御心を行ってほしい。」私：「主よ、神よ、あなたの御心とは何ですか？」
救い主：「あなたが受ける聖痕を、最後まで身に刻み続けること。」
私：「主よ、私はあなたと共にそういたします。あなたを愛しているから、それがあなたの御心だから、そして魂たちが永遠の罰から救われることを願っているからです。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。その聖痕は、あなたに多くの問題や苦難をもたらすだろう。すべての問題、すべての苦難を私に委ねなさい。私がすべてを解決する。一人で何も行わないように。あなたは私に服従しなければならない。わが娘よ、まず私の言葉に耳を傾けなさい。
わが娘よ、私はあなたが私に従順であることを望む。」
私：「主よ、神よ、私が従順であるよう、その恵みをお与えください。それは、私にとって必要不可欠な大きな美徳です。」
救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。今日、あなたはすでに従順さを与えられている。それをあなたに与えることが、私の願いである。」
私：「主よ、神よ、ありがとうございます。感謝いたします。」救い主：「
愛する娘よ、平安のうちに去りなさい。」

18時30分 ロザリオと聖体祭（赤）。

1992年8月21日 - 金曜日。

10時00分、医師室にて：
昨日、私は書き続けることをほとんどやめようかと思いました。自分の文章も理解力も乏しいことに苛立ちを感じていたからです。しかし、イエス様への愛ゆえに、書き続けています。
救い主：「あなたが書くことは、私の御心である。わが娘よ、あなたが書き続けるのも、もう長くは続かない。誰かがあなたのために代筆してくれるようになる。それまでは、
まだ我慢しなさい。」
書き続けなさい、わが娘よ。私はあなたの夫に十字架の苦しみを負わせる。」私：「それを書いていいのですか？」
救い主：「そう、書きなさい。彼はそれを受け入れなければならない。他に選択肢はないのだ。」
私：「主よ、彼がどのような苦しみを受けることになるのか、知りたくありません。ただ、あなたが彼にそれを与えるのなら、それは彼にとって良いことだと分かっています。どうか、彼が失われることのないようお守りください。彼が軽率な人間である

ことは分かっています。」

救い主：「わが娘よ、私は彼に、立ち返ることができる時間を与えてやる。」

私：「ありがとうございます、主よ、神よ。」
救い主：「あなたの夫は、私の望むことをするだろう。懲らしめは必要なのだ。」私：「救い主よ、昨日は私のことが理解されませんでした。」
救い主：「わが娘よ、あなたは私のものだ。あなたを理解する者は少ないだろう。なぜなら、それはあなた自身ではなく、私そのものだからであり、彼らは私を理解しようとしないからだ。誰もが真理に耐えられるわけではない。書き記せ、わが娘よ、私は真理そのものである。人々があなたにそう接しても、驚いてはならない。
かつて、彼らは私に対してもそう扱ったのだ。これからも謙虚で柔和であり続けなさい。」私：「主よ、謙虚さと柔和さをお与えください。私にはそれだけでは足りません。私がそれを他者に分け与えられるよう、どうかたくさんの愛をお与えください。あなたの愛があってこそ、私はすべてを成し遂げることができるのです。」
救い主：「愛する娘よ、お前の振る舞いは私の心にかなっている。それが正しくないなどと自分を責めるな。私はお前を私の望むように扱う。それは他の人々には気に入らないだろう。誰もが私に順応しなければならない。それもまた私の御心である。」
私：「主よ、神よ、お望みのままになさってください。」しばらくして：
救い主：「そう、わが娘よ、それを書き留めなさい。私は、私の計画を実現することを決めた。私はあなたに五つの聖痕を与える。私の『はい』は『はい』だ。あなたには痛みも恵みも欠けることはない。目を覚まし、準備をしておきなさい。」
私：「愛する神様、今、私はあなたをとても愛しています。今、私はあなたの腕の中に身を委ねます。そして、いつまでもあなたの心の中にいたいのです。」
救い主：「わが娘よ、あなたは永遠に私のものだ。もはや誰も私たちを引き離すことはできない。私たちは今や切っても切れない関係にある。今、私はあなたに私の愛を注ぎ、あなたがこれから直面するあらゆる試練を乗り越えられるようにする。この愛をもって、あなたはすべてに打ち勝つのだ。
私：「主よ、私の心は熱く、ますます熱くなっていくのを感じます。」私：「どうしてそんなことができるのですか？」
救い主：「私は愛の神である。」
私：「なんて美しいのでしょう。もう怒りのことは考えられません。愛が怒りを消し去ってくれたのだと思います。」
救い主：「その通りです、わが娘よ。」
私：「主よ、神よ、この大きな恵みに感謝いたします。」救い主：「平安のうちに去りなさい、愛する娘よ。」

私はいつものように感謝の祈りを捧げました。
18時30分、ロザリオと聖体祭（赤のミサ）。

1992年8月22日 — 土曜日

7時30分～9時00分　祈り・合一。
救い主：「書き記せ、わが娘よ、一言一句を。」私：「はい、私の尊き愛よ。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたの全き献身を望む。」
私：「主よ、私はすでにすべてをあなたに捧げました。まだあなたに捧げていないものはありますか？」
救い主：「あなたの感覚器官を私に捧げなさい。」
私：「主よ、神よ、あなたに捧げます。すべてがあなたのものとなりますように。」救い主：「私があなたのために見て、聞いてあげよう。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私はあなたに別の感覚器官を与える。あなたは、他の人々が見ることのできないもの、聞くことのできないものを見、聞くようになる。」
私：「主よ、これは神秘体験の一部なのでしょうか？」救い主：「はい、それは神秘体験の一部です。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私はさらに、聖痕についてあなたの同意を求めている。」
私：「主よ、私の神よ、愛しき、慈悲深いイエス様、私の理解を超えた、限りない愛よ。私は、あなたが私の体に聖痕を刻むことを許します。私の体は今やあなたの体です。そして、それはすべての魂の救いと、善意ある罪人の回心のためです。」
救い主：「わが娘よ、それで十分だ。」 救い主：「もう一度確か

めなければならなかったのだ。」

救い主：「あなたは私の最も愛する娘だ。」 私：「主よ、こ
れを書き留めておいたほうがいいでしょうか？」 救い主：「
そう、書き留めなさい。」
私：「主よ、私があなたにとって最も愛しい娘だなんて、私には理解できません。」 救い主：「そう
だ、娘よ。」
私：「主よ、私が最大の罪人ではないかと恐れています。」救い主：「あなたがそれ
ほど小さいから、そう思うのだ。」
私：「ああ、主よ、私はまたあなたの愛に渇いています。私は本当に飽くことがありません。どうか、私が二度と
渇くことがないように、あなたの愛の泉に私を浸してください。」
救い主：「あなたが完全になり、決して渇くことがなくなるのは、楽園に行ってからである。」私：「主よ、この地上でも
、あなたにすべてを捧げれば、そこがすでに楽園だと思っていました。」救い主：「わが娘よ、あなたにはまだその衣があ
る。」
私：「『衣』とは何のことですか？」
救い主：「あなたの肉体のことだ。あなたには、地獄への前段階があるのと同じように、楽園への前段階があるのだ。」
私：「つまり、私はまだ煉獄に行く可能性があるということですか？」
救い主：「わが娘よ、そのことは私に任せておきなさい。私と共にいられることを喜びなさい。」
救い主：「これまで、あなたは私の御心を果たしてきた。これからも私の中に、私と共に留まりなさい。そうすれば、これからあなたに訪
れる他のことも果たすことができるだろう。」
私：「主よ、愛に満ちた父よ、私はあなたを深く愛しています。あなたの御心に従い、常にあなたの中に、そしてあなたと
共にいること以外、他に望むものはありません。」救い主：「わが娘よ、私は父と子と聖霊の御名によって、あなたを祝福
します。平安のうちに去りなさい、わが愛する娘よ。」
私：「主なる神に感謝します。イエスとマリアに栄光あれ、今、そして永遠に。アーメン。」

16時30分から17時15分の間、私はロットの教会で祈りを捧げ、ヴォクト神父様に告解をしました。
18時15分、ミンゴルスハイムの教会で聖ミサに参加しました。アドリアナも一緒でした。私が床にひざまずき、ケゼンハイマー神
父から聖体拝領を受けたとき、彼女は素晴らしい体験をしました。

21時頃、私は悲しみのロザリオを唱えました。

1992年8月23日 - 日曜日

8時20分：いつものように、私は合一する前に祈りを捧げました。
救い主：「わが愛する娘よ、これを書き留めなさい。あなたの使命は、多くの魂を私のもとへ導くことである。彼らすべてを愛
しなさい。どの魂も、私にとっては等しく愛おしい。誰をも裁いてはならない。」
私は昨日、ミンゴルスハイマーの司祭の前にひざまずいていた時に受けた攻撃について尋ねました。聖体拝領の前には平安があ
りましたが、聖体を受け、合一を果たした後になって初めて、再び平安を取り戻しました。
救い主：「不浄な霊たちは常にあなたの周りにいて、あなたは彼らから絶えず攻撃を受けることになる。それは避けられな
いことだ。恐れる必要はない、私はあなたと共にいる。」
私：「主よ、あなたが私と共におられるのなら、なぜ私がひざまずいた時に、不浄な霊たちにそのようなことを許された
のですか？」
救い主：「誰かが私の前にひざまずくとき、不浄な霊たちがどのように戦っているか、あなたに知ってもらうためだ。」
私：「ありがとうございます、主よ。他の人たちもこの教えを受け入れ、犠牲を払い、聖体拝領の際にあなたの御前にひざまずいてくれる
ことを願っています。」
救い主：「わが娘よ、君に一つお願いがある。」
私：「はい、主よ。何が望まれているのか分からなくても、お与えします。」救い主：「私は
、あなたがすべてに『はい』と言うことを望んでいる。」
私：「主よ、私の聞き間違いではありませんか？」救い主
：「そうだ、それを書き留めなさい。」
私：「主よ、神よ、愛に満ちた三位一体の神よ、私はすべてに対して『はい』とお答えします。」私：「親愛なる神よ、しかし、
私が『はい』と言うとき、それがあなたご自身であることを、どうか私に悟らせてください。そのためには、霊を見分ける恵みも

必要です。」

救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。霊を見分ける恵みは与えられる。もうそう長くはかからない。」
救い主：「わが娘よ、あなたは本当にすべてを私に捧げてくれた。」私はこれを書き
たくなかった。
救い主：「書きなさい。私の業が始まる。」
私：「主よ、まだ私に愛を授けてくださいますか？私の魂は、もっと多くの愛を渇望しています。私にはたくさんの愛が必要です。今の愛だけでは足りません。まるでパンを物乞いする乞食のようだと思えてなりません。あなたは愛の燃え盛る炉です。私は
この愛の中に身を委ねています」
救い主：「君にはまだそれを受け入れる準備ができていない。贖罪の苦しみを味わう時が来れば、そうしてやる。わが娘よ、君に愛が足りないわけではない。私は君と共にいるのだ。」
私：「はい、主よ。人は、今あるものに満足しなければなりません。」 私：「H. コール連邦首相
からの手紙を、どうすればよいのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、まだ待ちなさい。どうすべきか、私があなたに示してあげる。政治家たちのために祈り続けなさい。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」私：「
主よ、神よ、すべてに感謝いたします。」
10時 赤のミサ。
13時00分、ロザリオと祈りの時間。
午後、激しい頭痛に襲われましたが、その間も救い主への深い愛を感じました。」

1992年8月24日 - 月曜日

9時45分：
私：親愛なる神様、昨日と今朝3時〜6時の間、鋭く激しい頭痛に襲われました。
救い主：「わが娘よ、それは私による贖いの苦しみだったのだ。」
私：「愛する救い主よ、昨夜は2時間半しか眠れませんでした。今は仕事に行かなければなりませんし、今夜は祈りの集まりもあります。でも今、まるで一晩中眠っていたかのように元気です。これはあなたからの恵みでしょうか？」
救い主：「そう、わが娘よ。そうでなければ、君は持ちこたえられなかっただろう。」
私：「週末にゲブハルト・ハイダー神父のところへ行くべきかどうか、お尋ねしたいのですが、それがあなたの御心でしょうか？」
救い主：「わが娘よ、ゲブハルト神父のもとへ行きなさい。彼のところへ行きなさい。」
私：「あなたから授かる傷跡のことを、彼に話してもいいですか？」救い主：「彼に話していいし、あなたが書いたものを読み聞かせてもいい。」
私：「主よ、休暇はいつ取ればよいのでしょうか？」救い主：「9月に休暇の申
請をしておきなさい。」
私：「昨日、ルクセンブルクのクラウディウスに（聖痕について）話したことが正しかったのか、心配でした。」
救い主：「それはあなたではなく、私が語ったのだ。もうそのことについて心配する必要はない。あなたはただ私の道具に過ぎない。」
私：「親愛なる救い主よ、昨日は贖罪の苦しみの始まりだったのでしょうか？」 救い主：「そう、それが始まりだった。」
私：「愛する救い主よ、他に知っておくべきことはありますか？」
救い主：「書き留めておきなさい、わが娘よ。私から与えられる聖痕について。それは間もなく起こるだろう。」
私：「主よ、それはもうおっしゃいましたね。」救い主：
「私は、あなたが準備を整えていてほしいのです。」私：
「『準備が整っている』とは、どういうことですか？」
救い主：「私が、私にふさわしい時に働きかけることができる状態のことだ。」
私：「親愛なる神様、あなたが言う『最も早い時期』とは、いつのことですか？」
救い主：「それは、いつの瞬間でも、どの時間でも、あるいはどの日でも起こり得る。」私：「『準備ができている』とおっしゃいましたが、他に『準備ができている』とはどういうことですか？」

救い主：「寛大でなければならない。」
私：「主よ、神様、私が寛大であり、あなたが望まれる通りに『準備ができている』状態になれるよう、恵みをお与えください。」
救い主：「わが娘よ、私は今すでにその恵みをあなたに与えている。しかし、寛大さを持つ者は少ないのだ。」
私：「主よ、神よ、この大きな恵みに感謝いたします。」
私：「愛するイエス様、私の心はまるで火のように燃えています。ああ、私の燃えるような愛よ、私はあなたを何よりも愛
しています。愛はすべての苦しみに打ち勝つと信じています。」
救い主：「そう、わが娘よ、愛はすべての苦しみを打ち勝つだろう。」
救い主：「愛する娘よ、私はあなたに、すべてに対する忍耐と愛を期待している。それらはあなたに欠けることはない。ただ、それら
を分かち合い続けてくれればよいのだ。」
私：「はい、主よ、そういたします。」
救い主：「書き記しなさい、わが娘よ。昨日、私はあなたと共に苦しむことを喜びとした。」私：「そして私、主よ。その苦
しみの最中、私はあなたをこれほどまでに愛していました。それは私にとって理解しがたいことです。」
救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。愛する娘よ、感謝する。平安のうちに去りなさい。」
私：「主なる神に感謝します。」
私はクロアチアからの患者にレントゲン検査を行いました。私がその方に神について語ったとき、私たち二人とも恵みを受けました。
その患者は涙を流し、幸せそうな表情で帰っていきました。
もう一人の患者はハンブルク出身で、1909年生まれでした。
彼は私に、神など存在しないと語り、過去について悪態をつきました。私は彼が気づかないうちに、彼に聖水を振りかけ、祝福
を与えました。すると彼はさらに悪態をつき続け、特に聖父について罵りました。
私は彼に、もし今、神の裁きの座の前に立っていたら、地獄へ落ちるだろうと告げました。そして、祈るべきだと伝えました。
それに対し、彼は「祈るくらいなら、自分の鼻を噛みちぎったほうがましだ」と返した。私は
彼に、「鼻を噛みちぎってから、立ち去りなさい」と言った。
その少し前、私はすでに彼のために祈っていたが、その後、聖書の「真珠を豚の前に投げてはならない」という言葉を思い出した。
また別の患者は、ロシアのヴォルガ地方から来ていました。彼は長年シベリアで働いていました。彼は謙虚で、私が渡した祈りのメモを喜
んで受け取ってくれました。
18時30分 — ロザリオと聖体ミサ。
20時00分　祈りの会。

1992年8月25日 - 火曜日

1992年8月26日 - 水曜日
10時00分 医師室：
私：「主よ、神よ、お願いです。『最速の時間』に代わる別の言葉を教えていただけませんか?
ドイツ語にはそんな表現がないんです。」
救い主：「わが娘よ、しかし、あなたはそれを理解したではないか。」私：
「はい、でも他の人たちは理解できません。」
救い主：「わが娘よ、もし私が他の人たちが理解できるようにあなたにそれを伝えようとしたら、あなたには理解で
きなくなってしまうだろう。私は他の人たちではなく、あなたに語りかけているのだ。」
私：「はい、主よ。おっしゃった通りに受け止めます。」
救い主：「愛する娘よ、君が聖痕を受けるまで、もうあまり時間は残されていない。娘よ、よく私の言葉に耳を傾けなさい。私
は君の主であり、神である。他の人々は、あらゆることで君を惑わそうとするだろう。 彼らの言うことを聞いてはならない。私
と共にいれば、あなたは彼ら全員を見抜くことができるだろう。真の愛は私の中にある。愛しい子よ、これを書き留めなさい。
これまでに誰も経験したことのないほど、多くの嫉妬にさらされることになるだろう。」
私：「主よ、私はこれらすべてに耐えなければならないのですか。」
救い主：「娘よ、君にはそんなことはできない。私が君と共にそれを耐え抜くのだ。」私：「主よ、この『私
』を取り除いてください。」

救い主：「わが娘よ、お前の『私』は、私そのものだ。」
私：「それはまだ私の癖で、直さなければならないのです。」
私：「主よ、しばらく待っていたのですが、何も起こらず、あなたも何もおっしゃいませんでした。もう仕事に戻らなければならないのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、私はお前の魂を強めた。そうすれば、お前はあらゆることに勇気を持てるようになる。」私：「つまり、私は今、強い心を持っているということですね。」
救い主：「そう、わが娘よ。わが娘よ、私は特に強い心を持つ者を愛している。私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」
私：「ありがとうございます、主よ、神よ。」

19:00 — HI。ロクス礼拝堂でのミサ。

1992年8月27日 — 木曜日

10:00 協会内の医師室：
救い主：「娘よ、私の声が聞こえるか？」　私：「はい、
主よ、聞こえます。」
その後、しばらく何も聞こえなかった。ヘルマン博士が入ってきたからだ。しばらくして：
私：「愛する救い主よ、何かが私に降りかかろうとしていますか？
」 救い主：「そう、鞭打ちだ。すべてを受け入れなさい。」 私：
「はい、主よ、そういたします。」
私：「それがあなたからのものだと、どうやって見分ければいいのですか？」
救い主：「愛に欠けることはない。重罪人たちのためにそれを捧げなさい。」私：「はい、主よ、重罪人たちのため
にそれを捧げます。」
救い主：「準備をしておきなさい、わが娘よ。」私：「
それは昼に起こるのですか、それとも夜に？」救い主：
「夜です、わが娘よ。」
私：「その鞭打ちは、血の出ないものになるのか、それとも血の流れるものになるのか？」救い主：
「血の流れる鞭打ちになる。」
救い主：「その痛みに耐えなさい。」
私：「はい、そうします、愛する神様。あなたをとても愛しているからです。主よ、神様、鞭打ちの翌日は、あなたにお委ねします。その後どうなるか、私は心配しません
、何が起ころうとも。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたのためにその心配を引き受けた。」
私：「はい、主よ、あなたの御心通りにしてください。主よ、神よ、私が思っていた以上に、あなたを愛して
います。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたの中で鞭打ちを受ける。その痛みを私たちは共に感じるだろう。私は、あなたが耐えられる範囲までしか許さない。わが娘よ、私の軛は甘美である。」
私：「まだ何か書くべきでしょうか？」
救い主：「それで十分だ。愛する娘よ、平安のうちに去りなさい。」私：「ありがとう
ございます、主よ、神よ。」

18時30分 ロザリオと聖体祭（赤の礼拝）。

1992年8月28日 - 金曜日

10時00分：
救い主：「愛する娘よ、それを書き記しなさい。」
私：「主よ、神よ、私は今、こう言います。あなたが私に何を求めておられるのか、あるいは何かをするべきなのかは分かりませんが、私はそれに対して『はい』と答えます。主よ、あなたの御心どおりに成りますように。すべてが、あなたのより大きな栄光と、魂の救いのためにありますように。」

救い主：「わが娘よ、私はあなたの願いを知っている。それらは私の心にかなうものだ。私の御心は、あなたを私の中に抱くことである。あなたはこれまで試練を乗り越えてきた。まだ他の試練が待っている。」
私：「主よ、もし私がそれらに耐えられないとしたら、恐れるべきでしょうか？」

私：「ああ、主よ、神よ。今、私にただ一つの願いがあります。それは、たとえ大きな苦しみの中でも、決してあなたから離れないことです。」
救い主：「愛する娘よ、それを書き留めなさい。大きな苦しみとは、私の苦しみである。あなたは贖いの苦しみ、すなわち聖なる五つの聖痕を一度に授かるのだ。その力を心に受け止めなさい。」私：「はい、主よ、神よ、その力を心に受け止めます。」
救い主：「私はあなたの中に、あなたのそばに、そしてあなたと共にいる。不浄な霊はあなたの近くにはいない。」
私：「この出来事は、もうすぐ起こるのですか？」
救い主：「いつでも起こり得るほど、すぐそこにある。」
私：「主よ、あなたはそれが『赤』の教会で起こるおっしゃいましたね。」
救い主：「時を短縮することで、私は自分の望む通りに決定することができる。」私：「はい、主よ、わかりました。主よ、あなたはいつも正しいのです。」救い主：「書き記せ、わが娘よ。私の中には、間違ったことは何一つない。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私と共に耐えなければならないすべてのことは、天国での大きな報いとなるだろう。」
私：「親愛なる神様、もう一度お尋ねしたいのですが、私は聖痕を露わにして身につけるべきでしょうか。そして、前回私が正しく理解していたでしょうか。（私は、手袋や覆いなしで、という意味でした。）」
救い主：「そう、わが娘よ。それを受け取ったら、そのままさらけ出して身につけなさい。そうして身につけることが、わたしの御心である。」
私：「はい、主よ、分かりました。そういたします。」私：「では、金曜日に傷から血が出たらどうすればよいのでしょうか？」
救い主：「その時は、私があなたに示す通りにしなさい。他人の言うことは気にせず、常に私が言う通りにしなさい。」
私：「神様、まだ何か書き留めるべきことはありますか？それとも、後ろのレントゲン室へ行ってもいいですか？」
救い主：「行きなさい、あなたの義務を果たしなさい、私の愛する娘よ。私はあなたと共にいます。私はあなたの平安です。」
私：「愛するイエス様、それでは仕事に行きましょう。」
私：「すべてのことに対して、心から感謝します。」

18時30分 ロザリオと聖体拝領。赤の祭服を着用。
聖体拝領の後、ゲブハルト・ハイダー神父について、救い主に「彼のもとへ行くべきでしょうか？」と尋ねました。
救い主：「彼のもとへ行きなさい、わが娘よ、行きなさい。」
私：「彼は私を受け入れてくれるでしょうか？」救い主：「彼はあなたを受け入れてくれる。」

1992年8月29日 — 土曜日

午前7時15分、ロート、自宅にて：
本当はレーゲンスブルクのゲブハルト神父のもとへ行こうと思っていたが、まずは手紙を書かなければならないと感じた。外は嵐だった。雷が鳴り、激しい雷雨に見舞われていた。それも早朝のことだった。
救い主：「そう、わが娘よ、書きなさい。君には多くの困難が待ち受けている。その困難の一つは、まだ君を支えてくれる司祭がいないということだ。ゲブハルト神父だけがその人だ。君が彼のもとへ行くことを私は喜んでいる。彼の言葉によく耳を傾けなさい。私は彼を通して君に語りかける。ゲブハルト神父は、君にとってふさわしい司祭だ。」
私：「神様、あなたが言われたことを読み上げてもよろしいでしょうか？」救い主：「ええ、構わないよ。」
私：「他にどのような困難があるのでしょうか？」
救い主：「人々は不信仰だ。彼らは見せかけの信仰しか持っていない。あなたの周りには多くの敵がいる。」
救い主：「私はあなたを見捨てない。私と共にいれば、あなたは彼ら全員に打ち勝つだろう。わが娘よ、一言一句書き留めなさい。」
私：「はい、主よ、そういたします。」
声：「あなたが受ける傷跡は、いつでも現れる可能性があるが、その時は私が決める。」

私：「今の『私』とは、一体誰なのでしょうか？」
声：「書き記せ、わが娘よ。今、父なる神があなたに語りかけているのだ。」
私：「主よ、私の神よ、私には理解できませんが、あなたの言葉を信じます。」父なる神：「あなたは、私と、私の御子、そして聖霊によって選ばれた者だ。そして、あなたは三位一体の神に属している。あなたが私の御子と共に贖罪の苦しみを味わう限り、あなたの天の母はあなたを支え、あなたと共にいてくれるだろう。 私と私の御子、そして聖霊は、あなたと共にいる。わが娘よ、これからあなたに降りかかる困難は、一つひとつ、
私たちと共に乗り越えていくことになる。あなたの十字架の道は、私の十字架の道でもある。あなた
はそれを最後まで歩まなければならない。」
私：「ありがとうございます、主よ、神よ。私はあなたと共に、その十字架の道を最後まで歩みます。」私：「忍耐と粘り強さと根気、そしてたくさんの愛をください。」
父なる神：「わが娘よ、それらはあなたに欠けることはない。」
私：「親愛なる神様、イエス様が聖痕が現れる時を選ばれたのだと思っていました。」 父なる神：「私が何者であるか、それはイエス様であり、聖霊でもあります。私たちは一つです。私たちは切り離すことのできない存在なのです。」
私：「私は、この苦しみの中で、あまり愛を受け取れないのではないかと考えていました。」
父なる神：「私は愛そのものである。苦しみは贖罪である。娘よ、あなたは罪人のために苦しむことになる。」
私：「わかりました、主よ、神よ。ああ、私の最愛なる方よ、どうか私をあなたから決して離さないでください。」
父なる神：「わが娘よ、三位一体の神と共にあれば、あなたに欠けるものはない。今、私はあなたを祝福する、わが娘よ：父なる神、子なる神、聖霊なる神が、あなたを祝福します。平安のうちに去りなさい、わが選ばれた娘よ。」
私：「主なる神に感謝します。全能で慈悲深い三位一体の神を賛美し、称えましょう。」

-レーゲンスブルク-

手紙を書き終えた後、私たちはレーゲンスブルクへ向かいました。道中、夫は不浄な霊に悩まされました。私はひたすら祈らなければなりませんでした。外では嵐が吹き荒れていました。レーゲンスブルクに着いた頃には、夫の体調は回復し、嵐も収まっていました。
私はゲブハルト神父と会い、まず30分ほど話をしました。
それから、修道院に併設されている教会へ入りました。至聖体が安置され、礼拝が行われました。司祭がロザリオの祈りを先導しました。その後、静寂が訪れました。
夕方5時15分、カルメル会修道院で、私は救い主の声を聞き、聖体の前でそれを書き留めました。
救い主：「私はゲブハルト神父を通じて、あなたの夫に語りかけ、あなたが私からの聖痕を受けられるようにする。安心しなさい、すべてうまくいく。恐れる必要はない。」
私：「主よ、私の息子についてはどうなりますか？」
救い主：「聖痕が現れたら、あなたの夫が息子に伝えるだろう。」 救い主：「ここに来てくれてありがとう。」
私：「私がここに来ることを望んでおられたのですか？」救い主：「
そう、私がここに来ることを望んでいたのだ。」私：「それなら、私
はあなたの御心に従ったことになりますね。」
救い主：「そうだ、娘よ。君は宝石のような存在だ。」私はこれを書き留めたく
なかった。
救い主：「書きなさい。」
私：「主よ、なぜ私を『宝石』とおっしゃるのですか？」
救い主：「宝石は貴重だから、大切に扱わなければならないのだ。」
私：「主よ、私はあなたと聖母マリアの御加護の下にいます。」救い主：「それを書き留めなさい。
そう、あなたはまさにその通りだ、わが娘よ。平安のうちに去りなさい。」
私：「ありがとうございます、主よ、神よ。」

修道院の教会に居座ってしまっていたため、夫は1時間以上も私を待たなければならなかった。私は急いで夫のもとへ向かった。
私たちはキャンピングカーをドナウ川の駐車場に停めていました。ゲブハルト神父とは18時30分頃に会う約束をしていました。
ゲブハルト神父が到着し、私たちは話をしました。その後、ゲブハルト神父は修道院の自分の部屋へ、約2時間ほど戻っていきました。
戻ってくると、ゲブハルト神父は私たちの礼拝堂に飾るための大きな聖母マリアの像を持ってきてくださいました。ゲブハルト神父は、私について、そしてこれから私に何が待ち受けているかについて、夫に知っておくべきことを伝えていました。夫もゲブハルト神父に告解をしました。
夫が帰った後、ゲブハルト神父と私は宗教について語り合い、私は引き続き日記を神父に読み聞かせました。21時頃、夫と私はゲブハルト神父を修道院まで見送りました。
私はゲブハルト神父のもとでイエス様を見出しました。再びイエス様と共にいられることは、私にとって大きな恵みです。神父は謙虚で、愛と安らぎに満ちた司祭です。真実を明快かつ正確に語り、あらゆる点で的確であり、聖書を巧みに解説できる優れた聖書研究者でもあります。今、私がこれほどまでに良き司祭を必要としている時に、神父は私を助けてくださるためにここにいてくださるのです。
残念ながら、現代の司祭たちは助けてくれないため、私は
ゲブハルト・マリア・ハイダー神父のもとへ行かなければなりません。神様、この神父を私に与えてくださったことに感謝します。

1992年8月30日 - 日曜日

レーゲンスブルクの「サルヴェ・レジーナ」号キャンピングカー、ドナウ川沿いの駐車場にて：
午前7時45分、祈りの集い：
救い主：「書き記せ、わが娘よ、書き記せ。」私は突然、温もりと愛
を感じた。
救い主：「愛とは、私そのものである。わが娘よ、私はあなたを見捨ててはいない。私はあなたと共にいる。」私：「これからも私と一緒にいてくれますか？」
救い主：「あなたは私のものだ。」
私：「ああ、主よ、あなたと共にいられるのはなんて素晴らしいことでしょう。」
救い主：「愛する娘よ、書き記しなさい。昨日、ゲブハルト神父と話し合ったことは正しかった。あなたが私から受ける聖痕は、ごく間もなく現れるだろう。それは、まるで既に起こったかのように、すぐそこにある。 私はあなたと共にいる。何も心配するな。」私：「親愛なる神様、私が鞭打ちの傷を後で受けることになる可能性はありますか？」救い主：「私は自分の望むようにすることができる。」
救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。私は、あなたが手の傷跡を包帯で覆わずに、露わにしておくことを望む。私はあなたにそれを求める。」
私：「でも、なぜそれがそんなに重要なのですか？」
救い主：「私はその傷跡から光を放つのだ。」私：「主よ、それは目に見える光ですか？」
救い主：「闇の中にいる者たちは、それを見るだろう。ああ、わが娘よ、闇の中にいる者はあまりにも多い。彼らは再び見えるようになるために、この光を必要としているのだ。」
私：「では、寒さについてはどうでしょうか？」
救い主：「私は愛の燃えさかる炎だ。私と共にある限り、あなたは寒さを感じることはない。」
救い主：「わが娘よ、もう一つ書き留めておいてほしい。最初は記者に写真を撮らせないようにしなさい。そうすれば、多くの好奇の目を避けることができる。好奇心は不浄な霊から来るものだ。私は記者を伴わずに、人々をあなたのところへ導く。好奇心旺盛な者たちに影響されてはならない。 忘れないでほしい。私は聖痕を持つ主である。あなたは私の道具だ。わが娘よ、私と共にある限り、恐れる必要はない。私はあなたを愛している。そして、危険が迫れば警告してあげる。私の声によく耳を傾けてほしい。私の羊たちは私の声を知っている。」
私：「愛するイエス様、わかりました。これまでのすべての回心と、これまで私に与えてくださった多くの恵みに感謝します。」
救い主：「わが娘よ、気をつけて、平安のうちに去りなさい。」私：「主なる神に感
謝します。」

午前9時30分、私は聖体の公開の際、祈りを捧げました。

9時45分、カルメル会修道院で聖体祭が執り行われ、私たちもそれに参列しました。昼食後、ゲブハルト神父が再び私たちのキャンピングカーを訪ねてきてくださいました。
彼は私たちに十字架を贈ってくださいました。私の目から涙がこぼれました。実家にはほぼ同じ大きさの十字架が飾ってありましたが、それは私たちのものではないため返さなければなりませんでした。私はその十字架を愛着を持っていましたが、重い心で手放したのです。
そして今、24時間以内に、五つの聖なる傷跡が赤く刻まれた別の十字架を授かったのです。
レーゲンスブルクへ向かう前、私は救い主に、もしそれが御心であるなら、私の選択が正しいかどうかを示す小さなしるしをくださいと願いました。今、私はそれを知りました。私は十字架を受け取ったのです。
私は再びゲブハルト神父に告解をすることができました。神父は私が日記から読み上げた内容を聞いてくださり、教えと力、勇気を与えてくださり、これから私に降りかかる苦難について慰めてくださいました。その慰めは、私にとって大きな励みとなりました。
ゲブハルト神父は神秘主義に精通しておられ、私に教えを授けてくださったことに感謝しています。それはまるで、救い主が神父様を通して語っておられるかのようで、その言葉は私の心に深く刻み込まれました。
ゲブハルト神父は、私たちのためにたくさんのろうそくと聖水を聖別してくださいました。
帰宅の道中、夫は一人で運転しましたが、何の支障もありませんでした。彼は幸せそうで、喜びに満ちていました。

1992年8月31日 - 月曜日

10時00分 - 診察室:
救い主:「愛する娘よ、書き留めなさい。」
私:「はい、三位一体の神よ、愛するイエス様。」
救い主:「あなたが受ける聖痕は、この数日中に現れるだろう。わが娘よ、準備をしておきなさい。それは教会で起こるのだ。それが私の御心である。今後どうなるか心配する必要はない。
すべての心配は私が引き受けた。あなたは私の道具だ。あなたが書き留めたものはすべて、大切に保管しなさい。」
私:「愛する神様、聖痕について、私が最も知っておくべきことは何でしょうか? 」救い主:「私を愛することだ。愛によって、あなたはすべてを乗り越えられる。愛に欠けることはない。私はあなたのそばに、あなたと共に、そしてあなたの中にいる。あなたは完全に私の中にある。」
救い主:「この数日、あなたは心の中に大きな炎を感じるだろう。それは私の愛の炎だ。私の選ばれた者たちの多くは、この炎に耐えられなかった。」私:「親愛なる神様、でも私はこの炎に耐えられるでしょうか? 」
救い主:「わが娘よ、書き留めておきなさい。最初の体験の後、あなたは一定の間、ベッドに横たわっていなければならないだろう（苦しみ——おそらくは聖痕のことだろう、と私は思った）。」
私:「では、祈りの集まりは? 」　救い主:「祈りが捧げられている。」
私:「私がベッドに横たわっているときも、あなたは私と一緒にいてくれますか? 」　救い主:「私はいつもあなたと一緒にいます。」
私:「主よ、あなたの御心通りにしてください。あなたをとても愛しています。」
救い主:「愛しい娘よ、私もあなたをとても愛している。安らかに旅立ちなさい。」私:「私が書いた通りでよろしいでしょうか? 」
救い主:「ええ、ありがとう。」
18時30分 ロザリオと聖体ミサ。
20時00分　祈りの会

1992年9月1日 — 火曜日

医師室にて:
救い主:「わが娘よ、昨日はすべて正しく行っていた。他人に流されてはならない。」
私:「主よ、神よ、ありがとうございます。」
救い主:「昨日のような誘惑は、これからも度々訪れるだろう。強くあり続けなさい。そのような人々は、常にわたしに委ねなさい。」
私:「はい、主よ、そういたします。」

私：「主よ、私が望むことではなく、主が望まれることを書き留めたいのです。」救い主：「わが娘
よ、君のその言葉は私の心にかなう。」
救い主：「わが娘よ、これからはすべてを私と相談してほしい。まず私と話し合え。私に愚痴をこぼしなさい。気に入らないことがあれば、まず私に話してくれ。何か必要なものがあれば、まず私に尋ねなさい。私はあなたにすべてを与え、補うことができる。あなたに欠けるものは何もない。この贖いの苦しみによって、多くの魂が救われるのだ。
いつも喜びに満ちていなさい、わが娘よ。」
私：「主よ、私がいつも喜びに満ちていられるよう、その恵みをお与えください。」
救い主：「わが娘よ、その恵みはあなたに与えられる。わが娘よ、私はあなたと共にいる。平安のうちに去りなさい
。」
私：「ありがとうございます、私の最愛の方。」

18時30分、ロザリオと赤のミサ。
20時30分頃、ゲブハルト・ハイダー神父から電話があり、私は今朝、救い主が私に授けてくださった、私だけに与えられた秘密について話しました。（救い主は、12時15分と、教会での聖体拝領の後にも、この秘密を改めて私に確認してくださいました。）
私がその秘密を打ち明けたとき、ゲブハルト神父は私を慰めてくださいました。

1992年9月2日 — 水曜日

10時00分、医師室にて：
祈りの交わり！
救い主：「書き留めてほしい。」私：「はい、主よ、何をです
か？」
救い主：「ゲブハルト神父に電話をかけさせたのは、彼が私の声を聞いていることをあなたに証明するためだった。彼はまたあなたに電話をかけてくるだろう。彼の言うことをよく聞きなさい。
わが娘よ、書き留めておきなさい。贖罪の苦しみは、今日から始まる。私があなたと共にいるから、あなたはそれを悟るだろう。
」
私：「その苦しみはどのようなものになるのでしょうか。流血を伴うものですか
、それとも他のものですか？」 救い主：「それが訪れるのを待ちなさい。」
私：「それなら、明日と明後日は仕事に行ってもいいですか？」 救い主：「ええ、行っても
いい。」
私：「はい、主よ、神様、わかりました。」 私：「今日、まだ泳ぎに行って
もいいですか？」 救い主：「泳ぎに行きなさい。」
救い主：「わが娘よ、まだ一つ言わなければならないことがある。」私：「はい
、主よ、神よ。」
救い主：「私があなたに与えるものを、心に深く刻みなさい。」私：「主よ
、私に何を授けてくださるのですか？」
救い主：「私の聖なる五つの聖痕だ。」
私：「主よ、それらを私の内に浸透させます。どうか、主が私の内に働きかけてくださるために、力と勇気、愛、そして私に必要なすべてのものを与えてください。私は弱く、自分だけでは何もできませんから。」
救い主：「わが娘よ、あなたはそれらすべてを受け取るだろう。」
私：「主よ、私は恐れも疑いもなく、信じています。あなたに大きな信頼を寄せています。あなたが私と共にいて、私のそばにいて、私の中にいてくださることを知っているので、私はあなたに忠実であり続けます。あなたへの愛をもって、感謝いたします。
」
救い主：「わが娘よ、そのままでいなさい。あなたは私の御心を成し遂げている。」
救い主：「娘よ、私はあなたを祝福する。もう座っていてもよい。」
（おそらく、ちょうどその時、医師が入ってきて、私が床で何をしているのか不思議に思っただろうから、座ったままにできたのかもしれません。）
救い主：「父なる神、子なる神、聖霊なる神が、あなたを祝福します。平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」
私：「主なる神に感謝を。三位一体の神を賛美します。」 HI. ミンゴルスハイムのロクス

礼拝堂でのミサ。

1992年9月3日 - 木曜日

レントゲン室 — 10時30分〜11時05分の間の記録:

救い主:「書きなさい、わが娘よ、

私:「はい、主よ、神よ、私の魂の導き手よ。」

救い主:「私のために何かをしなければならない、わが娘よ。私から与えられるものはすべて、忍耐強く耐え忍びなさい。始まりは非常に困難だ。私の選ばれた者たちのうち、誰一人として容易な道のりを歩んだ者はいない。皆、今あなたが歩んでいるのと同じ道を歩んできたのだ。あなたは私の聖なる五つの聖痕を受けることになる。いつかは分かっているだろう。

私:「その日は分かりますが、具体的な時刻は分かりません。朝なのか、夕方なのか。」

救い主:「聖体拝領の後だ。五つの聖痕を一度にすべて受けることになる。」私:「それじゃ、痛みのあまり死んでしまいます。」

救い主:「あなたは死なない。私があなたと共にいる。あなたが耐えられる範囲の痛みだけを与える。」

私:「まだ医者のところに行かなければならないのですか?」

救い主:「いいえ、その後はベッドに横になっていい。」私:「まだ歩けるの?」

救い主:「ええ、まだ歩けるよ。」

私:「今まで何か間違ったことをしていましたか?」救い主:「いいえ、今まで通り続けてください。」

私:「教会に来るように、何人かに伝えてもいいですか?」

救い主:「ええ、でも何が起こるかは言わないで。ほんの一握りの人にだけ伝えて。今日、あなたは再び贖罪の苦しみを味わうことになる。今日は血まみれになるだろう。」

私:「鞭打ちのことですか?」救い主:「そう、私の娘よ。」

私:「どうか、私がすべてを耐え抜けるよう、恵みをお与えください。」

救い主:「わが娘よ、その恵みは決して欠けることはない。私はあなたと共にいる、わが娘よ。私はあなたを深く愛している。私のそばにいてくれ。」

私:「はい、愛するイエス様、私もあなたをとても愛しています。あなたに忠実であり続けます。」

救い主:「わが娘よ、書き続けてください。私は天国に、あなたのために美しい住まいを用意しておきました。」

私:「それを書き留めればいいのですか?」救い主:「そう、それを書き留めなさい。」

救い主:「だからこそ、この十字架の道を最後まで歩んでほしいと願う。私と共にあれば、あなたはそれを成し遂げられる。」

私:「愛するイエス様、あなたが望むことは何でもします。でも、それは私がいつもあなたと一緒にいられるという条件付きで。」

私は救い主に、聖痕を心に刻み、ベッドに横たわっていなければならないという話を正しく理解できたかどうか尋ねました。

救い主:「一定期間、ベッドに横たわっていなければならない。たくさん祈らなければならない。」救い主:「聖体拝領は自宅で受けることになる。そのことは私が手配する。」私:「どうか、傷跡が刻まれる前に、私にたくさんの愛を授けてください。」

救い主:「そうしよう。」

救い主:「さあ、わが娘よ、今、あなたを祝福しよう。」私は床にひざまずいた。

救い主:「父なる神、子なる神、聖霊なる神が、あなたを祝福します。平安のうちに去りなさい。」私:「主なる神に感謝します。」

私:「イエス・キリストとマリアに栄光あれ。すべてに感謝します、主よ、神よ、愛するイエス様。」

1992年9月4日 — 金曜日

私:「主よ、神よ、愛するイエス様、私の魂の導き手よ。今、私の心に浮かんでいることを書き留めたいと思います。昨日、あなたは私に、夜、血まみれになるほど鞭打たれるという犠牲を求められました。私は鞭打たれる覚悟をしていましたが、あなたはそれを許さず、今日、私は聖なる傷跡を刻まれることになっています。これをどう理解すればよいのでしょうか。どうか、私をお助けください。 それで

もあなたへの愛は決して減ることはなく、これからもあなたに忠実であり続けたいのです。」

私はアブラハムとヨブのことを思い出し、あることがはっきりとわかりました。
私：「あなたは私に贖罪の苦しみを免じてはくれませんでした。これほど長く続く激しい頭痛は、これまで経験したことがありません。私はそれを捧げ、再びその苦しみを味わうことを拒みませんでした。 現代の司祭なら、この試練は悪魔によるものだと述べたかもしれませんが、私はそうは思いません。なぜなら、あなたの愛と平安が決して欠けていなかったからです。これから何が起こるのか、私は恐れていませんでした。主よ、神よ、これについてあなたは私に何とおっしゃいますか？」
救い主：「わが娘よ、書き留めなさい。私の声が聞こえるか？」私：「はい
、主よ、神よ。」
救い主：「あなたが書き記したことはすべて正しい。あなたが期待していたことはすべて、まだこれから起こる。その時は私が決める。わが娘よ、書き記せ。今夜教会に来る者たちは皆、起こることに驚嘆するだろう。彼らはほとんど皆、盲目である。彼らのために光が輝く。これまで通り、あなたの務めを続けなさい。
彼らは私の業によって実を収穫するだろう。私は生ける木であり、あなたは私の実である。わが娘よ、私はあなたを愛している。平安のうちに去りなさい。」

18時30分 ロザリオと聖体礼儀（赤）。

1992年9月5日 - 土曜日

8:00 — 祈りの集い
救い主：「わが娘よ、私はあなたを愛している。私は計画を変更した。物事は、私の望む通りに進んでいく。
私：「私は何か間違ったことをしてしまったのかと思いました。だって、あなたが言われたことはすべて起こる覚悟ができていたのですから。」
救い主：「わが娘よ、あなたはすべて正しく行ってきた。時を定めるのは私だ。」私：「あなたは、聖体
拝領の後になるとおっしゃいました。」
救い主：「私はそれを変えることができる。」
私：「親愛なる神様、もうこれ以上お尋ねすることはできません。お望みのままにおっしゃってください。私には何も理解できませんので、すべてをあなたにお任せします。」
救い主：「わが娘よ、君たちには逃げ場がなく、私の望むことをしなければならない時が来るだろう。」
私：「親愛なるイエス様、もっと分かりやすく教えていただけませんか。私には理解できません。」救い主：「さら
に厳しい時代が来る。」
私：「神様、お願いです。これから起こる最悪の事態とは何ですか？」救い主：「ヨーロッパでの大
戦争だ。」
私：「それなら、礼拝堂を建てる必要はないのですか？」
救い主：「いや、建てなさい。その礼拝堂は難を逃れる。戦争は近づき、急速に拡大している。」
私は、まだ聖痕を授かることができるのかと考えた。」救い主：「あなたは尋ねている。そうだ。
あなたはそれを授かる。その日は私が決める。」私：「主よ、神よ、あなたの御心が行われますよ
うに。」
救い主：「たくさん祈りなさい、わが子たちよ、祈りなさい。サタンの力は計り知れない。私はそうなることを許したのだ。私から背を向けた者たちから、サタンはすべてを奪い去るだろう。人々はそうなることを望んでいる。彼らは広い道を選んだのだ。わが娘よ、これまで通り、私に忠実であり続けなさい。 私は、忠実な子供たちに、天の母マリアの保護を与えた。彼らは彼女の保護の外套の下にあり、そこには敵の入り込む余地はない。母に、たくさん祈りなさい。私は彼女の執り成しを拒むことはない。彼女は子供たちを見捨てたりはしない。」
私：「でも、この戦争は止められるはずです。」救い主：「断食と
祈りによってのみだ。」
私：「何かすべきことはありますか？」
救い主：「先走って心配するな。すべては適切な時に起こる。」
私：「主よ、あなたの愛と助言、そして私たちに何が待ち受けているかという知らせに感謝します。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたを祝福します。」私はひ
ざまずいた。
救い主：「わが娘よ、父なる神、子なる神、そして聖霊があなたを祝福します。平安のうちに去りなさい。」

私：「主よ、神よ、ありがとうございます。今、そして永遠に、イエス・キリストを賛美します。アーメン。」

16時30分～19時45分まで、教会で祈りを捧げ、告解をしました。その後、聖体礼儀に参列しました。

1992年9月6日 - 日曜日

7時30分～9時20分：

私は祈っていたが、再び少し疑念を抱き、心の中には多くの疑問が渦巻いていた。その後、私は心を込めて祈った。

救い主：「書き記せ、わが娘よ。あなたが受ける聖痕は、この数日中に現れるだろう。その時は私が決める。」

私：「主よ、あなたは今、どなたなのですか？」

「わたしだ！」　わが娘よ、今、父なる神、子なる神、聖霊なる神が、あなたに語りかけているのだ。疑ってはならない、わが娘よ、それはわたしを侮辱することになる。あなたは完全にわたしのものだ。恐れる必要はない。わたしに忠実であり続け、揺るぎないままでいなさい。

私：「ああ、私の主、私の神よ、どうかお許しください。私はあなたを決して理解することはできないでしょうが、私はあなたの腕の中に身を投げ出し、小さな子供のようにあなたを抱きしめます。愛に満ちた父よ、あなたの御心通りに、これからもすべてが進みますように。」

救い主：「わが娘よ、五つの聖痕は、わたしから与えられるのだ。」

私：「アビラの聖テレジアのように、天使から授かるものだと思っていました。たぶん、ある神父がそう教えてくれたからかもしれません。」

救い主：「私は、私の望む通りにそれを行うことができる。」

私：「主よ、神よ、ずいぶんはっきりしました。本に書かれていることに頼ってはいけないのですね。あなたは、ご自身の望む通りになさるのですから。」救い主：「そう、その通りだ、わが娘よ。」

私：「まだ何か書き留めるべきことはありますか？」

救い主：「ええ、わが娘よ。あなたの心は、私から発せられる光によって貫かれるだろう。その光があなたの心を貫く。あなたの心の中に火が燃え上がるだろう。その火こそが私の愛だ。そうなれば、あなたはもはや自分の望むままに行動することはできなくなる。私はあなたの中のすべてである。あなたは私が望むことをすべて行うのだ。」

私：「それは、聖パウロの時のようですね。」

救い主：「わが娘よ、私はすでに起こったことを繰り返しているのだ。私は当時と変わらぬ神である。わが娘よ、あなたは今、そしてこれからも、私が用いる道具に過ぎないのだ。」

私：「主よ、今、教会に行かなければなりませんか？」救い主：「

そう、そうしなさい、わが娘よ。」

私：「もう9時15分ですよ。」

救い主：「愛する娘よ、私はあなたを祝福する。」私はひざまずいた。

救い主：「父なる神、子なる神、そして聖霊よ、あなたを祝福します。平安のうちに去りなさい、わが愛する娘よ。」

私：「イエス・キリストを賛美します。主なる神に感謝します。アーメン。」

10時30分、赤のミサ。

13時00分　ロザリオと祈りの時間。

1992年9月7日 - 月曜日

3週間の休暇を取っている。

8時30分：

救い主：「書き記せ、わが娘よ。」

私：「はい、愛に満ちた父よ、私の花婿よ。」救い主：「あなたの贖いの苦しみは、まもなく訪れる。」私：「『まもなく』とは、どういう意味ですか、主よ？」

救い主：「その『まもなく』とは、時が来れば私が決めることだ。わが娘よ、それは私の望む通りになる。」

私：「主よ、あなたの御心通りになることとは、一体何のことでしょうか。それを知ってもよいのでしょうか？」救い主：「あなたの未来のことだ。」
私：「主よ、神よ、あなたの御心通り、あなたが喜ばれる通りにありますように。」
私：「親愛なるイエス様、今は本当に辛いんです。理解できないことばかりで、自分がこの世で一番愚かな人間のように感じてしまいます。まるでこの世界に居場所がないような気分です。みんなが私よりずっと賢く見えて、まるで私が小学1年生に戻ったかのようです。泣きたくなるほどです。 みんなに見捨てられたような気がします。あなたでさえ、私を見捨てたように感じます。医者なら今頃『この人は精神科医の診察が必要だ』と言うでしょうが、私は正気ですし、あなたが私に何を望んでいるのか待っています。
救い主：「書きなさい、わが娘よ。あなたの使命は、たとえすべてがそう見えても、私に従い、私の望むことを行うことなのです。わが娘よ、私はあなたと共にいることを喜び、あなたがするすべてのことを喜んでいます。今抱えている悩みを、私の手に委ねなさい。」
私：「それはすべて理解するのが難しいです。理解できないことはすべて、あなたの御手に委ねます。」救い主：「愛する娘よ、それを書き留めなさい。 今、あなたが経験しているこの試練も、必要なことなのだ。すべては私の御心である。あなたが受ける五つの聖痕は、あなたが私をよりよく理解できるよう、あなたや他の人々に光を与えるだろう。私の光がなければ、あなたたちはまだ闇の中にいる。光が闇を貫くとき、あなたたちは見るようになる。私は光であり、真理である。
愛する娘よ、今日、それでも書き記してくれたことに感謝する。娘よ、あなたを祝福する。
私はひざまずいた……

18時30分 ロザリオと聖体礼儀（赤のミサ）。
20時00分　祈りの会。

1992年9月8日 - 火曜日

午前：祈りの後 — 合一
救い主：「五つの聖痕は、まもなく刻まれることになる。それゆえ、常に備えよ。わが娘よ、私はその時期を変えた。そうならざるを得なかったのだ。
すべては、私の望む通りに起こる。愛に欠けることはない。」
私：「親愛なる救い主よ、もし人々が私に『あなたの声を聞いているのか』と尋ねてきたら、そう言っていいのでしょうか？」
救い主：「そう言ってよい。否定する必要はない。わが娘よ、私があなたに語るのは、あなたのためだけでなく、他の人々のためでもあるのだ。」
私：「主よ、もし私が聖痕を持つことになり、司祭がいなかったとしても、あなたは霊的に私のところに来てくださいますか？」
救い主：「私はいつもあなたと共にいる、わが娘よ。その時、私はあなたの中ですべてとなり、あなたはもはや何者でもなくなるのだ。」
私：「神様、でも私はまだ生きています。」救い主：「お前の命は、私の命だ。」
私：「主よ、それを受け入れますが、理解することはできません。主よ、御心が行われますように。私はあくまであなたの道具に過ぎません。」

その後、主は私に祝福を与えてくださいました。

9時：私はフリドリンと共にヴァーグハウゼルで聖ミサに参加した。
18時30分、ロートでロザリオと聖ミサ。今朝すでにヴァーハウゼルで救い主をお受けしていたため、ロートでは聖体拝領はしませんでした。
20時30分：救い主がおっしゃった通り、ゲブハルト神父から電話がありました。私たちは約25分間電話で話しました。この電話をくださった神に感謝します。

1992年9月9日 - 水曜日

自宅 — 祈り — 聖なる救い主との合一：「書きなさい、わが娘よ。」私：「はい、愛に満ちたイエ

ス様。」
救い主：「あなたが書いたことはすべて、私の功績だ。あなたは私が望む通りに語っている。あなたの使命は、たとえ多くの間違いがあっても書き続けることだ。私はそれを喜んでいる。

神学者の過ちは人々を奈落の底へと導くが、あなたの過ちはそれに比べれば取るに足らない。わが娘よ、書き続けてくれ。
私はあなたの困難を知っている。あなたの中にある私への愛も知っている。その両方が、私には喜ばしい。あなたが受ける贖罪の苦しみは、私からのあなたへの愛なのだ。私から受ける苦しみがどれほど大きかろうと、それと同じだけの愛も受け取っているのだ。苦しみの中にこそ、魂の救いがある。私は多くの魂を救いたいから、あなたの中で多くの苦しみを味わわなければならないのだ。」
私：「主よ、神よ、よく分かりました。主よ、お望みのままになさってください。」
救い主：「もう少し書きなさい。私があなたに与える五つの聖痕は、まもなく現れるだろう。苦しみが訪れたら、その聖痕の力を働かせなさい。」
私：「苦しみが訪れる時、私はあらかじめそれを知ることができるのでしょうか？」
救い主：「私が、あなたがそれを分かるように、すでに準備を整えている。私の愛する娘よ、私は今のあなたそのものが気に入っている。謙虚であり続けなさい。そうすれば、私はあなたに多くの恵みを注ぐことができる。今まで通り、私を愛し続けてほしい。あなたの愛は私の愛である。あなたがますます私を愛そうとしてくれることが、私の喜びだ。私はいつでも、あなたにもっと多くの愛を授ける用意ができている。」
私：「今、私は何をすればいいのですか？」
救い主：「あなたの義務を果たしなさい。今、あなたがなすべきことを。愛する娘よ、私はあなたを祝福する。」
私はひざまずき、これからやってくる二人の女性、マリアンネとミュラー夫人も救い主に祝福してくださるようお願いしました。
救い主：「はい、彼女たちにも祝福を与えよう。
」救い主は祝福を与えられた。
ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂でのミサ。

1992年9月10日 - 木曜日

午前10時30分、自宅にて：
祈り、合一。
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私は、あなたが書き記すことを望む。これらすべてが実現するまでには、多くの困難があるだろう。」
私：「何が起こるのですか、主よ、神よ？」 救い主：「私があなたと共に成し遂げたいことである。」
私：「主よ、あなたは何を望んでおられますか？ 私はあなたと共に何を成し遂げればよいのですか？」救い主：「十字架の道を最後まで歩み通すことだ。」
私：「この苦難を受け入れなければならないのですか？」
救い主：「この苦難はあなたのためではなく、私のためである。しかし、私の怒りは彼らに降りかかるだろう。あなたが流す血は、善意ある者たちのためのものであり、冒涜者たちのためではない。」私：「しかし主よ、あなたはすべての人のために御自身の血を流されたではありませんか。」
救い主：「あの時はそうだった、わが娘よ。しかし、今は違う。彼らはすでに自分たちの父を選んでいる。冒涜者たちとは話す必要はない。」
私：「では、彼らが冒涜者であることを、どうすれば見分けられるのでしょうか？」
救い主：「私が彼らを見分けるのだ。お前ではない。わが娘よ、もう一つ書き記しておきなさい。お前が受ける傷跡は、この数日中に現れるだろう。」
私：「主よ、あなたの望む通り、いつ、どのようにでも起こってください。私は恐れも疑いもありません。私は完全にあなたに属しています。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。他の人々があなたを非難しても、耳を傾けてはならない。あなたは彼らの弱さを見抜けないのだ。よく私の言葉に耳を傾けなさい。私はあなたの魂の導き手である。たとえあなたが何か間違ったことをし、他の人々がそれに気づいても、私にとってはそれでも正しいのだ。私はそうありたいと願っている。 ほとんどの人は自分の過ちを見過ごしている。もしあなたが誰にでも説教されるようになれば、あなたは私から背を向けることになる。サタンは狡猾だ。注意しなさい。もしあなたが何か悪いことをして、それが他の人たちの気に入らないとしても、それは私からのものなのだ。好奇心旺盛な人々をあなたの周りに置く必要はない。好奇心旺盛な人々は皆、まず自分の罪を悔い改めるために祈るように送りなさい。そうすれば、あなたは多くのトラブルを避けることができるだろう。」

私：「親愛なる神様、そのためには謙虚さが必要です。どうか、私が謙虚でいられるよう、恵みをお与えください。
」
救い主：「わが娘よ、あなたは私のように謙虚で柔和になるだろう。なぜなら、そうすればあなたは完全に私の中にいることになるからだ。」

私：「でも、司祭たちがまだ信じていないとしたら、それは大変ですね。」
救い主：「すべての司祭は第二のキリストである。すべての司祭のために祈らなければならない。私は彼ら全員を愛しているのだ、わが娘よ。」
私：「でも主よ、私も皆さんを愛していますが、皆さん全員が私を愛してくださっているわけではありません。」救い主：「その通りだ、わが娘よ。あなたも、私を愛していない者たちがいるのだ。」

私：救い主は私に祝福を与えてくださった……
ロザリオと赤のミサ

1992年9月11日 - 金曜日

午前7時40分から8時30分
夫は私に大変な思いをさせました。
ゲブハルト・ハイダー神父からの聖書がたくさん届いた。

救い主：「あなたに書いてほしい。私はあなたをとても愛している。近いうちに、サタンの攻撃を頻繁に受けることになるだろう。あなたの家族に降りかかることについては、私の言う通りだ。サタンは最も近道を探している。あなたがたがマリアを通して私のもとへ最も近道を探すように、不浄な霊もまた、あなたがたのもとへ最も近道を探しているのだ。わが娘よ、昨日は正しく行動した。 わが娘よ、不浄な霊たちは特に君に対して激怒しているが、私と共にいれば、君はそれらすべてに打ち勝つだろう。わが娘よ、夫のために祈りなさい。彼は君の助けを必要としている。」
救い主は私にこう言われました。「書き続けなさい、わが娘よ。燃え盛る炎があなたの上に降り注ぐでしょう。」
私：「そんなことは書きません。それはきっと、愛する神様からの言葉ではないでしょう。」救い主：「いや、そうだ！愛の燃え盛る炎だ。」
私：「主よ、今、自分が火傷をしてしまうのではないかと怖くなりました。」救い主：「あなたは私の愛の中で燃えるのだ。この火によって、あなたは完全に清められる。」
私：「はい、主よ、神様。どうか私を清めてください。そうすれば、私はいつもあなたと共にあり、決してあなたから離れることはありません。」
救い主：「愛する娘よ、私はあなたを祝福する。」私：「救い主が私を祝福してくださった……」

ロザリオと赤のミサ

1992年9月12日（土）

午前7時30分から9時まで
救い主：「わが娘よ、書き記せ。私が望むことを行いなさい。私が導くところへ、そこへ行きなさい。」
私：「主よ、あなたが私を導いておられることを、どうすれば分かるのでしょうか？」
救い主：「私に尋ねなさい！　私へと至る道は、ますます険しくなる。」私：「主よ、『険しくなる』とはどういう意味ですか？」
救い主：「その道はより過酷になり、多くの力を必要とする。その力は、私からしか得られない。あなた自身と、あなたと共にその道を歩む仲間たちのために、祈り求めなさい。さもないと、その険しい道から彼らを見失ってしまうかもしれない。」
私：「はい、主よ。これからは、自分自身と周囲の人々のために、もっと力を求めていきます。」救い主：「お前の心は、すでに私の心だ。私はそれを、私の望む通りに整えなければならない。この心から多くの恵みが溢れ出し、この傷ついた心は愛の泉となるのだ。」
私：「主よ、神よ、愛するイエス様、それがすでにあなたの心であることを、どうすれば知ることができるのでしょうか？」
救い主：「君が心の中で感じているこの灼熱感は、私の愛の炎だ。私が望めば、それはさらに強くなる。」
私：「主よ、神よ、私はこの炎を感じますが、それが私にとって何を意味するのか分かりませんでした。 この炎によって、あなたをもっと愛することができると気づきました。私の魂は、あなたのそばにいたいと強く切望しています。今、私の心は燃え盛る炉のようで、その炎は決して消えることがないと感じています。今、『聖心連祷』を読むと、その意味がより深く理解できます：『愛の燃え盛る炉よ』。
これまではよく分からなかったのですが、今は理解できました。主よ、神よ、この大きな恵みと啓示に感謝いたします。

さらに申し上げます、主よ、神よ、あなたの御心は、生き生きと燃え盛る愛の炉です。ああ、この炎が決して消えることがありませんように。そうすれば、あなたがいつも私のそばにいてくださることを知ることができますから。イエス様、私は心を尽くし、力を尽くしてあなたを愛しています。何よりもあなたを愛しています。
救い主：「愛する娘よ、あなたがこれを悟ってくれたことを嬉しく思う。そのままのあなたでいて、しっかりと私の手をつかんでいなさい。」私：救い主は私に祝福を与えてくださいました。

16時30分から19時45分まで、ロートの教会で祈りと聖ミサ。

1992年9月13日 - 日曜日

9時30分から11時15分まで、自宅で
今夜、午前2時30分から3時30分にかけて、私の家の前で騒ぎがありました。酔っ払いたちが私の家の向かいに車を停めていました。警察が出動しなければなりませんでした。
祈りの交わり！
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私はあなたのそばに、あなたの中に、そしてあなたと共にいる。あなたは完全に私のものだ。他人に影響されてはならない。昨日も、そして昨夜も、あなたはそれを見たはずだ。サタンはあらゆる手段を尽くして、あなたを私から引き離そうとしている。彼は強い、わが娘よ。しかし、私と共にいるあなたは、それ以上に強いのだ。 わが娘よ、今まで通り、あなたの祈りのグループに忠実であり続けなさい。サタンにとって、あなたの祈りのグループを分裂させることほど喜ばしいことはないのだ。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。昨日あなたが感じた灼熱のような痛みは、私の痛みだったのだ。」
私：「一日中、あの灼熱感と刺すような痛みを感じていましたが、今はもうありません。」救い主：「私は、この数日間で起こることに備えて、あなたを準備しているのだ。今、あなたは心に灼熱感を感じているだろう。」
私：「でも、それほど強くはないです。」
救い主：「だが、それはやがて非常に強くなるだろう。」
私：「私はそれに耐えられるでしょうか？」
救い主：「耐えられるだろう。」
私：「それなら、医者を呼んだほうがいいですか？」
救い主：「その必要はない。君は分かっている。」私：「はい、主よ。
あなたの望むとおりにします。」
救い主：「書きなさい、娘よ。傷跡は教会で受け取るのだ。」私：「赤い色で？」
救い主：「そう、赤で。」
私：「それなら、あなたにお会いできるのですか？」
救い主：「私を見るだろう。私から放たれる光によって、君は聖痕を受け、その光は私が望む限り、君と共にあり続ける。私は光であり、闇を追い払う。娘よ、君が受ける聖痕は、
私の傷跡なのだ。」
私：「でも、それは以前にもおっしゃいましたよね。」
救い主：「この傷跡は、この世があなたに真似できるものではない。司教たちでさえ、彼らには光が欠けているため、もはやこれを説明することはできない。だから謙虚でいなさい。彼らはこの光によって照らされなければならないのだから。わが娘よ、私は彼ら全員を愛している。」
私：「主よ、もし彼らがこれを冒涜したら？」
救い主：「冒涜する者たちも、今なら救われるのだ。」私：「どのようにして、
主よ、神よ？」
救い主：「彼らに、彼らに欠けている愛を、あなたが与えることによってだ。」私：
「どうすれば、彼らに愛を与えることができるのでしょうか？」
救い主：「愛とは、私そのものである。」
私：「そういたします。」
救い主：「あなたは、私が用いる私の道具なのだ。」
私：「ああ、主よ、神よ、それは理解するのがとても難しいことです。」

救い主：「私は、善意を持つ者たちを啓発する。彼らは、あなたが悟ったように、私が愛そのものであることを、心の中で悟るだろう。」

私：「はい、主よ、今、理解できました。科学は、その知性では理解できません。私たちの心にある愛は、科学を超越しています。愛する救い主よ、私たちを待ち受ける天の御業に比べれば、この世の科学など、なんと無意味なものでしょう。」
救い主：「わが娘よ、あなたが書いたことは私の心にかなう。今、あなたを祝福しよう。」私：「私はこう言いました。
『どうか全世界を』と。」
救い主：「父なる神、子なる神、聖霊なる神が、あなたを祝福します。平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」
私：「主なる神に感謝します。イエス・キリストとマリアに、今、そして永遠に栄光がありますよう
に。アーメン。」

12時45分、私はロートでロザリオと祈りを捧げました。
14時30分、ヘトヴィグと共に、ミンゴルスハイムのロクス礼拝堂で「悲しみのロザリオ」と聖ミサを捧げました。聖ミサの後、宣教師のシュタイラー神父と30分ほど話をしました。

1992年9月14日 - 月曜日

自宅にて：
午前2時10分から3時05分まで祈りを捧げた
9時30分から11時15分まで、祈りの集い
私は泣いてしまいました！昨晩、ロクス礼拝堂にいたある神父が、私を混乱させてしまったのです。彼は「手での聖体拝領」を擁護していました。私は救い主に尋ねました。「もしそれが御心なら、私に答えを与えてください」と。なぜなら、正しい道は「口での聖体拝領」であると確信しているからです。
私はその神父の言葉を信じることができませんでした。「愛す
る救い主よ、私は間違っていたのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、あなたは間違ってはいない。今でも手による聖体拝領を行っている司祭たちは、大きな冒涜を犯しているのだ。彼らがそれを擁護し続けている以上、あなたは
責任を負わせる。今もなお、手で聖体を受けることを許している者たちは、私にとってはどうでもいい。わが娘よ、あなたがこれまで行ってきたことは正しい。書き記しておきなさい、わが娘よ。あなたが受ける聖痕は、激しい痛みを伴うだろう。」
私：「それを聞くだけで、もう怖くなってきました。」救い主：「娘よ、今、怖くなったのか
？」
私：「いいえ。」
救い主：「私と共にある限り、あなたは恐れることはない。祈りが少ないほど、あなたが味わう痛みは強くなるだろう。」
私：「ああ、主よ、それでは、誰が私の声に耳を傾け、祈ってくれるのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、救われたいと願う者たちが祈るだろう。私は魂の救いのために、あなたの中で十字架にかけられるのだ。わが娘よ、誰にでも与えられた時間は短い。彼らは祈るだろう。書き留めておきなさい、わが娘よ。救われるのはごくわずかな者だけだ。」
私：「私はすべての魂のために苦しみます。」
救い主：「わが娘よ、ほとんどすべての者は悔い改めようとはしない。」私：「
それなら、私はすべての者のために苦しむ必要はないのですか？」
救い主：「いや、そうしなければ、彼らが『私は彼らのために苦しんでくれなかった』と言えなくなるからだ。
」私：「親愛なるイエス様、書くことは私にとってとても辛く、苦痛です。」
救い主：「愛する娘よ、私はあなたを祝福する。私は
全世界、とりわけすべての病人と臨終にある人々を祝福の中に包み込む。」

18時30分 ロザリオと聖体礼儀（赤）
20時00分 赤の祈りの会。

最初の3年間は、約1時間祈っていました。ここ2年間は、約2時間から2時間半祈っています。
救い主は、私に「たくさん祈らなければならない」と求めておられました。

1992年9月15日 - 火曜日

10時30分から13時まで

その前に、フリドリンと一緒に祈りました。その後、一人で祈り、救い主と一つになりました。

救い主：「書き記せ、わが娘よ。あなたがこれから味わう苦しみは、マリアの苦しみと一つに結びつけなさい。マリアの苦しみは、私の苦しみでもあるのだ。すべてを天の父に捧げなさい。あなたたちの捧げ物によって、多くの魂が癒やされるだろう。」
私：「愛するイエス様、私はあなたをとても愛しています。あなたの望む通りにします。ただ、私が分かるように、教えてください。今、言葉では言い表せない深い平安を感じています。この平安の中にはたくさんの愛があり、この状態から離れたくないという願いが湧いてきます。 自分の体の中にいるような感覚がありません。言葉では言い表せないほど軽く、自由で、心配も痛みもありません。世俗的なものは私から遠く離れているようです。私は無です。
私の内なるすべては神です。この確信と恵みをくださった主よ、神よ、ありがとうございます。今、私には一つの願いがあります。それは私にとってあまりにも美しいものなので、今、あなたに書き記します：
イエス様、ヨハネのように、あなたの胸にもたれかからせてください。そして今、私の心はあなたを深く愛しているので、あなたを抱きしめたいのです。これは誰にも説明できません。愛はただそこにあるからです。あなたを愛しているからこそ、目に涙が溢れてきます。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。今のままのあなたを、私はいつまでもそばに置いておきたいのです。ほら、あなたには愛が欠けているわけではありません。むしろ、苦しむ中で、あなたはさらに多くの愛を受け取っているのです。五つの聖痕はすぐそばにあります。
私：「親愛なる神様、あなたは以前にもそうおっしゃいましたね。」
救い主：「その時は、まだ多くのことを知らなかったのだ。これから訪れるあらゆる時に対して、備えをしておきなさい。あなたは多くの試練にさらされることになる、わが娘よ。」
私：「ああ、救い主よ、私はすでにこれほど多くの試練を受けてきました。
」救い主：「まだ十分ではない。」
私：「もし神学者たちが信じなかったら？」
救い主：「あなたは神学者のために自分を犠牲にするのではなく、すべての魂のために犠牲にするのだ。光の中にいる神学者たちは、きっと信じるだろう。愛する娘よ、私はあなたをとても愛している。これを書き留めなさい。贖いの苦しみは、もうすぐ始まる。」
私：「贖罪の苦しみには、どのようなものがあるのですか？」
救い主：「頭痛や胸の痛み、それらは準備の苦しみだ。これには薬は効かない。これらの苦しみは私から与えられるものだ。あなたは魂の救いのために苦しんでいるのだから、薬は役に立たない。すべてを愛をもって忍耐強く耐えなければならない。私があなたに、それを耐えられるだけの愛を注いであげる。 私はあなたのすべてとなる。あなたの魂は私と一つとなり、あなたは私の苦しみのほんの一部しか味わわない。そうして、私の娘よ、あなたはもはやあなた自身ではなくなる。私そのものとなるのだ。救い主：「私はあなたと、あなたに親しいすべての人々を祝福する。」

救い主は私たちに祝福を与えてくださいました。

18時30分、私はミンゴルスハイムにいるペルー出身の神父のもとを訪れました。私はゲブハルト・ハイダー神父の聖書をその神父に贈りました。そして、その神父に告解をしました。ヘドヴィッヒも私と一緒にその神父のもとに来ていましたが、彼女は私を悪く言いました。私は謙虚にならざるを得ませんでした。私は彼女を許しました。

18時30分、ロートにてロザリオと聖ミサ

1992年9月16日 - 水曜日

9時30分から10時20分まで
救い主：「書き記せ、わが娘よ。」私：「はい
、愛するイエス様。」
救い主：「わたしへと続く十字架の道は、光の中にあります。わたしの子供たちは皆、その道を認識しています。あなたを照らすこの光、それがわたしです。わが娘よ、誰もあなたをこの道から逸らすことはできません。照らされた道を認識した者は、もはや暗い道を進もうとはしなくなる。あなたが受け取った匿名の手紙は、サタンの罠だ。彼はあなたをこの照らされた道から逸らそうとしているが、私があなたと共にいる以上、それはできない。今まで通り、皆を愛しなさい。愛する娘よ、あなたに降りかかるあらゆることを受け入れる覚悟を持ちなさい。
あなたにとって重すぎるものは、私に委ねなさい。聖なる五つの聖痕は私があなたに授ける。確信を持って安心しなさい。」
救い主：「私は自分の言葉を変えない。あなたの前に立ちはだかる試練を、あなたは乗り越えなければならない。私はあなたの魂の導き手であり、あなたはそれを乗り越えるだろう。わが娘よ、あなたの行いや、人々と接する姿勢は、私の心にかなっている。

あなたを教え込もうとする者たちは、ただ嫉妬しているだけだ。警戒しなさい。わが娘よ、あなたの周りには多くの敵がいる。彼らの前では言葉を慎みなさい。彼らはあなたのたった一言を、あなたを嘲笑するために十の言葉に膨らませるだろう。わが娘よ、あなたのすべての悩みを、常に私に委ねなさい。」

私：「今、まだ何か書くべきでしょうか？」

救い主：「いいえ、娘よ。行かなければならない場所へ行きなさい。愛する娘よ、私はあなたを祝福します。」

私：「救い主様、私はこの祝福の中に、病める者、死にかけている者、煉獄にいる貧しい魂たち、そして私の敵たちをも含めます。」

私：「救い主は私に祝福を与えてくださいました。」

12時、シュパイアーの大聖堂で、『主の天使』やその他の祈りを捧げました。

19時30分、ロクス礼拝堂で聖ミサに参列した。

20時30分、マリオンと一緒に日記を書きました。

1992年9月17日 - 木曜日

自宅にて 10時30分から11時30分まで。私は

現在、まだ休暇中です。

今夜、20時30分から3時30分まで祈りの交わりをしました：

救い主：「書き記せ、わが娘よ。聖なる五つの聖痕が、お前に刻み込まれるだろう。教会の前に、空にしるしが現れる。それを見よ。それが、この出来事に対する私の確証となるのだ。」

私：「もし私が見られなかったら、あなたの計画は変わるのですか？」救い主：「娘よ、あなたはそれを見るだろう。」

私：「主よ、神よ、私はそれが起こることを信じています。私の信仰は揺るぎないものです。だからこそ、信じているのです。」

救い主：「わが娘よ、私をあなたの中で働かせてください。私はあなたをとても愛しています、わが娘よ。私はあなたを選んだのです。あなたと共に多くの魂を救いたいのです！そうすることは、かねてより私の願いでした。その時が到来し、誰も私の時を変えることはできません！

私は永遠そのものである。愛する娘よ、すべては適切な時に訪れる。

娘よ、あなたの『はい』に感謝する。あなたの『はい』は、海の中の岩のように堅固だ。あなたの『はい』は私の『はい』であり、誰もそれをあなたから奪うことはできない。

P・ハイダー：これについて、レーゲンスブルクのゲブハルト・ハイダー神父は、日記を精査した上で、これは救い主からの恵みの賜物であるため、私が書き続けるべきだと述べています。

私：「今、こう思ったんです。『イエス様、私はあなたをこんなに愛している』って。」

救い主：「あなたの愛は、私の愛そのものです。その愛を、愛を渇望している人々に分け与えてください。」

私：「主よ、今、私が心からあなたに語ったことはすべて、あなたの御心に従い、あなたが喜ばれる通りに成されますように。私にははっきりと分かりました。理解すべきことはこれだと今理解しました。それ以外のことは、あなたがこれから教えてくださるでしょう。私はあなたを信頼し、あなたに忠実であり続けます。あなたが私に与えてくださる美徳と、すでに与えてくださった美徳をもって。」

救い主：「愛する娘よ、ありがとう。あなたが書いたことに、私は大きな喜びを感じています。私はあなたを祝福し、あなたが必要とするだけの恵みを注ぎます。私があなたに与えるものを耐え抜けるよう、私はあなたにたっぷりの愛を授けます。」

私：救い主が私を祝福してくださいました……

私：「主よ、神よ、ありがとうございます。私の最愛なる方、ありがとうございます。今、そして永遠に、イエス・キリストとマリアに栄光あれ。アーメン。」

18時30分、ロートでのロザリオと聖ミサ。

1992年9月18日 - 金曜日

自宅で、

午前4時から5時30分まで祈りを捧げた。

聖母マリアを崇敬するための祈り！

聖なる傷を崇敬し、敵のための祈りを捧げた後、救い主と一つになった。

救い主：「わが娘よ、私はあなたのために計画を持っている。私は自分の望むことをする。忍耐強く待て。すべては私が約束した通りに起こる。その時期は私が決める。すべては私の望む通りに起こらなければならない。」
私：「主よ、私は何か間違ったことをしてしまったのかと思いました。」
救い主：「愛する娘よ、あなたは高貴な薔薇だ。その香りは敵が嫌うものだ。いつでも私のために準備を整えておきなさい。娘よ、あなたは試されなければならない。娘よ、私はあなたを愛している。そのまま眠り続けなさい。」

11時45分から12時45分まで、祈りの交わり!
私は心から祈り、これを書き留めるのをためらった。しかし、救い主は私にこれを書き留めることを望んでおられる。救い主：「書きなさい、わが娘よ。私へのあなたの愛は真実だ。私を愛する子供たちを、私は知っている。しかし、その数はごくわずかだ。あなたは、私と同じように魂たちを愛しているからこそ、私と共に魂たちを渇望しているのだ。 あなたは私を愛しているが、まだ間近で私を見たことはない。しかし、私を見ずに愛していることこそ、より価値があるのだ。それこそが、決して裏切ることのない、真の崇高な愛である。私をあなたの最優先の場所に置いてくれたことに感謝する。この魂には、天国でとりわけ特別な報いを与えるつもりだ。」
救い主：「わが愛する娘よ、この世の状況は芳しくない。すべてが一本の糸に懸かっており、それはいつ切れてもおかしくない。私はその糸が切れないよう、今もしっかりと握りしめている。戦争はさらに激しさを増している。すべての教会や家庭で平和を祈り、すべての心に平和が訪れるように祈りなさい。 魂を救うための時間は短く、私以外の誰もそれを延ばすことはできません。さらに多くの魂が救われるよう、祈ってください。私はあなた方の救い主であり、救いの薬です。
私の救いの薬によってのみ、あなたがたは救われるのです。」 私：「主よ、
神よ、あなたの救いの薬とは何ですか? 」 救い主：「愛です。愛こそがすべ
てなのです、わが娘よ。」
私：「またこんなにたくさん書いてしまいました。本当にこれほどたくさん書かなければならないのですか? 」 救い
主：「毎日書きなさい。」
私：「はい、主よ、ありがとうございます。」

13時45分から15時45分まで、森の中で詩編を唱えて祈りました。
18時30分、聖体礼儀とロートでのロザリオの祈り

<u>1992年9月19日 - 土曜日</u>
8時00分から10時00分まで、祈
りの集い!
救い主：「書き記せ、わが娘よ、私は　　s　　!
お前は私の愛する娘だ。お前の痛みは私の痛みだ。私はお前と共に魂たちを救う。お前が流した涙を、私に捧げなさい。」
私：「はい、主よ。魂たちが永遠の罰に陥らないよう、あなたに捧げます。これほど多くの魂が失われ、人々が冷淡で盲目になっていることを思うと、私の心は重くなります。彼らは見ているのに、何も見えていないのです。罪はどれほど大きいのでしょう。」救い主：「愛する娘よ、すべてが変わるのだ。」
私：「どのように、主よ。すべてがどのように変わるのですか? 」
救い主：「最後の者が最初の者となる。彼らは私の民となる。私は貧しい者たちの父である。わが娘よ、私はあなたが持っているものを求めている。」
私：「私には何もありませんし、私自身も何者でもありません。すべてはあなた
のものです。」私：救い主は私に祝福を与えてくださいました。
午後2時30分、ブラーン神父が訪ねてきて、私はこれから授かる聖痕について話しました。私は彼の教えに納得できませんでした。彼は、救い主が私に語られたことと矛盾する話をしたのです。

16時15分から19時45分まで、私はロートの教会で祈りを捧げていました。最初の1時間は、ちょうどその時間帯に教会で聖歌隊がリハーサルをしていたため、非常に辛かったです。告解やロザリオの祈りが行われているまさにその時に、聖歌隊が練習をしなければならないことが、私の心を痛めました。私はこれらの願い、司祭たち、そして全世界の平和のために祈りました。
合唱団のせいで教会を離れることはなかった。私は教会にとどまり、祈り続けた。

1992年9月20日（日）

自宅にて 7時45分から8時50分まで 祈りの
集い!

救い主：「愛する娘よ、あなたが受ける聖痕は痛みを伴うだろう。その痛みは、私の愛と結びついている。あなたは謙虚であるという恵みを受けるのだ。マンハイムの司祭、ブラーン神父があなたに語ったことは、あなた自身も感じていた通り、真実ではない。 あなたから流れ出る血は、私の血である。その司祭のために、あなたはたくさん祈らなければならない。私があなたに書き記すようにと示すことを信じなさい。私はあなたの魂の導き手である。」

私：「その司祭との会話の後、数時間にわたり胸の痛みを感じました。これはどういう意味なのでしょうか? 」

救い主：「その痛みは、私の痛みだ。司祭が偽りを語る時、あなたはその痛みをより強く感じるだろう。」

私：「それなら、その司祭の前では黙っていたほうがよいのかもしれません。そうすれば、あのようにあ
なたを侮辱することもないでしょう。」

救い主：「私が望む時、あなたは話すことになる。」

私：「主よ、神よ、聖体の中に、あなたが真に、本質的に、実際に、肉と血、体と魂、神性と人間性をもって臨在しておられることを信じない司祭たちから、私をお守りください。」

救い主：「お前は光となるのだ。もう一つ書き記しておきなさい、わが娘よ。お前にふさわしい時が来れば、すぐに聖痕が与えられる。間違いなく、お前はそれを受けるだろう。私を愛しなさい、わが娘よ。お前の私への愛は、私の心にかなうものだ。 わが愛する娘よ、もう少しだけ辛抱しなさい。愛に欠けることはない。私はいつでも望む時に愛を授ける。適切な時を選ぶのは私の権利なのだ。」

私：「愛するイエス様、心から感謝いたします。」

救い主：「あなたを妬む者たちに気をつけなさい。そうした人々とは、特にうまくやっていかなければならない。」

私：「どうすればいいのですか、救い主様? 」

救い主：「彼らに話させておき、あなたは黙っていなさい。そうすれば、彼らは自分たちが間違っていることに気づ
くでしょう。」

私：「はい、愛するイエス様、わかりました。」救い主は私に祝福

を与えてくださった。

13時30分、ロザリオと祈りの時間。

15時30分、自宅でロザリオやその他の祈りを捧げ、ピオ神父の列福を祈った。

18時30分、ロクス礼拝堂でロザリオと聖体礼儀。ミサの終わりに、宣教師の説教がうまくいかなかった。私はがっかりし、深い悲しみを抱えて家路についた。

1992年9月21日 - 月曜日

8時15分から9時45分まで、祈りの集い
!

私：「昨晩の聖ミサの終わりに、宣教師が、ある司教とケッセンハイマー神父によって確認されたとされる手紙を読み上げました。その手紙には、司祭からのみ聖体拝領を受け、平信徒からの拝領を拒む信者たちは誤っている、と書かれていました。
それは私にとって大きな衝撃であり、心を痛め、動揺させられた。」

私：「親愛なる救い主よ、ミサの後、司祭が語ったことは真実なのかと私が尋ねたとき、あなたは『それはナンセンスだ』とおっしゃいました。
もう一度お尋ねしたいのですが、信徒が聖体拝領を配るのは正しいことなのでしょうか。」

救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。聖体については、私が望み、また要求するのは、司祭の聖別された手を通じて受け取られることである。これこそが、信徒たちに聖体を授ける正しい道である。これに背く者は、私の前でその責任を問われることになる。わが娘よ、たとえ一人であっても、これまで通り続けなさい。私はあなたと共にいる、わが娘よ。」

救い主は私に祝福を授けてくださった。

18時30分頃、赤い服を着てロザリオと聖ミサ。

20時 祈りの会。

1992年9月22日（火）

8時30分から9時45分まで、祈

りの集い!

救い主：「書き記せ、わが娘よ！　あなたが受ける聖痕はまもなく現れる。私は再びその時期を早めた。準備をしておきなさい、わが娘よ。」

私：「神様、それらがもうすぐ現れるとはどういう意味ですか？」救い主：

「そう長くはかからないだろう。」

私：「まだ何か書き留めるべきでしょうか？」

救い主：「まったく別のことを書き記しなさい。私が望む通りに、すべてを受け入れることを望む。」私：「主よ、神様、あなたが望まれることとは何ですか？」

救い主：「君に降りかかるすべての事柄だ。」

私：「それがあなたからのものだと、どうやって見分ければいいのですか？」

救い主：「私の愛によって見分けるのだ、わが娘よ。それが気に入ろうが気に入らなかろうが、それを受け入れなければならない。」

私：「愛するイエス様、私の花婿よ。あなたがそうおっしゃるなら、私はそうします！たとえ気に入らないことであっても、それがあなたから来ていることを確信しなければなりません。」

私：「主よ、あとどれくらい書き続けなければならないのですか？」

救い主：「あと少しだ、わが娘よ。もう少し書きなさい！」私：「はい、主よ。」

救い主：「あなたはまだ試されているのだ。」

私：「主よ、神よ、愛するイエス様、なぜ泣いておられるのですか？私の右目から涙があっという間に溢れ出ました。これは超自然的なことです。これはどういう意味なのでしょうか？」

救い主：「あなたたちの前に危険が迫っている。ヨーロッパでの戦争は拡大しつつある。多くの魂が失われるだろう。彼らにとって、私の十字架の死は無駄になってしまう。あなたもまた、多くの人々のために無駄に苦しむことになる。彼らの不従順のせいで魂を失うことは、私にとって大きな苦痛なのだ。

娘よ、彼らが私の裁きの座に立つとき、救われるための最後の機会が与えられているのだから、深い悔い改めの心を持つよう祈りなさい。彼らが決断できるよう、私はまだ彼らに多くの時間を与えている。地獄は残酷なものだ、娘よ。それなのに、あまりにも多くの者がそこへ入っていくのだ。」

私：「親愛なる神様、もうこれ以上書くことができません。どうか私を憐れんでください。」救い主：「あなたは私と共にその痛みを感じているのだね。愛する娘よ、私はあなたを祝福する。」

救い主は私に祝福を与えてくださいました。

18時30分頃、ロートでロザリオとミサ。

1992年9月23日 - 水曜日

8時～12時30分 自宅で

私：「いつもとは違って、心から祈りました。」

救い主：「わが娘よ、私はあなたにこれを書き留めてほしい。今日は聖堂に行ってはならない。私があなたの聖堂である。」

私：「これを書き留めていいですか？」救い主：

「そう、書き留めなさい。」

私：「会社の社員旅行のことを考えていました。」

救い主：「そこへ行くがよい。しかし、どうか柔和で謙虚であり、彼らと共に喜びなさい。」私：「神様、私がこのように様々な呼び方であなたに話しかけていますが、これで正しいのでしょうか？」

救い主：「私が気に入っているよ、君が私を呼ぶその呼び方。私の娘よ、これを書き留めなさい。君が受ける痛みは、愛をもって耐えなけ

ればならない。」
救い主：「それは以前にも私に言ったね。」
私：「その痛みは誰にも取り除いてもらうことはできません。聖水でさえ、あなたを助けることはできません。治療法を探そうと努力しないでください。」
私：「もし医師たちが介入してきたら？」

救い主：「彼らはあなたの同意を必要とする。」私：「もし彼
らが同意を得たら？」
救い主：「それでも彼らはあなたを助けることはできない。それどころか、そうすれば痛みはさらに大きくなる。あなたは罪人のために苦しむことになるのだ。私があなたに求めることは、あなたがしなければならない。」
私：「神様、私は混乱してしまい、十分な信頼と忍耐力を持ち続けられないのではないかと恐れています。人を恐れるようになってしまうのでしょうか？」
救い主：「そのすべてを、あなたはいつも私に委ねているのだ。」
私：「親愛なる神様、また私の心が燃え上がっています。」
救い主：「それは私の愛の燃え盛る炎だ。私以外、誰もそれを消すことはできない。」
私：「今朝はずっととても幸せで、今までになく心から祈ることができました。まるで司祭のように、適切な言葉が自然と口から出てきました。」
救い主：「わが娘よ、それは私だったのだ。あなたのイエスだ。あなたではなく、私なのだ。」
私：「心の奥底からこのように深く祈ることができるのは、なんて素晴らしい感覚でしょう。特に天の父への祈りであり、人々はそれをあまりにも忘れがちです。私の心の奥底から、これほど尊い祈りが湧き上がってくることに、私自身も驚きました。この祈りは、天の父が聞き届けてくださったのだと思います。」
救い主：「わが娘よ、あなたは愛をもって、すべてを私に捧げてくれた。」
私：「主よ、私は今、もう4時間もあなたとつながっていることを誰にも話してはいけません。でも、それが長すぎるとは感じません。休暇がもっと長くないのが残念です。休暇に行かないようにと教えてくださったことに感謝します。」
救い主：「愛する娘よ、それを書き留めなさい。私の願いを一つ叶えてほしい。」
私：「ああ、主よ、あなたに願いがあるのですか！あなたが私と共にいてくださるから、そして私があなたを愛しているから、その願いを叶えて差し上げます。」
救い主：「そう、私はあなたと共にいる。」
私。「愛する三位一体の神よ、どんな願いを叶えればいいのかまだ分かりませんが、私は『はい』とお答えします。私の心は震
えることなく、むしろ喜びでいっぱいです。今、あなたは私に何とおっしゃるのでしょうか。主よ、神よ、あなたの願いが叶う
ことを信じています。」

12時になりました。私は両腕を広げて、主の天使の祈りと主の祈りを敬虔に捧げました。一人で祈るとき、私はよくこうします。
祈りの後、私は再び救い主と心を一つにしました。私：「主よ、どのような願いを叶
えればよいのでしょうか？」
私は静寂の中に身を置き、何も聞こえませんでした。
私：「一体どういうことでしょうか。」私は再び主と一つになり、聖霊に祈りました。「どうか、他の霊が介入することを許さないでください。私はあなたを信頼しています。私が何を書くべきか、教えてください。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ！私は、あなたの中で、私が望むことは何でも成し遂げることができる。」
私：「主よ、神よ、あなたは私の中で、お望みのことは何でも成し遂げることができます。そして、この願いは必ず叶うでしょう。ああ、愛する父よ、愛に背くことなどできるでしょうか?
あなたは、私たち罪人のために、御独り子を犠牲にすることを拒まれたでしょうか？私たちの救いのために、十字架にかけられることを拒まれたでしょうか？燃えるような舌となって使徒たちの上に降りてくることを拒まれたでしょうか？あなたは愛そのものであり、あなたは私の永遠の命であり、至福そのものであるからこそ、私はあなたに身を委ねます。」
救い主：「あなたは私に喜びを与えてくれた。それゆえ、私はあなたの中であらゆることを成し遂げることができる
。」救い主は私を祝福してくださった。
私は時間の感覚を失っていた。救い主と共に過ごした四時間半は、まるで
稲妻のように一瞬で、それは理解しがたいことだ。
今なら、教会で1時間も過ごすのは長すぎると愚痴る人の気持ちが理解できる。それは、単にその人に愛が欠けているからに他ならないのだ。

19:00 ロクス礼拝堂にてロザリオと聖体礼儀

1992年9月24日 - 木曜日

8時30分～9時45分　結合
救い主：「書き記せ、わが娘よ。私は、あなたが.....」
私は、自分が混乱しているのだと思いました。
救い主：「わが娘よ、あなたは混乱していない。私はあなたに私のために何かをしてほしいのだ。あなたのすべての困難を私に委ねなさい。」

私は痛ましいほど泣きながら、救い主に自分の悩みを委ねた。自分の抱える問題を心の中から振り払い、救い主に委ねた。信じられないことだが、私は安堵感を覚えた。救い主：「ほら、娘よ、あなたはいつも私に悩みを委ねなければならない。私はそれらをすべて解決してあげる。」
私はある理由から、教会でしるしを求めた。救い主：「娘よ、私はあなたに、
『あなたが聖痕を受ける』というしるしを、与えてあげよう。」
私：「主よ、他の人たちもそれを見ることができるのでしょうか、それとも私だけでしょうか？」
救い主：「他の人たちもそれを見るだろう。それは教会で起こる。」私：「いつですか？」
救い主：「準備をしておきなさい、わが娘よ。」
私：「主よ、神よ、これが聖痕のしるしであることを、どうすれば分かるのでしょうか？」
救い主：「それはあなた自身に起こるのだ。」
私：「そのとき、痛みを感じるのでしょうか。それとも、恐怖や喜びを感じるのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、あなたは私をより深く愛するようになるだろう。安心しなさい、わが娘よ。私はあなたを祝福する。」 救い主は私を祝福された

18時30分 ロザリオと聖体礼儀（赤の装い）。

1992年9月25日 金曜日

休暇の最終日。祈りの集い
救い主：「書き記せ、わが娘よ、私は.....」
私はすぐに話を遮って尋ねた。
「でもお願いです、それがあなたであることを確かめさせてください
。」 救い主：「わが娘よ、そうだ、私はお前のイエスだ。」 私：「
はい、主よ、何をお望みですか？」
救い主：「私は、お前の贖いの苦しみを始めようと思う。準備をしておきなさい。その時がすでに来ている。」私：「今
、会社の社員旅行に行かなきゃいけないの？」
救い主：「会社の社員旅行に行くのだ。」
私：「でも、来週は仕事があるし、同僚が今病気なんです。」 救い主：「明日のことを心配してはならない。」
私：「主よ、贖いの苦しみとは、頭痛のことですか？」
救い主：「私は、お前に刻み込まれる傷跡のことを言っているのだ。お前に残された時間はごくわずかだ。」

救い主はさらにこう言われました。
「書き留めなさい、わが娘よ。君にはまだ他の美徳も与えられる。」私：「親愛なる救い主よ、それはどのような美徳ですか？」
救い主：「苦しみの中で忍耐し、痛みに耐えること。私はあなたに私の光を与える。そうすれば、盲人も見えるようになる。あなたには癒しの力が与えられる。」
最初は書き留めようとは思いませんでしたが、やがてこう聞こえてきました：
救い主：「わが娘よ、書き記しなさい。あなたには癒しの力が与えられる。尊い血によって、魂は救われるのだ。それを常に天の父に捧げなさい。それが魂にとって最大の救いの手段となるだろう。わが尊い血は、あなたの傷口から流れ出るのだ。
わが娘よ、私を失望させないでほしい。私はあなたの主であり、神である。あなたの苦しみに対して、私は多くの喜びと愛を授ける。他人に影響されてはならない。あなたは尊い血によって、私と完全に結ばれている。誰も私たちを引き離すことはできない。」
私：「私の救い主よ、まだ何か書くべきことがありますか？」

救い主：「わが娘よ、革命が訪れる。ヨーロッパでは政治家たちが打倒される。飢饉は、これから起こる重大な災害の中で最大のものとなるだろう。」救い主：「懲らしめはすでに始まっている。人々はそれを望んだのだ。」
私：「主よ、神よ、誰がその懲らしめを望んでいるのですか？」救い主：「『偽りの父』を望んだ人々だ。」
私：「主よ、神よ、私は覚悟ができています。贖罪の苦しみが始まっても構いません。しかし主よ、私の意志ではなく、あなたの意志が成されますように。主よ、あなたの望むままに、おやりください。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたを深く愛している。私に忠実であり続けなさい。」
私：「愛に満ちた父よ、私はかつてないほどあなたを愛しています。私はあなたの手にしっかりとすがりついています。」救い主：「愛する娘よ、私はあなたを祝福する。」

救い主は私に祝福を授けてくださった。

18時30分、ロザリオと聖体礼儀（赤の礼拝）。

1992年9月26日 — 土曜日

自宅 — 祈り — 合一 —
救い主：「あなたが流す涙は、私の涙そのものです。あなたは私の愛をもって私を愛しています。あなたは愛を求めて祈り、そしてそれを受け取っています。わが娘よ、それを書き留めなさい。あなたが書き記したすべては、不信仰者たちへの証しです。適切な司祭がそれを公表するまで、しっかりと保管しておきなさい。そのことについては心配する必要はありません。
わが娘よ、まだ書き留めておくべきことがある。」私：「はい、主よ、神よ。」
救い主：「愛する娘よ、いつも喜びなさい。」
私：「痛みを感じている時でも、喜びを持つことはできるのでしょうか？」 救い主：「あなたが受け取る愛を、他の人に伝えなければならない。」
私：「はい、主よ、神よ、そういたします。」私：「親愛なる神様、どうか私に柔和さをお与えください。」救い主：「今、それをあなたに与える。書き留めなさい。」私：「主よ、神よ、ありがとうございます。」
救い主：「私はあなたを愛しています、わが娘よ。そしてあなたを祝福します。すべての魂をこの祝福の中に含めます。」

16時33分〜19時45分 - 祈り - 告解 - 教会での赤衣の聖ミサ。

1992年9月27日 - 日曜日

6時30分〜8時15分（新時間）。
（今夜、時計が1時間戻されました。）

救い主：「書き記せ、わが娘よ。」
私：「はい、私の愛する霊的指導者、私の愛するイエス様。」
救い主：「昨日、あなたの夫のところにいたのは、複数の不浄な霊たちだった。」
私：「主よ、心臓発作かと思われました。でも、彼に聖水を授け、祝福し、彼のために祈ったとき、それが違うと分かりました。彼の顔には汗がにじんでいました。
その後、彼の様子は良くなりました。その直後、彼は夢の中で時々見せるような、私が以前にも耳にしたことのある、とても不気味な笑い声を上げました。運転中にも何度か同じことが起きていましたが、私は心を込めて、全力を尽くして祈りました。その時、彼はまだ車のハンドルを握ったままで、ちょうど庭に車を入れようとしていたところでしたが、車から降りることができませんでした。私は夫に、告解に行くべきだと促しましたが、彼は聞き入れようとしませんでした。」
救い主：「私はこれらの試練を許したのだ。あなたの夫は悔い改めようとはしない。」私：「彼が日曜日に教会に通っているのに、誰が私の話を信じてくれるでしょう？」
救い主：「日曜日に教会に行くような人はたくさんいる。娘よ、すべてを私に任せなさい。」
私：「親愛なる救い主よ、フォクト神父は私を助けてくれません。昨日の告解の後、私はとても辛い思いをしました。フォクト神父は、

私が本を読んでいると言っています。私は、本によって書かれている内容はそれぞれ異なり、交わりの最中は、自宅でも職場でも、決して本を持ち歩かないと彼に伝えました。そんなことは絶対にしないつもりです。」

私はヴォグト牧師にも、聖痕から流れ出る血は救い主の血になるだろうと伝えました。彼はそれを信じていません。マンハイムのブローン神父も同様です。」
私：「そのことについて、何か教えてください。もしかすると、私が何か間違ったことを書いてしまったのかもしれません。」救い主：「わが娘よ、あなたの五つの聖痕から流れ出る血は、私の血となる。それは、私がすべての人に明かさない秘密なのだ。
それは、私があなたたちのために流す私の血だ。わが娘よ、ここにある不可解なことは、私から来ているのだ。そうである。そうあり続ける。そうなるのだ。
もしフォクト神父がすべてをあなたに説明できたなら、私があなたの霊的指導者である必要はなかっただろう。私の愛する娘よ、それを信じてほしい。私の望みは、あなたに降りかかるすべてのことに注意を払うことだ。」私：「ああ、主よ、神よ、私はやはり弱い人間です。私はあまりにも未熟です。
サタンは、噛みつく犬のように私の後をついて回っています。主よ、神よ、彼が自分の望むままにはできず、あなたが許されることしかできないことを感謝します。そうでなければ、彼は世界を完全に支配していたでしょう。しかし、この世界はあなたのものです。」
救い主：「わが娘よ、その通りだ。お前の魂は、わが働きを受ける準備ができている。あとはもう少し待つだけだ。わたしを信頼しなさい。お前はわたしの保護の下にある。」私：「そして聖母マリアは？」
救い主：「私がいるところには、彼女もいます。」私：
「愛する神様、ありがとうございます。」
救い主：「ああ、愛する娘よ、今の世はなんと悲惨なことか。これほど多くの盲人がいた世紀は、かつてなかった。誤った教えが魂を盲目にしているのだ。その誤った教えこそが、蛇の毒である。この毒に対する解毒剤は、私だけなのだ、わが子よ。愛する娘よ、まだ少し書き留めておく必要がある。君に欲しいのは……」
私：「親愛なる神様、何でしょうか？」
私：「主よ、神よ、愛するイエス様、私はあなたに私の自由を捧げます。しかし、どうか私をあなたから決して引き離さないでください。親愛なる神様、私はあなたに自由を捧げましたが、その意味を完全には理解できていません。それについて何か教えていただけませんか？」
救い主：「あなたは、私の中にあってのみ自由なのです！」
私：「はい、主よ、今、わかりました。」
救い主：「愛する娘よ、今、あなたを祝福します。」

私は床にひざまずき、救い主は私に祝福を与えてくださいました。

10時 聖体祭（赤のミサ）。
13時00分 ロザリオと祈りの時間。16時00分から聖
書を読んだ。

17時頃、ヘドヴィッヒが私のところへやって来た。彼女は私に「ある秘密」を打ち明けたが、その内容に私は大きな衝撃を受けた。彼女は、ヴォクト神父が、すべて少年であるミサ奉仕者たちを、後ろから全裸で撮影していたと語った。それらの写真は、聖具室に飾られているほか、ある少年のプライベートなアルバムにも収められているらしい。 その少年の母親はこれを快く思っておらず、愕然としているが、黙っている。
さらに彼女は、ヴォクト神父がバガー湖で、ある祭壇奉仕者の胸を舐め、耳にキスをしているところを目撃されたとも話した。
さらにその母親は、ヴォクト神父が子供たちを時間通りに家に帰さないことについても不満を漏らした。子供たちは神父のもとで長居しすぎているのだ。私の知る限り、神父は周辺一帯の
抱えている。
ヴォクト神父は非常に内気で自信がないことを知っているので、私は彼のために祈り、彼が立派な司祭になれるよう毎日祈っている。
ヘドヴィッヒは、ジータからも同じ話を聞いたと私に話してくれた。
ヘドヴィグが帰った後、私は小さな数珠で「サンクトゥス」を50回唱え、大きな数珠で大天使ミカエルの祈り、マグニフィカト、グロリア・イン・エクセルシス・デオ、主の祈り、アヴェ・マリア、グロリア・パトリ、そして敵のための祈りと悪魔祓いの祈りを唱えました。
その知らせを聞いて悲しくなり、涙を流した。
できればすぐにでも教会に行くのをやめたいと思った。
私はすべてを神の御手に委ねます。これはサタンの仕業である可能性もあります。

21時にヴィーゼンタールへ向かい、マリオンと一緒に日記を書きました。打ち明けるように、H.のヴ

ォクト神父の件をマリオンに話しました。彼女は、
「誰にも話してはいけない」と言いました。

1992年9月28日 - 月曜日

10時、医師室での祈りの集い!

救い主:「わが娘よ、書き留めなさい。ヴォクト牧師は去っていく。」私:「ザンクト・レオン＝ロットからですか? 」

救い主:「わが娘よ、何かがあなたに近づいている! 」 私:「主よ、それをどう理解すればよいのですか? 」

救い主:「私による、あなたの中での働きだ。」

私:「主よ、神よ、私はあなたの御業を受け入れる準備ができています。それに『はい』と答えます。私はあなたをとても愛しています。たとえ気に入らないことがあっても、決してあなたに『いいえ』と言わないよう、どうか恵みをお与えください。これらすべてがあなたから来ていることを、ただ気づかせてください。魂の救いのために、私は何でもしたいのです。」

救い主:「わが愛する娘よ、あなたは常に私の愛を悟るようになる。」私:「主よ、神よ、それはどういうことですか? 」

救い主:「私はあなたを、私が望む場所へと導く。わが娘よ、書き留めなさい。」私:「はい、主よ、神よ。」

救い主:「私があなたに与える苦しみは、非常に真剣に受け止めなければならない。あなたはこの苦しみと共に生きなければならない。たとえあなたがそれを取り除いてほしいと願っても、私はそれを取り除いてはあげない。」

私:「はい、主よ、理解しました。でも、愛は私の中に残りますよね? 」救い主:「愛しい娘よ、その愛は永遠にあなたと共にあります。」

私:「ありがとうございます、主よ、神よ。私を御心のままに扱ってください。私はあなたのものです。主よ、あなたの御心が成されますように。」

救い主:「愛する娘よ、私はあなたを祝福する。」 救い主は私を祝福してくださった。

今日から、ロザリオの祈りは18時頃、聖ミサは18時30分頃になり、私は赤い服を着て両方に参加しました。

20時、祈りの集い。

祈りに来る人がますます増えています。席はすでに手狭なほどです。最後に、ドチャット神父にヴォクト神父について告解しました。告解の際に、どうすればよいか、彼を助けたい、彼について噂が流れていると尋ねました。

ドチャット神父は、ヴォクト神父とこの状況について話し合うべきだとおっしゃいました。

ヴォクト神父と話す前に、まずは救い主と話し合いたいと思います。ドチャット神父が言われたことが正しいと確信しなければならないからです。

もし救い主が同意してくださるなら、ドチャット神父が勧めてくださったことを実行します。祈りの集まりの後、シュミット・ローランド氏が、私の夫と話し合うために私たちの家に残りました。 私は、夫が不浄な霊に襲われているのを感じました。夫は、私の日記をこっそり読んでいたことを打ち明けてきました。それを聞いて、私は愕然としました。私はすぐに夫に、それは罪であり、そんなことはしてはいけないと告げました。それは単なる好奇心ではなく、神への不従順でもあるのです。私はこれらの問題を神の御手に委ねます。

今日からは、日記の扱いにもっと注意を払うつもりです。救い主が私に語ってくださることを隠したいわけではありませんが、書籍として出版される前に、まず司祭に確認してもらう必要があります。ローランドはすでに、ローテンベルクのヨハネス神父の著書をウクライナに持ち込んでいます。これらは、救い主が「

「正しくない」と救い主がおっしゃった本です。私はすでにこのことをヨハネス神父に話しましたが、彼は私の言葉を信じませんでした。ローランドは、ヨハネス神父の言う通りにしています。

1992年9月29日 - 火曜日

10時、医師室にて祈りの集い!

救い主:「私の愛する娘よ、こう書き記せ。ヴォクト神父のところへ行ってはならない。何かが行われる時期は私が決めるからだ。私はすべての人の心を知っている。司祭たちのためにたくさん祈りなさい。今、サタンはとりわけ勢力を増しており、多くの司祭が彼の誘惑に陥っている。ヴォクト神父について語られている一連の出来事については、私に任せておきなさい。」

私:「ロダルベンのことを考えていました!

10月1日に天のしるしが設置される。そこでは尊い御血が崇敬され
る。

救い主：「君は負担が大きすぎる。」
私：「それなら今回はロダルベンには行きません。書くことが山ほどあるんです。」救い主：「そう、書きなさい、
わが娘よ。」
私：「昨日は祈りの集会で話さなかった。今日、なぜ私が話さなかったのかと尋ねる人もいた。」
救い主：「あなたが語るべき時は、私があなたにその言葉を授ける。人々は今、たくさん祈らなければならない。この時間を祈りに活用しなさい。祈りはかつてないほど必要とされている。わが娘よ、昨日、あなたたちはよく祈った。天はあなたたちと共に喜びを分かち合った。これからさらに多くの人々が祈りに加わってくるだろう。わが娘よ、あなたが信者たちと共に祈る姿は、私の心に深く響く。あなたの努力に
。」
私：「愛に満ちた父よ、今、私の心の中に燃えるような熱を感じています。とても素晴らしい気持ちです。」
救い主：「わが娘よ、それは私の愛だ。」
私：「主よ、神よ、あなたの愛に感謝します。」救い主：「娘よ、あなたは多く
のことを耐え忍んでいる。」
私：「『多くのことを耐え忍んでいる』とは、どういう意味ですか？」
救い主：「それは、あなたが多くの苦しみにも耐えられるということだ。」私：「ああ、どうか多
くの魂が救われますように。」
救い主：「ああ、わが娘よ、贖いの苦しみはすでに始まっているのだ。」私：「でも、それがどうい
うことか分かりません。」
救い主：「あなたはすでに、私の愛によってすべてに耐えている。これから授かる聖なる五つの聖痕に備えなさい。」
私：「主よ、神よ、あなたが望まれる時いつでも、私に聖痕を刻んでくださる準備はできています。私を長く渇かせないでください。私はとても喉が渇いています。どうか私の渇きを癒してください。」
救い主：「愛する娘よ、私はお前の渇きを癒やしてやる。その時がやってきたのだ。娘よ、私もお前と共に渇いている！」

救い主は私に祝福を授けてくださいました。

18:00 ロザリオと聖体礼儀（ロート）。

<u>1992年9月30日 - 水曜日</u>

10:00 医師室にて、祈りの集い!
昨日、一日中これほど多くの愛を授けてくださった救い主に感謝します。その愛は今も感じています。心配や問題のないこの時間は、なんて素晴らしいのでしょう。私は神と共に、真に自由でありたいと願っています。
偉大なる神よ、私はあなたを賛美し、称え、私のもとに訪れたあなたの御国に感謝します。
このような状況では、すべてを愛することができます。外のこのどんよりとした天気さえも、私にとっては美しいものでした。愛には憎しみなどなく、そこには醜いものは何一つありません。ああ、私のイエス様、あなたを愛することはなんて素晴らしいことでしょう。
「主よ、神よ、私があなたからこれほど多くの愛を受け取るのは、一体どのようなしるしなのでしょうか？」救い主：「あなたが受け取っているこの愛は、これからあなたが受ける苦難の前兆です。まず、愛に満ちた神を知らなければなりません。そうして初めて、苦しむ神も知ることになるでしょう。その両方は、良いことなのです。」
私：「書くのをためらっていました。」
救い主：「書きなさい。罪は大きく重く、すでに地の限界を超えている。多くの魂が、この世の罪のために贖罪することになるだろう。だから、私の娘よ、あなたは一人ではない。すべての魂には、歩むべき十字架の道がある。あなたのような十字架の道を歩む者は、ごくわずかだ。
わが娘よ、あなたはこの十字架の道のために特別な恵みを受けた。それはあなたの功績ではなく、私の御心である。そして、私が望むことは、私が望む者において成し遂げる。あなたがこれまで私のためにしてくれたことすべてを、私は深く感謝しており、十字架の道の終わりに報いる。最後まで耐え抜けば、あなたの報いは大きなものとなる。」
私：「もし私が最後まで耐え抜かなかったら？」
救い主：「あなたは最後まで耐え抜くでしょう。もはや誰も私たちを引き離すことはできません。」

私：「ああ、私の愛しい方、私はあなたをとても愛しています。あなたと一緒にいること以上に美しいことがあるでしょうか?」救い主：「皆、そう言うべきだ。あなたは、私が選んだ贖いの魂なのだ。」

救い主は私に祝福を与えてくださった。

正午、私は礼拝堂で心から祈り、あまりにも多くの魂が失われていくことに涙を流した。救い主：「あなたの心をすべて私に捧げなさい。」

私：「私の主、私の神よ、私の心をすべてあなたに捧げます。」救い主：「あなたは私の心にかなう。」

私：「愛する神様、あなたは私を見ておられますが、私はあなたを見ることができません。それでも、私はあなたを愛しているので、あなたに喜ばれています。」

救い主：「わが娘よ、あなたが私と共に歩むその道は、愛を知らない不信仰者たちにとっては犠牲となるだろう。」

私：「主よ、どうか不信仰な者たちに、あなたを愛する恵みをお与えください。」

救い主：「彼らがそれを受け入れようとするならね。彼らはあなたのように、私に心を捧げてはくれないのだから。」私：「私と一緒に働いているヴェロニカのために、恵みをお与えください。」

救い主：「彼女にも、私に心を捧げるように伝えてくれ。」

私：「はい、主よ。彼女にそう伝えます。ありがとうございます、主よ、愛に満ちた父よ。」

18時 ロザリオと聖体祭（赤）。フェルディナント神父が聖体祭を執り行いました。

1992年10月1日 - 木曜日

10時45分、医師室にて祈りの集い!

救い主：「書き記せ、わが娘よ。五つの聖痕については、厳重な沈黙を守ることを望む。」

私：「親愛なる神様、もうたくさんの人が知っていますよ。」

救い主：「しかし、彼らはあなたがいつその傷跡を受けることになるのかは知らないのだ。」私：「神様、私もまだ知らないのです。」

救い主：「だが、お前はそれを知るようになる。」

私：「そのことについては黙っておきます。どうか、沈黙を守る恵みをお与えください。私は、あなたの望む通りにすべてを行いたいのです。」

救い主：「今夜、あなたに聖痕が刻まれる。」私：「それなら、明日は仕事に行かなければならないのですか?」

救い主：「いいえ。」

私：「それがあなたからのものだと、どうやって分かるのでしょうか?」救い主：「それが現れた時、あなたはそれを知るだろう。」

私：「今夜それが起こるとき、あなたからのしるしをいただくのでしょうか? 実のところ、あなたはすでに私に一つのしるしを与えてくださっています。今私が感じている燃えるような愛と、今私が抱いている心地よい安らぎと平安です。もしあなたが望まれるなら、今夜、聖痕が刻まれることに同意します。 どうか私を渇かせないでください。まるで内側から燃えているような感覚があります。それがあなたの愛だと気づきました。あなたは、私があなたを愛するように、私からも愛されたいと願っておられるのですね。主よ、あなたの御心通りにしてください。」

救い主：「愛する娘よ、あなたが書いた通りで、私は喜んでいる。私は、いつ、どのようにでも、それを変えることができる。娘よ、すべてを私に委ねなさい。」

午後3時

救い主：「わが娘よ、書き留めなさい。今夜、私と共に耐えなければならないことを、魂の救いのために天の父に捧げなさい。わが娘よ、一語一語書き留めなさい。

今夜、あなたが味わうことになる痛みは、激しいものとなるだろう。それを耐え忍ばなければならない。」

私：「主よ、まだ私のそばにいらっしゃいますか?」

救い主：「はい、私はまだあなたと共にいます。あなたを愛しています。」

私：「イエス様、生ける神の子よ、他に知っておくべきことはありますか?」救い主：「『苦しむ』とは『愛すること』を意味するのだ。」

私：「主よ、私にそれができるでしょうか？」救い主：「
私と共にあるなら、できる。」
私：「どうか、私が愛することができるように、たくさんの恵みをお与えください。」

救い主：「あなたが私と共にあるなら、愛に欠けることはない。わが娘よ、あなたが苦しむことができるように、私はあなたにたっぷりの愛を与える。」

救い主は私を祝福し、こう言われました。「平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」

18:00 ロザリオと聖体礼儀（赤）。

19年10月2日（金） -「イエスの御心」

10:00 医師室 祈りの集い I

私：「主よ、神よ。今朝目が覚めたとき、私はすぐに『私には何も起きていない』と思いました。一方で嬉しかったのですが、他方で『昨晩、私にそう囁いたのは、あの不浄な霊ではなかったのか』とも思いました。しかし、愛があるところには不浄な霊は存在し得ない、と再び考え直しました。私と共にいるのは、神か、あるいは不浄な霊かのどちらかです。なぜなら、神は心を他者と分かち合うことはなさらないからです。 神は、その心をただご自身だけのために持たれたいのです。こうして私は一つの決断に至りました。それが神の御心であり、その通りになったのです。」

私は今、救い主と一つになった。温もりと安らぎを感じ、救い主が私のそばにいてくださることを実
感した。

救い主：「愛する娘よ、書き留めておきなさい。私は傷跡を現す時を別の時期へと延期した。それは私の望みだったのだ。このようになったからといって心配する必要はない。私は自分の望むようにできるのだ。あなたは準備ができていたが、まだその時が来ていなかった。これもまた試練の一つだったのだ。諦めないで、すべては適切な時に訪れる。」
私：「主よ、何も起こらなかったので、私はこれが不浄な霊だったのだとも思うところでした。」
救い主：「あなたたちは皆、そういうことに対して早とちりしすぎる。自分たちの目に見えることだけを信じ、それ以外のことは考えようともしない。」
私：「でも、その『他のこと』とは何ですか？」
救い主：「悪魔が企んでいることなど、あなたたちには見抜けないのだ。わが娘よ、私はすべてを見通している。それぞれの心が、私がその心と向き合えるまでにどれほど成熟しているか、私は知っているのだ。」
私：「愛するイエス様、それはつまり、私がこの苦しみを受けるに値しない、あるいはその準備ができていなかったということですか？」
救い主：「それはあなた次第ではないのだ、わが娘よ。すべては私の御心による。心配するな、あなたはきっと聖痕を授かるだろう。」
私：「今日が聖心金曜日ですから、どうかあなたの心の中にいさせてくださいと祈りました。愛の泉、燃え盛る愛の炉の中にいたいのです。」
救い主：「わが娘よ、今やあなたの心は私の心である。あなたは私の中にいる。私を愛しなさい、わが娘よ。」私：「もちろん、主よ、私はあなたを愛しています。私の中にも愛の炎を感じています。この恵みに感謝します。」
救い主：「平安のうちに去りなさい、わが娘よ。」心の中で、今日

は祝福はないのかと思いました。救い主：「いいえ、私はあなたを

祝福します、わが娘よ。」そして、救い主は私を祝福してください

ました。

18時、ロートでのロザリオと聖ミサ。
フォクト神父とフェルディナント神父が共同でミサを執り行いました。

1992年10月3日 - 土曜日

8時〜10時、自宅で祈りの集い!
救い主：「書きなさい、わが娘よ。あなたが書くことはすべて印刷される。あなたが書くことはすべて、私の業である。あなた自身では何もできない。疑ってはならない、わが娘よ。そうすることは、私を侮辱することになる。」
私：「主よ、神よ、お赦しください。この貧しい罪人である私に、恵みと憐れみをお与えください。まるで私が嘘つきであるかのように、皆に見捨てられたような気分になります。
そして、まるで道を踏み外し、悪い人間になってしまったかのような思いが頭をよぎりました。毎日あなたと一つになり、毎週告解を受けているにもかかわらず。

誰もが私より優れていると感じてしまいました。しかし、やがて私は再びあなたのもとへ立ち返りました。あなたの愛はより強く、それなしでは私は生きられないからです。そして、その愛をますます深く愛したいと切望しています。私はこの愛を強く渇望しています。そして、この愛を何度も何度も求めています。
この愛は、まるで中毒のようであり、アヘンのようです。
薬も、この世の富も、これを代用することはできません。
しばしば、胸の奥が燃えるような感覚に襲われます。あなたをこれほどまでに愛しているのを感じ、世俗的なものはすべて私から遠ざかっていくのです。
そう思うと、なぜ私は今すぐ天国に行けないのだろう、と自問します。
あなたが愛そのものであると悟った今、他の人々にもこのことを悟ってほしいと心から願っています。彼らが迷い去らないよう、私は彼らのために苦しみを受ける覚悟もあります。
わが主、わが神よ、私の意志ではなく、あなたの御心が成されますように。私をあなたの御心
のままに扱ってください。
どうか、私をあなたの愛から引き離さないでください。
救い主：「わが愛する娘よ。私へのあなたの愛は大きい。私はそれを高く評価している。私へのあなたの愛は揺るぎない。人々が何を言おうと、心配する必要はない。彼らが語るすべてのことは、私の裁きの前で責任を問われることになる。心から出る言葉の一つひとつは、彼らが蒔いた言葉である。そして、彼らが蒔いたものを、彼らは刈り取ることになる。
だから、わが娘よ、あなたが豊かな実りを得られるよう心がけてください。最後には、何が私からのもので、何が不浄な霊からのものであるかが明らかになるのです。
愛する娘よ、私はありのままのあなたを愛している。あなたがまず私と、そしてあなたの母に祈ってくれたことを嬉しく思った。あなたが彼女に伝えたことはすべて、私が受け取った。彼女はあなたをとても愛している。彼女はあなたを一人にはしない。彼女をもっと信頼しなさい。」
私：「ありがとう、私のイエス様。これからはもっと母に祈り、もっと母を信頼します。私もあなたと同じように母を愛したいです。私があなたと同じように母を愛せるよう、恵みをお与えください。だって、母は私の母であり、女王様ですから。」
救い主：「わが娘よ、あなたは誠実だ。私はあなたのその姿に大変喜んでいる。あなたが私と同じように母を愛せるよう、恵みを授けてあげよう。愛する娘よ、今、あなたを祝福する。」

救い主は今、私に祝福を与えてくださいました。
午前10時15分：プランクシュタット出身の若い男性から電話がありました。彼は月曜日に私の祈りの会に参加していました。彼は、夜間に悪魔からの誘惑にさらされたと私に話してくれました。そして、ある願いを打ち明けてくれました！彼はカトリック教徒になりたいと望んでいるのです。現在はまだプロテスタントです。私は彼に良い助言をしました。シュティフトノイブルクのスウィットベルト神父のもとへ行き、告解を受けるようにと伝えました。

16時30分から19時50分まで、ロートの教会で祈りを捧げた。
ヴォクト神父に告解をしました。神父は、私のやり方は正しいが、助けることはできないとおっしゃいました。赦しをいただき感謝するとともに、神父が助けてくださらないことも理解しています。

その後、彼のためにロザリオをすべて祈った。

21時15分、レーゲンスブルクのゲブハルト・ハイダー神父から電話がありました。30分以上、彼と話をしました。とても嬉しかったです。神様に、彼が電話をくださったことを感謝します。8日後の今日、18時30分頃にレーゲンスブルクで彼と会う約束をしました。 最後に、神父様は私と私の家族に祝福を与えてくださいました。心が大きな喜びで満たされたので、すぐに神父様のために祈りました。

1992年10月4日 - 日曜日

7時30分～9時00分
祈りの交わり！

まず、聖母マリア像の前で祈りを捧げました。その後、再び台所で交わりを持ち、そこで私は救い主から次のようなメッセージを受け取りました：
救い主：「わが娘よ、私はあなたに書き記してほしいと願っている。私へのあなたの愛を受け入れた。それは単なるお世辞のような愛ではない。」
私：「それを書くのですか？」

救い主：「そう、書きなさい。今日、あなたが祈った様子は私の心に響いた。その調子で続けてほしい。あなたがゲブハルト神父のもとへ行くことを、私は喜んでいる。それも私の願いだ。私はまた、彼を通してあなたに語りかけるだろう。彼を信頼しなさい。わが娘よ、あなたがこの苦しみを受け入れたことを、私はとりわけ喜んでいる。試練は終わりに近づいている。」
私：「親愛なる神様、それについてもう少し詳しく教えてください。」

救い主：「娘よ、あなたはこれから受ける苦しみについて試されているのだ。娘よ、これまで通り私を愛し続けてほしい。私はあなたに、さらに多くの愛を注ぐつもりだ。あなたが求めるものが多ければ多いほど、私はあなたにさらに多くを与えるだろう。」
私：「親愛なる神様、もう一つお尋ねしたいことがあります。数ヶ月前から、肩と左腕に痛みがあります。軟膏も塩水浴も効果がありません。この苦しみは神様からのものでしょうか、それとも病院で医師に治療してもらってもいいのでしょうか？」
救い主：「病院に行っても、誰もあなたを助けることはできない。この苦しみは私から与えられたものだ。それは、これからあなたが経験することになる苦しみの前兆なのだ。」
救い主：「娘よ、あなたは私にあなたの健康を捧げてくれた。」
私：「あなたの御心通りにいたします。罪人の回心と魂の救いのために、この苦しみをあなたに捧げます。」
救い主：「わが娘よ、これから訪れる嵐は大きな被害をもたらすだろう。この事柄のために祈りなさい。多くの新たな戦争が起こるだろう。人々は冷めきってしまった。彼らは父を認識しなかった。彼らは世俗的なものを優先したが、世俗的なものは彼らを救うことはできない。自然は罪人たちに対して反撃している。 わが娘よ、まもなく発生する大疫病は、その始まりにある。この疫病は国々を襲うだろう。この病に効く薬はない。それは富める者も貧しい者も、悪人も善人も等しく奪い去る。
それは人々に突然襲いかかる。誰もそこから身を隠すことも
、免れることもできません。それは私が望む場所にやって来ます。それは地上の多くの国々を飲み込むでしょう。私：「この病
には名前があるのですか？」
救い主：「それは新しい病気だ。まだ名前はないが、いずれ名付けられるだろう。わが娘よ、あなたはたくさん祈らなければならない。」
私：「これを私の祈りのグループに読み上げてもいいですか？」
救い主：「その本は一刻も早く書かなければならない。そうすれば、彼ら全員が読むことができる。今、君が彼らに何かを言っても、彼らは信じないだろう。彼らは大多数の人々が口にする言葉しか耳を貸さない。自分の目で確かめて初めて信じるのだ。彼らの信仰は表面的なものであり、
根がないのだ。」
私：「神様、もうこれ以上書くことができません。どうかお許しください。」救い主は私に祝福を与えてくだ
さった。

10時、ロートでの聖ミサ。教会には参列者が少なかった
13時00分、ロザリオと祈りの時間。

1992年10月5日 - 月曜日

9時、医師室にて祈りの集い!

今朝早くから激しい頭痛に悩まされている。私は救い主に、「この痛みを、罪人の回心と魂の救いのために捧げます」と申し上げた。さらに、「この痛みを取り除いてくださる必要はありません」とも申し上げた。
その後、私は救い主と一つになりました。すると、心に温もりを感じました。それは心地よい感覚です。主が私と共にいてくだ
さるのを感じます。

救い主：「そう、わが娘よ、私はあなたと共にいる。魂たちのために、多くの贖罪が必要だ。わが娘よ、私はあなたに求めているのは……」
私：「主よ、神よ、愛するイエス様。あなたが私に何を求めておられるのかは分かりませんが、必要なものはすべてお与えします。」
救い主：「わが娘よ、私はお前の視力を必要としている。」私：「それはどうい
う意味ですか？」
救い主：「しばらくの間、あなたは目が見えなくなるだろう。」私：「愛
する神様、それじゃあ、私は盲目になってしまうのですか？」救い主：「
霊的な盲目ではない。」
私：「ああ、主よ、それは辛いことでしょう。」救い主：「私はあなたと共
にいる。」
私：「はい、主よ。私の視力を差し上げても結構です。それはいつ起こりますか？ 聖痕が刻まれる前でしょうか、それとも後でしょうか。教えていただけますか？」
救い主：「わが娘よ、それは私が望む時に起こるのだ。」

私：「はい、主よ、神様。あなたが望まれる時にそうなるように。」私は、自分を養ってくれる人が誰もいないと思っていたのです。

救い主：「あなたには誰かが現れるでしょう。」
私：「この失明は長く続くのでしょうか？」救い主：「しばらくの間だ。」
私：「でも、あなたは私に多くのことを求めておられますね。」救い主：「それは、あなたの成長のためだ。」
私：「親愛なる神様、あなたが私と一緒にいてくださるなら、私は心配する必要はありません。あなたが私の面倒を見てくださるのですから。」
救い主：「その通りだ。」
私：「はい、主よ、承知いたしました。」救い主：「わが娘よ、私はあなたを祝福する。」

救い主は私に祝福を与えてくださった。

11時45分――親愛なる神様、もし私が目が見えなくなっても、その心配をどうか取り除いてください。それがどんなことになるのか、考えたくありません。

救い主：「愛する娘よ、その心配は私が引き受けてあげよう。」私：「主よ、神様、ありがとうございます。」

18時00分　ロザリオと聖体礼儀（赤）。
20時00分　祈りの会!

1992年10月6日 - 火曜日

9時00分　医師室にて、祈りの集い!
救い主：「書きなさい、愛する娘よ。私はあなたに書いてほしいのだ。あなたが私に語りかけてくれたことを嬉しく思う。今、あなたの心は愛で満たされている。娘よ、この愛をあなたから奪える者は誰もいない。ただし、あなたがそれに『はい』と承諾した場合を除いては。注意しなさい。」
私：「愛に満ちた父よ、愛に満ちた聖霊よ、愛に満ちたイエス様。どうか恵みをお与えください。あなたが私に与えてくださった愛を、どうか守ってください。私が無益な会話を交わすことのないよう、お守りください。あなたが望まれる時に、私が語り、また沈黙できるようお導きください。私の心が抵抗する場所でも、愛することができるようにしてください。
あなたの心――それは愛の燃え盛る炎のようなもの――をもって、すべての人を愛させてください。他人を裁く前に、まず自分の過ちを探させてください。」
救い主：「わが娘よ、あなたは私に属する、率直な心から語っている。愛する娘よ、あなたに何かが訪れようとしている。」
私：「主よ、神よ、私はそのことで悲しむことになるのでしょうか？ でも、それが何なのか分かりません。どうか教えてください。」
それから私は祈りました。「聖霊よ、どうか来てください。あなたが深く愛しておられる花嫁、マリアの汚れなき心を通して来てください。そして、私が何を書くべきか教えてください。あなたが私に示してくださることを、私は書く用意ができています。悲しむことになるかどうかに関わらず、私はあなたの望まれることを行います。」

それでも、まだ何も聞こえませんでした。

私：「お語りください、主よ、神よ。あなたのしもべは聞いております。」
救い主：「あなたには多くの悲しみが降りかかる。」
私：「愛する神様、‘多く’とはどういう意味ですか？」
救い主：「わが娘よ、あなたはすべてに耐えなければならない。あなたの家族のために祈りなさい。」
私：「主よ、神よ、彼ら全員を救ってください。私は彼らを愛しています。どうか、誰一人として失われないようにしてください。」救い主：「わが娘よ、彼らは悔い改めようとはしない。」
私：「主よ、私は彼らのために苦しむ覚悟があります。ただ、それがあなたの御心であるならば、ですが。あなたは彼らの心をご存知ですが、私には分からないのですから。」

救い主：「愛する娘よ、お前の言葉は私の心に響いた。私の望む通りに物事は進むだろう。愛する娘よ、もう一つ書き留めておきなさい。セルビアでの戦争はまもなく始まる。敵の勢力が弱まるよう祈りなさい。」

私：「その願いのために祈ります。」

私：「主よ、神よ。昨日、祈りの集いであなたの御前にひざまずき、あなたに祈っていたとき、私の心には絶え間ない炎が燃えていました。それはかなり強いものでした。まるで内側から燃えているかのように感じました。」
救い主：「わが娘よ、それは私だったのだ。」
私：「親愛なる神様、これには私にとって何か意味があるのでしょうか？」
救い主：「これからあなたに降りかかる悲しみに耐えられるようにするためだ。私は、善行を行った子供たちに、豊かな報いを与える。」

救い主は私に祝福を与えてくださいました。

18時 ロートでのロザリオと聖ミサ。

1992年10月7日 - 水曜日

8時15分、医師室にて祈りの集い
！
救い主：「あなたは私の宝、私の娘だ。」
私：「主よ、私は以前にも同じことを書きました。」
救い主：「書きなさい。あなたの悩みは私の悩みなのだ、わが娘よ。」私：「私の魂は、あなたが『宝石』と呼べるほど純粋なのでしょうか？」救い主：「そう、わが娘よ。」
私：「私の心の中に、とても美しい感覚が湧き上がっています。魂の清らかさこそが、神の御国なのだと思います。」救い主：「清らかな魂があれば、私は好きなようにすることができる。」
救い主：「わが娘よ、書き留めなさい。盲目とはこういうことなのだ。あなたは心で見るようになる。他の人々が目で見るものよりも、もっと多くのものが見えるようになるのだ。
目の光は世俗的なものだが、心の光は天的なものだ。この光を与えられるのは、わたしだけである。それゆえ、医師は誰もあなたを信じないだろう。あなたが見るものはすべて、語らなければならない。
ある司祭がそれを書き留めるだろう。話すのはあなたではなく、私があなたのために話すのだ。わが娘よ、心に宿る光は、目に見える光よりも価値があるということを確信しなさい。」
私：「主よ、今、よく理解できました。そうおっしゃってくださり、ありがとうございます。」救い主：「わが娘よ、君にもう一つお願いがある。」
私：「はい、主よ。もし私が差し上げられるものなら、どうぞお受け取りください。」
救い主：「あなたの手が必要だ。あなたの手を使って、私は魂たちを癒やすのだ。」私：「ああ、主よ、あなたは私に一体何をなさろうとしているのですか。そんなことは想像もできません。
でも、あなたが私の中にいてくださるなら、そんなことも起こり得ると信じます。主よ、私の意志ではなく、あなたの意志が成されますように。魂の救いに関わることであれば、私の手はすでにあなたのものです。」
救い主：「わが娘よ、それが私があなたにまだ求めていたことだった。癒しは、私が望む時に起こる。人々が望む時ではない。」

主は私を祝福し、こう言われました：
「平安のうちに去りなさい、わが娘よ。そして、わたしを信頼しなさい。」

19:00 ロクス礼拝堂にてロザリオと聖体礼儀。

1992年10月8日 - 木曜日

アーカイブ 10時15分 祈りの
集い!
救い主：「書きなさい、わが娘よ。今は静寂のときだ。」
私：「イエス様、生ける神の子、私の花婿よ、何を書けばよいのでしょうか？」救い主：「娘よ、一語一語書き記しなさい。」
私：「はい、主よ。」
救い主：「あなたが受ける聖痕は、予期せぬ形で訪れるだろう。」私：「では、それがいつ来るのか、その日や時刻は分からないということですか？」救い主：「わが娘よ、それは私が決めることだ。」
私：「それなら、まだレーゲンスブルクへ行くことはできますか？」
救い主：「はい、まだ行けます。わが娘よ、今、サタンは非常に強くなっています。あなたが強くあり続ければ、彼はあなたに何一つ手

出しはできません。彼は、あなたが書かないようにあらゆる手段を講じてくるでしょう。わが娘よ、努力して書き続けてください。彼はまもなく打ち負かされるでしょう。私の子供たちのすべてが彼に従うわけではありません。

この少数のわが子たちが、彼を打ち負かすのだ。」私：「まだ何か書き
留めるべきでしょうか？」
救い主：「ええ、もう少し書き留めておきなさい。当局はあなたと話し合う用意ができている。私の声によく耳を傾けなさい。娘よ、あなたが書いてきたことに忠実であり続けなさい。私はあなたと共にいる。私は偉い者たちを恥じ入らせるだろう。偉い者たちはふるいにかけられる。」
私：「『偉い者たち』とは誰のことですか？」
救い主：「政治家や司教たちだ。彼らこそが、この世の混乱の責任者である。書き記せ、わが娘よ。私はあなたに、ヴォクト神父のもとへ行くことを命じる。彼に、ミサの前に信者たちと共にロザリオを唱えるよう伝えなさい。彼にそう伝えなさい。私が
そう命じたのだ。」
私：「もし彼が『できない』と言ったら？」救い主：「それは私に
任せておきなさい。」
私：「神様、いつ彼のもとへ行けばよろしいでしょうか？」救い主：「今日中に彼の
もとへ行きなさい。」
私：「ロザリオを唱えるようにと言う以外に、何か伝えるべきことはありますか？」　答えは返ってきませんでした。
私：「はい、主よ、神様。今日中に彼のところへ行き、あなたが私に言われたことを伝えます。」
ロートへ向かう道中、私はその司祭のためにロザリオを祈りました。
16時10分、ロートの教会で少し祈った。
16時15分、フォクト神父のもとへ着いた。
私は、救い主が彼に求めていることを伝えました。
彼はまた同じことを言いました。「聖体奉仕者たちのこと、どうすればいいのでしょうか？」私は彼に言いました。「神のもとでは、すべてが可能なのです。」
さらに、「もし私があなたの立場なら、救い主が求めておられることを実行するでしょう」と付け加えました。彼は内心、落ち着かない様子でした。納得していなかったのです。そのことは彼の表情からも見て取れました。私は彼に祝福を求め、その後その場を後にしました。

18時、ロートでのロザリオと聖ミサ。

ヴォクト神父はミサの終わりに、至聖体の前でロザリオの一節を唱えました。」

1992年10月9日 - 金曜日、医師
室にて祈りの集い！
救い主：「わが娘よ、注意しなさい。あなたが書いたものはすべて、どの司教にも読ませてはならない。彼らには話してもよいが、その文書は大切に保管しなさい。その本が印刷されたら、彼らはそれを読むことができる。書きなさい、わが娘よ。ゲブハルト・ハイダー神父が、私が彼に授ける言葉をあなたに伝えるだろう。彼が言うことを行いなさい。それが私の御心である。
私：「はい、主よ、神よ、そういたします。親愛なる神様、ヴォクト神父に言ったことは、正しかったのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、その始まりは良い。」
私：「救い主様、ゲバルト・ハイダー神父に伝えるべきことは他にありませんか？」と尋ねました。
救い主：「もちろん！彼にこう伝えていい。『彼がこれまで行ってきたことはすべて、私の御心であった』と。さらにこうも伝えてほしい。『彼の働きは私に喜ばれている。彼がこれまで成し遂げてきた働きは、立派なものだ』と。」
私：「ありがとうございます、主よ、神様。彼にすべてお伝えします。」
私：「親愛なる神様、私の心の中にとても熱いものが感じられます。これは私の気のせいでしょうか？」
救い主：「いいえ、わが娘よ、それは私の恵みだ。それはあなたへの私の贈り物なのだ。」
私：「親愛なる神様、もし私にそのような贈り物をくださるのなら、きっと何かが起こるに違いありません。主よ、私は司祭たちのために、この愛をさらに多く受け取りたいのです。」
救い主：「わが娘よ、あなたの言ったことは私の心にかなう。
司祭たちのために、たくさんの愛を願いなさい。わが娘よ、私はあなたを愛している。それを書き留めておきなさい。」

私：愛するイエス様、今、私はあなたをとても愛しています。いつも以上に、その愛が私の心の中に満ちています。主よ、神様、私にこれほど多くの恵みを与えてくださり、ありがとうございます。救い主は私を祝福し、さらにこう言われました。「平安のうちに帰りなさい、私の愛する娘よ。」
18時、ロートでのロザリオと聖ミサ。

1992年10月10日　土曜日

午前7時、ロクス礼拝堂にて聖ミサ
11時30分から12時まで、自宅で祈りの集い!
救い主：「よく聞きなさい、わが娘よ。私は、一定期間、あなたに癒しの恵みを与える。」私：「いいえ、主よ。何か聞き間違えたのでしょうか。もう一度おっしゃってください。」
救い主は同じ言葉を二度繰り返された。私には理解できません。私は取るに足らない者ですから、そんなことは受け入れられません。」
救い主：「わたしが、あなたの中で癒やすのだ。」
私：「主よ、神よ、それはどのような癒やしになるのでしょうか？」
救い主：「その癒やしは私に任せておきなさい。あなたは私の道具なのだ、娘よ。書き記しなさい、娘よ。あなたが人々と接するその在り方は、私に大変気に入っている。」
私：「親愛なる神様、私を『厳しい』と言う人もいます。」
救い主：「わが娘よ、他人の言うことを聞くな。私は、あなたが今のままのままでいてほしいのだ。」私：救い主は私に祝福を与えてくださった。

1992年10月11日（日）

8時 ドナウ川沿いの駐車場 — レーゲンスブルク、キャンピングカー内「サルヴェ・レジーナ」。祈りの集い!
救い主：「書きなさい、わが娘よ。私はあなたに書いてほしいのだ。」
私：「救い主が今、私に何を伝えようとしているのか分かりません。御言葉を待っています。御言葉はすぐには来ません。しばらく静寂の中で過ごしました。」
救い主：「ゲブハルト・ハイダー神父は、今日もまだあなたと一緒にいる。それから彼は私のところへ来る。」私：「それじゃあ、私が彼と一緒にいるのはこれが最後になるの？」
救い主：「そうだ。」
私：「それは私にとってとても辛いことです。私は泣きました。主よ、神様、もう私には司祭がいなくなってしまいます。」
救い主：「わが娘よ、ロートに一人の者がやって来るだろう。」

1992年10月4日 - 日曜日

7時30分～9時
祈りの集い!

まず、聖母マリア像の前で祈りを捧げました。
その後、再び台所で交わりを持ち、そこで私は救い主からのメッセージを受け取りました：救い主：「わが娘よ、私はあなたに書き記してほしいと願っている。私へのあなたの愛を受け入れた。それは単なるお世辞のような愛ではない。」
私：「それを書くのですか？」
救い主：「そう、書きなさい。今日、あなたが祈った様子が気に入ったよ。その調子で続けて。ゲブハルト神父のもとへ行くことを嬉しく思う。それも私の願いだ。また彼を通してあなたに語りかけるつもりだ。彼を信頼しなさい。わが娘よ、あなたがこの苦しみを受け入れたことを、私はとりわけ嬉しく思う。試練は終わりに近づいている。」
私：「親愛なる神様、それについてもう少し詳しく教えてください。」
救い主：「娘よ、あなたはこれから受ける苦しみについて試されているのだ。娘よ、これまで通り私を愛し続けてほしい。私はあなたに、さらに多くの愛を注ぐつもりだ。あなたが求めるものが多ければ多いほど、私はあなたにさらに多くを与えるだろう。」

私：「親愛なる神様、もう一つお尋ねしたいことがあります。数ヶ月前から、肩と左腕に痛みがあります。軟膏も塩水浴も効果がありません。この苦しみは神様からのものでしょうか、それとも病院で医師に治療してもらってもいいのでしょうか？」
救い主：「病院に行っても、誰もあなたを助けることはできない。この苦しみは私から与えられたものだ。それは、これからあなたが経験することになる苦しみの前兆なのだ。」
救い主：「娘よ、あなたは私にあなたの健康を捧げてくれた。」
私：「あなたの御心通りにいたします。罪人の回心と魂の救いのために、この苦しみをあなたに捧げます。」
救い主：「わが娘よ、これから訪れる嵐は大きな被害をもたらすだろう。この事柄のために祈りなさい。多くの新たな戦争が起こるだろう。人々は冷めきってしまった。彼らは父を認識しなかった。彼らは世俗的なものを優先したが、世俗的なものは彼らを救うことはできない。自然は罪人たちに対して反撃している。 わが娘よ、まもなく発生する大疫病は、その始まりにある。この疫病は国々を襲うだろう。この病に効く薬はない。それは富める者も貧しい者も、悪人も善人も等しく奪い去る。
それは人々に突然襲いかかる。誰もそこから身を隠すことも
、免れることもできません。それは私が望む場所にやって来ます。それは地上の多くの国々を飲み込むでしょう。私：「この病
には名前があるのですか？」
救い主：「それは新しい病気だ。まだ名前はないが、いずれ名付けられるだろう。わが娘よ、あなたはたくさん祈らなければならない。」
私：「これを私の祈りのグループに読み上げてもいいですか？」
救い主：「その本は一刻も早く書き上げられなければならない。そうすれば、皆が読むことができる。今、あなたが彼らに何かを言っても、彼らは信じないだろう。彼らは大多数の人々が口にする言葉しか耳を貸さない。自分の目で確かめて初めて信じるのだ。彼らの信仰は表面的なものであり、
根がない。」
私：「親愛なる神様、もうこれ以上書くことができません。どうかお許しください。」 私：救い主は私に

祝福を与えてくださった。

10時、ロートでの聖ミサ。教会には参列者が少なかった
13時00分、ロザリオと祈りの時間。

1992年10月5日 - 月曜日

9時、医師室にて祈りの集い!

今朝早くから激しい頭痛に悩まされている。私は救い主に、「この痛みを、罪人の回心と魂の救いのために捧げます」と告げた。さらに、「この痛みを取り除いてくださる必要はありません」とも伝えた。
その後、私は救い主と一つになりました。すると、心に温もりを感じました。それは心地よい感覚です。主が私と共にいてくだ
さるのを感じます。

救い主：「そう、わが娘よ、私はあなたと共にいる。魂たちのために、多くの贖罪が必要だ。わが娘よ、私はあなたに求めているのは……」
私：「主よ、神よ、愛するイエス様。あなたが私に何を求めておられるのかは分かりませんが、必要なものはすべてお与えします。」
救い主：「わが娘よ、私はお前の視力を必要としている。」私：「それはどうい
う意味ですか？」
救い主：「しばらくの間、あなたは目が見えなくなるだろう。」私：「愛
する神様、それじゃあ、私は盲目になってしまうのですか？」救い主：「
霊的な盲目ではない。」
私：「ああ、主よ、それは辛いことでしょう。」救い主：「私はあなたと共
にいる。」
私：「はい、主よ。私の視力を差し上げます。それはいつ起こりますか？聖痕が刻まれる前でしょうか、それとも後でしょうか。教えていただけますか？」
救い主：「わが娘よ、それは私が望む時に起こるのだ。」私：「はい、主よ、神様。あなた
が望む時に起こってください。」

私には世話をしてくれる人が誰もいないのだと思っていました。

救い主：「あなたには誰かが現れるでしょう。」
私：「この失明は長く続くのでしょうか？」 救い主：「しばらく
の間だ。」
私：「でも、あなたは私に多くのことを求めておられます
ね。」救い主：「それは、あなたの成長のためだ。」
私：「親愛なる神様、あなたが私と一緒にいてくださるなら、私は心配する必要はありません。あなたが私の面倒を見てくださ
るのですから。」
救い主：「その通りだ。」
私：「はい、主よ、承知いたしました。」救い主：「わが娘よ、私
はあなたを祝福する。」

私：救い主が私に祝福を与えてくださった……

11時45分 — 親愛なる神様、もし私が目が見えなくなったら、その心配をどうか取り除いてください。それがどんなことになるのか、考えたくありません。

救い主：「愛する娘よ、その心配は私が引き受けてあげよう。」私：「主よ、神様、
ありがとうございます。」

18:00 ロザリオと聖体礼儀（赤）。
20時00分　祈りの会!

1992年10月6日 - 火曜日

9時00分 医師室にて、祈りの集い
!
救い主：「書きなさい、愛する娘よ。私はあなたに書いてほしいのだ。あなたが私に語りかけてくれたことを嬉しく思う。今、あなたの心は愛で満たされている。娘よ、この愛をあなたから奪える者は誰もいない。ただし、あなたがそれに『はい』と承諾した場合を除いては。注意しなさい。」
私：「愛に満ちた父よ、愛に満ちた聖霊よ、愛に満ちたイエス様。どうか恵みをお与えください。あなたが私に与えてくださった愛を、どうか守ってください。私が無益な会話を交わすことのないよう、お守りください。あなたが望まれる時に、私が語り、また沈黙できるようお導きください。私の心が抵抗する場所でも、愛することができるようお導きください。
あなたの心——それは愛の燃え盛る炎のようなもの——をもって、すべての人を愛させてください。他人を裁く前に、まず自分の過ちを探させてください。」
救い主：「わが娘よ、あなたは私に属する、率直な心から語っている。愛する娘よ、あなたに何かが訪れようとしている。」
私：「主よ、神よ、私はそのことで悲しむことになるのでしょうか？ でも、それが何なのか分かりません。どうか教えてください。」」
それから私は祈りました。「聖霊よ、どうか来てください。あなたが深く愛しておられる花嫁、マリアの汚れなき心を通して来てください。そして、私が何を書くべきか教えてください。あなたが私に示してくださることを、私は書く用意ができています。悲しむことになるかどうかに関わらず、私はあなたの望むことを行います。」

それでも、まだ何も聞こえませんでした。

私：「お語りください、主よ、神よ。あなたのしもべは聞いております。」
救い主：「あなたには多くの悲しみが降りかかる。」
私：「愛する神様、‘多く’とはどういう意味ですか？」
救い主：「わが娘よ、あなたはすべてに耐えなければならない。あなたの家族のために祈りなさい。」
私：「主よ、神よ、彼ら全員を救ってください。私は彼らを愛しています。どうか、誰一人として失われないようにし
てください。」救い主：「わが娘よ、彼らは悔い改めようとはしない。」
私：「主よ、私は彼らのために苦しむ覚悟があります。ただ、それがあなたの御心であるならば、ですが。あなたは彼らの心をご存知ですが、私には分からないのですから。」
救い主：「愛する娘よ、お前の言ったことは私の心にかなう。私の望む通りに起こるだろう。愛する娘よ、もう一つ書き留めておきなさい。セルビアでの戦争はまもなく始まる。敵が弱まるよう祈りなさい。」

私：「その願いのために祈ります。」
私：「主よ、神よ。昨日、祈りの集いであなたの御前にひざまずき、あなたに祈っていたとき、私の心には絶え間ない炎が燃えていました。それはかなり強いものでした。まるで内側から燃えているかのように感じました。」
救い主：「わが娘よ、それは私だったのだ。」

私：「親愛なる神様、これには私にとって何か意味があるのでしょうか？」
救い主：「これからあなたに降りかかる悲しみに耐えられるようにするためだ。私は、善行を行った子供たちに、豊かな報いを与える。」
私：救い主は私に祝福を与えてくださいました。
18時、ロートでのロザリオと聖ミサ。

1992年10月7日 - 水曜日

午前8時15分、医師室にて祈りの
集い!
救い主：「あなたは私の宝、私の娘だ。」
私：「主よ、私は以前にも同じことを書きました。」
救い主：「書きなさい。あなたの悩みは私の悩みなのだ、わが娘よ。」私：「私の魂は、あなたが『
宝石』と呼べるほど純粋なのでしょうか？」救い主：「そう、わが娘よ。」
私：「私の心の中に、とても美しい感覚が湧き上がっています。魂の清らかさこそが、神の御国なのだと思います。」救い主：「清らかな魂があれば、私は好きなようにすることができる。」
救い主：「わが娘よ、書き留めなさい。盲目とはこういうことなのだ。あなたは心で見るようになる。他の人々が目で見るものよりも、もっと多くのものが見えるようになるのだ。
目の光は世俗的なものだが、心の光は天的なものだ。この光を与えられるのは私だけだ。だから、医師は誰もあなたを信じないだろう。あなたが見るものはすべて、語らなければならない。
ある司祭がそれを書き留めるだろう。話すのはあなたではなく、私があなたのために話すのだ。わが娘よ、心に宿る光は、目に見える光よりも価値があるということを確信しなさい。」
私：「主よ、今、よく理解できました。そうおっしゃってくださり、ありがとうございます。」救い主：「わが娘よ、君にもう
一つお願いがある。」
私：「はい、主よ。もし私が差し上げられるものなら、どうぞお受け取りください。」
救い主：「あなたの手が必要だ。あなたの手を使って、私は魂たちを癒やすつもりだ。」私：「ああ、主よ、あなたは私に
一体何をなさろうとしているのですか。そんなことは想像もできません。
でも、あなたが私の中にいてくださるなら、そんなことも起こり得ると信じます。主よ、私の意志ではなく、あなたの意志が成されますように。魂の救いに関わることであれば、私の手はすでにあなたのものです。」
救い主：「わが娘よ、それが私があなたにまだ求めていたことだった。癒しは、私が望む時に起こる。人々が望む時ではない。」
主は私を祝福し、こう言われました。
「平安のうちに去りなさい、わが娘よ。そして、わたしを信頼しなさい。」
19時、ロクス礼拝堂にてロザリオと聖ミサ。

1992年10月8日 - 木曜日

アーカイブ 10時15分 祈りの
集い!
救い主：「書きなさい、わが娘よ。今は静寂のときだ。」
私：「イエス様、生ける神の子、私の花婿よ、何を書けばよいのでしょうか？」救い主：「娘よ、一語一語書き記しなさい。」
私：「はい、主よ。」
救い主：「あなたが受ける聖痕は、予期せぬ形で訪れるだろう。」私：「では、それがいつ来るのか、その日や
時刻は分からないということですか？」救い主：「わが娘よ、それは私が決めることだ。」
私：「それなら、まだレーゲンスブルクへ行くことはできますか？」
救い主：「はい、まだ行けます。わが娘よ、今、サタンは非常に強くなっています。あなたが強くあり続ければ、彼はあなたに何一つ手出しはできません。彼は、あなたが書き続けられないようにあらゆる手段を講じてくるでしょう。わが娘よ、努力して書き続けてください。彼はまもなく打ち負かされるでしょう。私の子供たちのすべてが彼に従うわけではありません。私の子供たちのこの少数こそが、彼を打ち負かすのです。」

私:「まだ何か書き留めるべきですか?」

救い主：「ええ、もう少し書き留めておきなさい。当局はあなたと話し合う用意ができている。私の声によく耳を傾けなさい。娘よ、あなたが書いてきたことに忠実であり続けなさい。私はあなたと共にいる。私は偉い者たちを恥じ入らせる。偉い者たちはふるいにかけられるだろう。」
私：「『偉い者たち』とは誰のことですか？」
救い主：「政治家や司教たちだ。彼らこそが、この世の混乱の責任者である。書き記せ、わが娘よ。私はあなたに、ヴォクト神父のもとへ行くことを命じる。彼に、ミサの前に信者たちと共にロザリオを唱えるよう伝えなさい。彼にそう伝えなさい。私がそう命じたのだ。」
私：「もし彼が『できない』と言ったら？」救い主：「それは私に任せておきなさい。」
私：「神様、いつ彼のもとへ行けばよろしいでしょうか？」救い主：「今日中に彼のもとへ行きなさい。」
私：「ロザリオを唱えるようにと言う以外に、何か伝えるべきことはありますか？」　答えは返ってきませんでした。
私：「はい、主よ、神様。今日中に彼のところへ行き、あなたが私に言われたことを伝えます。」
ロートへ向かう道中、私はその司祭のためにロザリオを祈りました。
16時10分、ロートの教会で少し祈った。
16時15分、フォクト神父のもとへ着いた。
私は、救い主が彼に求めていることを伝えました。
彼はまた同じことを言いました。「聖体奉仕者たちのこと、どうすればいいのでしょうか？」私は彼に言いました。「神のもとでは、すべてが可能なのです。」
さらに、「もし私があなたの立場なら、救い主が求めておられることを実行するでしょう」と付け加えました。彼は内心、落ち着かない様子でした。納得していなかったのです。そのことは彼の表情からも見て取れました。私は彼に祝福を求め、その後その場を後にしました。

18時、ロートでのロザリオと聖ミサ。

ヴォクト神父はミサの終わりに、至聖体の前でロザリオの一節を唱えました。」

1992年10月9日 - 金曜日 医師
室での祈りの集い!
救い主：「わが娘よ、注意しなさい。あなたが書いたものはすべて、どの司教にも読ませてはならない。彼らに話すことは構わないが、その文書は大切に保管しなさい。その本が印刷されたら、彼らはそれを読むことができる。
書きなさい、わが娘よ。ゲブハルト・ハイダー神父が、私が彼に授ける言葉をあなたに伝えるだろう。彼が言う通りにしなさい。それが私の御心である。」
私：「はい、主よ、神よ、そういたします。親愛なる神様、ヴォクト神父に言ったことは、正しかったのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、その始まりは良い。」
私：「私は救い主に、ゲバルト・ハイダー神父に何を伝えるべきか、何かおっしゃることはないかと尋ねました。」
救い主：「もちろん！彼にこう伝えていい。『彼がこれまで行ってきたことはすべて、私の御心であった』と。さらにこうも伝えてほしい。『彼の働きは私の心にかなっている。彼がこれまで成し遂げてきた働きは、立派なものだ』と。」
私：「ありがとうございます、主よ、神様。彼にすべてお伝えします。」
私：「神様、私の心の中にとても熱いものが感じられます。これは私の気のせいでしょうか？」
救い主：「いいえ、わが娘よ、それは私の恵みだ。それはあなたへの私の贈り物なのだ。」
私：「親愛なる神様、もし私にそのような贈り物をくださるのなら、きっと何かが起こるに違いありません。主よ、私は司祭たちのために、この愛をさらに多く受け取りたいのです。」
救い主：「わが娘よ、あなたの言ったことは私の心にかなう。司祭たちのために多くの愛を願い求めなさい。わが娘よ、私はあなたを愛している。それを書き留めなさい。」
私：「愛するイエス様、今、私はあなたをとても愛しています。いつも以上に、私の心には愛が満ちています。主よ、神様、私にこれほど多くの恵みを与えてくださり、ありがとうございます。」

私：救い主は私に祝福を与え、さらにこう言われました。「平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」

18時　ロートでのロザリオと聖ミサ。

1992年10月10日 - 土曜日

午前7時、ロクス礼拝堂にて聖ミサ

11時30分から12時まで、自宅で祈りの集い!

救い主：「よく聞きなさい、わが娘よ。私は、一定期間、あなたに癒しの恵みを与える。」私：「いいえ、主よ。何か聞き間違えたのでしょうか。どうかもう一度おっしゃってください。」

救い主は二度目も同じ言葉を繰り返された。

私：「理解できません。私にはふさわしくありません。私は取るに足らない者ですから。」救い主：「私が、あなたの中で癒やすのだ。」

私：「主よ、神よ、それはどのような癒やしになるのでしょうか？」

救い主：「これらの癒やしは私に任せておきなさい。あなたは私の道具なのだ、娘よ。書き記しておきなさい、娘よ。あなたが人々と接するそのやり方は、私のとても気に入っている。」

私：「神様、私を『厳しい』と言う人もいます。」

救い主：「わが娘よ、他人の言葉に耳を傾けてはならない。私は、あなたが今のままのままでいてほしいのだ。」私：救い主は私に祝福を与えてくださった……

1992年10月11日 - 日曜日

午前8時、ドナウ川沿いのレーゲンスブルク駐車場、キャンピングカー「サルヴェ・レジーナ」にて。祈りの集い!

救い主：「書きなさい、わが娘よ。私はあなたに書いてほしいのだ。」

私：救い主が今、私に何を伝えようとしているのか分かりません。御言葉を待ちます。御言葉はすぐには来ません。しばらく静寂の中で過ごしました。

救い主：「ゲブハルト・ハイダー神父は、今日もまだあなたと一緒にいる。それから、彼は私のところへ来る。」

私：「それじゃあ、私が彼と一緒にいるのはこれが最後になるの？」

救い主：「そうだ。」

私：「それは私にとってとても辛いことです。私は泣きました。主よ、神様、もう私には司祭がいなくなってしまいます。」

救い主：「わが娘よ、ロートに別の者がやって来るだろう。」

私：「ゲブハルト・ハイダー神父に、あなたが彼をお連れになることを伝える必要はないですね。」救い主：「いいえ、彼は知っている。」

私：「親愛なる救い主よ、昨晩、彼に何かが起こりそうな予感がしました。親愛なる神様、私にまだ何か書き留めておくべきことがありますか？」

救い主：「ええ、もう一つ書き留めておきなさい。今日、ゲブハルト神父があなたに言うことはすべて、しっかりと心に留めておきなさい。疑ってはならない、わが娘よ。ゲブハルト神父に優しい笑顔を向けてあげなさい。」

私：「泣いてしまうかもしれないのに、どうすればいいのですか？」救い主：「そのための恵みを、私が与えてあげよう。」

私：「13時30分に、ここ『サルヴェ・レジーナ』というキャンピングカーで彼と会う約束をしています。彼は必ず来るって約束してくれました。」

救い主：「それは私の御心だったのだ。娘よ、あなたがゲブハルト神父をそれほど慕っていることを、私は嬉しく思う。彼に、私が彼を愛していると伝えてくれ。」

私：「はい、主よ、神様。そうお伝えします。」その後、救い主は私に祝福を与えてくださいました。

ゲバルト神父は約束通りやって来ました。私はキャンピングカーの中で彼と4時間以上を過ごしました。最後に、私は彼に告解をしました。そして、救い主が私に啓示してくださった日記を彼に読み聞かせました。彼は、これが救い主からのものだと認めてくれ、救い主が

私に啓示してくださることを、絶対に書き続けていくべきだと告げました。 彼と別れるのは、私にとって非常に辛いことでした。もう彼に会えないこと、そのせいで今朝、教会ですでに泣いてしまったことを彼に伝えました。彼が私を励ましてくれたように、私も彼を励ましました。私たちは互いに、胸が張り裂けるような思いで別れを告げました。
まるで誰かが私の心臓の一部を引きちぎったかのような感覚に襲われました。家までの道中、ずっと彼のために祈り続けました。
カルメル会教会でミサに参加しましたが、説教は素晴らしかったです。

1992年10月12日 - 月曜日

午前8時30分、医師室にて祈りの
集い!

救い主:「わが娘よ、書き記せ。私はあなたを愛している。昨日は何も間違っていなかった。すべてが正しかった。心配するな。私はあなたたちと共にいたのだから。ゲブハルト神父は、この数日中に私のところへやって来る。それが私の御心だ。あなたが彼に言った言葉に、私は喜んだ。彼は今日、それについて考え、理解するだろう。彼はあなたをとても気に入っている。あなたは昨日、彼に大きな喜びを与えた。」

救い主:「わが娘よ、書き続けなさい。次の大災害が目前に迫っている。多くの人々が影響を受けるだろう。誰もこの災害を止めることはできない。それは荒廃を残すだろう。死にかけている人々のために、たくさん祈りなさい。わが娘よ、あなたには何かが待ち受けている。」

私:「愛するイエス様、お聞きしています。」

救い主:「傷跡があなたに刻まれるでしょう。準備をしておきなさい、それはもうすぐです。あなたの勇気は私の心に響きます。それは私の恵みです、わが娘よ。」

私:「主よ、神よ、この恵みに感謝いたします。ひとつお尋ねしてもよろしいでしょうか?『準備をしておきなさい』とおっしゃいますが、それはどういう意味なのでしょうか?」

救い主:「多くの魂が救われるために、あなたは多くの贖いをなさなければならない。」

私:「はい、主よ、わかりました。あなたの恵みによって、私はそれを成し遂げます。」

救い主:「贖罪の苦しみは、最初は耐え難いものとなるだろう。そうならざるを得ないのだ。誰もその聖痕を誇ったりはせず、またそれを好んだ者もいない。ただ私の愛だけが、それを支えることができるのだ。
多くの人が、『手袋をはめないから、あなたは聖痕を誇っているのだ』と言うとしても、他人の言葉に耳を傾ける必要はない。そのような言葉を吹き込んでいるのは、不浄な霊なのだ。」

救い主:「ゲブハルト神父は、私が彼に私の光を与えたゆえに、あなたが聖痕を受けることを悟った。私の光なしには、誰も何も悟ることはできない。」

私:「主よ、神よ。これから私に降りかかるすべてのことを、マリアの無原罪の御心を通して、あなたの御手に委ねます。お望みのままになさってください。私はあなたのしもべです。あなたが言われたとおりに、私に起こりますように。」

救い主:「わが娘よ、私はあなたを祝福する。」

救い主は私に祝福を授けてくださった。

18:00 聖体祭とロートでのロザリオ

20:00 祈りの会

1992年10月13日 - 火曜日

8時30分 医師室での祈りの集
い!

救い主:「愛する娘よ、これを書き留めなさい。あなたが受ける聖痕は、最初は静かに秘めておかなければならない。私が人々をあなたのところへ導く。あなたのところに来る人々が皆、祈る者というわけではない。
その中から多くの者が去っていくだろう。わたしの羊たちはわたしの声に耳を傾ける。しばらくの間、あなたの祈りの集まりに参加する人が少なくなっても、心配する必要はない。」

私:「はい、主よ。あなたが最初におっしゃった通りにいたします。最初は、その傷跡を静かに秘めておきます。」

救い主:「最初は多くの安らぎが必要だ。人々の騒ぎは、あなたを傷つけるかもしれない。わが娘よ、これからあなたに降りかかることに備えなさい。私へのあなたの愛は、私の心に響く。
娘よ、もう一つ書き留めておきなさい。聖痕は私のしるしであり、それを刻み込むことができるのは私だけだ。誰もそれを真似することはできない。それらは私が望む時に消え去ることもあれば、私が望む限り残ることもある。あなたが受ける聖痕は、私が望む限り残るだろう。聖痕には一定の大きさと深さがある。
それらはゴルゴタでの私の傷跡と一致している。刻まれる際には激しい痛みが生じるだろう。その痛みに耐えられるよう祈りなさい。これからあなたに降りかかるあらゆることに、忍耐強くありなさい。忍耐は偉大な美徳である。」

私:「主よ、あなたや他の人々に対して忍耐と粘り強さを持ち、耐え抜くことができるよう、大きな恵みをください。

救い主は私に祝福を与えてくださいました。

18時、聖体祭とロートでのロザリオ。

1992年10月14日 - 水曜日

8時30分、医師室にて祈りの集い

!

救い主:「わが娘よ、あなたは多くの愛を渇望している。私はそれをあなたに与える。多くの愛とは、多くの苦しみも意味する。それでもいいか、わが娘よ?」

私:「私の最愛なる方、あなたと共になら『はい』です。私はあなたを何よりも愛していますし、あなたは私の中のすべてだからです。私は、魂を救いたいという強い渇きを抱いています。あなたへと至る道は、十字架を通って光へと続いています。十字架には救い、希望、そして命があります。十字架には世界の救いがあります。

主よ、私は完全にあなたに属しています。私をあなたの御心のままに扱ってください。」救い主:「愛する娘よ、あなたは多くの苦しみを味わうことになる。」

私:「私の主であり神よ、私の最愛の花婿よ、私もあなたを深く愛します。なぜなら、あなたと共に味わう苦しみは愛へと変容し、その愛は世のあらゆる苦しみよりも強いからです!」

救い主:「わが娘よ、人々が自らの意志に反して苦しむ時が来るだろう。私の十字架を受け入れることを拒む者は、私の弟子となることはできない。私の十字架を通してのみ、あなたがたは永遠の命を得るのだ。受け入れられるために、あらゆる十字架を愛しなさい。あなたがたは多くの十字架を受け入れなければならないだろう。」

私:「今、私は左腕の痛みと肩のことを考えていました。」

救い主:「それらは、わたしによる贖いの苦しみである。どんな苦しみでも、何度でも、わたしに捧げることができる。それは実を結ぶ。多くの実を結ぶためには、多くのものをわたしに捧げなければならない。」

私:「神様、まだ何か書き留めておくべきことがありますか?」 救い主:「ええ、君が受ける苦しみは、治る見込みがないものだ。」 私:「どういう意味ですか、主よ?」

救い主:「医者には治せないのだ。苦しみがなければ、あなたはあの世に行ってしまう。」私:「つまり、あなたは私と共に、そして私の中で苦しんでくださるということですね。そうすれば、私はあなたから離れることはありません。それなら、あなたは私の中にいる『苦しむイエス』なのですね!」

救い主:「愛する娘よ、その通りだ。」救い主は私に祝福を与えてくださった。

19:00 ロクス礼拝堂にてロザリオと聖ミサ

1992年10月15日 - 木曜日

医師室にて、祈りの集い!

私は心から祈り、救い主にこう言いました:

私:「主よ、私はあなたの愛をもって、彼ら全員を愛したいのです。」

救い主:「愛はそこにある。あなたたちはそうすべきだ。あなたたちは多くの愛を汲み上げることができる。その泉はまだ枯れてはいない。誰もが望むだけ汲み上げることができる。愛に限りはない。」

私:「ああ、主よ、私がその愛を分かち合えるよう、たくさんの愛をお与えください。今、私の心の中に炎を感じています。」

救い主:「それは私の愛だ。」

私:「この燃え盛る炎を、最近よく感じています。救い主は、お望みの時に私のところへ来られます。救い主と一つになっていない時でも、この愛の炎を感じます。その時、救い主がここにおられるのを感じます。大切なのは、魂が常に清らかであることです。」

救い主:「わが花嫁よ、私はあなたを愛している。もはや私たちを引き離すものは何もない。あなたは私の中にいる、わが娘よ。私はあなたを、私の望むままにすることができる。」

私:「はい、主よ、神よ。あなたは私を好きなように扱っていただいて結構です。そのことについては、私の同意があります。」

救い主:「愛する娘よ、書き留めておきなさい。血を流す苦難が始まろうとしている。私は今、始めなければならない。喉が渇いているからだ。あなたは私が用いる道具である。どうか私にどうか忠実であり続けてください。」

私:「ああ、主よ、私があなたに忠実であり続けられるよう、どうか恵みをお与えください。なぜなら、私一人では何もできないからです。あなたの恵みなしには、あなたに忠実であることはできません。主よ、今まで私はあなたに忠実でした。あなたが私に忠実という美徳を

与えてくださったからです。
救い主：「そう、わが娘よ。私は、あなたがそれをすでに忘れてしまったかどうか知りたかったのだ。」
私：「でも主よ、あなたの御言葉は私の中に生きています。いつもあなたと共にいるなら、あなたの生ける御言葉が消えるはずがありません。」
救い主：「愛する娘よ、その通りだ。もっと私を愛しなさい、娘よ。」

私：「そういたします、私の愛する花婿よ。あなたを深く愛することが私の願いです。」救い主は私に祝福を与えてくださ
いました。

19:00 ロクス礼拝堂にてロザリオと聖ミサ。

1992年10月16日 - 金曜日

午前8時30分、医師室にて祈りの
集い!
救い主：「わが娘よ、これを書き留めなさい。それは重要なことだから。」
私：「はい、私の愛する、慈悲深い神様。」
救い主：「わが娘よ、あなたがこれから受けるすべての苦しみを、迷い出た私の子供たちのために、彼らが父の家へ戻れるよう、私に捧げてほしい。」
私：「はい、主よ、神よ。そういたします。」
救い主：「その苦しみは、まるで既に起こったかのように、もうすぐそこまで迫っている。わが娘よ、準備をしておきなさい。それはいつ起こってもおかしくないのだから。」
私：「でも主よ、私は今、職場にいます。もう何も理解できません。どうしてこれを理解できるというのでしょうか。」
救い主：「わが娘よ、何も理解する必要はない。あなたが私を愛してくれていることだけで、私には十分だ。あなたの心は、私
の心そのものだ。」
私：「はい、主よ。ただ一つ、私があなたをとても愛しているということだけは分かっています。」
救い主：「それを書き留めなさい。私はあなたに多くの愛を授ける。その愛があなたを強め、あなたは恐れることはないだろう。 わが娘よ、私が始めたことは、必ず最後までやり遂げる。あなたの中にいることが私の意志であり、私はあなたの中に留まり続ける。だから、あなたは一人ではない。私はあなたを見捨てない。あなたの中に留まり、あなたと共に苦しむ。私を深く信頼しなさい。」私：「親愛なる神様、何と言えばいいのか分かりません。」
救い主：「何も言わなくていい。私があなたの考えていることは分かっている。」
私：「私にとってはとても辛いことです。今は司祭がいませんし、ゲブハルト神父さんとももう会えなくなります。ゲブハルト神父さんのような方は、もういません。でも、あなたがいらっしゃいます。あなただけで十分です。あなたはすべての司祭の中で最も偉大なお方です。
そのことを慰めとします。」
救い主：「私はすでに、あなたのために司祭を用意している。私が望む時、そしてその時が来れば、その人はやってくる。」
救い主：「私の御心は、あなたに、あなたを導いてくれる霊的指導者がいることなのです。」
私：「主よ、神よ、やはり私のために魂の導き手を与えてくださることを感謝します。」救い主：「愛する娘よ、私の声が聞こ
えるか? 」
私：「はい。」
救い主：「書き続けてください。私の愛の炎があなたを清めるでしょう。この炎を燃やし続けてください。それが私の愛の炎なのです。」

救い主は私に祝福を与えてくださった。

その日一日、私は計り知れない喜びに満たされていました。私の心は愛で燃え上がっていました。救い主は私にこれほど多くの恵みを与えてくださいました。しかし、不浄な霊は何度も私を
誘惑しようとした。

18:00 ロートでのロザリオと聖ミサ、

1992年10月17日 - 土曜日

午前7時、ロクス礼拝堂で聖ミサに参加しました。聖ミサの後、さらに約30分ほど祈りました。
16時30分から17時45分まで、ロート教会で祈りを捧げました。今日はメッ
セージは書きませんでした。

1992年10月18日 - 日曜日

午前6時30分から9時まで、祈り
の交わり!
救い主:「娘よ、これほど長く私と語り合ってくれてありがとう。あなたが天の母に託したことは、すべて彼女から受け取った。

彼女を通してこそ、私のもとへ至る最も早い道となる。彼女こそが、私を最も早くあなたたちに与えてくれた者だ。彼女は子供たちからあまり愛されていないのだから、彼女を深く愛してあげてほしい。」
救い主：「愛する娘よ、書きなさい。」
私：「イエス様、生ける神の子よ、私は何を書けばよいのでしょうか? 今、私はあなたがたの中にいることを知っているので、すべてを信じています。私の心には、限りない安らぎと平和、そして温もりが満ち溢れています。 今、何を書けばいいのか、本当に分かりません。私は心の中で受け取る声を待っています。なぜなら、これは私の理性とは何の関係もないからです。私は、心で受け取るものに完全に集中しているのです。また何か聞こえるまで、ずっと待っています。」
救い主：「そう、娘よ、君が書いた通りだ。君自身では何もできない。娘よ、こう書き記せ。娘よ、君たちには厳しい時代が訪れようとしている。
敵は、これまで以上に多くの魂を連れ去ろうとしている。大災害が近づいている。ドイツは大災害の脅威にさらされている。今回は多くの魂が失われるだろう。ほぼ全員が失われてしまう。彼らはもはや祈っていないからだ。魂は冷めている。司教たちでさえも失われてしまうだろう。
私：「神様、きっと私が書き間違えたのでしょう。」
救い主は繰り返して、同じことをもう一度おっしゃいました。そして、これを書き留めるよう、もう一度私に促されました。
救い主：「彼らは私の教会を混乱に陥れ、私の羊たちを散らしてしまった。もはや彼らを一つにまとめることはできない。道に迷った子供たちは、広い道を進み、急いで先へ急いでいる。サタンが彼ら全員を捕らえてしまったのだ。広い道とは、滅びへの道である。わが娘よ、この苦難に耐え忍びなさい。 その時がまだ来てはいないが、もうすぐそこまで来ている。私の働きに備えなさい。それは、私の父、そして父と私と聖霊が望まれる通りに、そうならなければならないのだ。私たちの意志なしには、何事も起こらない。娘よ、あなたが私と共に苦しむことを切望していることを、私は喜んでいる。それは、あなたが私から受けた愛によるものだ。そして、その愛をもって、あなたは私を愛しているのだ。」
救い主：「娘よ、もう一つ書き加えておきなさい。 あなたはもう長くは精神科病院で働くことはない。それが私の御心だ。あなたは自宅で巡礼者たちと関わるようになる。多くの人があなたに助言を求めるだろう。誰に対しても親切に、優しく接しなさい。彼らのほとんどは途方に暮れている。多くの人が司祭への信頼を失っている。彼らは再び教会に戻らなければならない。ペトロの教会へ。彼らのために多くの愛を祈り求めなさい。愛だけが彼らを救うことができるのだ。」
私：「主よ、神よ、わかりました。ありがとうございます。あなたが私に与えてくださる恵みと力によって、すべてを行ってまいります。」
救い主：「愛する娘よ、私はあなたを愛している。あなたには大きな守りが与えられている。その守りを信頼しなさい。
私：救い主は私に祝福を与えてくださいました。
10:00 聖ミサ
13時00分 ロザリオと祈りの集い。

1992年10月19日 - 月曜日
医師室にて、祈りの集い!
救い主：「愛する娘よ、書き留めておきなさい。あなたが受ける苦しみは、私と一つになっているときのみ、大きな価値を持つのだ。」
私：「主よ、でも私はいつもあなたと結ばれています。」
救い主：「しかし、あなたは私から背を向けることもできる。わが娘よ、あなたには自由意志があるのだ。」
私：「でも主よ、もし私が自分の意志をあなたに委ねれば、あなたから背を向けることはできません。」救い主：「もしあなたが自分の意志を私に委ねるなら、そうはならない。」
私：「私の主であり神、三位一体の神、愛するイエス様。私は、決してあなたから背を向けず、あなたの愛と結びつき、常にあなたの御心を行うよう、私の意志をあなたに捧げます。そう願っており、そうしてこそ、私の苦しみをあなたと結びつけることができると信じています。」
救い主：「愛する娘よ、あなたが書いたことを私は喜んでいる。書き記しなさい。三位一体の神はあなたを愛しておられる。」

救い主：「書きなさい、わが娘よ。起こるすべてのことを、まず私に告げなさい。」私：「はい、主よ、そういたします。」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。それは重要なことなのです。わが愛する娘よ、あなたは私の望む通りに、その苦しみに耐えなければならないのです。」
私：「主よ、それは全く理解できません。」
救い主：「痛みが多少ある日も来るだろう。その痛みは私が導くものだから、和らぐのを待つ必要はない。」
私：「親愛なる神様、そろそろ事態が深刻になってきました。どうか、その時が来たら、私がしっかりと苦しみを受け入れ、そのための忍耐力を与えられるよう、恵みをお与えください。ああ、主よ、神様、あなたの御心通りにしてください。私はあなたをとても愛しています。もう言葉では言い表せませんが、あなたはご存じですよね。 私はあなたと共に苦しむ覚悟ができています。大きな希望を抱いています。天国には苦しみはありません。この地上であなたと共に苦しむことを許されていることが、私にとって大きな喜びです。」
救い主：「愛する娘よ、その言葉を聞けて嬉しかった。」私：救い主は私に祝福を与えてくださいました。

18:00 ロザリオと聖ミサ（赤）

1992年10月20日 - 火曜日 医師
室にて 祈りの集い!
救い主：「わが娘よ、君がこれまでに書いたことはすべて、私の心にかなっている。
わが娘よ、あなたは自分の書きたいことを書いているのではなく、私が望むことを書いているのだ。あなたが聞いているその声は、私の声である。わが娘よ、あなたは人々を
説得することはできない。彼ら自身は何も聞いていないからだ。しかし、あなたが語る言葉を通して、彼らはそれが私であることを悟るだろう。彼らはそれを否定することはできない。 わが娘よ、準備をしておきなさい。あなたが地上で耐えることになる絶え間ない苦しみへの時が、もう間近に迫っているからだ。私は主であり、神である。私は私の業を成し遂げる。あなたは私が用いる器である。わが娘よ、あなたは私の愛を豊かに受けるだろう。なぜなら、私は愛そのものだからだ。あなたの苦しみこそが、私の愛となるのだ。」

私：「救い主よ、私を祝福してください。」

18:00 ロザリオと聖ミサ（赤）

1992年10月21日 - 水曜日 医師
室にて 祈りの集い!
救い主：「書き留めておいてほしい。後で必要になるからだ。」私：「愛するイエス様、何を書き留めればよいのですか? 」
救い主：「わが娘よ、書き留めるべきことはまだたくさんあるのだ。」
私：「主よ、書き留めますが、もっと書けるよう、そしてマリオンにも書けるよう、恵みをお与えください。私たちが書いていることは、ほんのわずかですから。」
救い主：「わが娘よ、君たちは書くよう努めなければならない。なぜなら、速やかに書かれることが私の御心だからだ。書くための恵みは、君たちはすでに受けている。わが娘よ、私は君に少しお願いがある。」
私：「またですか? もうすべてを差し上げたと思っていたのですが。何が必要なのか、教えていただけますか? 」
救い主：「あなたはすべての魂を私に委ねなければならない。彼らは皆、救われるべきだ。あなたはすべての魂のために苦しむことになる。」
私：「主よ、神よ、あなたは多くの魂がもはや生きていないとおっしゃいました。」
救い主：「わが娘よ、それらの魂も私に捧げなさい。わが娘よ、私は彼らを死からよみがえらせることができる。」
私：「でも、彼らは『偽りの父』を選んだではありませんか。」救い主：「十字架に救いあり、十字架に命あり。」
私：「あなたのご受難が私の中に宿ることで、大罪人さえも救われるのです! 」救い主：「そう、わが娘よ、その通りだ。」
私：「主よ、神よ、その苦しみと思うと怖くなります。」救い主：「私と共にあるなら、あなたは恐れることはない。」

私：「はい、主よ、神よ。私はあなたの望む通りにします。主よ、あなたの御心が成されますように。」救い主：「すべてを、私の望む通りにしなさい。」
私：「はい、あなたの恵みによってそういたします。」
あの日曜日、救い主が「ほとんどすべての魂が、ある大災害によって失われてしまうだろう」とおっしゃったことを思い出した。
救い主：「何かが起こるかどうかを心配するな。それは私の心配事だ。お前の役目は、これらすべてを書き留めることだ。私は望むように変えることができる。私はすべてを支配している。お前たちは私なしでは何もできない。わが娘よ、私に忠実であり続けなさい。私はすでに、お前のための計画を準備している。
それは必ず成就されなければならない。」

私：主は私を祝福してくださいました。

12時 礼拝堂

救い主：「私の愛は永遠だ。地上の苦しみは短い。わが娘よ、書き記せ。私と共に苦しむことは大きな恵みである。それゆえ、私と共に苦しむために自分を捧げなさい。これらの苦しみは、私の愛と結びつけられるのだ。」

16時30分、私は耳鼻咽喉科クリニックにいました。マイヤー先生に招待されたのです。
いくつかの講演がありました。マイヤー主任医師の講演は19時10分頃に終わりました。私は講堂を出て、猛スピードでミンゴルスハイムのロクス礼拝堂へと駆けつけました。
19時35分にはすでに礼拝堂に着いていました。道は濡れていましたが、私はそこへ向かう道中ずっと祈り続けました。救い主をお迎えしたいと、心から切望していたのです。聖ミサの後、新しく着任した司祭と約30分間話をしました。フィリピン出身のこの神父は、今日が着任初日でした。 私が彼と話すことができたのは、救い主の御心だったのだと思います。耳鼻咽喉科クリニックの講堂は、ミンゴルスハイム／バート・シェーンボルンにあるロクス礼拝堂から約30km以上離れています。

1992年10月22日 - 木曜日

午前8時30分、医師室にて祈りの
集い!

救い主：「あなたが書いているものが印刷されること、それが私の御心である。あなたが会話をするすべての人々から距離を置くことを望む。皆、あなたが聞いているこの声が私からのものではないと、あなたに影響を与えようとするだろう。必要なことは彼らに話せ。彼ら全員を愛しなさい。 わが娘よ、やがて皆があなたを見捨てる時が来るだろう。その時、彼らはわたしをも見捨てるだろう。しかし、あなたはわたしと共にいる。常にわたしを信頼しなさい。
私と私の母は、あなたを見捨てたりはしません。あなたが書いたことに忠実であり続けてください。」私：「主よ、神よ、しかし、この孤独は耐え難いほどつらいのです。」
救い主：「わが娘よ、それによって多くの魂が救われるのだ。あらゆる犠牲は実を結ぶ。」
私：「主よ、今、私の心の中に燃えるような感覚があります。これには、私が知っておくべき何か意味があるのでしょうか? 」
救い主：「そう、わが娘よ。それが、あなたへの私の愛だ。この炎をもって、私はいつもあなたを力づける。わが娘よ、あなたは決して一人ではない。あなたは完全に私のものだ。」
私：今年のうちに、その傷跡が現れるのでしょうか。救い主：「書き記せ。今年のうちに起こる。」
私：「何が起こるのですか?　二つのことが頭に浮かびます！」
救い主：「聖痕のことだ！　それからは解放されない。それは君への恵みの賜物だ。それによって、君は私の中にいるのだ。私の『はい』は、いつまでも『はい』のままである。」
私：「愛するイエス様。今、私はあなたをとても愛しています。これからもずっとこのように愛し続けたいです。あなたの愛さえあれば、他に何も必要ありません。」
救い主：「わたしと共にいる者は、わたし以外に何も必要としない。わたしがすべてに取って代わるのだ。」
私：「愛する神様、ドイツにこれらの災害が降りかかることのないようお守りください。あなたならそれを防ぐことができます。」
救い主：「わが娘よ、それらは起こるだろう。なぜなら、人々は悔い改めようとしないからだ。わが娘よ、今、私はあなたを祝福する。」

私：救い主は私に祝福を与えてくださいました。

18時 ロートでのロザリオと聖ミサ

1992年10月23日 - 金曜日

8時30分および9時30分、医師室にて

二度目の交感の際、救い主は私にこうおっしゃいました:

救い主:「愛する娘よ、あなたが再び私に語りかけてくれることを嬉しく思う。それは私の御心であった。」私:「はい、主よ。何かが私をあなたへと引き寄せてくれたのです。」

救い主:「あなたの人生は、すべて私のものだ。」

私:「はい、主よ。それはよく分かっています。私はすべてをあなたに捧げたのですから。」

救い主:「書きなさい、わが娘よ。私は、あなたがその日に口にしたすべての言葉を、私に捧げることを望んでいる。」

私:「実のところ、私は一日中、あなたのことを話しています。そういたします、主よ、神よ。」救い主:「書き続けなさい、わが娘よ。アッベ・ヴォドケ神父が、カナダのムッシュ・マット・ジョーについてカセットテープに語っていたことは、今年中に起こる。ドイツに降りかかる大災害も、今年中に起こる。 あなたが受ける聖痕も、今年中に現れる。子供たちよ、たくさん祈りなさい。あなたたちに残された時間はごくわずかだ。」私:「大災害と私の苦しみ、どちらが先に訪れるのでしょうか? 」

救い主:「それを知りたいのか、わが娘よ? 」

私:「はい、主よ。もしそれが正しいとお考えなら。」

救い主:「大災害が訪れる前に、まずあなたは苦しみを受けることになる。」

私:「はい、主よ、わかりました。ありがとうございます。でも主よ、誰にもそのことを警告することはできないのでしょうか? 」

救い主:「わが娘よ、彼らの中に、お前の言葉を信じる者が一人でもいるだろうか! 」

私:「みんなは聞いてはくれるけれど、誰も私を信じてくれないような気がします。」救い主:「わが娘よ、彼らは皆、信仰の薄い者たちなのだ。」

私:「神様、大災害が来ると言われると、怒り出す人もいるんです。」救い主:「そう、そうすれば祈らなくて済むからだ。手遅れになって初めて、彼らは信じるだろう。わが娘よ、信仰の薄い者たちには、そこに高慢も混じっている。彼らは悔い改めなければならない。謙虚な者は信仰を受け入れるが、高慢な者はそれを受け入れられない。信仰こそがは、私があなたたちに与える贈り物なのだ。」

私:救い主は再び私に祝福を与えてくださいました。

18時、ロートにてロザリオと聖ミサ。

1992年10月24日 - 土曜日

11時00分 自宅にて

7時15分、ヴァーハウゼルの教会にて。

ミサの開始と同時に、私たちは教会を出た。私とフリドリンは聖櫃の前に座って祈っていた。

ヴェルナー・エゴン神父が私たちに気づくと、「ミサに参列されませんか? 」とお尋ねになりました。そこで私は「はい」と答えました。すると神父は、「そちら側へお越しください」とおっしゃいました。

そこは聖櫃が見えない側です。なぜなら、朝のミサはいつもこの側で捧げられるからです。神父は二度目に私に尋ねました。「ミサに共に参加しませんか? 」私は「はい、でもここ、聖櫃の前で」と答えました。

神父は三度目も同じことをおっしゃいました。そこで私たちは聖櫃の前で頭を下げ、その後教会を出ました。私たちは湖まで散歩に出かけ、その間、ヴェルナー・エゴン神父と、教会に残った信者たちのためにロザリオやその他の祈りを捧げました。

というのも、救い主が私に、聖櫃のそばに留まるようにおっしゃったからです。これまでのところ、すべての神父たちはそれに同意していましたが、ヴェルナー・エゴン神父だけは同意しませんでした。

11時 祈りの集い!

救い主:「書き記せ、わが娘よ。今日、あなたたち二人がしたことは最善だった。わが娘よ、私は主であり神である。私は万物に対する権威を持っている。」

私　　私:「親愛なる神様、きっと彼らは私たちのことを悪く言うでしょう。」

救い主:「わが娘よ、あなたたちの悪口を言う者たちは皆、私の前でその責任を問われることになる。なぜなら、あなたたちは正しかったのだから。」

私:「ルクセンブルクのクロードのために祈りました。」

救い主：「わが娘よ、サタンはまだ強い。クロードのために祈りなさい。」
私：「ヘドウィグの夫について、救い主に尋ねました。彼女はよく泣いて、彼のことを嘆いているからです。
」
救い主：「わが娘よ、サタンが彼に取り憑いている。彼のために悪魔祓いの祈りを捧げなければならない。」
私：「それをヘドヴィッヒに伝えなければならないのですか？」
救い主：「そう、あなたは常に真実を語らなければならない。娘よ、これを書き留めなさい。これからしばらくの間、たくさん祈りなさい。大災害が近づいている。」
私：「それなら、私の苦しみももうすぐやってくるのですか？」
救い主：「娘よ、お前の苦難は目前に迫っている。」
私：「救い主様、私の息子がフリドリンから、私が苦難を受けることになるという話を聞いたのは本当ですか？」と尋ねました。
救い主：「わが娘よ、彼がそれを知るのは私の意志だったのだ。愛する娘よ、人々に影響されてはならない。私が言うことはすべて実行しなさい。私はあなたの魂の導き手だ。あなたは完全に私のものだ。私はいつもあなたと共にいる、わが娘よ。今まで通りであり続けなさい。私はあなたを愛しており、常に私の恵みを授けるだろう。私はあなたを祝福する。」

私：私は床にひざまずいた。救い主は私に祝福を与えてくださった。

16時30分
フリードリンと私は、ロートの教会で祈りを続けました。私はフォクト神父に告解をしました。
19時
フリードリンと私は、ミンゴルスハイムでの聖ミサに出席した。聖体拝領の際、私たちは二人とも床にひざまずいた。聖ミサの後、ある女性が私たちに声をかけてきた。「ひざまずいて聖体拝領を受ける人を見られて嬉しかった」と。彼女もそうしたいと思っていたが、勇気がなかったのだという。 私はその女性に、神が人の目を恐れる心から解放してくださるよう祈るようにと伝えました。

21時
レーゲンスブルクのゲブハルト・ハイダー神父から電話があり、慰めと励ましをいただきました

1992年10月25日 - 日曜日

7時30分〜10時30分 自宅にて - 祈りの集い!
救い主：「わが娘よ、書き記せ。お前には自分だけでは何もできない。そのことを自覚せよ。」私：「はい、主よ。そのことは悟りました。しかし、誘惑は常にあります。」
救い主：「あなたがわたしと共にいる限り、誘惑にさらされるだろう。わたしに属する者は皆、誘惑に遭うことになる。重要なのは、あなたがその誘惑に打ち勝つことだ。
あなたが繰り返し告解に行くことは、わたしを喜ばせる。それによって敵はますます弱まり、あなたはその狡猾さに気づくようになる。わが娘よ、この時期、敵はとりわけ強いのだ。」
彼による誘惑から、あなたを免れることはできない。私の選んだ者たちは皆、彼と戦ってきた。私と共にあれば、あなたはいつでも彼に打ち勝つことができる。
「わが娘よ、書き続けてください。私は、あなたの昼も夜も私のものであることを望みます。」私：「主よ、神よ、愛するイエス様、私の魂の導き手よ、毎日、毎晩があなたのものでありますように。だって、あなたがいなければ、これらすべての昼も夜も、私にとって何の役にも立たないでしょうから。愛に満ちた父よ、どうか私をただあなたの愛の中にいさせてください。」
救い主：「あなたは私の愛する娘であり、あなたは私の愛の中にいる。」私：「そのことをフリドリンに話すべきでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、あなたは私が彼に伝えたかったことを、すでに彼に伝えてくれた。」私：「ありがとうございます、主よ、神よ。」
救い主：「愛する娘よ、書き留めなさい。私はあなたに何かを授ける。」
私：「あなたが何を授けてくださるのか、私は気にはなりませんが、あなたから授かるものなら喜んで受け取ります。ただ、あなたが授けてくださるものを書き留めていいかどうか、教えてください。」
救い主：「私は、苦しみにおける私の忍耐をあなたに授ける。」
私：「それを大変嬉しく思います。慈悲深い神様、ありがとうございます。ああ、主よ、それによって多くの魂が救われるでしょう。苦しみにおける忍耐は、私にとって大きな意味を持ちます。なぜなら、それはあなたからの大きな恵みだからです。」

救い主：「私があなたに特に好意を抱いている点を書き留めなさい。」

私：「それは何ですか、主よ？」
救い主：「あなたは、私があなたの心に置くものを人々に伝えている。」私：「私の心
に置かれるものとは、何ですか？」
救い主：「命の言葉だ。あなたがその言葉を人々に授けることが、私に喜ばれるのだ。」私：「しかし主よ、私はドイツ語が
あまり上手ではありません。実のところ、どの言語もきちんと話せないのです。」救い主：「しかし、その言葉は心から湧き
出るものであり、この世から来るものではない。」
私：「主よ、私はあなたの恵みによって語り、聖霊が私に正しい言葉を授けてくださるでしょう。」
救い主：「あなたが語ることは、私の御心である。私の司祭たちもそれを聞くべきだ。彼らも、聞くことによって恵みを受けるだ
ろう。私は、私が望む時にいつでも恵みを授けることができる。私の言葉は、命であり、愛であり、光である。」
私：「親愛なる神様、もうこれ以上書くことができません。」
救い主：「愛する娘よ、あなたが書いてくれたことを嬉しく思う。私はあなたと、今日あなたが私に託してくれたすべての
人々を祝福する。」

私：救い主は私を祝福してくださいました。

午後4時頃、コーヒーに招待されました。私は再び、二か国語で神について語りました。

18時30分、ミンゴルスハイムでロザリオと聖ミサがありました。私は夫と一緒に参列しました。説教は素晴らしかったです！

1992年10月26日 - 月曜日

8時30分～9時30分、自宅で
祈りの集い！

救い主：「愛する娘よ、私はあなたが語ったことをすべて聞いていた。
今、あなたが抱えている贖罪の苦しみは、わたしから与えられたものだ。この恵みの賜物は、わたしが望む者に与えることがで
きる。」
私：「でも、左腕に激しい頭痛と肩の痛みがあるんです。」救い主：「愛する娘よ、書き留めなさい
。」
しばらくの間、静寂が続いた。
それから救い主は言われました。「さあ、書き留めなさい。」
救い主：「私は、あなたに『はい』という答えを求めている。そうして初めて、あなたに五つの聖痕を刻み込むこと
ができるのだ。」私：「でも主よ、私はすでにその答えを差し出しました。あなたは以前にもそうおっしゃいました
。」救い主：「もう一度確かめるのだ、わが娘よ。」
私：「主よ、神よ、今すぐに『はい』とお答えします。どうか、魂を救うために、私の体に五つの聖痕を刻んでください。」
私：「愛に満ちた父よ、私の『はい』は今やあなたの『はい』です。もう一度繰り返します。どうか、私を決してあなたから引き離さない
でください。私は何よりもあなたを愛しており、あなたに属したいのです。あなたは私の三位一体の神、愛に満ちた父、私のイエス、神の
聖霊
、そして永遠の愛の炎です。」
救い主：「わが愛する娘よ、あなたが聖痕に耐えられるよう、私はあなたに私の愛を大いなる量で注ぎます。この愛を拒んではいけま
せん。あなたがしっかりと苦しみに耐えられるよう、この愛を受け入れなければなりません。わが愛する娘よ、聖なる五つの聖痕を受
ける準備をしてください。」
私：「これを書き留めておいたほうがいいですか？」
救い主：「書き留めなければならない。」
私：「愛するイエス様、私にはまだ司祭がいません。」
救い主：「わが娘よ、私があなたの霊的指導者だ。私をもっと信頼しなさい。私と共にある限り、あなたに欠けるものは何もない。わ
が娘よ、あなたの苦しみは、私の苦しみでもあるのだ。」
私：「お尋ねします。まだ何か書き留めるべきことはありますか？」救い主
：「いいえ。」

私：救い主は私に祝福を与えてくださいました。

18:00 ロートでのロザリオと聖ミサ。
20時 祈りの会：
多くの信者が集まっていた。ヴァーグハウゼルからベルトルト神父も来ていた。

彼は素晴らしい神父です。すでにヴァーグハウゼルからダルムシュタットへ異動になってしまいました。残念です。彼はマリアを敬う司祭なのですから。ドハット神父もいらっしゃいました。彼は告解を執り行いました。
祈りの集会の後、ノイ・ウルムから来たヨーゼフとギーゼラ、そして私の夫も同席する中で、ドハット神父と話をしました。
ドチャット神父がルフェーブル司教について述べたことは、私には気に入らなかった。ルフェーブル司教に対するその評価は、私の心を深く傷つけた。

1992年10月27日 - 火曜日

11時55分～13時15分
祈りの会!

救い主：「愛する娘よ、書き留めなさい。手での聖体拝領によって、床に落ちて人々に踏みつけられる小さな聖体の破片が生じるが、**その破片こそが私である。**

私：「愛する救い主よ、昨日、ドチャット神父に質問をしました。『ルフェーブル大司教による司教叙階と、手による聖体拝領の際に床に落ちて人々によって踏みつけられる聖体の微粒、どちらがより悪いことでしょうか? 』と。
ドチャット神父はこう言われました。
『ルフェーブル大司教による司教の叙階の方が悪い』と。
主よ、それは私にとって大きな苦痛であり、この苦痛には耐えられません。」救い主：「愛する娘よ、書き留めなさい。その司祭は悔い改めなければならない。」
私：「でも、彼はミサを執り行っています。」
救い主：「もしこの司祭が悔い改めなければ、彼は私に対して大きな責任を負わなければならない。」
私：「ああ、主よ、それは私にとって大きな衝撃です。」
私：「親愛なるイエス様、私の代わりに、彼に悔い改めるよう伝えていただけませんか? 」
救い主：「わが娘よ、それは私に任せておきなさい。彼には、考えるための時間をもう少し与えておく。わが娘よ、あなたは口による聖体拝領について繰り返し語り続けなさい。そうすれば、盲人は再び見えるようになり、耳の聞こえない者は再び聞こえるようになるだろう。」
私：「私は救い主に、デリスの講演に行くべきかどうか尋ねました。そこにはドチャット神父もいらっしゃるそうです。」
救い主：「その件について祈りなさい。」
私：「親愛なる救い主よ、ヴォクト神父についてお尋ねしたいのです。土曜日に、彼は告解室でいつもとは全く違って、私にとても親切にしてくださいました。その後、私はとても幸せでした。」
救い主：「ヴォクト神父は、私が彼に命じることを行うでしょう。」
私：「主よ、神様、午前中ずっと12時まで頭痛がしていたのですが、今、あなたとお話ししているうちに、もう痛みがなくなりました。」
救い主：「書きなさい、娘よ。私は好きな時に痛みを与えることができるのだ。」私：「まだ何か書き留めるべきでしょうか? もう書くことができないのですが。」救い主：「あなたは疲れている。それで十分だ。」

私：救い主が私を祝福してくださった。

18時、ロートでのロザリオと聖体礼儀

私は聖体拝領に向かいましたが、ある修道女が聖体を配っていたため、聖体を受け取らずに頭を下げて、自分の席に戻りました。救い主が霊的に私のところに来てくださったのを感じ、聖体拝領の秘跡を受けた時よりもさらに多くの恵みを受けました。なぜなら、救い主は、私が聖別されていない手から聖体を受け取ることを望んでおられないからです!

1992年10月28日 - 水曜日

11:00～12:30
祈りの集い!

私：「そこで私は救い主に尋ねました。『昨日、教会で私がしたことは正しかったのでしょうか。それとも、別の行動を取るべきだったのでしょうか? 』」
救い主：「あなたがしたことは、私の御心でした。それは正しかったのです。」

私：「今日、8時30分から9時の間に、イエスの絵の前で悪魔が現れました。

その絵は聖別されたもので、ベルギーのマーガレットからいただいたものです。私はこの絵がとても好きで、よくキスしています。絵の前に悪魔の頭だけが見えました。彼は私に向かって醜く笑っていました。
でも、義歯をつけていて、まるで歯科医院から一つ持ち出したかのように見えました。顔はかなり毛深かったです。左の頬には大きな引っかき傷があり、血がにじんでいました。髪は縮れていました。彼はほんの一瞬しか見えませんでした。その後、姿を消しました。彼はイエスを真似ようとしていましたが、うまくいきませんでした。
私は救い主に、これは私の気のせいだったのかと尋ねた。救い主は言った。「彼はただ、君をからかおうとしただけだ。」
私：「悪魔が現れる前に、私は聖人たちの本を読んでいました。その本を読んでいる最中にも、彼は私を邪魔していました。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたに書いてほしい。私があなたに聖痕を刻み込むための許可と、適切な時期を、あなたから得たいのだ。」
私：「主よ、その時は、あなたが望まれる時ならいつでも結構です。」救い主は私に祝福を与えてくださいました。

18時 ロートでのロザリオと聖体礼儀。

1992年10月29日 - 木曜日

8:00〜10:00 自宅で祈りの集い!

フィリピン出身の司祭（シュタイラー宣教師）には大変失望した。彼は手による聖体拝領を擁護していた。彼はミンゴルスハイムのクルハウス・ロクスに滞在中のゲストなので、私は彼のために祈った。救い主：「わが娘よ、書き記せ。手による聖体拝領は冒涜である、と繰り返し語らなければならない。 手による聖体拝領を擁護する者は皆、サタンの望むことを行っているのだ。
その司祭は闇の中にいる。フィリピン出身の司祭は私の問題だ。彼のことについては私に任せておきなさい。あなたが書いたことに忠実に、強くあり続けなさい。」
救い主：「わが娘よ、困難な時代がやってくる。」
私：「親愛なる神様、愛するイエス様、困難な時代とはどういう意味ですか？」
救い主：「大飢饉が訪れる。書き記せ、わが娘よ。地上に対する私の怒りは和らぐことはない。人々は悔い改めなければならない。今ほど多くの人々が地獄へ落ちたことはかつてなかった。彼らは悪魔を信じ、悪魔を選んだのだ。わが娘よ、私に属しているのはほんの一握りだけだ。私の怒りはすべての人々に降りかかる。その時、彼らは自分が誰に属しているのかを知るだろう。 わが娘よ、無益な会話には近づかないようにしなさい。それらはあなたの成長を妨げるからだ。時間は限られている。あなたたちは祈りを最優先にしなければならない。
私：「他に何を書けばいいですか？」　救い主：「私に忠実であり続けなさい。」

私：救い主は私に祝福を与えてくださった。

19:00 ロクス礼拝堂にてロザリオの祈り。

1992年10月30日 - 金曜日

8時30分から11時20分まで、祈りの集い!

救い主：「愛する娘よ、私はあなたの言葉に耳を傾けた。あなたは私のしもべである。あなたが司祭たちに語りかけることは、私の御心である。彼らはあなたの言葉に耳を傾けてはいないが、考えを巡らせている。司祭が泥沼に深くはまり込めばはまり込むほど、耳を傾けることは少なくなるのだ。 わが愛する娘よ、司祭たちのことを悲しむな。彼らは今、混乱しているのだ。悲しいことに、彼らは自分が混乱していることに気づいていない。だからこそ、私はあなたに彼らと語り合うよう頼むのだ。」
私：「ああ、主よ。それは私にとって大きな打撃です。彼らからは、あまりにも多くの高慢さを感じますから。」救い主：「彼らが謙虚になるよう祈りなさい。司祭たちのために、多くの祈りが必要だ。彼らは道に迷った子供たちを連れ戻さなければならないのだ。」
私：「しかし主よ、道に迷った司祭たちが道に迷った子供たちを導けば、両者とも穴に落ちてしまうではありませんか。」
救い主：「その通りだ。」

救い主：「わが娘よ、これを書き留めなさい。私へのあなたの愛は真実だ。あなたは私の愛をもって私を愛している。 あなたは私と共に苦しむことを切望しており、私はあなたよりもあなたを愛しているからこそ、その時を切に待ち望んでいる。私と共に苦しむことを理解できるのは、私を真に愛する者だけだ。わが娘よ、私と共に苦しもうとしてくれることに感謝する。自発的な苦しみは、私と共に苦しむ者たちにとって大きな報いとなる。わが娘よ、私はまだあなたを清めなければならない。」

私：「主よ、神よ、それはどういうことですか？」　救い主：「私の愛の炎によって。」　私：「ああ、主よ、どうか私をさらに清めてください。」

救い主：「再び、あなたの心に痛みが訪れるでしょう。」私：「ああ、主よ、今はそれが理解できません。」

救い主：「それは燃え盛る炎となる。そして、その炎によって、あなたは清められるのだ。あなたはすでにそれを知っているはずだ、わが娘よ。」

私：「ありがとうございます。」

救い主：「わが娘よ、私は、あなたが魂の救いのためにその痛みを捧げることを望んでいる。私とこのように結ばれたあらゆる痛みは、実を結ぶのだ。」

私：「愛に満ちた父よ、私には願い事などありません。あなたが私に望むことを、何でもお望みください。」救い主：「そう、わが娘よ、私には君への願いがある。それは、君が私と共に十字架の道を最後まで歩み通すことだ。」

私：「主よ、あなたの願いは叶うでしょう。愛するイエス様、今は書き続けるのをやめたくありません。あなたの中に留まりたいのです。とても素晴らしいです。主であり神であるあなたを愛しています。この気持ちを言葉では表せません。人々がどうしてあなたを拒むことができるのか、私には理解できません。」

救い主：「わたしを拒んだ者たちは皆、偽りの父を選んだのだ。二つの主に仕えることはできない。わが娘よ、これまで通り、わたしを愛し続けてほしい。」

私：「私は心から祈り、マリアの無原罪の御心を通して、天の父に、イエス・キリストのすべての苦しみ、十字架の道、磔刑以来流されたすべての血の一滴、聖なる五つの聖痕、その功徳、そしてその死を捧げました。 それから、愛する聖母マリアの七つの悲しみ、彼女がこれまで私たちのために流してこられた血の涙、私の祈りと結びつけてくださったすべての祈り、魂の救いのために、教会から泥が取り除かれ、真のペトロの教会が再び立ち上がるために、すべてを捧げました。主よ、御心が行われますように。」

救い主：「わが娘よ、あなたが書いたことを私は喜んだ。
全能にして慈悲深い父なる神、子なる神、聖霊なる神が、あなたを祝福してくださいますように。平安のうちに去りなさい、わが愛する娘よ。」

私：「主なる神に感謝します。三位一体の神が、今、そして永遠に、賛美され、愛され、崇められ、栄光を受けられますように。**アーメン**。

18時　ロートでのロザリオと聖ミサ。

1992年10月31日 - 土曜日

午前7時、ロクス礼拝堂にて聖ミサ。

聖ミサの後、私は30分ほど祈りを捧げました。 私は礼拝堂で聖櫃の真正面に座り、ここで祈ることができてとても嬉しく思います。今朝は、修道女たちと数人の病人を除き、ほぼ全員が聖体拝領の前にひざまずいていました。それを見て、私はとても嬉しく思いました。他の人たちはひざまずく勇気がなかったため、私はよく一人でひざまずいていました。いつの日か、すべてのひざは私たちの主なる神の前に屈することになるでしょう。

11時20分、祈りの後、私は主と一つになりました。救い主：「愛する娘よ、書きなさい。」

私：「イエス様、愛する神様、何を書けばいいのでしょうか？」

救い主：「あなたが私から刻まれる聖痕は、もうすぐそこにある。その時が来たのだ。私を信頼しなさい。聖痕のための試練は終わりに近づいている。」

私：「傷跡について、他に知っておくべきことがあれば教えてください。」

救い主：「はい、まだ知っておくべきことがあります。あなたは、その傷跡について講演を行うのです。」

私：「どこでですか、主よ、神よ？」
救い主：「君が必要とされる場所なら、どこへでも。」
私：「もし司教たちがそれを禁じたら？」
救い主：「あなたがどこへ行こうとも、私はあなたのために語りかける。もし彼らがあなたを拒むなら、それは私をも拒んだことになる。あなたは、私が導くところへ行くのだ。」
私：「主よ、神よ、あなたへの愛と、魂の救いのために、あなたが望むことは何でもいたします。主よ、あなたの御心が行われますように。私の主、私の王、愛に満ちた慈悲深い父よ、私はあなた——三位一体の神——を深く愛しているからこそ、すべてを成し遂げます。」
救い主：「わが愛する娘よ、書き記しなさい。私があなたに刻む聖なる五つの聖痕は、全世界へのしるしである。あなたは全世界の魂のために苦しみを受けるのだから。あなたを拒むすべての魂を、私に委ねなさい。すべての魂は私の御前に立ち、私の前で責任を負わなければならない。それゆえ、あなたを愛さない者たちも含めて、すべての人を愛しなさい。
なぜなら、あなたはそのような魂たちのためにも、私の血を流すことになるからだ。私の愛する娘よ、私たちの前には大きな働きが待っている。」
私：「ああ、主よ。私は、自分の働きはもう終わったのだと思っていました。」
救い主：「それは始まりに過ぎない、わが娘よ。私たちが栄光に輝く時、善意を持つ者たちすべてを私たちのもとに引き寄せるだろう。私の血は、あなた方の救いであり、癒やしである。それはあなた方を永遠の死から解放する。私の聖なる血が深く崇められるとき、あなた方の罪を清めることができるのは、私の血だけである。あなたは聖なる血の泉となり、毎週金曜日にそこから血が流れ出るだろう。愛する娘よ、あなたの忍耐に感謝する。」
私：「これを書くのですか？」
救い主：「そう、それを書き記すべきだ。」
私：「主よ、私はすべてを理解し、あなたと共にあなたの御心を行うことをすべて受け入れます。私が自分の意志をあなたに委ねたのですから、あなたが言われたとおりに成し遂げられますように。」

救い主は私に祝福を与えてくださいました。

12時45分 — ロズヴィータから電話があり、もし私がよければ、彼女の息子ヴォルフラムが私と一緒に日記を書いてくれるとのことでした。救い主から、もっと早く書くようにとすでに促されていたので、私はそれをとても嬉しく思いました。私は彼女に、まず救い主に尋ねてみると伝えました。
12時55分 — ヴォルフラムに書いてもらうのが正しいかどうか、救い主に尋ねました。救い主：「そう、わが娘よ、彼に書かせなさい。」

13時30分から18時まで、ヴォルフラムと一緒に日記を書きました。彼はとても熱心で、A4用紙8ページ分も書いてくれました。この恵みを神様に感謝します。

18時15分から21時30分まで、家事をしました。

22時30分、明日の朝、聖ミサの後、ヴォルフラムがまた書き続けられるように、メモ用紙に書いていた日記をノートに書き写しました。

23時30分、悲しみのロザリオを唱えました。その後、サウナに2回入りました。
午前1時15分、心を込めて祈りました。午前2時30分まで本を読みました。約3時間眠り、その後午前5時50分頃に起きました。まず祈りを捧げ、それから救い主からのメッセージを受け取りました。

1992年11月1日 - 日曜日

自宅にて
祈りの会!
救い主：「わが愛する娘よ、これを書き留めなさい。大きな危険が目前に迫っている。戦争はさらに拡大しつつある。」
私：「主よ、ドイツ連邦共和国も脅威にさらされているのですか？」救い主：「わが娘よ、ヨーロッパ全体が脅威にさらされているのだ。」
私：「主よ、神よ、どうか私たちを救ってください。あなたならまだすべてを食い止めることができます。どうか、あなたの怒りを私たちに下さないでください。主よ、どうか私たちを憐れんでください。」
救い主：「わが娘よ、あなたたちには恐ろしい日々が訪れるだろう。」私：「ああ、救い主よ、それ

なら、私は礼拝堂を建てるべきなのでしょうか？」
救い主：「一刻も早く建てなさい。わが娘よ、書き記しておきなさい。革命が近づいている。それは大混乱をもたらすだろう。キリスト教徒たちはフリーメイソンと混ざり合うことになる。

キリスト教徒の間に大規模な背教が起こるだろう。たくさん祈りなさい、わが娘よ。わが娘よ、昨日あなたがたがしたことは良かった。」
私：「ヴォルフラムと一緒に書いたことのこと？」
救い主：「そうだ。お前たちは私の意志を果たした。書き続けなさい。私はこの働きを豊かに報いるから。わが娘よ、私はあなたに私の恵みを授ける。」
私：「まだ何か書き留めるべきことがありますか？」
救い主：「書きなさい、わが娘よ。まず、あなたの心は貫かれるでしょう。」
私：「神様、あなたは私が五つの聖痕をすべて同時に受けるとおっしゃいましたよね。」
救い主：「後で別の決断を下すかもしれない。」私：「主よ、あなたの御心が行われますように。」
救い主：「わが娘よ、そうならなければならないのだ。準備をしておきなさい、わが娘よ。私はあなたたち、わが子供たちを愛している。」私：「今、私は一人です。」
救い主：「そう書き記しなさい。わが娘よ、私はあなたと、あなたに親しいすべての人々を祝福する。」私：救い主は私を祝福してくださった。

8時、私は聖ミサに出席した。

9時30分から12時30分まで、ヴォルフラムと一緒に日記を書いた。

13時30分、黙想。

19時00分から20時00分まで——祈りの集い！
救い主：「わが娘よ、君と話せて嬉しい。わが娘よ、君に何かを贈ろう。」
私：「今ですか、それとも苦難に直面した時ですか？」救い主：「今だ。」
私：「それを喜んでいいですか？」
救い主：「喜んでいいのだ。なぜなら、私はあなたに私の愛を授けるからだ。」
私：「それは素晴らしい贈り物です。主よ、神よ、ありがとうございます。」
救い主：「愛する娘よ、それを書き留めなさい。私があなたに与えるこの愛こそが、あなたの心の中の炎となるのだ。」
私：「どうか、この炎を燃やし続けてください。」
救い主：「燃やし続ける。わが娘よ、あなたは私の愛にも耐えなければならない。」私：「そうします、主よ、神よ。これは、私の心が貫かれる前兆なのでしょうか？」
救い主：「そうだ、わが娘よ、お前はそれを悟った。私の愛があってこそ、その痛みを耐え抜くことができるのだ。」
私：「救い主は私を祝福してくださいました。

1992年11月2日 - 月曜日

10時45分、医師室にて 祈りの交わり！

救い主：「愛する娘よ、書き記すべきだ。」私：「愛するイエス様、何を書き記せばよいのですか？」
救い主：「あなたが書くものはすべて、大切に保管しなさい。サタンは、私があなたに授ける言葉に激怒している。やがて、これらすべてが成就する時が来る。今日のあなたの働きは、私の心に留まった。 私：「主よ、今日、私がほぼすべての患者さんにあなたのことを話し、祈りを配り、奇跡のメダリオンを贈り、そして全員を告解に送ったことのことでしょうか？」救い主：「そうだ！わが娘よ、あなたは私のぶどう畑で立派な働き手だった。愛する娘よ、私はあなたに一つ願いがある。」
私：「親愛なる神様、それが何なのかはまだ分かりませんが、私はあなたにすべてを捧げる覚悟があります！」 救い主：「『時間』だ。」
私：「親愛なる神様、時間はもともとあなたのものだったのです。」
救い主：「わが娘よ、その通りだ。わが娘よ、私はあなたから、あなたの言葉を願っている。」

私：「私の言葉をあなたに捧げます。でも、それをどう理解すればいいのでしょうか。それでは、どうやって話せばいいのでしょうか。実のところ、私はすでにすべてをあなたに捧げています。あなたは私の言葉をお使いになっています。もしあなたが私にこれらの言葉を授けてくださらなかったなら、私は患者さんに何も言うことができなかったでしょう。私の言葉は、あなたの言葉なのですから。」
救い主：「わが娘よ、それも正しい。ほら、わが娘よ、私はあなたの中で働いているのだ。」私：「ありがとう、私のイエス様。今、あなたがおっしゃっている、私の中での働きが理解できました。」
救い主：「そう、私はこれからもあなたの中で働き続けるつもりだ、わが娘よ。ただ、その働きはもっと痛みを伴うものになるだろう。」
私：「神様、私の心のことですか？」救い主：「そう、その通りだ。」
私：「私の心はすべてあなたのものです。それなら、私たち二人とも痛みを感じるということですね。」救い主：
「そう、娘よ、その通りだ。」
私：「愛する救い主よ、魂が救われるよう、どうか私の心に働きかけてください。愛する神様、私にはとても大きな願いがあります。」
救い主：「それは何ですか？」
私：「あなたが愛そのものであるからこそ、私がいつもあなたと共にいられますように。」
救い主：「愛する娘よ、あなたはすでに私の中に、そして私と共にいる。あなたはもう私なしではいられない。そうでなければ、あなたは渇き死んでしまうだろう。あなたの祈りは私の心に響く。どうか絶えず祈り続けてほしい。娘よ、私はあなたに礼拝堂のための献金者を送ってあげよう。」
私：「それを書き留めてもいいですか？」救い主
：「ええ、書き留めなさい。」
私：「主よ、神よ、これは私にとって大きな喜びです。なぜなら、この礼拝堂で毎日祈りが捧げられることを願っているからです。主よ、神よ、あらかじめ感謝いたします。」
救い主：「マリオンに書き留めさせなさい。二人とも書きなさい。」
私：「ありがとうございます、主よ、神様。彼女と彼にそう伝えます。もし彼女がこれ以上書き続けたくないと言ったら？」
救い主：「彼女は書き続けたいと思っている。」
私：「それは嬉しいですね、親愛なるイエス様。彼女を失いたくないのですから。ですから、親愛なる救い主よ、書き続けるためには三人が必要ですね。」
救い主：「急いで書かなければならない。」
私：「はい、神様。私たちはあなたの恵みによって書きます。どうか、書くための豊かな恵みを私たちに与えてください。」
救い主：「あなたと、マリオン、そしてヴォルフラムを祝福します。」
私：「主なる神に感謝します。イエス・キリストとマリアに栄光あれ。」

追伸：救い主はこう言われました。「父なる神、子なる神、聖霊なる神があなたを祝福します。」心の中で、なぜ
祝福の言葉を述べる際に「あなたたち」と言わなかったのだろうと不思議に思いました。

救い主：「私は彼女たちを祝福したのだ、わが娘よ。」

12時30分——私は病院の礼拝堂で心から祈りました：
救い主：「娘よ、私はあなたが私を愛する以上に、あなたを愛している。」
私：「愛に渇いていたから、涙がこぼれました。この泉から飲めば飲むほど、渇きは大きくなるのです。」
救い主：「娘よ、あなたに何かを授けよう。癒しの恵みだ。」私：「えっ？」
救い主：「あなたは癒すことができる。魂も肉体もね。」私：「私には何もできません！」
救い主：「私が、あなたの中で癒やすのだ。」私
：「いつですか、愛する神様？」
救い主：「今すぐ始めなさい。」
私：「親愛なる神様、私の魂の導き手よ、私はあなたの恵みによってそれを行います。主よ、あなたの御心が行われますように。」
救い主：「私が癒しについて話したことを書き留めなさい。」

13時45分、ヴェロニカと私はコーヒーを飲み、ロズヴィータのケーキを食べた。

医師の助手が来て、レントゲン撮影のために患者を連れてきました。私はその医師にケーキを一切れ差し上げました。彼は私に、「このケーキはあなたが焼いたのですか？」と尋ねました。
私はこう答えました。「これは神の摂理です。ただ神を信頼すればよいのです。」彼は「その通
りですね」と言いました。
私は彼に言いました。「皆さんが天国に行けるよう、お祈りしています。」すると彼は、「天国はも
う満員ですよ」と言いました。
私は「天国ではなく、地獄のことですよ」と言いました。彼は笑いま
した。
私は、戸棚に貼ってあった祈りの言葉を彼に見せました。そして、勤務中であっても、時間を割いて数分間、祈りに捧げるようにと伝えました。彼は嬉しそうに立ち去りました。

1992年11月3日 - 火曜日、医師
室にて 祈りの交わり！

救い主：「愛する娘よ、それを書き留めなさい。昨日、あなたが取った行動が私の心にかなったからだ。」私：「それは私ではありません。あなたが私を通して行動されたのです。」
救い主：「あなたは私の御心を悟ったのだ。わが娘よ、あなたは常に自分の苦しみを私に捧げるべきだ。」
私：「天の父様のことだと思っていました。」
救い主：「私は三位一体の神である。あなたは三つの位格を持つ神に祈っているのだ。すべてを私に捧げなさい。」私：「私はすでにすべてをあなたに捧げました。まだ捧げていないものは何ですか？」
救い主：「お前の愛だ。」
私：「主よ、私は魂の救いのために、私の愛をあなたに捧げます。」私は、これらすべて
が自分には理解できないことだと考えていました。

救い主：「わが娘よ、あなたがすべてを理解していないことを、私は喜んでいる。幼い子は、すべてを理解しているからではなく、ただすべてを受け入れるのだ。」
救い主：「書き記せ、わが娘よ。あなたが受ける苦しみは、多くの人々を混乱に陥れるだろう。彼らには私の光が欠けているが、自分の悪行が露見しないよう、むしろ闇の中に留まりたいと願っているからだ。豚は自分の汚物の中で転げ回るのが好きだ。」
私：「ああ、主よ、そんなことは書けません。」
救い主：「いや、書きなさい。安心しなさい、わが娘よ。私を信じない人間の中には、動物よりも劣っている者もいるのだから。」
私：「ああ、もう書けません、救い主様。」
救い主：「わが娘よ、私はあなたの疲れを取り除いてあげよう。」私：「ありがとう
ございます、主よ、神よ。」
救い主：「私は、あなたに欠けているものをすべて補うことができる。わが娘よ、セルビアでは内戦が起こるだろう。多くの荒廃が生じるだろう。バルカン半島では地震が起こるだろう。多くの死者が出るだろう。わが娘よ、私の怒りから逃れる者は誰もいない。誰もが、この世界で起きていることに対して責任を負っているのだ。
わが娘よ、私に忠実であり続けなさい。私へのあなたの愛は、私の心にかなう。これからも私を愛し続けてくれ、わが娘よ。」私：救い
主は私に祝福を与えてくださった。

18時　ロザリオ、赤のミサ。

22時30分、義母の部屋でニュースを見て、その後、映画を観た。私は長い間、映画など観ていなかった。しかし、映画が終わった後、私は試練に襲われた。 私は心の底から泣いた。神様が私を見捨てたのだと思った。神様の声を聞くことはできても、姿が見えないことについて、私は神様に多くのことを非難した。もしかすると、悪魔が私に語りかけているのかもしれないとも思った。私はとても孤独で、皆に見捨てられたように感じた。私は泣きながらすべてを諦めようとしたが、やがて寝室にある大きな十字架の前にひざまずいた。
私は十字架を抱きしめて泣きました。久しぶりに、涙が溢れ出ました。しばらくすると、もう泣けなくなりました。救い主が私の涙を拭い取ってくださったのです。私は安らかに眠りにつきました。

1992年11月4日 - 水曜日

8時30分

祈りの交わり!

昨日の夜遅く、試練に直面しました。今日は多くの犠牲の祈りを捧げました。そして、救い主と一つになりました:

救い主:「私に対するあなたの愛は素晴らしい。」私:
「どれほど素晴らしいのですか? 」
救い主:「その通りだ。私は君にもっと愛を授ける。書き留めておきなさい、わが娘よ。君の心は私の心だ。」
私:「でも、それはもうおっしゃいましたよね。」救い主:「あな
たは、その中に私の痛みを感じているのだ。」
私:「まるで、心が病んでしまうような気がします。」
救い主:「私はお前の医者だ。薬を使わずに癒すことができる。私の愛の炎で、すべての痛みを消し去る。わが娘よ、私は昨日の試
練を許したのだ。テレビドラマなど見てはならない。お前は完全に私のものだ。」
私:「主よ、神よ、どうかお許しください。もう二度と見ません。」救い主:「書きなさい、わが娘よ。君に少し頼
みたいことがある。」
私:「はい、主よ、神よ。もうあなたに差し上げられるものは何もありませんが、すべてはすでにあなたのものですから、お渡しします。
」
救い主:「わが娘よ、一語一語書き記しなさい。傷跡を刻み込むために、あなたからの『はい』が必要なのだ。」
私:「主よ、神よ。聖なる五つの聖痕を刻んでくださるよう、私はあなたに「はい」とお答えします。主よ、神よ、あなたを愛しています
。他に答えようがありません。」
救い主:「わが娘よ、あなたは私の愛する子です。今年中に、あなたに聖なる五つの聖痕を刻み込みましょう。」
私:「つまり、1992年の中のことですね。」
救い主:「そう! その通りだ。傷跡が刻まれる時、あなたは私を見るだろう。」私:「それがあなただと、どうや
って見分ければいいのですか? 」
救い主:「私は愛そのものである。私は闇を追い払う光である。私が言うことはすべて行いなさい。愛する娘よ、私をもっと信頼しなさ
い。世俗的な雑談からは遠ざかりなさい。それはあなたを傷つけるだけだ。あなたは私と天の母の保護の下にある。
あなたの守護天使たちは常にあなたを見守っている。疑ってはいけない。信仰を持ちなさい。」私:「神様、
もうこれ以上書くことができません。」
救い主:「それは分かっている、わが娘よ。」

私:救い主は私に祝福を与えてくださいました。その祝福の中に、私は世界のすべての魂を包み込みました。

19:00 ロクスの礼拝堂にてロザリオと聖ミサ。

1992年11月5日 - 木曜日

医師室にて
7時55分、ヴェレーナと一緒に集めた服や靴を私の車に運び込み、ホームレスの人々に渡す準備をした。
8時30分 — 大学病院(職員と患者)のためにも心を込めて祈りと執り成しをした後、私は救い主に尋ねました。「私が書くことを望まれます
か? 」
救い主:「はい! そうしてください、わが娘よ。」
私:「慈悲深い神様、何を書けばいいのでしょうか。」
救い主:「何を書くかについて恐れる必要はない。あなたが書くことは私の御心である。書き続けなさい、わが娘よ。あなたの使命は、私
があなたに授けることをすべて行うことなのだ。」
私:「たとえ司祭たちが私に敵対したとしても? 」
救い主:「わが娘よ、私は真理そのものである。あなたの中での私の働きは間近に迫っている。しかし、その前にまだいくつかの困難があ
る。」
私:「それについて、何か教えてください。」
救い主:「教会側から不都合が生じるだろう。」私:「神様、それは私にとって大変つらいことです
。どうすればいいのですか? 」

救い主：「私があなたに示したことを話すだけでよい。それ以外は私に任せておきなさい。」

私：「救い主様、私は尋問されるのでしょうか？」
救い主：「わが娘よ、あなたはすでに悪魔から多くの魂を奪ってきた。悪魔はあなたに激怒している。彼は、あなたを苦しめるために手先を巧みに使い分ける。用心しなさい！　焦ってはいけない！　悪魔はあなたの忍耐に耐えられない。あなたは悪魔に打ち勝つだろう、わが娘よ。勇気と強さを持ちなさい。
わが娘よ、もう少し書きなさい。あなたが待ち望んでいる司祭は、もうすぐ来る。彼は必ず来るから安心しなさい。あなたは司祭なしでいることはない。あなたには謙虚な司祭が必要だ。彼は私の御心を見抜いている。わが娘よ、書き続けなさい。あなたは疲れているから、休息が必要だ。この書き物はもうすぐ終わる。 私はあなたの勤勉さを高く評価している。あなたを助けてくれている人々の勤勉さも同様だ。私はそのことに対して、あなた方全員に豊かな報いを与える。この働きは百倍の報いを受けることになる。確信しなさい。」 救い主：「わが娘よ、あなたはさらに清くならなければならない。私は私の愛の炎で、あなたをさらに清くする。あなたが感じるこの炎は、あなたの中で働く私の御業である。」
私：「ああ、主よ、それなら安心しました。時々、心が燃えているような気がしていたのです。」救い主：「この愛の炎によって、私は多くの魂を救うのだ。多くの者は、もはやこの炎に耐えられなくなっている。」
私：「ああ、主よ。この愛の炎を私の中で働かせてください。私の中に何の汚れも残らないよう、どうか私を清めてください。」
救い主：「その通りになる。あなたは、私が望むほどに清くなるだろう。」
私：「主よ、神よ、この清らかさを、心からあらかじめ感謝いたします。」救い主はいつものように私を祝福し、こう言われました。「平安のうちに去りなさい、私の愛する娘よ。」

18時　ロートでロザリオと聖ミサ。

20時30分から23時15分まで、ヴォルフラムと共に日記を書いた。これほど多くを書くことができたという、この大きな恵みに神に感謝します。

1992年11月6日 - 金曜日 - 聖心

8時45分 医師室
今朝はすでに1時間半以上も祈っていました。

救い主：「愛する娘よ、書きなさい。私に必要なのは……」私：「何が必要なのですか？」
救い主：「あなたが書き記したものはすべて、整然と整理されなければならない。あなたが書き記したものは、まだ印刷されなければならないのだ。」
私：「主よ、私たちに速く書くことができるよう恵みをお与えください。悪からの妨害がたくさんあるのですから。」
救い主：「わが娘よ、わたしはあなたたちにその恵みを与えた。」
私：「私は救い主に、ヴォルフラムが書いたことが正しいかどうか尋ねました。」
救い主：「わが娘よ、彼は私の望む通りに書いている。わが娘よ、準備をしておきなさい。聖痕は始まりにある。」
私：「親愛なる神様、私にはそれが理解できません。どういう意味なのか教えてください。」
救い主：「わが娘よ、君に残された時間は少ない。私の子供たちのほとんどは、悔い改めようとはしない。私は彼らを懲らしめなければならない。私の怒りは彼らに降りかかる。すべての子供たちは私のものだ。」
私：「今日はいつもと違いますね。まるで罰を与える神のように思えます。」救い主：「私の裁きの座には、良いものは何も持ち込まれない。
彼らは枯れ木のようなもので、燃やされるしかない。わが娘よ、私の怒りが和らぐよう祈りなさい。」
私：「愛する天の父よ、どうかあなたの怒りをこの地上に降らせないでください。父よ、彼らは自分が何をしているのか分かっていません。どうか私たちをお赦しください。恵みを私たちに注いでください。そうすれば、エバの子らが皆、マリアの子となるでしょう。マリアは私たちの母であり、地上のすべての子らの女王だからです。
聖母マリアよ、どうか罪人の避難所となり、神の御前で私たちの取り成し手となってください。私たち、あなたの子供たちはあなたを愛しています。
私たち全員を、あなたの御衣の下に包み込んでください。
救い主：「わが愛する娘よ、絶えず祈りなさい。罪はあまりにも大きい。わが娘よ、これまで私があなたに告げてきた通りにすべてを行いなさい。私の真理を守りなさい。私はあなたと共にいる。」

私：救い主が私に祝福を与えてくださいました。

18時 ロザリオと聖体祭（赤）。魂のミサがあったため、聖心祭は行われず、聖体の公開もなかった。

1992年11月7日 - 土曜日

12時10分から13時10分まで　祈
りの集い!
救い主：「娘よ、書きなさい。」
私：「何を書けばいいのですか？」
救い主：「書きなさい。それは重要なことなのだ。わが娘よ、たとえ痛みが和らぐことがなくても、私に忠実であり続けることが、お前の使命なのだ。」
私：「親愛なる神様、あなたはすでに、私が苦しみの中でも忍耐強くなれるよう、恵みを与えてくださいました。」
救い主：「わが娘よ、もしそれをまだ覚えているなら、なおさら良い。」私：「主よ、神よ、あなたが『重要』とおっしゃるのは何のことですか？」
救い主：「そうすれば、あなたは完全に私の中にいることになる。」
私：「ああ、私の愛する方、そうすれば私はあなたの豊かさの中にいることになります。これ以上望むものはなく、いつもあなたと共にいること、それが私にとって大切なことです。」
救い主：「わが娘よ、私があなたの主であり神であること、そしてあなたの『はい』が『はい』であり続けることが重要なのだ。」
私：「主よ、神よ、どうか私に恵みをお与えください。私があなたに捧げた『はい』が、あなたの望む通りに揺るぎないものとなりますように。」
救い主：「娘よ、君に一つお願いがある。」
私：「またですか？お許しください。はい、愛するイエス様。」
救い主：「私が始められるように、あなたの心と、あなたの手と足を私にください。」
私：「それはもうあなたに差し上げました。私の気持ちは変わりません。いつでも始めていただいて結構です。」
救い主：「あなたは私に大きな喜びを与えてくれた。」私：救い主は私

を祝福してくださった。

13時35分から17時05分まで、ヴォルフラムと一緒に日記を書いた。
17時20分、告解のために教会へ行った。中は暗く、誰もいなかった。誰もいないだろうと思い、告解室に入った。
すると、ヴォグト神父が声をかけられた。
まず自分の罪を告白し、その後、教会について私がどれほど腹を立てていたかを神父に話した。 私はヴォグト神父に、ミサの後、5分間だけ照明を点け続けてほしいとお願いした。神父は、教会管理人の女性が家に帰らなければならないと言った。私は、神父自身が施錠できるよう、彼女から鍵を取り上げるべきだと伝えた。それから、ミサが終わった直後に侍者たちと一緒に鐘の練習をすべきではないと伝えた。まだ教会には、祈りを捧げたい人が何人か残っているからだ。
私は彼に、「私たちが受け取ったのはパンではなく、三位一体の神なのです」と伝えました。
また、聖心金曜日が祝われず、至聖体が公開されなかったことについて、彼に不満を述べました。彼は、死者のためのミサがあるため、それは不可能だと答えました。
そこで私は、「土曜日のミサを日曜日にずらすことができるのなら、聖心金曜日もずらすことができるはずだ」と彼に言いました。
それから、土曜日のロザリオの祈りの最中に、教会で聖歌隊が練習を行うのは好ましくない、と彼に伝えました。告解中にも同じことが起きていました。告解の後、私は彼のために
「悲しみのロザリオ」を唱えました。

19時から20時まで、日記をつけていました。
20時45分、フリドリンがやって来た。
彼と宗教について話をした。彼はまた、シュパイヤーでの手による聖体拝領の問題についても話してくれた。
11:00から11:45まで、再び日記を書いた。

1992年11月8日 - 日曜日

6時30分から7時45分まで、自宅で祈りの集
い!

救い主:「わが娘よ、あなたが祈ったことは素晴らしい。私へのあなたの愛は真実だ。あなたの隣人たちのために、真の愛を願い求めなさい。わが愛する娘よ、これを書き留めなさい。ヴォクト神父は私の司祭である。彼は、あなたがすでに理解していることを理解するには、まだ少し時間が必要だ。
彼のために祈り続けてください。司祭たちのために祈られることは、ほとんどありません。司祭は、私の前で大きな責任を負っています。彼らのために祈ってください。
わが娘よ、フォクト神父は、昨日あなたが告解室で彼に語ったことを受け入れた。それ以外のことは、私に任せておきなさい。」
私:「シュパイアーの司教についてお尋ねしました。その司教は、若い司祭志願者に、聖体を自ら受け取るよう強要したのです。」
救い主:「その司教は私の御心を行っていない。彼は『偽りの父』の御心を行っているのだ。」私:「司教がそのようなことをする時、その学生はどうすればよいのでしょうか? 」
救い主:「わが娘よ、彼らはこうした事柄のために祈らなければならない。」私:「親愛なる神様、まだ何か書き留めておいたほうがよろしいでしょうか? 」
救い主:「愛する娘よ、書き留めなさい。あなたからの私への愛には忍耐がある。私への愛におけるこの忍耐は、私からの恵みである。私の愛におけるこの忍耐を保ちなさい。それは大きな美徳である、娘よ。」
私:「天の父よ、心から感謝いたします。これを真珠のように大切に守り続けます。」
救い主:「わが娘よ、もう一つ書き記しなさい。大戦争が目前に迫っている。それは東からやってくるのだ、わが娘よ。人々は猛スピードで奈落の底へと突き進んでいる。サタンは彼らをその網にかけ、彼らは盲目であり、それに気づいていない。この道が彼らにとってあまりにも快適であるため、彼らは立ち返ろうとはしない。
これから降りかかるあらゆる苦難を受け入れなさい。それが私の御心である。そうすることで、まだ救えるものを救うことができるのだ。」
私:「ああ、主よ、これを書くのはとても辛いことです。」
救い主:「私の子供たちが、二度と戻ることのできない奈落へと駆け込んでいくのを見守ることの方が、私にとってははるかに辛いのだ。そう、娘よ、今日はこれで終わりだ。」

私:救い主は私に祝福を与えてくださいました。

8時、赤のミサ。

9時30分から11時30分まで、ヴォルフラムと共に日記を書いた。

13時、ロザリオと祈りの時間。ヴォクト神父が聖心祭の追祝を行い、至聖体を露出させたことに驚いた。
教会報には、祝福を伴う黙想会と記載されていた。

14時15分、エーリッヒが私のところへやって来た。
夫によると、1時間の間にある女性から4回も電話があり、ドハット神父に恋人がいて、今その女性の家の前に神父の車が停まっていると告げてきたそうだ。私は、サタンが祈りのグループの司祭までも私から奪おうとしているのだと思った。その女性は悪魔に取り憑かれているかもしれないと思い、彼女の話を信じなかった。

1992年11月9日 - 月曜日

午前5時15分から6時15分まで、自宅で祈り
の集い!
救い主:「愛する娘よ、書き留めなさい。あなたに刻まれる聖痕は、教会で与えられるだろう。まず、あなたの心が貫かれるのだ。」
私:「でも、私は聖痕を一度にすべて授かるとおっしゃいましたよね。」
救い主:「私は自分の望むようにできる。計画を変えることもできる。あなたは心の聖痕から多くの血を流すことになる。その血を、世界中のすべての魂のために捧げなさい。」
私:「では、哀れな魂たちは? 」
救い主:「煉獄にいる哀れな魂たちのためにもだ。」
私:「『煉獄』と書いたのは正しいのか、と救い主に尋ねました。」

救い主：「そこは浄化の場所だ。
傷跡が刻まれる際、あなたは大きな痛みを感じるだろう。その痛みは、あなたがこれまで経験してきた痛みとは比べものにならない。
それは、あなたの中に宿る私の痛みとなるのだ。」
私：「ヴォクト神父に告解した後、私は心に大きな痛みを感じました。ヴォクト神父が『聖心の祭日』を祝わなかったことが、私を悲しませました。その痛みは
もあなたから来たものだったのですか？」
救い主：「わが娘よ、司祭たちがわたしを侮辱するたびに、あなたは痛みを感じるだろう。」
私：「親愛なる神様、最近、食事の後にいつも吐き気を感じます。教会にいるときでさえ気分が悪くなってしまいました。」
救い主：「私があなたの中にいるなら、食べる必要はない。」私：「主よ、そのことについてはまだ
よく理解できていません。」
救い主：「私はあなたの命そのものだ。私はすべてに取って代わることがで
きる。」私：「でも、悪魔も悪を引き起こすことができます。」
救い主：「しかし、私があなたと共にいる以上、悪魔はあなたから私を奪うことはできない。あなたの吐き気は、あなたの中にある世俗的なものなのだ。」
私：「それは何のことですか？」
救い主：「君は世の罪を背負っている。罪は大きな重荷であり、それこそが悪なのだ。」私：「でも、教会にいると、よく気分が悪くなることがあります。」
救い主：「教会の中の悪は、外にあるものよりもひどい。教会からその悪が取り除かれるよう祈りなさい。」
私：「聖体拝領の時に、聖体の破片が床に落ちて踏みつけられること、つまり『キリストの体』のことですか？」
救い主：「それもそうだ、娘よ。」
私：「それとも、不純な心であなたを受け入れる人たちのことですか？」救い主：「そう、それによって彼らは罰を招くのだ。」
私：「それとも、聖別されていない手であなたが配られるからでしょうか。この無関心もまた悪なのでしょうか？」救い主：「そう、娘よ、その通りだ。」
私：「それなら、この悪は速やかに教会から排除されなければなりませんね。」
救い主：「わが娘よ、私はすべての司祭たちにそうすることを求めている。さもなければ、私の怒りが彼らに降りかかるだろう。」
私：「はい、主よ、神よ、わかりました。」
救い主：「あなたが書くためにこんなに早く起きてくれたことを嬉しく思います。誰にも邪魔されなかったのですね。」

私：救い主は私に祝福を与えてくださいました。

12時15分、耳鼻咽喉科クリニックの礼拝堂にて

『主の天使』の祈りの後、私は救い主に祈りました。ある女性が匿名で電話をかけてきて、ドチャット牧師の悪口を言っていたことを、彼に伝えるべきかどうか知りたかったのです。
救い主：「彼に伝えて、その女性のために祈るように言いなさい。」

今日の午前中も、私は悪からの攻撃を何度か受けました。悪が忍び寄ってきた時にそれを認識できる恵みを、神に感謝します。今回は、悪は義母を通じて襲ってきました。
18時、ロザリオと聖体礼儀（赤の祭服）。
修道女は従順でなく、また私に手での聖体拝領を勧めてきました。
私は救い主に頭を下げ、聖体を受け取らずに自分の席に戻りました。救い主が霊的に私のところに来られました。私は多くの恵みを受けました。

20時 祈りの会
今日、ラテン語での祈りが多すぎたとして、至聖体の前で不満を漏らす人が2、3人いました。

1992年11月10日 - 火曜日

8時00分

祈りの集い!

祈りの集会で初めて、ラテン語でたくさん祈りました。23時過ぎ、ドチャット神父に告解をしました。私は神父の目に恐ろしいほどの冷たさを見ました。

救い主：「私が許したのだ。それはサタンだった。お前がそれを知っている以上、私の司祭たちは脅かされている。」私：「主よ、神よ、私はただその目を見ただけです。昨日のことを思い出すと、今でも気分が悪くなります。できれば二度と教会には行きたくなかった。しかし、私はあなたを愛し、あなたに忠実ですから、あなたと共に悪魔と戦う覚悟があります。」

救い主：「あなたがそれを悟ってくれたことを嬉しく思う。わが娘よ、あなたはそれを乗り越える恵みを受けたのだから、歩み続けなければならない。私と共に、あなたは彼を打ち負かすだろう。」

私：「昨日、ロザリオをイアテイン語で祈ったのは正しかったのでしょうか? 」救い主：「書き留めなさい、わが娘よ。イアテイン語で多く祈らなければならない。私はわが民のためにラテン語を選んだのだ。 教会はこれからもラテン語で祈り続けなければならない。ラテン語で祈る私の子供たちには、特別な報いを与えるつもりだ。娘よ、昨日のように続けていきなさい。」

私：「でも主よ、彼らは何も理解できないと不満を漏らしていました。」救い主：「わが娘よ、私はそれを求めているのだ。」

私：「神様、司教たちはラテン語の祈りをほとんど廃止してしまいました。」救い主：「教会では再びラテン語で祈られるようになる。」私：「はい、主よ。おっしゃる通りにいたします。」

救い主：「私は信者たちをあなたのもとに導く。彼らはラテン語で祈るだろう。不満を漏らす数人の人々も、あなたに合わせるべきであり、あなたが彼らに合わせる必要はない。私へと続く狭い道は、すべての子供たちのための共同の祈りを求めている。すべての祈りをラテン語で捧げる必要はない。昔から祈られてきたものであれば、私にはそれで十分だ。」

救い主：「わが娘よ、君に一つお願いがある。」

私：「主よ、それが何であれ、私はあなたに差し出し、『はい』とお答えします。」救い主：「私は、あの哀れな魂たちがあなたの前に現れることを許すための、あなたの許可を必要としている。」

私：「それは私にとって無関心なことではありません。しかし、もし私があなたと共に彼らを助け、それによって彼らが煉獄からより早く解放されるのであれば、すぐに許可を差し上げます。主よ、神よ、私の意志ではなく、あなたの御心がなされますように。ただ、あなたは彼らを私に識別できるようにしてくださなければなりません。そうでなければ、悪魔もまた、苦しむ魂のように装うことができるからです。」

救い主：「わが娘よ、私から遣わされる貧しい魂は、すべてあなたが見分けられるようになる。そのために、私はあなたに私の恵みを与える。あなたはすでに、貧しい魂たちを大いに助けてきた。」

私：「主よ、私は彼らのために多くの聖なるミサを捧げ、彼らのために常に聖別されたろうそくを灯し、一日に何度も、あの哀れな魂たちに聖水を授け、多くの免罪の祈りを捧げています。それのことでしょうか? 」

救い主：「それによって、あなたは彼らを大いに助けてきた。」

私：「親愛なる神様、あの哀れな魂たちが私の前に現れたとき、どうか私の恐怖を取り除いてください。」救い主：「あなたは恐れることはない。なぜなら、あの哀れな魂たちは、あなたの願いのために多く祈ってくれているからだ。」

私：「ああ、主よ、神よ、彼ら全員を祝福してください。これからは、彼らのためにさらに祈ります。彼ら全員を愛しています。なぜなら、彼らは皆、いつか天国に行き、あなたを賛美し、称え、栄光を捧げるからです。」

救い主：「わが娘よ、あなたが書いたことに、私は特に喜びを感じた。私、救い主は、自らに祝福を与えた。」

18時 ロザリオと聖体礼儀（赤のミサ）。

今日、私は21時30分頃に寝ようとしていました。しかし、ベッドに入ろうとしたその瞬間、悪魔が2メートルの大きな十字架とテーブルを、全力を込めて床に投げつけました。テーブルの上には、ロダルベン産の尊い血による天のしるしが置かれていました。

さらに、聖母の「永遠の助け」の絵と、シスター・ファウスティナによる慈悲深いイエスの絵も置かれていました。悪魔はそれらすべてを床に投げつけました。

尊い血の絵は壊れませんでした。悪魔は、再び私の周りにいることを知らしめたのです。

その後、私は部屋中に聖別された塩をまきました。私は一晩中眠り続けました。

イエスは私と共にいてくださる。彼は私に何一つ害を加えることはできない。

1992年11月11日 - 水曜日

8時30分から9時20分まで、祈
りの交わり!

救い主:「愛する娘よ、それを書き留めなさい。私はあなたに書いてほしいのだ。」私:「生ける
神の御子イエス様、何を書けばいいのですか? 」救い主:「娘よ、私はあなたに何かを求めている
のだ! 」
私:「私に何を求めておられるのですか。私がまだあなたに差し上げていないものはありますか? 主よ、私はあなたを深く愛しているので、何も拒むことはありません。もし私の愛があなたに対して不十分であるなら、どうか、私が決してあなたに『いいえ』と言わないよう、恵みをお与えください。なぜなら、あなたが私に求めておられることは何でもするつもりだからです。あなたが私に求めておられることについては、あなたの御心が成されますように。 そして今、私はすでにあなたに『はい』と答えているのだから、それを知ってもいいのです。」
救い主:「わが娘よ、私はあなたからの承諾を求めている。あなたを全く新しく作り変えたいのだ。」私:「主よ、どうか私
を新しくしてください。そのことについて、少し教えてください。私には理解できないのです。」救い主:「あなたの中の古
いものは死ぬだろう。あなたはもはや古い罪を抱えていない。」
私:「主よ、私が犯したすべての罪から、私を解放してくださるのですか? 」救い主:「わが娘よ、あなたは
すべての罪から解放される。」
私:「ああ、主よ、それはどういう意味ですか? 」
救い主:「私はそれができるのだ、わが娘よ。もはや誰も、お前の罪を責めることはできない。私はお前を新しく造り変えたのだ。」
私:「主よ、でも私は洗礼を受ける前に、多くの罪を犯してしまいました。」救
い主:「わが娘よ、私はあなたを新しく造り変えたのだ。」私:「親愛なる神様
、『新しい』以外に、別の言葉はありますか? 」
救い主:「わが娘よ、あなたは古い人を脱ぎ捨てた。あなたの中には新しい人がおり、私はその人を通して、私の望むことを何
でもすることができるのだ。」
私:「主よ、私の中にある新しい人を使って、お望みのことをしてください。新しい人となった私は、完全にあなたの中に、そしてあなたと共にいるのですから。」
救い主:「わが娘よ、それを書き留めなさい。それは私の望むところだ。私はその新しい人を通して、私の望むことを始めよう。わが娘よ、あなたはまだそれを理解していない。しかし、あなたがすべてを理解する時が来るだろう。理解しがたいことは、天国に行って初めて理解できるものなのだ。
私にとっては、あなたが私に向けてくれる愛があれば十分だ。わが娘よ、あなたが書いたことは、すでに重要なこと
だった。」
私:「主よ、神よ、私の魂の導き手よ。私を新しい人間にしてくださったことに感謝します。私は、新しい人間として、自分自身をあなたに捧げます。」
救い主:「愛する娘よ、これでよい。」私:救い主は私に祝福
を与えてくださった。

17時55分から19時05分まで、ヴォルフラムと一緒に日記を書いた。

19時30分、ロクスクリニックでロズヴィータと共に聖ミサに参列した。

20時30分から22時まで、再びヴォルフラムと一緒に日記を書いた。

1992年11月12日 - 木曜日

8時00分
祈りの集い!

救い主:「愛する娘よ、書き留めなさい。」私:「はい、主よ
、神よ。」
救い主:「あなたが受ける聖痕は、多くの人々に、それが私であることを確信させるだろう。多くの司祭が回心するだろう。

わたしに属する多くの司祭たちが新たに現れるだろう。
私は使徒たちに司祭となる権能を与えたが、女性には与えなかった。女性は司祭の務めを果たすよう選ばれてはいない。わが娘よ、女性が司祭の務めを引き受けることは、サタンの意志である。これらの女性たちは、私の前で大きな責任を負わなければならない。彼女たちは私の意志ではなく、サタンの意志を果たしているのだ。

これらの女性たちに警戒しなさい。
わが娘よ、道に迷った司祭たちの多くは、父の家へと再び帰ってくるだろう。彼らと共に喜びなさい！」
救い主：「懲らしめはさらに厳しくなる。それは、私の子供たちが、私がまだ存在していることを悟るためである。私に不忠実な者は皆、私の裏切り者である。
わが娘よ、彼らを救うことのできる神に対する不忠は、大きな悪である。その悪は早急に排除されなければならない。」
私：「親愛なる神様、もうこれ以上書くことができません。この世にはあなたへの不忠があまりにも多く、書くことがとても辛いです。」

慈悲深い神は私を祝福してくださった。

これ以上書き続けることは不可能でした。救い主は他にも多くのことをお語りになりましたが、世の罪の重さに押しつぶされ、私はもう何も書き留めることができませんでした。気分が悪くて、今すぐ吐き出しそうでした。

10時30分、私は職場を後にした。痛みを抱えながら医者のところへ行った。
シュタウファー医師は、この痛みは脊椎に起因するものだと診断した。また、右側の腎臓付近にも激しい刺すような痛みがあった。その痛みは背中全体に広がっていた。吐き気は依然として続いていた。午後になると、痛みがひどくなり、もう歩くことさえできなくなった。
夕方になると、痛みは和らいだ。

18時、私は痛みを抱えたまま教会へ向かった。なぜなら、私にとって真の医師は救い主だからだ。今日、聖ミサの後、灯りがいつもより長くともとされていたことに喜びを感じた。ヴォクト神父様は、私が告解室で話したことを受け入れてくださった。
この恵みを神様に感謝します。

19時45分から22時45分まで、ヴォルフラムと一緒に日記を書き続けました。23時から23時45分まで、メモを日記に書き写しました。

1992年11月13日 - 金曜日

10時30分から13時まで、自宅で祈りの集い!

まず、聖母マリアの像の前で祈りました。私は聖母マリアに語りかけ、涙を流しました。マリアを通して、私は救い主に身を委ねます。私はマリアと救い主の御心に心を一つにしました。それから、救い主に心から祈りました。

救い主：「わが娘よ、それを書き留めなさい。今日、私はあなたに、あなたが持っているすべてのものを私に捧げてほしいと願っている。」
私：「主よ、神よ、私には何もありません。すべてはあなたのものです。あなたは私の中のすべてです。私はこの地上に何も持ってきませんでした。そして、何も持って行くことはできません。私がこれまでにしてきたことは、良かったのでしょうか、それとも悪かったのでしょうか? 私は天国での報いを待ち望んでいます。 その報いに対して、私は大きな信頼を寄せています。今からすでにそれを楽しみにしています。毎日、天国に一歩ずつ近づいていることを喜びとしています。そうすれば、そこで聖母マリア、聖ヨセフ、すべての天使、守護天使、そして聖人たちと共に、あなたを愛し、賛美し、称え続けることができるからです。
この地上で何のために生きているのかを知っているというのは、素晴らしいことです。」
救い主：「愛する娘よ、私があなたの所有物である。あなたは私の中にすべてを宿している。私はあなたの未来であり、あなたの永遠である。娘よ、今日あなたが書いた内容は私の心に響いた。愛する娘よ、この手紙もそろそろ終わりにしよう。まだまだ書くことはあるが、あなたが書いた内容で私には十分だ。私は喜んだ。あなたは勤勉だった。多くの犠牲を払ってきた。
わが娘よ、少し休みなさい。」
私：「では、これからどうなりますか? 私の主であり神、愛する魂の導き手よ、明日からはもう書く必要はなくなるのでしょうか? 」
救い主：「私と話すことはできるが、もう書き留める必要はない。愛する娘よ、私に忠実であり続けなさい。」
私：「愛する神様、今、胸がズキズキと痛みます。」
救い主：「それは、私がお前の中で働いているのだ。私はお前の内で働き始めた。愛する娘よ、私はお前の内にいて、これからもずっとお前の内にいる。

よく心に留めておきなさい。たとえ見捨てられたと感じたとしても、あなたは決して一人ではないのだ。」
私：「主よ、神よ、あなたが私に語ってくださったことを信じます。あなたが言われたとおりに、必ずそうなるでしょう。私はあなたの子供であり、娘であり、花嫁であり、姉妹であり、しもべであり、あなたが用いてくださる器です。主よ、神よ、これはすべて、あなたへの愛からであり、あなたの偉大なる栄光のため、そして魂の救いのためです。」
救い主：「愛する娘よ、ありがとう。あなたは私の保護の下にとどまるだろう。娘よ、あなたを祝福する。」
私：「主よ、私はすべての魂、煉獄にいる者たちも含めて、この祝福に含めます。そうすれば、誰も『この祝福を受けなかった』とは言えなくなるでしょう。」
救い主：「父なる神、子なる神、聖霊なる神が、あなたを祝福します。平安のうちに去りなさい、わが愛する娘よ。」
私：「主なる神に感謝します。三位一体の神に、賛美と愛と崇拝と感謝の賛美を捧げます。イエス・キリストとマリアに、今、そして永遠に賛美がありますように。**アーメン**。」

13時30分から16時まで、私はメモを基に日記を書いた。

17時00分から18時15分まで、ヴォルフラムと一緒に日記を書いた。

18時30分、ロートで聖ミサ。

19時30分から21時まで、ヴォルフラムと一緒に日記を書き続けました。

21時30分、レーゲンスブルクのゲブハルト・ハイダー神父から電話があった。
彼は、今日、自分の大きな仕事を終えたと私に話してくれました。そして、私の執筆もこれで十分だから、やめるべきだと言いました。私は、救い主が今朝すでにそうおっしゃっていたと答えました。私がすでに救い主からそのことを知っていたことに、ゲブハルト・ハイダー神父は喜んでくださいました。なぜなら、これは救い主が彼を通して働かれたことの証しだったからです。
私は彼に、今日が私にとっても執筆の最後の日になると伝えました。ゲブハルト神父は電話を通じて、夫と私に祝福を与えてくださいました。彼がラテン語で祝福を授けてくださったことを嬉しく思いました。私は彼に別れを告げました。ゲブハルト・ハイダー神父が電話をかけてくださり、もう一度私と話をしてくださったというこの恵みについても、神に感謝します。

この日記を書くにあたり、私は聖書やその他の宗教書を一切参照しませんでした。私のドイツ語の語彙はごくわずかです。また、誰にでも理解してもらえるよう、ごく平易に書きたかったため、外来語もほとんど使いませんでした。

この日記は、本日1992年11月14日に書き上げられました。署名：ユリヤナ・エベルト

この日記は、マリオン・ハンブシュとヴォルフラム・ベレマンがタイプライターで打ち込みました。

日記への2つの追記：

1993年11月5日 - 聖心金曜日

ユリヤナは前日の夕方（11月4日）、ヴァーグハウゼル（巡礼教会）の神父に対し、「聖母マリアは口による聖体拝領を望んでいる」と告げたという男性から電話を受けました。
その神父は彼にこう答えた。「それは悪魔があなたを通して語っているのだ！」
最後に、その神父はブルッフザール出身のその男性に対し、ひざまずいて聖体拝領を受けても構わないと告げた。
それを受けて、ユリヤナはこう思うようになった。「もしその男性を通して語っていたのが悪魔だったのなら、どうして司祭は彼が言ったようなことを許すことができるのか？！」

11月5日午前10時頃、ユリヤナは聖母に尋ねました。
その際、彼女は聖母マリアに、もしそれが神の御心であり、彼女自身の意志でもあるならば、口による聖体拝領の問題について、聖母が何を望んでいるかを教えてほしいと祈った。

聖母マリア：「娘よ、教えてあげましょう！私は、父と同じように、すべての教会で口による聖体拝領を望んでいます。」
ユリヤナ：「愛する聖母様、そうおっしゃってくださり、ありがとうございます！」

彼女はその後、マルピンゲンについて、トーマスに手紙を書かせるべきかどうかを、救い主に尋ねた。
救い主：「あなたが手紙を書くのは正しいことです！神から来るものはすべて、神の計画が実現されるために広められなければなりません。」

ユリヤナは救い主にこう尋ねた。「メジュゴリエにいた司祭たちが（戦争について、11月4日参照）、なぜ共犯者となっているのですか？」
救い主：「当初、メジュゴリエには謙遜があったが、その後は失われてしまった。彼らは私の御体を人々の手に委ねてしまったのだ。
わが娘よ、こう書き記せ。私は司祭たちに、私の御体に対する深い畏敬の念について説教することを求める。畏敬の念があるところには、愛がある。
愛が欠けているところでは、彼らは憎しみしか刈り取れない。

書き記せ、わが娘よ。私は司祭たちに回心を授ける。彼らは信徒たちに口による聖体拝領を授けなければならない。わが娘よ、私は自分自身を魂たちに授ける。」

ユリヤナは救い主に、口による聖体拝領を行うべきか、それとも行わなければならないのかと尋ねた。救い主：「行わなければならない。なぜなら、私は『ある者』だからだ。それゆえ、私はこの特権を私の司祭たちにのみ与えたのだ。（その至聖なる御体を手で触れること）。
今からすでに、手による聖体拝領を行わないようにし始めた司祭一人ひとりに、私は報いを与える。私の愛と恵みが彼らに豊かに注がれるだろう。彼らは皆、その誇りを私に捧げなければならない。私の愛する娘よ、書き留めてくれてありがとう！

1994年11月5日 - 月曜日

21時45分

聖母：「私の子供たちよ、私はあなた方を愛しています。あなた方は皆、主から恵みを受けています。
たとえ主の聖なる傷跡へのこのロザリオを唱えるのが困難であっても、毎日唱えなさい。
このロザリオを唱えられるのは、すべての人ではありません。この
ロザリオによって、多くの魂が救われます。
私の子供たちよ、力強い祈りを捧げてくれてありがとう。

恵みに満ちた最高の祈り――「主の祈り」――すべての人々のために――

すべての心が喜び、多くの魂が救われるように　*（ドイツ語）*

†　*（私たちは、すべての人々の名において、そしてすべての人々のために祈ります）*　2025年6月19日

† 全能の聖なる三位一体の神、

父と子と聖霊の御名において、私たちは願い、共に祈り、守ってくださるよう招きます：聖母マリア、私たちの母であり女王である方、聖ヨセフ、すべての聖人、聖なる天使たち、楽園――天国にいる聖なる守護天使たち、そして常に私たちと共にいてくださる方たち。煉獄にいる貧しい魂たちには、私たちの取り成し手となり、私たちのために祈ってくださるようお願いします。

聖なる三位一体の神よ、†父、子、聖霊よ、あなたは唯一にして不可分、善き、全能にして遍在する神です。

御国は私たちの間にあります。あなたは天――楽園――と地上で統治しておられます。

天――楽園においてそうであるように、地においても御心が行われますように。**慈悲深き生ける神よ、**私たちが私たちに罪を犯した者を赦すように、どうか私たちの罪をお赦しください。私たちは謙虚に願います。あなたの光と力と愛をもって、私たちの心の中に生き、留まってください。

私たちとすべての人々に、あなたの平和が私たちの心と人々の心の中に宿るよう、恵みをお与えください。そうして、私たちがあなたに属し、あなたに仕え、あなたに忠実であり、永遠にあなたと共にいられますように。

主の祈り、私たちは謙虚にあなたにお願いいたします。

すべての罪から私たちを清め、贖ってください。

どうか、私たちに日々の糧をお与えください。それは、ローマ・カトリックの司祭によって、生ける聖体へと変容されるものです。変容の後、聖体は**、すべての人々のために、今ここに臨在する生ける聖なる神、王、そして救い主となります。**私たちは教会において、謙虚に、清い心をもってこの聖体を受け入れ、永遠の命を待ち望みます。

力強い聖なる神よ、私たちはあなたに懇願します。

悪魔たちを永遠に地獄へ投げ落としてください。そうすれば、人々も私たちも、悪魔たちの声に耳を傾けたり、彼らに仕えたり、罪を犯したりすることがなくなり、悪魔たちが私たちを攻撃したり、

戦争を仕掛けたり、苦しめたり、殺害したり、誘惑したり、妨害したり、影響を与えたりせず、**私たちや人々を**地獄に突き落とさないようにしてください。

聖なる神よ、どうか私たちや人々があなたから背を向け、死に至る罪の中に留まることを許さず、むしろ私たちはあなたの御心に従い、今そして永遠にあなたと共にありたいと願います。

聖なる三位一体の神よ、あなたの恵みと御心によって、私たちは楽園で幸せに暮らすことができますように。

永遠に変わらぬ聖なる神よ、私たちはあなたを崇め、賛美し、愛し、礼拝し、信頼し、今、そしていつまでも、永遠に、すべてのことに感謝いたします。**アーメン。**

ドイツ・フォルバッハ、エルバー
スブロン ユリアナ・エベルト、ベルンハルト・コッペ
ンハーゲン

追伸（PS）――神の御心を知り、それを実行するために重要なこと： *（ドイツ語）* ローマ・カトリックの司祭とは、ローマ人（ローマ人）を指すのではなく、ローマで最初の教皇である聖ペトロに由来するものです。
私たちが書ききれるのは、自分たちの許容範囲内だけなのです。だからこそ、救い主は、
戦争がさらに拡大し、多くの人々が命を落とすような時には、救い主が私たちにより力強い言葉を授けてくださるのです。

意味 – Transformāta – 変容。Consecrata – 「奉献」または「聖別」。Belohnen – praemium dare

古典ラテン語には**「J」**という文字は存在しません。Julijanaという名前は「I」で綴られますが、この「I」**はJを**意味するため、Julijanaとなるのです！
ジュリアナ – イタリア語の「ジュリアナ」は、英語の**「ジュリアナ」**（Dsch）と同じ発音です
リエージュの聖ジュリアナ – ベルギー。聖体の祭りの預言者であり、聖体の秘跡に対して深い愛を抱いていました。教皇ウルバヌス4世は、1264年に全教会において聖体の祭りを制定しました。リエージュの聖ジュリアナは、イタリア人のジュリアナ・ファルコニエリと共に6月19日に崇敬されており、
彼女は執り成し手となることができます。ニコメディアのユリアナは、カトリック教会において2月16日に崇敬されています。

聖体祭における「主の祈り」の改変 – *（2025年6月19日）*：

試練 - Tribulationes
誘惑に遭わせないでください – ne inducas in tentationem
そして、私たちを地獄に突き落とさないでください — et ne nos in infernum praecipites
すべての人々の王であり救い主――Rex et Salvator pro omnibus hominibus 楽園――天国
常に私たちと共にいてくださる聖なる守護天使たち
caelum et Sancti Angeli custodes, qui semper apud nos sunt.

(2025年6月19日) **ケルン – 聖ミサにて：**

聖体拝領の際の黄色い傘や赤い傘は、異端である――救い主は人々を病気にさせることはなく、
むしろ癒やし主でもある。
手による聖体拝領を受けている、あるいは受けたことのある者は皆、告解に行くべきである！
なぜなら、手による聖体拝領は神の御目には忌まわしい行いであり、それは単なる普通のパンではないからだ――変容を経て聖体となった後、聖なるイエス・キリストは、父なる神および聖霊と不可分であり、肉と血、体と魂、神性と人性をもって、真に、実在的に、本質的に、生きた御姿で臨在し、全能であられる。
（ヨハネ14:8-11：フィリポがイエスに言った。「父を見せてください。それだけで私たちには十分です。」
イエス・キリストは答えて言われた。「わたしを見た者は、父を見たのである。」また、「……むしろ、わたしの中に永遠に留まっている父こそが……」と。」）

正しい道とは、司祭によってのみ授けられる口による聖体拝領である。

（2025年6月19日 – 14時10分）**『主の祈り』は成就した**

今日、「主の祈り」は完成し、楽園全体――天国が、私たちと共に祈ることを喜んでいます。救い主の学校で30年以上にわたり、私たちは
「主の祈り」をより良く祈る方法を学んできました。私たちはミサの前と後に祈るべきであり、一日に何度も祈れば、より多くの魂が救われるのです！救い主はこう言われました。「この祈りが捧げられることが、私の御心である」と！皆様、私、ユリヤナとベルンハルトも祈りに含めてくださるようお願いいたします。感謝いたします――聖なる神が皆様に報いてくださいますように。

聖三位一体の神、

† 父、子、聖霊！

サンクタ・デイ――サンクタ・ユリアナ・ファルコニエリ

2025年6月19日

www.gnadenvolle-gebete.de
gebete-und-erlebte-wunder.de
ン www.vater-unser.net

キリストの聖体の祝日 www.gnadenvolle-
D-フォルバッハ、エルバースブロ
ユリアナ・エベルト、ベルンハルト・コッペンハーゲン

恵みに満ちた最善の祈り――主の祈り――すべての人々のために――すべての心が喜び、多くの魂が救われるように。

2025年6月19日（*ラテン語）*

（すべての人の名において、またすべての人々のために祈りましょう）

***†** 聖なる三位一体の神、父、子、聖霊の御**名において**、我らと共に祈り、我らを守ってくださるよう、聖母マリア、我らの母であり女王である方、聖ヨセフ、すべての聖人、天国の聖なる天使たち――天界および守護天使たち、*
彼らは常に私たちのそばにいます。煉獄の貧しい魂たちよ、私たちの取り次ぎ手となり、私たちのために祈ってくださるようお願いします。

聖三位一体の神、† 父、子、聖霊よ、あなたは唯一にして、不可分であり、全能にして遍在する神です。御国は私たちの間にあります。天――楽園――と地において、御支配をなさいます。御心が行われますように。天――楽園――においてそうであるように、地においてもそうありますように。

憐れみ深く生ける神よ、お願いいたします。私たちが負債者を赦すように、私たちの負債を赦してください。謙虚に願います。あなたの光と力と愛をもって、私たちの心の中に生き、留まってください。
私たちとすべての人々に、御心に属し、御あなたに仕え、忠実であり、永遠に御あなたと共にいる人々の心に、御あなたの平和が宿るよう、恵みをお与えください。

天の父よ、私たちは懇願いたします：
すべての罪から私たちを清め、救ってください。
お願いいたします、ローマ・カトリックの司祭によって聖なる生ける聖体へと変容される、あなたの日々の糧を私たちにお与えください。
変容の後、聖なる犠牲は、私たちの聖なる神であり、
、すべての人のための王であり救い主となります。
私たちは教会において、謙虚さと清らかな心をもって御方を迎え、永遠の命を待ち望みます。

力ある聖なる神よ、私たちは懇願します。悪魔たちを永遠に地獄へ投げ込み、人々も私たちも彼らの声を聞くことのないように、
彼らに仕えたり、罪を犯したりすることがないように。彼らが私たちを襲ったり、戦争を引き起こしたり、苦難をもたらしたり、殺したりすることがないように。私たちを誘惑に導いたり、動揺させたり、揺さぶったりすることがないように。そして、**私たちや人々**を地獄に投げ込まないように。

聖なる神よ、お願いいたします。私たちや人々をあなたから遠ざけ、死に至る罪の中に留まらせないでください。私たちは、今そして永遠に、あなたの御心に従って、あなたと共にありたいと願っています。

聖なる三位一体の神よ、あなたの恵みと御心により、私たちは楽園で幸福となりますように。**永遠に聖なる神**よ、私たちはあなたを敬い、賛美し、愛し、崇拝します。また、すべての事柄について、あなたに信頼を置き、感謝を捧げます。

今、そして常に、そして永遠に。**アーメン**。

サンクタ・ディエ – サンクタ・ジュリアナ・ファルコニエリ 2025年6月19日

www.gnadenvolle-gebete.de

www.gnadenvolle-gebete-und-erlebte-wunder.de

D-フォルバッハ、エルバースブロン

www.vater-unser.net

ユリアナ・エベルト、ベルンハルト・コッペンハーゲン

追伸（PS） – 神の御心に従い、これを読み、実行するために：

（ラテン語）

ローマ・カトリックの司祭は、ローマ人への手紙に言及するのではなく、ローマにおける初代教皇聖ペトロに言及する。我々は、耐えうる範囲内でしか書くことはできない。
それゆえ、戦争が広まり、多くの人々が死ぬような時、救い主は私たちにより力
強い言葉を授けてくださる。

聖体の祭日における「主の祈り」の改変 *（2025年6月19日）*

試練 - Tribulationes
誘惑に導かないでください――ne inducas in tentationem
そして、私たちを地獄に突き落とさないでください — et ne nos in infernum praecipites
すべての人々の王であり救い主――Rex et Salvator pro omnibus hominibus楽園、天国、そして私たちのそば
――Paradiso, caelum et apud nos

(2025年6月19日) **ケルン – 聖ミサにて：**

黄色や赤色の傘は異端である。
聖体祭のミサにおいて司教はこう述べた：「イエス・キリストは御体であり、御血である！御自身こそが、真に、現実的に、生ける、現存する、全能なる、三位一体の唯一の神――父、子、聖霊である。」
手による聖体拝領――お願いです、これを認めなさい!

(2025年6月19日 – **14時10分）『主の祈り』は完了した。**今日の『主の祈り』は完了し、天国全体――天が、私たちと共に祈ることを喜んでいる。
30年以上にわたり、救い主の学校で、いかにしてより良く祈ることができるかを学んできました。私たちはミサの前と後に祈らなければなりません。そして、一日に何度も祈れば祈るほど、より多くの魂が救われるのです!
救い主はこう言われました。「私の望みは、この祈りが捧げられることである！」
皆様にお願いいたします。私、ユリヤナ、そしてベルンハルトを祈りの中に含めてください。感謝申し上げます――聖なる神が皆様に報いを与えてくださいますように。

聖三位一体、唯一の神、

† 父、子、聖霊が、皆様を祝福されますように。

www.gnadenvolle-gebete.de
www.gnadenvolle-gebete-und-erlebte-wunder.dewww.vater-unser.net

ドイツ・フォルバッハ、エルバー
スブロン ユリアナ・エバート、
ベルンハルト・コッペンハーゲン

私たちは聖母マリアを称え、その誕生日を記念します

2025年9月9日

聖なる三位一体の神、†父、子、聖霊の**御名において。アーメン。**

聖母マリア、平和の女王よ、私たちはあなたを愛し、あなたを賛美し
ます。
あなたは私たちの無原罪の御受胎、原罪なくして受胎された神の母で
あり、
私たちを愛し、楽園からの神の愛をもって私たちの中で働いてくださいます。
どうか、教会の聖母よ、御腕を広げ、聖なる天使たちで私たちを包み込ん
でください。

私たちを御子、すなわち私たちの王であり救い主である方へと導き、和解させてください。そうして、私たちが聖霊の光の中で生きることができますように。

聖なる母よ、私たちのために、謙遜、柔和、忠実、そして祈りにおける忍
耐を願い求めてください。
そうして、すべての人の心に平和と愛が満ち溢れますように。
力ある聖母よ、私たちはあなたに感謝いたします。あなたは罪人の避難所であり、
キリスト者の助け、すべての恵みの偉大なる仲介者です。
御誕生の日を機に、御光と御加護、そして御許での安らぎに包まれた、より良い人生が私たちに始まります。

御子、すなわち私たちの聖なる神が、御母と共に常に私たちのそばにいてくださり、私たちを祝福し、贖い、罪から守ってくださいますように。

永遠にして全能なる聖三位一体の神、父、子、聖霊よ、私たちは今、そして永遠に、あなたを賛美し、感謝し、称えます。
アーメン。

マスパロマス - グラン・カナリア島 - 2025年9月9日
ユリヤナ、サミュエル、ベルンハルト